財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第432集

楡 木 II 遺 跡（1）

（平安時代・中近世編）

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

２００８

国　土　交　通　省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

楡　木　II　遺　跡（1）

（平安時代・中近世編）

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

２００８

国　土　交　通　省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

①林地区航空写真
左側が北である。楡木Ⅱ遺跡は写真の中央を下（西）から上（東）に流れる吾妻川の左岸の最上位段丘面に位置する。対岸側（南）には横壁中村遺跡が存在する。楡木Ⅱ遺跡での発掘調査が開始される前の平成９年度の撮影である。

口絵　2

②85区の平安時代の竪穴住居(69～74号)や中近世のテラスと掘立柱建物群を南斜め上からの撮影。
対岸側にはこの地域の象徴でもある独特の形状を呈する丸岩がそびえ立つ。
【平成13年度調査】

③85区・95区の平安時代竪穴住居群（19号～33・73号）を北斜め上からの撮影。
左下方には１号湧水（白い土嚢袋で囲んだ部分）が見える。
【平成12年度調査】

序

八ッ場ダムは、首都圏の利水及び治水を目的として計画され、現在は吾妻郡長野原町を中心に工事が進められています。

八ッ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、当事業団が平成６年度から実施し、本年度で14年目を迎えます。楡木Ⅱ遺跡は平成12年、13年、16年及び17年の４ヵ年にわたる発掘調査が実施されました。その結果、縄文時代から中近世にかけての遺構、遺物が数多く検出されました。今回は平安時代と中近世の遺構と遺物に関する報告をまとめる事が出来ました。特徴的な遺構、遺物としては、平安時代では多数の灰釉陶器と共に「三家」などの重要な墨書土器も出土しており、当時のこの地域の特殊性を考える上で重要でもあります。また、長野原町内で３例存在するうちの一つである「楡木のつぶらっこ」様とその周囲の雛壇状の造成テラスとその中に展開する掘立柱建物などの存在は、中世から近世にかけての巨石祭祀のあり方を考える上で重要な資料でもあります。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会文化課、及び長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者のみなさまには多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

また、ひいては本書が吾妻郡内、及び群馬県の歴史を解明する上で末永く活用される事を願い序といたします。

平成20年３月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　　高　橋　勇　夫

例　　言

1．本書は2000・2001・2004・2005（平成12・13・16・17）年度の八ッ場（やんば）ダム建設工事に伴う楡木Ⅱ（にれぎに）遺跡の発掘調査報告書である。

2．楡木Ⅱ遺跡での今回の発掘調査の範囲は、群馬県吾妻郡長野原町大字林字楡木612番地他である。（ぐんまけん・あがつまぐん・ながのはらまち・おおあざはやし・あざにれぎ：Niregi，Hayashi，Naganohara-machi，Agatsuma-gun，Gunma-ken）
本遺跡の名称は、長野原町教育委員会が実施した分布調査報告書『長野原町の遺跡』1990に基づく。
（遺跡ID　1127、県文化財システム遺跡番号　長野原町0051、八ッ場ダム関係埋蔵文化財遺跡番号YD04－09）

3．発掘調査は、国土交通省関東地方整備局からの委託により、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。本遺跡の発掘調査時の組織体制は次の通りである。

期　　間　第１年度　2000（平成12）年９月20日～12月22日、第２年度　2001（平成13）年７月11日～12月20日
第３年度　2004（平成16）年４月１日～７月31日、第４年度　2005（平成17）年９月20日～12月22日

管理・指導　理事長　小野宇三郎（平成12・13・16・17年度）、高橋勇夫（平成17年度）
常務理事　赤山容造（平成12・13年度）、吉田　豊（平成13年度）、住谷永市（平成16年度）、木村裕紀（平成17年度）
事務局長　赤山容造（平成12年度）
事業局長　神保侑史（平成16年度）
管理部長　住谷　進（平成12・13年度）、矢崎俊夫（平成16・17年度）
調査研究部長　能登　健（平成12・13年度）
八ッ場ダム調査事務所長　巾　隆之（平成16・17年度）
調査研究部長　佐藤明人（平成16・17年度）

事務担当　調査研究課長　飯島義雄（平成12年度）、下城　正（平成13年度）、斉藤和之（平成16年度）、中沢　悟（平成17年度）坂本敏夫（平成12年度）、大島信夫（平成13年度）、丸岡道雄（平成16年度）、宮前結城雄（平成17年度）、小山建夫（平成12・13年度）、竹内　宏（平成16年度）、高橋房雄（平成16年度）、笠原秀樹（平成12・13年度）、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏（平成12・13年度）、森下弘美（平成12・13年度）、片岡徳雄（平成12・13年度）、阿久沢玄洋（平成16年度）、栗原幸代（平成16・17年度）、佐藤聖行（平成16・17年度）、今泉大作（平成17年度）、清水秀紀（平成17年度）、野口富太郎（平成16年度）、富澤よねこ（平成16・17年度）、町田文雄（平成17年度）、大澤友治（平成12年度）、今井もと子、内山佳子、若田　誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子

調査担当　麻生敏隆（平成12・13・16年度）、新井英樹（平成13年度）、飯田陽一（平成17年度）、石田　真（平成12年度）、久保　学（平成13年度）、佐藤享彦（平成16年度）、篠原正洋（平成17年度）、友廣哲也（平成17年度）、森田真一（平成17年度）、渡辺弘幸（平成12年度）

4．発掘資料の整理および報告書の作成は、国土交通省関東地方整備局からの委託により、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書の作成期間・体制は次の通りである。

期　　間　2006（平成18）年10月１日～2007（平成19）年３月31日、2007（平成19）年４月１日～３月31日

管理・指導　理事長　高橋勇夫　　常務理事　木村裕紀　　事業局長　津金澤吉茂　　総務部長　萩原　勉　　八ッ場ダム調査事務所長　巾　隆之　　調査研究部長　佐藤明人

事務担当　石井　清、笠原秀樹、須田朋子、斉藤恵利子、吉田有光、柳岡良宏、栗原幸代（平成18年度）、佐藤聖行（平成18年度）、矢島一美（平成19年度）、齋藤陽子（平成19年度）、
今井もと子、内山佳子、若田　誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、鈴木理佐

編　　集　麻生敏隆
本 文 執 筆　第１章、第２章、第３章、第４章第１節・第２節、第５章第１節　麻生敏隆、第４章第２節　村上章義、第４章第３節　飯森康広、第４章第４節　神谷佳明、４章５節　高島英之　第５章第２節・第３節　古環境研究所　第５章第４節・第５節　パレオ・ラボ　第６節　楢崎修一郎
遺 構 写 真　各年度調査担当者　　遺物写真　佐藤元彦
遺 物 観 察　麻生敏隆、大西雅広、神谷佳明　　保存処理　関　邦一、土橋まり子、小材浩一、森田智子、津久井桂一
器 械 実 測　田中精子、福島瑞希
資 料 整 理　新保純子、霜田順子、足立やよい、富澤麻里、関　裕子、山口郁恵（平成18年度）鈴木幹子、丸橋富美子、関口照子、大沢知代、大竹由美子（平成19年度）
委 託 測 量　株式会社　測研　　分析　第５章の各節本文頭に記載

5．石材同定にあたっては飯島静男氏（群馬地質研究会）にご教示を得た。
6．出土遺物および遺構・遺物の図面・写真類は、一括して群馬県埋蔵文化財センターが保管している。
7．本遺跡に関して、本報告以前にその概要が収録・公表されたのは下記の書籍である。
『年報20』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001　　『年報21』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002　　『年報24』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005　　『年報25』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006　　『遺跡は今９』　八ッ場ダム調査事務所 2000　『遺跡は今14』　八ッ場ダム調査事務所 2006
8．本遺跡の発掘調査にあたっては、嬬恋村・中之条町・長野原町・沼田市・東吾妻町在住の多くの作業員さんにご協力いただいた。
9．発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏よりご協力・ご助言を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略）
国土交通省八ッ場ダム建設事務所　群馬県教育委員会　長野原町教育委員会　白石光男　富田孝彦

凡　　例

1．本書で使用した国家座標は、日本測地系によるものである。本調査ではその数値をそのままグリッドとして使用した。
2．本書における遺構番号は算用数字で、調査時に付されたものをそのまま使用した。
3．遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。縮尺の異なるものが併載される場合は、それぞれにスケールを付すか、遺物番号に縮尺率を併記した。
遺構図　竪穴住居１：60　　住居竈１：30　　掘立柱建物１：80　　土坑・溝・ピット１：40　　その他は明記
遺物図　土師器・須恵器・灰釉陶器・中近世陶磁器１：３　　石製品、１：２、１：３、１：４　古銭・鉄製品１：１、１：２、１：３
4．遺物番号は本文・挿図・表・写真図版と一致する。
5．竪穴住居等の面積は、住居の周縁をプラニメーター（タニタ　プラニックス７）を用いて３回測定し、その平均値を記した。
6．挿図中の方位は調査時に使用したグリッドに準拠したものであるが、本文中の軸方向記載で用いた方位には、真北を用いた補正を行っている。
7．計測値には次の略語を使用した。「口径」→「口縁部径」、「胴径」→「胴部最大径」、「底径」→「底部径」、「高さ」→「器高」
8．遺物の重量の計測にあたっては、10ｇまでは0.1ｇ単位、6000ｇまでは１ｇ単位、20㎏までは50ｇ単位、20㎏以上は100ｇ単位の秤を使用して計測した。
9．各地図について、使用した原図類の名称については、その都度記載している。
10．遺構図に使用したトーンの種類は下記の通りである。

焼土　　朱まじり　　粘土　　硬化面

楡木Ⅱ遺跡（１）　平安時代・中近世編

口絵
序
例言
凡例
目次（文章・挿図・表・写真）
第１章　調査の方法と経過……1
　第１節　発掘調査に至る経緯……1
　第２節　発掘調査の方法……2
　第３節　発掘調査の経過……3
　第４節　整理の方法と経過……4
第２章　遺跡の環境……5
　第１節　地理……5
　第２節　地形と地質……6
　第３節　歴史……7
　第４節　基本土層……12
第３章　検出された遺構と遺物……13
　第１節　遺跡の概要……13
　第２節　平安時代の遺構と遺物……15
　　竪穴住居・竪穴遺構
　第３節　中近世……79
　　掘立柱建物・つぶらっこ・テラス
　　石列・石垣・礎石・土坑・溝
　　ピット・焼土・湧水・倒木
遺構計測表……172
第４章　まとめ……178
　第１節　「つぶらっこ」様関連……178
　第２節　八ッ場ダム関連遺跡における陥し穴の調査の現状と課題……180
　第３節　楡木Ⅱ遺跡の建物遺構について……184
　第４節　楡木Ⅱ遺跡出土の灰釉陶器について……188
　第５節　墨書土器……194
第５章　自然科学分析……202
　第１節　楡木Ⅱ遺跡の土層とテフラ……202
　第２節　楡木Ⅱ遺跡における植物珪酸体分析……206
　第３節　楡木Ⅱ遺跡の出土炭化材の樹種同定……210
　第４節　楡木Ⅱ遺跡から出土した大型植物化石……218
　第５節　楡木Ⅱ遺跡出土人骨……221
写真図版
奥付

図版目次

第１図　遺跡位置図（国土地理院・５万分の１『草津』）…… 1
第２図　グリッド設定図…… 3
第３図　発掘調査範囲図（年度別）…… 3
第４図　遺跡位置図（国土地理院・20万分の１『長野』）…… 5
第５図　吾妻川流域の地形図（『長野原町の自然』）…… 6
第６図　周辺遺跡図（国土地理院・2.5万分の１『草津』）…… 9
第７図　基本土層図……12
第８図　遺跡全体図……14
第９図　遺跡全体詳細図（付図１）
第10図　平安時代遺構分布図（付図２）
第11図　３号竪穴住居遺構……15
第12図　４号竪穴住居遺構①・遺物①……16
第13図　４号竪穴住居遺構②・遺物②……17
第14図　４号竪穴住居遺物③……18
第15図　５号竪穴住居遺構①……18
第16図　５号竪穴住居遺構②……19
第17図　５号竪穴住居遺構③・遺物……20
第18図　16号竪穴住居遺構……21
第19図　16号竪穴住居遺物①……22
第20図　16号竪穴住居遺物②……23
第21図　19号竪穴住居遺構①……24
第22図　19号竪穴住居遺構②・遺物……25
第23図　20号竪穴住居遺物……25
第24図　21号竪穴住居遺構・遺物①……26
第25図　21号竪穴住居遺物②……27
第26図　22・25号竪穴住居遺構①・遺物……28
第27図　22・25号竪穴住居遺構②……29
第28図　23号竪穴住居遺構①・遺物……30
第29図　24号竪穴住居遺構①・遺物①……31
第30図　23・24号竪穴住居遺構②……32
第31図　23・24号竪穴住居遺構③・24号竪穴住居遺物②……33
第32図　24号竪穴住居遺物③……34
第33図　24号竪穴住居遺物④……35
第34図　26・27号竪穴住居遺物……35
第35図　26・27号竪穴住居遺構①……36
第36図　26・27号竪穴住居遺構②……37
第37図　28号竪穴住居遺構・遺物……38
第38図　30号竪穴住居遺構①……39
第39図　30号竪穴住居遺構②……40
第40図　30号竪穴住居遺物……41
第41図　33・73号竪穴住居遺構①・遺物……42
第42図　33・73号竪穴住居遺構②……43
第43図　40号竪穴住居遺構①……44
第44図　40号竪穴住居遺構②……45
第45図　41号竪穴住居遺構……45
第46図　41号竪穴住居遺物……46
第47図　42号竪穴住居遺構①……46
第48図　42号竪穴住居遺構②・遺物……47
第49図　43号竪穴住居遺構①……47
第50図　43号竪穴住居遺構②……48
第51図　44号竪穴住居遺構①……48
第52図　44号竪穴住居遺構②……49
第53図　45号竪穴住居遺構①……49
第54図　45号竪穴住居遺構②・遺物……50
第55図　46ａ号竪穴住居遺構①……51
第56図　46ａ号竪穴住居遺構②……52
第57図　46ｂ号竪穴住居遺構①……53
第58図　46ｂ号竪穴住居遺構②・遺物①……54
第59図　46ｂ号竪穴住居遺物②……55
第60図　69号竪穴住居遺構①……56
第61図　69号竪穴住居遺構②・遺物……57
第62図　70号竪穴住居遺構・遺物①……58
第63図　70号竪穴住居遺物②……59
第64図　71号竪穴住居遺構①……60
第65図　71号竪穴住居遺構②……61
第66図　71号竪穴住居遺構③・遺物①……62
第67図　71号竪穴住居遺物②……63
第68図　72号竪穴住居遺構①……63
第69図　72号竪穴住居遺構②……64
第70図　72号竪穴住居遺構③……65
第71図　72号竪穴住居遺構④・遺物①……66
第72図　72号竪穴住居遺物②……67
第73図　74号竪穴住居遺構①……68
第74図　74号竪穴住居遺構②……69
第75図　74号竪穴住居遺構③……70
第76図　75号竪穴住居遺構①……70
第77図　75号竪穴住居遺構②……71
第78図　75号竪穴住居遺構③・遺物……72
第79図　76号竪穴住居遺構①……73
第80図　76号竪穴住居遺構②・遺物①……74
第81図　76号竪穴住居遺物②……75
第82図　77号竪穴住居遺構……76
第83図　78号竪穴住居遺構……76
第84図　79号竪穴住居遺構……77
第85図　５号竪穴遺構……78
第86図　６号竪穴遺構……78
第87図　７号竪穴遺構……78
第88図　中近世遺構分布図（付図３）
第89図　１号掘立柱建物……80
第90図　２号掘立柱建物……80
第91図　３号掘立柱建物……81
第92図　４号掘立柱建物……81
第93図　５号掘立柱建物……82
第94図　６号掘立柱建物……82
第95図　７号掘立柱建物……83
第96図　８号掘立柱建物……83
第97図　９号掘立柱建物……84
第98図　10号掘立柱建物……84
第99図　11号掘立柱建物……85
第100図　12号掘立柱建物 ……86
第101図　13号掘立柱建物 ……86
第102図　14号掘立柱建物 ……86
第103図　15号掘立柱建物 ……87
第104図　16号掘立柱建物 ……87
第105図　17号掘立柱建物 ……87
第106図　18号掘立柱建物 ……88
第107図　19号掘立柱建物 ……88
第108図　20号掘立柱建物 ……88
第109図　１号石垣 ……89・90
第110図　12号集石 ……93
第111図　１号石列 ……93
第112図　１号礎石 ……93
第113図　７・10・11・28号土坑 ……94
第114図　35・36・47・58号土坑 ……95
第115図　63・64・155号土坑……96
第116図　65・78号土坑 ……97
第117図　81・84号土坑 ……98
第118図　82・125号土坑……99
第119図　83・162号土坑 ……100
第120図　86・89号土坑 ……101
第121図　98・106号土坑 ……102

第122図　99・131号土坑 ……103
第123図　129・146号土坑 ……104
第124図　130・163号土坑 ……105
第125図　154・156号土坑 ……106
第126図　157・158号土坑 ……107
第127図　178・179号土坑 ……108
第128図　164～167号土坑 ……109
第129図　176・177号土坑 ……110
第130図　182号土坑 ……111
第131図　71・１～６・８号土坑 ……113
第132図　９・12～17・21・22号土坑 ……114
第133図　23～27・29～31・38号土坑 ……115
第134図　32～34・37・39号土坑 ……116
第135図　40～45号土坑 ……117
第136図　46・48～53・55・56・59号土坑 ……118
第137図　57・60～62・66～69号土坑 ……119
第138図　70・72～76・79・80号土坑 ……120
第139図　85・87・88・90・91・101号土坑 ……121
第140図　92～97・100・110号土坑 ……122
第141図　102～105・107～109・113・114号土坑 ……123
第142図　111・112・115～119号土坑 ……124
第143図　120～124・126号土坑 ……125
第144図　127・128・132～139・180号土坑 ……126
第145図　140～145・147～149号土坑 ……127
第146図　150～153・159・161・168～170号土坑 ……128
第147図　171～175・181・183・185・186・188号土坑 ……129
第148図　184・187・189・190号土坑 ……130
第149図　２～５号溝 ……132
第150図　６・７・９・10号溝 ……133
第151図　８・11・12号溝 ……134
第152図　13・14号溝 ……135
第153図　２～11号焼土 ……136
第154図　12～21号焼土 ……137
第155図　１・２号湧水 ……138
第156図　２号湧水 ……139・140
第157図　１～47号ピット ……142
第158図　48～86号ピット ……143
第159図　87～111・114～127号ピット ……144
第160図　128～170・174号ピット ……145
第161図　171～173・175～214号ピット ……146
第162図　215～227・229～250・252～260・264～267号ピット …147
第163図　268～312号ピット ……148
第164図　313～361号ピット ……149
第165図　362～403号ピット ……150
第166図　404～448号ピット ……151
第167図　449～492・495号ピット ……152
第168図　493・494・496～498・500・511～540・542～550号ピット
……153
第169図　551～578・582～594号ピット ……154
第170図　595～632号ピット ……155
第171図　633～648・650・651号ピット ……156
第172図　１・７・10号倒木 ……157
第173図　11・12号倒木 ……158
第174図　平安時代遺構遺物① ……160
第175図　平安時代遺構遺物② ……161
第176図　平安時代グリッド遺物 ……162
第177図　平安時代表採遺物 ……163
第178図　中近世遺構遺物① ……164
第179図　中近世遺構遺物② ……165
第180図　中近世遺構遺物③ ……166
第181図　中近世グリッド遺物① ……167
第182図　中近世グリッド遺物② ……168
第183図　中近世グリッド遺物③ ……169
第184図　中近世グリッド遺物④ ……170
第185図　中近世表採遺物 ……171

付図

１　遺構全体図（第９図）
２　平安時代遺構分布図（第10図）
３　中近世遺構分布図（第88図）

表目次

第１表　遺跡一覧 ……10
第２表　遺構計測表 ……172
第３表　遺物観察表 ……198

写真図版目次

PL 1　楡木Ⅱ遺跡遠景（南から）
楡木Ⅱ遺跡近景（北から）
楡木Ⅱ遺跡近景（北から）
楡木Ⅱ遺跡近景（南から）
試掘Aトレンチ（南から）
試掘Bトレンチ（東から）
５・６・７号トレンチ（北から）
84区北壁基本土層（南から）
PL 2　84区航空写真（上空から）
85区航空写真（上空から）
95区航空写真（上空から）
85･95区航空写真（上空から）
84区平安住居群（平成13年度、南から）
84区･85区平安･中近世遺構群（平成17年度、西から）
95区陥し穴群（東から）
84区立会い調査風景（北西から）
PL 3　３号竪穴住居セクションB-B´（東から）
３号竪穴住居遺物出土状態（西から）
４号竪穴住居セクションA-A´（南から）
４号竪穴住居遺物出土状態（南から）
４号竪穴住居掘り方全景（南から）
４号竪穴住居カマドセクションB-B´（南から）
４号竪穴住居カマド全景（南から）
４号竪穴住居カマド全景（南から）
PL 4　５号竪穴住居セクション（南東から）
５号竪穴住居遺物出土状態（西から）
５号竪穴住居掘り方全景（西から）
５号竪穴住居カマドセクションB-B´（東から）
５号竪穴住居カマド全景（西から）
５号竪穴住居２号床下土坑セクション（西から）
16号竪穴住居遺物出土状態（南東から）
16号竪穴住居全景（南東から）
PL 5　16号竪穴住居掘り方全景（東から）
16号竪穴住居カマドセクション（南東から）
16号竪穴住居カマド掘り方セクション（南から）
19号竪穴住居全景（南から）
19号竪穴住居カマドセクションA-A´（南から）
19号竪穴住居カマド掘り方全景（南から）
20号竪穴住居カマドセクションA-A´（西から）
20号竪穴住居カマド掘り方全景（南から）
PL 6　21号竪穴住居セクションB-B´（西から）
21号竪穴住居遺物出土状態（西から）
21号竪穴住居炭化材出土状態（南から）
21号竪穴住居全景（南から）
21号竪穴住居掘り方全景（南から）
21号竪穴住居小鍛冶セクション（南から）
21号竪穴住居小鍛冶出土状態（南から）
21号竪穴住居２号床下土坑掘り方全景（南から）
PL 7　22･25号竪穴住居遺物出土状態（南から）
22･25号竪穴住居掘り方全景（南から）
22号竪穴住居カマドセクションB-B´（南から）
22号竪穴住居カマド全景（南から）
25号竪穴住居カマド全景（南から）
23･24号竪穴住居炭化材出土状態（西から）
23号竪穴住居カマドセクションA-A´（南から）
23号竪穴住居カマド遺物出土状態（西から）
PL 8　24号竪穴住居掘り方全景（西から）
24号竪穴住居カマドセクションB-B´（西から）
24号竪穴住居カマド遺物出土状態（西から）
26・27号竪穴住居遺物出土状態（南から）
26号竪穴住居カマドセクションA-A´（東から）
26号竪穴住居カマド全景（南から）
27号竪穴住居カマドセクションB-B´（北から）
27号竪穴住居カマド遺物出土状態（西から）
PL 9　28号竪穴住居セクションB-B´（南から）
28号竪穴住居遺物出土状態（南から）
28号竪穴住居掘り方全景（南から）
29号竪穴住居カマドセクションA-A´（北西から）
29号竪穴住居カマド全景（南から）
30号竪穴住居セクションB-B´（西から）
30号竪穴住居遺物出土状態（南から）
30号竪穴住居全景（南から）
PL10　30号竪穴住居掘り方全景（南から）
30号竪穴住居カマドセクションB-B´（南から）
30号竪穴住居カマド遺物出土状態（南から）
33号竪穴住居遺物出土状態（西から）
33号竪穴住居掘り方全景（西から）
33号竪穴住居カマドセクションA-A´（西から）
33号竪穴住居カマド全景（南から）
73号竪穴住居全景（南から）
PL11　73号竪穴住居掘り方全景（南から）
40号竪穴住居全景（南から）
40号竪穴住居掘り方全景（南から）
40号竪穴住居カマドセクション（北から）
40号竪穴住居カマド全景（南から）
41号竪穴住居全景（北から）
42号竪穴住居セクション（東から）
42号竪穴住居全景（西から）
PL12　42号竪穴住居カマドセクション（南西から）
42号竪穴住居カマド全景（西から）
43号竪穴住居全景（西から）
43号竪穴住居掘り方全景（西から）
43号竪穴住居カマドセクション（西から）
43号竪穴住居カマド全景（西から）
44号竪穴住居全景（西から）
44号竪穴住居掘り方全景（西から）
PL13　44号竪穴住居カマドセクション（南から）
44号竪穴住居カマド全景（西から）
45号竪穴住居セクション（東から）
45号竪穴住居遺物出土状態（南から）
45号竪穴住居カマドセクション（東から）
45号竪穴住居カマド全景（南から）
46a号竪穴住居掘り方全景（西から）
46a号竪穴住居カマドセクション（北から）
PL14　46a号竪穴住居カマド炭化物出土状態（西から）
46b号竪穴住居セクションC-C´（南から）
46b号竪穴住居全景（西から）
46b号竪穴住居カマド全景（南から）
46b号竪穴住居内１号土坑（小鍛冶）全景（南から）
48号竪穴住居遺物出土状態（北から）
48号竪穴住居カマドセクション（南から）
68号竪穴住居全景（南から）
PL15　68号竪穴住居掘り方全景（南から）
69号竪穴住居全景（南から）
69号竪穴住居掘り方全景（南から）
69号竪穴住居カマドセクションA-A´（南から）
69号竪穴住居カマド全景（南から）
70号竪穴住居炭化材出土状態（西から）
70号竪穴住居遺物出土状態（西から）
70号竪穴住居全景（西から）
PL16　70号竪穴住居掘り方全景（西から）

70号竪穴住居カマドセクション（西から）
70号竪穴住居カマド全景（西から）
71号竪穴住居炭化材出土状態（南から）
71号竪穴住居全景（南から）
71号竪穴住居掘り方全景（南から）
71号竪穴住居カマドセクション（南西から）
71号竪穴住居カマド全景（南から）
PL17　72号竪穴住居全景（南から）
72号竪穴住居掘り方全景（南から）
72号竪穴住居カマドセクションA-A´（東から）
72号竪穴住居カマド全景（南から）
74号竪穴住居掘り方全景（西から）
74号竪穴住居カマドセクションA-A´（西から）
74号竪穴住居カマド全景（西から）
75号竪穴住居セクション（南から）
PL18　75号竪穴住居全景（西から）
75号竪穴住居掘り方全景（西から）
75号竪穴住居カマドセクションB-B´（西から）
76号竪穴住居全景（西から）
76号竪穴住居掘り方全景（西から）
76号竪穴住居カマドセクションB-B´（南から）
76号竪穴住居カマド全景（西から）
77号竪穴住居セクションA-A´（西から）
PL19　77号竪穴住居全景（南から）
78号竪穴住居セクションA-A´（南から）
78号竪穴住居遺物出土状態（南から）
79号竪穴住居全景（西から）
79号竪穴住居カマド全景（南から）
５号竪穴遺構セクションA-A´（南から）
５号竪穴遺構全景（南から）
６号竪穴遺構全景（南から）
PL20　７号竪穴遺構セクションA-A´（南から）
７号竪穴遺構全景（南から）
４号掘立柱建物全景（南から）
５号掘立柱建物全景（南から）
６号掘立柱建物全景（南から）
７号掘立柱建物全景（南から）
９号掘立柱建物全景（南から）
19号掘立柱建物全景（北から）
PL21　20号掘立柱建物全景（南から）
つぶらっこ様（東から）
つぶらっこ様（北西から）
１号テラス全景（南から）
２号テラスセクションA-A´（西から）
３号テラスセクションA-A´（西から）
３号テラス１号石列全景（東から）
２号石列全景（北から）
PL22　１号石垣西側部分（南から）
１号石垣東側部分（南から）
２号石垣全景（南から）
１号礎石全景（南から）
２号土坑全景（南から）
３号土坑全景（南から）
４号土坑全景（南から）
５号土坑全景（南から）
PL23　４号竪穴住居下土坑群（南から）
６号土坑セクション（南から）
７号土坑全景（南から）
８号土坑全景（南から）
10号土坑セクション（東から）
11号土坑全景（南から）
12号土坑全景（南から）
13号土坑全景（南から）
PL24　19号土坑セクション（南から）
20号土坑全景（南から）
21号土坑全景（南から）
22号土坑全景（南から）
23号土坑セクション（南から）
24号土坑セクション（南から）
25号土坑セクション（南から）
26号土坑全景（南から）
PL25　27号土坑全景（南から）
28号土坑全景（西から）
29号土坑全景（南から）
30号土坑セクション（西から）
31号土坑遺物出土状態（南から）
32号土坑セクション（南から）
33号土坑セクション（南から）
34号土坑セクション（南から）
PL26　35号土坑全景（南から）
36号土坑全景（西から）
37号土坑全景（南から）
38号土坑全景（南から）
39号土坑全景（南から）
40号土坑セクション（南から）
41号土坑全景（南から）
42号土坑全景（南から）
PL27　43号土坑全景（南から）
44号土坑全景（南から）
45号土坑全景（南から）
46号土坑全景（南から）
47号土坑全景（東から）
48号土坑全景（南から）
49号土坑全景（南から）
50号土坑全景（南から）
PL28　51号土坑全景（南から）
52号土坑全景（南から）
53号土坑全景（南から）
55号土坑全景（南から）
56号土坑全景（南から）
57号土坑全景（西から）
58号土坑全景（南から）
59号土坑全景（南から）
PL29　60号土坑全景（南から）
61号土坑全景（西から）
62号土坑全景（西から）
63号土坑全景（南から）
64号土坑全景（南から）
65号土坑全景（南から）
66号土坑全景（南から）
67号土坑全景（南から）
PL30　68号土坑全景（南から）
69号土坑全景（南から）
70号土坑全景（南から）
71号土坑全景（南から）
71号土坑人骨出土状態（南から）
72号土坑全景（南から）
73号土坑全景（南東から）
74号土坑全景（東から）
PL31　75号土坑全景（南東から）
76号土坑全景（東から）
78号土坑全景（南から）
79号土坑全景（南から）
80号土坑全景（東から）

81号土坑全景（西から）
82号土坑全景（南から）
83号土坑全景（南から）
PL32 84号土坑全景（南から）
85号土坑全景（東から）
86号土坑全景（南から）
87号土坑全景（西から）
88号土坑全景（南から）
89号土坑全景（南から）
90号土坑全景（南から）
91号土坑全景（南から）
PL33 92号土坑全景（南から）
93号土坑全景（南から）
94号土坑全景（西から）
95号土坑全景（南から）
96･110号土坑全景（南から）
97号土坑全景（南から）
98号土坑全景（南から）
99号土坑全景（南東から）
PL34 100号土坑全景（南から）
101号土坑全景（南から）
102号土坑全景（南から）
103号土坑全景（南から）
104号土坑全景（南から）
105･106号土坑全景（西から）
107号土坑全景（南から）
108号土坑全景（南から）
PL35 109号土坑全景（東から）
111･112号土坑全景（南から）
113号土坑全景（南から）
114号土坑全景（南から）
115号土坑全景（南から）
116号土坑全景（東から）
117号土坑全景（南から）
118号土坑全景（東から）
PL36 119号土坑全景（南から）
120号土坑全景（南から）
121号土坑全景（西から）
122号土坑全景（南から）
123号土坑全景（南から）
124号土坑全景（西から）
125号土坑全景（北から）
126号土坑全景（南から）
PL37 127号土坑全景（南から）
128号土坑全景（西から）
129号土坑全景（南東から）
130号土坑全景（西から）
131号土坑全景（南から）
132･133号土坑全景（西から）
134･135号土坑全景（西から）
136号土坑全景（南から）
PL38 137 ･138･139号土坑全景（東から）
140･141号土坑全景（南から）
142号土坑全景（東から）
143･144号土坑全景（西から）
145号土坑全景（東から）
146号土坑全景（南から）
147号土坑全景（南から）
148号土坑全景（南から）
PL39 149号土坑全景（南から）
150号土坑全景（南から）
151号土坑全景（南から）
152号土坑全景（南から）
153号土坑全景（西から）
154号土坑全景（北から）
155号土坑全景（南から）
156号土坑全景（南から）
PL40 157号土坑全景（北から）
158号土坑全景（北から）
159号土坑全景（西から）
161号土坑全景（東から）
162号土坑全景（東から）
163号土坑全景（北から）
164号土坑全景（南から）
165号土坑全景（南から）
PL41 166号土坑全景（西から）
167号土坑全景（南から）
168号土坑全景（南から）
169号土坑全景（南から）
170号土坑全景（南から）
171号土坑全景（南から）
172号土坑全景（南から）
173号土坑全景（南から）
PL42 174号土坑全景（西から）
175号土坑全景（東から）
176号土坑全景（南から）
177号土坑全景（北から）
178号土坑全景（西から）
179号土坑全景（南から）
180号土坑全景（南から）
181号土坑全景（南から）
PL43 182号土坑全景（南から）
183号土坑全景（南から）
184号土坑全景（西から）
185号土坑全景（南から）
186号土坑全景（北東から）
187号土坑全景（南から）
188号土坑全景（西から）
189号土坑全景（南から）
PL44 190号土坑全景（南から）
２号溝セクションA-A´（東から）
２号溝遺物出土状態（西から）
３号溝セクションA-A´（南から）
７号溝セクション（西から）
７号溝全景（東から）
８・９号溝全景（西から）
８・９号溝全景（東から）
PL45 10号溝セクション（西から）
10号溝全景（東から）
11号溝全景（西から）
12号溝セクション（東から）
12号溝全景（西から）
13号溝セクション（西から）
13号溝全景（西から）
14号溝全景（東から）
PL46 17号ピットセクション（南から）（２号掘立柱建物）
18号ピットセクション（南から）（４号掘立柱建物）
19号ピットセクション（南から）（３号掘立柱建物）
51号ピットセクション（南から）（４号掘立柱建物）
74号ピットセクション（南から）（６号掘立柱建物）
101号ピットセクション（南から）（６号掘立柱建物）
105号ピットセクション（南から）（５号掘立柱建物）
168号ピットセクション（南から）（１号掘立柱建物）
PL47 184号ピットセクション（南から）（10号掘立柱建物）

277号ピットセクション（南から）（18号掘立柱建物）
289号ピットセクション（南から）（14号掘立柱建物）
316号ピットセクション（南から）（16号掘立柱建物）
374号ピットセクション（南から）（12号掘立柱建物）
395号ピットセクション（南から）（17号掘立柱建物）
414号ピットセクション（南から）（15号掘立柱建物）
420号ピットセクション（南から）（11号掘立柱建物）
PL48　423号ピットセクション（南から）（13号掘立柱建物）
511号ピットセクション（南から）（９号掘立柱建物）
524号ピットセクション（東から）（９号掘立柱建物）
567号ピットセクション（東から）（７号掘立柱建物）
573･574号ピットセクション（東から）（８号掘立柱建物）
603号ピットセクション（東から）（20号掘立柱建物）
639号ピットセクション（東から）（19号掘立柱建物）
645号ピットセクション（西から）（19号掘立柱建物）
PL49　２号焼土全景（西から）
３号焼土セクション（東から）
４号焼土全景（西から）
５号焼土全景（南から）
６号焼土全景（南から）
７号焼土セクション（南から）
８号焼土全景（南から）
９号焼土全景（南から）
PL50　10号焼土全景（南から）
11号焼土全景（南から）
12号焼土全景（南から）
13号焼土全景（南から）
14号焼土全景（南から）
15号焼土全景（東から）
16号焼土セクション（南から）
17号焼土全景（南から）
PL51　18号焼土全景（南から）
19号焼土全景（南から）
20号焼土全景（南西から）
21号焼土全景（北から）
１号湧水遺構全景（南から）
２号湧水遺構全景（南から）
２号湧水遺構全景（南から）
２号湧水遺構石臼出土状態（上から）
PL52　無線ヘリによる航空写真撮影風景
26号竪穴住居カマドの測量作業風景
４号竪穴住居作業風景（南西から）
作業風景（南西から）
95区作業風景（北から）
１号石垣作業風景（南から）
作業風景（西から）
作業風景（西から）
PL53　平安時代遺構･グリッド･表採出土遺物
～PL64
PL65　中近世遺構･グリッド･表採出土遺物
～PL68
PL69　平安時代墨書土器拡大写真
～PL70

報　告　書　抄　録

書名ふりがな	にれぎ　に　いせき　いち
書名	楡木Ⅱ遺跡（１）
副書名	八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	18
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	432
編著者名	麻生敏隆・飯森康広・大西雅広・神谷佳明・高島英之・楢崎修一郎・村上章義
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20080320
作成法人ＩＤ	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	にれぎにいせき
遺跡名	楡木Ⅱ遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざはやしあざにれぎ
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字林字楡木
市町村コード	10424
遺跡番号	0051
北緯（日本測地系）	363220
東経（日本測地系）	1384030
北緯（世界測地系）	363231
東経（世界測地系）	1383978
調査期間	20000401-20051031
調査面積	13000
調査原因	八ッ場ダム建設工事
種別	集落／その他
主な時代	縄文／平安／中・近世
遺跡概要	集落－平安－竪穴住居38、竪穴遺構３／中近世－掘立柱建物20、墓１、土抗190、石垣２、溝13、ピット651、焼土21など
特記事項	平安時代の焼失住居・墨書土器・灰釉陶器、中近世の掘立柱建物群、江戸時代の墓
概要	吾妻川の左岸に形成された河岸段丘最上位面よりも上に位置し、南に開く緩やかな扇状地形の先端部である。標高は630～660ｍで、現在の河床からの高さは約90～120ｍに位置する。平安時代の特徴としては、焼失した竪穴住居の数が多い事と、「三家」や「長」などと書かれた墨書土器や「称」と刻書された石製紡錘車、「吉井型」と「月夜野型」の羽釜の共伴関係や灰釉陶器の多さ、それに平安時代の陥し穴の存在である。特に、「三家」は大和政権の直轄地を示す「ミヤケ」との関連が想定される。 中近世の特徴としては、緩やかな傾斜地を雛壇状に造成したテラスとそこに配置された掘立柱建物群の存在がある。これは民間信仰物の「つぶらっこ」様に関係する可能性も考えられる。

第１章　調査の方法と経過

第１節　発掘調査に至る経緯

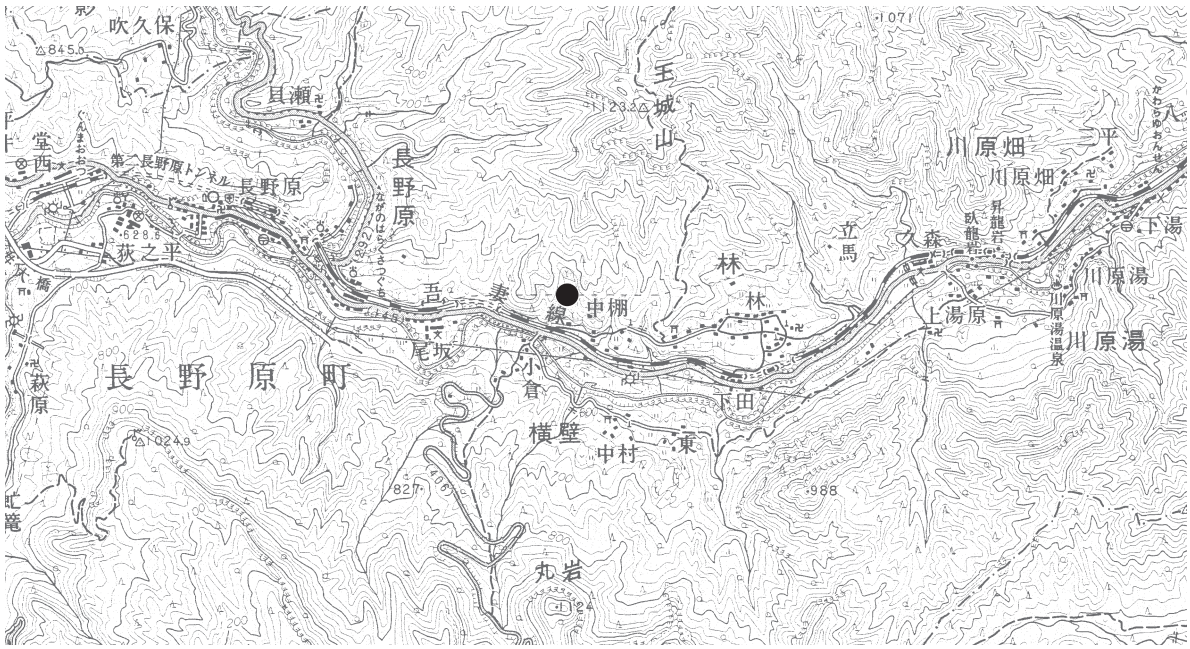
八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会が、その実施に関する協議を重ね、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長が、1994（平成６）年３月18日に「八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」を締結し、八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定された事によって開始される事となった。実施計画書に示された調査組織等の役割は、調査実施期間は群馬県教育委員会で、調査期間は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

この協定をふまえて、同年４月１日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査受委託契約を締結し、平成６年度から八ッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とする八ッ場ダム埋蔵文化財発掘調査が開始された。

その後、1999（平成11）年４月１日に調査実施機関である財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長と関東地方建設局長が「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書」を締結し、それ以降は調査実施機関を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に変更し、現在の調査体制に至っている。

さらに、2005（平成17）年４月１日には期間変更の協定書の変更がなされた。

楡木Ⅱ遺跡は吾妻郡長野原町林にあり、縄文時代・平安時代などを中心とする周知の埋蔵文化財包蔵地である。発掘調査の開始当初は、「林楡木Ⅱ遺跡」の名称であったが、群馬県教育委員会と長野原町教育委員会、それに財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との協議で、町の遺跡地図で採用されている「楡木Ⅱ遺跡」で統一する事となった。（遺跡ID 1127、県文化財システム遺跡番号　長野原町0051、八ッ場ダム関係埋蔵文化財遺跡番号　YD04－09）



第１図　遺跡位置図（国土地理院・５万分の１『草津』）

群馬県文化財システム
http://www2.wagamachi-guide.com/gunma/

発掘調査は、2000（平成12）年度が県道林長野原線建設に伴う長野原トンネル建設工事のための工事用進入路部分の建設、2001（平成13）年度が県道林長野原線楡木地区改良工事予定地部分及び楡木沢改良工事用進入路部分、2004（平成16）年度が県道林長野原線楡木沢改良工事部分、2005（平成17）年度が林代替地造成工事に伴うものであった。

遺跡全体で約18,000㎡が当初は対象であったが、工事に絡む関係で開始の時期を計４年、５次に分割して実施した。各年度の期間、面積は2000（平成12）年度が９月から12月までの４ヶ月の間に1,865㎡、2001（平成13）年度が７月からの２回で10,690㎡、2004（平成16）年度が4月から７月までの４ヶ月間に1,130㎡、2005（平成17）年度が９月から12月までの４ヶ月間の3,812㎡であり、合計で17,497㎡である。なお、各年次の調査範囲は第３図に表示したとおりである。

2001（平成13）年１月から建設省関東地方建設局は国土交通省関東地方整備局に、2002（平成14）年４月から群馬県教育委員会文化財保護課は群馬県教育委員会文化課にそれぞれ改編・改称された。

また、2006（平成18）年３月27日に吾妻町は東村と合併して、東吾妻町となった。

第２節　発掘調査の方法

1994（平成６）年度から始まった八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査においては遺跡名称の略号、調査区（グリッド）の設定については「八ッ場ダム関係埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき実施されてきた。本報告でもこれに準じ必要箇所について記載する事とする。

発掘調査における遺跡番号は八ッ場ダム建設にかかわる長野原町の大字５地区（１．川原畑、２．川原湯、３．横壁、４．林、５．長野原）ごとに番号を付与し、八ッ場ダム建設に伴う略称「YD」の後ろに続けた。略称、地区番号の次にはファイフォン（－）を記入し、その次に各地区内に所在する遺跡に対して発掘調査順に通し番号を付与して遺跡略称とした。楡木Ⅱ遺跡の場合は、林地区の９番（YD04－09）である。

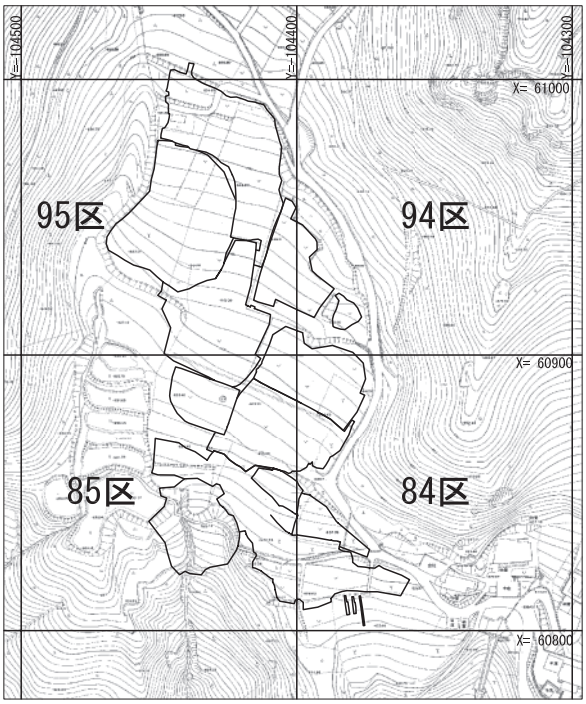
調査区（グリッド）については、八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財対象地域内を国家座標（2002年４月改正以前の日本測地系）の日本平面直角座標Ⅸ系を使用し、吾妻郡吾妻町（現東吾妻町）大柏木の東部付近を基点（X＝58000.00　Y＝－97000.00）とした。

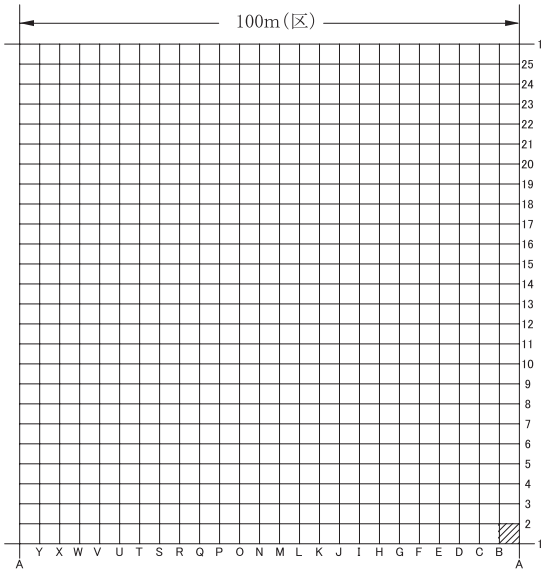
この基点から国家座標に準じて西・北方向に座標を設定した。八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財対象地域内は基点から西へ10㎞、北へ６㎞の広範囲に所在する事から１㎞四方の大区画（地区と呼称）を西へ10区画、北へ６区画の計60区画を設定した。

この大区画の内部を100m四方の中区画（区と呼称）に区分し、東南角から南列を西に１区、２区、10区とし、次の列を11区～20区のように100区まで設定した。

この中区画の内部は４m四方の625個の小区画に細分した。この細分した区画は東南を基点に西へはA～Yまでのアルファベット、北へは１～25までの数字を付与して各区画を区分した。すなわち、楡木Ⅱ遺跡の所在する38地区85区の基点となる小区画は38地区85区A－１と呼称される事になる。

この小区画を基にして遺構図測量、遺物取り上げ、旧石器時代等の試掘調査を実施するときの基準として使用した。





第２図　グリッド設定図

第３節　発掘調査の経過

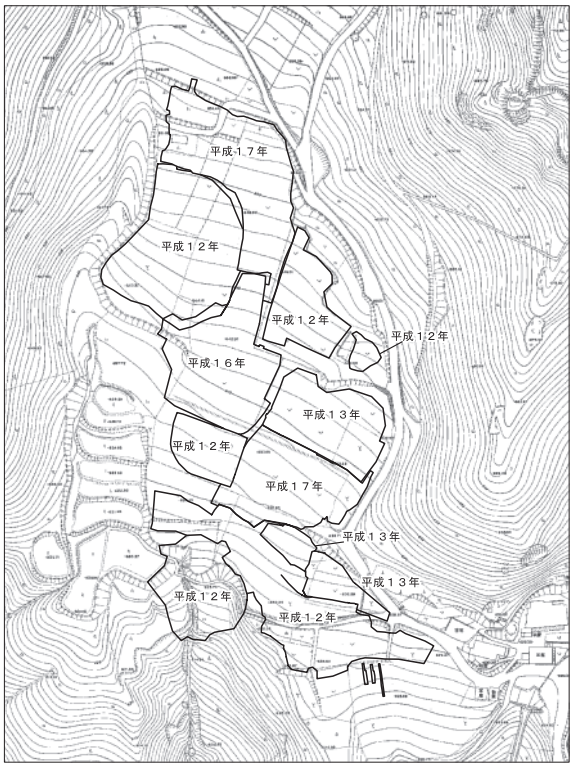
楡木Ⅱ遺跡の発掘調査は工事工程の関係から、４ヵ年にまたがると共に継続する形ではない事から、先行して発掘調査する箇所の表土掘削を随時開始する事となった。そのため、その排出土については周辺の場所に一時盛り土保管場所として対応し、その後は発掘調査が終了した場所を随時置き場にした。また、発掘調査は基本的に以下の調査方法で行われた。以下、これを各年度毎の各調査範囲毎に繰り返し実施した。

１．掘削機（バックホー）による基本土層の第Ⅰ層の表土の暗褐色土層の掘削を行う。

２．第Ⅱ層の中近世遺構確認・検出面、及び第Ⅲ層の平安時代確認・検出面、さらにその下位からの縄文時代遺構は人手による遺構確認作業を行い、個々の調査を行う。（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ面）

３．遺構調査終了後、84区を中心に基本土層の第Ⅴ層から下位の地層に対しての試掘を実施し、より古い時代の遺構確認作業を行った。（Ⅵ面）

検出した遺構については平面、土層観察断面等の測量、写真撮影による記録を作成した。遺跡全体図や遺構個別図の測量は多くを委託したが、簡便なものは掘削作業員によって作図を行った。また、遺跡



第３図　発掘調査範囲図（年度別）

全体図や広範囲におよぶ遺構図については航空写真撮影による測量にて対応した。

遺跡全景や遺構個別写真等の記録写真の撮影には中型と小型カメラを併用して、基本的に６×７版白黒と35㎜の白黒（モノクロ）フィルムと、35㎜のカラースライド（リバーサル）で行い、遺構全景の撮影にはモニタリングカメラ、ローリングタワーを場合によって併用し、各段階での全体写真の撮影にはラジコンヘリ及び高所作業車を使用して、上空からの航空写真や高所からの俯瞰写真を撮影した。

各年度共に、すべての作業が終了後に埋め戻し作業を行い、工事側への区画の引き渡しをした。

第４節　整理の方法と経過

楡木Ⅱ遺跡の整理作業は、2006（平成18）年の10月から2008（平成20）年の９月までの24ヶ月の計画に基づいて、当初は八ッ場調査事務所で開始されたが、2007（平成19）年４月から本部分室での整理体制への異動・移動という事態になり、急遽荷物をまとめる事となった。

そのため、整理作業に当たる整理作業員の全員が変更という異例の事態も伴い、引越し後の整理作業の再開にあたっては、その内容と工程について詳細な引継を行うというこれまた異例の事態となった。

まず､土器や石器・石製品などの遺物については、外部発注による洗浄・注記などの基礎整理を既に行っていたために、洗浄・注記の有無の確認、取り上げ番号などのチェックなどを行った。

次に、遺構別・層位別・地点別の分類・区分けの後に接合・復元作業を開始し、実測個体の選び出しと実測・トレース作業を行った。さらに、図面類については原図全体の確認・台帳化と、使用原図の選び出しと鉛筆によるトレース素図とトレース図作成を実施した。また、出土した遺物の図面上での位置の確認などを行った。そして、仕上がりの確認とともに、レイアウトの作成、遺構や遺物、それに関連する資料の図版作成を行った。

写真関係では、現場で撮影した35ミリと６×７の個々の白黒写真と35ミリスライドについては、出土状態など写真の種類などの確認、記録カード・台帳化を行った。特に、スライドは保存用と活用用の２種類への振り分け編集作業を実施し、報告書刊行後の利用に備える準備をした。

遺物は選び出し個体の写真撮影から行った。これらの作業がほぼ終了した時点で、レイアウトの作成、遺物・遺構・写真図版の作成を開始した。

同時に、報文原稿については整理担当者を中心に執筆したが、一部については発掘調査担当者や各時代・各遺構・遺物を専門分野とする職員らの助言・協力を得た。自然科学分析などについては、それぞれの専門の研究者による各分析結果の内容を第５章として巻末に収録した。

これらの作業をすべて行い、報告書作成の作業が終了し、印刷工程を経て刊行となった。

こうした整理作業にあたっては、測量した遺構図および撮影した写真は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団資料管理マニュアルに従って基礎整理を実施した。

また、出土した遺物は土器と石器については洗浄・注記を行い、今回の整理作業まで八ッ場ダム調査事務所で保管していたが、年度間の基礎整理の進捗状況の差異による手直し・追加が生じた。

なお、金属器・金属製品については整理作業時に図の作成、写真撮影が可能な状態になるように保存処理を行い本部にて保管した。

本遺跡の整理作業の問題点としては、まず遺物の洗浄の際に鉄製品や遺物への漆などの付着物の有無を充分に確認・選別しておく必要がある。また注記に際して注記箇所の指定の問題がある。

次に､整理作業経験が少ない作業員を使うために、従来の熟練した作業が期待出来ない事や、整理体制の作業員自体も１回目と２回目がほとんど異なる体制となった事である。そのため、継続性も熟練性も不足したままで終始した。

第２章　遺跡の環境

第１節　地理

吾妻郡長野原町は群馬県の西部、長野県との県境に位置する浅間山の北東に位置する。

行政区画としては、東は吾妻郡東吾妻町（旧吾妻町）、北は同郡六合（くに）村、北西は同郡草津町、西は同郡嬬恋（つまごい）村、南は長野県軽井沢町、南東は高崎市（旧倉渕（くらぶち）村）にそれぞれ接する。

周囲は標高1,000m～1,800m級の山々が連なり、南東部の高崎市との境に鼻曲（はなまがり：標高1,655m）と浅間隠（あさまがくし：標高1,756.7m）、東の東吾妻町との境に高間（たかま：標高1,341.7m）、西部に浅間隠・菅峰（すがみね：標高1,473.5m）・高間・笹（ささとや：標高1,756.7m）、北部に吾嬬（あがつま：標高1,181.5m）・薬師（やくし：標高974.4m）等の山々が存在する。

河川は長野県境に位置する鳥居峠（とりいとうげ：1,362m）付近から流れ出す吾妻川が東流し、それに万座川や白砂川、それに熊川等の小河川が南流、あるいは北流して、それぞれ吾妻川に合流する。

主な集落は吾妻川の河岸段丘上にある。吾妻川の谷は長野原地区付近ではその幅がやや広く、河岸に何段かの河岸段丘が発達しているが、川原湯地区より東では基盤の第三紀層を刻み込んで吾妻渓谷を形成している。

本遺跡の所在する林地区は、周囲を山々に囲まれた東西に細長い地形を呈し、浅間隠山の北東麓から流れ出す温川が左右両岸に段丘を形成しているものの、山間地特有の河川の蛇行により右岸側のみが幅が狭くなっており、一部で渓谷を作り出している。本遺跡が立地する段丘は最下位面で関東ロームがほとんど堆積していない事から、その形成時期は完新世の時期と考えられる。この緩やかな傾斜の段丘やその上位の丘陵上に縄文時代から平安時代にかけての遺跡がいくつも存在しており、現在でも住宅地や水田、畑として利用されている。特に、楡木・上菅は豊富な湧水を利用しての沢水田も営まれている。

参考文献

長野原町誌編纂委員会編 1976　『長野原町誌』上

第４図　遺跡位置図（国土地理院・20万分の１『長野』）

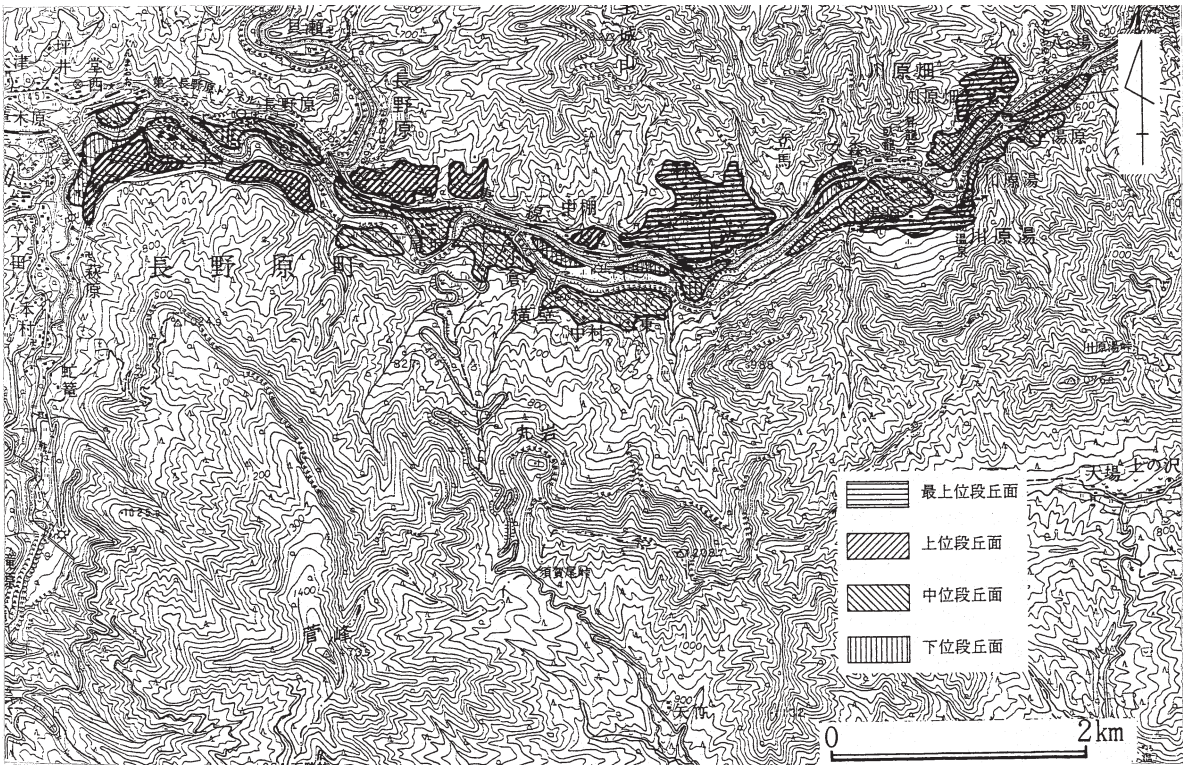
第２節　地形と地質

長野原町の地形・地質に大きな影響を与えたのは浅間火山である。町域の北西部、長野県境に位置し、黒斑・仏岩・前掛山・釜山の４つの火山体で構成される標高2,568mの成層火山である。約21,000年前の黒斑火山の噴火では、岩屑流と「応桑泥流」と呼ばれる泥流が発生している。この泥流堆積物は、当時の河床を数十mの厚さで埋めている。この堆積物によって吾妻川の浸食が進み、その両岸に最上位と上位の段丘面が形成されている。浅間山は、この後も多くの火山堆積物を堆積させているが、特に町域では浅間草津黄色軽石（As-YPk、10,500～11,500年前）の堆積が顕著である。また、1783（天明３）年の前掛山の噴火により発生した泥流は下位段丘や中位段丘を数m～数十mの厚さで覆っている。

平地は吾妻川に沿って僅かに分布しており、階段状の河岸段丘の上位にある。ここはこの地区の主な居住区であり、農業生産の中心にもなっている。

この段丘は、吾妻川からの比高の差を基準に下位段丘・中位段丘・上位段丘・最上位段丘の４つに分類されている。各段丘面の現在の吾妻川からの平均的な比高は、下位段丘で約10～15m、中位段丘で約30m、上位段丘で約60～65m、最上位段丘で約80～90mとなっている。このうち、上位・最上位の段丘面は約21,000年前に噴出した応桑泥流堆積物を基盤とし、その上に重なる関東ローム層中には、約11,000年前に噴出したと考えられるAs-YPkが最上位面で約２m堆積している。林地域では、集落の大部分が存在する林地区がこのなかの最上位段丘面に、中棚地区が上位段丘面に、下田地区が中位段丘面に、下原遺跡の位置する下原地区が下位段丘面にそれぞれ相当する。楡木・上菅はその最上位段丘面に急な傾斜地特有の崩落土壌による扇状地形が組み合わさったものである。

参考文献
八ツ場ダム地域自然調査会編1993　『八ツ場ダムダム湖予定地及び関連地域文化財調査報告書　長野原の自然』　長野原町



第５図　吾妻川流域の地形図（『長野原町の自然』）

第３節　歴史

この地域の歴史については、既に長野原町教育委員会の富田氏によって詳細な記述がなされており、それを参考に主として林地区を中心に記述する事とするが、各時代の主要な遺跡については周辺地区をも含めて説明する事とする。

長野原町教育委員会が1987（昭和62）年から３ヵ年にわたり実施した遺跡分布調査において、183箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認された。これに石造物などの指定文化財や名勝・天然記念物などを含めると文化財総数は199を数える。1994（平成６）年以降に八ッ場ダム建設に係わる発掘調査の進展に伴い包蔵地はさらに増えている。

旧石器時代　現在までにこの時期の遺跡は確認されていない。ただし、遺構外ながら柳沢城跡で細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩の削器が１点出土している。長野原一本松遺跡でも尖頭器が出土している。

縄文時代　縄文時代になると遺跡数は増大する。この時期の遺跡の主なものとして本遺跡以外に、石畑遺跡、坪井遺跡、長畝Ⅱ遺跡、暮坪遺跡、立馬Ⅱ遺跡、横壁中村遺跡、長野原一本松遺跡、西久保Ⅰ遺跡、幸神遺跡、勘場木遺跡、向原遺跡、滝原Ⅲ遺跡等があげられる。草創期の遺跡として表裏縄文土器が出土した石畑岩陰遺跡が著名であるが、横壁勝沼遺跡からも表採ながら草創期の槍先形尖頭器が出土している。早期は立馬遺跡で初頭の撚糸文期の１軒、前期では坪井遺跡で初頭の花積下層式期の１軒、暮坪遺跡で前期前葉の二ツ木式期の２軒、前期中葉～後葉が楡木Ⅱ遺跡で10軒、中期は立馬Ⅱ遺跡で初頭から前半の五領ヶ台式～阿玉台式の９軒、幸神遺跡で完形の阿玉台式土器を埋設した土坑１基が検出されている。中期後半が最も多く横壁中村遺跡と長野原一本松遺跡では共に250軒以上の大規模な集落を形成していた事が判明している。この他に坪井遺跡の19軒、幸神遺跡２軒、勘場木遺跡１軒、長畝Ⅱ遺跡２軒が検出されている。後期に至っても横壁中村遺跡と長野原一本松遺跡でも引き続き集落が形成されており、他に向原遺跡で５軒検出されている。晩期は川原湯勝沼遺跡で２個の土器を埋甕した土坑が検出され、再葬墓の可能性が指摘されている。

弥生時代　この時期の遺跡は極めて希薄であり、前期は横壁中村遺跡で樫王式の甕を埋設した土坑が検出され、再葬墓の可能性が指摘された。楡木Ⅲ遺跡では土器が集中して出土している。中期後半は立馬Ⅰ遺跡で土器棺墓が１基と竪穴住居が２軒、後期の樽式は二社平遺跡で破片が多数出土している。

古墳時代　1938（昭和13）年に編纂された『上毛古墳綜覧』によれば、長野原町には２基の古墳が存在するとされており、大津の鉄塚と与喜屋の五輪塚が該当するが、現在までに発掘調査によって確認されたものはひとつも無く、現時点では東吾妻町の岩島地区が西限である。集落関係では林宮原Ⅱ遺跡で１軒、下原遺跡での１軒が２例目であり、遺物は1976（昭和51）年に刊行された『草津温泉誌』第壱号にも長野原町大津の金丸製材所の西地点で出土した壺型土器と高坏が掲載されており、これが吾妻川流域の最奥の古墳時代の資料として紹介されている。これらからみても、遺跡の数が極端に少なく、それぞれの規模も小さい事から古墳が構築される土台がなかった可能性が高いと言えよう。

奈良・平安時代　10世紀ごろに編集された『和名類聚抄（わみょうるいじゅうしょう）』によれば、古代律令制での吾妻（阿加豆末：あがつま）郡は、大田郷（おおた、吾妻町太田地区から吾妻川上流の三島までの右岸一帯）、伊参郷（いさ、中之条町から原町にかけての吾妻川左岸一帯）、長田郷（ながた：中之条町北東部から高山村にかけての名久田川流域）の三つの郷に区分され、その郡衙（役所）は原町の大宮巌鼓神社周辺と考えられているが、近年の発掘調査からは疑問視されてきている。一方、長野原町のある西吾妻地区には郷が存在しないとされている。確かに奈良時代の遺構・遺物は極めて希薄で、分布調査でも僅かに確認されているのみである。

だが、平安時代になると遺跡数は増加する。本遺跡以外では、主な遺跡としては長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡、林宮原遺跡、向原遺跡、長畝Ⅰ遺跡、坪井遺跡、花畑遺跡、下原遺跡、川原湯勝沼遺跡が挙げら

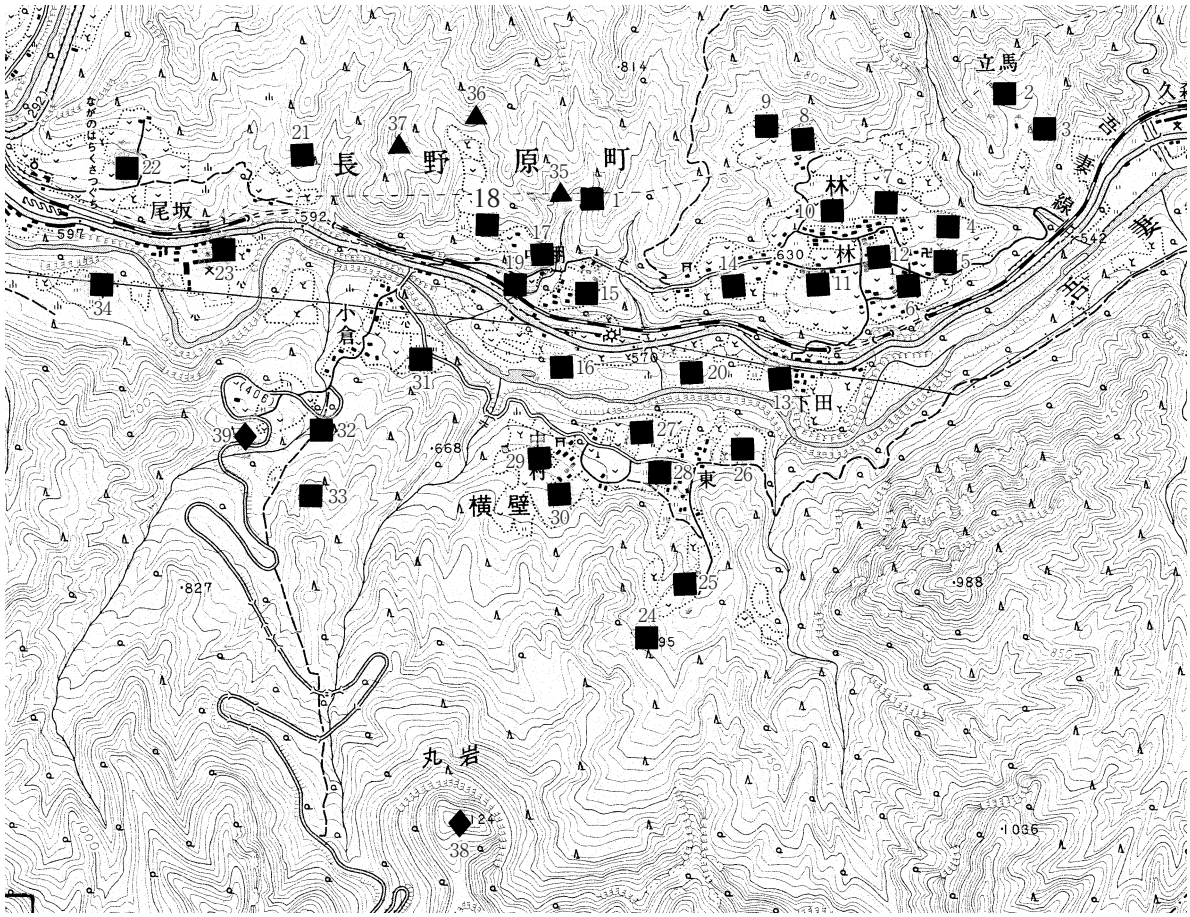
れる。各遺跡での竪穴住居の検出数は数軒と少ないものの、本遺跡では９世紀後半から10世紀前半にかけての竪穴住居が38軒もまとまって検出されており、「三家」などと書かれた墨書土器の存在から、高崎市山名町にある山ノ上碑に記載された「佐野三家」との関連を強く想定させる。さらに、朝廷の直轄地である「みやけ・ミヤケ・屯倉・官家」との関連をも想定される。また、西吾妻地区でも最大規模の竪穴住居の数は、たとえ同時存在ではないにしろ、存続期間が９世紀後半から10世紀前半の約百年と短い期間であることから、古代の律令制における地方行政の最も下位の単位である郷に近い形態の集落の存在が推定される。また、町内から瓦塔の破片が発見されており、町重要文化財に指定となっているが、詳細な出土地は不明である。

中世　この時代の西吾妻地区の様子は、吾妻氏の拠点である東吾妻地区に比べて不明な点が多いが、『吾妻鏡』によれば、1241（仁治２）年には三原庄が存在したとされ、信濃源氏の末裔とされる海野氏とその一族の下屋・鎌原・西窪・羽尾らの支配下にあったとされている。後の戦国期には齋藤氏や真田氏らが活躍したと記されている。特に、林の地については、1563（永禄６）年の９月の長野原城の戦いの際に、斎藤氏らが王城山から林の神社（現在の王城）を拠点にして、合戦の地となった事が『加沢記』等にも記載されている。羽尾氏から1566（永禄９）年の御山城攻略に功績のあった湯本氏も20貫文を所領している。その後は、齋藤氏が滅亡すると共に、武田氏による湯本氏らへの支配が強化されるが、武田氏やその後の北条氏の滅亡後、真田氏が支配する事となる。この時期の資料としては柳沢城や丸岩城などの城館跡などが中心であったが、近年の発掘調査により掘立柱建物などを検出する遺跡が増えつつある。主な遺跡としては、横壁中村遺跡、二反沢遺跡、下原遺跡等が挙げられる。下原遺跡では中世の畑跡や建物跡が検出されている。二反沢遺跡からは中世の区画跡の他、羽口、鉄滓、椀状滓等の製鉄関連遺物が検出されている。真田の検地では571石と倍増されている。

近世　沼田真田氏による支配の後、1681（天和元）年の改易により、この地域の対部分は幕府領や旗本領のいわゆる天領となり、明治維新までその体制が続き、明治以後に林村から1889（明治22）年の１町６村による町村合併により現在の長野原町となった。村高は「寛文郷帳」では125石うち田方14石・畑方111石、「元禄郷帳」では195石、「天保郷帳」と「旧高旧領」では202石である。1857（安政４）年の人別改帳では、戸数73・人数322・馬16と記されている。なお、近世の遺跡の大部分が、1783（天明３）年の浅間山の噴火に伴い噴出した浅間Ａ軽石と泥流堆積物で埋没したものである。主な遺跡としては、東宮遺跡、石畑遺跡、川原湯勝沼遺跡、横壁中村遺跡、下田遺跡、中棚Ⅱ遺跡、久々戸遺跡、尾坂遺跡等が挙げられる。特に、久々戸遺跡の６次調査では、江戸時代の街道である「草津道」が検出されている。小林屋敷遺跡からは地区の豪農であった小林家の屋敷の一部が検出されており、文献との照合もなされている。尾坂遺跡や東宮遺跡からも屋敷が検出されている。林村の被害は、「泥押し90石・流死者18・飢人25」である。生産基盤としては、畑を中心に検出されており、その中に麻の占める割合が高く、それに対して水田の比率が低い等があげられる。

また、下原遺跡などで1742（寛保２）年の洪水の際に生じた土砂崩れで埋没したと考えられる畑跡も検出されるなど、さらに古い洪水の存在も推定される。

参考文献
（概説書・図録類）　尾崎喜左雄監修 1987　『日本歴史地名大系10 群馬県の地名』　平凡社、日本地名大辞典編纂委員会編 1988　『日本地名大辞典』10　群馬県　角川書店、中之条町歴史民俗資料館 2003『常設展示解説図録』
（県町村史誌）　群馬県 1938　『上毛古墳綜覧』　群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第５号、長野原町誌編纂委員会編 1976　『長野原町誌』上、群馬県史編さん委員会編　1990　『群馬県史』　通史編　1、1981　『群馬県史』　資料編　3
（発掘調査報告書）群馬県教育委員会編 1988　群馬県の中世城館跡
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995～2007　年報：14～26、1998　長野原久々戸遺跡、 2002　長野原一本松遺跡（１）、 2002　八ッ場ダム発掘調査集成、 2003　久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡、 2004　久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡(２)・西ノ上遺跡・上郷Ａ遺跡、 2005　横壁中村遺跡（２）、 2005　川原湯褐沼遺跡（２）、 2006　横壁中村遺跡（３）、 2006　立馬Ⅱ遺跡、 2006　上郷Ｂ・廣石Ａ・二反沢遺跡、 2006　横壁中村遺跡（４）、 2006　立馬Ⅰ遺跡、 2007　下原遺跡Ⅱ、 2007　三平Ⅰ・Ⅱ遺跡、 2007　横壁中村遺跡（５）、 2007　長野原一本松遺跡（２）、 1995～2007　遺跡は今　１～15
長野原町教育委員会 1996　向原遺跡、 2000　坪井遺跡Ⅱ、 2001　暮坪遺跡、 2004　林宮原Ⅱ遺跡、 2005　小林屋敷遺跡



第６図　周辺遺跡図（国土地理院・2.5万分の１『草津』）

番号	遺跡名	町登録番号						
1	二反沢	52	14	林宮原	48	27	横壁中村	24
2	立馬Ⅰ	37	15	中棚Ⅰ	49	28	山根Ⅰ	26
3	立馬Ⅱ	213	16	中棚Ⅱ	203	29	山根Ⅱ	29
4	東原Ⅰ	38	17	楡木Ⅰ	50	30	山根Ⅲ	30
5	東原Ⅱ	39	18	楡木Ⅱ（本遺跡）	51	31	西久保Ⅰ	31
6	東原Ⅲ	40	19	楡木Ⅲ	202	32	西久保Ⅱ	32
7	上原Ⅰ	41	20	下原	204	33	西久保Ⅲ	33
8	上原Ⅱ	42	21	幸神	62	34	久々戸	200
9	上原Ⅲ	43	22	長野原一本松	63	35	滝沢観音岩陰	55
10	上原Ⅳ	44	23	尾坂	201	36	蜂ツ沢岩陰	56
11	林中原Ⅰ	45	24	上野Ⅰ	21	37	御嶽山岩陰	57
12	林中原Ⅱ	46	25	上野Ⅱ	22	38	丸岩城跡	34
13	下田	47	26	横壁勝沼	23	39	柳沢城跡	35

第１表　遺跡一覧

大字	町遺跡番号	遺跡名	YD 番号	調査年度（●：発掘調査　◇：試掘調査）														遺構・遺物の時期	備　　考
				6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19		
川原畑	208	東宮遺跡	YD1-02		●		●									◇	●	近世	H7･9 を群埋文 303 集（八ッ場２集）で報告
川原畑	210	石畑遺跡	YD1-03	◇		◇	◇	●										縄文・弥生・近世	H8･9･10 を群埋文 303 集（八ッ場２集）で報告
川原畑	3	三平Ⅰ遺跡	YD1-04					◇						●	●			縄文・弥生・平安	H10 を群埋文 303 集（八ッ場２集）、H16･17 を群埋文 401 集 (八ッ場 13 集) で報告
川原畑	11	二社平岩陰	YD1-05			◇		◇										近世	H8･10 を群埋文 303 集（八ッ場２集）で報告
川原畑	4	三平Ⅱ遺跡	YD1-06											●				縄文・平安・中世	H16 を群埋文 401 集 (八ッ場 13 集) で報告
川原畑	5	上ノ平Ⅰ遺跡	YD1-07							◇						●	●	縄文・平安	
川原畑	1	温井Ⅰ遺跡																縄文・平安	
川原畑	2	温井Ⅱ遺跡																縄文	
川原畑	6	上ノ平Ⅱ遺跡																不明	
川原畑	7	西宮遺跡	YD1-08												◇			縄文	
川原畑	8	滑沢岩陰																縄文	
川原畑	9	石畑Ⅰ岩陰																縄文	
川原畑	10	石畑Ⅱ岩陰																不明	
川原畑	12	三ツ堂岩陰																不明	
川原畑	13	西宮岩陰																不明	
川原畑	209	二社平遺跡																縄文・平安・近世	
川原湯	16	川原湯中原Ⅰ遺跡																縄文	
川原湯	17	石川原遺跡																縄文	
川原湯	18	川原湯中原Ⅱ遺跡																平安	
川原湯	19	川原湯中原Ⅲ遺跡																縄文・平安	
川原湯	20	北入遺跡																縄文	
川原湯	206	川原湯勝沼遺跡	YD2-01				●						●	●				縄文・古墳・平安・近世	H9 を群埋文 303 集（八ッ場２集）、H15･16 を群埋文 356 集（八ッ場６集）で報告
川原湯	212	西ノ上遺跡	YD2-02									●						近世	H14 を群埋文 349 集（八ッ場４集）で報告
川原湯	207	金花山砦跡																中世	
横壁	23	横壁勝沼遺跡	YD3-01	●	●													縄文・弥生・平安・中世・近世	H6･7 を群埋文 303 集（八ッ場２集）で報告
横壁	31	西久保Ⅰ遺跡	YD3-02	◇				●	●		◇				◇			縄文・弥生・平安・中世・近世	H11･12 を群埋文 303 集（八ッ場２集）で報告
横壁	24	横壁中村遺跡	YD3-03			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		縄文・弥生・平安・中世・近世	天明面を群埋文 319 集（八ッ場３集）、縄文中期住居を群埋文 355･368･381･406 集（八ッ場 5･7･10･14 集）で報告
横壁	29	山根Ⅲ遺跡	YD3-04					●			●				◇	●		縄文・弥生・平安・近世	H10 を群埋文 303 集（八ッ場２集）、H13･18 を群埋文 429 集 (八ッ場 17 集) で報告
横壁	21	上野Ⅰ遺跡																縄文・平安	
横壁	22	上野Ⅱ遺跡																平安・近世	
横壁	26	山根Ⅰ遺跡								●					●	●		平安	
横壁	28	山根Ⅱ遺跡										◇	◇					平安・近世	
横壁	30	山根Ⅳ遺跡												◇				縄文・平安	
横壁	32	西久保Ⅱ遺跡																平安	
横壁	33	西久保Ⅲ遺跡																不明	
横壁	34	丸岩城跡																中世	
横壁	35	柳沢城跡																中世	
横壁	216	西久保Ⅳ遺跡								◇								近世	
林	47	下田遺跡	YD4-01	◇	●		◇											縄文・近世	H6･7･9 を群埋文 303 集（八ッ場２集）で報告

大字	町遺跡番号	遺跡名	YD 番号	調査年度（●：発掘調査　◇：試掘調査）														遺構・遺物の時期	備　　考
				6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19		
林	41	上原Ⅰ遺跡	YD4-03				◇											縄文・平安・近世	H9 を群埋文 303 集（八ッ場 2 集）で報告
林	205	花畑遺跡	YD4-05					●	●	●								縄文・平安	H10 ～ 12 を群埋文 303 集（八ッ場 2 集）で報告
林	202	楡木Ⅲ遺跡	YD4-06					●										縄文・弥生・平安・中世	H10 を群埋文 303 集（八ッ場 2 集）で報告
林	203	中棚Ⅱ遺跡	YD4-07						●	●	●		●					近世	H11 ～ 13 を群埋文 319 集（八ッ場 3 集）、H15 を群埋文 349 集（八ッ場 4 集）で報告
林	204	下原遺跡	YD4-08							●	●		●	●				古墳・平安・中世・近世	H12･13 を群埋文 319 集（八ッ場 3 集）、H16･17 を群埋文 389 集（八ッ場 12 集）で報告
林	51	楡木Ⅱ遺跡	YD4-09							●	●			●	●			縄文・平安・中世	本書で報告
林	52	二反沢遺跡	YD4-10							●								中世・近世	H12 を群埋文 379 集（八ッ場 9 集）で報告
林	37	立馬Ⅰ遺跡	YD4-11								◇	●			●			縄文・弥生・平安・中世・近世	H14･17 を群埋文 388 集（八ッ場 11 集）で報告
林	213	立馬Ⅱ遺跡	YD4-12									●						縄文・弥生・平安	H14 を群埋文 375 集（八ッ場 8 集）で報告
林	44	上原Ⅳ遺跡	YD4-13										●					縄文	H15 を群埋文 429 集 (八ッ場 17 集) で報告
林	45	林中原Ⅰ遺跡	YD4-14											●			●	縄文・平安・中世	
林	46	林中原Ⅱ遺跡	YD4-15											●				縄文	
林	42	上原Ⅱ遺跡	YD4-16											●				平安	
林	59	林の御塚	YD4-17		◇			◇										縄文・近世	H7･10 を群埋文 303 集（八ッ場 2 集）で報告
林		立馬Ⅲ遺跡	YD4-18														●	縄文・平安	
林	38	東原Ⅰ遺跡																縄文・平安・近世	
林	39	東原Ⅱ遺跡	YD4-19															縄文	
林	40	東原Ⅲ遺跡	YD4-20															平安・近世	
林	43	上原Ⅲ遺跡													◇			平安	
林	48	林宮原遺跡																縄文・古墳・平安	
林	49	中棚Ⅰ遺跡																縄文・近世	
林	50	楡木Ⅰ遺跡																縄文・平安	
林	53	久森沢Ⅰ岩陰群																不明	
林	54	久森沢Ⅱ岩陰																不明	
林	55	滝沢観音岩陰																不明	
林	56	蜂ツ沢岩陰																縄文	
林	57	御獄山岩陰																不明	
長野原	63	長野原一本松遺跡	YD5-01	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	縄文・平安・中世・近世	H6 ～ 8 を群埋文 287 集（八ッ場 1 集）、H9 ～ 11 を群埋文 408 集 (八ッ場 15 集) で報告
長野原	201	尾坂遺跡	YD5-02	◇	◇			●								●	●	近世	H6･7･10 を群埋文 303 集（八ッ場 2 集）で報告
長野原	200	久々戸遺跡	YD5-03		●		●	●	●				●					縄文・近世	H7 を群埋文 240 集、H9 ～ 11 を群埋文 319 集（八ッ場 3 集）、H15 を群埋文 349 集（八ッ場 4 集）で報告
長野原	62	幸神遺跡	YD5-04			●	●					●			●			縄文・平安・近世	H8･9･14･17 を群埋文 429 集 (八ッ場 17 集) で報告
三島	57	上郷Ｂ遺跡	YD6-01								●	●						縄文・古墳・平安・近世	H13･14 を群埋文 379 集（八ッ場 9 集）で報告
三島	95	上郷岡原遺跡	YD6-02							◇	●	●	●	●	●	●	●	縄文・弥生・平安・中世・近世	H14･16 を群埋文 410 集 (八ッ場 16 集) で報告
三島	17	上郷Ａ遺跡	YD6-03										●				●	縄文・古墳・平安	H15 を群埋文 349 集（八ッ場 4 集）で報告
三島		上郷西遺跡	YD6-04														●	縄文・平安・近世	
三島	58	大沢遺跡	YD6			◇												縄文・平安・近世・近代	
大柏木	96	廣石Ａ遺跡	YD7-01								●							中世・近世	H13 を群埋文 379 集（八ッ場 9 集）で報告
大柏木		大柏木上ノ沢遺跡	YD7			◇													
松谷		松田前田遺跡	YD8			◇													

第４節　基本土層

本遺跡の基本土層は、基本的には長野原町の吾妻川左岸に位置する遺跡と同様であるが、同地区内、遺跡内でも場所によって若干の違いがある。特に、傾斜地特有の崩落堆積層が部分的に認められる。

榆木Ⅱ遺跡の基本土層

Ⅰ層　表土　畑の耕作土。

Ⅱ層　暗褐色土　細粒の黄色軽石を含む。平安時代以降。浅間Ｃ軽石（As-C）・Ｄ軽石（As-D）。

Ⅲ層　黒褐色土　比較的粗粒の黄色軽石を多く含む。縄文時代中期。浅間六合軽石（As-Kn）。上面が平安時代の確認面。

Ⅳ層　暗褐色土～黒褐色土　黄色軽石を多く含む。色調が特に暗い。縄文時代前期。

Ⅴ層　黄褐色土　ローム漸移層。縄文時代早期。浅間総社軽石（As-Sj）。上面が撚糸文検出面。

Ⅵ層　ソフトローム

Ⅶ層　浅間草津黄色軽石（As-YPk）層

【対比資料】三平Ⅰ遺跡及び三平Ⅱ遺跡の基本土層

Ⅰ層　暗褐色土（10YR3/3）。現在の耕作土及び表土。やや砂質で粘性に乏しい。榆木Ⅱ・Ⅰ層に対比。

Ⅱ層　褐色土（10YR4/4）。ローム質土の２次堆積層。砂質で粘性弱い。斜面上位方向（北方向）からの土砂崩落に伴う堆積層と考えられる。径５～10mmの亜角礫５～７％含む。

Ⅲ層　褐色土（10YR2/2）。粒子細かく、しまり・粘性ともに弱い。浅間粕川テフラ(As-Kk)の純堆積層が部分的に残存する。平安時代以降の遺構確認面及び遺物包含層に相当する。榆木Ⅱ・Ⅱ層に対比。

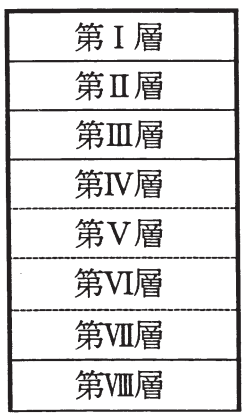
Ⅳ層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）。Ⅱ層に類似したローム質土の２次堆積層で土砂崩落に伴う堆積層と考えられる。榆木Ⅱ・Ⅲ層に対比。

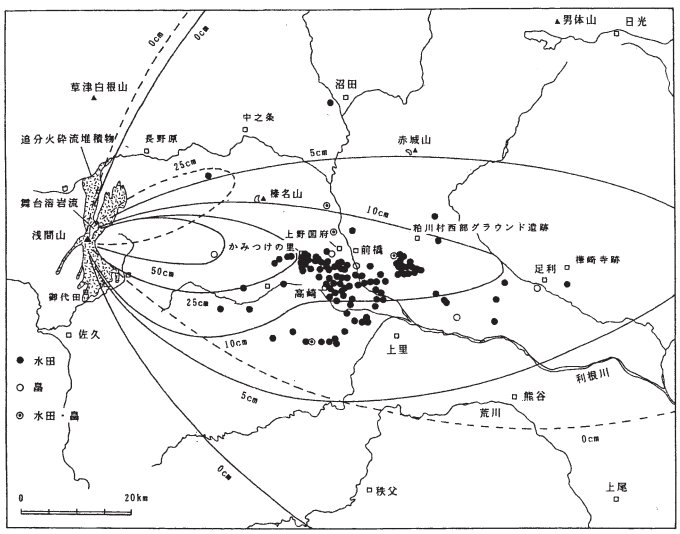
Ⅴ層　褐色土（10YR3/2）。粒子細かい。しまり・粘性ともⅢ層より強い。白色あるいは黄色軽石粒を３～５％含む。縄文時代の遺構確認面及び遺物包含層に相当する。榆木Ⅱ・Ⅳ層に対比。

Ⅵ層　褐色土（10YR4/6）。Ⅶ層のローム層への漸位層。粒子細かく、しまり強い。榆木Ⅱ・Ⅴ層に対比。

Ⅶ層　黄褐色土（10YR5/6）。ローム層。粒子細かく、しまり強い。三平Ⅱ遺跡81区Ｍ－13並びにＯ－17グリッドの当層位において、黄灰色泥流堆積物が確認されている。榆木Ⅱ・Ⅵ層に対比。

Ⅷ層　層厚80～90㎝の浅間草津黄色軽石(As-YPk)純堆積層。パミス粒径は最大20～30mm。最上層部及び最下層部には硬化したアッシュの純堆積。榆木Ⅱ・Ⅶ層に対比。





浅間火山1108（嘉永３・天仁元年　の噴火によるテフラと被災遺跡の分布
破線は，浅間粕川テフラ（As-Kk，1128年）の等層厚線．

第7図　基本土層図

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

本遺跡の発掘調査の対象地全域は、最上位河岸段丘面よりも上位の扇状地形である。ここには下位に応桑泥流が、上位には関東ローム層終末期からの堆積以後の土壌が堆積している。その中には年代の鍵層となる軽石や火山灰も堆積しているが、純層ではなく攪拌された状態であり、文化層の把握がやや難しい状態である。

今回の発掘調査による調査面は２面（一部３面）である。確認できた遺構は、古い順に縄文時代、平安時代、及び中近世に属するものである。種類としては居住機能としての竪穴住居跡が中心である。遺物は縄文時代、弥生時代、平安時代、及び中近世のものである。調査面積は単面で約18,000㎡であるが、部分的に複数の文化面を有する地域もあるので、それに対応して数値が増す事となる。

本章では時期の古い順にそれぞれ遺構の種類別に項目を設定し、個々の遺構について説明を加えた。そのため、遺構に付けられた番号順になっていない場合もある。次に、各時代毎の遺構・遺物にその特徴をみていく事とする。

まず、旧石器時代は試掘トレンチを設定し調査した。浅間草津黄色軽石（As-YPk）を確認したものの、遺構や遺物は検出されなかった。縄文時代は、基本土層のⅣ層からⅤ層にかけて、遺構として竪穴住居、集石などの遺構が多数検出されている。遺物としては草創期の表裏縄文、早期初頭の撚糸文や押型文など、前期前半の黒浜式、後半の諸磯式、中期前半の五領ヶ台式、勝坂式、阿玉台式、後半の加曽利Ｅ式、さらには後期の加曽利Ｂ式などの土器や、打製石鏃、打製石斧、スタンプ形石器などの石器が出土している。弥生時代は、遺構は確認されていないものの、後期の樽式土器が少量出土している。古墳時代は、遺構も遺物も確認されなかった。

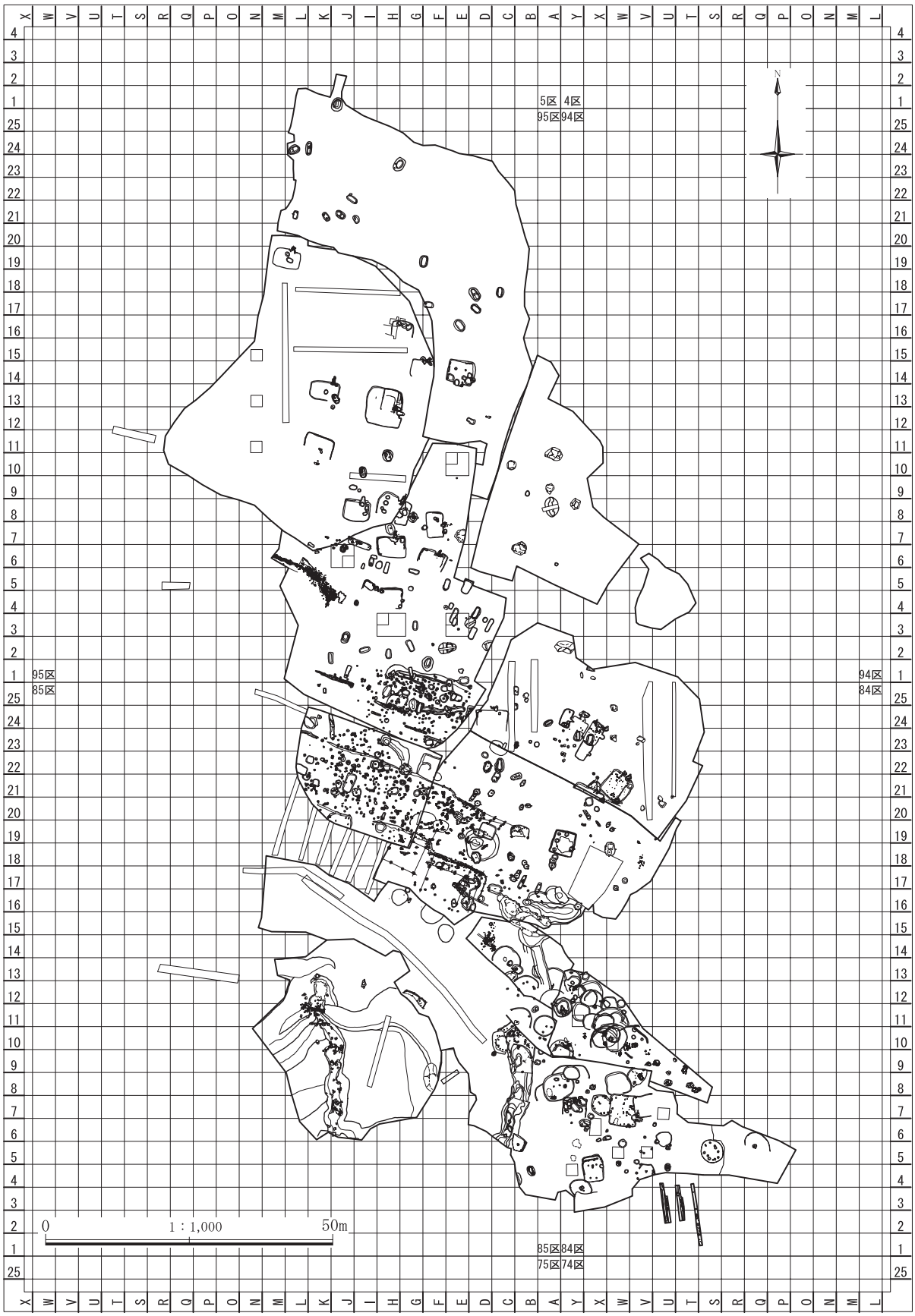
ここまでは、次に刊行する『楡木Ⅱ遺跡（２）（縄文時代編）』に収録する予定である。

本書で報告するのは平安時代と中近世に関する事で、特徴的な遺構と遺物について記述する。

①平安時代では、南側への傾斜する地形のために住居の南壁の残りが悪いものの、基本土層のⅡ層からⅢ層にかけて、38軒もの竪穴住居や３軒の竪穴遺構などが検出されている。特徴としては、この地域の特徴でもある焼失家屋の数が多い事、「三家」や「□家」、「三」と書かれた５点の墨書土器の存在、須恵器の羽釜「吉井型」と「月夜野型」の共伴問題などがある。また、浅間Ｂテフラと呼ばれる1108（天仁元）年浅間山給源の軽石や火山灰は明確ではないものの、第Ⅲ層の中に混じり込んでいる。さらに、浅間粕川軽石と呼ばれる1128（大治３）年に降り積もった火山灰が、埋没途中の陥し穴の堆積層中で検出されている事から、少なくとも平安時代の陥し穴が何基かは存在したと考えられる。

②中世以降から近世にかけては、基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を掘り込んだ溝が13条検出され、さらに、傾斜地を３段ほどの雛壇状に造成して、そこに掘立柱建物が何棟も築造されていた。後述するが、この地に存在する民間信仰の対象物である「つぶらっこ」様に関連するものと考えられる。この他に多数の土坑、ピットなどが検出されているが、あるいはこの中に掘立柱建物群に関連するものも存在するのかも知れない。出土遺物は古いものでは僅かであるが中国からの貿易陶磁である青磁があり、他に擂鉢や碗などの陶磁器や内耳などの軟質陶器の破片がいくつも出土しており、その大部分は16世紀以降のものである。

さらに新しい時期の遺構としては、扇状地形を利用して、現在の崖部分で浅間草津黄色軽石（As-YPk）を露出させて、その部分を石組みした湧水遺構と、そこから吾妻川に向かって南に流れ下る沢が存在する。また、石垣を備えたテラスの上に残された焼土と、それにまつわる昭和初期までの麻作りに係わる遺構と考えられる焼土などが出土している。



第８図　遺跡全体図

第２節　平安時代の遺構と遺物

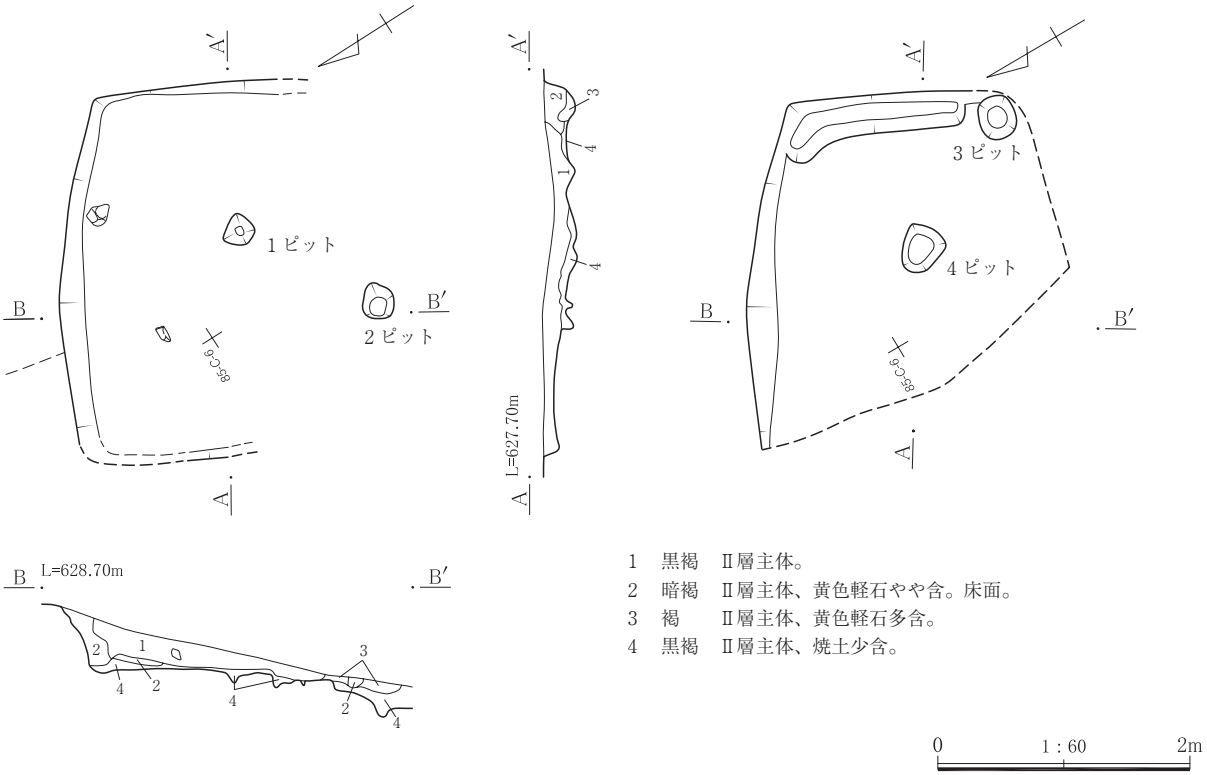
（１）遺構

この時期は、文化層の第３面に相当する。確認面・遺構検出面は主に第Ⅱ層下面から第Ⅲ層上面にかけてであり、基本土層の第Ⅱ層が包含層である。検出された遺構は主に竪穴住居であり、年度をまたいで調査された33・73号竪穴住居を含めて38軒、それに竪穴遺構が３軒である。

１　竪穴住居

３号竪穴住居（第11図、写真図版３）

85区B－５・６、C－５・６グリッドに位置する。傾斜がある部分に位置するため、確認時に北壁と東壁の一部しか残存しなかった。重複関係は無い。住居の規模は長軸約３ｍ、短軸約２ｍのやや隅丸の長方形に近い。面積は約６㎡である。遺構確認面からの深さは約15～20cmで、壁は緩やかに立ち上がる。床面は多少の凸凹を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、東壁の中心から南東側に位置していたものと考えられる。柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物はまったく出土していない。

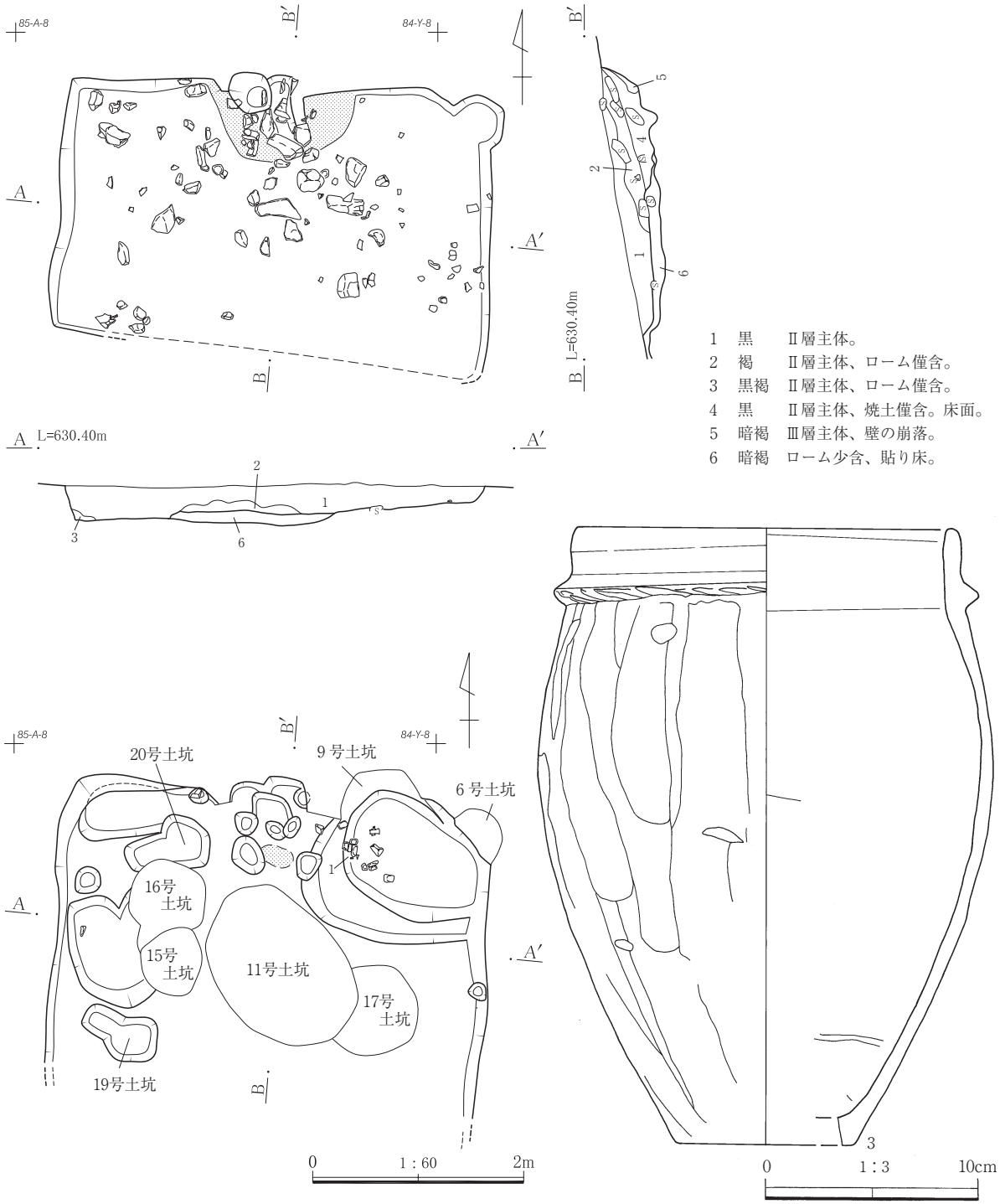


第11図　３号竪穴住居遺構

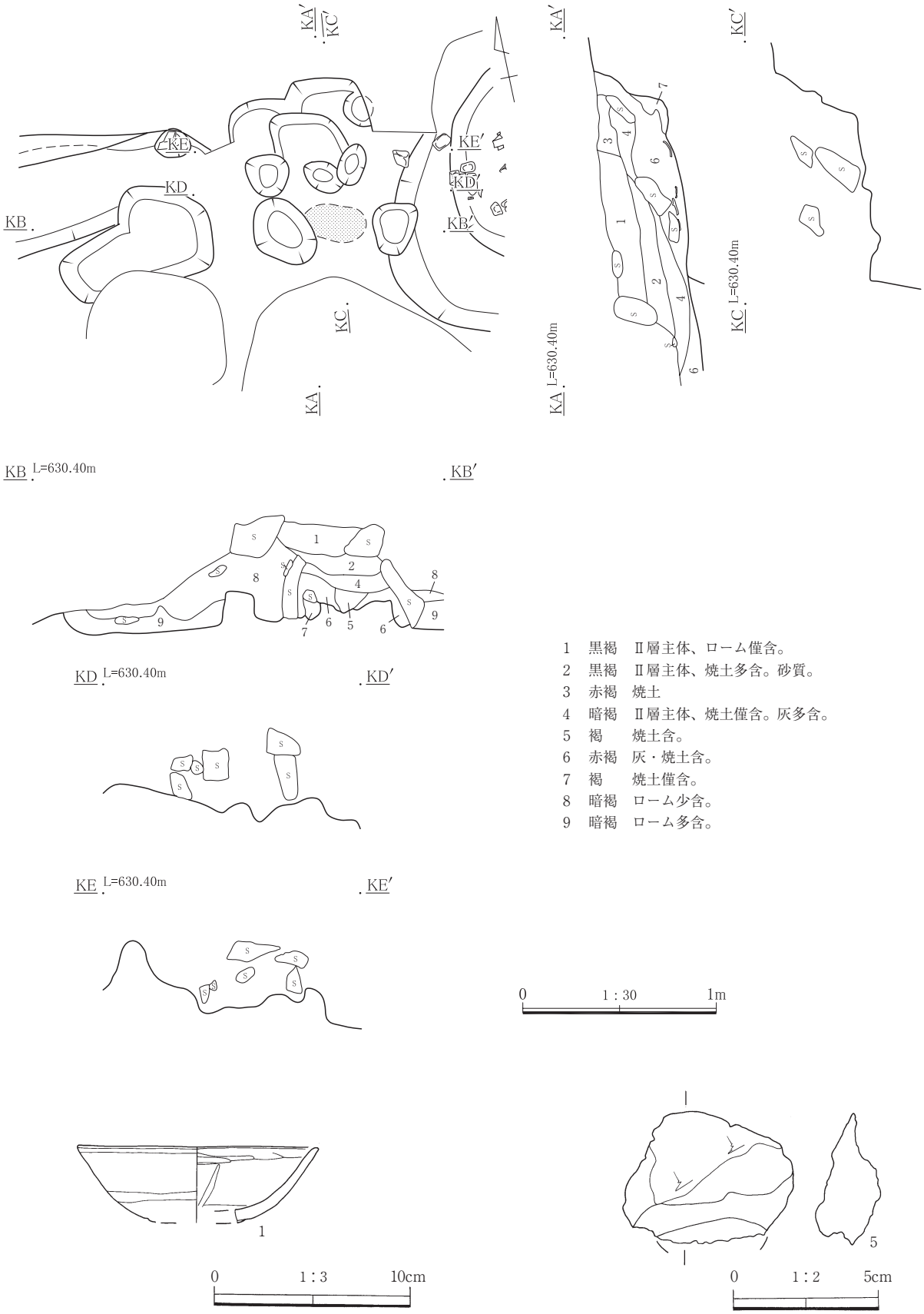
４号竪穴住居（第12～14図、写真図版３・53）

84区X－７、Y－７グリッドに位置する。重複関係は11号土坑（陥し穴）よりも新しい。平面形状は隅丸の長方形で、住居の規模は長軸約4.2ｍ、短軸約2.8ｍのやや楕円気味な形状である。面積は10.608㎡である。遺構確認面からの深さは約30cmで、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としてい

る。カマドは、北壁のほぼ中心に位置する。残存状態もあまり良くなく、袖は明確ではない。袖や燃焼部の構築材の一部に石が利用されているが、煙出し口ははっきりせずに、掘り方の痕跡から判断した。北東隅には貯蔵穴と考えられる楕円形の土坑が存在する。また、柱穴と考えられる床下土坑やピットが多数検出されているが、周溝は確認出来なかった。遺物は、土師器の坏７点（41.1ｇ）・甕49点（163.2ｇ）、須恵器の坏７点（46ｇ）・高台付碗１点（12.1ｇ）・甕１点（55.3ｇ）・羽釜46点（937.5ｇ）・蓋１点（27.2ｇ）・長頸壺１点（５ｇ）、灰釉陶器４点（112.8ｇ）、鉄滓１点などが出土している。

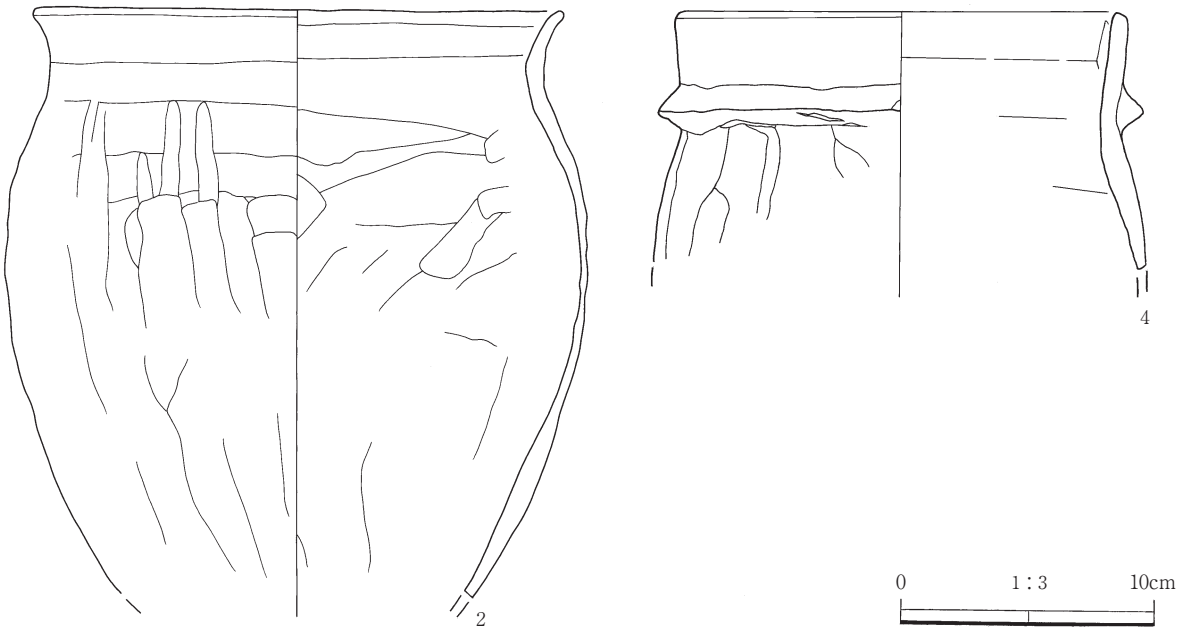


第12図　４号竪穴住居遺構①・遺物①

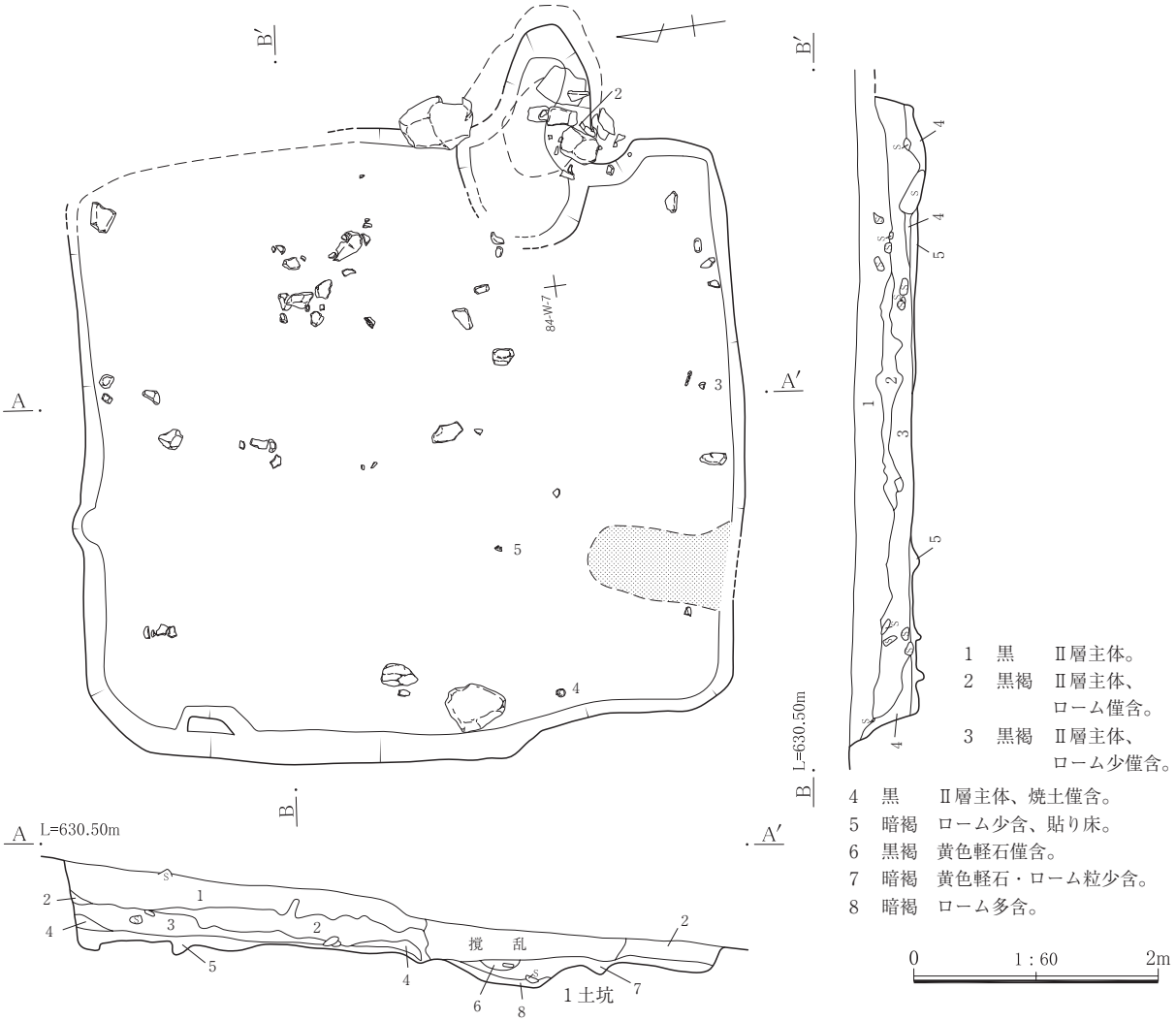


1　黒褐　Ⅱ層主体、ローム僅含。
2　黒褐　Ⅱ層主体、焼土多含。砂質。
3　赤褐　焼土
4　暗褐　Ⅱ層主体、焼土僅含。灰多含。
5　褐　　焼土含。
6　赤褐　灰・焼土含。
7　褐　　焼土僅含。
8　暗褐　ローム少含。
9　暗褐　ローム多含。

第13図　４号竪穴住居遺構②・遺物②



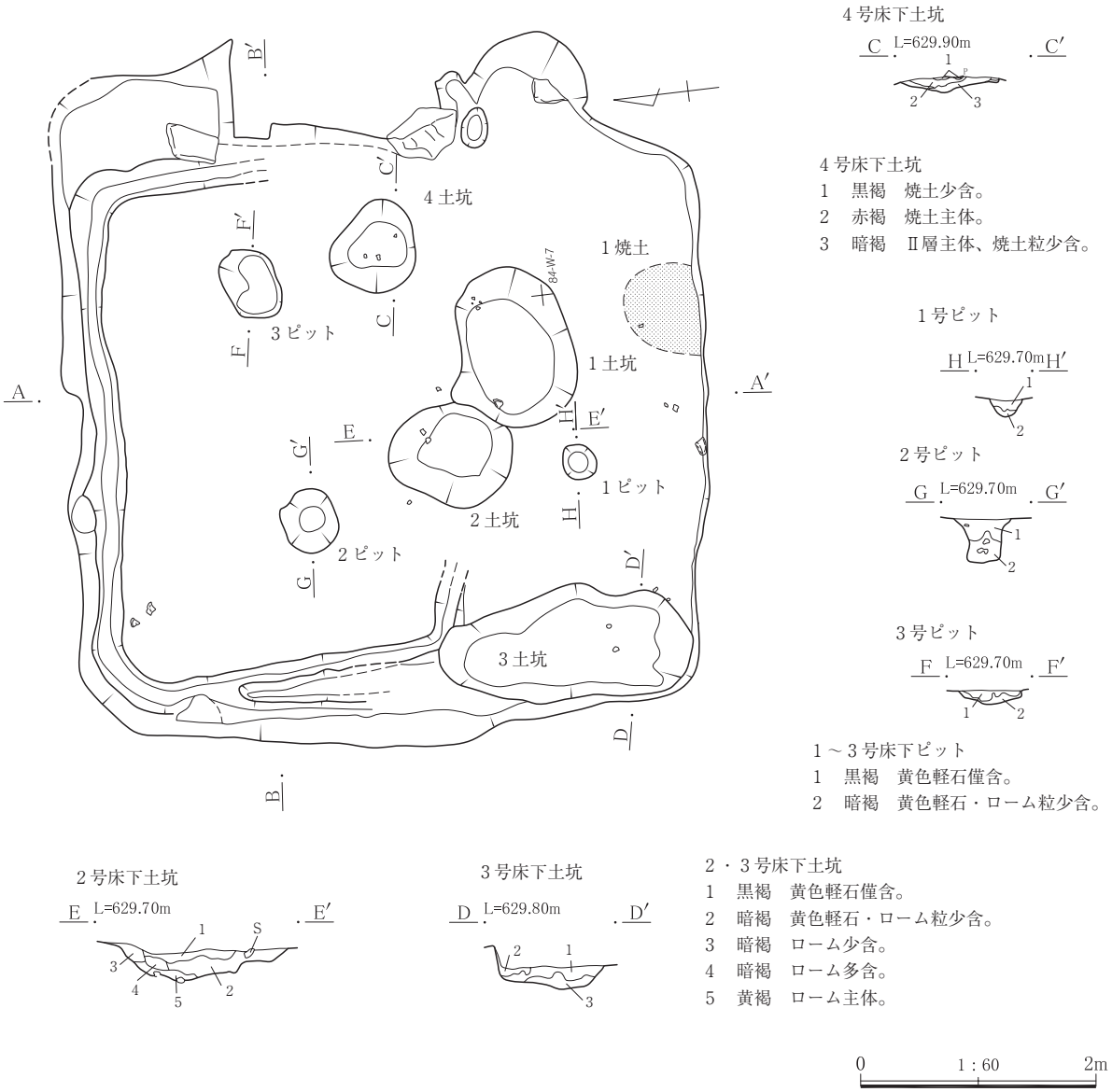
第14図　４号竪穴住居遺物③



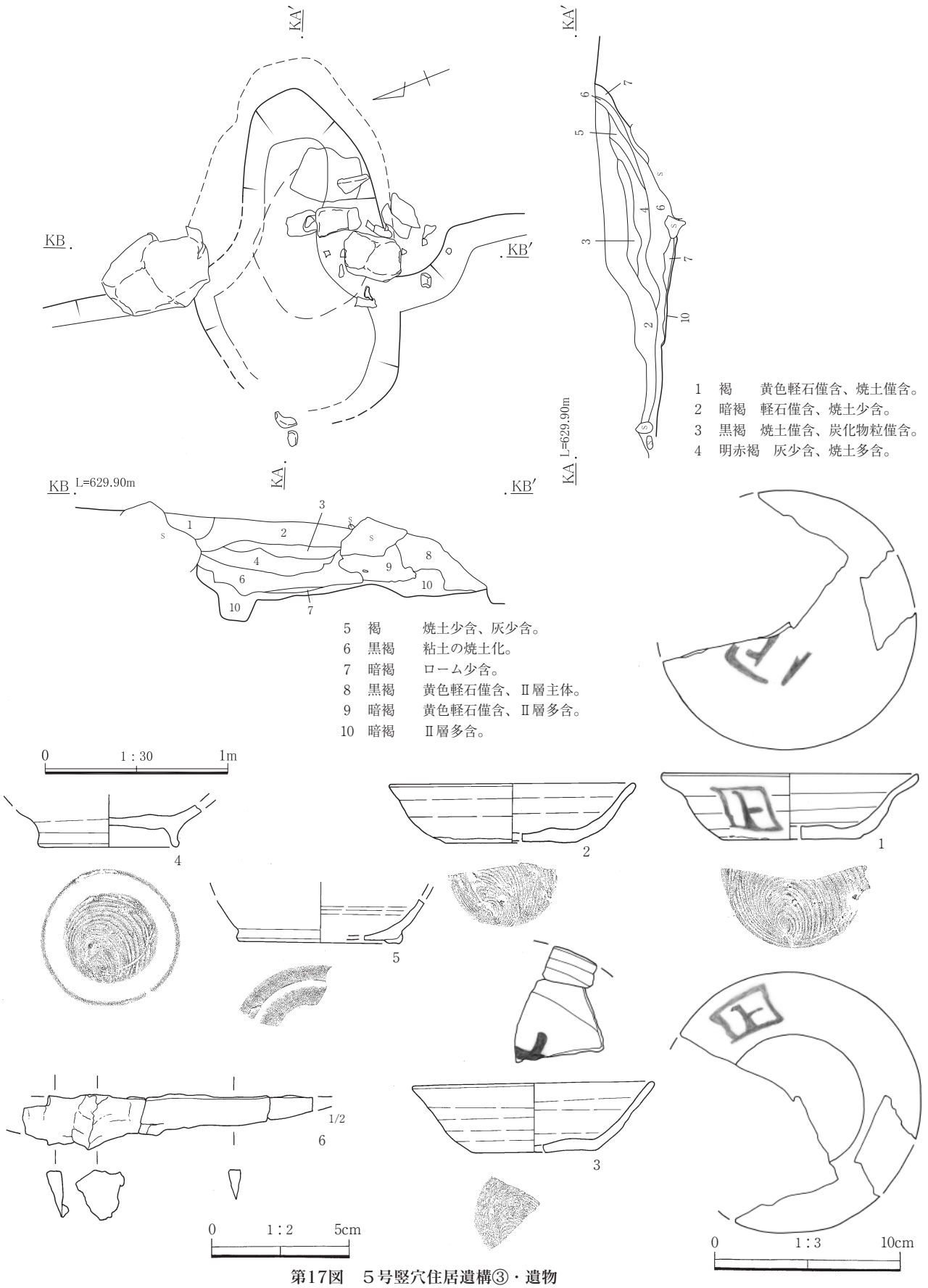
第15図　５号竪穴住居遺構①

５号竪穴住居（第15～17図、写真図版４・53）

84区V－６・７、W－６～８グリッドに位置する。形状は隅丸の方形である。重複関係は無い。住居の規模は長軸約5.5m、短軸約5.2mのやや隅丸の長方形に近い。面積は27.024㎡である。遺構確認面からの深さは約15～20cmで、壁は緩やかに立ち上がる。床面は多少の凸凹を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、北壁の中心から南西側に位置し、南東隅に近い。袖や煙道部分の構築材として石を何個も用いており、残存状態は良い。煙出し口は住居の掘り込み範囲よりも外に飛び出している。床下土坑４基・ピットが３基、周溝も北壁を中心に確認された。遺物は、土師器の坏20点（115.7ｇ）・甕167点（597.6ｇ）、須恵器の甕19点（941.6ｇ）・羽釜１点（30.4ｇ）・壺７点（88.7ｇ）などが出土している。



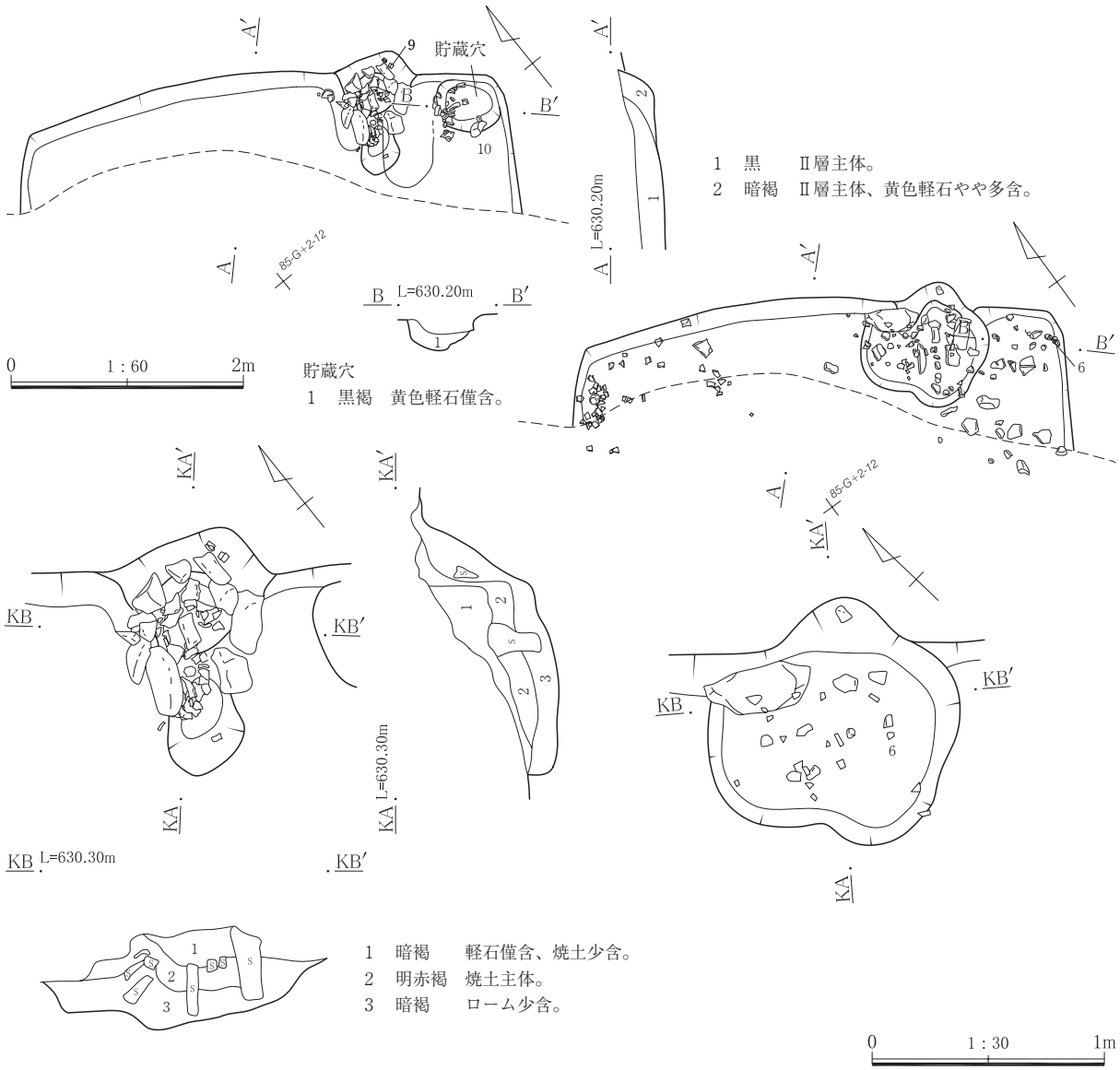
第16図　５号竪穴住居遺構②



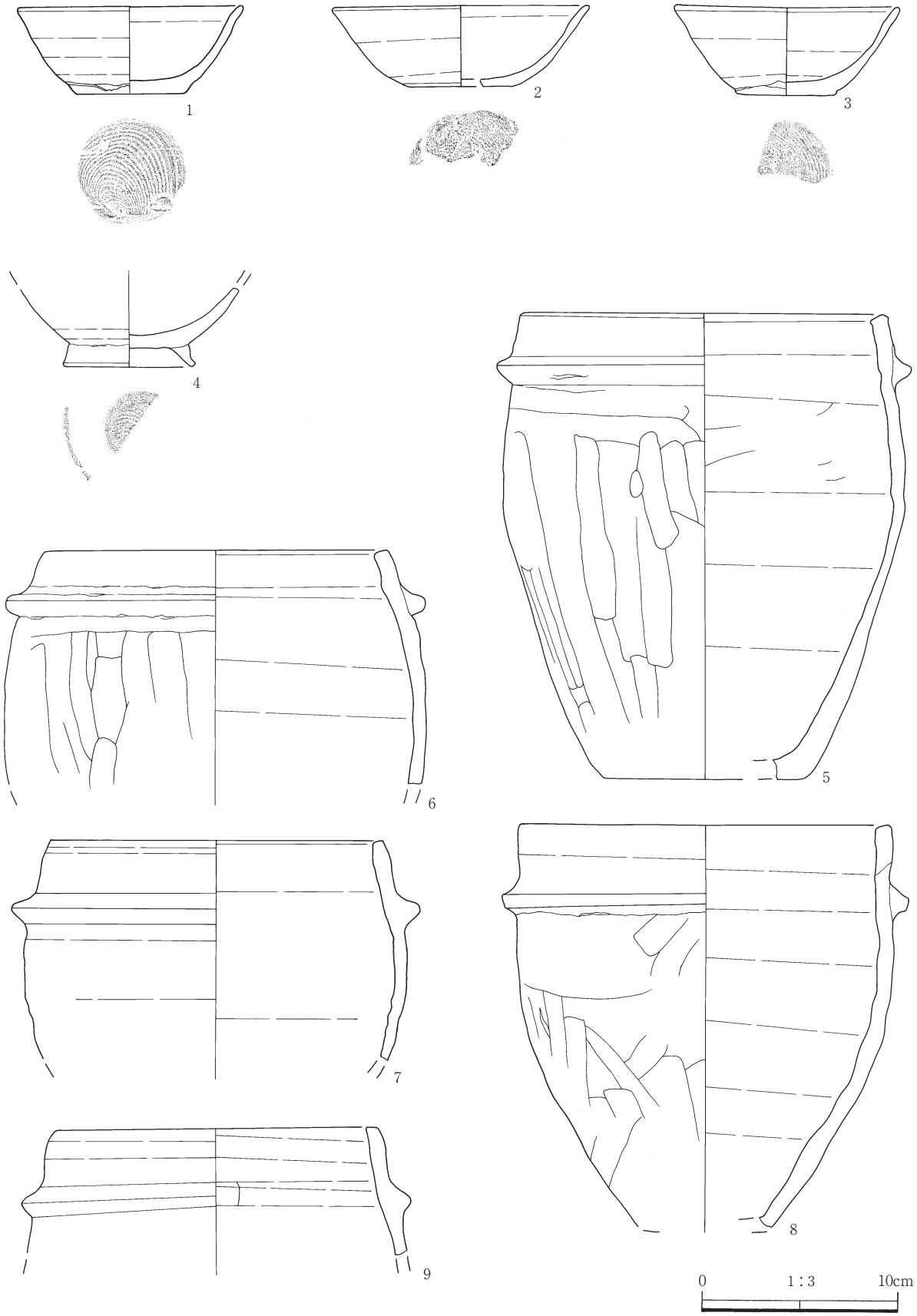
第17図　５号竪穴住居遺構③・遺物

16号竪穴住居（第18～20図、写真図版４・５・53・54）

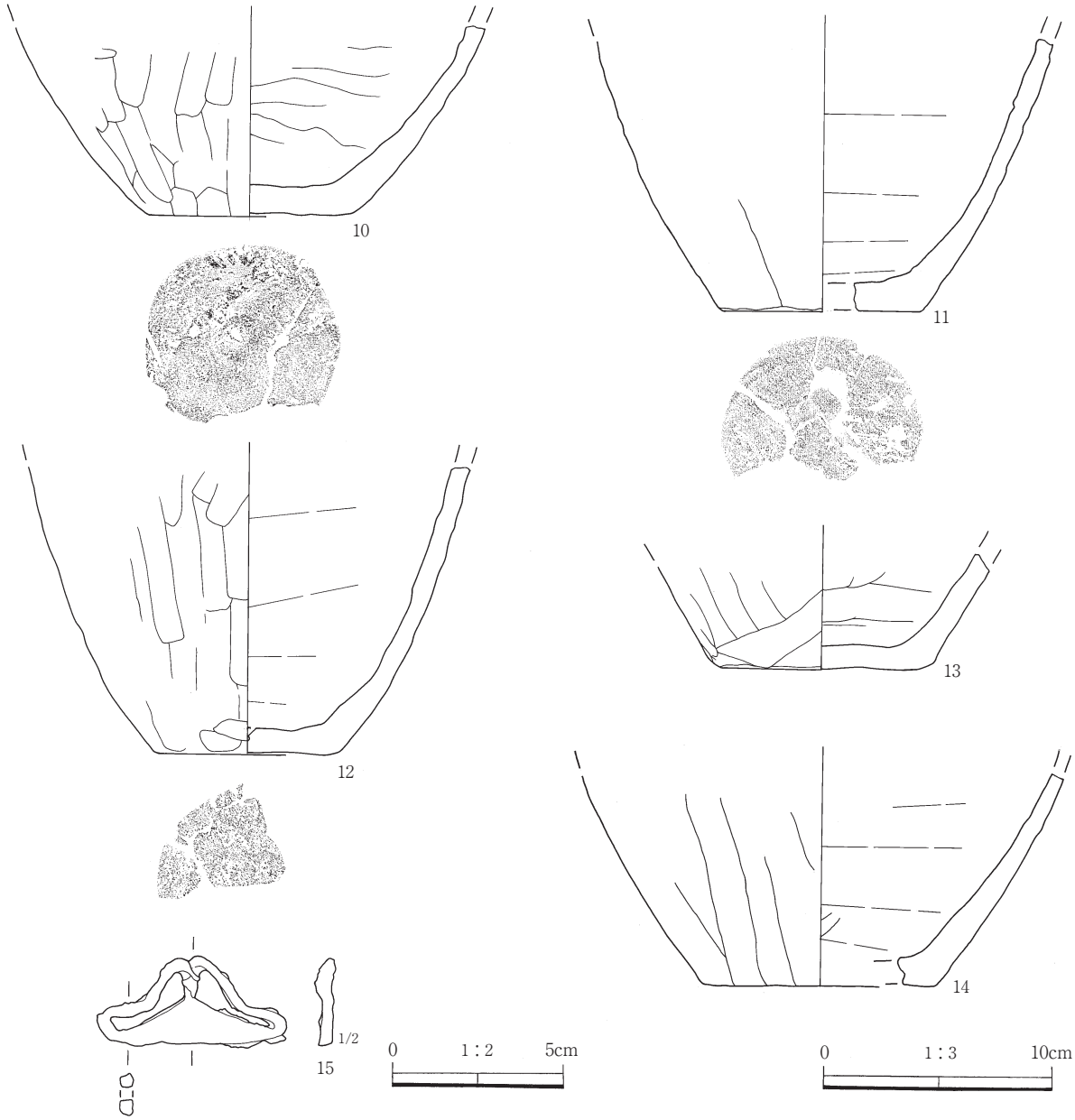
85区F－11・G－11・12グリッドに位置する。南側半分以上が崩落したと考えられ、重複関係は不明である。住居の規模は長軸約4.2m、短軸約0.9m以上の長方形と推定される。面積は3.358㎡である。遺構確認面からの深さは約30cmで、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、北壁のほぼ中心から南東側に位置し、南東隅部分に近い。残存状態もあまり良くなく、袖は明確ではない。構築材の一部に石が利用されているが、煙出し口ははっきりせずに、掘り方の痕跡から判断した。カマドの東側の北東隅に、約42cm×約40cmのほぼ正円に近い貯蔵穴がある。柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は、土師器の甕６点（55.2ｇ）、須恵器の坏17点（181.0ｇ）・高台付碗4点（45.4ｇ）・甕１点（11.5ｇ）・羽釜195点（1,843.9ｇ）、灰釉陶器３点（30.8ｇ）、火打ち金１点などが出土している。



第18図　16号竪穴住居遺構



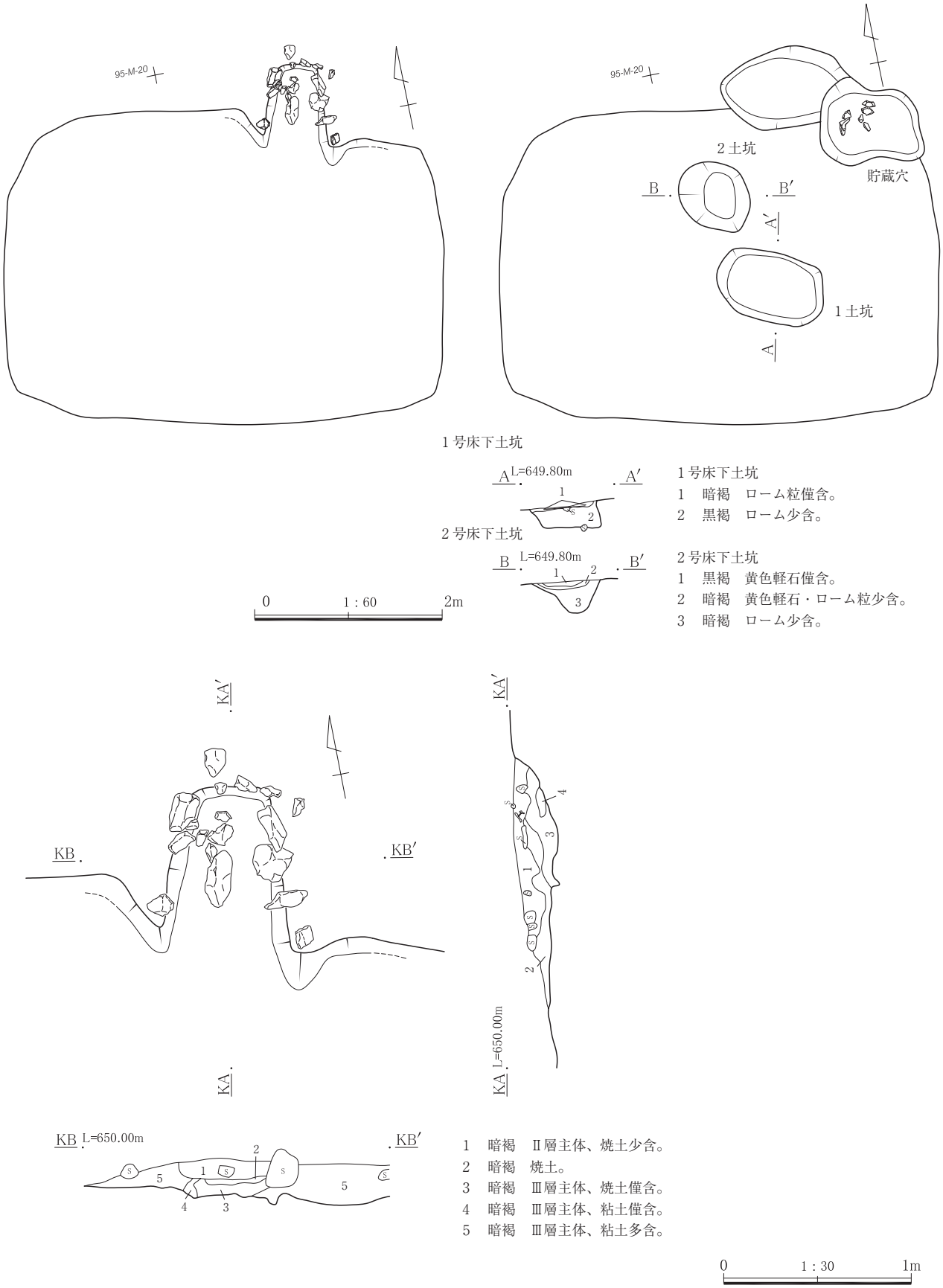
第19図　16号竪穴住居遺物①



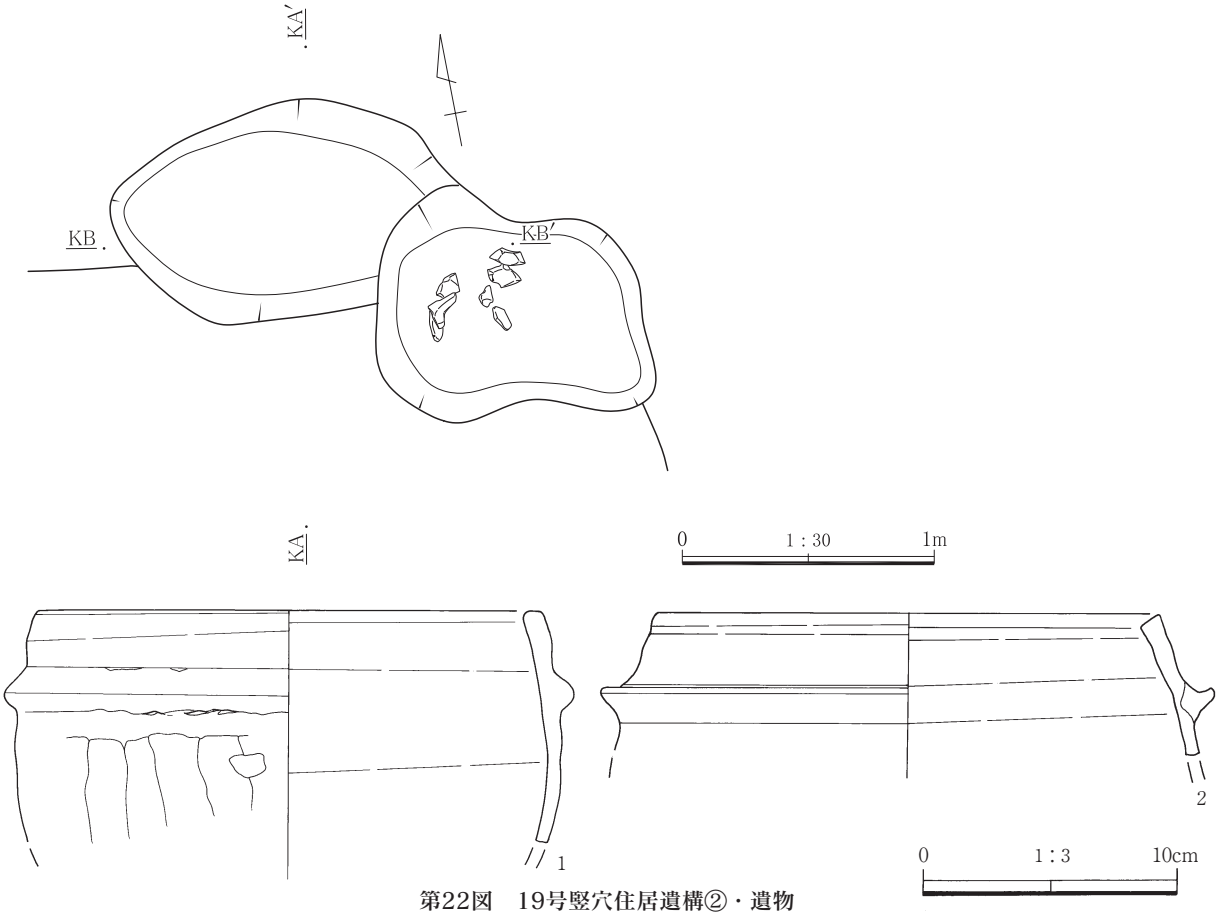
第20図　16号竪穴住居遺物②

19号竪穴住居（第21・22図、写真図版５・55）

95区L－19、M－19グリッドに位置する。重複関係は無い。住居の規模は長軸約4.７m、短軸約3.35mのやや隅丸の長方形に近い。面積は14.496㎡である。遺構確認面からの深さは約15～20cmで、壁は緩やかに立ち上がる。床面は多少の凸凹を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、北壁の中心から北東側に位置し、北東隅に近い。構築材の一部に石が利用されており、残存状態は良い。煙出し口は住居の掘り込み範囲よりも外に飛び出している。北東隅に長方形の貯蔵穴、中央に２基の床下土坑が存在するが、柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は、土師器の坏１点（2.2ｇ）・甕10点（56.3ｇ）、須恵器の坏12点（66.6ｇ）・高台付碗１点（11.3ｇ）・羽釜９点（230.3ｇ）などが出土している。



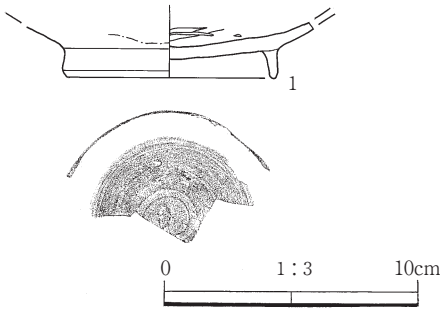
第21図　19号竪穴住居遺構①



第22図　19号竪穴住居遺構②・遺物

20号竪穴住居（写真図版５・55）

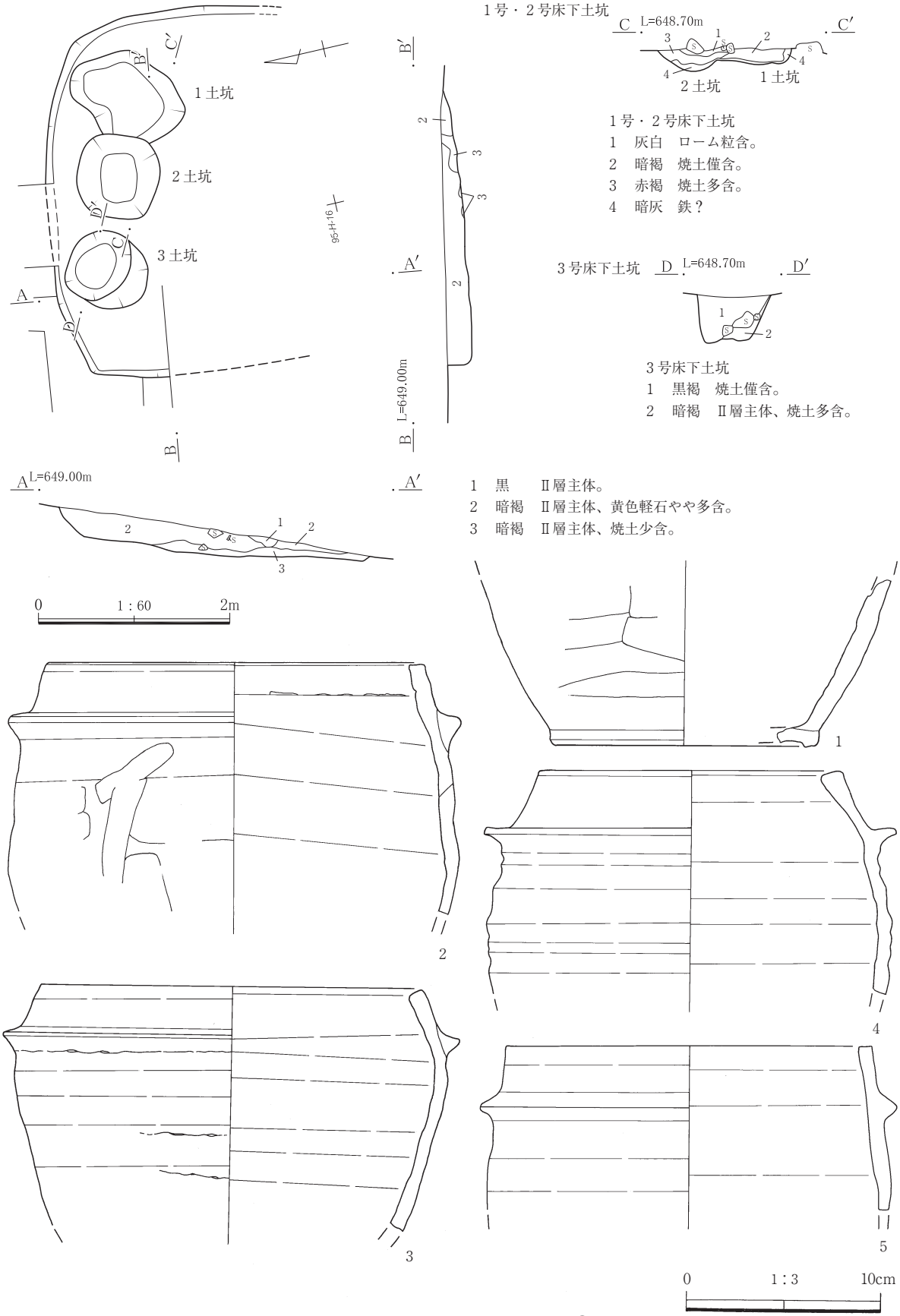
95区Ⅰ－16グリッドに位置する。重複関係は無い。遺構検出作業時にカマドの存在を確認したが、残存状態は極めて悪く、調査段階で僅かに焼土が確認されたのみであり、その痕跡からカマドの掘り方部分と判断した。カマドの向きは不明である。遺物は土師器の甕５点（90.0ｇ）、須恵器の坏６点（16.7ｇ）・羽釜８点（162.0ｇ）と僅かである。



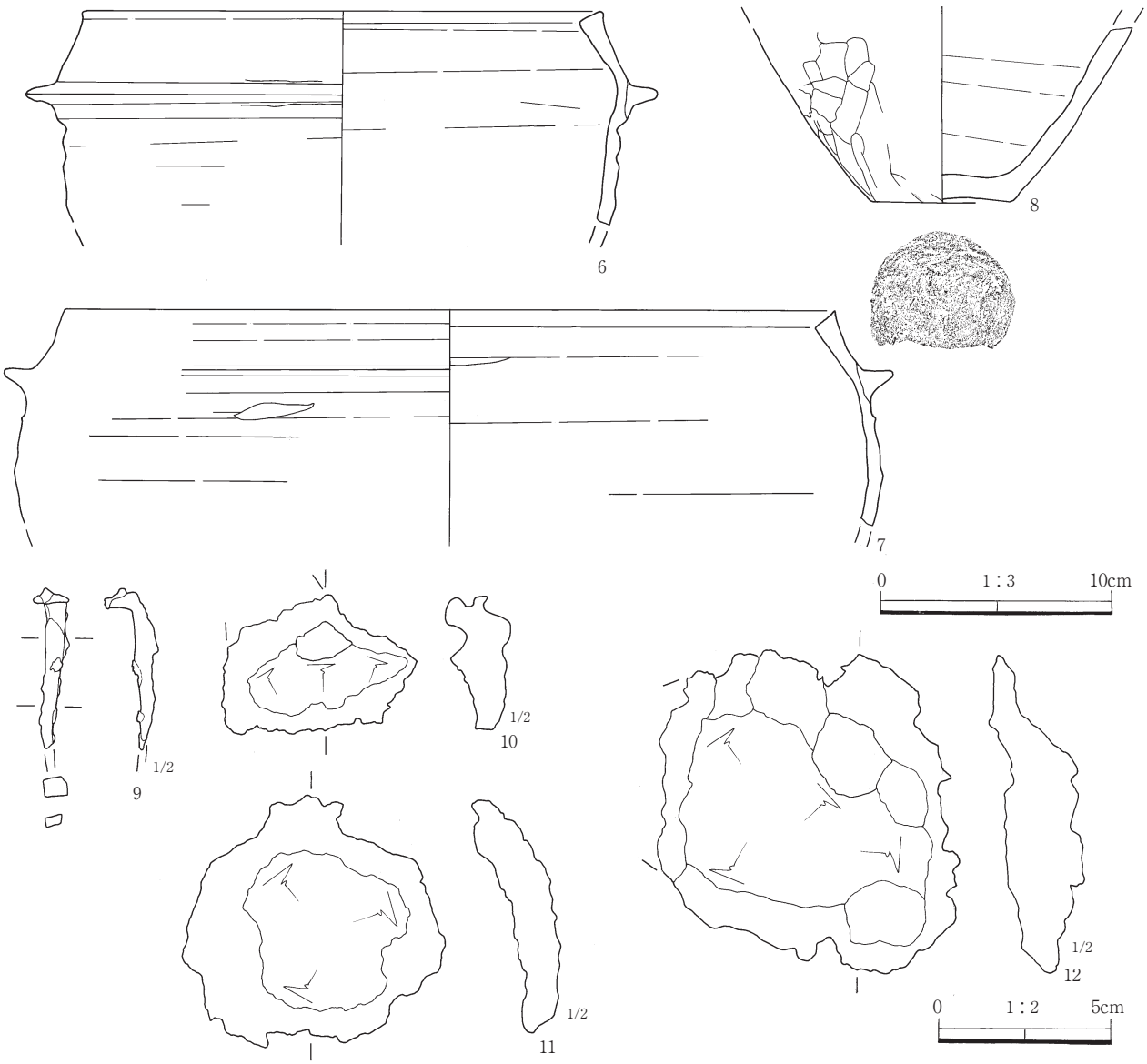
第23図　20号竪穴住居遺物

21号竪穴住居（第24・25図、写真図版６・55）

95区G－16、H－16グリッドに位置する。残存状態は悪く、北壁とその周辺だけであり、重複関係は無い。住居の規模は長軸約2.5m以上、短軸約４ｍのやや隅丸の長方形に近い。面積は約９㎡である。遺構確認面からの深さは約20～25cmで、壁は緩やかに立ち上がる。床面は多少の凸凹を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは検出されていないが、おそらくは東壁の南東部分に位置していたと考えられる。北壁に沿って３基の床下土坑が設定されている。特に、東側の１号と２号には焼土や灰が含まれており、椀形鉄滓の存在から小鍛冶の可能性が高い。柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は、土師器の坏４点（9.9ｇ）・甕４点（26.8ｇ）、須恵器の坏１点（10.9ｇ）・高台付碗１点（2.5ｇ）・甕１点（36.4ｇ）・羽釜166点（2,619.0ｇ）、灰釉陶器椀１点（2.4ｇ）、鉄釘１点、椀形鉄滓３点などが出土している。



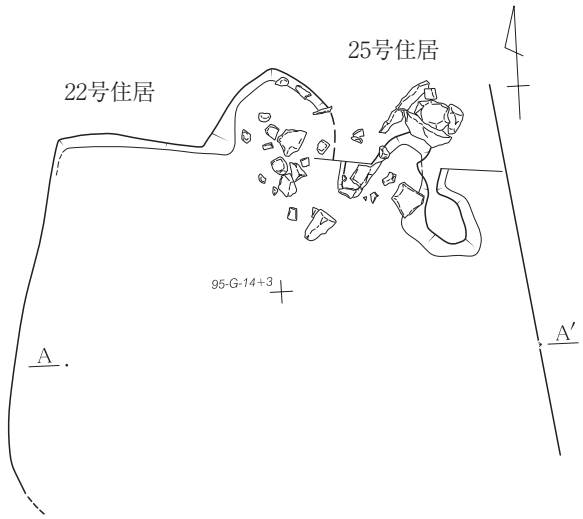
第24図　21号竪穴住居遺構・遺物①

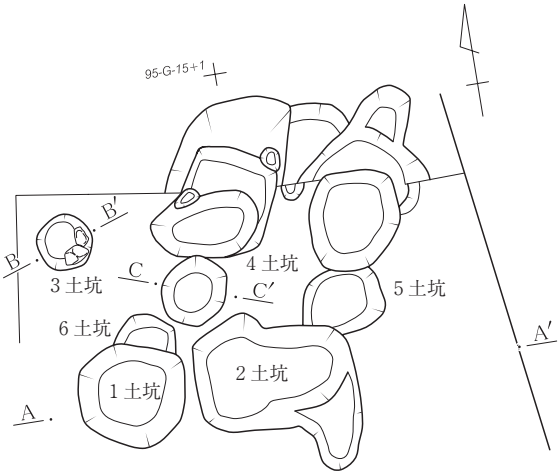


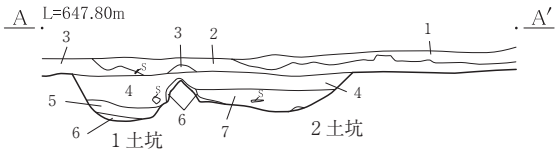
第25図　21号竪穴住居遺物②

22号竪穴住居（第26・27図、写真図版７・56）・
25号竪穴住居（第26・27図、写真図版７・56）

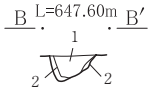
95区Ｆ－14・15、Ｇ－14・15グリッドに位置する。残存状態は悪く、北壁とその周辺だけであり、重複関係は22号竪穴住居が古く、25号竪穴住居が新しい。住居の規模は長軸約3.5m、短軸約３ｍのやや楕円気味な形状である。面積は約10.5㎡である。遺構確認面からの深さは約15～20cmで、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、22号竪穴住居が北壁のほぼ中心、25号竪穴住居が北東隅に位置する。残存状態もあまり良くなく、22号竪穴住居の袖は明確ではない。25号竪穴住居は袖や煙道、それに煙出し口部分などの構築材に石が利用されており、しっかりとしている。床下土坑が６基検出されているが、柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は、土師器の甕７点（29.3ｇ）、須恵器の坏２点（7.8ｇ）など僅かである。



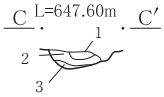




3 号床下土坑



4 号床下土坑

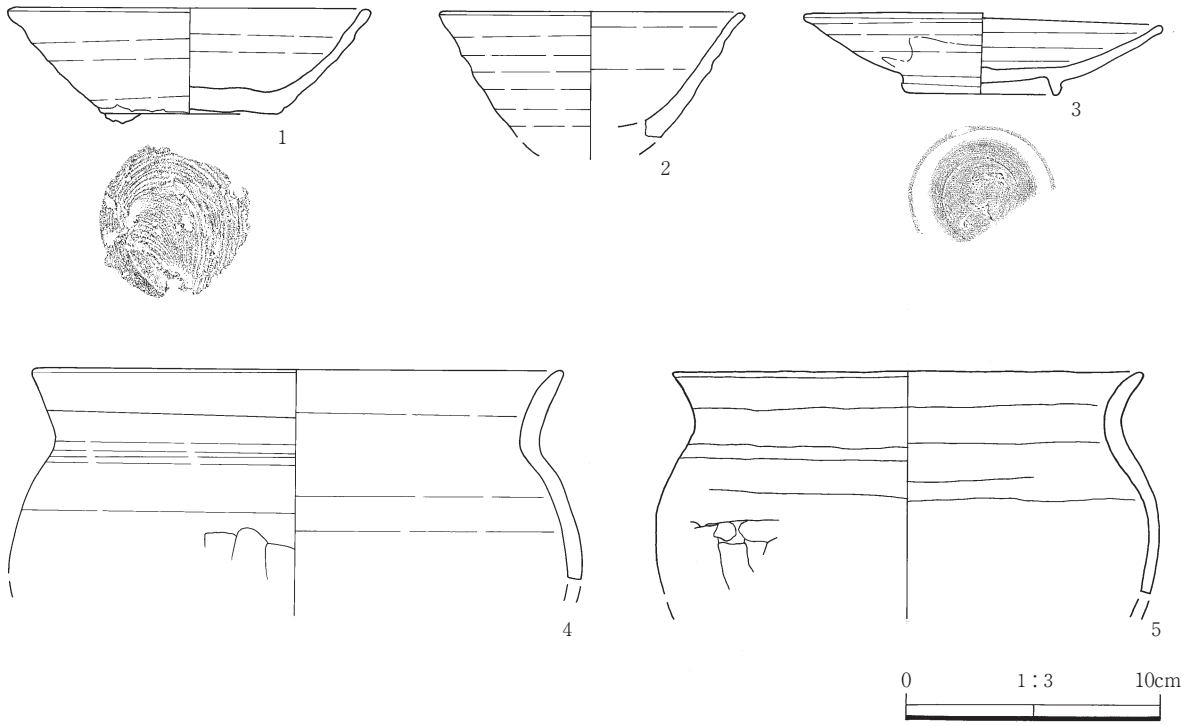


3 号床下土坑
1　黒褐　ローム粒少含。
2　暗褐　ローム粒多含。

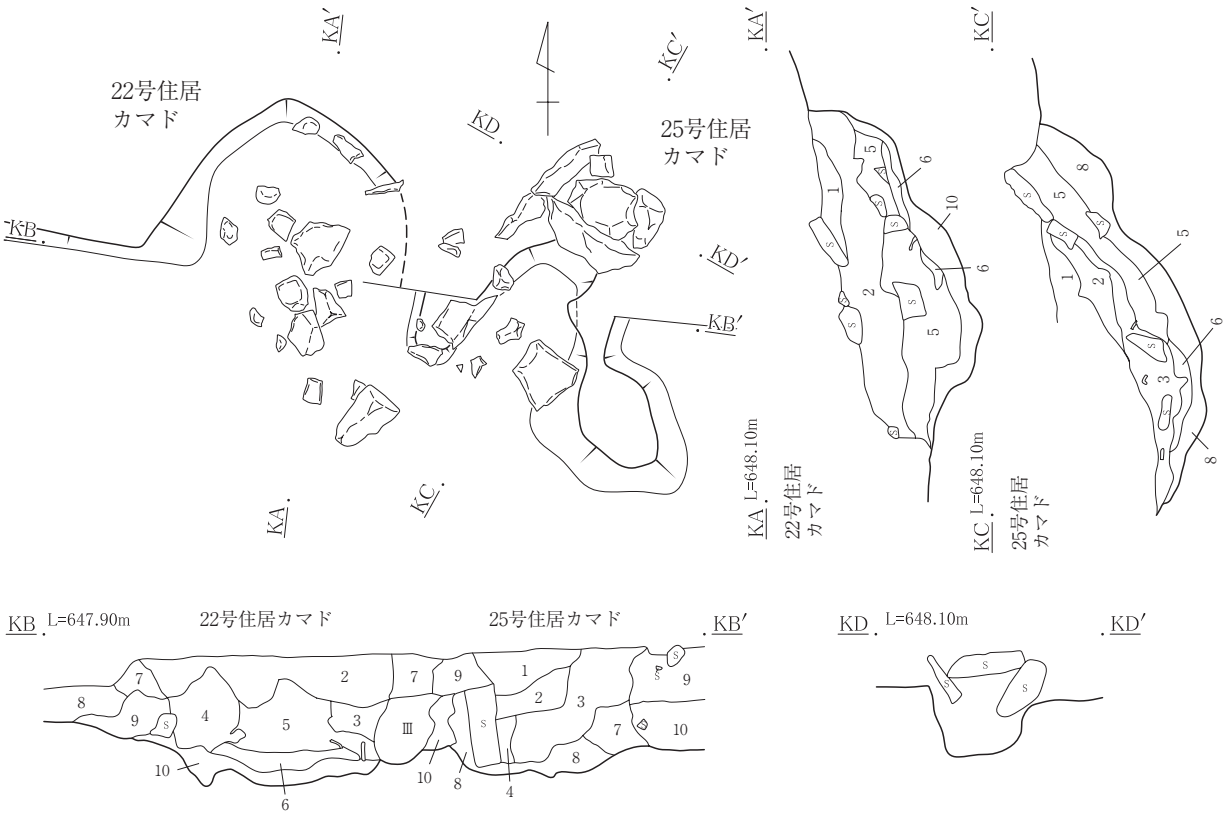
4 号床下土坑
1　黒褐　ローム粒少含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　褐　　ローム主体。

1　黒　　Ⅱ層主体。
2　暗褐　Ⅱ層主体、黄色軽石やや多含。
3　黒褐　Ⅱ層主体。
4　黒褐　白色粒僅含。
5　暗褐　ローム粒僅含。
6　黒褐　ローム粒含。
7　暗褐　ローム粒少含。

0　1：60　2m



第26図　22・25号竪穴住居遺構①・遺物



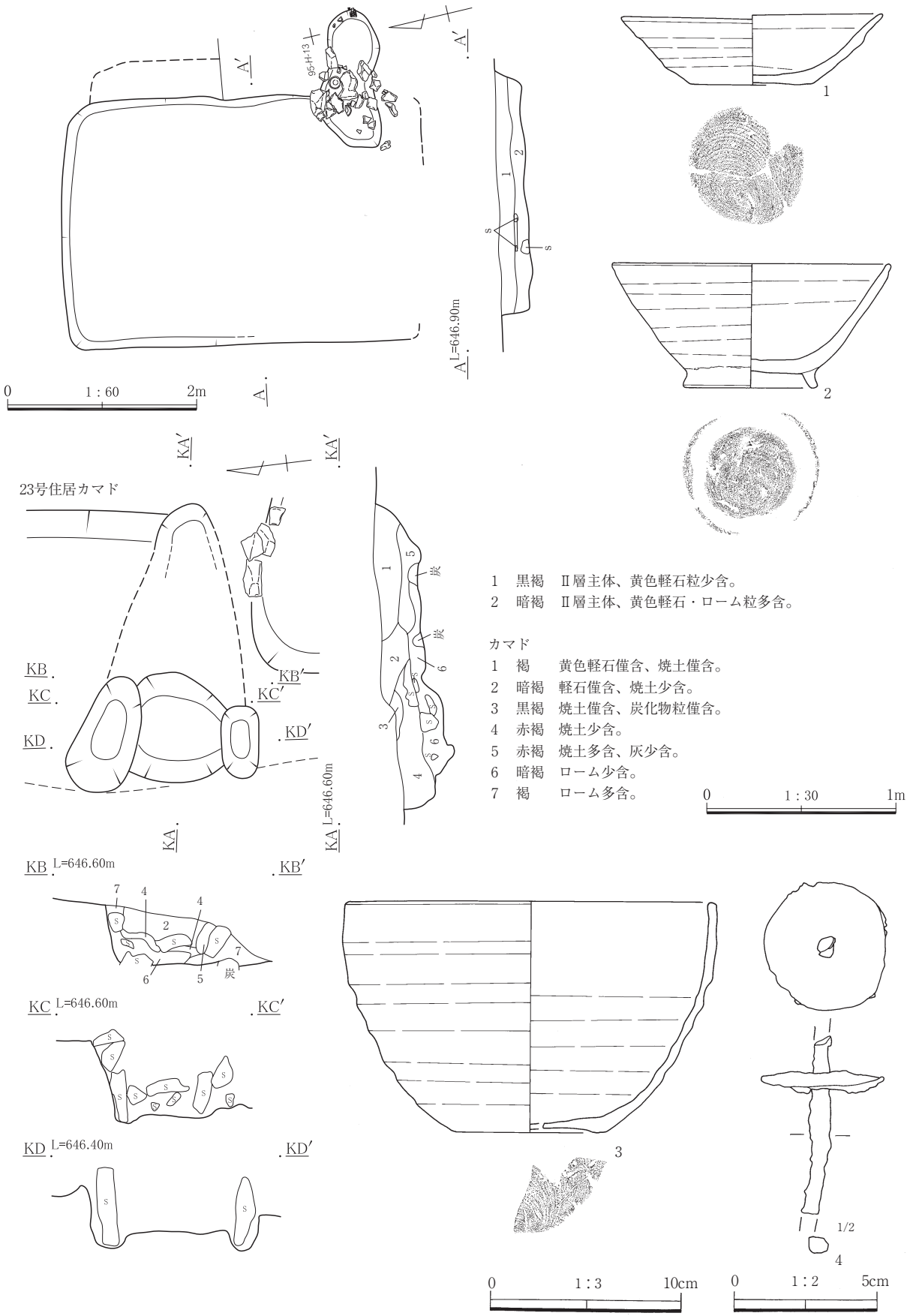
1	褐	黄色軽石僅含、焼土僅含。	6	黒褐	焼土僅含。
2	暗褐	軽石僅含、焼土少含。	7	暗褐	ローム少含。
3	黒褐	焼土僅含、炭化物粒僅含。	8	暗褐	焼土僅含、ローム多含。
4	明赤褐	焼土主体。	9	暗褐	ローム多含。
5	褐	焼土少含、灰少含。	10	褐	ローム主体。

0　1：30　1m

第27図　22・25号竪穴住居遺構②

23号竪穴住居（第28・30・31図、写真図版７・56）・24号竪穴住居（第29～33図、写真図版８・56・57）

95区G－12・13、I－12・13グリッドに位置する。重複関係では23号竪穴住居が古く、24号竪穴住居が新しい。住居の規模は23号竪穴住居が長軸約3.7m、短軸約2.7mのやや隅丸の長方形に近く、面積は10.324㎡である。24号竪穴住居は長軸約6.7m、短軸約6.2mのやや隅丸の正方形に近く、面積は39.646㎡である。遺構確認面からの深さは23号竪穴住居が約30cm、24号竪穴住居が約60cmで、壁は直立気味に立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、23号竪穴住居は北壁の北東隅に近い。袖や煙出し口部分の構築材として薄く広めの石を何枚も用いており、残存状態は良いが、右袖の一部が壊されている。煙出し口は住居の掘り込み範囲よりも外に飛び出している。24号竪穴住居は袖から煙道部分にかけて薄い石を構築材の一部に使用している。床下に複数の土坑やピットが設定されているが、明確な柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は、土師器の坏１点（5.2ｇ）・甕251点（1195.0ｇ）、須恵器の坏40点（174.0ｇ）・高台付碗16点（190.0ｇ）・甕88点（2704.4ｇ）・羽釜30点（277.2ｇ）、灰釉陶器碗４点（38.4ｇ）などが出土している。特殊な遺物として、23号竪穴住居からは鉄製の軸の残っている紡錘車、24号竪穴住居からは鉄製の鎌が出土している。



第28図　23号竪穴住居遺構①・遺物

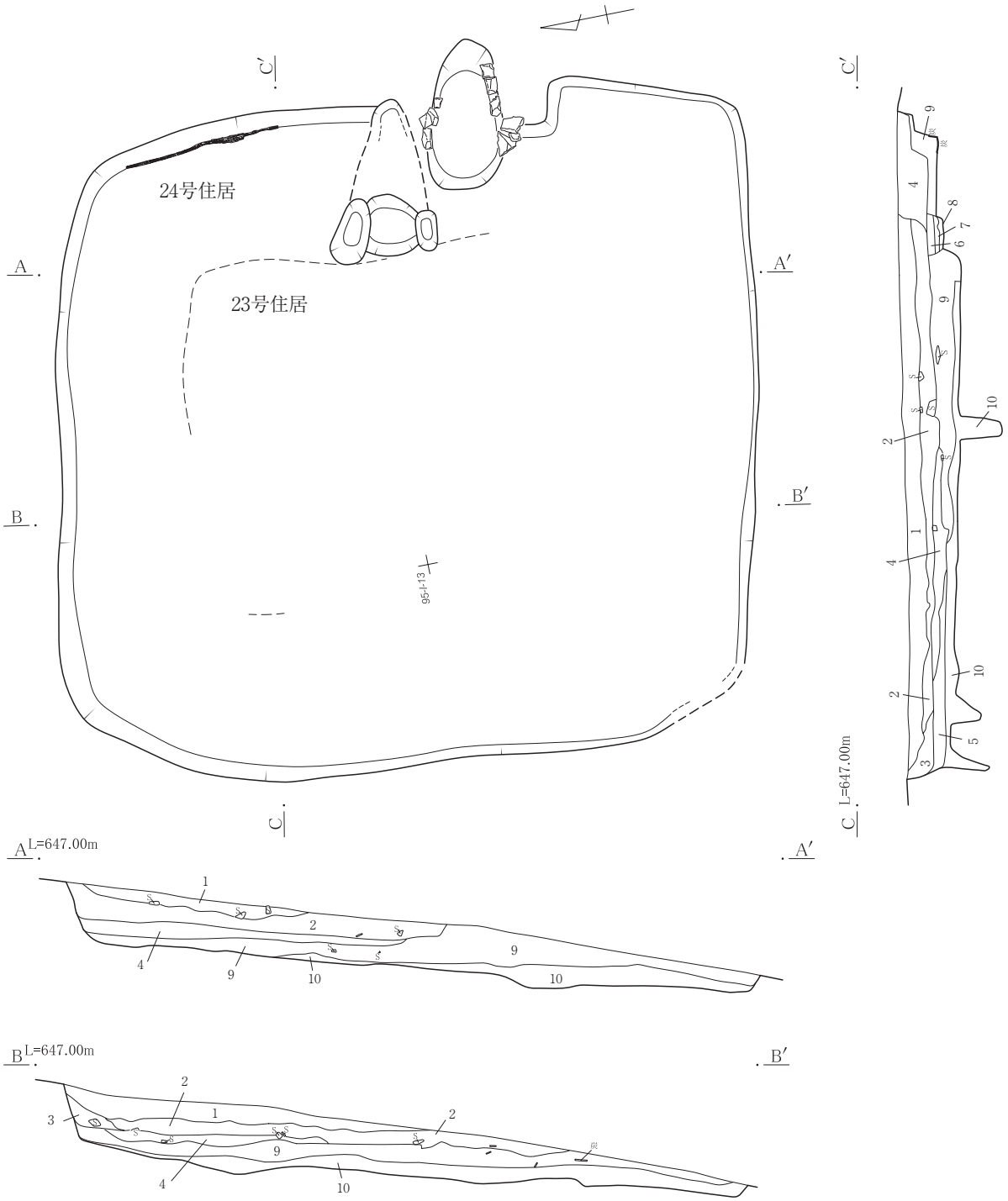
24号住居カマド

1　褐　焼土僅含。
2　暗褐　軽石僅含、焼土少含。
3　黒褐　焼土僅含、炭化物粒僅含。
4　明赤褐　焼土主体。
5　褐　焼土少含、灰少含。
6　黒褐　焼土僅含。
7　暗褐　ローム少含。
8　暗褐　ローム多含。

0　1：30　1m

0　1：3　10cm

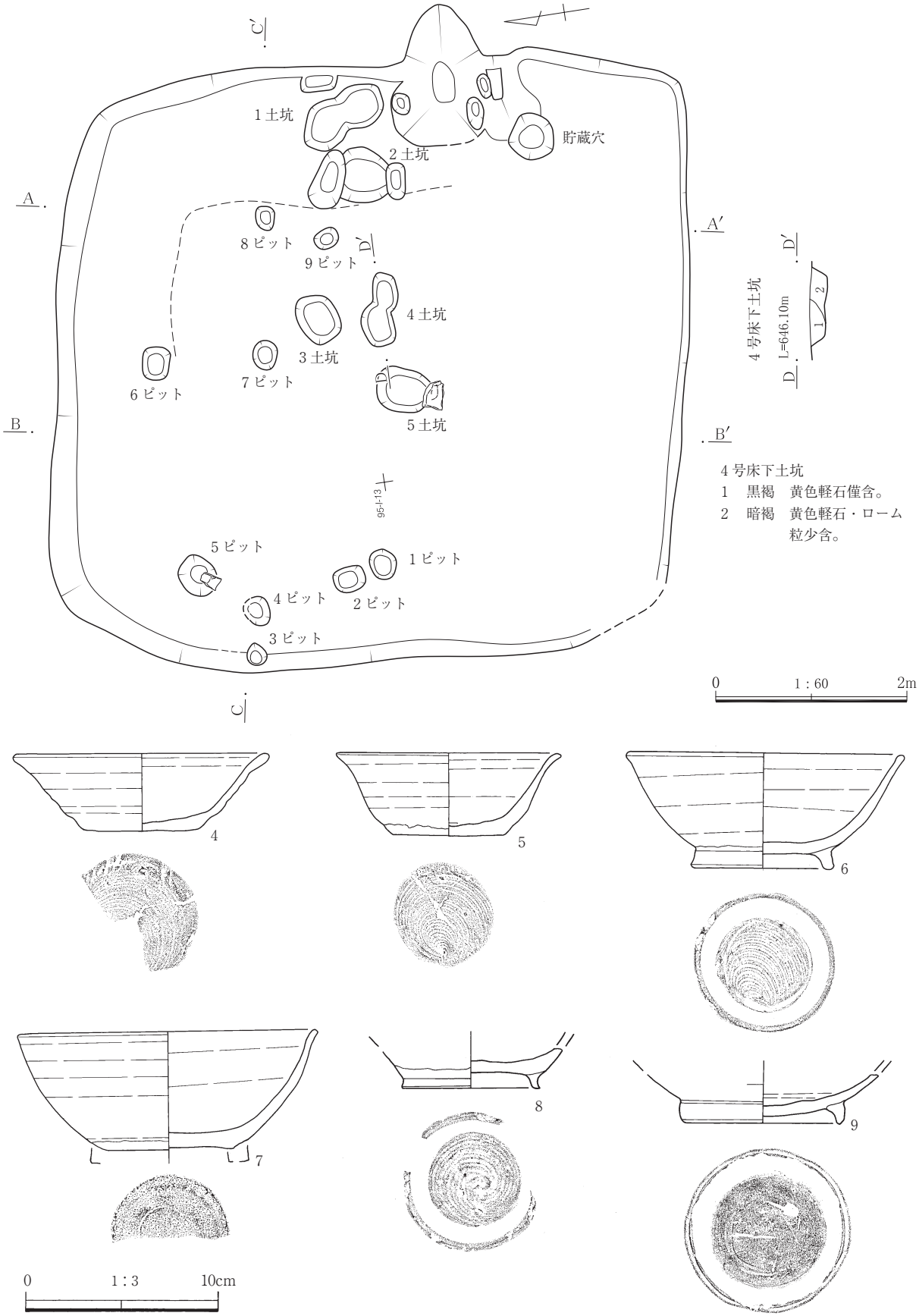
第29図　24号竪穴住居遺構①・遺物①



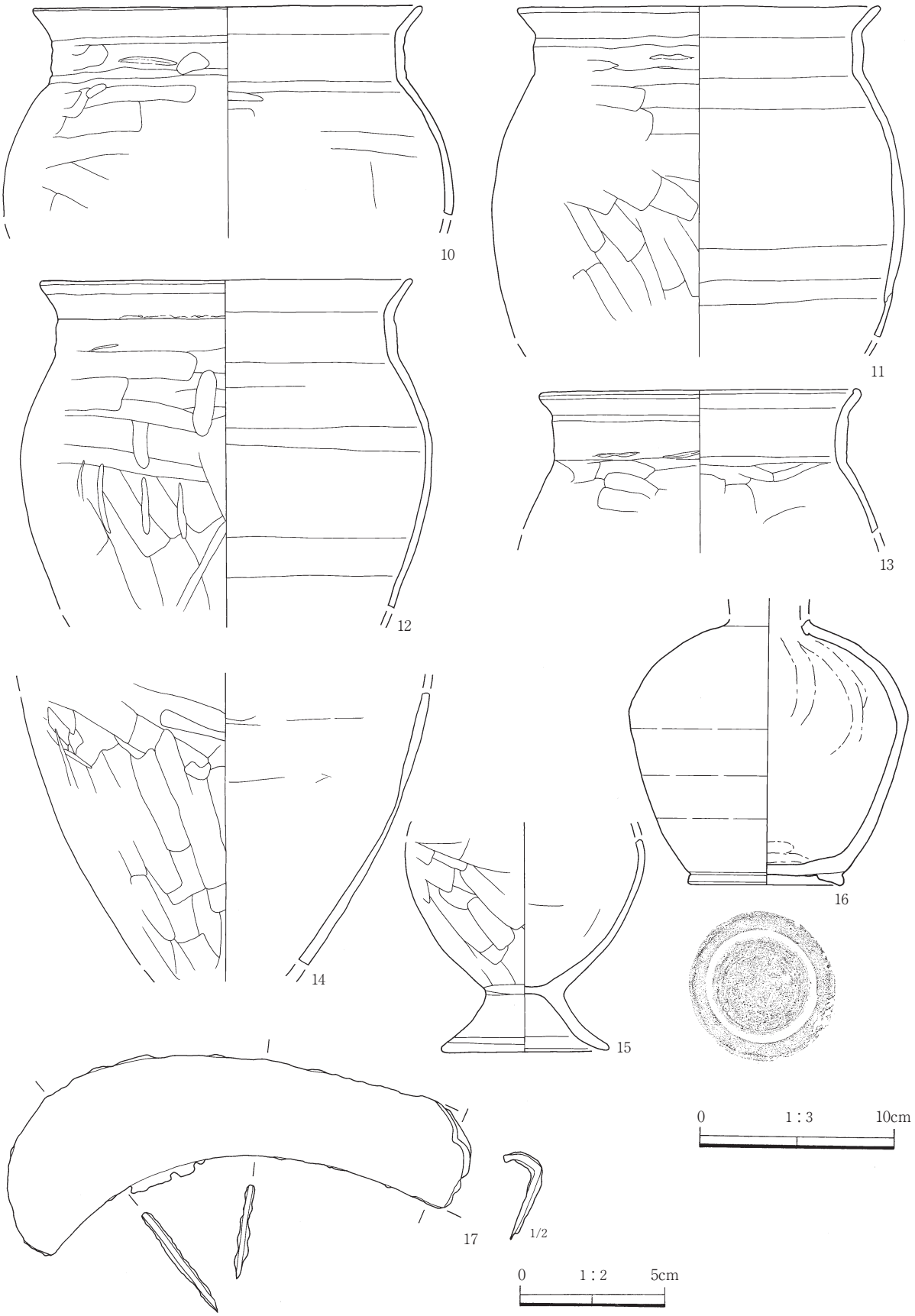
1　黒　　Ⅱ層主体。
2　暗褐　黄色軽石やや多含。
3　黒褐　Ⅱ層主体。
4　暗褐　ローム粒僅含。
5　暗褐　Ⅱ層主体。
6　暗褐　焼土僅含。
7　黒褐　Ⅲ層。
8　暗褐　Ⅲ層主体、ローム僅含。
9　暗褐　ローム少含。
10　褐　　ローム多含。

0　1：60　2m

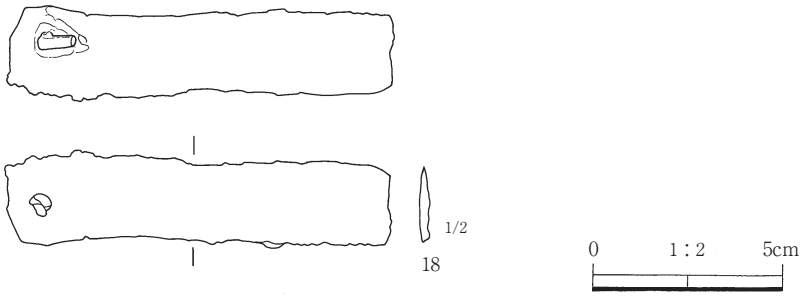
第30図　23・24号竪穴住居遺構②



第31図　23・24号竪穴住居遺構③・24号竪穴住居遺物②



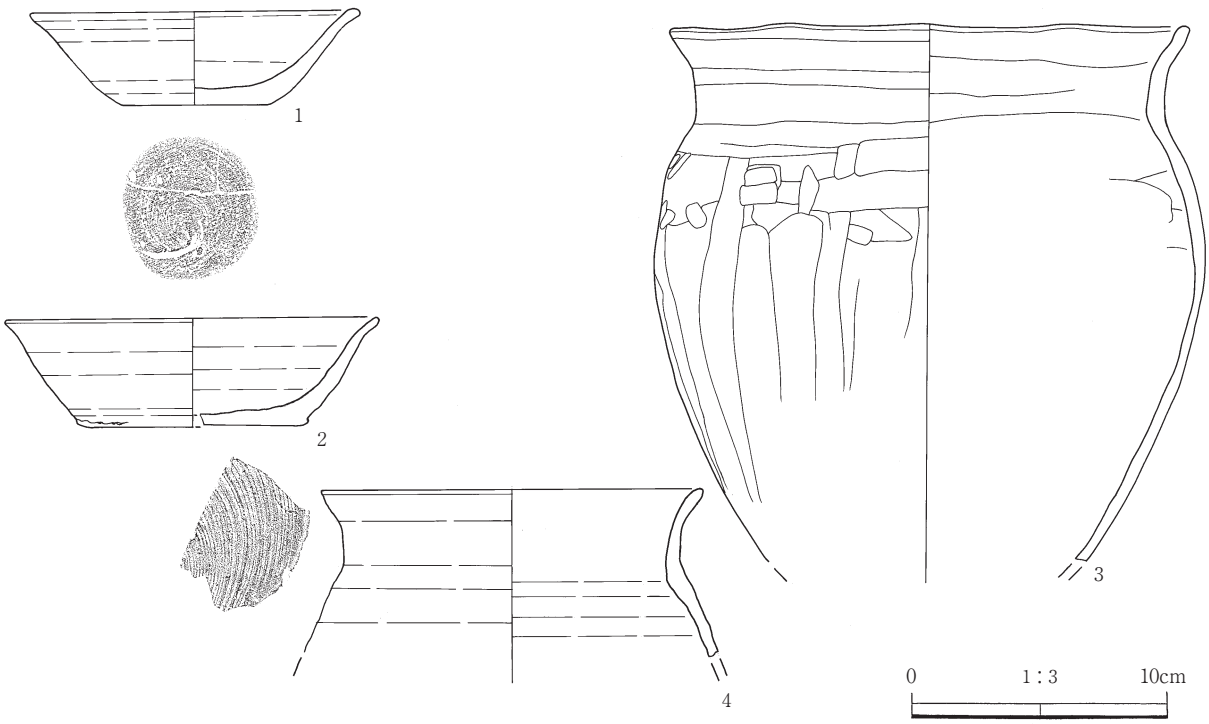
第32図　24号竪穴住居遺物③



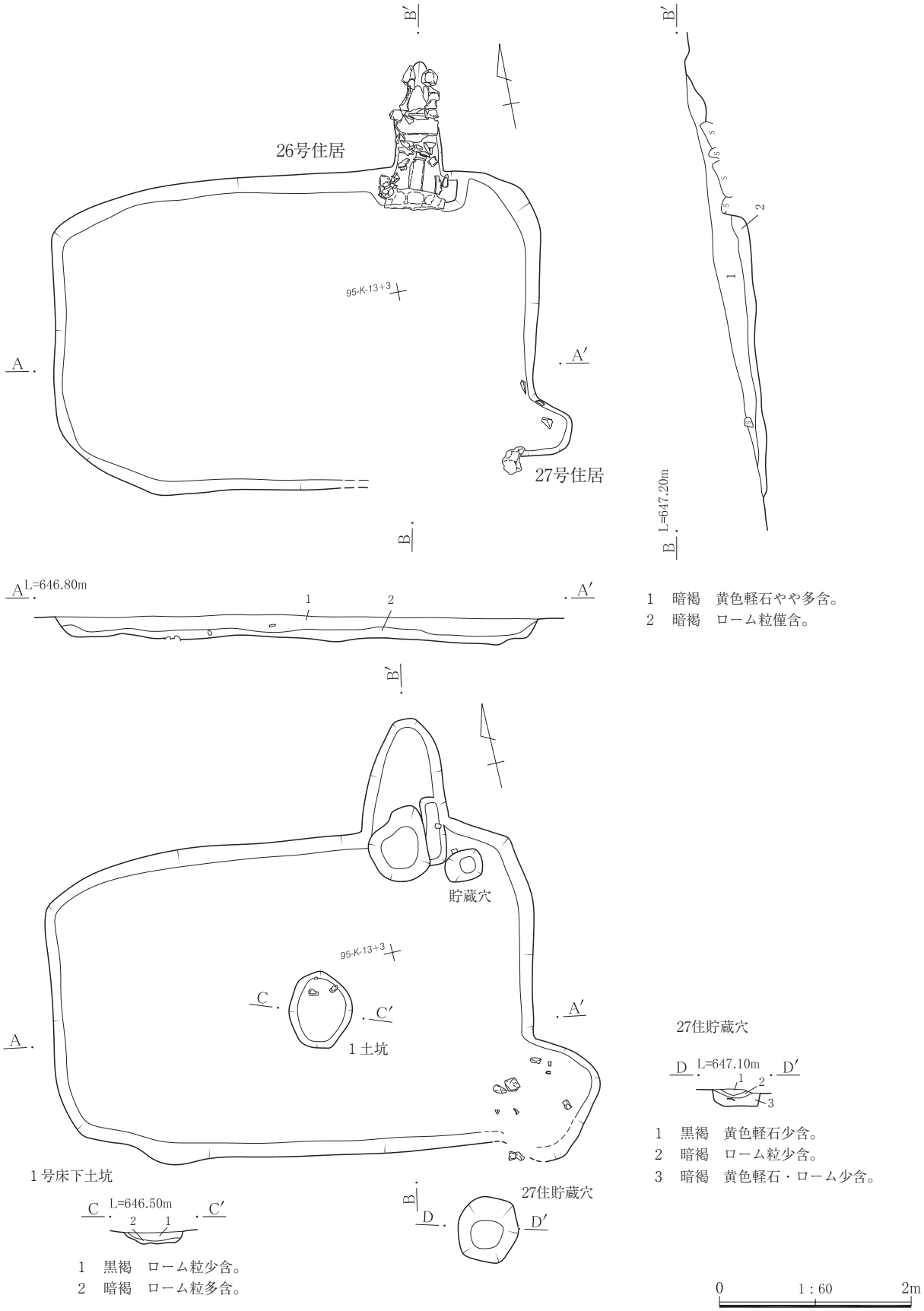
第33図　24号竪穴住居遺物④

26号竪穴住居（第34～36図、写真図版８・57）・
27号竪穴住居（第34～36図、写真図版８・57）

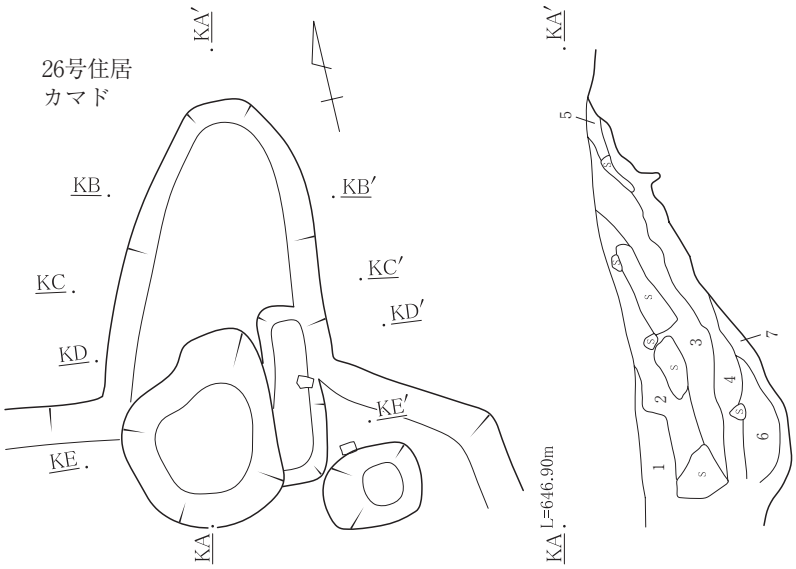
95区J－13・14～L－13・14グリッドに位置する。重複関係は27号竪穴住居が古く、26号竪穴住居が新しい。住居の規模は長軸約5.1m、短軸約3.4mのやや楕円気味な形状であり、面積は17.444㎡である。遺構確認面からの深さは約15～20cmで、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、26号竪穴住居は北壁の北東隅に近い部分に位置し、袖から燃焼部、煙道、さらには煙出し口にまで多数の石を組み合わせて構築している。27号竪穴住居は東壁の中央より南東隅付近に位置するが、残存状態はあまり良くなく、袖は明確ではない。床下の土坑が検出されているが、柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は、土師器の坏４点（13.6ｇ）・甕177点（730.9ｇ）、須恵器の坏14点（93.9ｇ）・高台付碗8点（68.9ｇ）・甕１点（36.3ｇ）などが出土している。



第34図　26・27号竪穴住居遺物

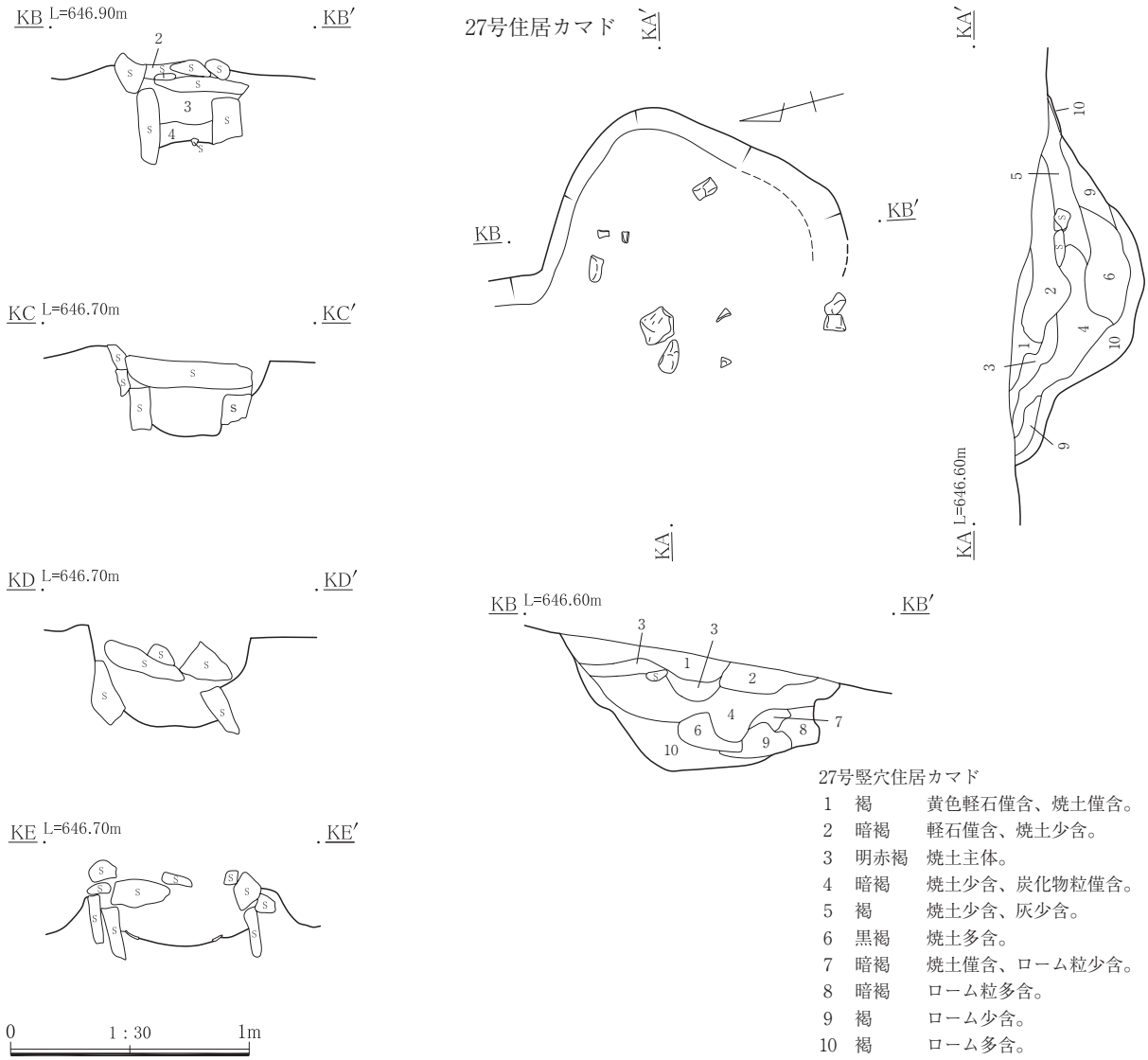


第35図　26・27号竪穴住居遺構①



26号竪穴住居カマド

1	褐	黄色軽石僅含、焼土僅含。
2	暗褐	軽石僅含、焼土少含。
3	黒褐	焼土少含、炭化物粒僅含。
4	明赤褐	焼土主体。
5	褐	焼土少含、灰少含。
6	黒褐	焼土僅含。
7	暗褐	焼土僅含、ローム粒少含。



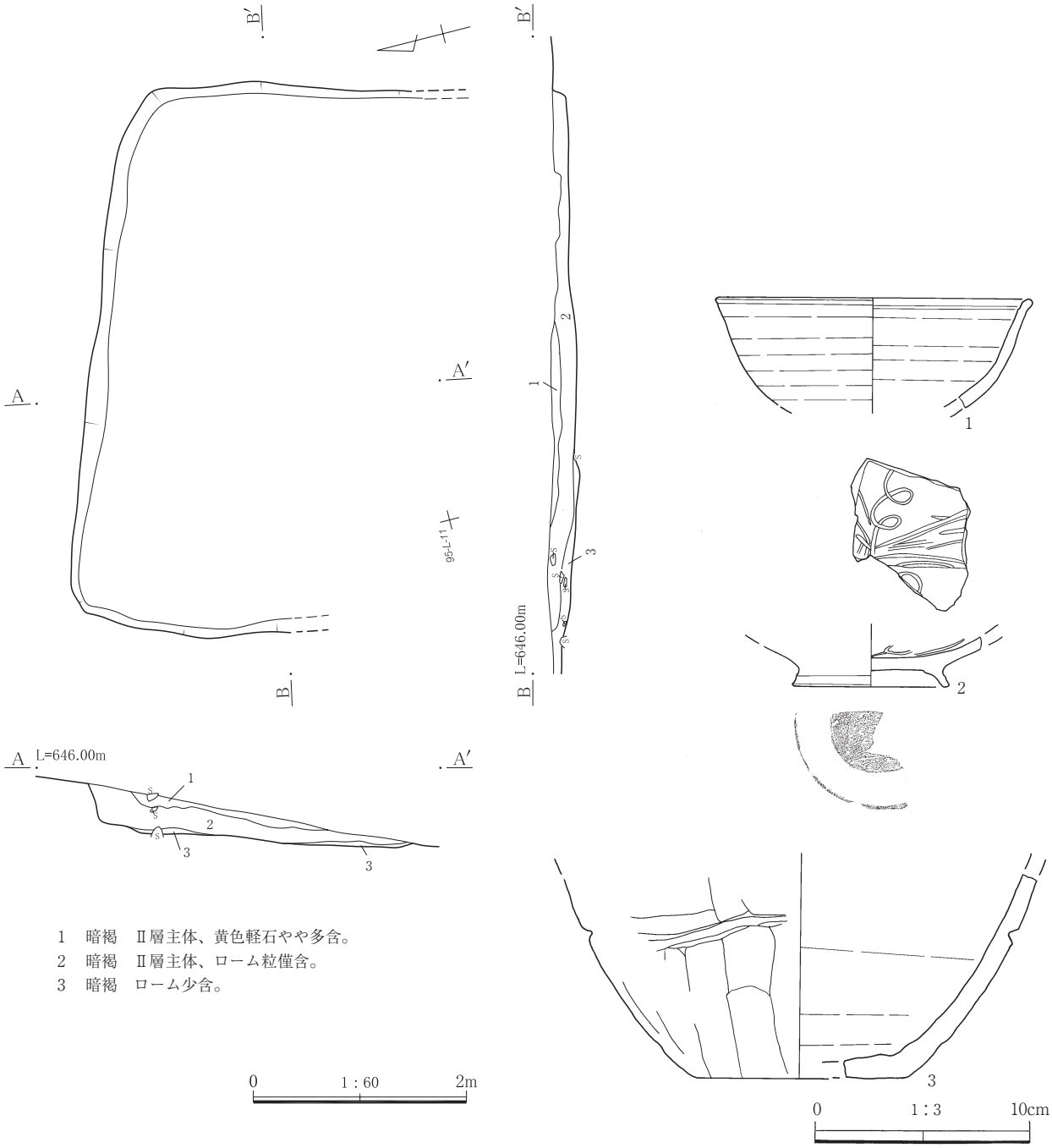
27号竪穴住居カマド

1	褐	黄色軽石僅含、焼土僅含。
2	暗褐	軽石僅含、焼土少含。
3	明赤褐	焼土主体。
4	暗褐	焼土少含、炭化物粒僅含。
5	褐	焼土少含、灰少含。
6	黒褐	焼土多含。
7	暗褐	焼土僅含、ローム粒少含。
8	暗褐	ローム粒多含。
9	褐	ローム少含。
10	褐	ローム多含。

第36図　26・27号竪穴住居遺構②

28号竪穴住居（第37図、写真図版９・57）

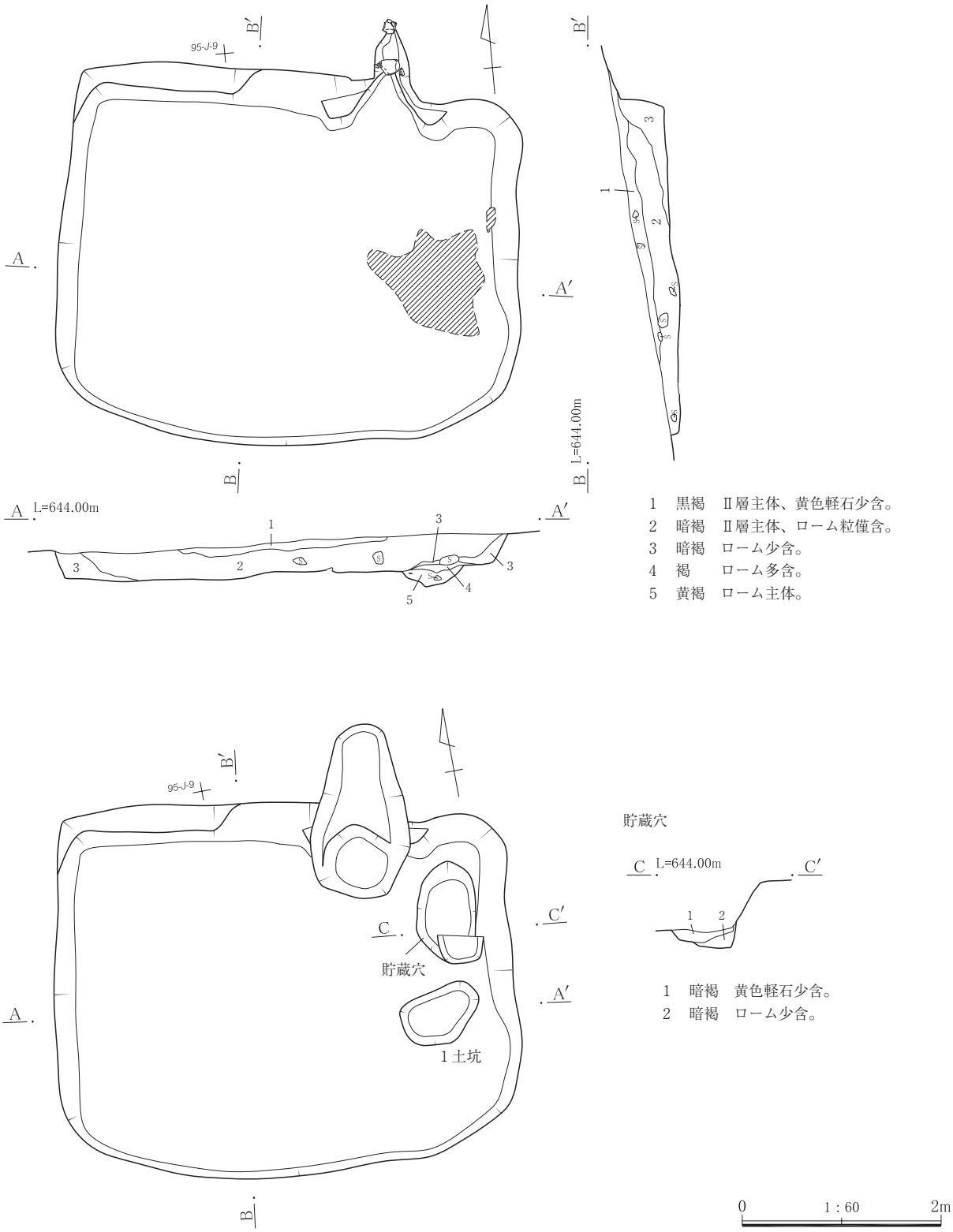
95区J－10・11、K－10・11、L－11グリッドに位置する。残存状態は悪く、北壁とその周辺だけであり、重複関係は無い。住居の規模は長軸約３m以上、短軸約5.2mのやや大型の形状である。面積は約15㎡である。遺構確認面からの深さは約30cmで、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは検出されなかった事から、東壁のほぼ中心から南東側に位置していたと考えられる。床下土坑や柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は、土師器の甕８点（34.0ｇ）、須恵器の坏３点（23.6ｇ）・甕５点（215.1ｇ）・羽釜５点（157.7ｇ）、灰釉陶器椀１点（18.6ｇ）などが出土している。



第37図　28号竪穴住居遺構・遺物

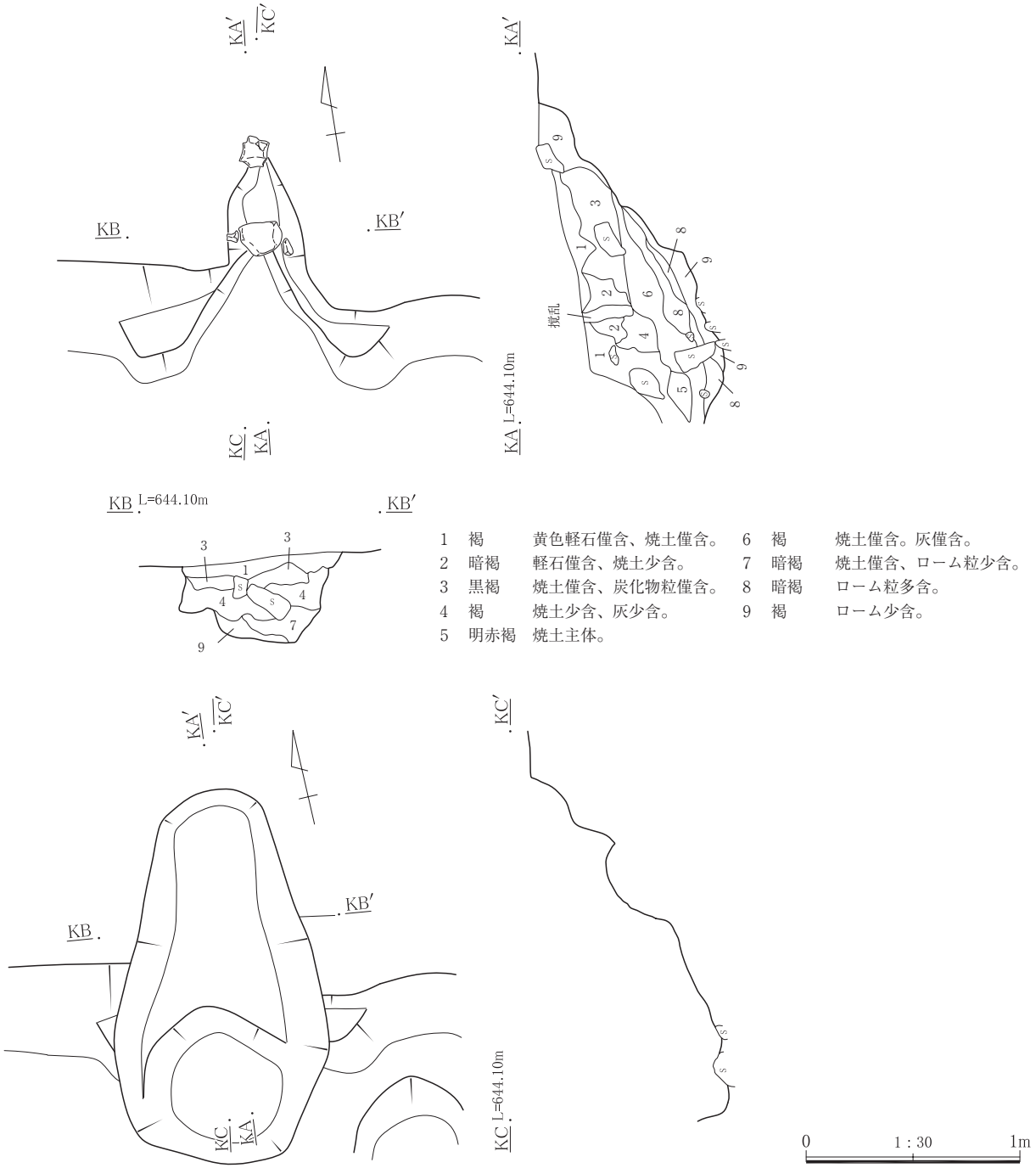
30号竪穴住居（第38～40図、写真図版９・10・58）

95区Ｉ－８・９、Ｊ－８・９グリッドに位置する。重複関係は無い。住居の規模は長軸約4.6m、短軸約3.8mの隅丸の長方形であり、面積は16.304m²である。



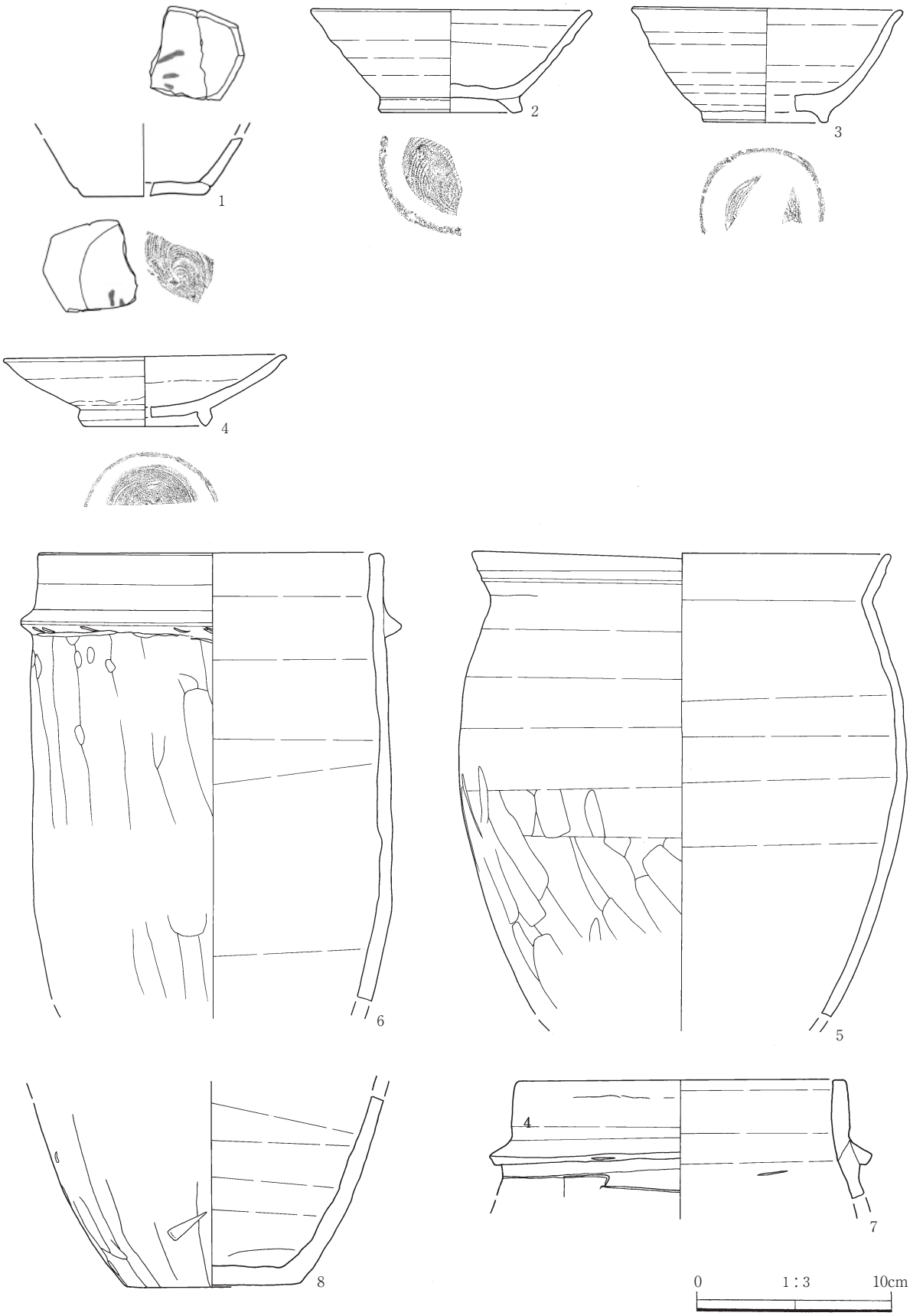
第38図　30号竪穴住居遺構①

遺構確認面からの深さは約30cmで、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、北壁のほぼ中心から北東側に位置し、北東隅部分に近い。両袖が残り、煙出し口に石を使用している。北東隅から東壁にかけて長軸103cm、短軸59cm、深さ23㎝の楕円形の貯蔵穴がある。他に土坑が１基検出されているが、柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は、土師器の坏３点（38.2ｇ）・甕88点（677.8ｇ）、須恵器の坏19点（122.0ｇ）・高台付碗11点（148.1ｇ）・甕10点（195.5ｇ）・羽釜５点（141.4ｇ）、灰釉陶器椀６点（55.6ｇ）などが出土している。



1	褐	黄色軽石僅含、焼土僅含。	6	褐	焼土僅含。灰僅含。
2	暗褐	軽石僅含、焼土少含。	7	暗褐	焼土僅含、ローム粒少含。
3	黒褐	焼土僅含、炭化物粒僅含。	8	暗褐	ローム粒多含。
4	褐	焼土少含、灰少含。	9	褐	ローム少含。
5	明赤褐	焼土主体。			

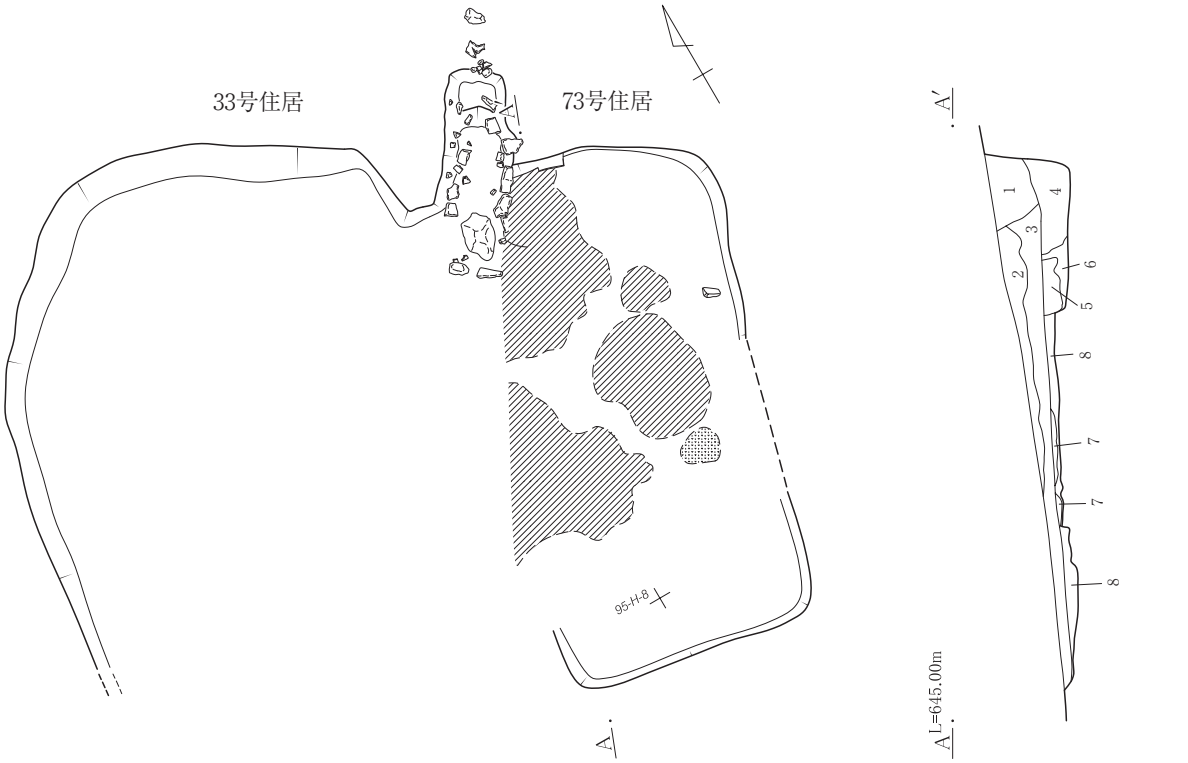
第39図　30号竪穴住居遺構②



第40図　30号竪穴住居遺物

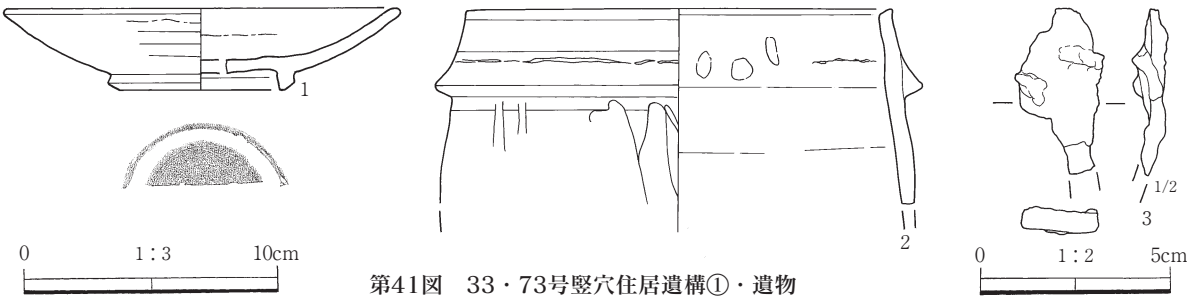
33号・73号竪穴住居（第41・42図、写真図版10・11・58）

95区G－８・９、H－８・９、I－８グリッドに位置する。住居の規模は長軸約5.9m、短軸約4.5mのやや隅丸の長方形に近い。面積は約26.5㎡である。遺構確認面からの深さは約20～30cmで、壁は直立気味に立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは北壁の中心からやや北東側に位置する。袖や煙出し口部分の構築材として石をいくつも用いており、残存状態は良いが、右袖の一部が壊されている。住居の西半分に土坑やピットがいくつも設定されているが、明確な柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は、土師器の坏104点（248.2ｇ）・甕125点（1,068.2ｇ）、須恵器の坏32点（141.8ｇ）・高台付碗２点（25.2ｇ）・甕14点（369.5ｇ）・羽釜56点（1,072.2ｇ）、灰釉陶器椀13点（95.1ｇ）、鉄鏃？などが出土している。

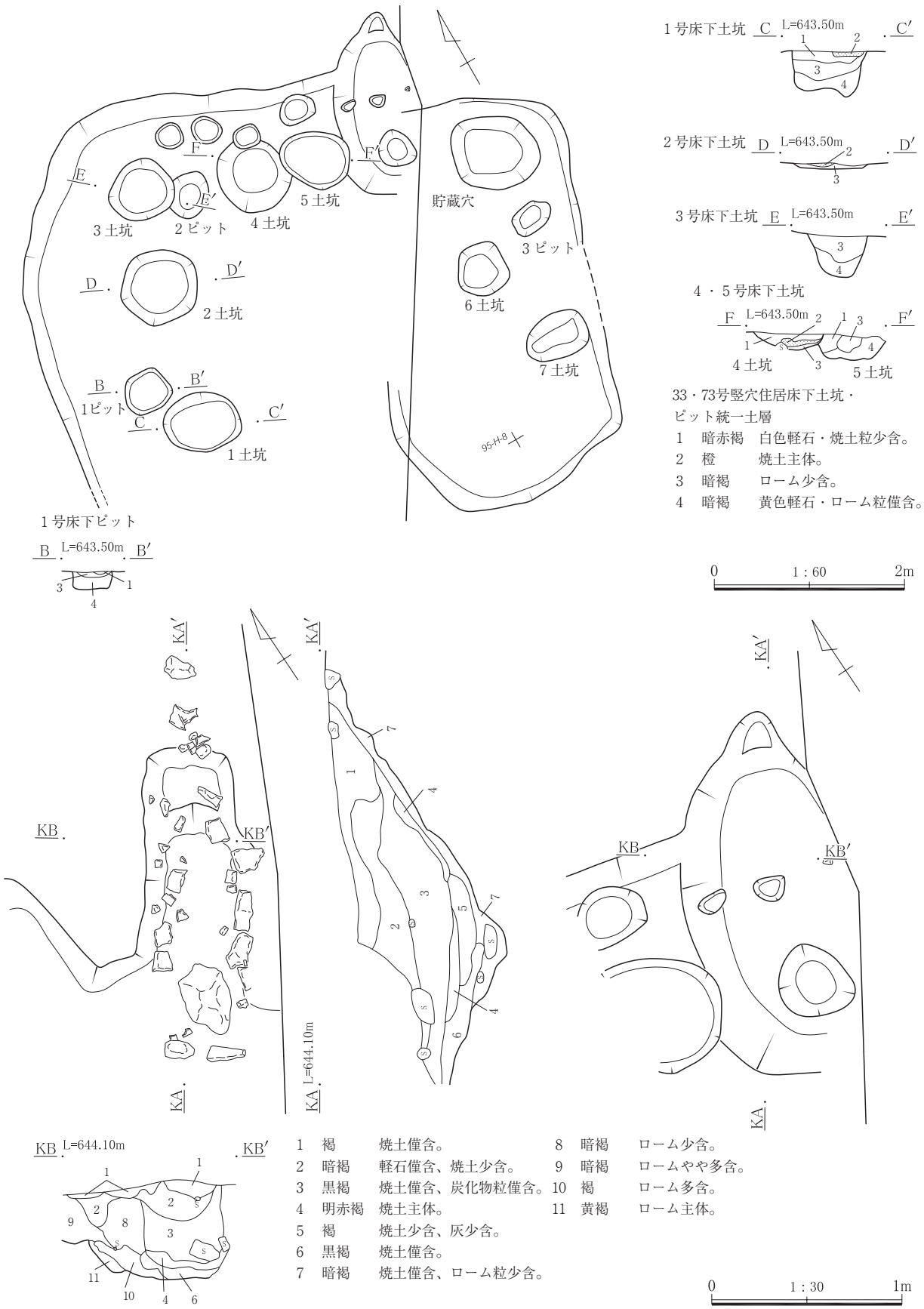


1　黒褐　Ⅱ層主体。別の遺構？
2　黒褐　Ⅱ層主体、黄色軽石やや多含。
3　暗褐　黄色軽石多含。
4　暗褐　ローム粒少含。
5　暗褐　ローム粒多含。
6　暗褐　ローム僅含。
7　褐　ローム少含。
8　褐　ローム多含。

0　1：60　2m



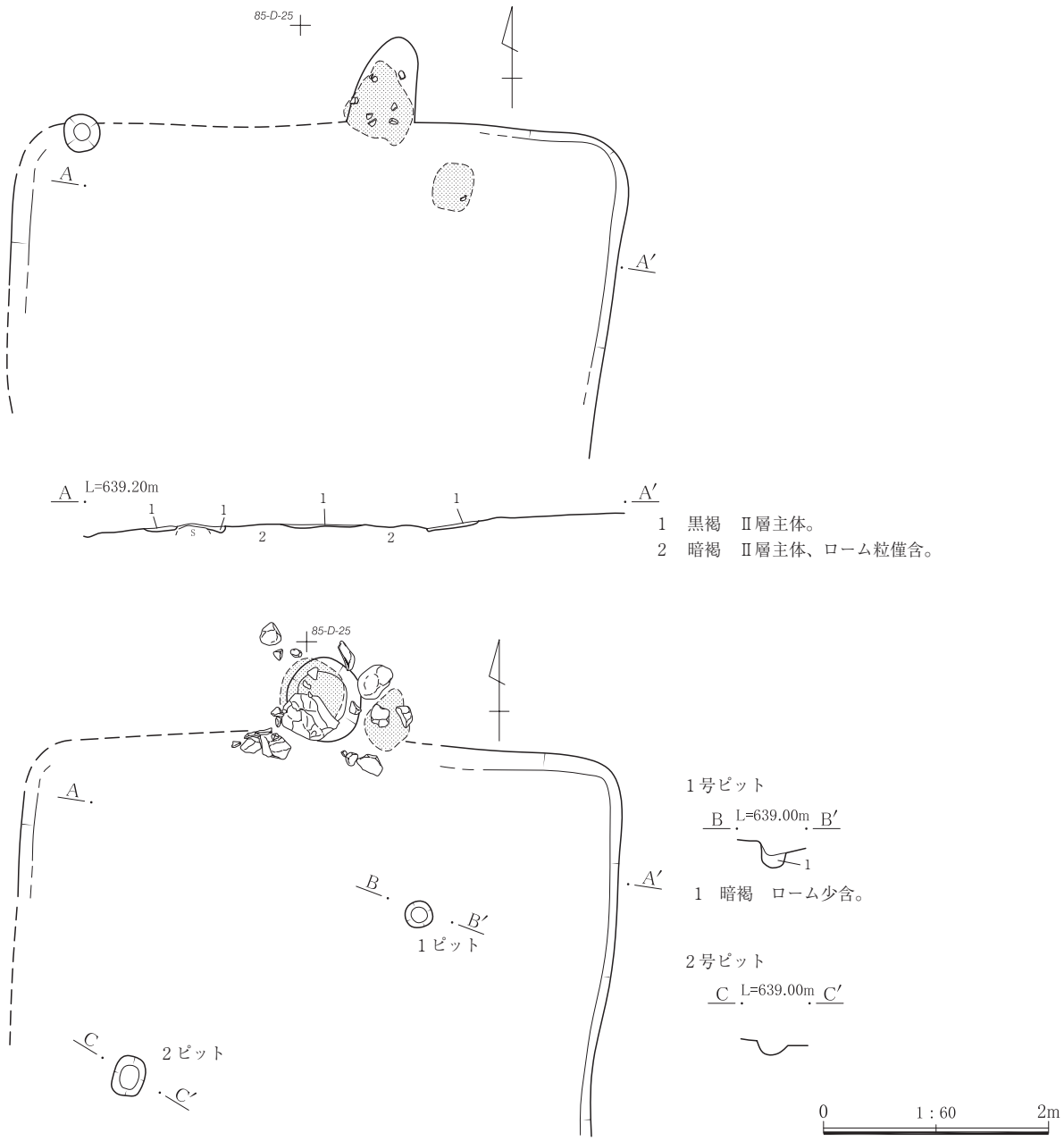
第41図　33・73号竪穴住居遺構①・遺物



第42図　33・73号竪穴住居遺構②

40号竪穴住居（第43・44図、写真図版11）

85区C－23・24、D－24グリッドに位置する。重複関係は無い。住居の規模は南壁がはっきりしないが長軸約5.2m、短軸約3.3m以上のやや隅丸の長方形？で、面積は約15㎡以上である。遺構確認面からの深さは僅かに５cm前後で、北壁と東西の壁の北側だけ僅かに残っているだけで、緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは北壁のほぼ中心に痕跡が残っているだけで、周囲に袖などの構築材と考えられる石が散乱している。煙出し口も焼土の範囲から判断した。長軸24cm、短軸23cm、深さ23㎝の円形と、長軸36cm、短軸27cm、深さ11㎝の円形の床下ピットが検出されており、その位置から柱穴と考えられる。周溝は確認出来なかった。遺物は、土師器の甕11点（70.1ｇ）、須恵器の坏２点（21.1ｇ）・羽釜１点（59.3ｇ）などが出土している。

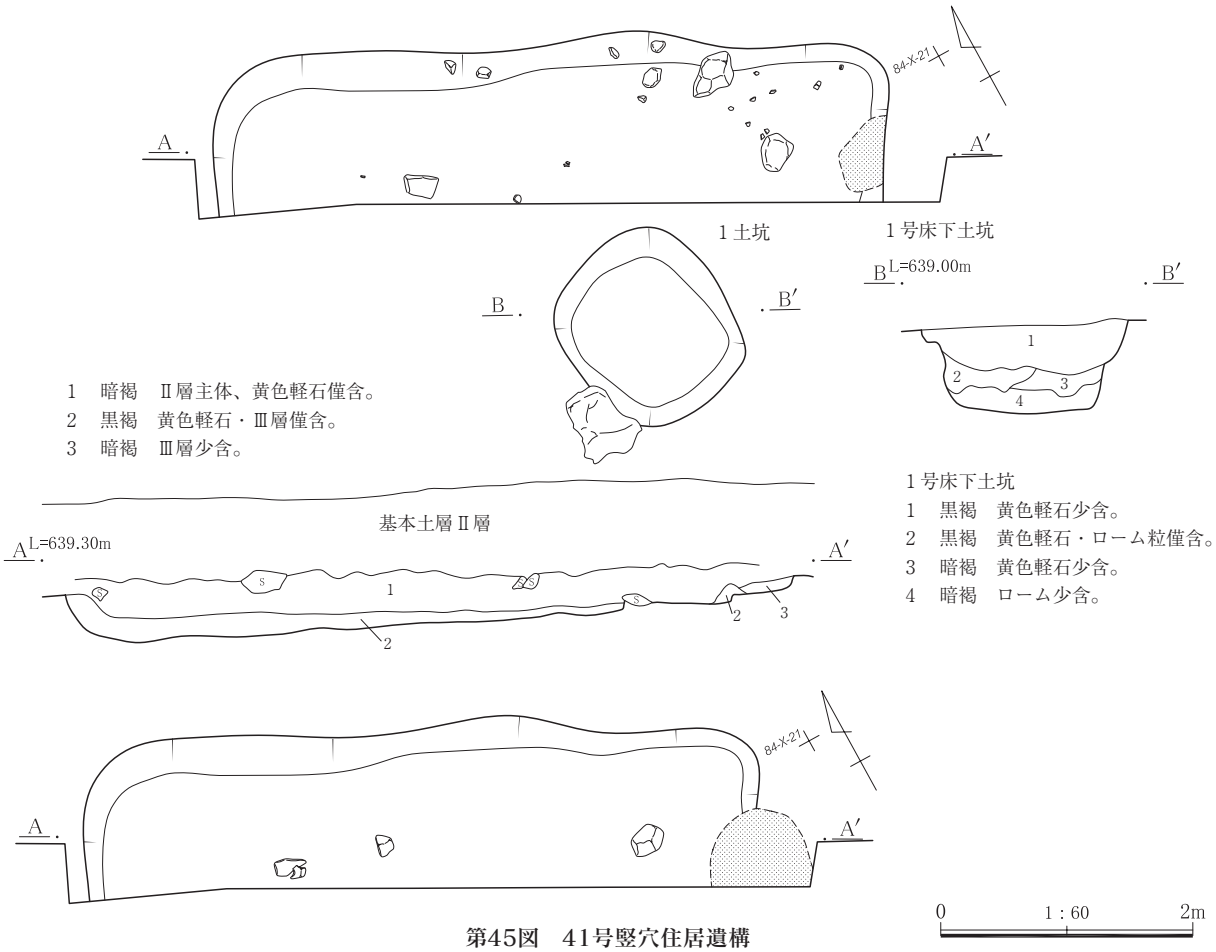


第43図　40号竪穴住居遺構①

第44図　40号竪穴住居遺構②

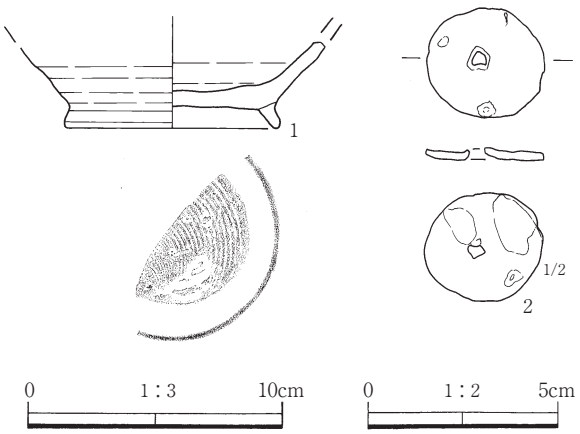
41号竪穴住居（第45・46図、写真図版11・58）

84区X－20・21、Y－21グリッドに位置する。住居の規模は長軸約３ｍ、短軸約5.4ｍのやや隅丸の長方形に近い。面積は約16㎡である。遺構確認面からの深さは約15～20cmで、壁は緩やかに立ち上が



第45図　41号竪穴住居遺構

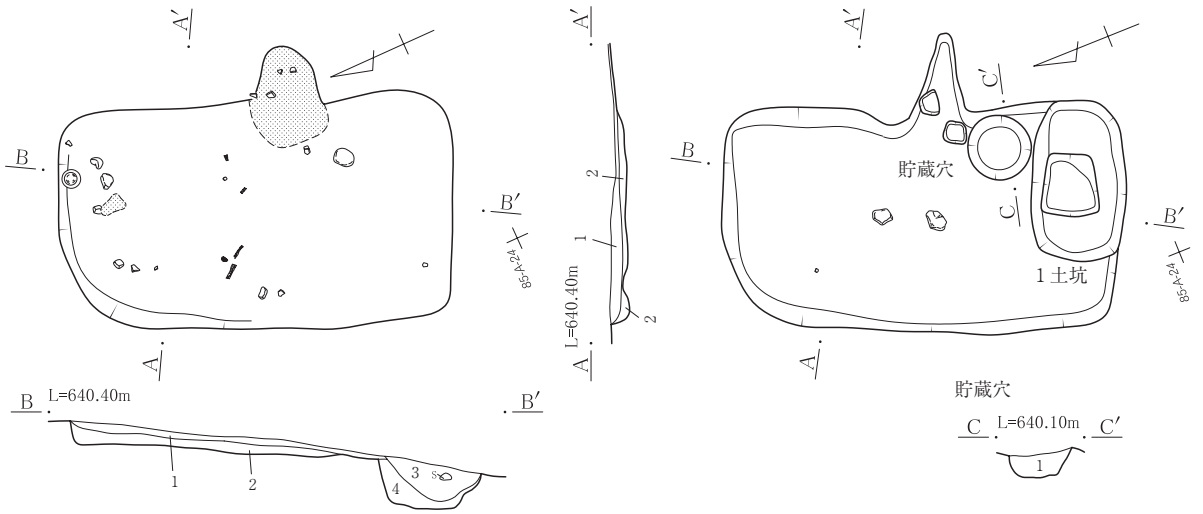
る。床面は多少の凸凹を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは確認されておらず、おそらくは東壁に設置されていたと考えられる。土坑が１基設定されている。柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は、土師器の甕18点（59.6ｇ）、須恵器の甕１点（74.6ｇ）・羽釜２点（29.7ｇ）、などが出土している。



第46図　41号竪穴住居遺物

42号竪穴住居(第47・48図､写真図版11・12・58)

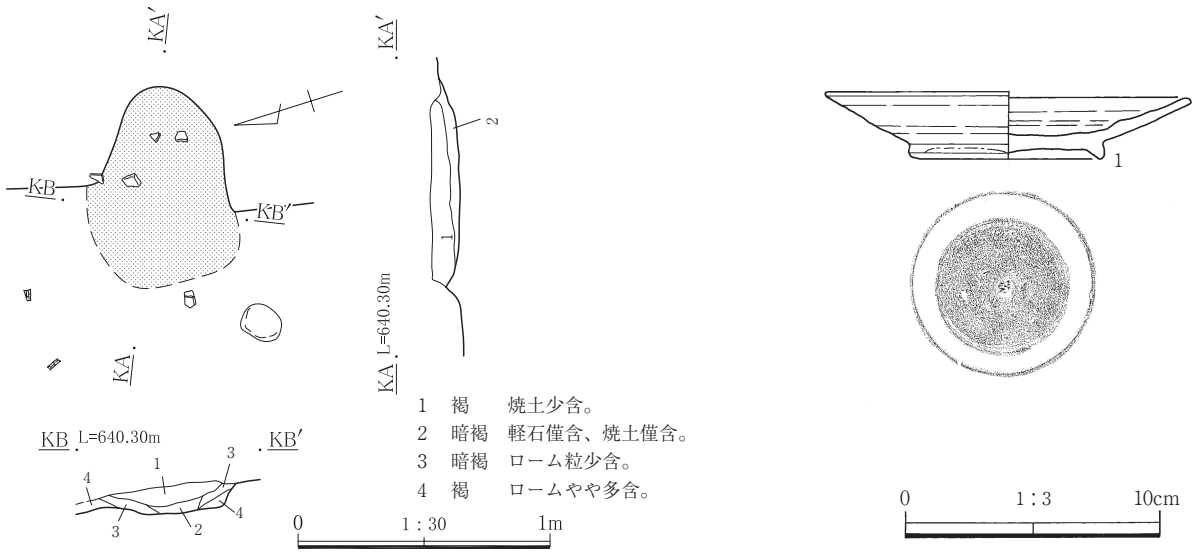
84区Ｙ－24、85区Ａ－24グリッドに位置する。重複関係は45号竪穴住居の西壁を42号竪穴住居のカマドが壊している事から、42号竪穴住居が新しく、45号竪穴住居が古い。住居の規模は長軸約3.2ｍ、短軸約1.8ｍの隅丸の長方形で、面積は5.538㎡と、形が把握出来た竪穴住居の中では最も小型である。遺構確認面からの深さは約10cm以下で、壁は掘り方でやっと確認出来た。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、東壁のほぼ中心に位置するが、焼土が広がるだけで残存状態もあまり良くなく、袖や煙出し口ははっきりせず、掘り方の痕跡から判断した。カマドの右袖の横に径50cmの円形の貯蔵穴、南東隅から南壁にかけて長軸130㎝、短軸75㎝の土坑が検出された。柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は、須恵器の羽釜５点（60.4ｇ）、灰釉陶器椀２点（10.3ｇ）と僅かである。



1　黒褐　Ⅱ層主体、黄色軽石やや多含。
2　黒褐　Ⅱ層主体、ローム少含。
3　黒褐　黄色軽石少含。
4　黒褐　黄色軽石・ローム粒僅含。

1　暗褐　黄色軽石・ローム粒少含。

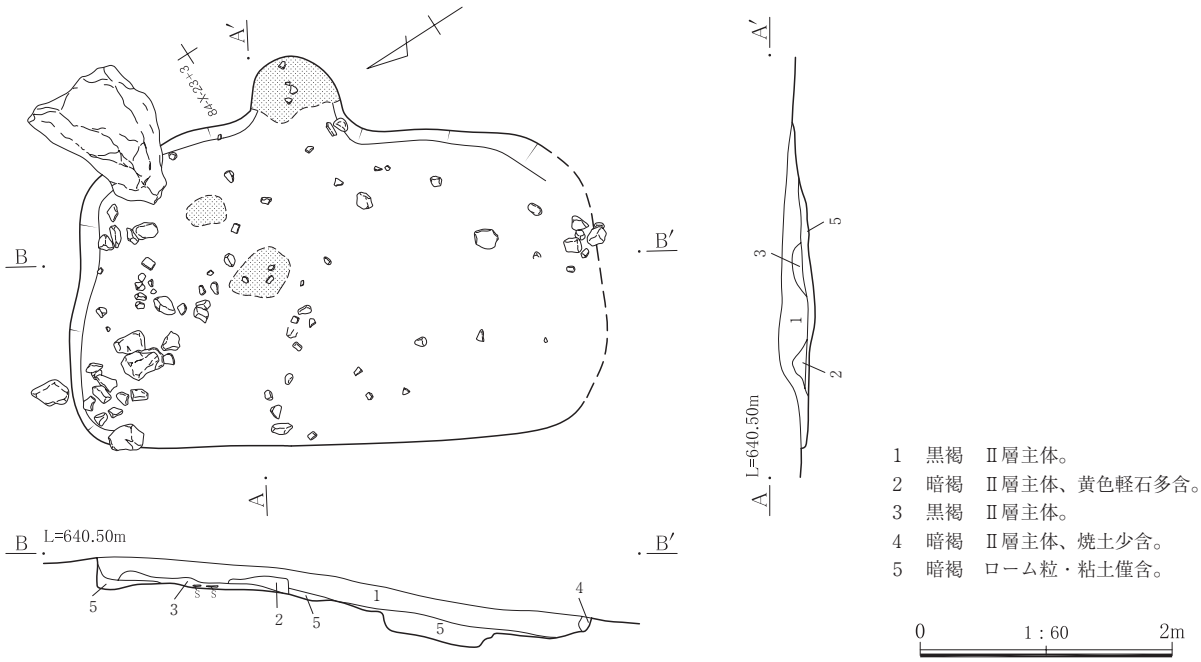
第47図　42号竪穴住居遺構①



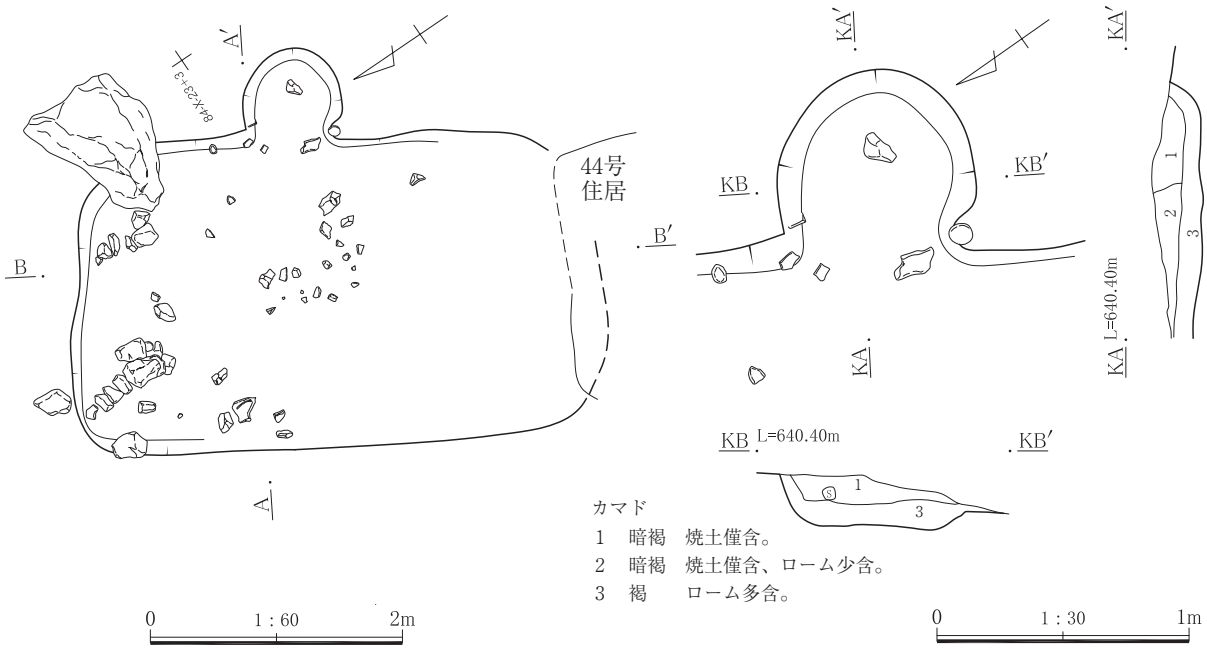
第48図　42号竪穴住居遺構②・遺物

43号竪穴住居（第49・50図、写真図版12）

84区X－23・24、Y－23グリッドに位置する。重複関係は44号竪穴住居とあるものの、南壁の残りが悪く、新旧関係が不明である。住居の規模は長軸約（4.3）m、短軸約2.5mのやや隅丸の長方形に近い。面積は10.134㎡である。遺構確認面からの深さは約15～20cmで、壁は緩やかに立ち上がる。床面は多少の凸凹を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、東壁のほぼ中心に位置する。袖や煙出し口部分の構築材として石を用いていたようだが、残存状態が悪く、袖や燃焼部が明確でない。煙出し口は住居の掘り込み範囲よりも外に飛び出している。柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は、土師器の甕14点（138.9ｇ）、須恵器の坏１点（1.4ｇ）・甕１点（70.2ｇ）・羽釜６点（109.1ｇ）、灰釉陶器椀１点（9.7ｇ）などが出土している。



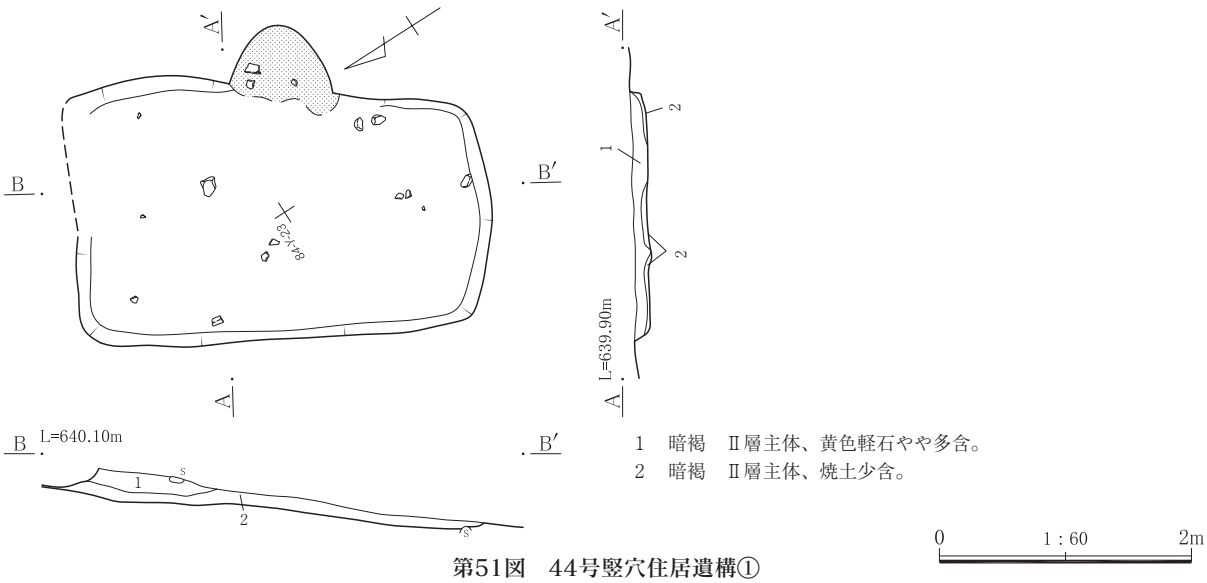
第49図　43号竪穴住居遺構①



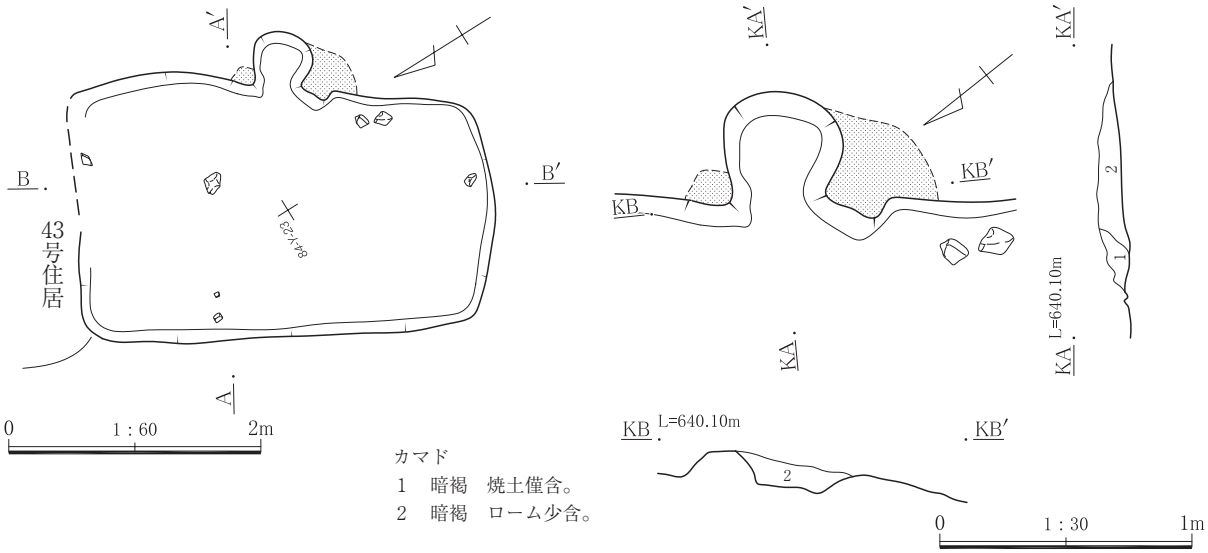
第50図　43号竪穴住居遺構②

44号竪穴住居（第51・52図、写真図版12・13）

84区X－22・23、Y－22・23グリッドに位置する。重複関係は44号竪穴住居とあるものの、北壁の残りが悪く、新旧関係が不明である。住居の規模は長軸約3.30m、短軸約2.2mのやや隅丸の長方形に近い。面積は6.688㎡である。遺構確認面からの深さは約15～20cmで、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。床面は多少の凸凹を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、東壁のほぼ中心に位置する。焼土が広がるだけで残存状態もあまり良くなく、袖や煙出し口ははっきりせずに、掘り方の痕跡から判断した。柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は、土師器の甕９点（107.1ｇ）と僅かである。



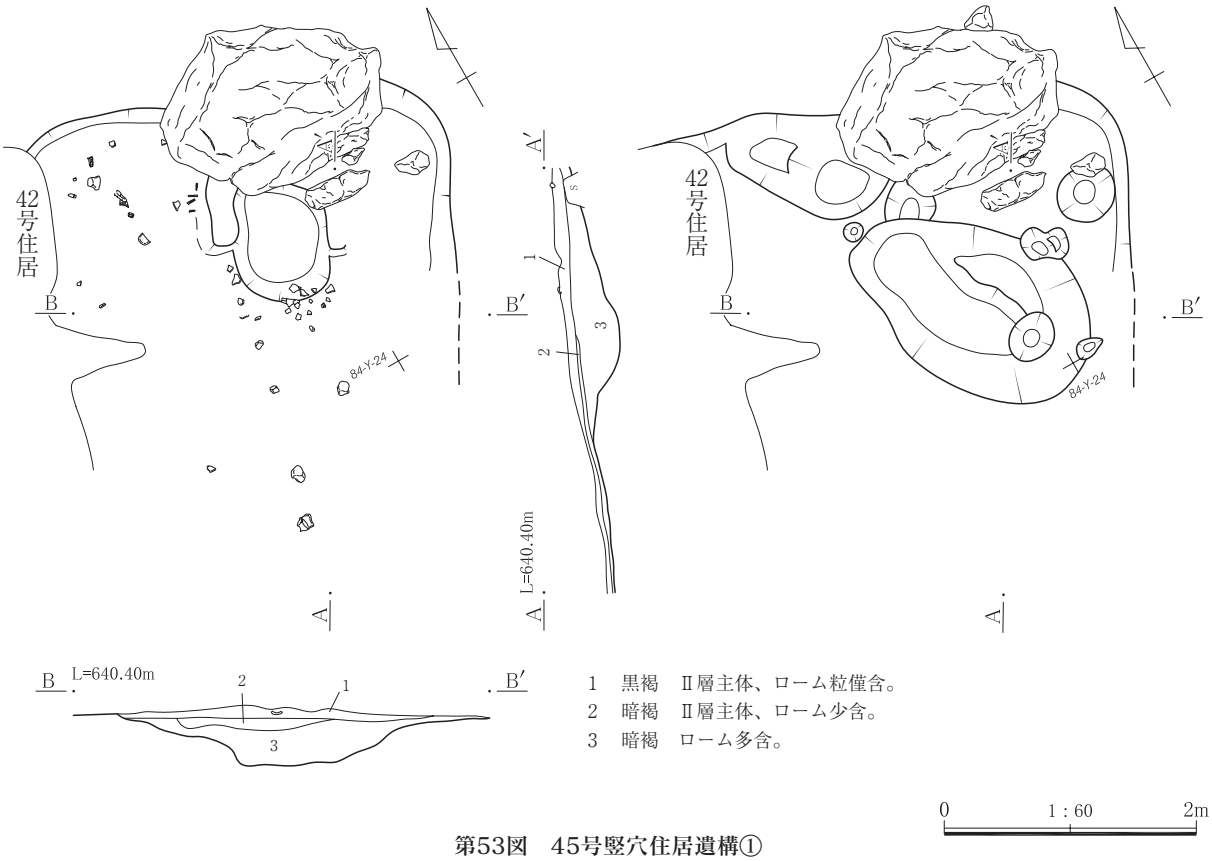
第51図　44号竪穴住居遺構①



第52図　44号竪穴住居遺構②

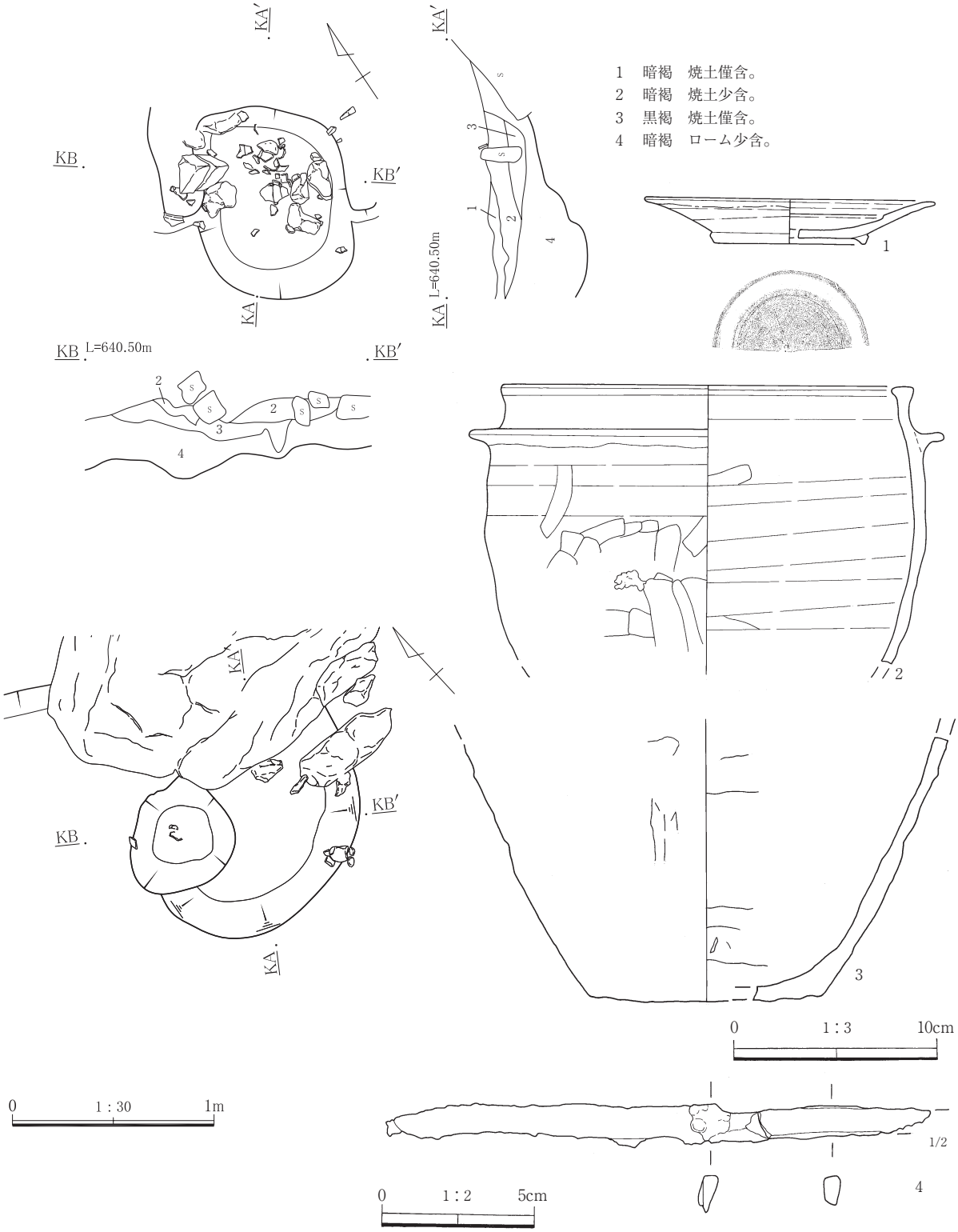
45号竪穴住居（第53・54図、写真図版13・59）

84区X－24、Y－24グリッドに位置する。重複関係は45号竪穴住居の西壁を42号竪穴住居のカマドが壊している事から、42号竪穴住居が新しく、45号竪穴住居が古い。住居の規模は長軸約3.2m、短軸約(2.5)mのやや隅丸の長方形に近い。面積は約7.9m²以上である。遺構確認面からの深さは約15～20cmで、壁は緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、北



第53図　45号竪穴住居遺構①

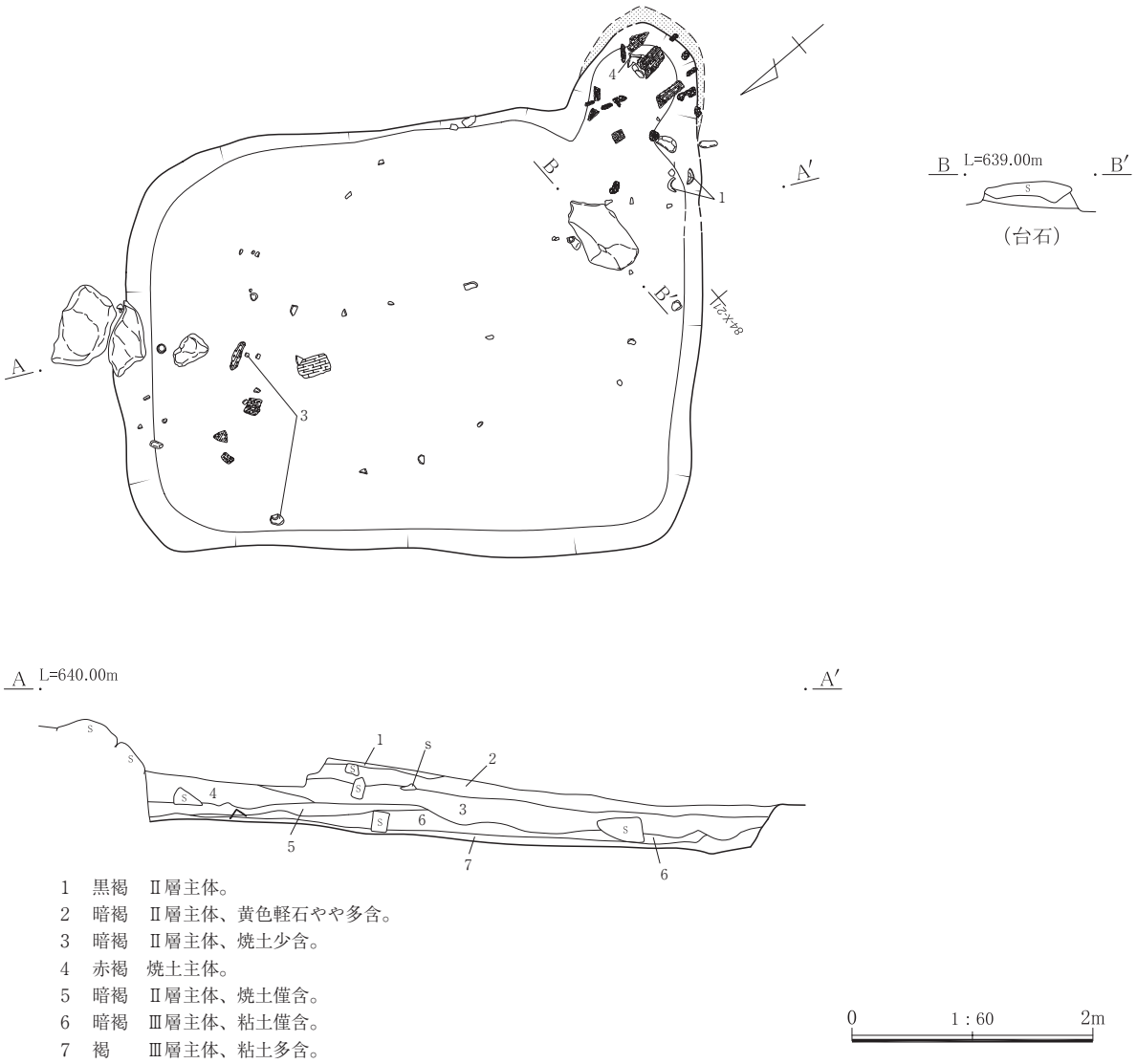
壁部分に存在する２ｍの大きさの転石の南側に位置し、残存状態が悪い上に、煙出し口は住居内に位置したという事は、不自然さを感じる。土坑やピットが設定されているが柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は、須恵器の高台付碗１点（6.0ｇ）・甕２点（98.7ｇ）・羽釜159点（2573.1ｇ）、鉄製の刀子などが出土している。



第54図　45号竪穴住居遺構②・遺物

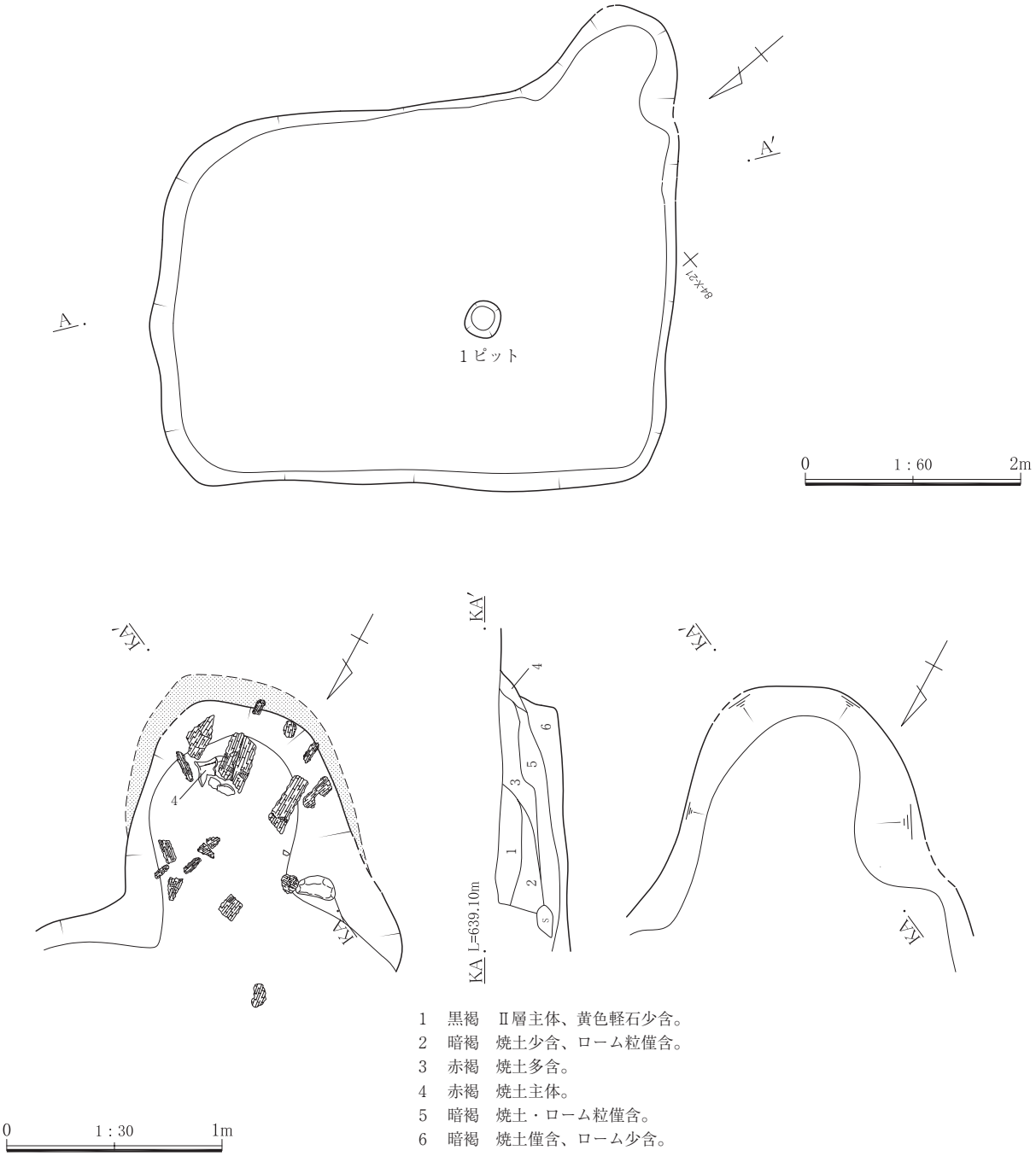
46ａ号竪穴住居（第55・56図、写真図版13・14・59）・46ｂ号竪穴住居（第57・58図、写真図版14・59）

この２つの竪穴住居については、その構造が南壁と西壁、それに北壁の西半分を共に使用している事から、重複関係と言うよりも、１軒の竪穴住居の建て直しによる新旧関係と考えるのが妥当であろう。46ａ号竪穴住居は84区W－20～22、V－21、X－21グリッドに位置する。住居の規模は長軸約4.9m、短軸約3.7mのやや隅丸の長方形であり、面積は17.002㎡である。遺構確認面からの深さは約30cmで、壁はほぼ直立気味に立ち上がる。床面は多少の凸凹を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は上位に薄く浅間粕川テフラが確認されており、基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、東壁の南東隅部分に位置する。残存状態はあまり良くないが、燃焼部内から焼土層と共に炭化材が多数出土した。炭化材は住居北側からもいくつか出土したが、焼土や焼け面の検出などが無く、焼失住居との痕跡は確認出来なかった。カマドの前に上面がほぼ平らな石が据えられており、あるいは



1　黒褐　Ⅱ層主体。
2　暗褐　Ⅱ層主体、黄色軽石やや多含。
3　暗褐　Ⅱ層主体、焼土少含。
4　赤褐　焼土主体。
5　暗褐　Ⅱ層主体、焼土僅含。
6　暗褐　Ⅲ層主体、粘土僅含。
7　褐　　Ⅲ層主体、粘土多含。

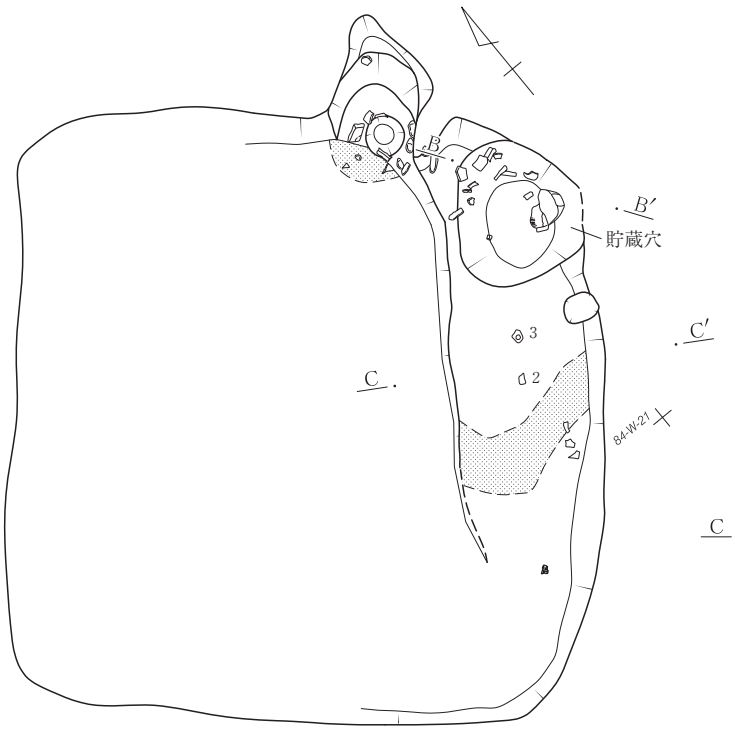
第55図　46ａ号竪穴住居遺構①



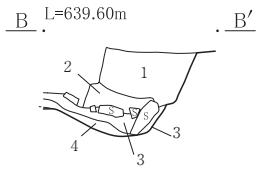
1　黒褐　Ⅱ層主体、黄色軽石少含。
2　暗褐　焼土少含、ローム粒僅含。
3　赤褐　焼土多含。
4　赤褐　焼土主体。
5　暗褐　焼土・ローム粒僅含。
6　暗褐　焼土僅含、ローム少含。

第56図　46ａ号竪穴住居遺構②

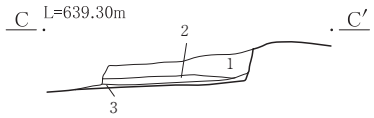
後述する内容と合わせて、鍛錬等の工程に伴う小鍛冶遺構に関係するとも考えられる。他に柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物は46ｂ号竪穴住居と明確に分離出来ない。46ｂ号竪穴住居の規模は長軸約4.8m、短軸約4.8mのほぼ正方形である。面積は21.792㎡である。遺構確認面からの深さは約



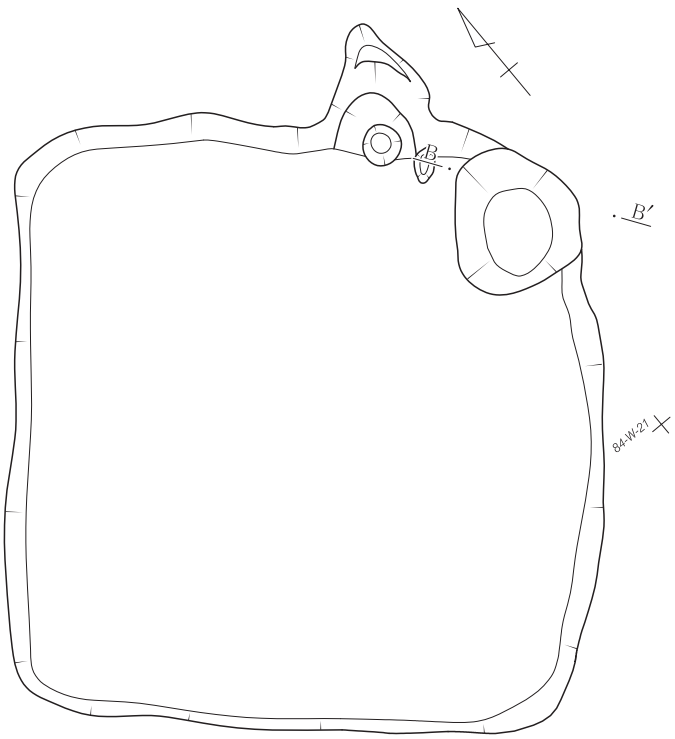
貯蔵穴



1　黒褐　Ⅱ層主体、黄色軽石僅含。炭化物粒少含。
2　暗褐　Ⅱ層主体、粘土やや多含。
3　暗褐　Ⅱ層主体、粘土多含。
4　暗褐　Ⅱ層主体、黄色軽石やや多含、炭化物粒僅含。



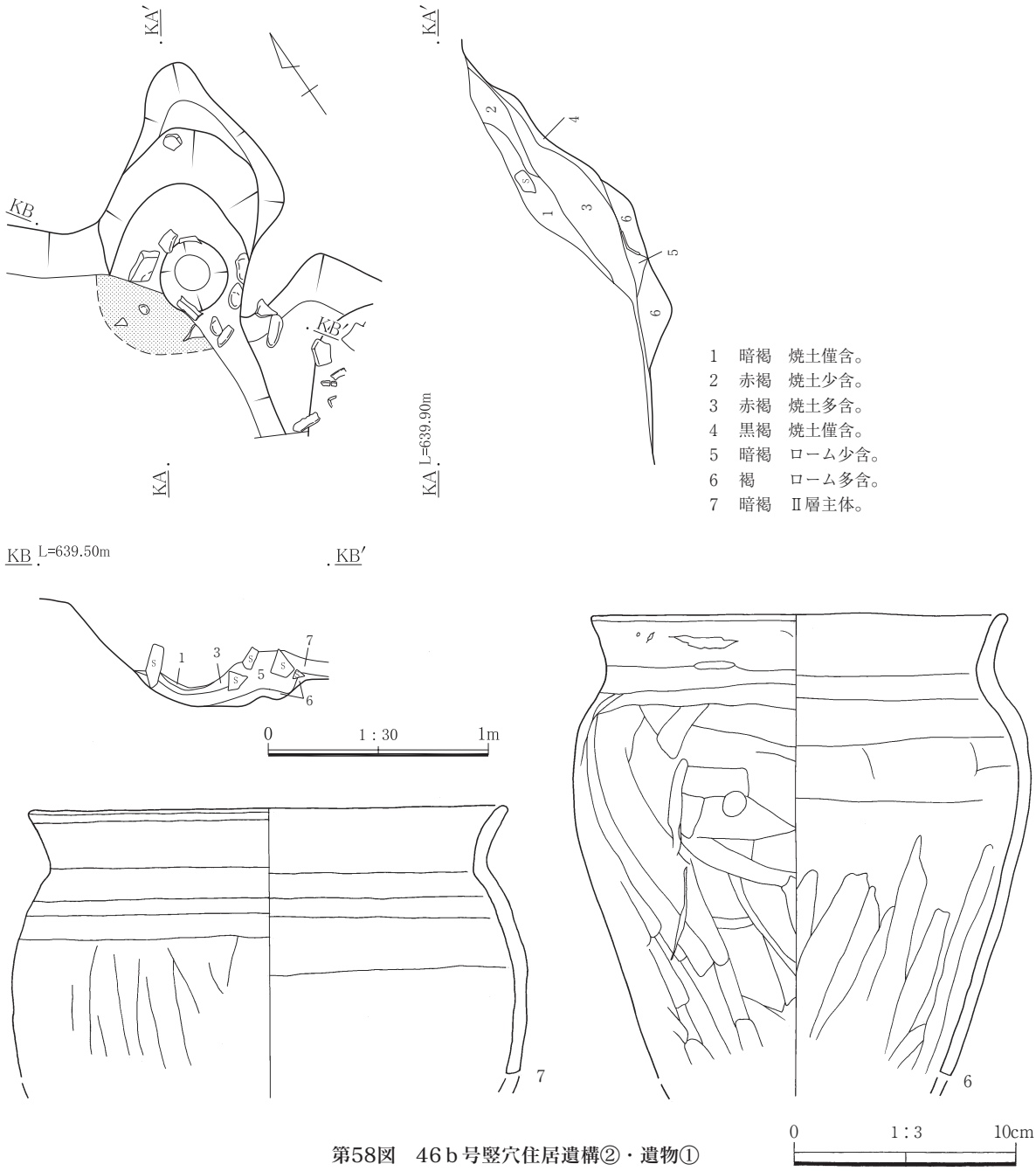
1　黒褐　Ⅱ層主体。
2　暗褐　Ⅱ層主体、黄色軽石少含。
3　暗褐　黄色軽石多含。



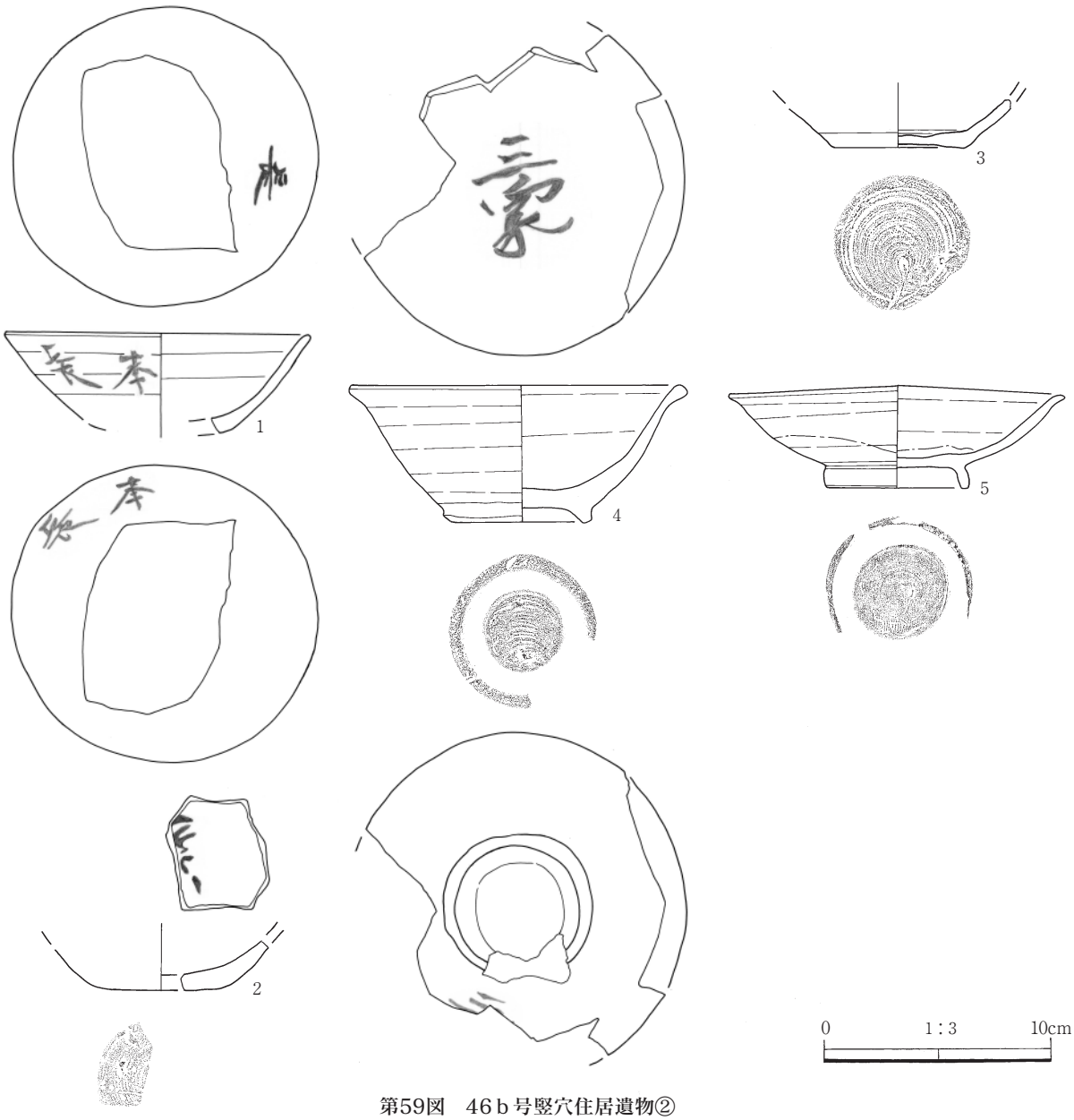
0　1：60　2m

第57図　46ｂ号竪穴住居遺構①

30㎝で、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。床面は多少の凸凹を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、北壁のほぼ中心から北東側に位置する。残存状態はあまり良くなく、左袖は明確でない。構築材の一部に石が利用されている。北東隅に約1.1m×約1.0mのほぼ正円に近い土坑が検出された。この他に柱穴と考えられるピットが１基検出されているが、周溝は確認出来なかった。遺物は、土師器の坏１点（2.9ｇ）・甕24点（218.0ｇ）、須恵器の坏８点（47.6ｇ）・高台付碗９点（174.3ｇ）・甕４点（79.0ｇ）・羽釜１点（3.9ｇ）・灰釉陶器１点（5.1ｇ）などが出土している。特徴的な遺物として、「三家」や「長」などの墨書土器が出土している。



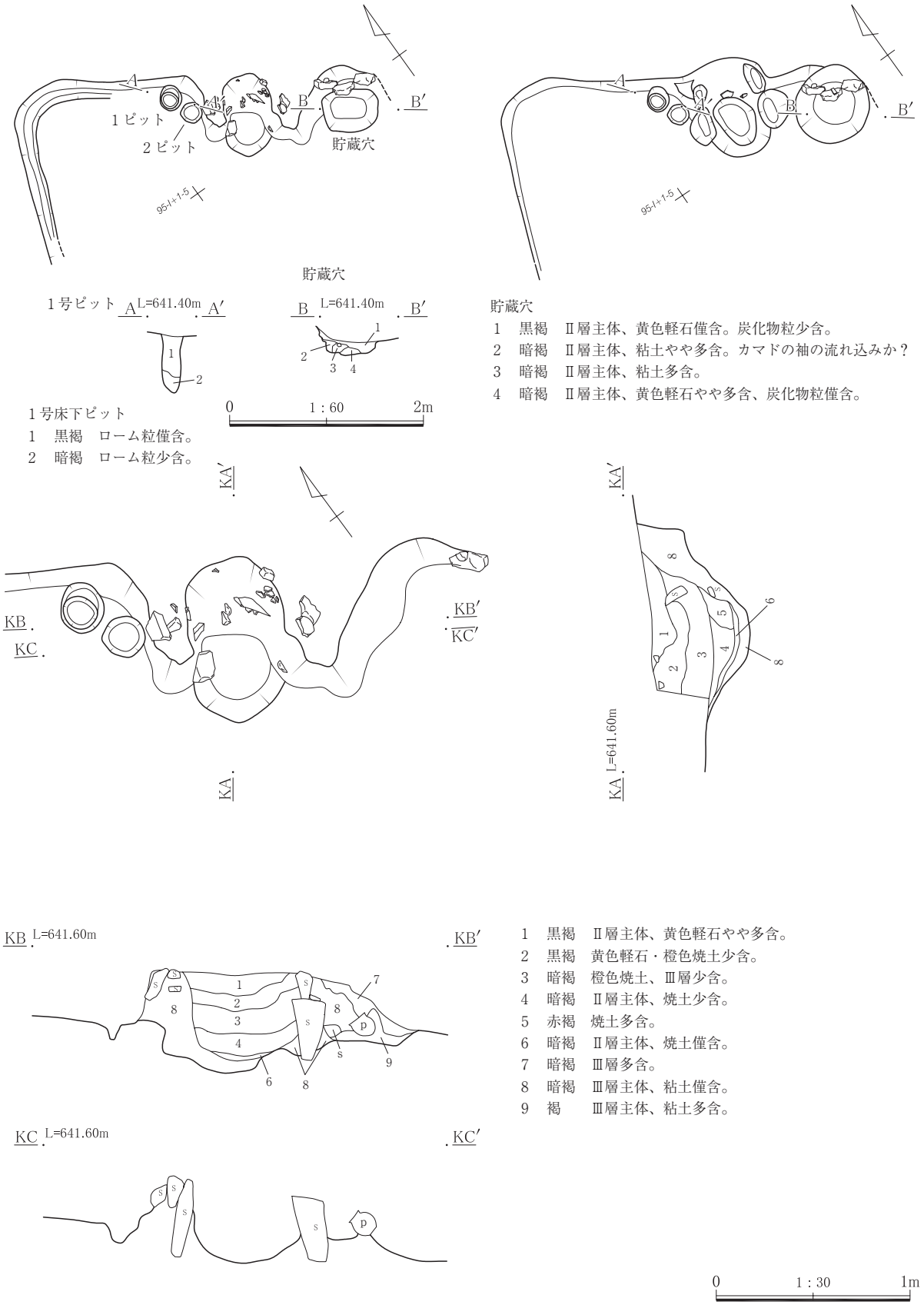
第58図　46ｂ号竪穴住居遺構②・遺物①



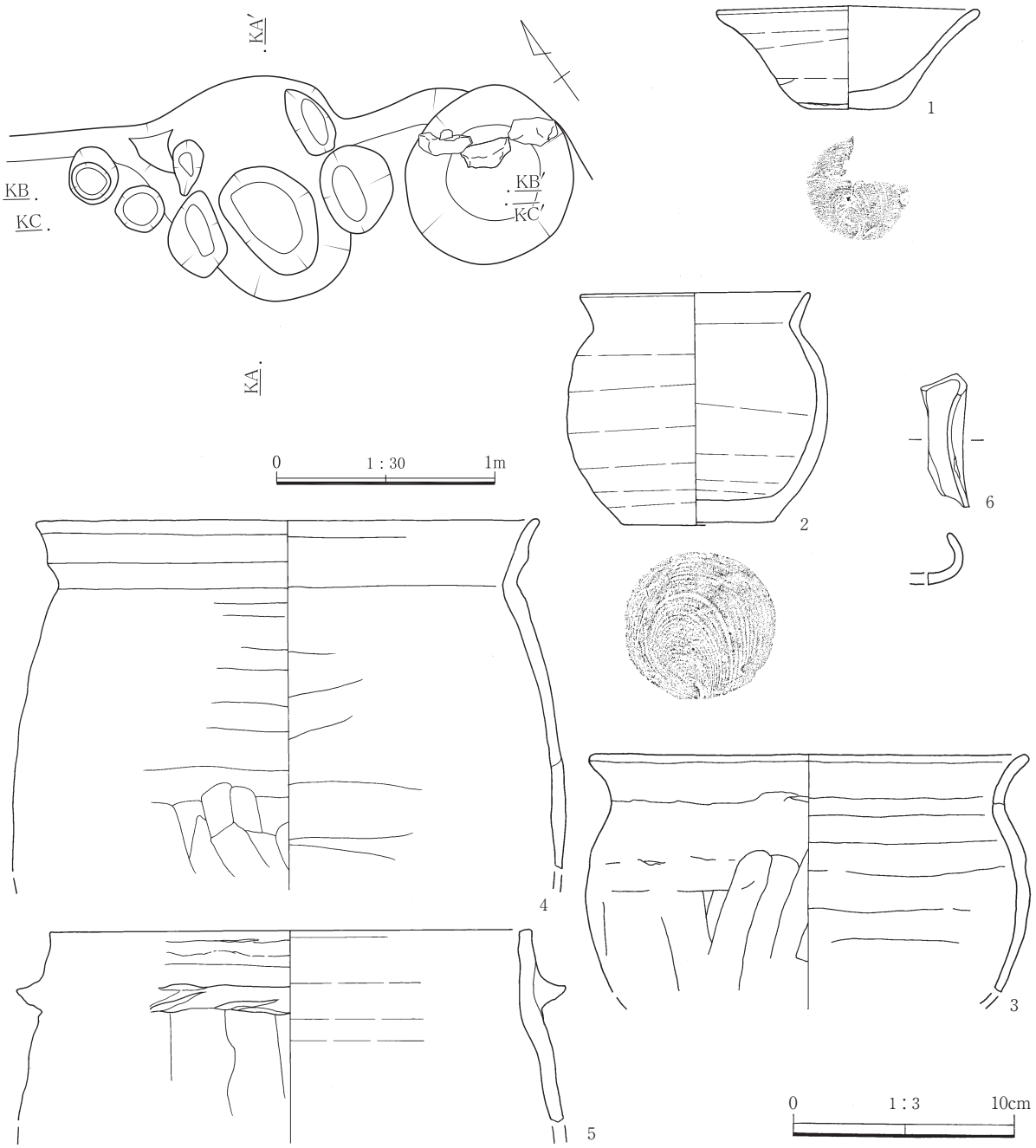
第59図　46ｂ号竪穴住居遺物②

69号竪穴住居(第60・61図､写真図版15・59・60)

95区Ｈ－４・５、Ｉ－５グリッドに位置する。住居の規模は長軸約４ｍ、短軸約（２ｍ）のやや隅丸の長方形に近い。面積は約８㎡である。残存状態は悪く、北壁から西壁にかけてはっきりしている。遺構確認面からの深さは約10cm以下である。床面は多少の凸凹を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、北壁の中心からやや北東側に位置する。袖や煙出し口部分の構築材として薄く広めの石を何枚も用いており、残存状態は良い。煙出し口は住居の壁とほぼ同一ラインである。カマドの左袖と南西隅との間に長軸60㎝、短軸50㎝の楕円形の貯蔵穴が設定されている。柱穴は検出されず、周溝は北壁から西壁にかけてしか確認出来なかった。遺物は、土師器の甕60点（301.8ｇ）、須恵器の坏13点（55.3ｇ）・甕31点（1,547.7ｇ）・灰釉陶器耳皿１点（13.5ｇ）などが出土している。



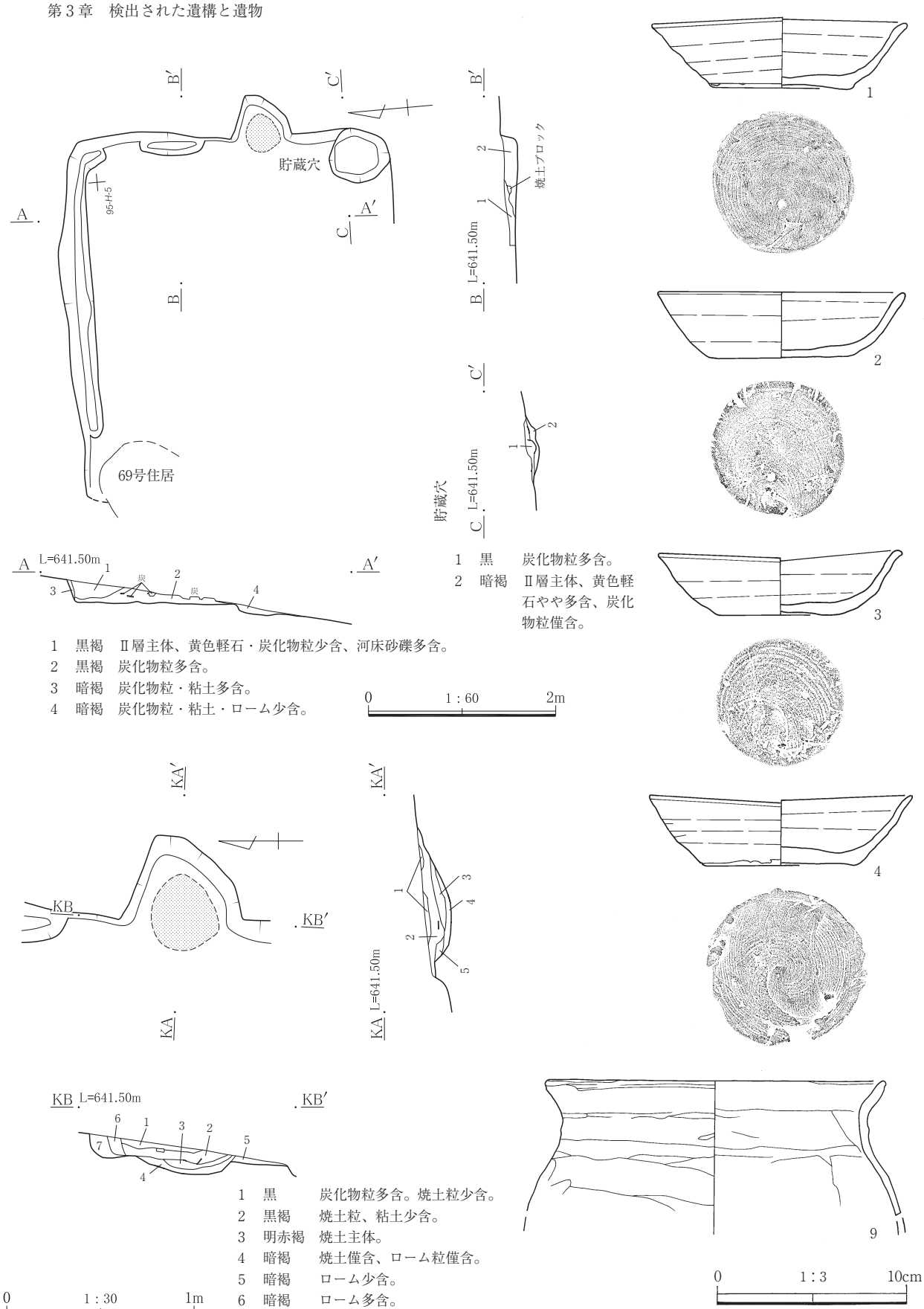
第60図　69号竪穴住居遺構①



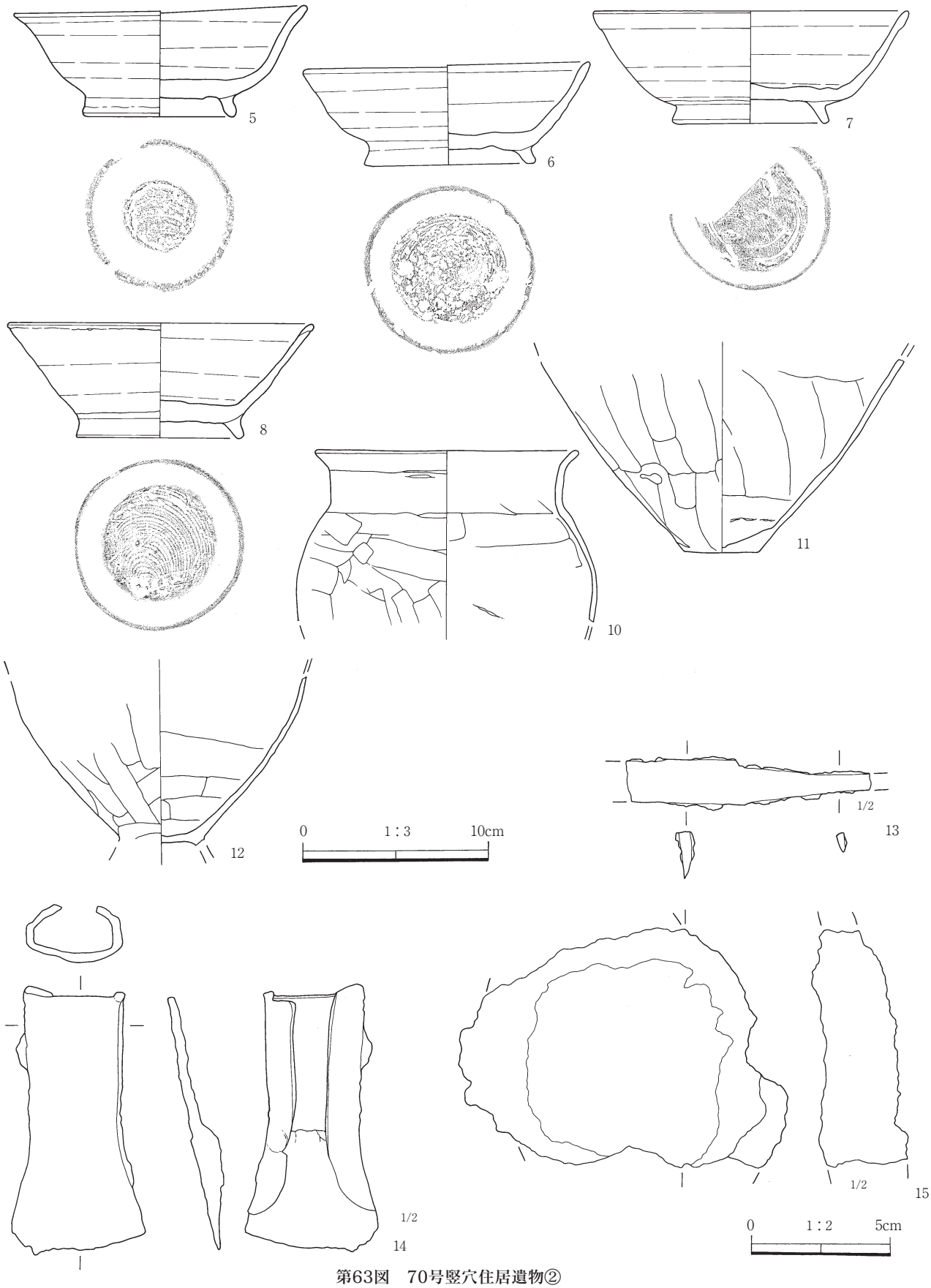
第61図　69号竪穴住居遺構②・遺物

70号竪穴住居(第62・63図､写真図版15・16・60)

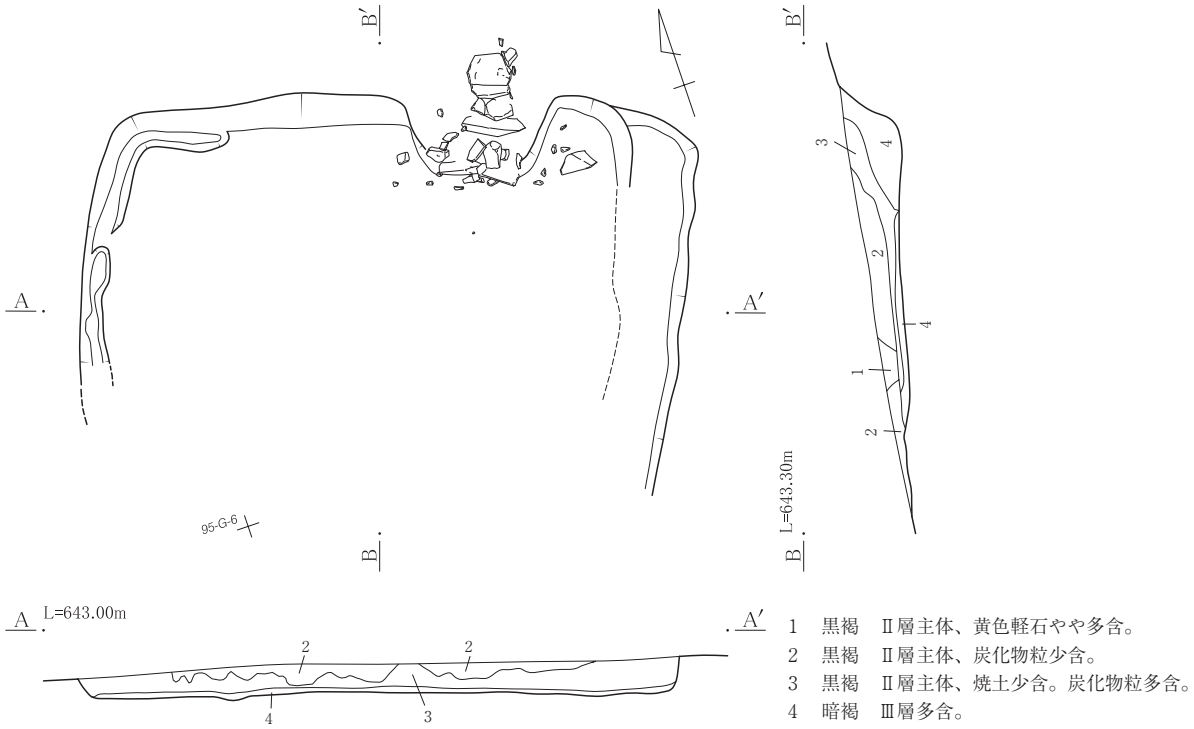
95区G－４・５、H－４・５グリッドに位置する。重複関係は無い。住居の規模は長軸約5.8m、短軸約3.2mの隅丸の方形で、面積は13.454㎡である。残存状態はやや悪く、北壁から東壁にかけてのみであり、遺構確認面からの深さは約20cm以下で、壁は直立気味に立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、北壁のほぼ中心からやや北東側に位置する。残存状態はあまり良くなく、袖もしっかりしていない。煙出し口は住居の掘り込み範囲よりも外に飛び出している。北東壁付近に約42cm×約40cmのほぼ正円に近い貯蔵穴がある。柱穴は検出されず、周溝は東壁の一部と北壁にのみ確認された。遺物は、土師器の甕45点（140.8ｇ）、須恵器の坏12点（18.3ｇ）・甕１点（58.3ｇ）などが出土している。

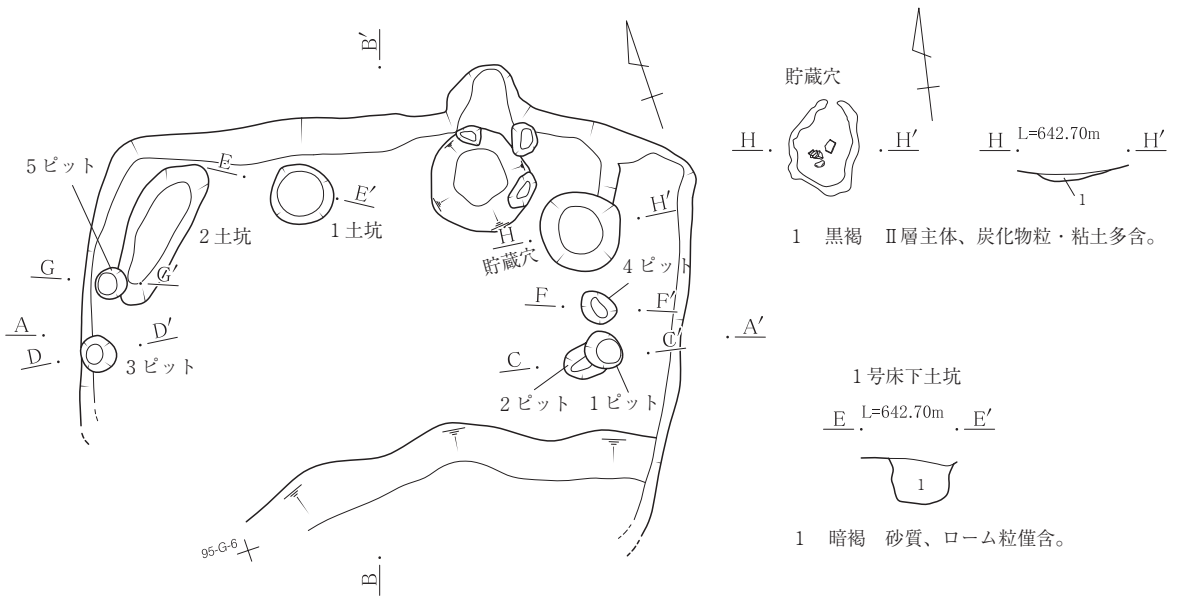


第62図　70号竪穴住居遺構・遺物①



第63図　70号竪穴住居遺物②

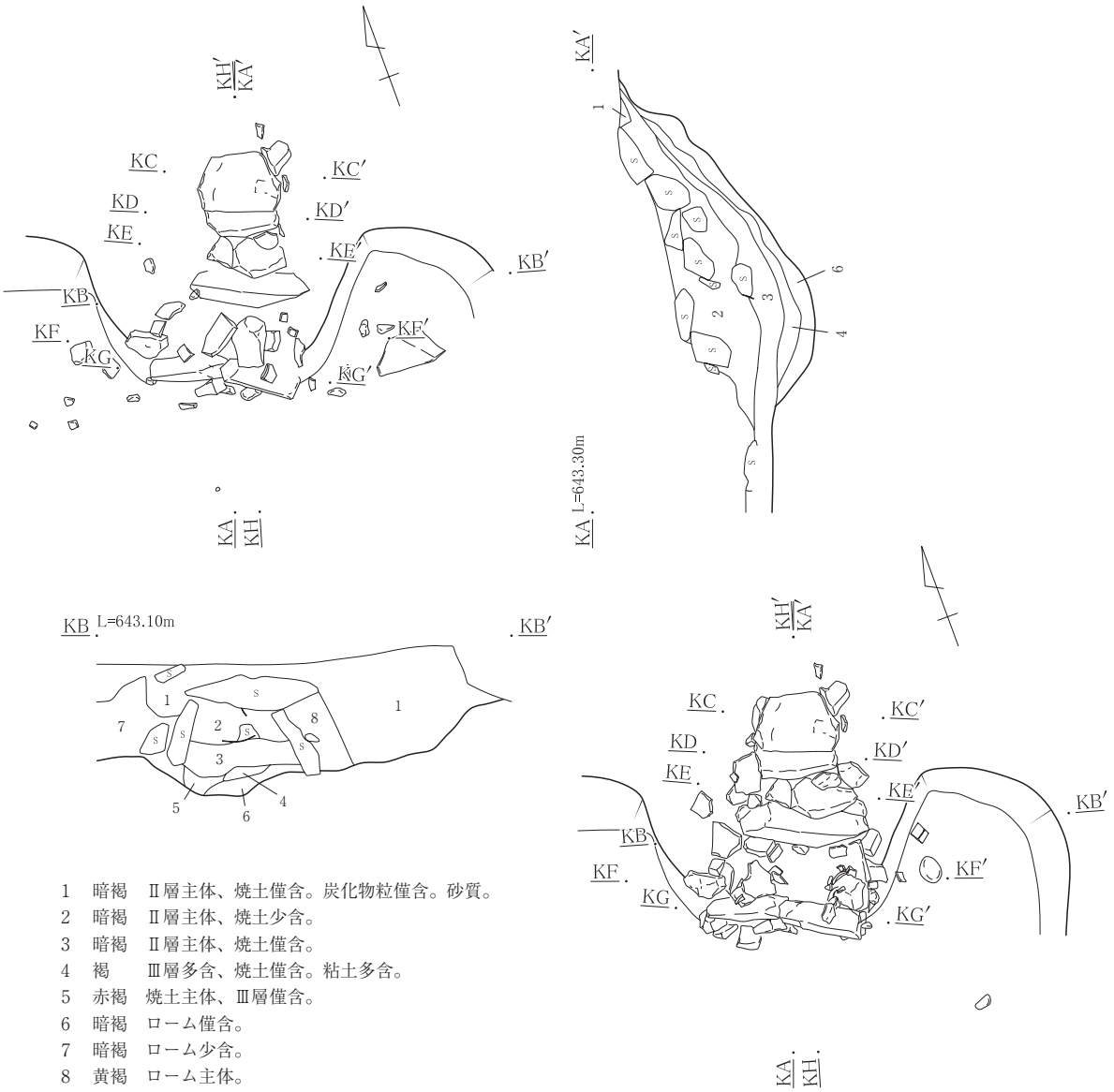




第64図　71号竪穴住居遺構①

71号竪穴住居（第64～67図、写真図版16・61）

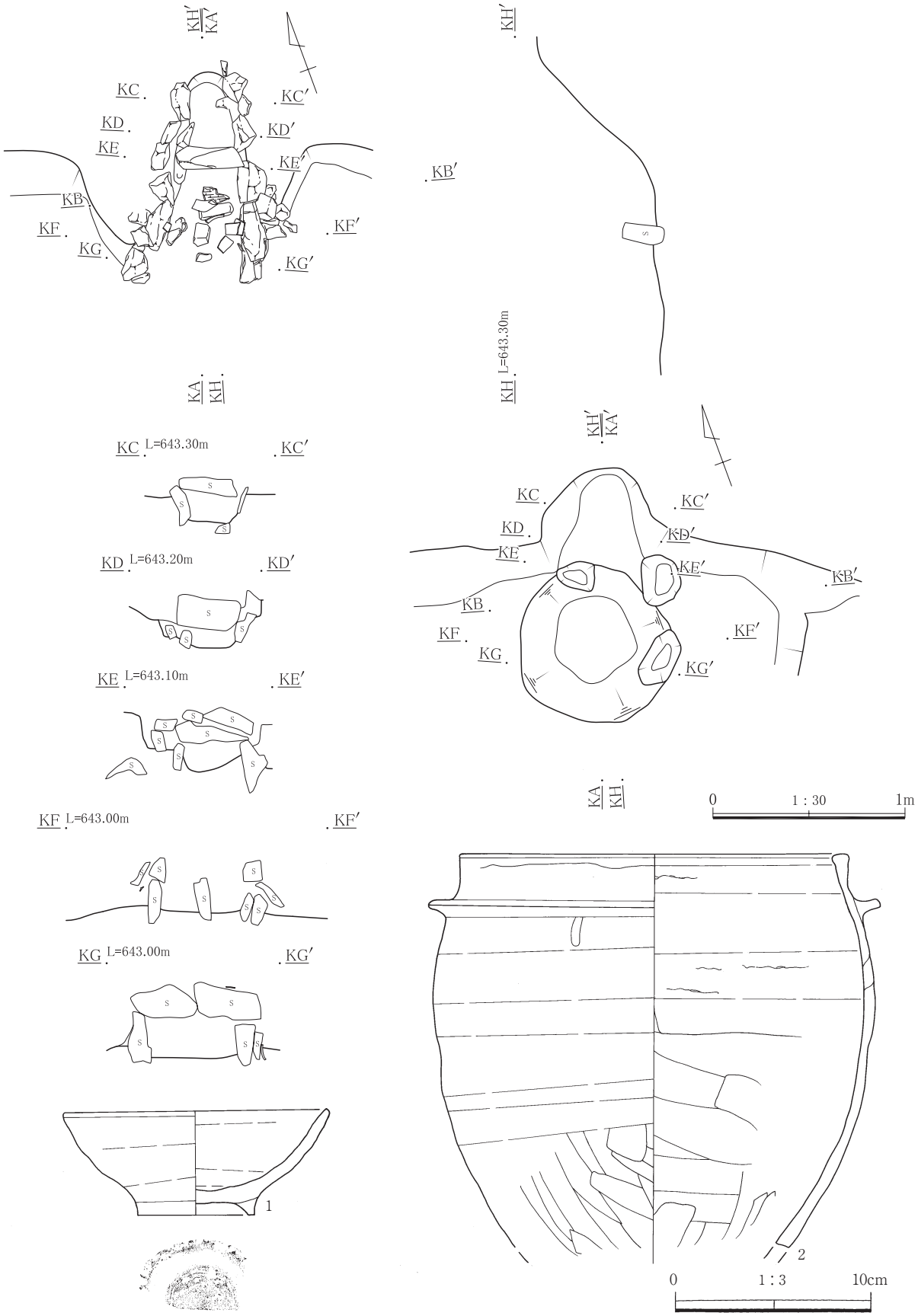
95区F－６、G－６グリッドに位置する。住居の規模は長軸約4.8m、短軸約3.0m以上のやや隅丸の長方形に近い。面積は約15㎡である。遺構確認面からの深さは約15～20cmで、壁はほぼ直立である。床面は多少の凸凹を有しながらもほぼ平坦な面をなしていた。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、北壁の中心からやや北東側に位置する。袖・燃焼部・天井・煙道・煙出し口などの構築材として多数の薄い石を用いており、残存状態は非常に良好である。煙出し口は住居の掘り込み範囲よりも外に飛び出している。カマドの右袖と北東隅との間に径約90㎝のほぼ円形の貯蔵穴が設定されている。柱穴と考えられるピットもいくつかあり、周溝も北西隅部分に僅かだが確認出来た。遺物は、土師器の坏２点（31.1ｇ）・甕９点（56.7ｇ）、須恵器の坏18点（213.9ｇ）・高台付碗５点（70.9ｇ）・甕14点（213.3ｇ）・羽釜102点（2,255.7ｇ）、灰釉陶器椀23点（83.6ｇ）・長頸壺３点（20.7ｇ）などが出土している。



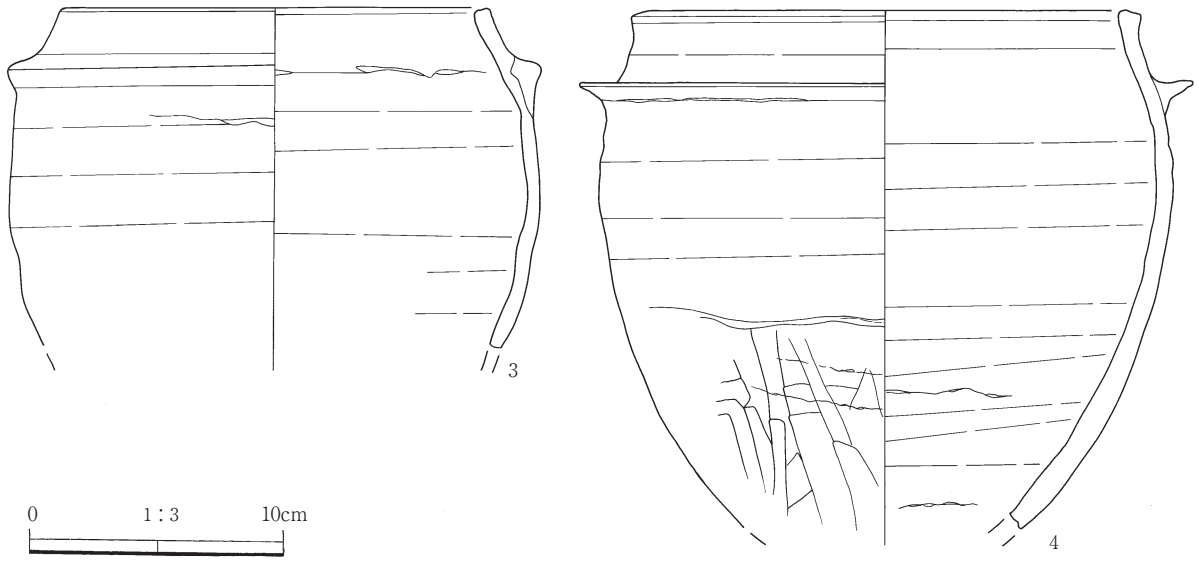
1　暗褐　Ⅱ層主体、焼土僅含。炭化物粒僅含。砂質。
2　暗褐　Ⅱ層主体、焼土少含。
3　暗褐　Ⅱ層主体、焼土僅含。
4　褐　　Ⅲ層多含、焼土僅含。粘土多含。
5　赤褐　焼土主体、Ⅲ層僅含。
6　暗褐　ローム僅含。
7　暗褐　ローム少含。
8　黄褐　ローム主体。

0　1：30　1m

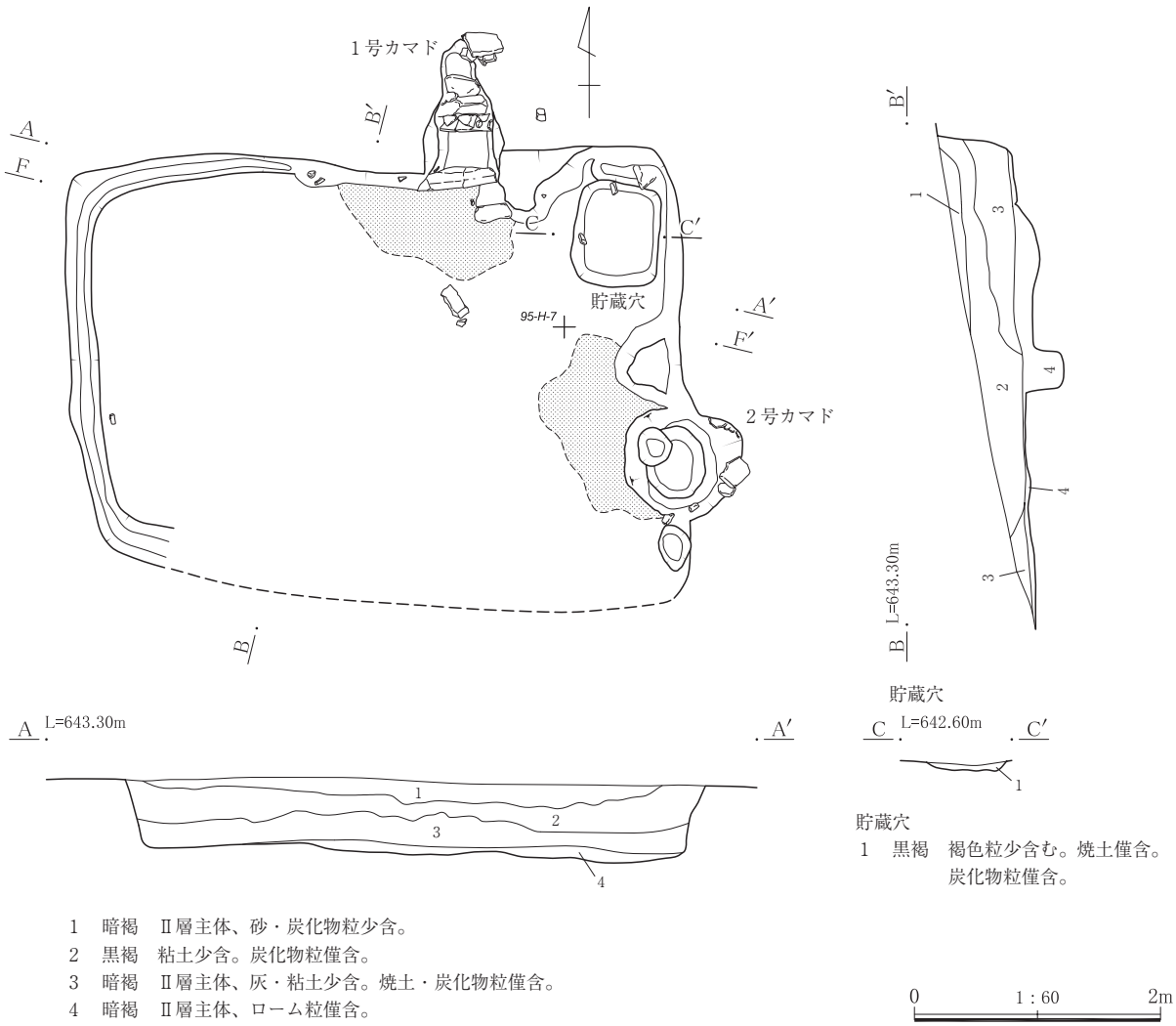
第65図　71号竪穴住居遺構②



第66図　71号竪穴住居遺構③・遺物①



第67図　71号竪穴住居遺物②



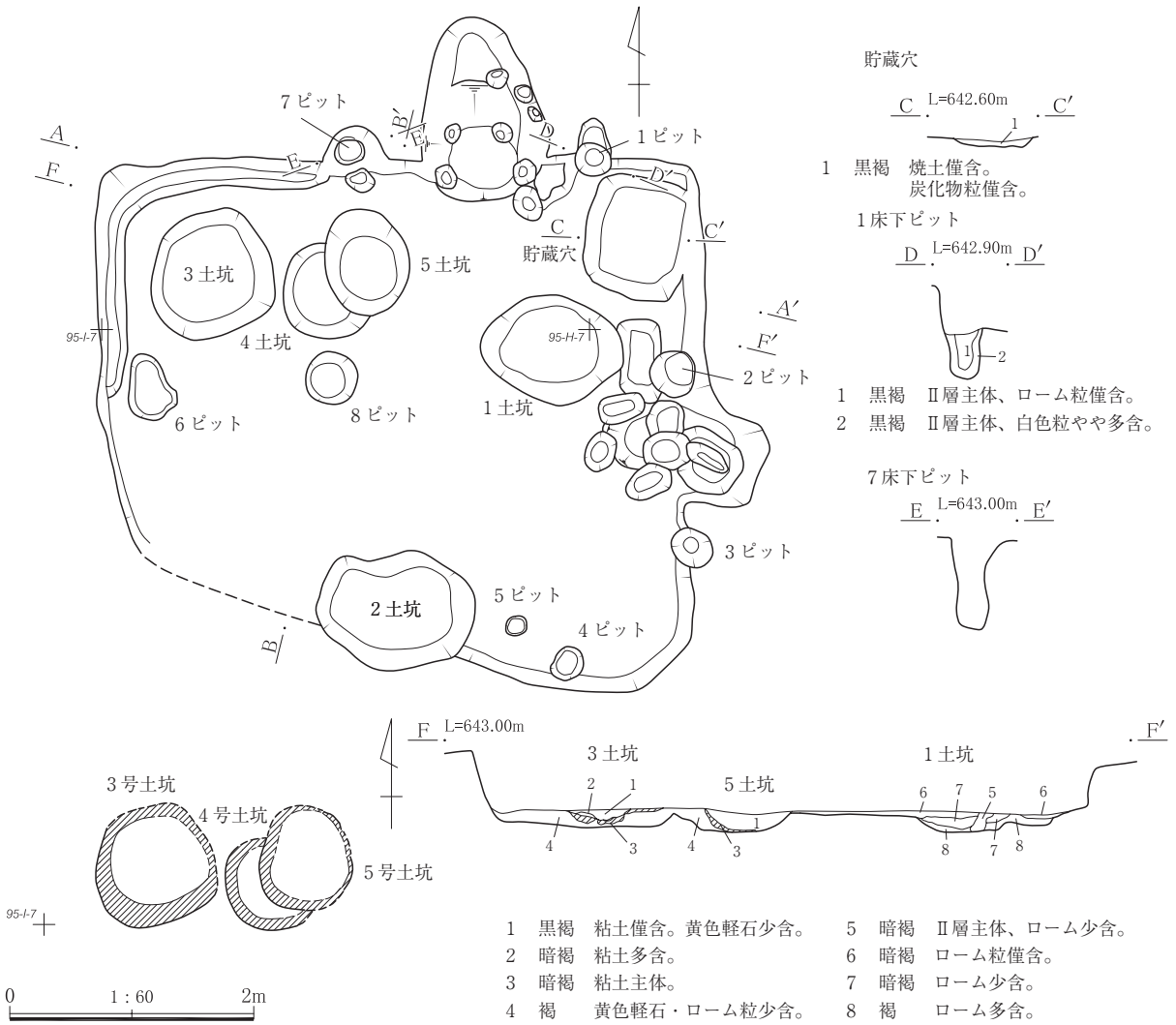
1　暗褐　Ⅱ層主体、砂・炭化物粒少含。
2　黒褐　粘土少含。炭化物粒僅含。
3　暗褐　Ⅱ層主体、灰・粘土少含。焼土・炭化物粒僅含。
4　暗褐　Ⅱ層主体、ローム粒僅含。

貯蔵穴
1　黒褐　褐色粒少含む。焼土僅含。
炭化物粒僅含。

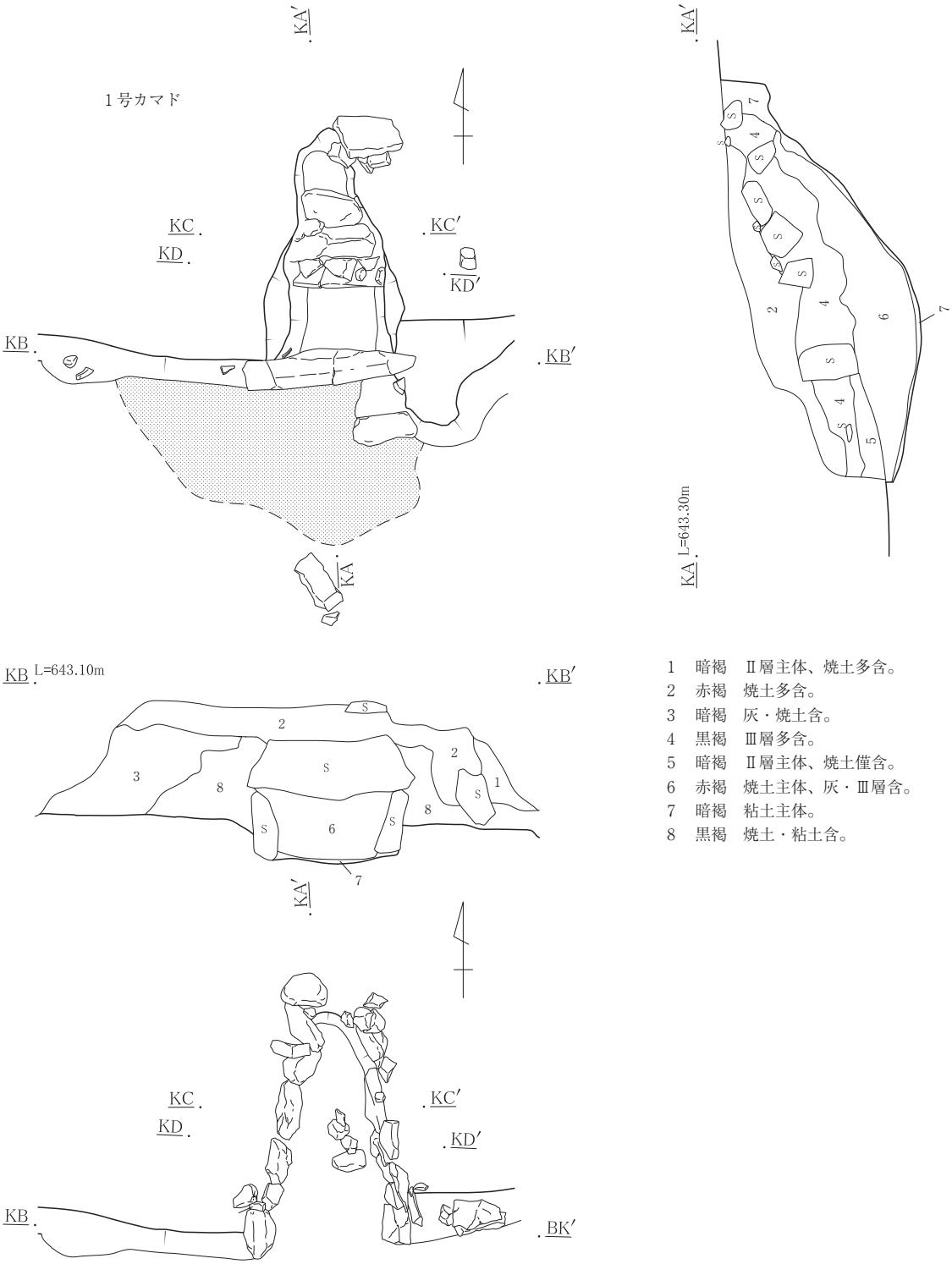
第68図　72号竪穴住居遺構①

72号竪穴住居（第68～72図、写真図版17・61）

95区G－６・７、H－６・７、グリッドに位置する。住居の規模は長軸約5.0m、短軸約4.4mの台形で、面積は17.936㎡である。残存状態は南西隅付近の残りが悪い。遺構確認面からの深さは約50～60cmで、壁はほぼ直立気味に立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、北壁の中心からやや北東側に位置する。袖・燃焼部・天井・煙道・煙出し口などの構築材として多数の薄い石を用いており、残存状態は非常に良好である。煙出し口は住居の掘り込み範囲よりも外に飛び出している。カマドの右袖と北東隅との間に長軸約100㎝、短軸約90㎝の長方形の貯蔵穴が設定されている。また、東壁のほぼ中央にも住居の掘り込み範囲よりも外に飛び出している部分があり、多数のピットが存在する事から、初期のカマドの可能性もある。また、楕円形の土坑５基と、いくつかのピットが存在するが、明確な柱穴は分からず、周溝が北西隅付近に存在する。遺物は、土師器の甕66点（351.6ｇ）・小型甕16点（58.4ｇ）、須恵器の高台付碗８点（131.8ｇ）・甕９点（693.5ｇ）などが出土している。



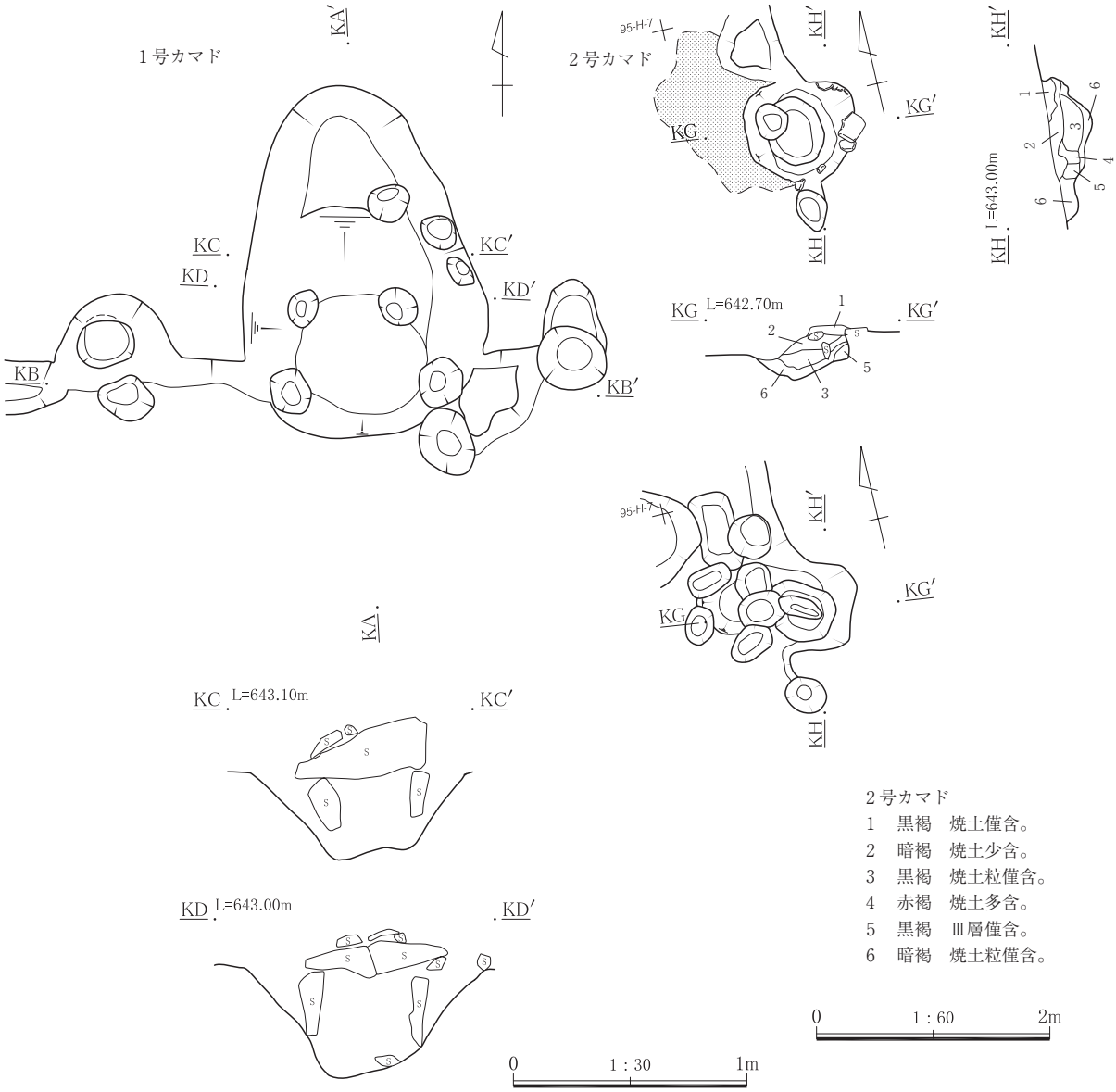
第69図　72号竪穴住居遺構②

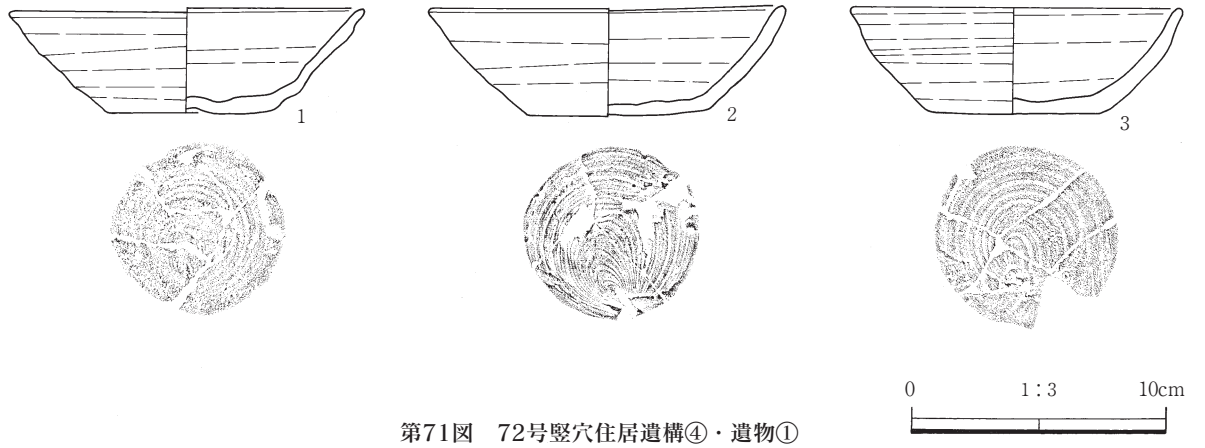


1　暗褐　Ⅱ層主体、焼土多含。
2　赤褐　焼土多含。
3　暗褐　灰・焼土含。
4　黒褐　Ⅲ層多含。
5　暗褐　Ⅱ層主体、焼土僅含。
6　赤褐　焼土主体、灰・Ⅲ層含。
7　暗褐　粘土主体。
8　黒褐　焼土・粘土含。

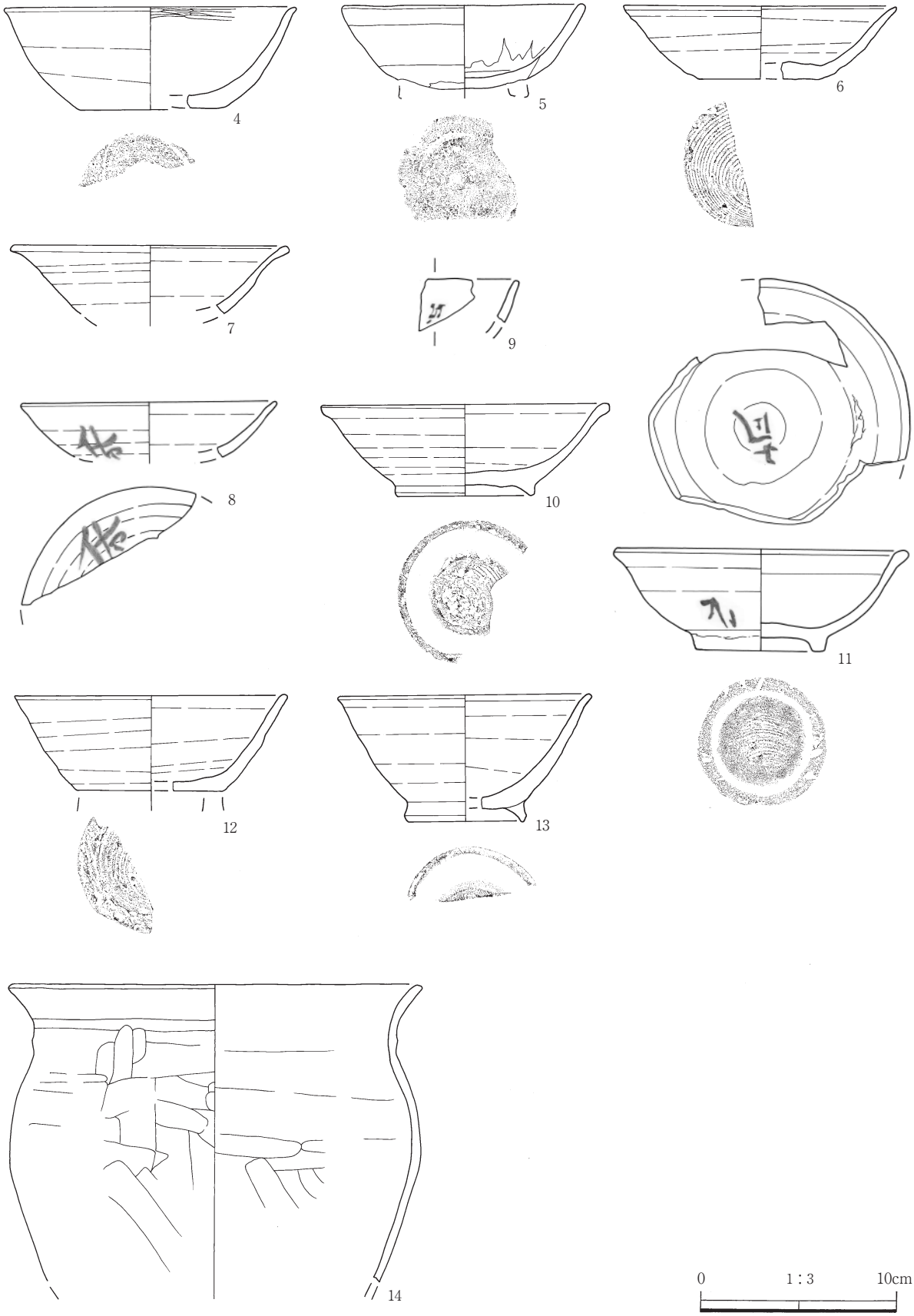
0　1：30　1m

第70図　72号竪穴住居遺構③





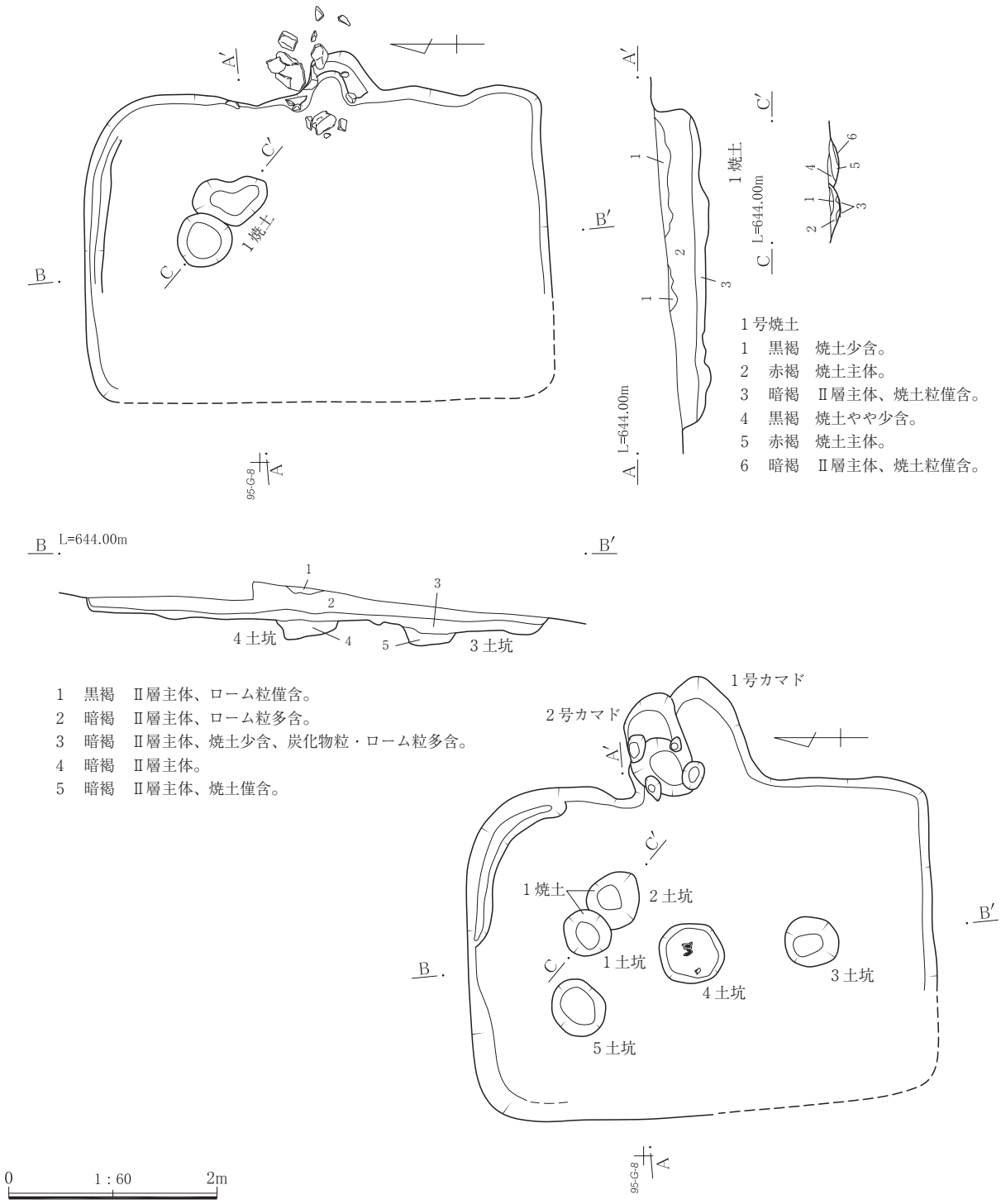
第71図　72号竪穴住居遺構④・遺物①



第72図　72号竪穴住居遺物②

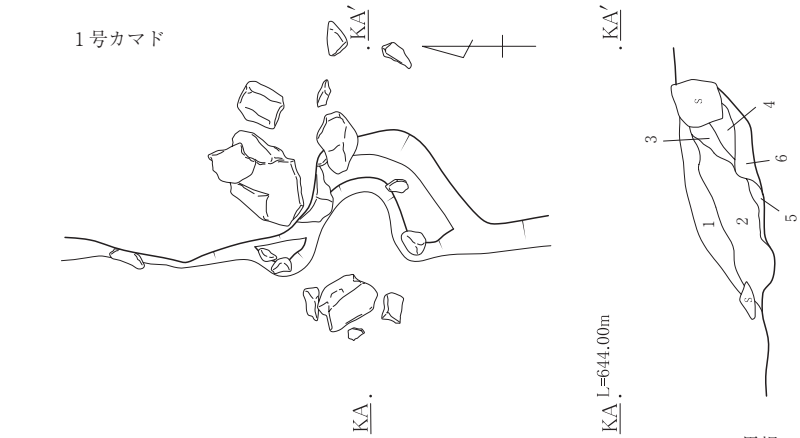
74号竪穴住居（第73～75図、写真図版17）

95区F－７・８グリッドに位置する。重複関係は無い。住居の規模は長軸約4.5m、短軸約3.0mの隅丸の長方形で、面積は約13.5m²である。遺構確認面からの深さは約10～20cmで、壁はやや直立気味に立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、東壁のほぼ中心に位置し、２つ存在する。新しい２号カマドは残存状態があまり良くなく、右袖は明確ではない。構築材の

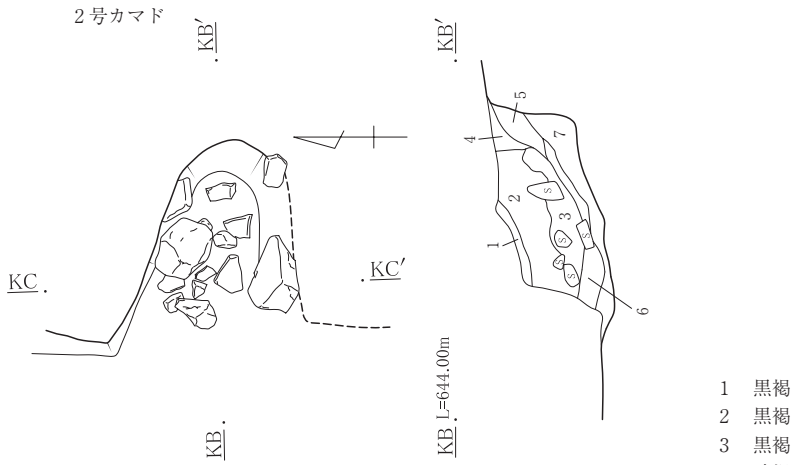


第73図　74号竪穴住居遺構①

一部に石が利用されている。古い１号カマドは２号カマドの僅か南側に位置し、共に煙出し口は住居の掘り込み範囲よりも外に飛び出している。径約60cmの円形の土坑など５基が検出された。位置から柱穴と考えられる土坑もあり、周溝は北壁際に僅かに検出された。遺物は、土師器の坏５点（15.8ｇ）・甕65点（135.2ｇ）、須恵器の坏22点（73.8ｇ）・高台付碗４点（17.6ｇ）・甕４点（66.4ｇ）・羽釜８点（172.1ｇ）、灰釉陶器椀８点（36.7ｇ）などが出土している。



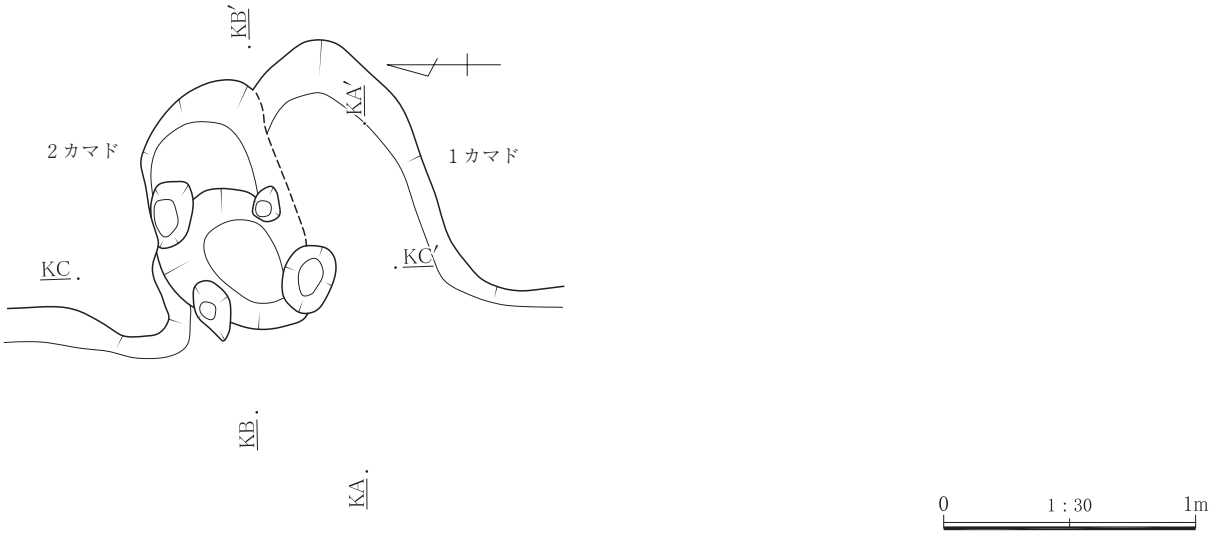
1　黒褐　黄色粒・白色粒少含。
2　暗褐　１層に焼土多含。
3　暗褐　焼土少含。
4　暗褐　ローム粒僅含。
5　暗褐　ローム少含。
6　褐　　ローム多含。



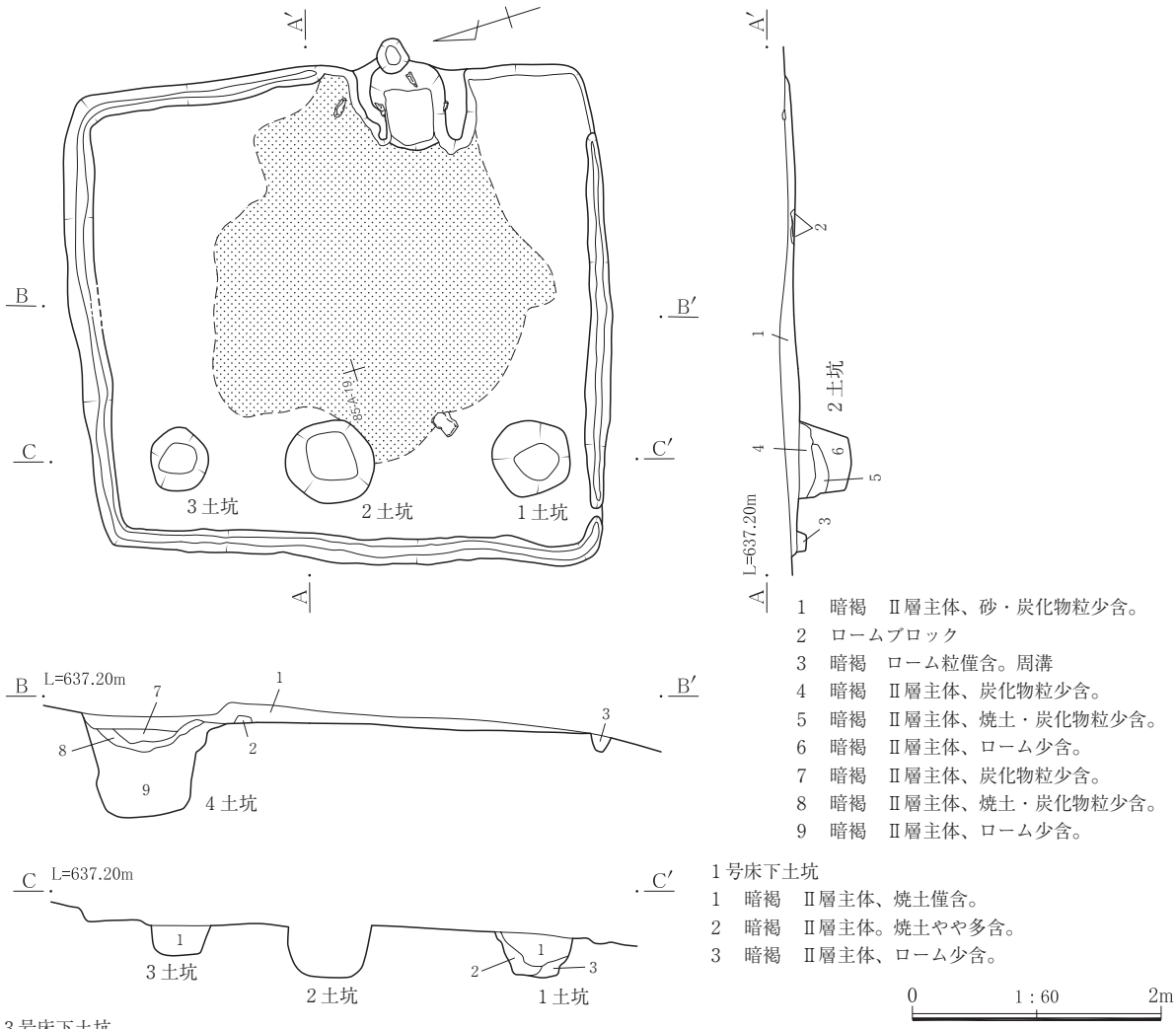
1　黒褐　　ローム粒僅含。
2　黒褐　　焼土僅含。
3　黒褐　　Ⅲ層僅含、ローム粒少含。
4　暗褐　　ローム粒少含。
5　暗褐　　ローム少含。
6　褐　　ローム多含。
7　黄暗褐　Ⅵ層主体。
8　黄褐　　焼土化したローム主体。

0　1：30　1m

第74図　74号竪穴住居遺構②



第75図　74号竪穴住居遺構③



1　暗褐　Ⅱ層主体、砂・炭化物粒少含。
2　ロームブロック
3　暗褐　ローム粒僅含。周溝
4　暗褐　Ⅱ層主体、炭化物粒少含。
5　暗褐　Ⅱ層主体、焼土・炭化物粒少含。
6　暗褐　Ⅱ層主体、ローム少含。
7　暗褐　Ⅱ層主体、炭化物粒少含。
8　暗褐　Ⅱ層主体、焼土・炭化物粒少含。
9　暗褐　Ⅱ層主体、ローム少含。

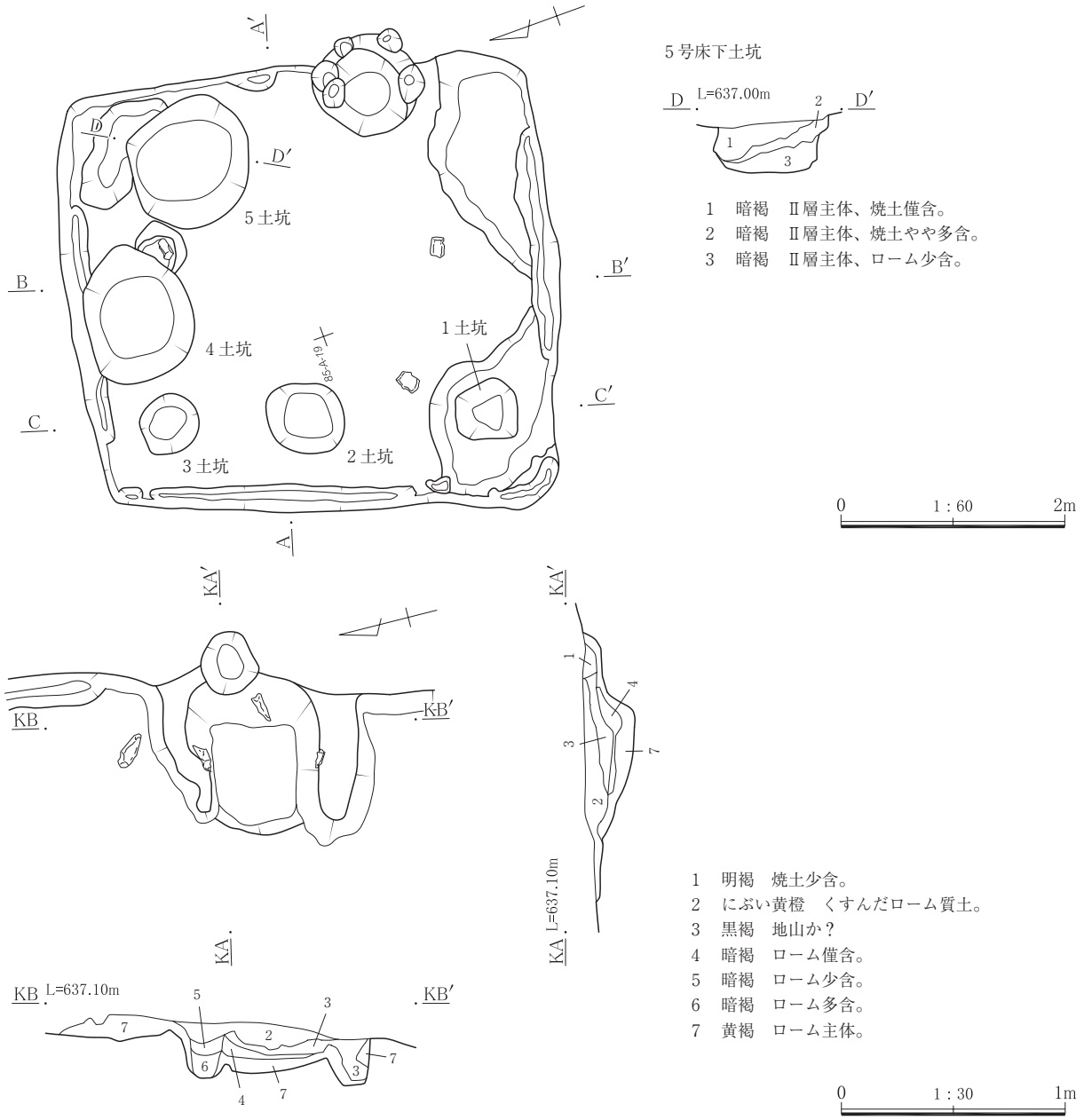
1号床下土坑
1　暗褐　Ⅱ層主体、焼土僅含。
2　暗褐　Ⅱ層主体。焼土やや多含。
3　暗褐　Ⅱ層主体、ローム少含。

3号床下土坑
1　暗褐　Ⅱ層主体、ローム粒少含。

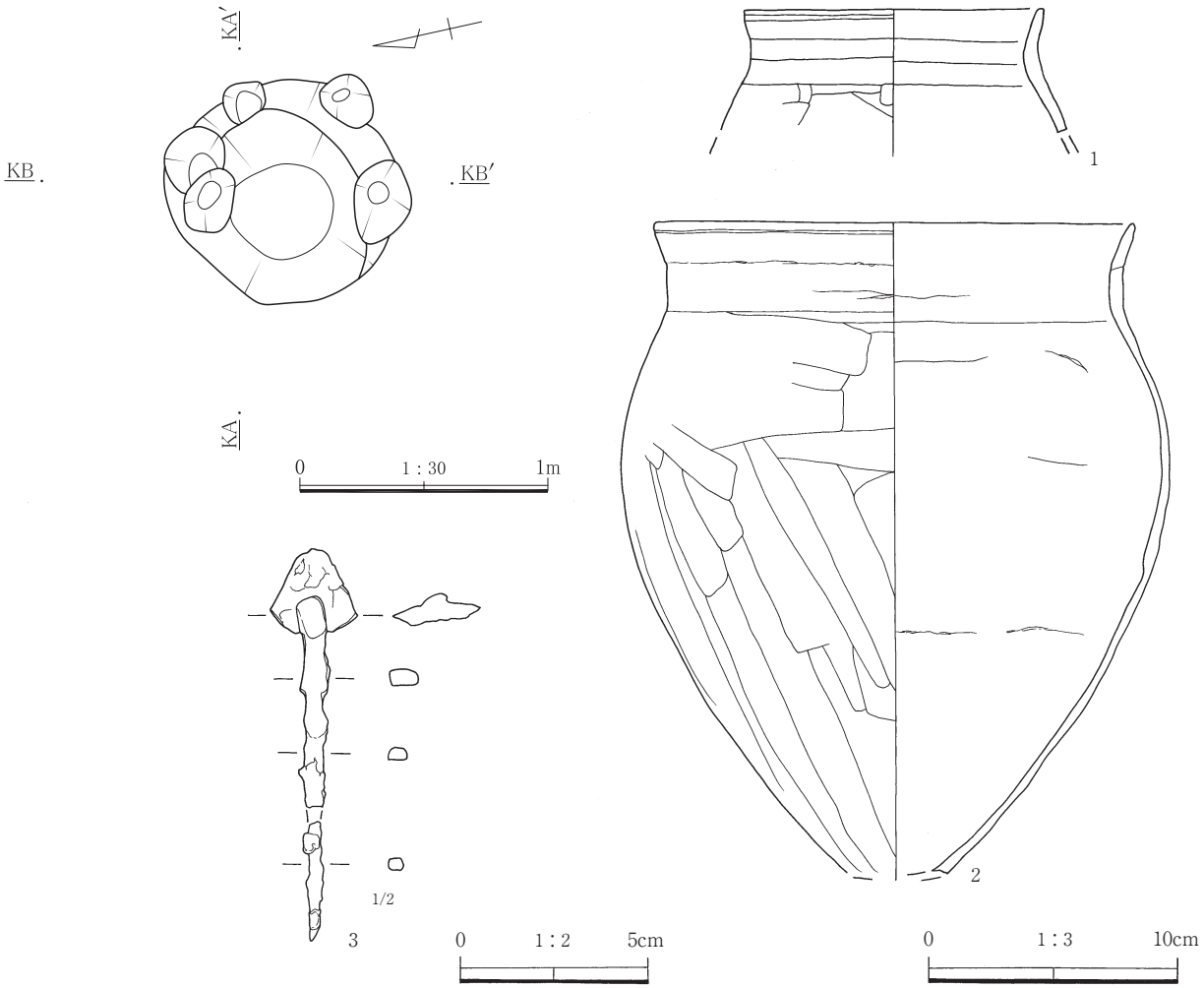
第76図　75号竪穴住居遺構①

75号竪穴住居(第76～78図､写真図版17・18・62)

84区Y－18・19、85区A－18・19グリッドに位置する住居の規模は長軸約4.5m、短軸約4.0mのやや台形であり、面積は約18㎡である。遺構確認面からの深さは約10cm以下で、壁は僅かに確認出来ただけである。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、東壁のほぼ中心から南東側に位置し、南東隅部分に近い。残存状態もあまり良くなく、袖は明確でない。構築材の一部に石が利用されている。南壁付近に須恵器の大甕の破片が多数出土している。位置から柱穴と考えられる土坑が西壁付近に２基あり、周溝は壁に沿ってほぼ全周するように検出された。遺物は、土師器の甕153点（487.2ｇ）、須恵器の坏２点（9.0ｇ）・甕１点（90.1ｇ）、鉄製の鏃などが出土している。



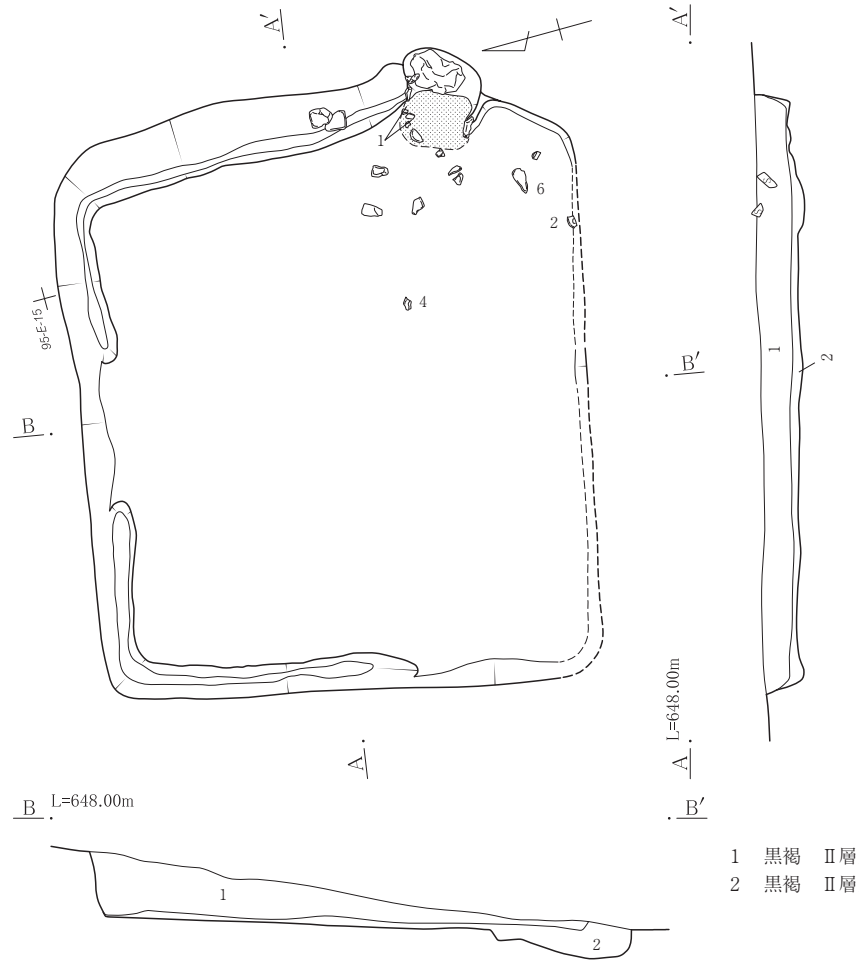
第77図　75号竪穴住居遺構②



第78図　75号竪穴住居遺構③・遺物

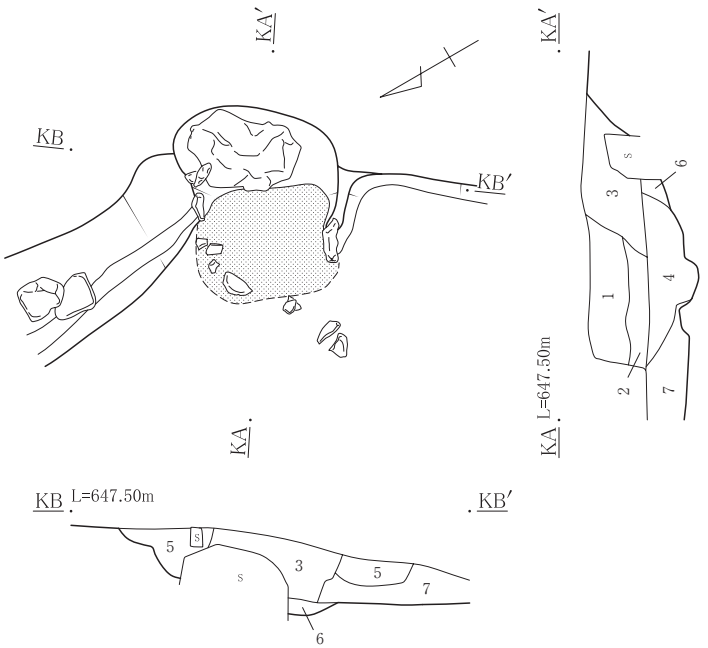
76号竪穴住居（第79～81図、写真図版18・62）

95区D－14、E－14・15グリッドに位置する。重複関係は無い。住居の規模は長軸約4.8m、短軸約4.2mのやや台形状で、東壁がカマドを中心にやや突出する形である。面積は12.84㎡である。遺構確認面からの深さは北壁で約50cmと深く、壁はほぼ直立気味に立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは、東壁の中心から南東側に位置し、南東隅部分に近い。両側の袖の構築材に石を用いており、燃焼部の奥に自然石が存在するため、煙道及び煙出し口が壁から僅かに外側に出るだけである。残存状態はあまり良くなく、左袖は明確ではない。カマドの周辺から長軸約130cm、短軸約120cmの楕円形をはじめとするいくつもの床下土坑が検出された。長軸約150cm、短軸約120cmの楕円形の床下土坑が南西隅部分から、南壁のほぼ中央部が南に凸形に約60cm突出しており、それぞれの隅にピットが、西側に長軸約110cm、短軸約90cmの楕円形の床下土坑がある。この突出した部分がどのような機能を有していたのか、また構築された目的が何なのかは把握出来なかった。北側に柱穴と考えられるピットが２基検出されており、周溝も西壁から東壁のカマド部分まで確認されている。遺物は、土師器の甕189点（897.2ｇ）、須恵器の坏20点（132.5ｇ）・高台付碗６点（80.4ｇ）、などが出土している。



1　黒褐　Ⅱ層主体、黄色軽石やや多含。
2　黒褐　Ⅱ層主体、ローム少含。

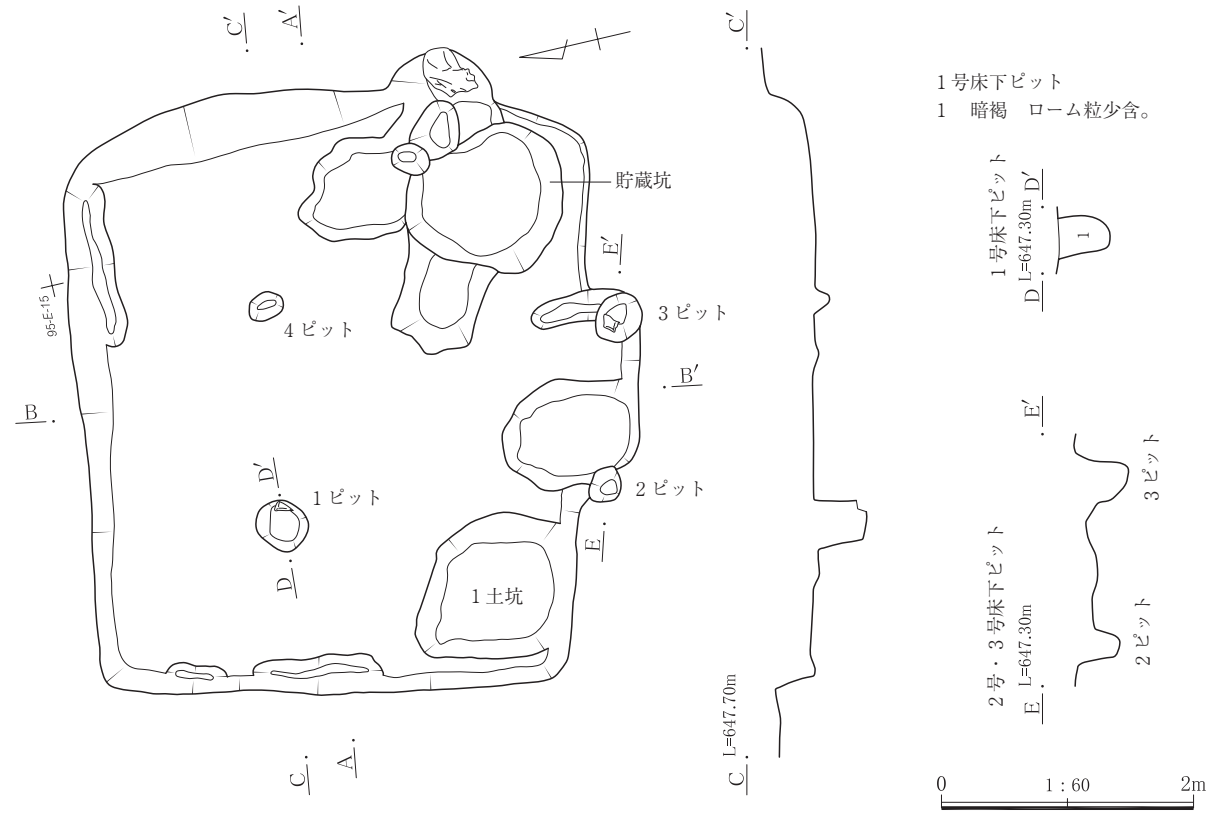
0　1：60　2m

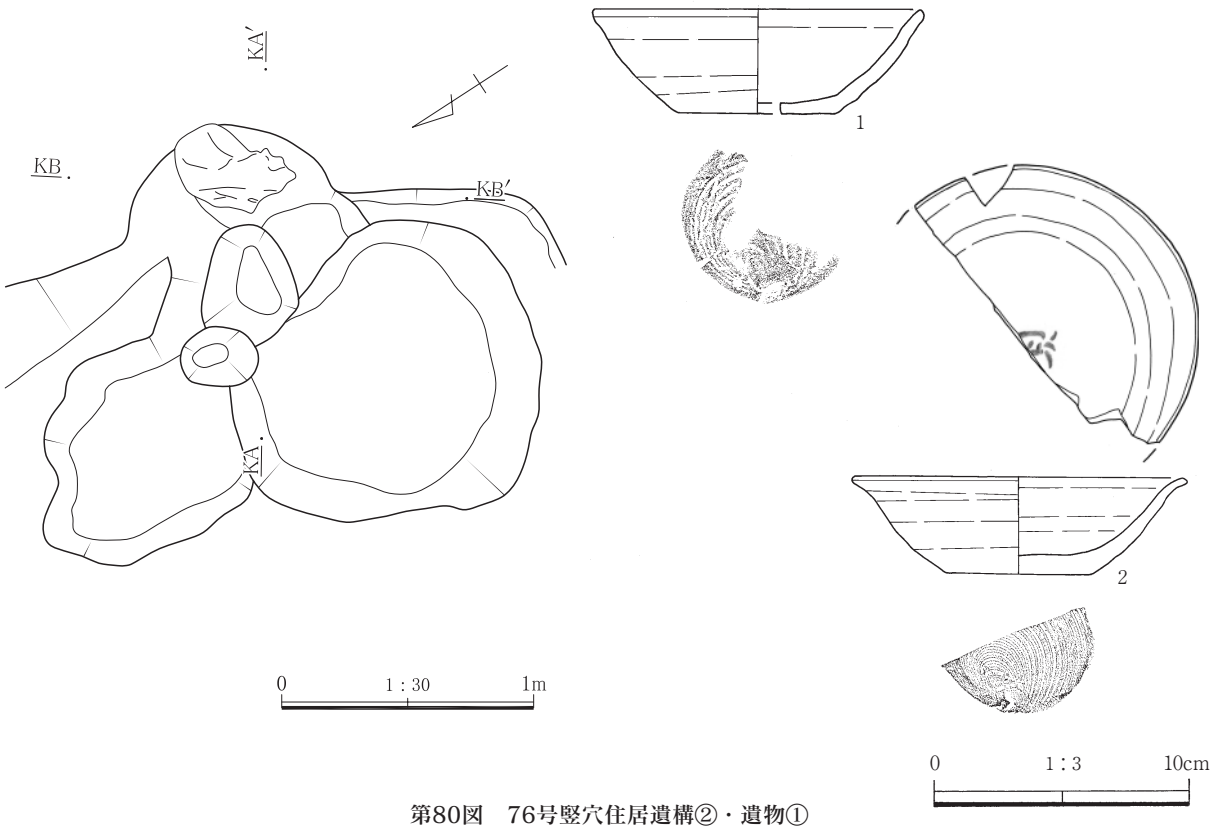


1　褐　　黄色軽石僅含、焼土僅含。
2　暗褐　軽石僅含、焼土少含。
3　褐　　焼土少含、炭化物粒僅含。
4　褐　　焼土僅含。
5　褐　　ローム粒僅含。
6　暗褐　ローム少含。
7　褐　　ローム多含。

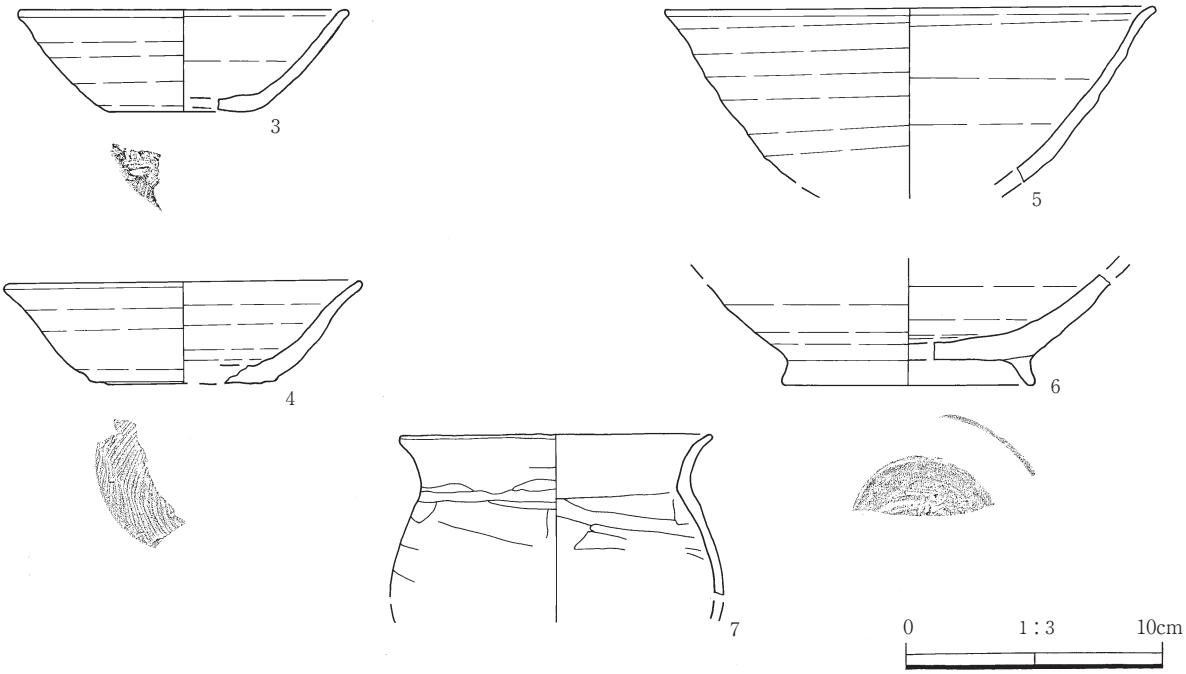
0　1：30　1m

第79図　76号竪穴住居遺構①





第80図　76号竪穴住居遺構②・遺物①



第81図　76号竪穴住居遺物②

77号竪穴住居（第82図、写真図版18・19）

85区C－18・19、D－18・19、E－18・19グリッドに位置する。重複関係では７号竪穴・146号土坑に壊されている。住居の規模は長軸約６ｍ、短軸約5.5ｍのやや楕円の形状で、面積は約30㎡である。残存状態は悪く、北壁から東壁にかけてはっきりしているが、西壁と南壁は不明瞭である。遺構確認面からの深さは約30cmで、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは明確でない。中央よりやや西寄りに長軸約2.3mcm、短軸約2.2mの不定形な落ち込みが検出された。土坑やピット、柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物はほとんど無い。

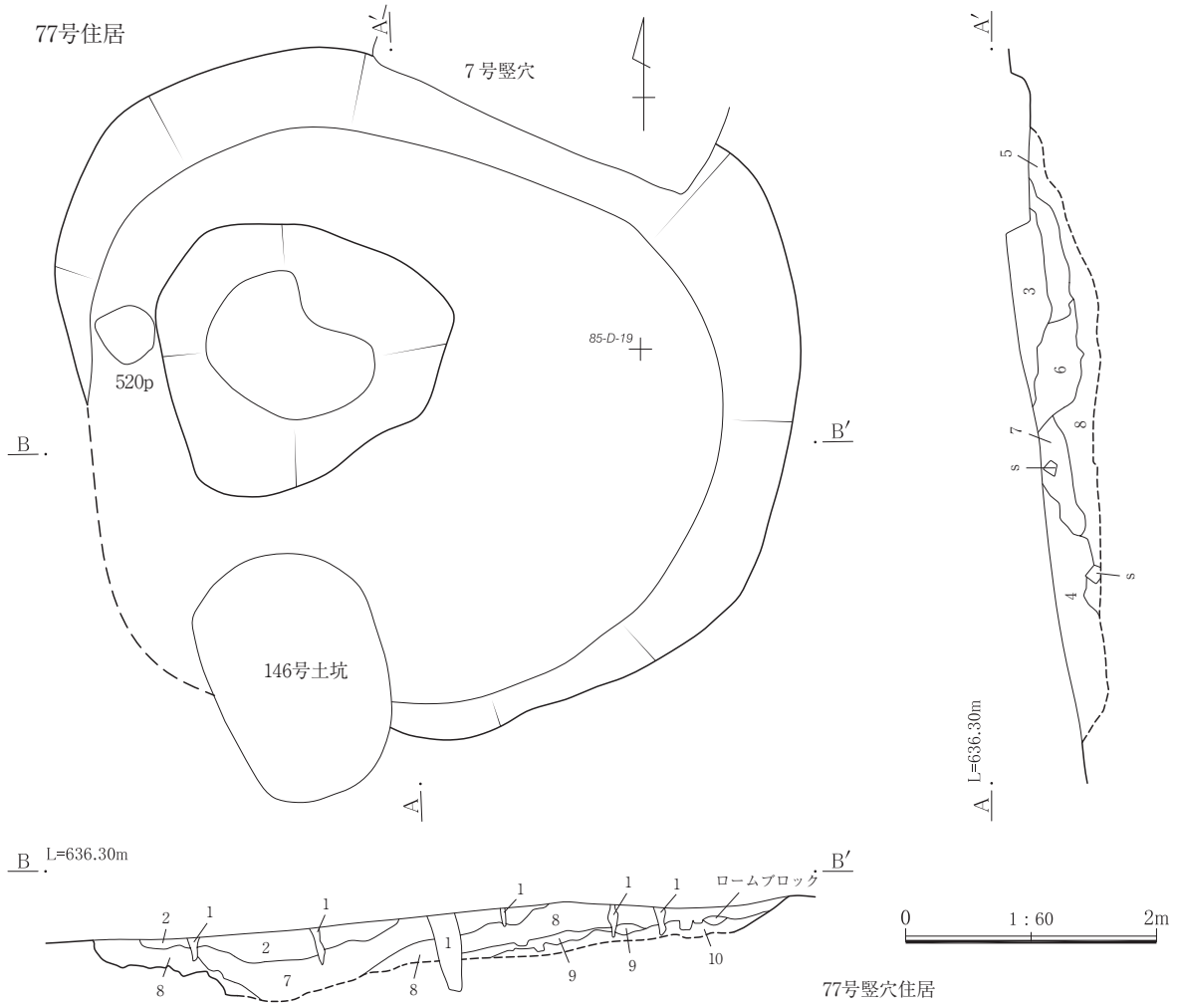
78号竪穴住居（第83図、写真図版19）

85区B－19、C－19グリッドに位置する。重複関係は無い。住居の規模は長軸約２ｍ以上、短軸約3.2ｍの隅丸の方形で、面積は6.4㎡以上である。遺構確認面からの深さは約20cmで、壁は直立気味に立ち上がる。埋没土は基本土層の第Ⅱ層から第Ⅲ層を中心としている。カマドは確認出来ない事から、東壁に位置していたと推定される。西側の床が硬化している。土坑やピット、柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物はほとんど無い。

79号竪穴住居（第84図、写真図版19）

85区Y－16・17、85区A－16・17グリッドに位置する。北西隅部分が残存するだけで、住居の規模は長軸約3.5m、短軸約2.6mのやや楕円の形状で、面積は約９㎡以上である。遺構確認面からの深さは約30㎝で、壁はほとんど斜めの感じで緩やかに立ち上がる。東側が８号倒木により壊されているために、埋没土は僅かしか残っていなかった。床下土坑や柱穴は検出されず、周溝も確認出来なかった。遺物はほとんど無い。

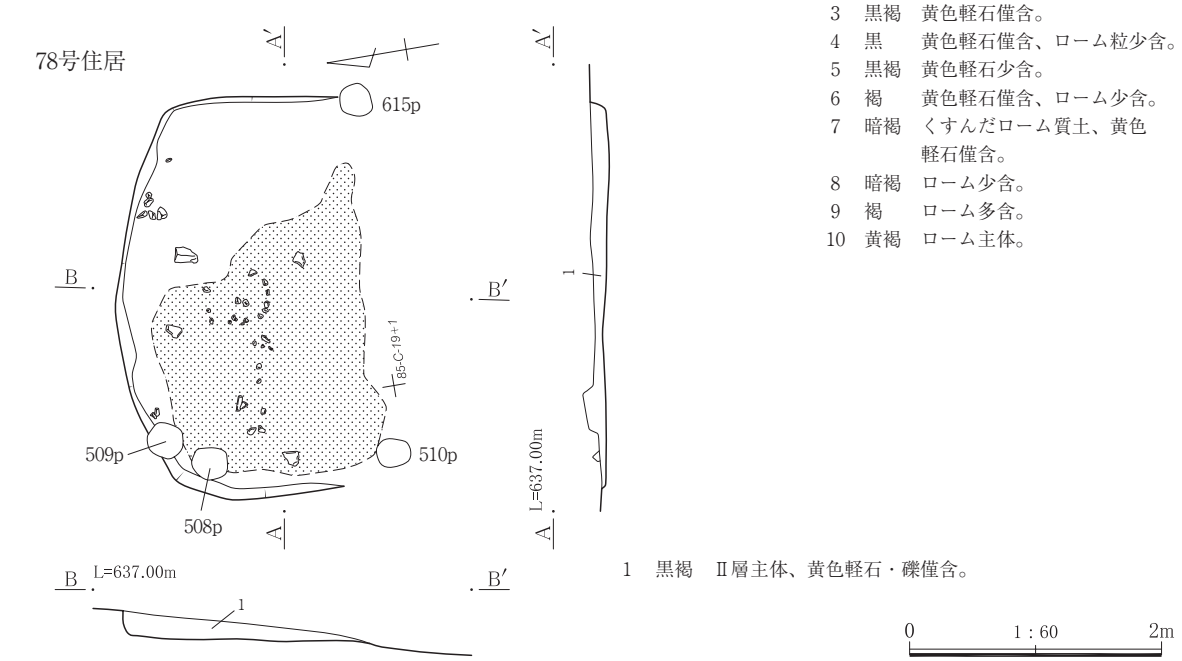
追記　写真図版14の48号竪穴住居と、写真図版14・15の68号竪穴住居は、縄文時代の遺構であるが、間違って掲載している。ご容赦願いたい。



77号竪穴住居

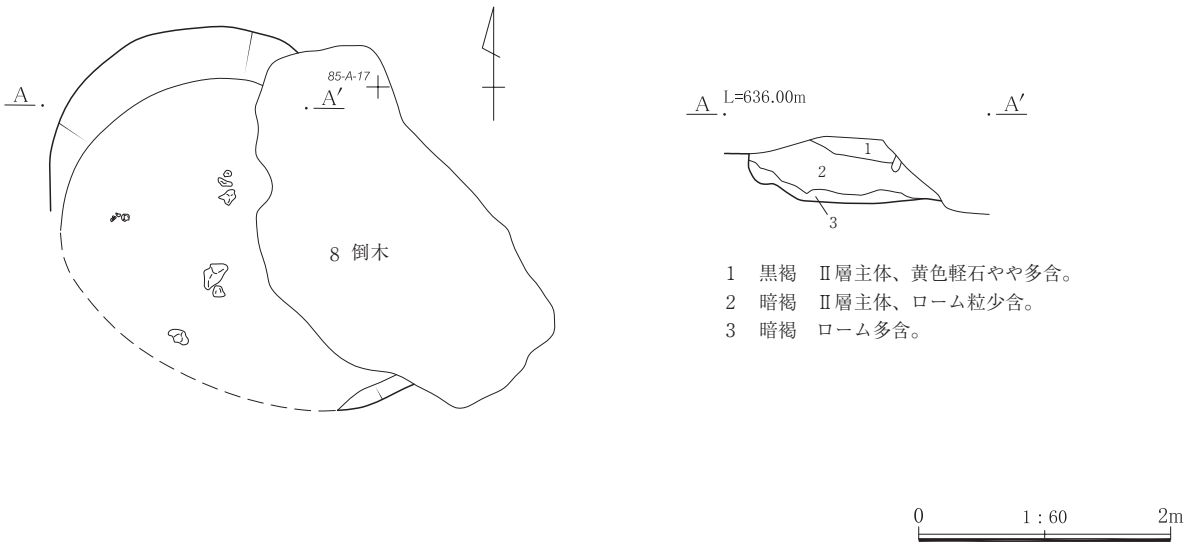
1　黒褐　根の撹乱。
2　暗褐　Ⅱ層主体、ローム粒僅含。
3　黒褐　黄色軽石僅含。
4　黒　　黄色軽石僅含、ローム粒少含。
5　黒褐　黄色軽石少含。
6　褐　　黄色軽石僅含、ローム少含。
7　暗褐　くすんだローム質土、黄色軽石僅含。
8　暗褐　ローム少含。
9　褐　　ローム多含。
10　黄褐　ローム主体。

第82図　77号竪穴住居遺構



1　黒褐　Ⅱ層主体、黄色軽石・礫僅含。

第83図　78号竪穴住居遺構



第84図　79号竪穴住居遺構

2　竪穴遺構

これ以外に、発掘調査時に遺物の多さと、焼土粒や炭化物の多さ、それに北から南に向かう緩やかな傾斜の中でも、壁状の段差が３ヶ所確認できた事から、それぞれを北壁とする竪穴遺構を３基設定したものの、埋没土も北壁付近に僅かに浅く残っているだけで､それ以外の場所の壁がはっきりしておらず、カマドなどの痕跡も分からない。

５号竪穴遺構（第85図、写真図版19）

85区G－25、H－25グリッドに位置する。重複関係は無い。規模は、長軸約3.0m以上、短軸約2.0m以上で形状はおそらくは方形と考えられ、深さは25㎝で床面はほぼ平らである。残存状態は北壁の西側から北西隅の部分が僅かに確認されただけで、床面も硬くなく平らでもない。遺物は出土していない。

６号竪穴遺構（第86図、写真図版19）

95区I－６・７、J－７グリッドに位置する。重複関係は無い。規模は、長軸約4.0m、短軸約1.1mのほぼ隅丸の長方形で、深さは約10㎝と僅かである。残存状態は北壁とその両端の北東隅と北西隅部が確認されただけで、床面も硬くなく平らでもない。遺物は出土していない。

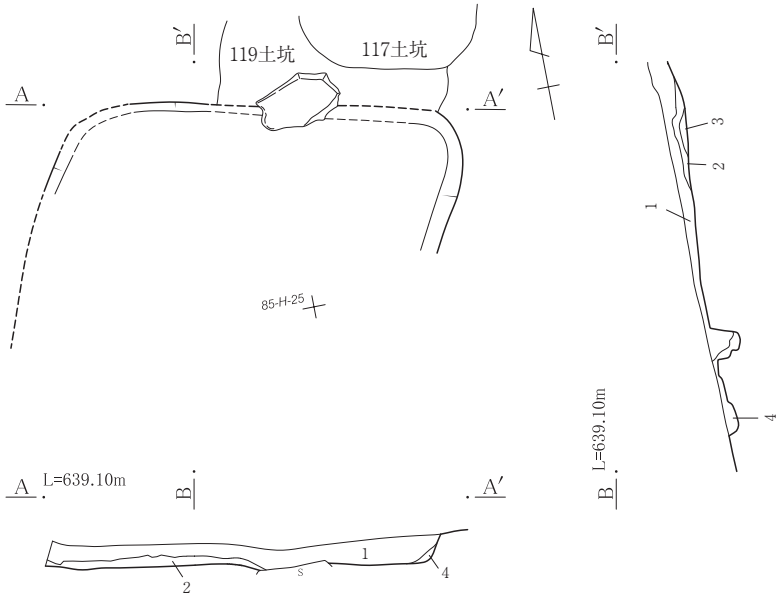
７号竪穴遺構（第87図、写真図版20）

85区C－19・D－19グリッドに位置する。重複関係は無い。規模は、長軸約2.8m、短軸約2.6mのほぼ正方形で、深さは25㎝で床面はほぼ平らである。遺物は出土していない。

（２）遺物

(第174～177図、写真図版62～64)

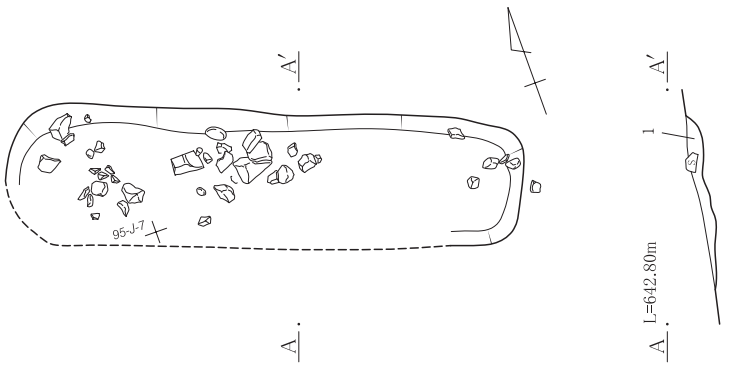
本遺跡からは、土師器と須恵器、灰釉陶器、金属製品や石製品など多くの遺物が出土しているが、竪穴住居などの平安時代の遺構から出土した遺物については、個々の遺構で収録している。遺構外出土の遺物は、160～163頁に収録している。その中で特に、羽釜については「吉井型」と「月夜野型」と呼ばれる特徴的な形態があり、これについては後半部分でまとめている。また、灰釉陶器については神谷氏に第４章第４節でまとめて頂いた。さらに、多数出土している墨書土器についても、第４章第５節で高島氏にまとめていただいた。



1　黒褐　Ⅱ層主体、ローム粒多含。
2　暗褐　Ⅲ層にⅣ層含。ローム粒少含。
3　黒褐　Ⅱ層主体。
4　暗褐　３層にローム粒含。

0　1：60　2m

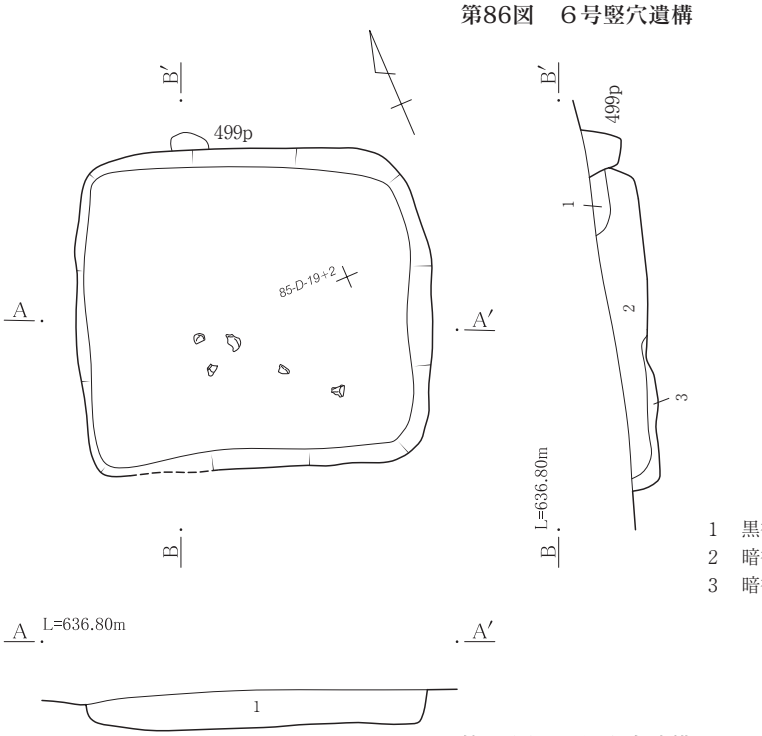
第85図　５号竪穴遺構



1　暗褐　Ⅱ層主体、礫少含。

0　1：60　2m

第86図　６号竪穴遺構



1　黒褐　黄色軽石・ローム粒少含。
2　暗褐　Ⅱ層主体、ローム粒少含。
3　暗褐　ローム多含。

0　1：60　2m

第87図　７号竪穴遺構

第３節　中近世

（１）遺構

中近世の遺構としては、掘立柱建物・テラス・石列・石垣・礎石・陥し穴・墓・土坑・溝・ピット・焼土・湧水・倒木等である。陥し穴は遺跡のほぼ全面に存在するが、その他は遺跡の南側半分の84区から85区にかけて集中している。特に、85区は地域の民間信仰の対象である『つぶらっこ』様を中心に分布している傾向が見て取れる。

１　掘立柱建物（第89～108図、写真図版20・21）

本遺跡では、中世から近世にかけての掘立柱建物が20棟検出されているが、個々の明確な帰属時期を直接示す遺物の出土が無いものの、テラス状の造成地と考えられる部分に位置し、中世から近世にかけての遺物が多く出土している事から、その多くが中世に属すると考えられる。ここでは、事実記載を中心とし、詳細については飯森康広氏による第４章第３節を参照されたい。

これらの掘立柱建物の多くは、上段の１号テラス、中段の２号テラス（発掘調査時は１号テラスと呼称）、下段の３号テラス（発掘調査時は２号テラスと呼称）というように、雛壇状に造成されたテラスの部分に存在しており、これらは『つぶらっこ』様と呼ばれる子宝・子育てのシンボルとして信仰されている大岩の南側に展開している。この岩の北西側には溝が検出されており、この岩を動かすために掘り込まれた可能性が高い。こうした事から、この岩への信仰がテラスの造成に大きく係わった可能性が高く、当然ながらここに立ち並ぶ掘立柱建物も大いに関係するものと考えられる。この『つぶらっこ』様については、後述する事とする。

また、掘立柱建物はテラスの部分の西側に集中する一群と、東側に集中する一群とに大きく分かれる。特に、西側は３段の雛壇状の造成がなされており、その規模からも『つぶらっこ』様との関係が強いものと考えられる。さらに、39号土坑のような竪穴状の土坑が関係するものもあり、建物構造に何らかの特色があると考えられるとともに、この地域で出土する中近世の遺物にも注目したい。

次に、個々の掘立柱建物について記述するが、重複や新旧関係等については、飯森康広氏による第４章第３節を参照していただきたい。

１号掘立柱建物（第89図）　85区Ｉ・Ｊ－20～22、Ｋ・Ｌ－21・22グリッドに位置する。２号テラス西側に位置する。

２号掘立柱建物（第90図）　85区Ｇ－21、Ｈ・Ｉ－20～22グリッドで、２号テラス西側に位置する。

３号掘立柱建物（第91図）　85区Ｇ－21、Ｈ－20～22、Ｉ－20・21グリッドで、２号テラス西側に位置する。

４号掘立柱建物（第92図、写真図版20）　85区Ｅ－20、Ｆ・Ｇ－19～21、Ｈ－19～22、Ｉ－20・21グリッドで、２号テラス西側に位置する。

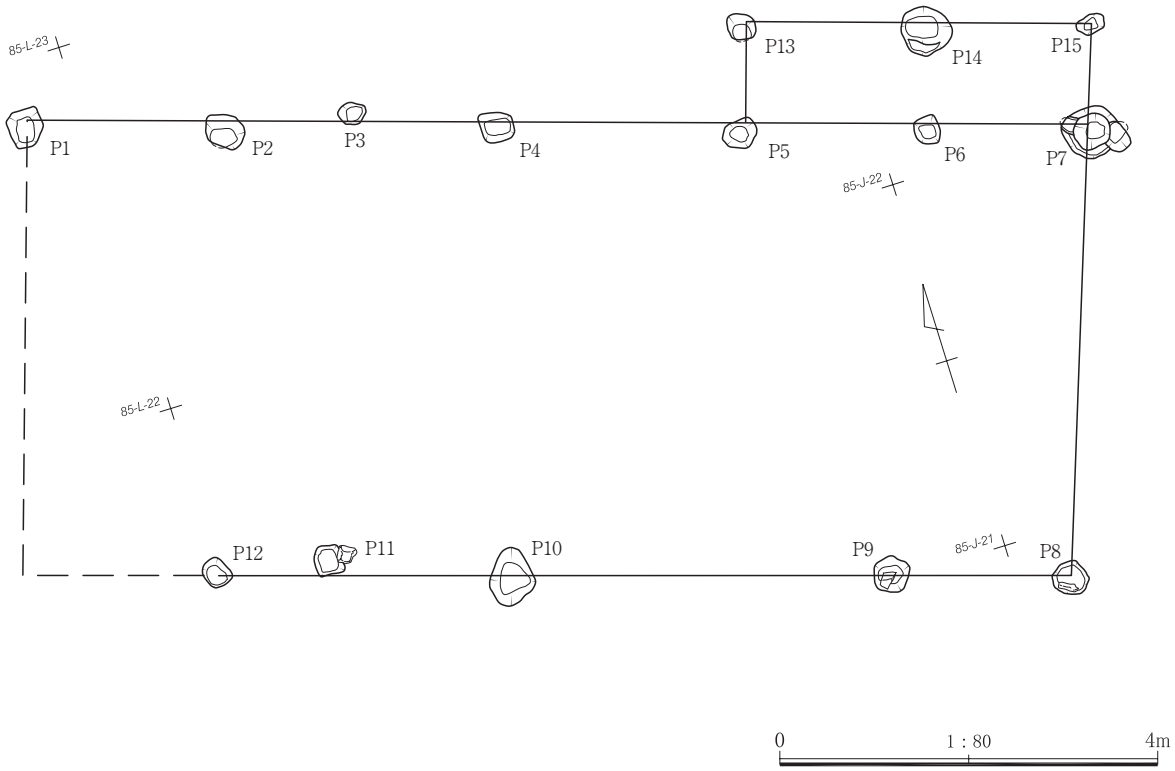
５号掘立柱建物（第93図、写真図版20）　85区Ｅ・Ｆ－19・20、Ｇ・Ｈ－19～21グリッドで、２号テラス西側に位置する。

６号掘立柱建物（第94図、写真図版20）　85区Ｅ－20、Ｆ・Ｇ－19～21グリッドで、２号テラス西側に位置する。

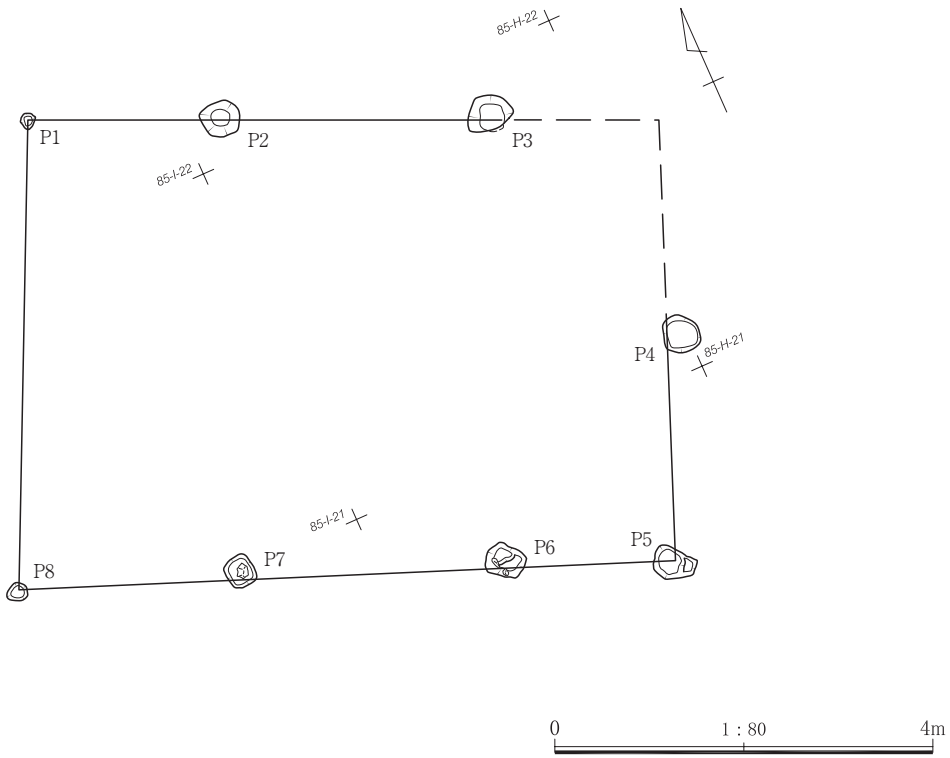
７号掘立柱建物（第95図、写真図版20）　85区Ｃ－19、Ｄ・Ｅ－18～20、Ｆ－19グリッドで、２号テラス東側に位置する。

８号掘立柱建物（第96図）　85区Ｃ－19・20、Ｄ・Ｅ－18～20、Ｆ－18・19グリッドで、２号テラス東側に位置する。

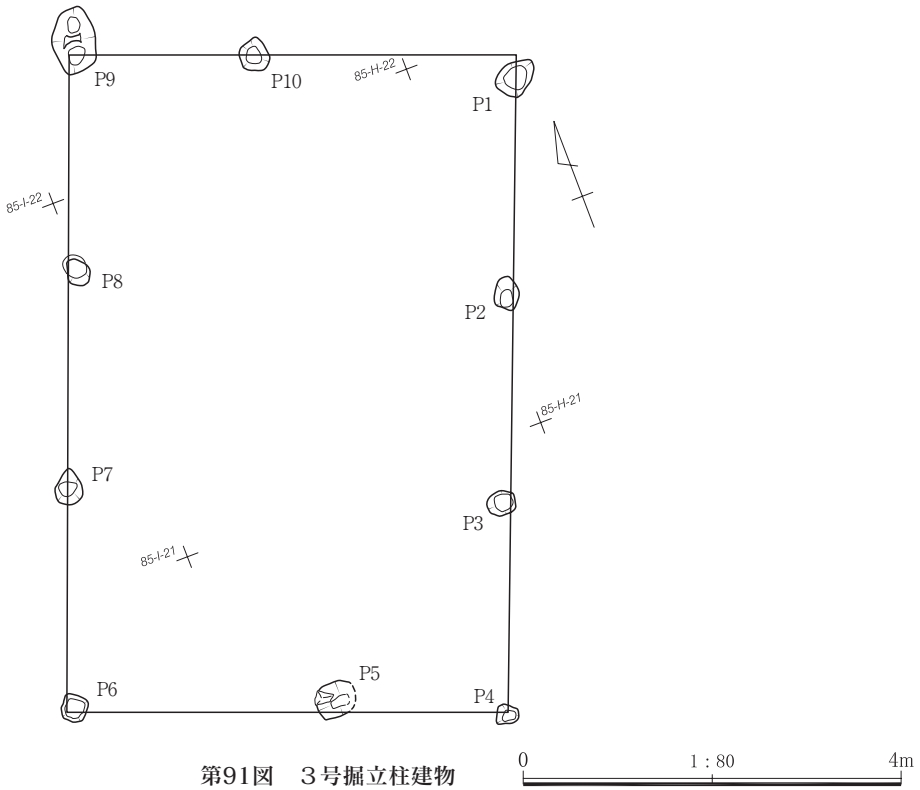
９号掘立柱建物（第97図、写真図版20）　85区Ｅ・Ｆ・Ｇ－18～20グリッドで、２号テラス東側に位置する。



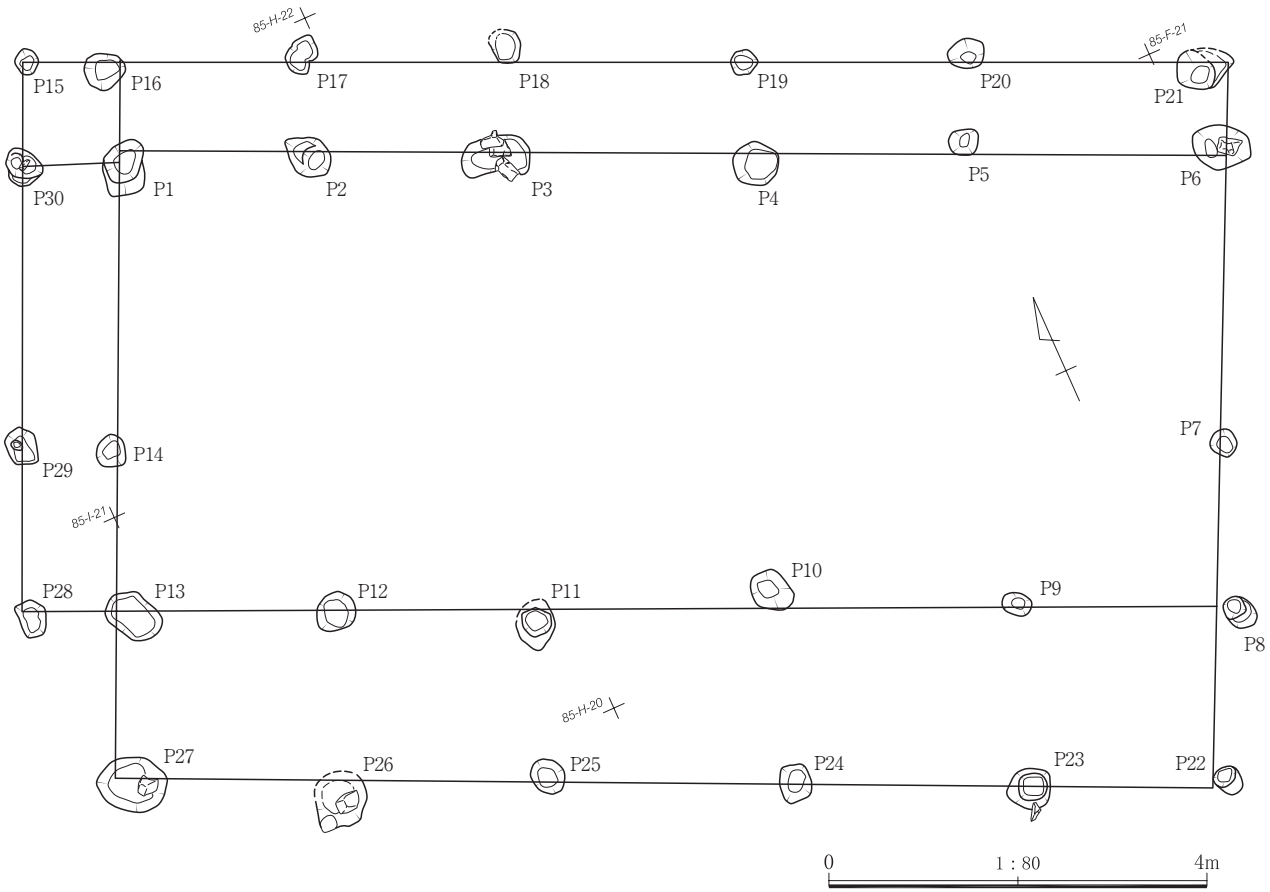
第89図　１号掘立柱建物



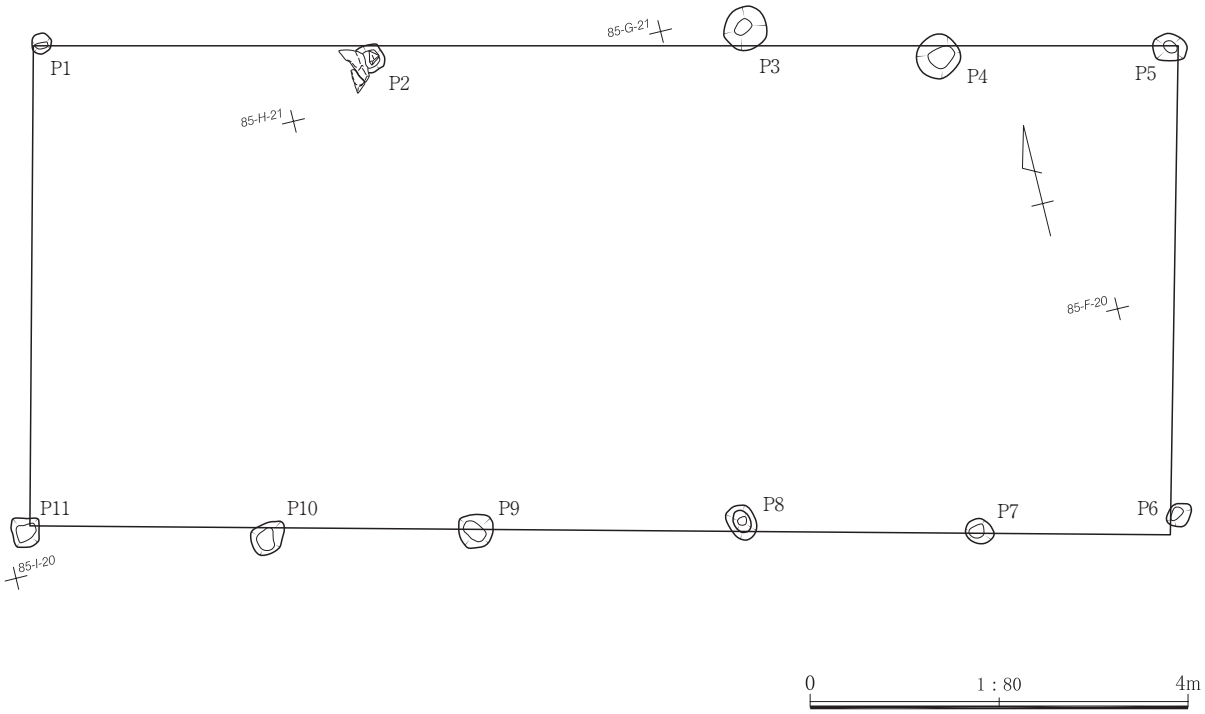
第90図　２号掘立柱建物



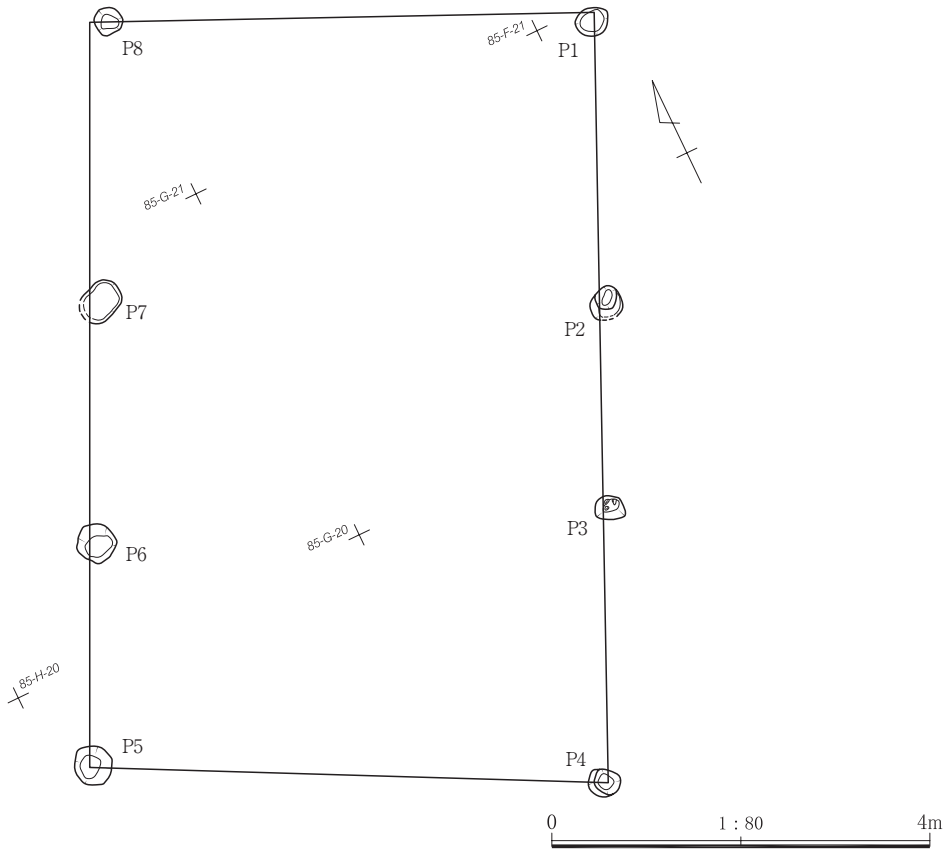
第91図　３号掘立柱建物



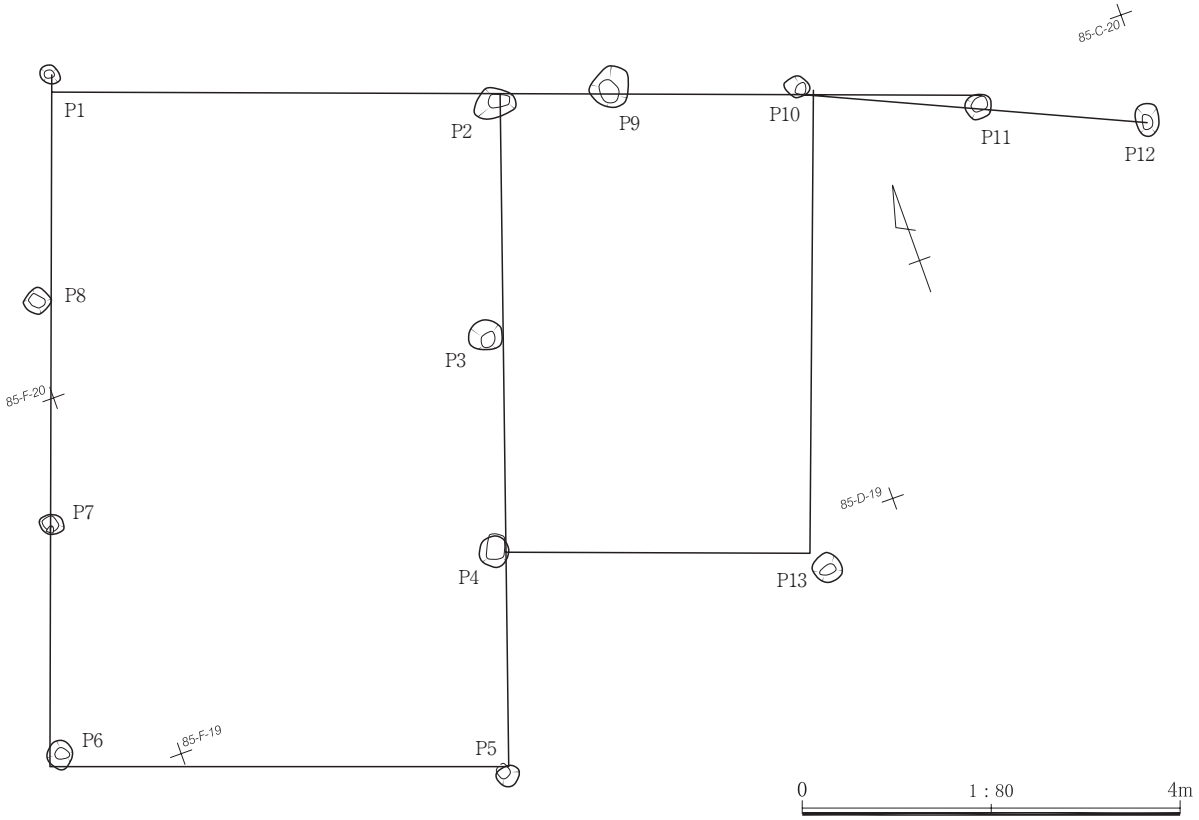
第92図　４号掘立柱建物



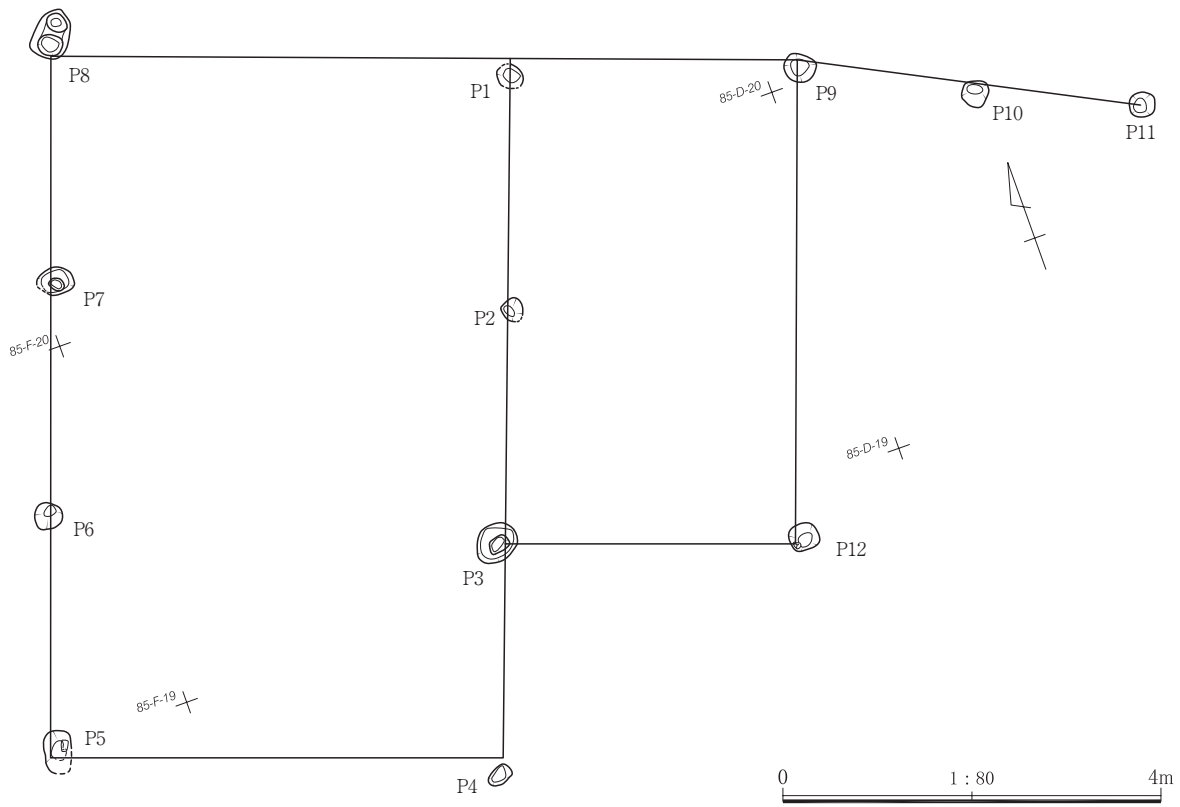
第93図　５号掘立柱建物



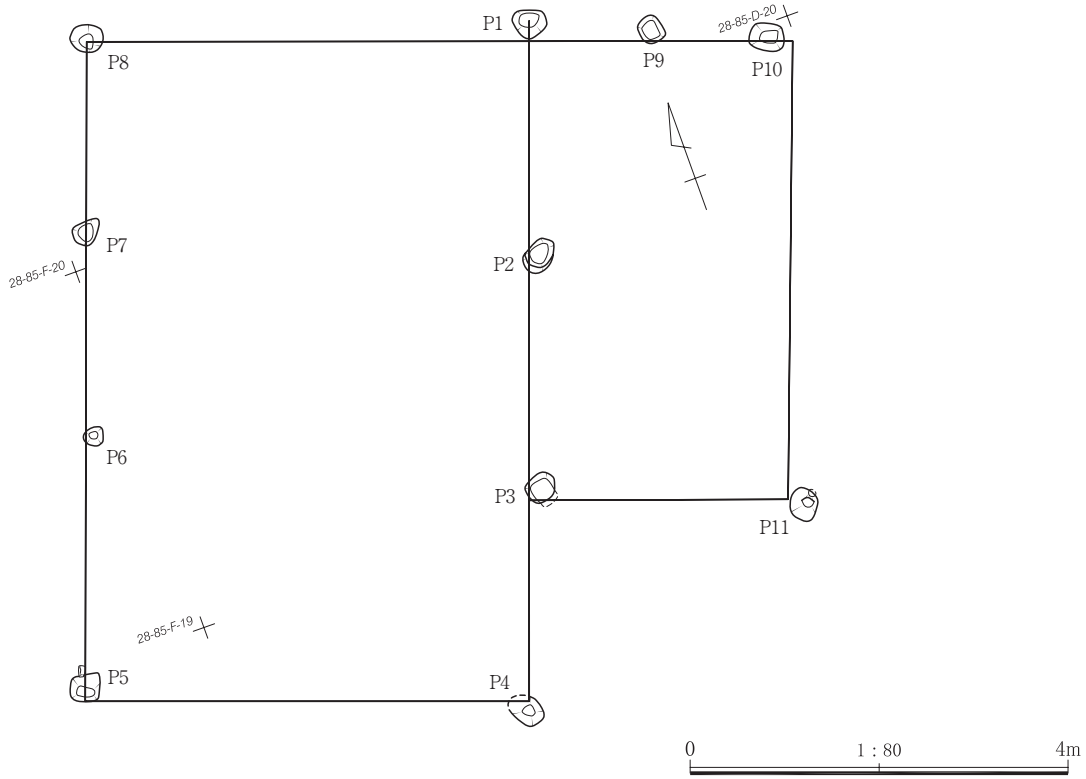
第94図　６号掘立柱建物



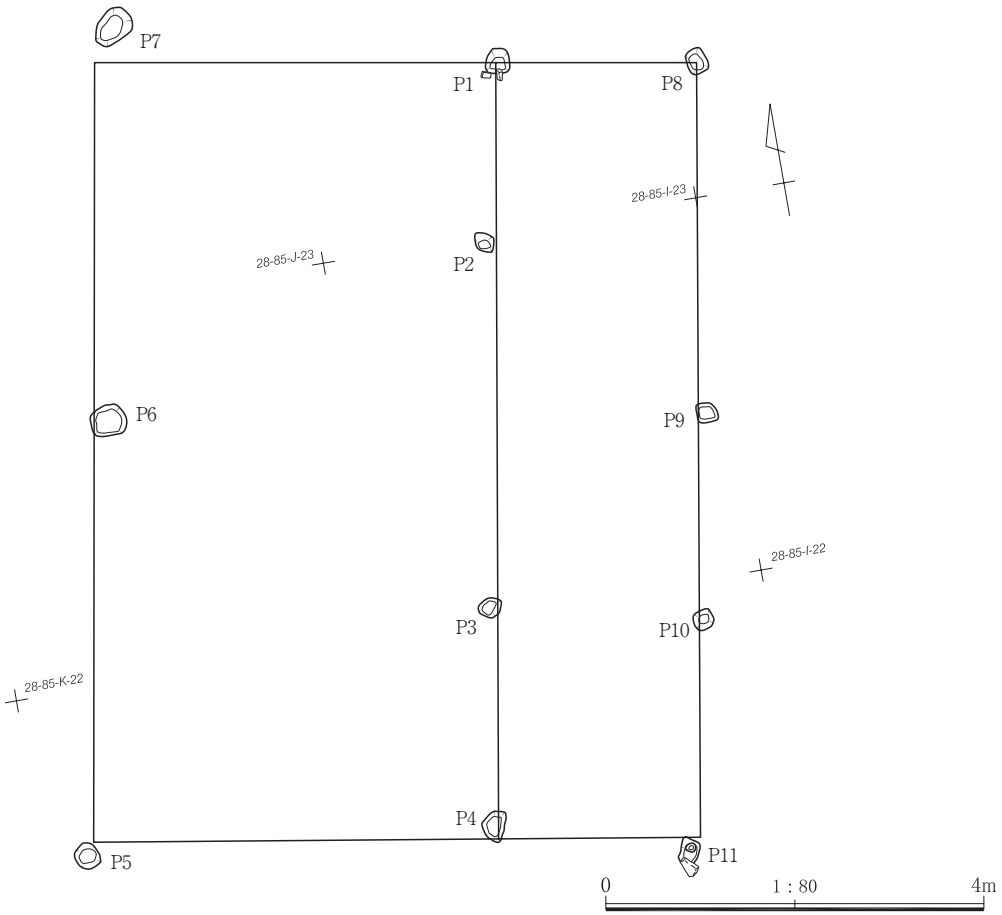
第95図　７号掘立柱建物



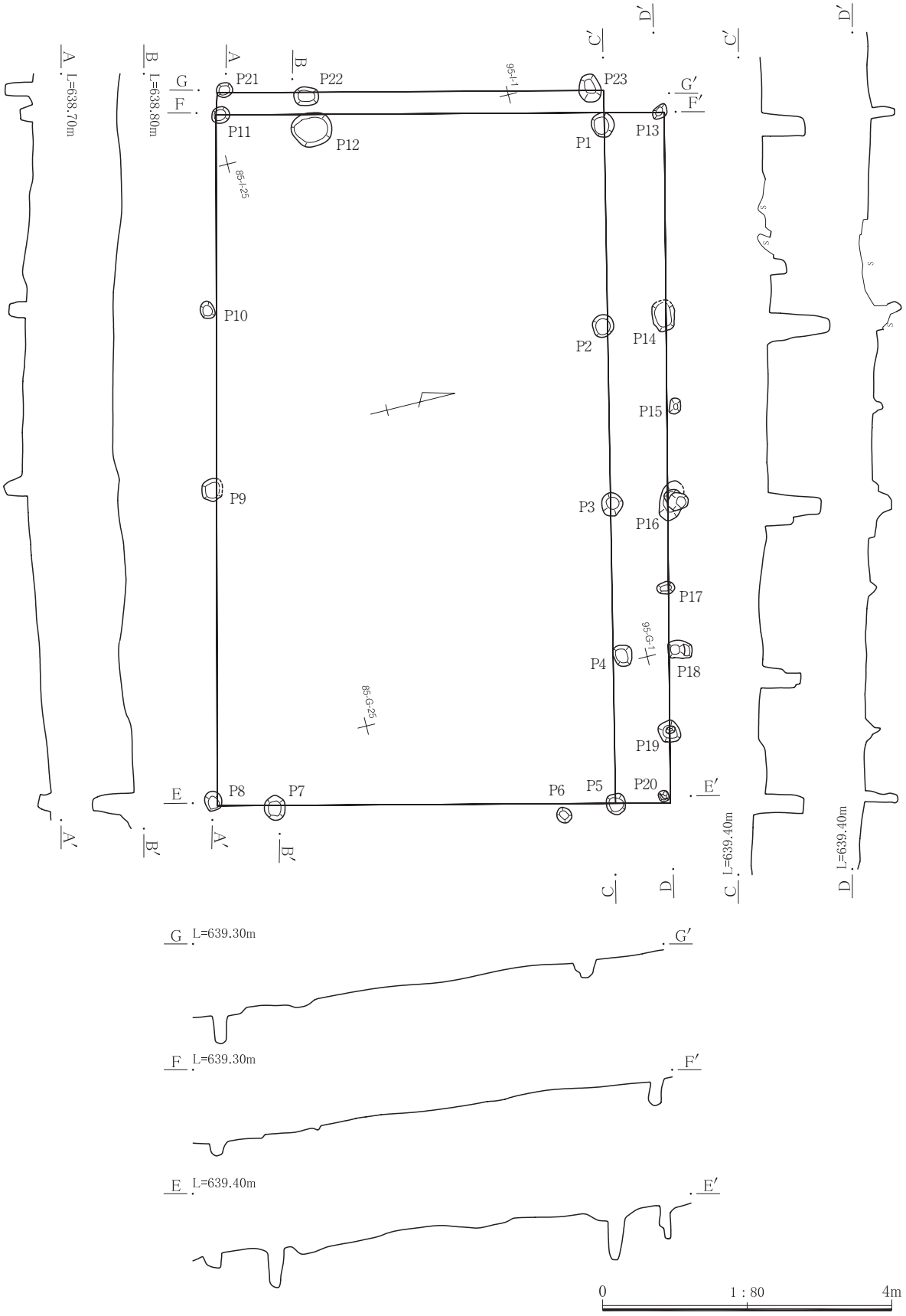
第96図　８号掘立柱建物



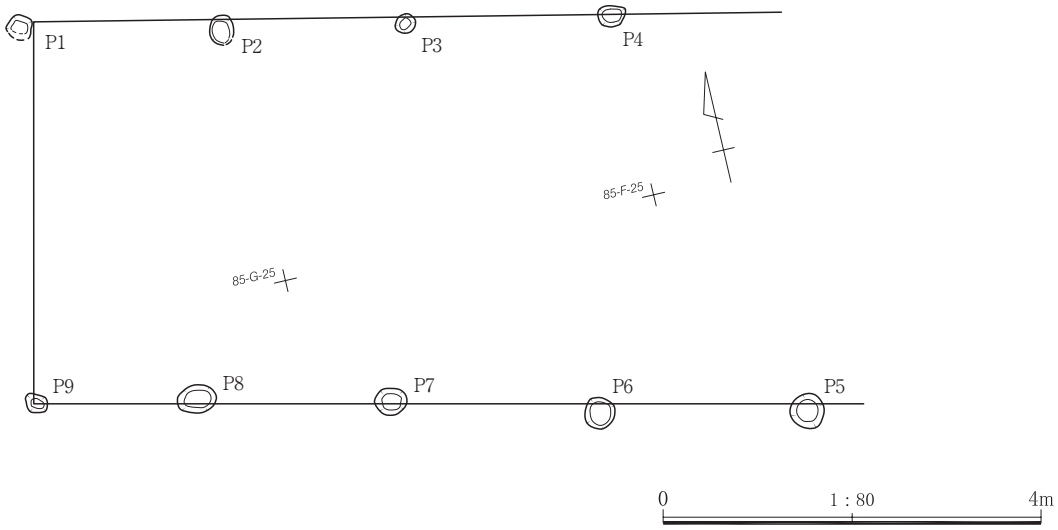
第97図　９号掘立柱建物



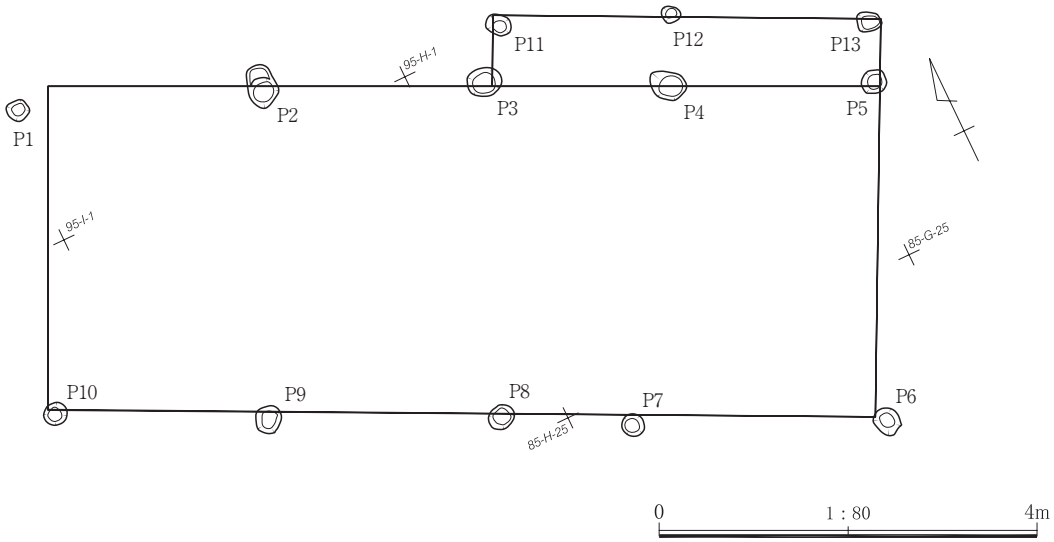
第98図　10号掘立柱建物



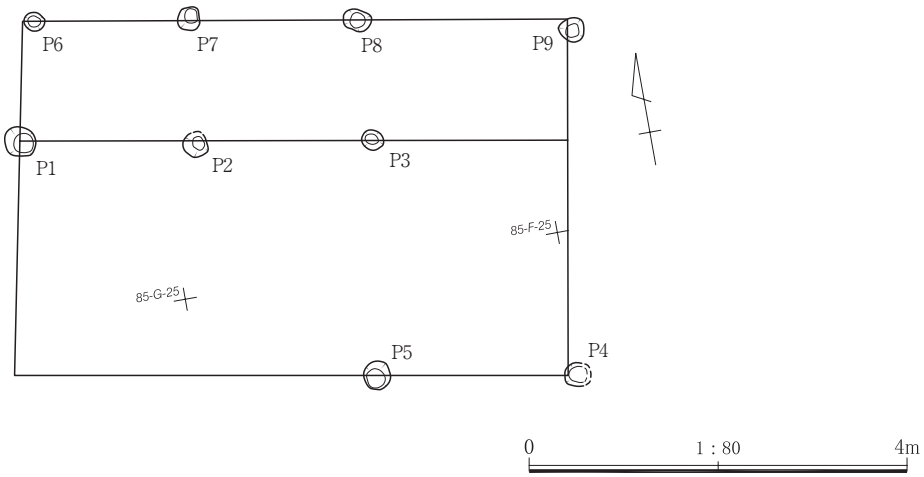
第99図　11号掘立柱建物



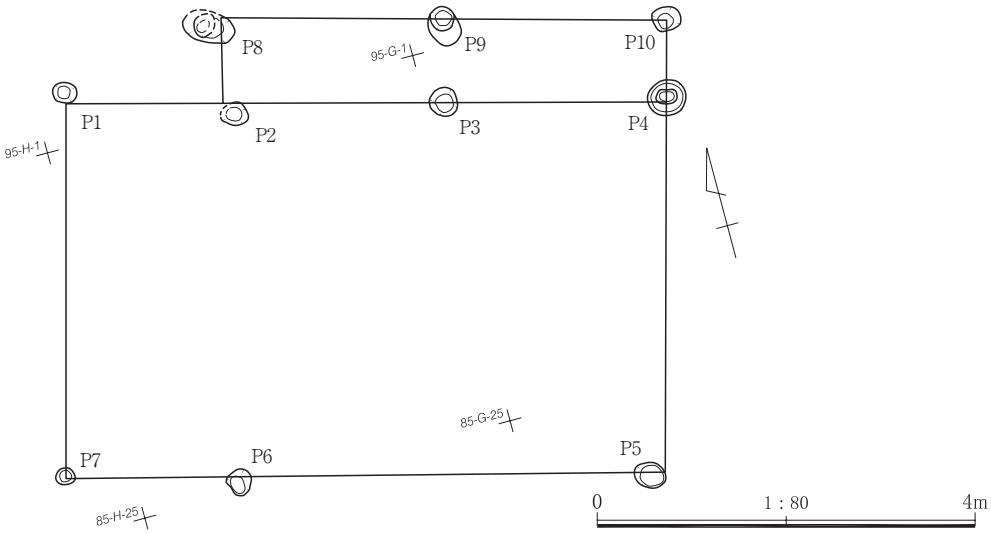
第100図　12号掘立柱建物



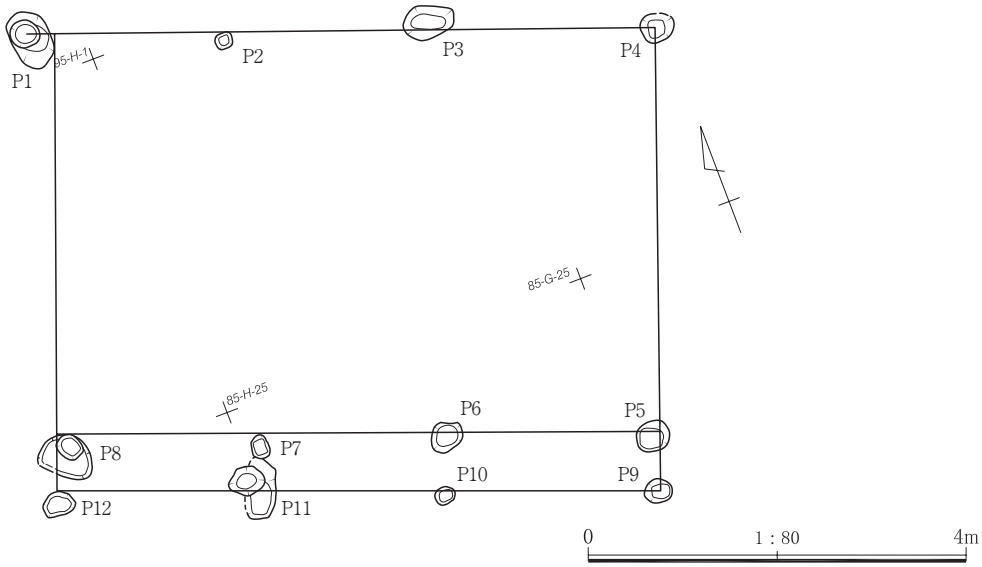
第101図　13号掘立柱建物



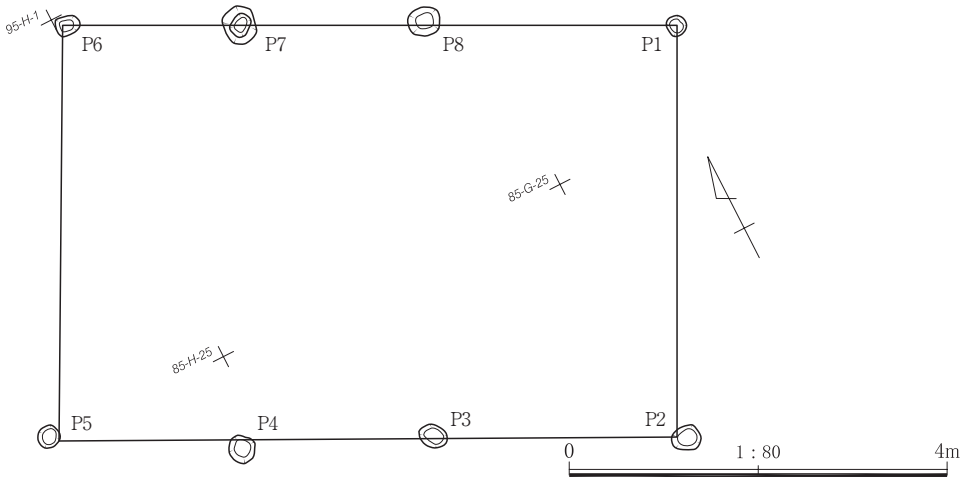
第102図　14号掘立柱建物



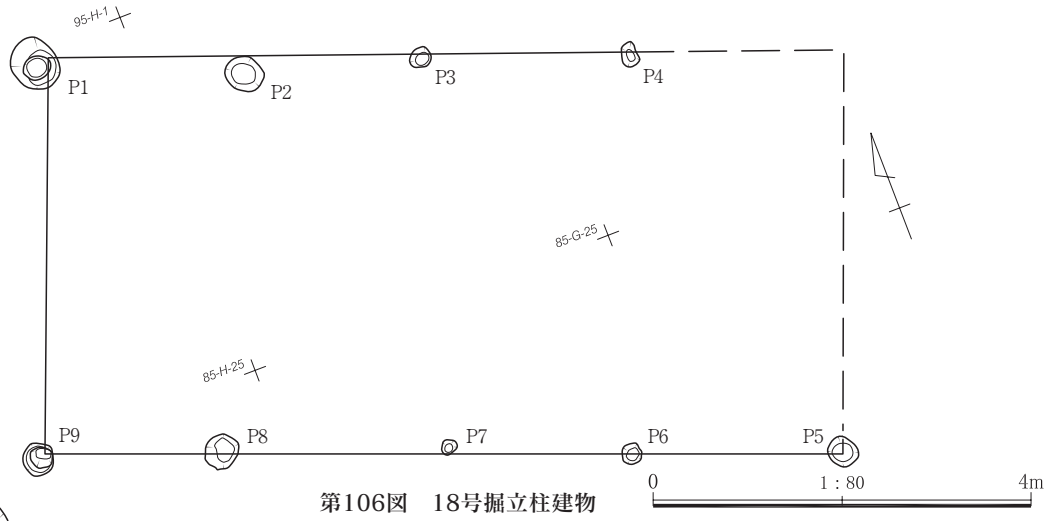
第103図　15号掘立柱建物



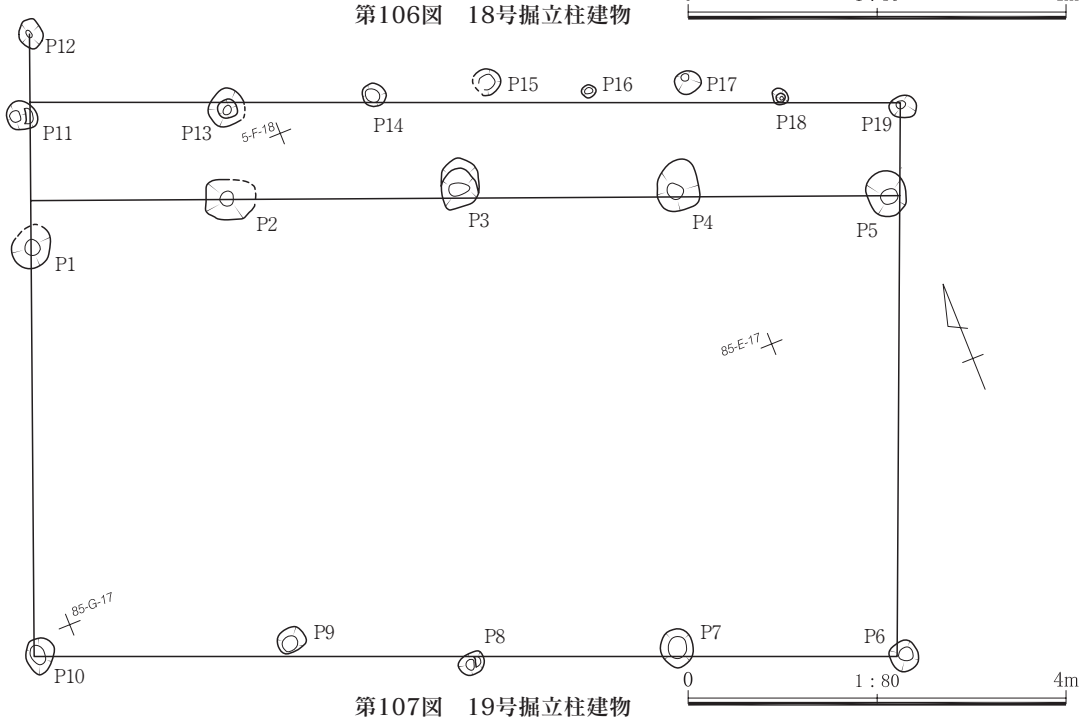
第104図　16号掘立柱建物



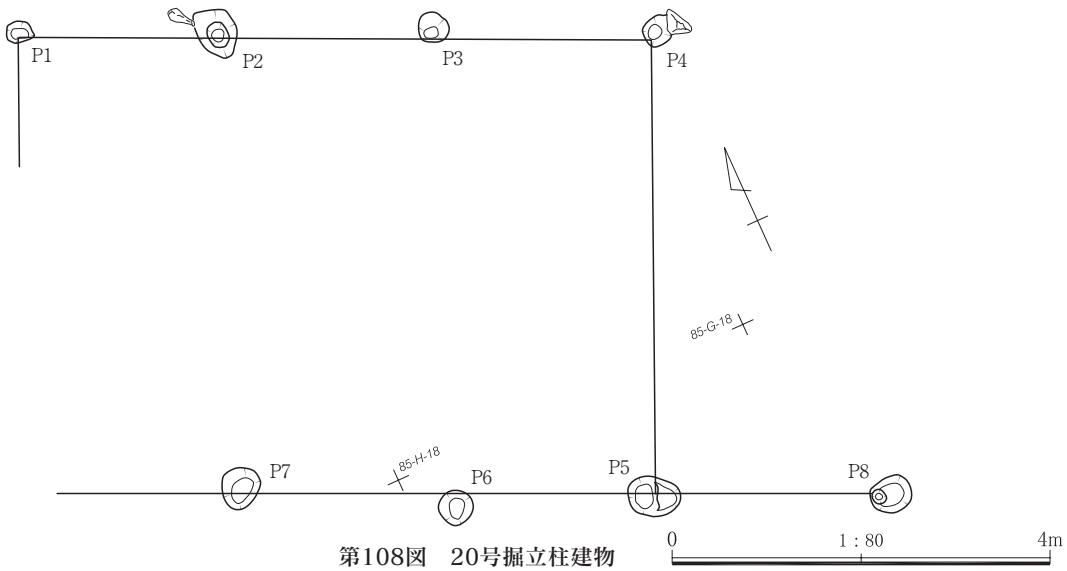
第105図　17号掘立柱建物



第106図　18号掘立柱建物



第107図　19号掘立柱建物



第108図　20号掘立柱建物

１号石垣
1　黒褐　Ⅲ層に近い、白色～茶色軽石やや多含。ローム粒少含。
2　暗褐　Ⅲ層。
3　暗褐　Ⅱ層主体、ローム粒少含。
4　褐　　Ⅴ層主体。
5　暗褐　Ⅲ層含。砂質。
6　暗褐　Ⅲ層僅含。ローム粒少含。砂質。

0　1：60　2m

第109図　１号石垣

10号掘立柱建物（第98図）　85区Ｈ－23、Ｉ・Ｊ－21～23グリッドで、２号テラス西側に位置する。

11号掘立柱建物（第99図）　85区Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ－24～25、95区Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ－１グリッドで、１号テラスに位置する。

12号掘立柱建物（第100図）　85区Ｅ・Ｆ・Ｇ－24・25グリッドで、１号テラスに位置する。

13号掘立柱建物（第101図）　85区Ｆ・Ｈ・Ｉ－25、Ｇ－24・25、95区Ｇ・Ｈ－１グリッドで、１号テラスに位置する。

14号掘立柱建物（第102図）　85区Ｅ・Ｆ－24・25、Ｇ－25グリッドで、１号テラスに位置する。

15号掘立柱建物（第103図）　85区Ｆ・Ｇ－24・25、Ｈ－25、95区Ｆ・Ｇ－１グリッドで、１号テラスに位置する。

16号掘立柱建物（第104図）　85区Ｆ・Ｇ－24・25、Ｈ－24・25、95区Ｈ－１グリッドで、１号テラスに位置する。

17号掘立柱建物（第105図）　85区Ｆ・Ｇ・Ｈ－24・25グリッドで、１号テラスに位置する。

18号掘立柱建物（第106図）　85区Ｆ・Ｇ・Ｈ－24・25、95区Ｈ－１グリッドで、１号テラスに位置する。

19号掘立柱建物（第107図、写真図版20）　85区Ｄ・Ｇ－16・17、Ｅ・Ｆ－16～18グリッドで、３号テラスの東側に位置する。

20号掘立柱建物（第108図、写真図版21）　85区Ｆ－17、Ｇ・Ｈ－17～19グリッドで、３号テラスの西側に位置する。

本遺跡の掘立柱建物は、大きくは３つのグループで、さらに細かく見ると５つのまとまりに分けられる。それは、１号テラスに２号テラスの西側と東側、３号テラスの西側と東側とである。

まず、最も北側の上段の１号テラスは11号～18号掘立柱建物の８棟、中段の２号テラスの西側には１号～６号・10号の各掘立柱建物の７棟、２号テラスの東側には７号～９号掘立柱建物の３棟、下段の３号テラスの東側には19・20号掘立柱建物の２棟が存在する。すべてが同時存在ではないものの、明らかにそれぞれの距離を保ちあって、何棟かが同時に建てられていたものと考えるのが妥当であろう。はたして、どのような建物が、どのような目的で建てられていたのであろうか。今後の課題でもある。

なお、３号テラスの西側部分は数多くのトレンチを入れて確認作業を行ったものの、ピット類は確認出来なかった。ここには掘立柱建物が展開しなかったものと考えられる。

２　石垣（第109図、写真図版22）

テラスの部分の段差面の壁押さえと考えられる。１号石垣は、85区Ｊ・Ｋ－４、Ｋ・Ｌ－５、Ｌ－６に位置する。その規模が大きく、高さ1.3m、長さ約13mであり、東側でＬ形に折れている。大小様々な形状の自然の石を利用して、最大で８段～10段程やや斜めに積み上げている。その規模と位置から見て、宅地や畑の雛壇造成に伴うと考えられるが、建物等の遺構は確認出来なかった。付近から出土した遺物も含めてみてみると、近世の割合が高く、江戸時代かそれ以後の築造と考えられる。　地元の方からのご教示では、このあたりは昭和の初期までに麻畑が広がっていたとの話であり、造成されたテラスの一部に広がる焼土（16号焼土）についても、釜を設置して火を焚いて湯を沸かした場所だったとの話である。その目的は、収穫した麻を沸騰した湯に２～３分入れて煮る事により、繊維を丈夫にするとともに、害虫を殺す事で、この麻煮は麻干しをした後にかびを防ぐためにもう再度行うとの事である。

２号石垣は84区Ｗ・Ｘ－３グリッドに位置する。南側が調査区域外の為、計測できなかったこの溝は、馬の背状の尾根との区切り溝とも考えられる。２段以上に積み上げた痕跡がない事から、あるいは、石列と呼称する方がいいのかも知れない。

３　集石（第110図）

１基が確認されている。12号集石（115号土坑）で

ある。95区Ｄ－３・４グリッドに位置する。基本的には土坑であるが、埋没土の中に多量に石が埋設されている。これは畑として利用する際に邪魔な石を、穴を掘りそこに埋め込み、上に土をかける事で再び耕地として使用するための処理穴である。特に底部付近では、集石の西面と南面の石を確実に揃えている事が確認できる。包括する石の数は少ないものの、同様の遺構が91号や145号、147号の土坑である。このような穴は、下原遺跡でも多数出土しており、大きく２種類に分けられるうちの後者である。ひとつは「ヤックラ」と同様に耕作等に邪魔な石を１ヶ所に集めた場所である。もうひとつは、基本的には土坑であるが、埋没土の中に多量に石が埋設されている。これは畑として利用する際に邪魔な石を、穴を掘りそこに埋め込み、上に土をかけることで再び耕地として使用するための処理穴である。どちらにしても、邪魔な石の処理のための遺構と言える。だが、この集石土坑もその時期がいつ頃のものかは、遺物の出土も無く、年代の基準となるテフラ等も確認できない事から、確認面が基本土層のⅡ層下面であることから、近世以前の可能性が高い。

４　石列（第111図、写真図版21）

いくつかの石がほぼ等間隔で並んでいるように見えた事から、調査時点で石列と判断した。

１号石列は85区Ｘ－19・20、Ｙ－20グリッドに位置し、長さが約5.5mである。

２号石列は第２テラスの北側、85区Ｄ・Ｅ－17、Ｅ・Ｆ－18グリッドに位置する。長さは約9.8mで、高さは約30㎝である。自然の石を使用して、雛壇の北の縁に１段の石を横に並べており、段の高さとほぼ同じ高さに積み上げられており、おそらくは中世の可能性が高い。

同様の石列と考えられる石の集中が一段上の１号テラスの北側の壁際にある事から、これについては３号石列としてもいいのかもしれない。85区Ｄ・Ｅ－20グリッドに位置する。

これらは、上に積み上げた状態ではなく、１段であるために石列としたが、本来は石垣に相当すると考えられる。

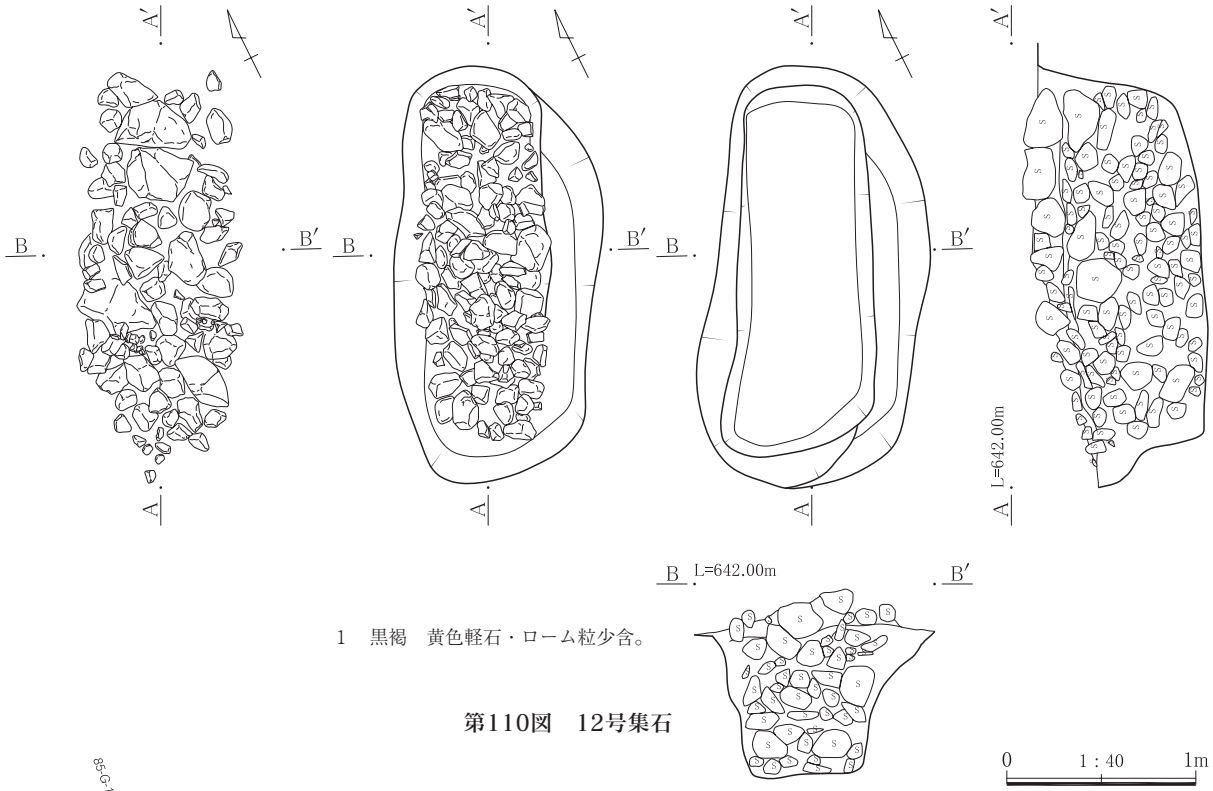
５　礎石（第111図、写真図版22）

調査時に、大小の石が集中し、中央部に柱を立てていたと考えられる穴状の空間が存在する事から、礎石的な遺構と判断した。85区Ｉ－25グリッドに位置する。

６　テラス（第８図、写真図版21）

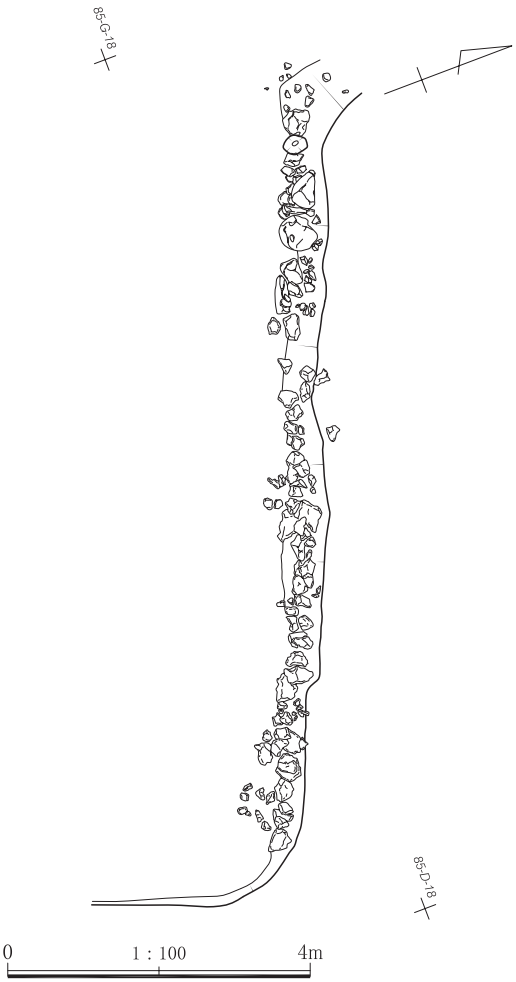
85区を中心に95区にかけて広がる地域一帯の傾斜地を東側が２段、西側を３段の雛壇状に造成しており、おそらくは建物等の配置をするスペースと考えられる。中段の２号テラスと下段の３号テラスの境の段に石を組んだ石垣が検出されており、他にも段差部分に石垣状に石を並べている部分がある。テラスの間の段差の高さは約30㎝である。最も面積が広いのが２号テラスで、１号テラスと３号テラスが同規模で続く。いずれも、２号テラス内に鎮座する民間信仰の対象である『つぶらっこ』様に関連すると思われる。

楡木Ⅱ遺跡の発掘調査区内には、地元の人が『つぶらっこ』様と呼ぶ大きな石が存在する。地元の方のお話によれば、この石のまわりには多数の小さな丸い石があり、これを借りて持ち帰って子宝に恵まれると石を倍にしてお返しする風習が、この地域を対象に行われていたとの事である。これは山からの大きな転石があちこちに存在する中で、その内の一つが小さな石を産むとされ、子宝縁起として信仰されていたものと考えられる。これを受けて、今回の発掘調査を開始する前に周辺の確認をしたものの、既にまわりの小石は無くなっており、本体の安山岩が存在するのみであったが、実際に発掘調査を進めると、周囲から数は少ないものの小石が出土し、さらにこの本体の大岩も南東方向に移動されたと考えられる痕跡が検出された。これは後述する溝の説明の中でも述べているが、幅の広い溝（２号溝）を掘り込む事により、北西の穴状の部分にあった『つぶ

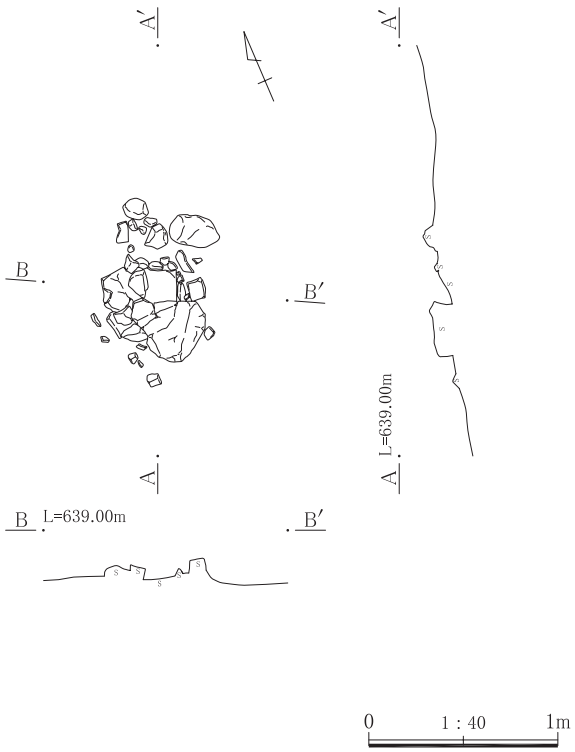


1　黒褐　黄色軽石・ローム粒少含。

第110図　12号集石

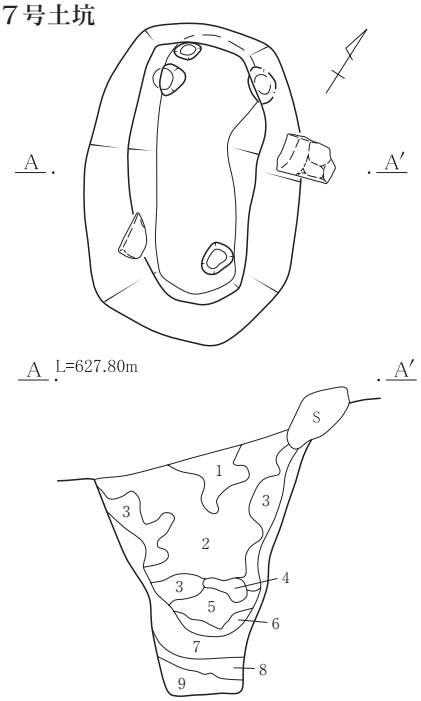


第111図　１号石列



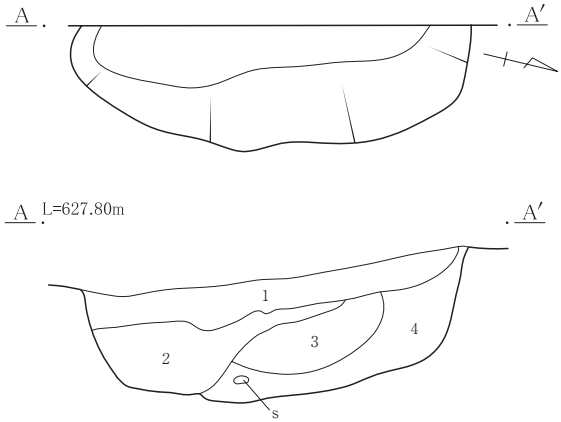
第112図　１号礎石

７号土坑



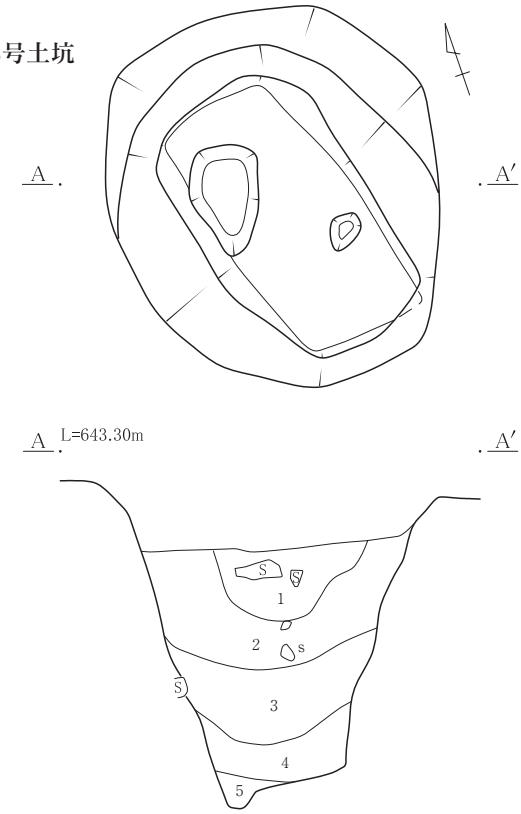
７号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒僅含。
2　暗褐　黄色軽石含。
3　黄褐　黄色～白色軽石含。
4　黒褐　ローム含。
5　褐　　ローム多含。
6　灰褐　ローム含。
7　褐　　ローム多含。
8　明褐　ローム主体。
9　黄褐　軽石主体、ローム少含。

10号土坑



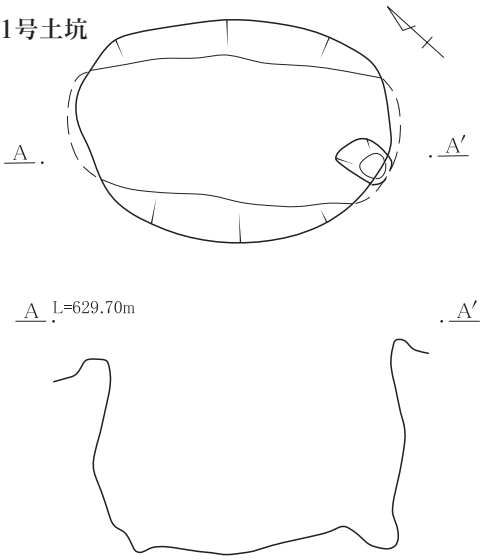
10号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒含。
2　黒褐　黄色軽石・ローム粒少含。
3　暗褐　Ⅴ層ブロック・ローム少含。
4　暗褐　ローム多含。

28号土坑



28号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒僅含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　黒褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。
4　暗褐　Ⅴ層に近い。
5　明褐　ローム主体。

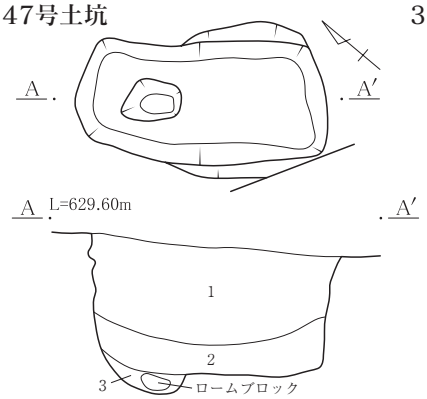
11号土坑



0　1：40　1m

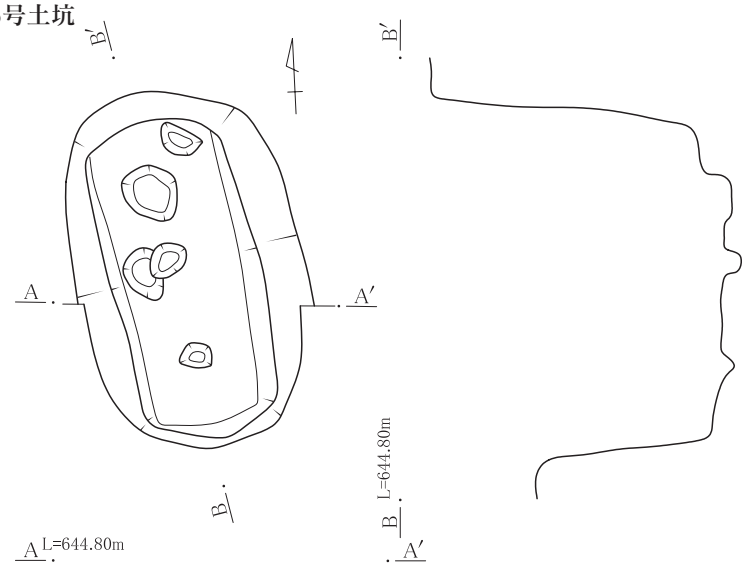
第113図　７・10・11・28号土坑

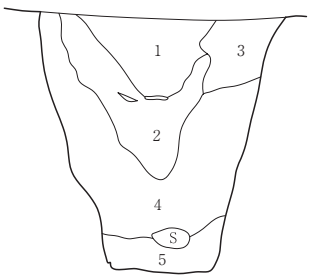
47号土坑



47号土坑
1　黒褐　ローム粒少含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　黒褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。

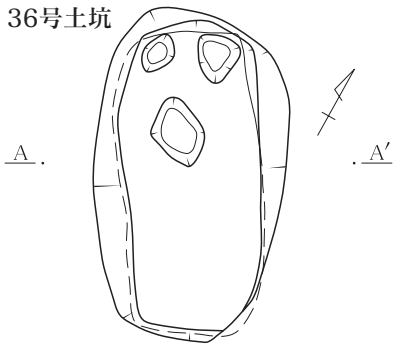
35号土坑

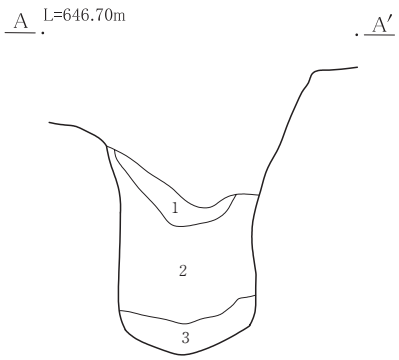




35号土坑
1　黒褐　Ⅱ層主体。
2　暗褐　黄色軽石多含。
3　黒褐　黄色軽石少含。
4　暗褐　ローム粒少含。
5　暗褐　ローム多含。

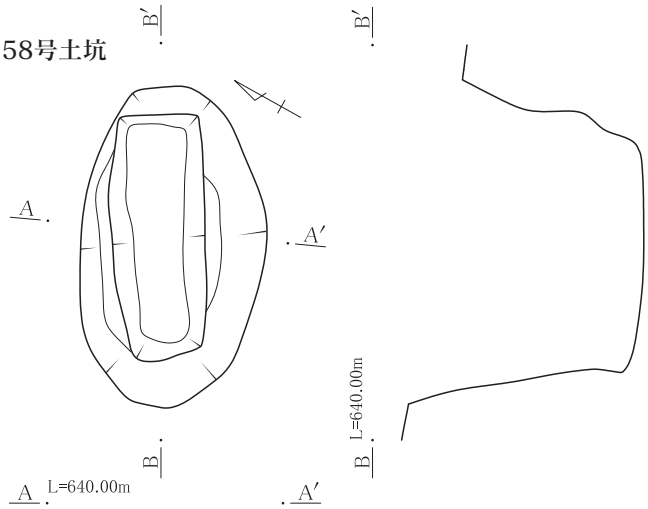
36号土坑

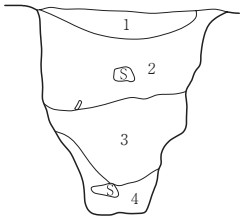




36号土坑
1　黒褐　ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　黒褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。

58号土坑

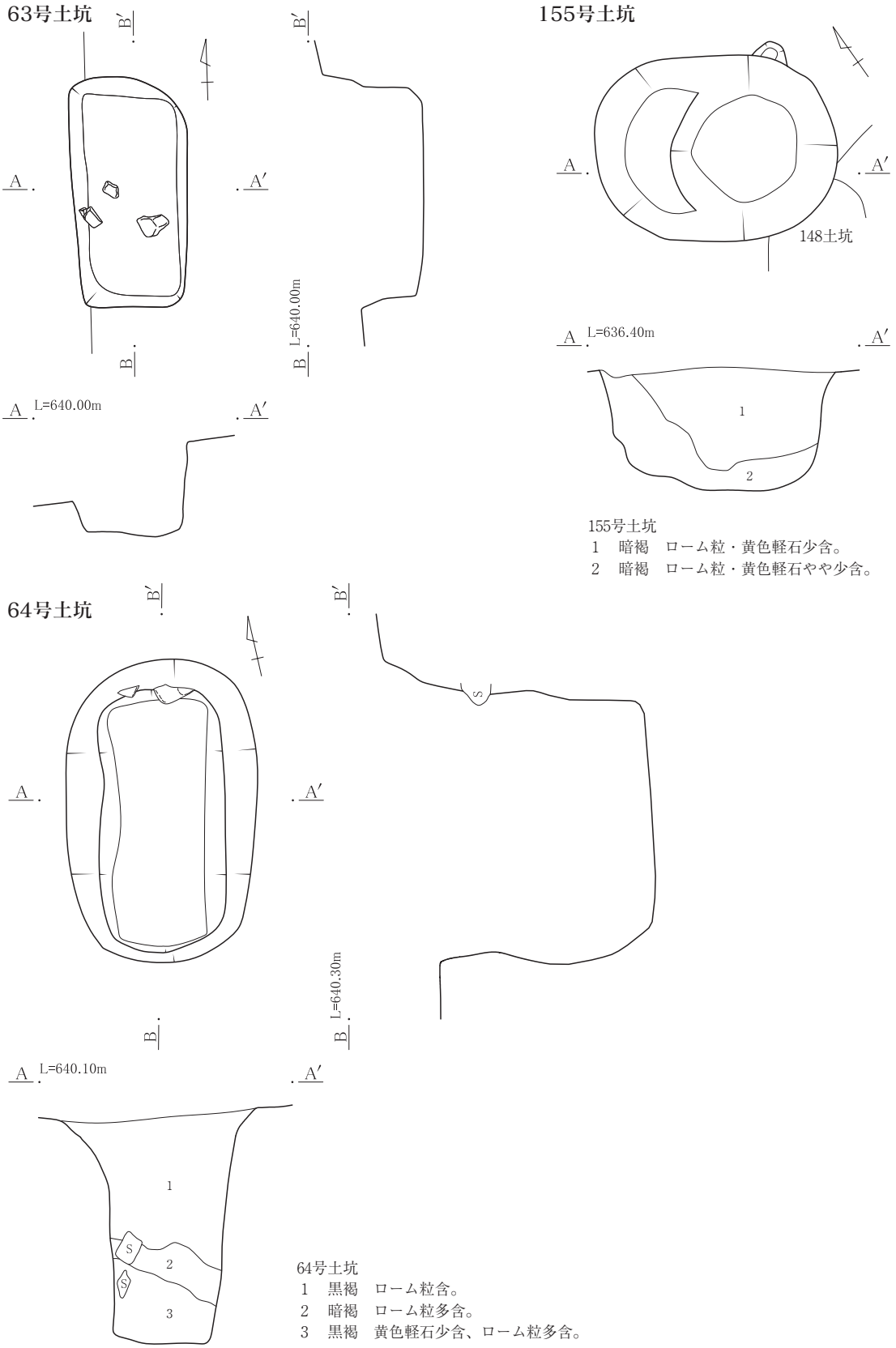




58号土坑
1　黒褐　ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　黒褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。
4　暗褐　Ⅴ層に近い。

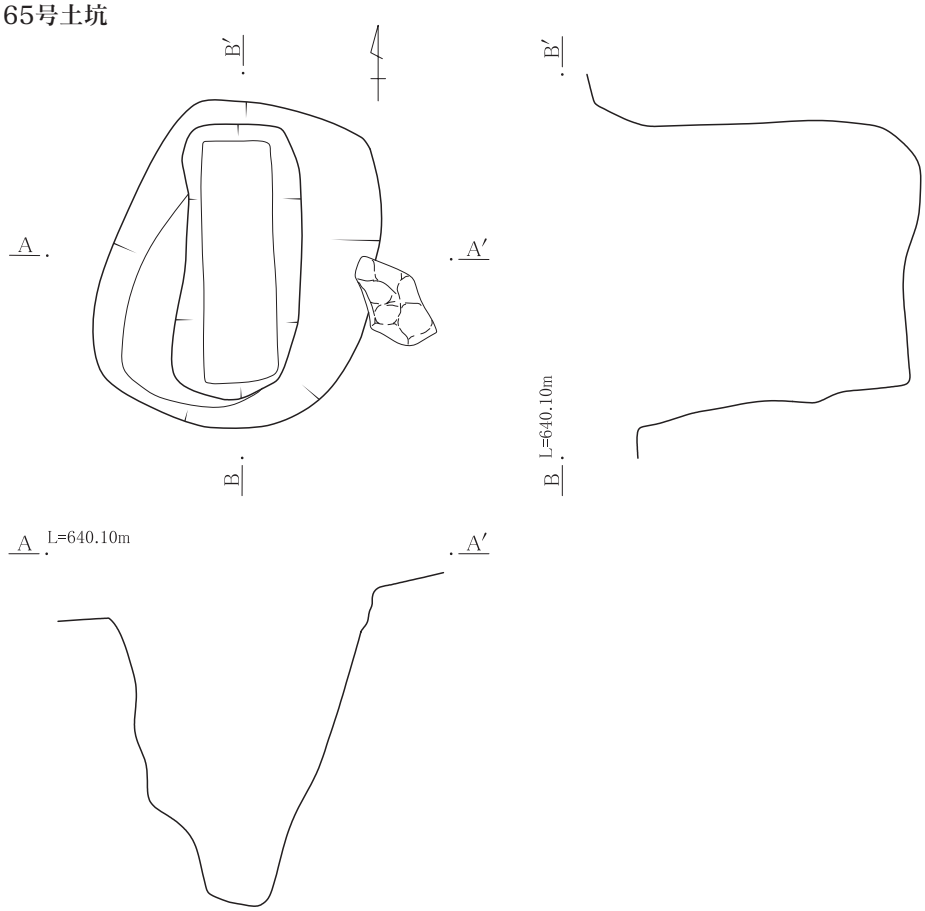
0　1：40　1m

第114図　35・36・47・58号土坑

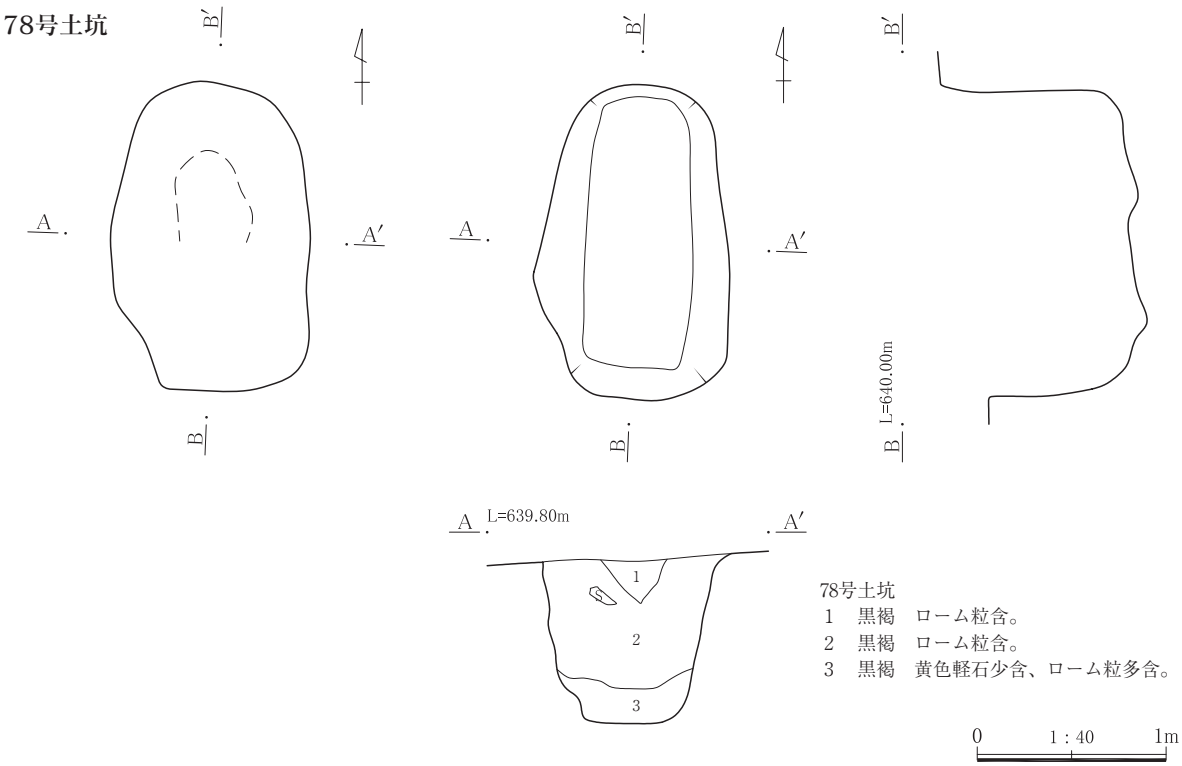


第115図　63・64・155号土坑

65号土坑



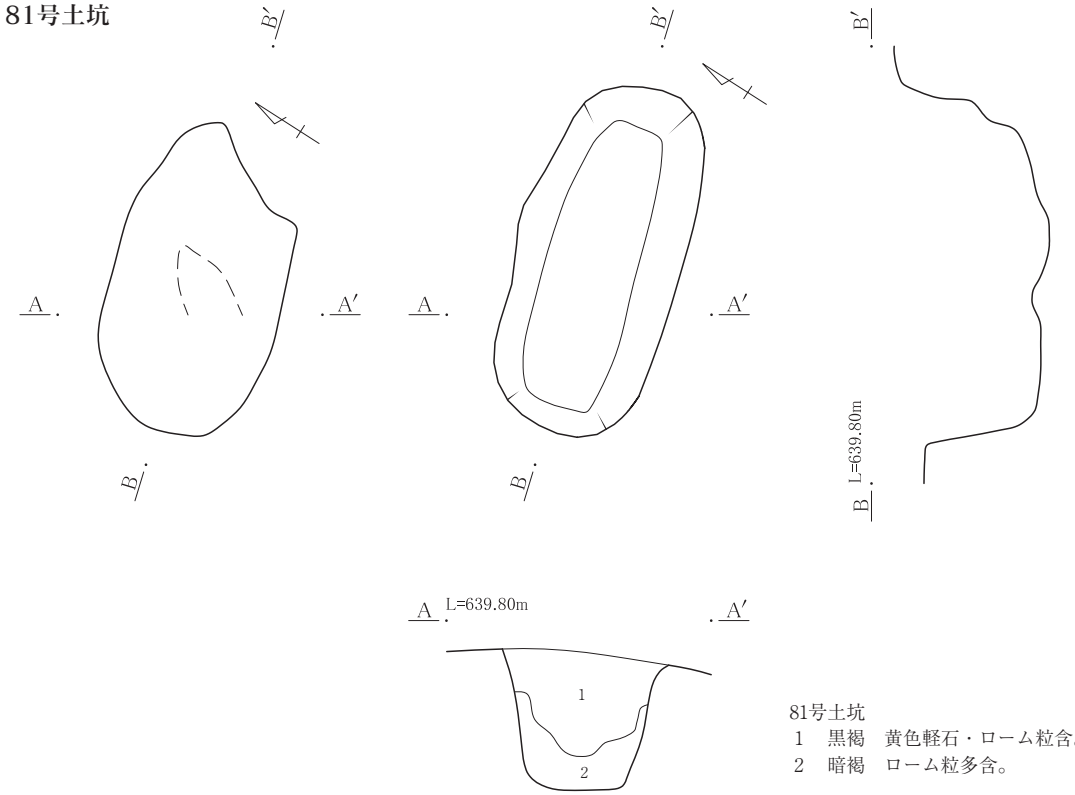
78号土坑



78号土坑
1　黒褐　ローム粒含。
2　黒褐　ローム粒含。
3　黒褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。

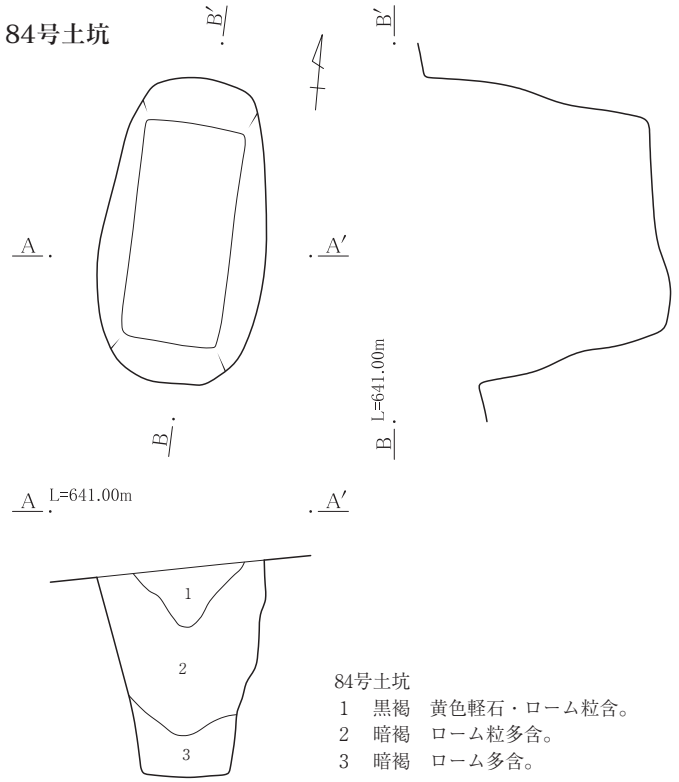
第116図　65・78号土坑

81号土坑



81号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。

84号土坑

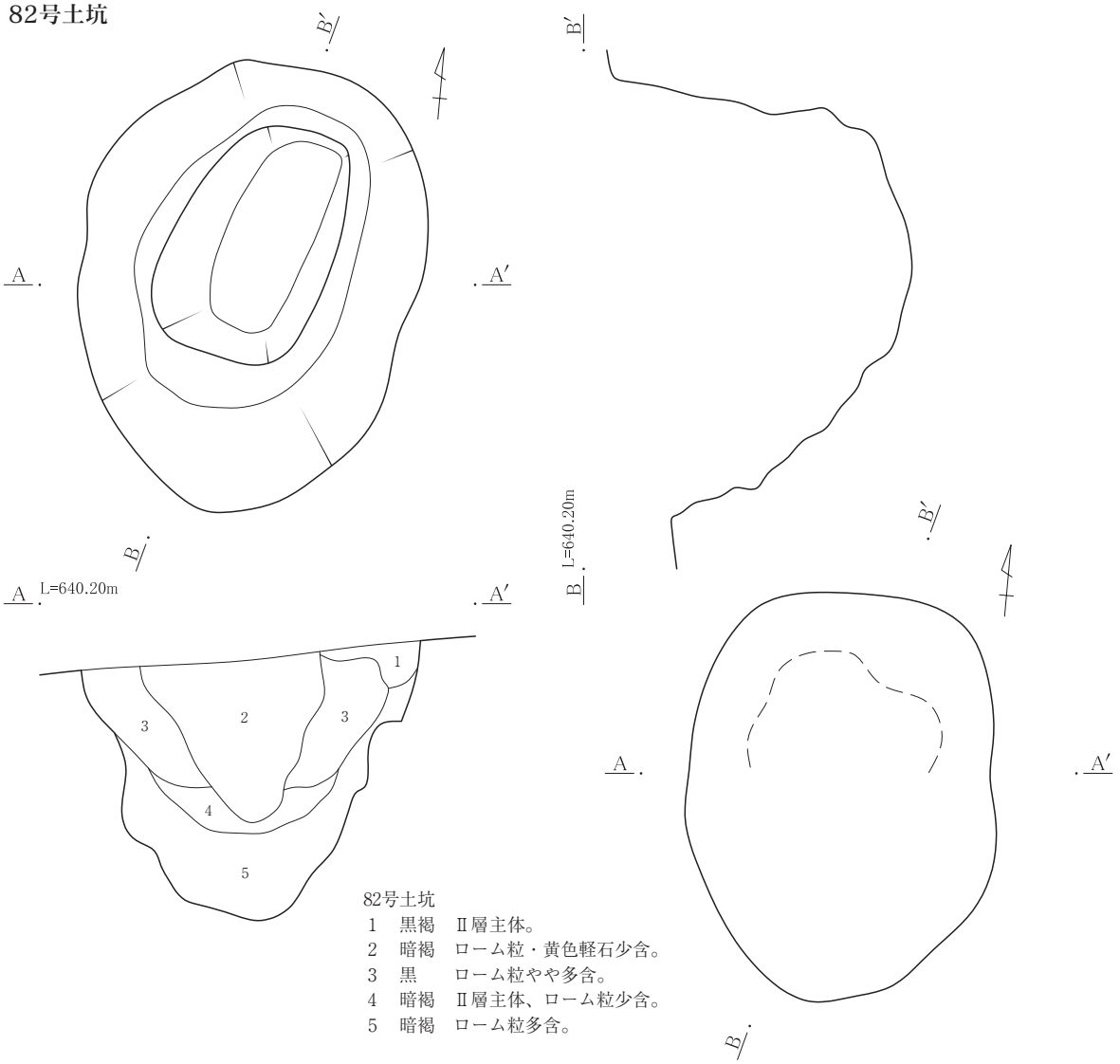


84号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　暗褐　ローム多含。

0　1：40　1m

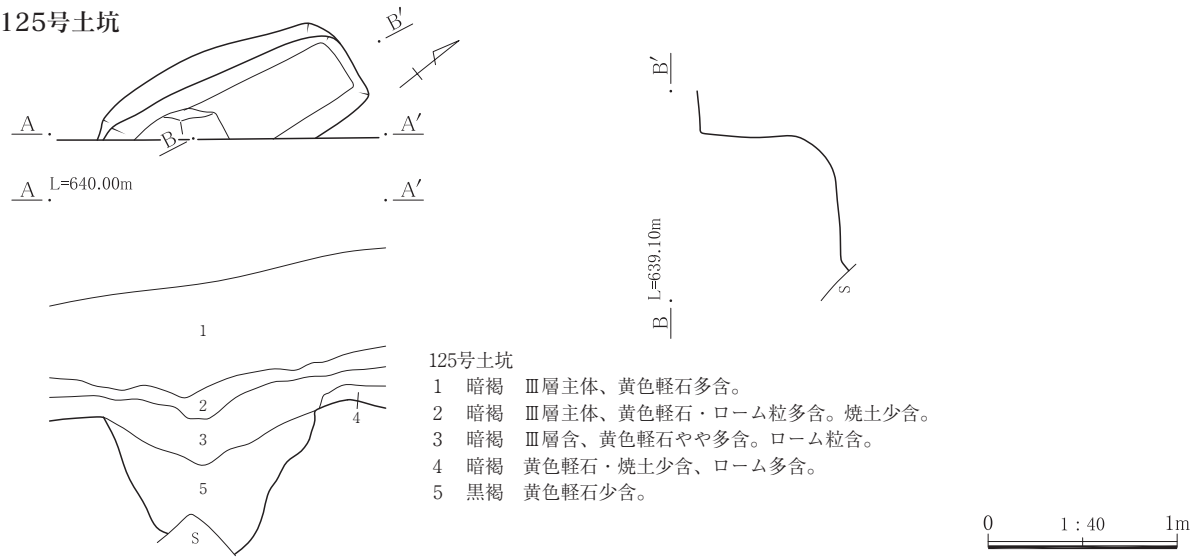
第117図　81・84号土坑

82号土坑



82号土坑
1　黒褐　Ⅱ層主体。
2　暗褐　ローム粒・黄色軽石少含。
3　黒　　ローム粒やや多含。
4　暗褐　Ⅱ層主体、ローム粒少含。
5　暗褐　ローム粒多含。

125号土坑

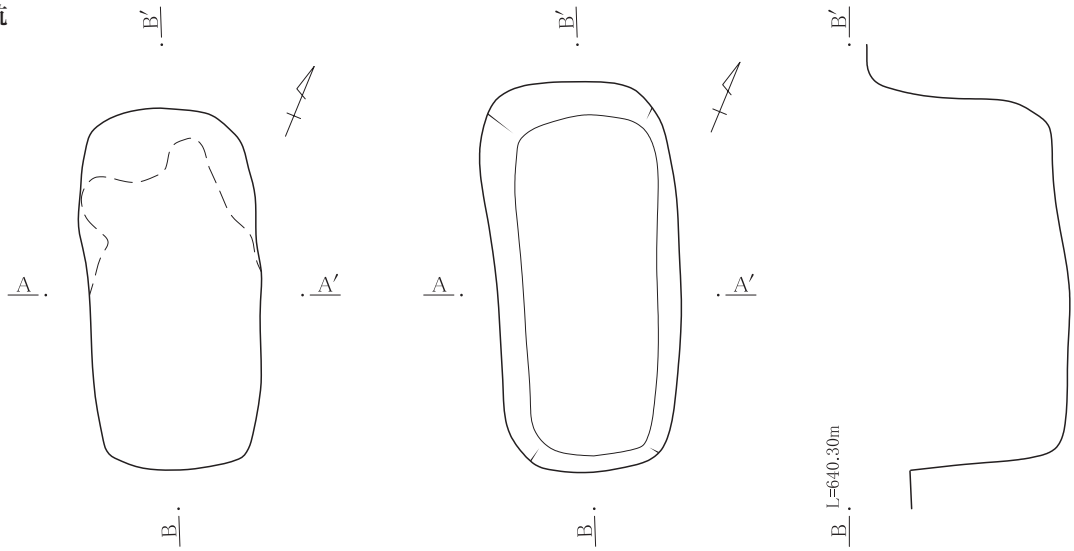


125号土坑
1　暗褐　Ⅲ層主体、黄色軽石多含。
2　暗褐　Ⅲ層主体、黄色軽石・ローム粒多含。焼土少含。
3　暗褐　Ⅲ層含、黄色軽石やや多含。ローム粒含。
4　暗褐　黄色軽石・焼土少含、ローム多含。
5　黒褐　黄色軽石少含。

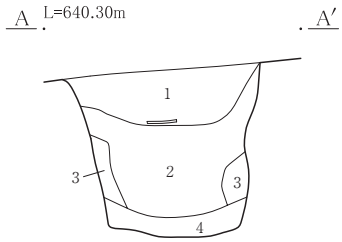
0　1：40　1m

第118図　82・125号土坑

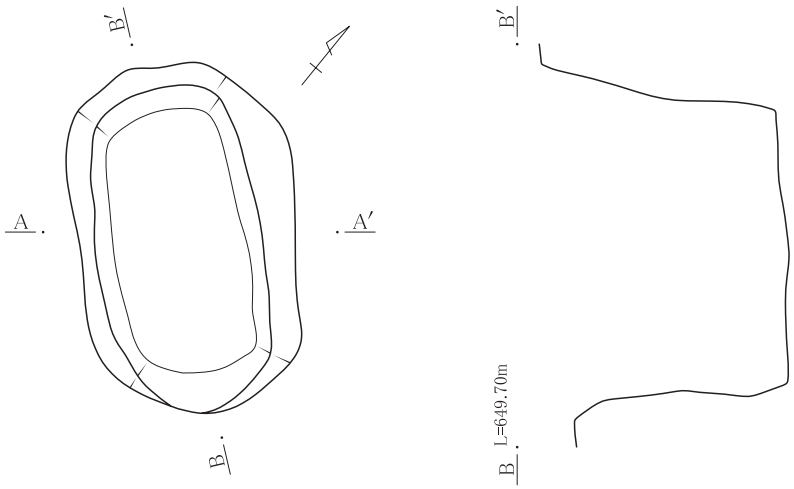
83号土坑

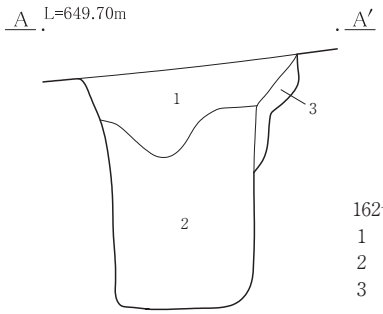


83号土坑
1　暗褐　砂質、ローム粒やや多含、
　　炭化物粒・黄色軽石少含。
2　暗褐　ローム粒やや多含、炭化物粒少含。
3　暗褐　ローム粒少含。
4　暗褐　ローム粒多含。



162号土坑

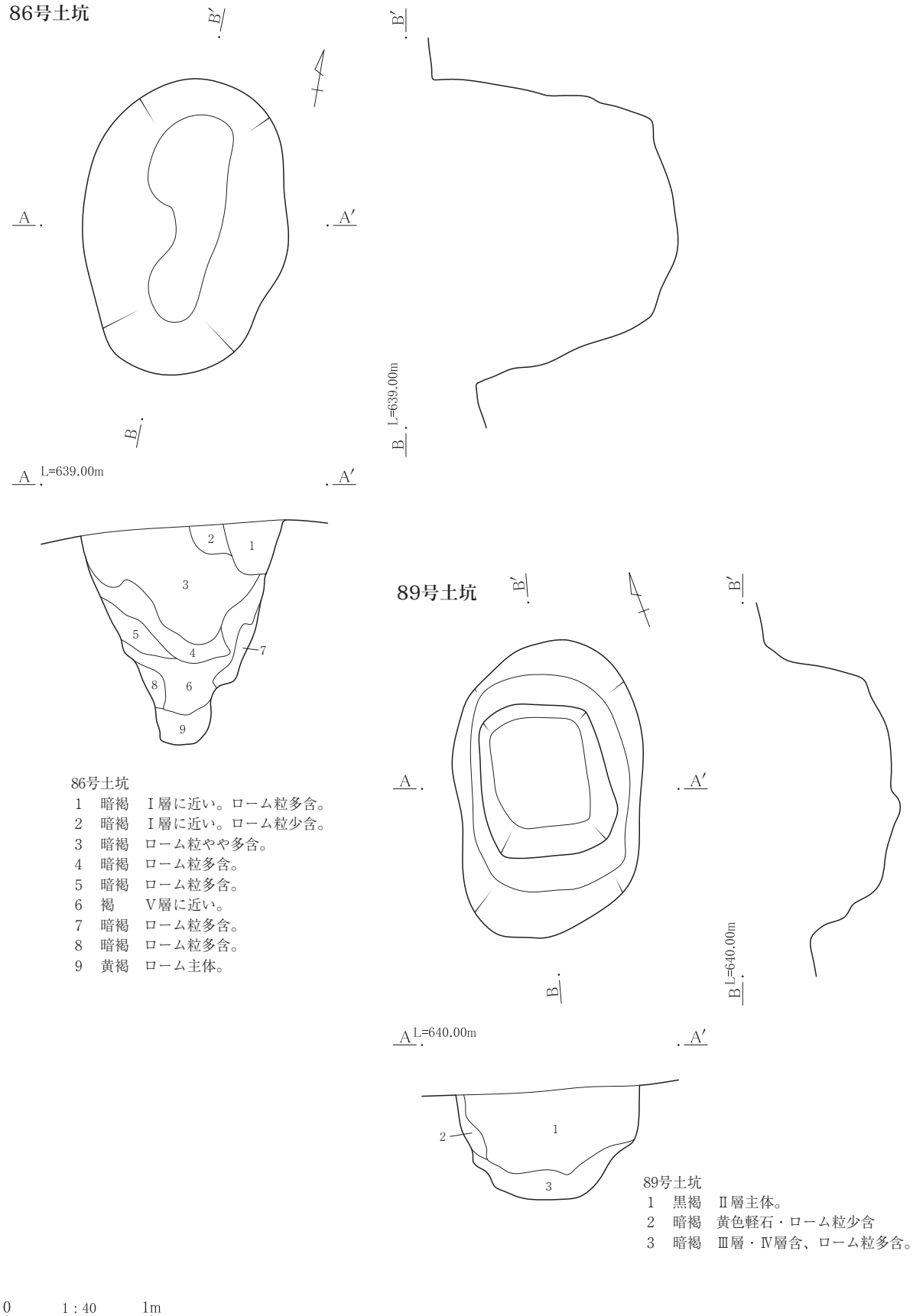




162号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　暗褐　ローム多含。

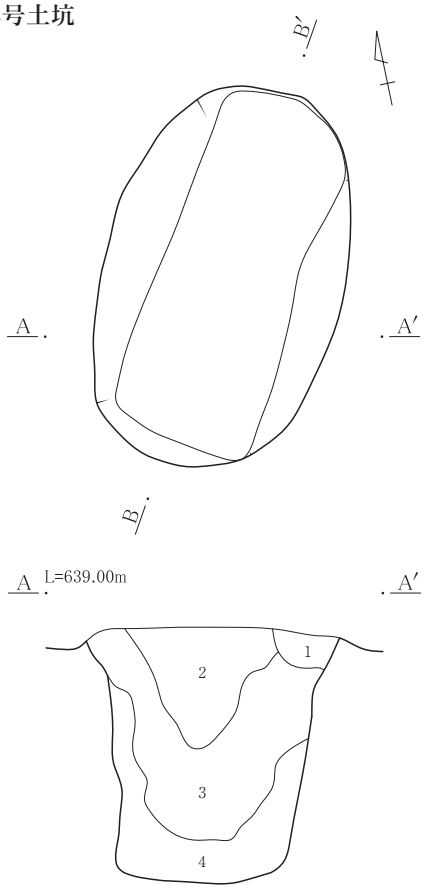
0　1：40　1m

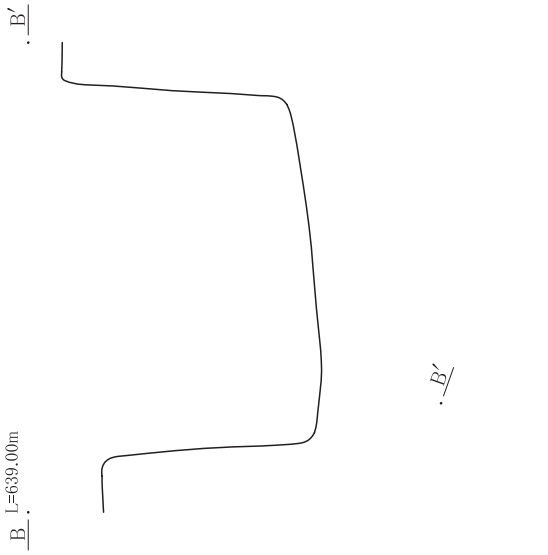
第119図　83・162号土坑



第120図　86・89号土坑

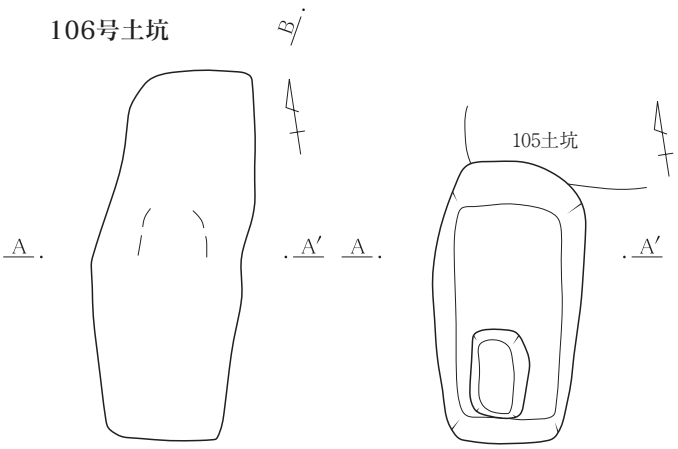
98号土坑

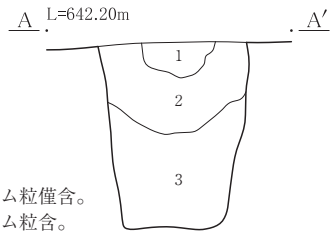




98号土坑
1　暗褐　黄色軽石多含。
2　暗褐　黄色軽石少含。
3　暗褐　Ⅱ層主体、Ⅲ層含。
4　黒褐　Ⅱ層・Ⅲ層・ローム粒含。

106号土坑



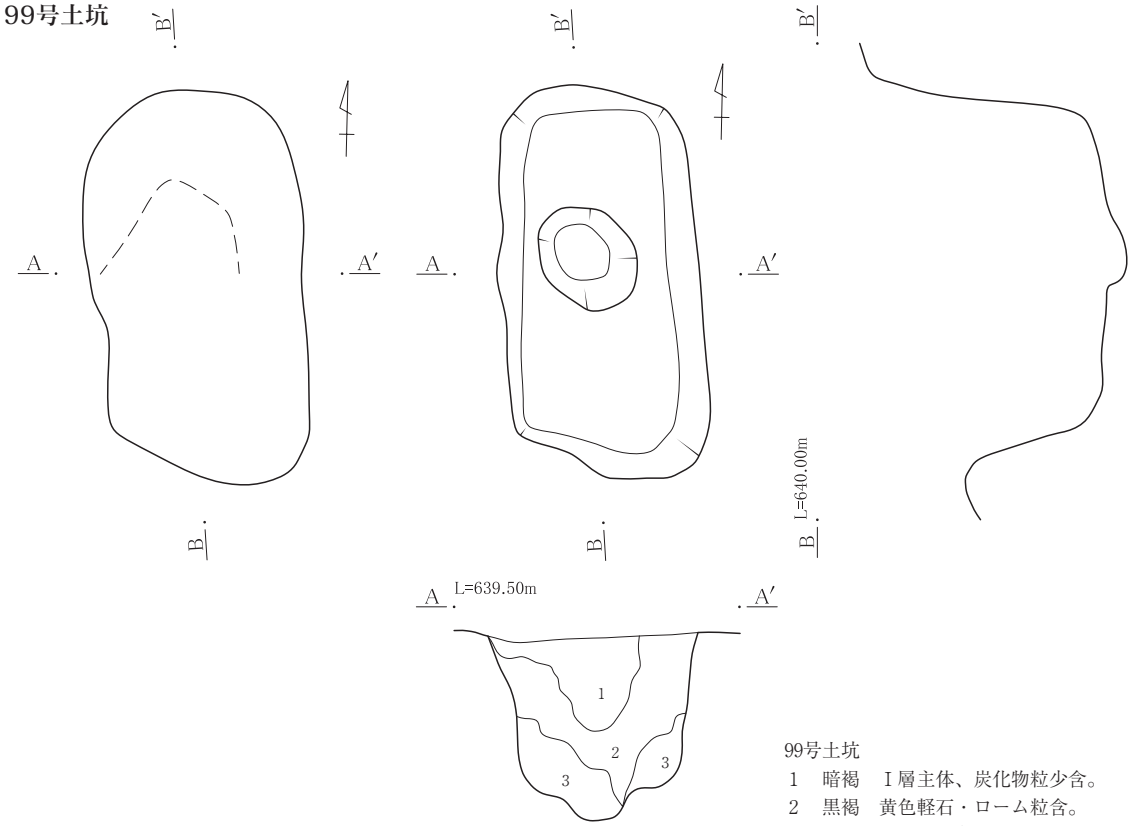


106号土坑
1　暗褐　Ⅱ層主体、ローム粒僅含。
2　黒褐　黄色軽石・ローム粒含。
3　明褐　ローム主体。

0　1：40　1m

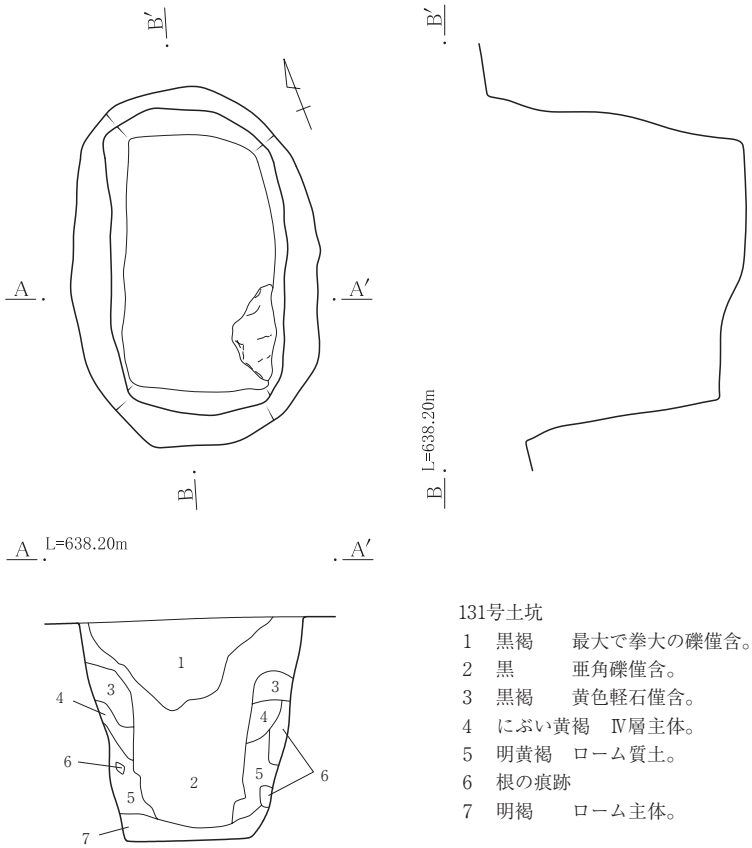
第121図　98・106号土坑

99号土坑



99号土坑
1　暗褐　Ⅰ層主体、炭化物粒少含。
2　黒褐　黄色軽石・ローム粒含。
3　黒褐　ローム粒多含。

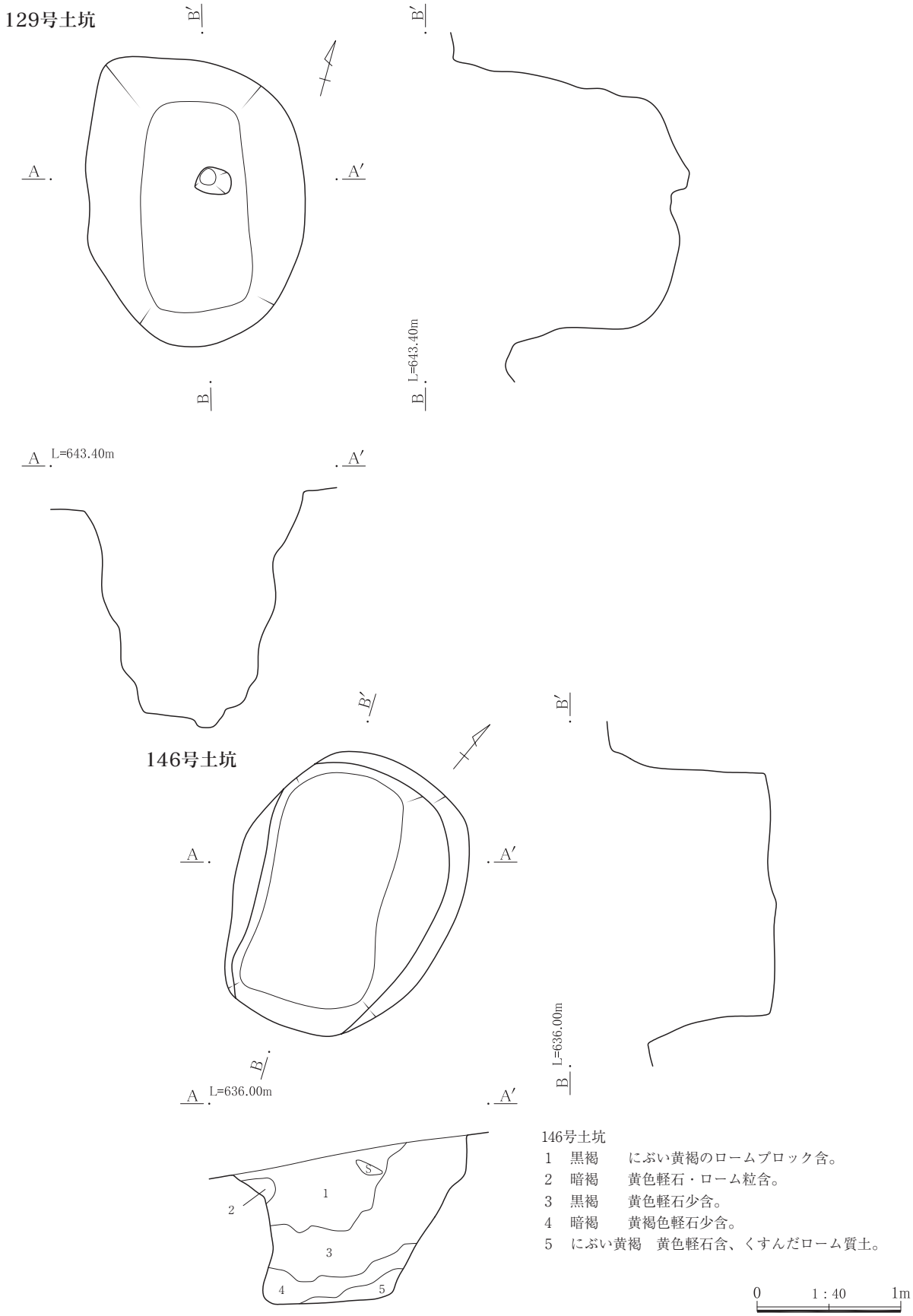
131号土坑



131号土坑
1　黒褐　　最大で拳大の礫僅含。
2　黒　　亜角礫僅含。
3　黒褐　　黄色軽石僅含。
4　にぶい黄褐　Ⅳ層主体。
5　明黄褐　ローム質土。
6　根の痕跡
7　明褐　　ローム主体。

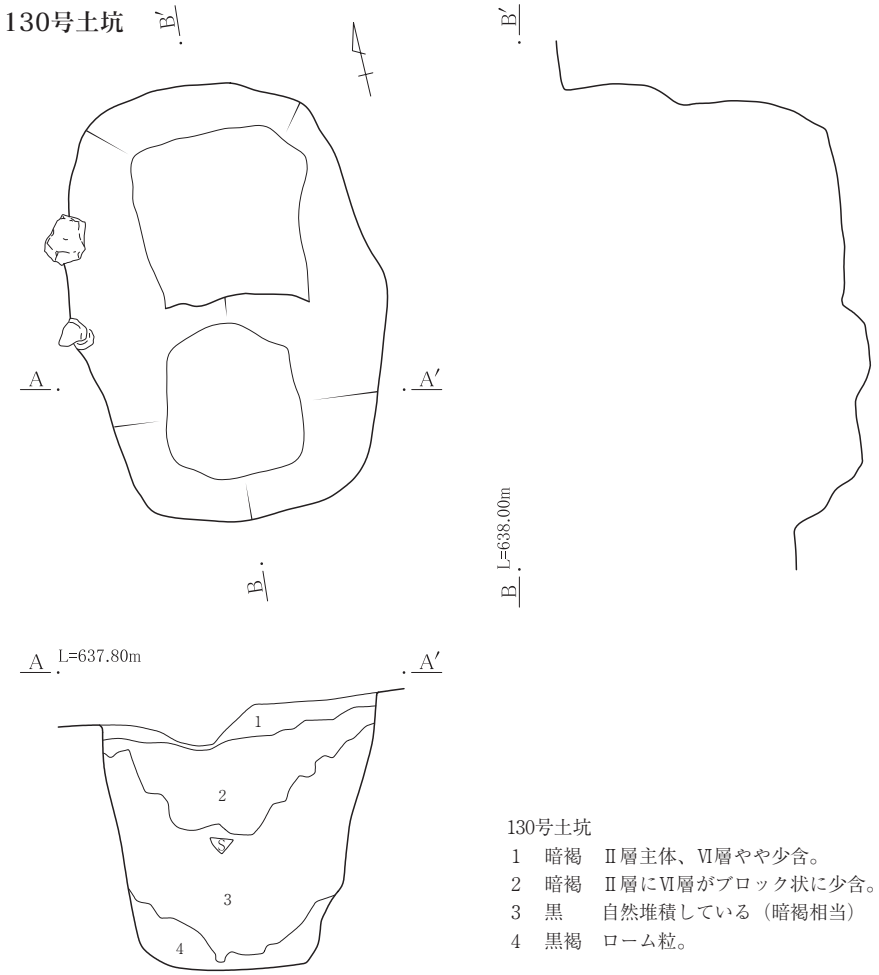
0　1：40　1m

第122図　99・131号土坑



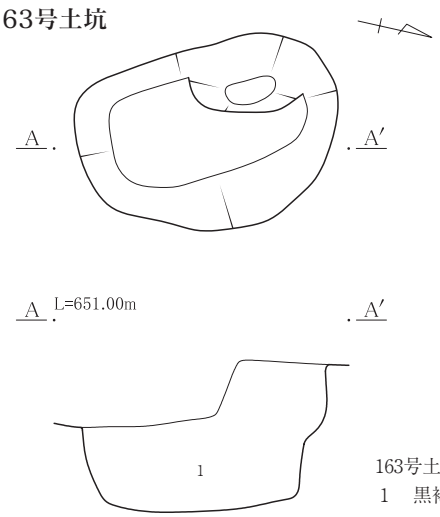
第123図　129・146号土坑

130号土坑



130号土坑
1　暗褐　Ⅱ層主体、Ⅵ層やや少含。
2　暗褐　Ⅱ層にⅥ層がブロック状に少含。
3　黒　　自然堆積している（暗褐相当）
4　黒褐　ローム粒。

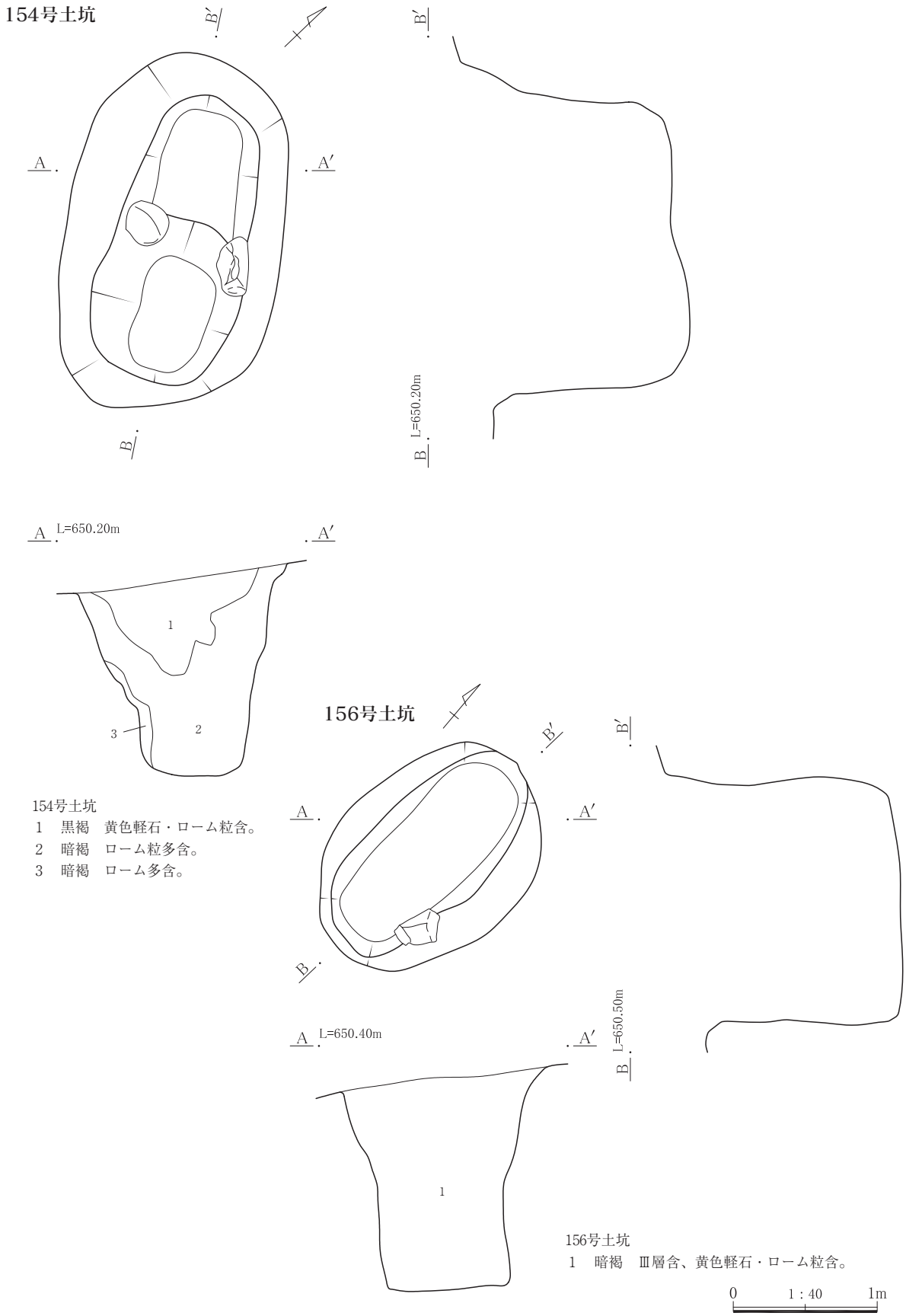
163号土坑



163号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒含。

0　1：40　1m

第124図　130・163号土坑

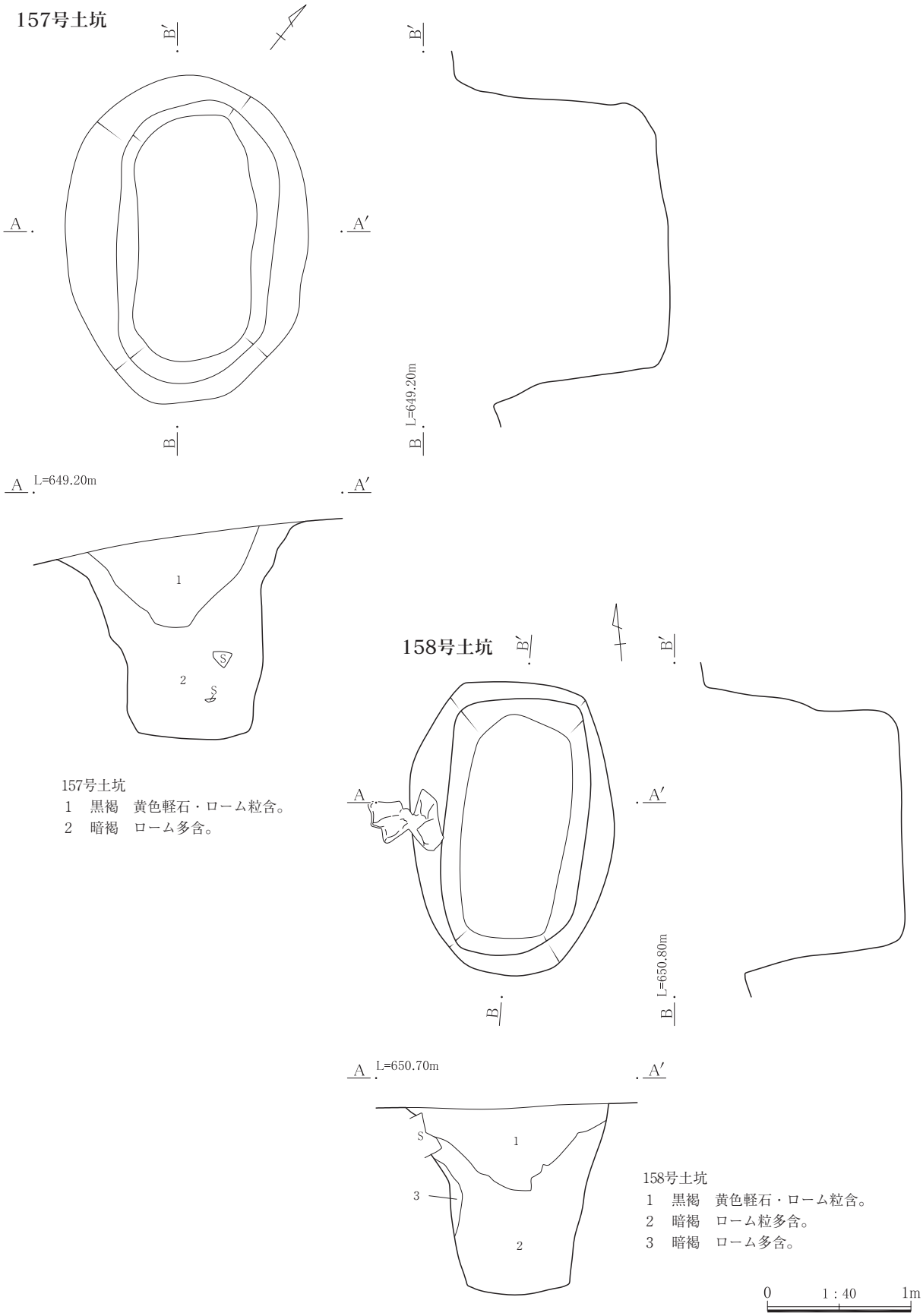


154号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　暗褐　ローム多含。

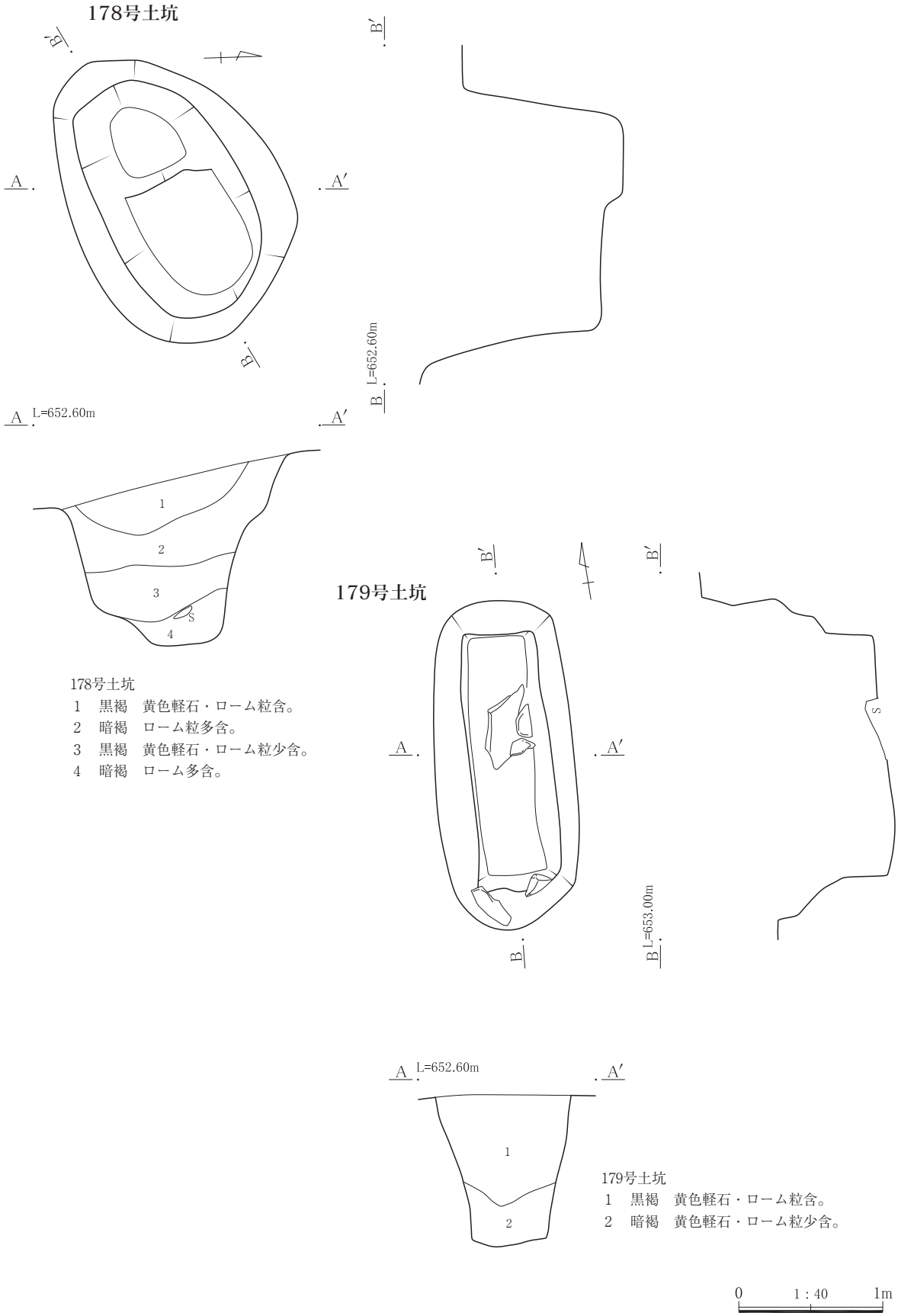
156号土坑
1　暗褐　Ⅲ層含、黄色軽石・ローム粒含。

0　1：40　1m

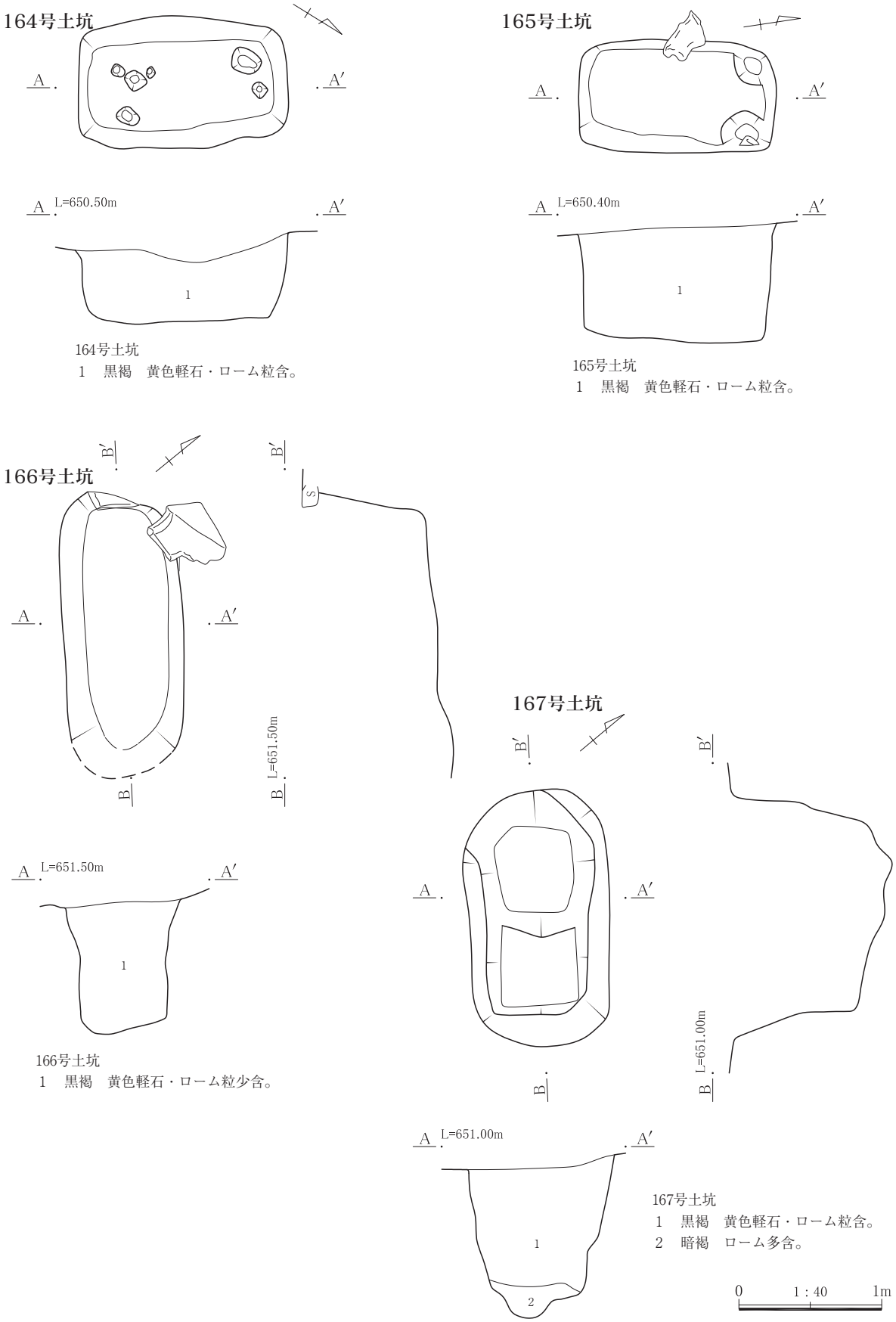
第125図　154・156号土坑



第126図　157・158号土坑



第127図　178・179号土坑



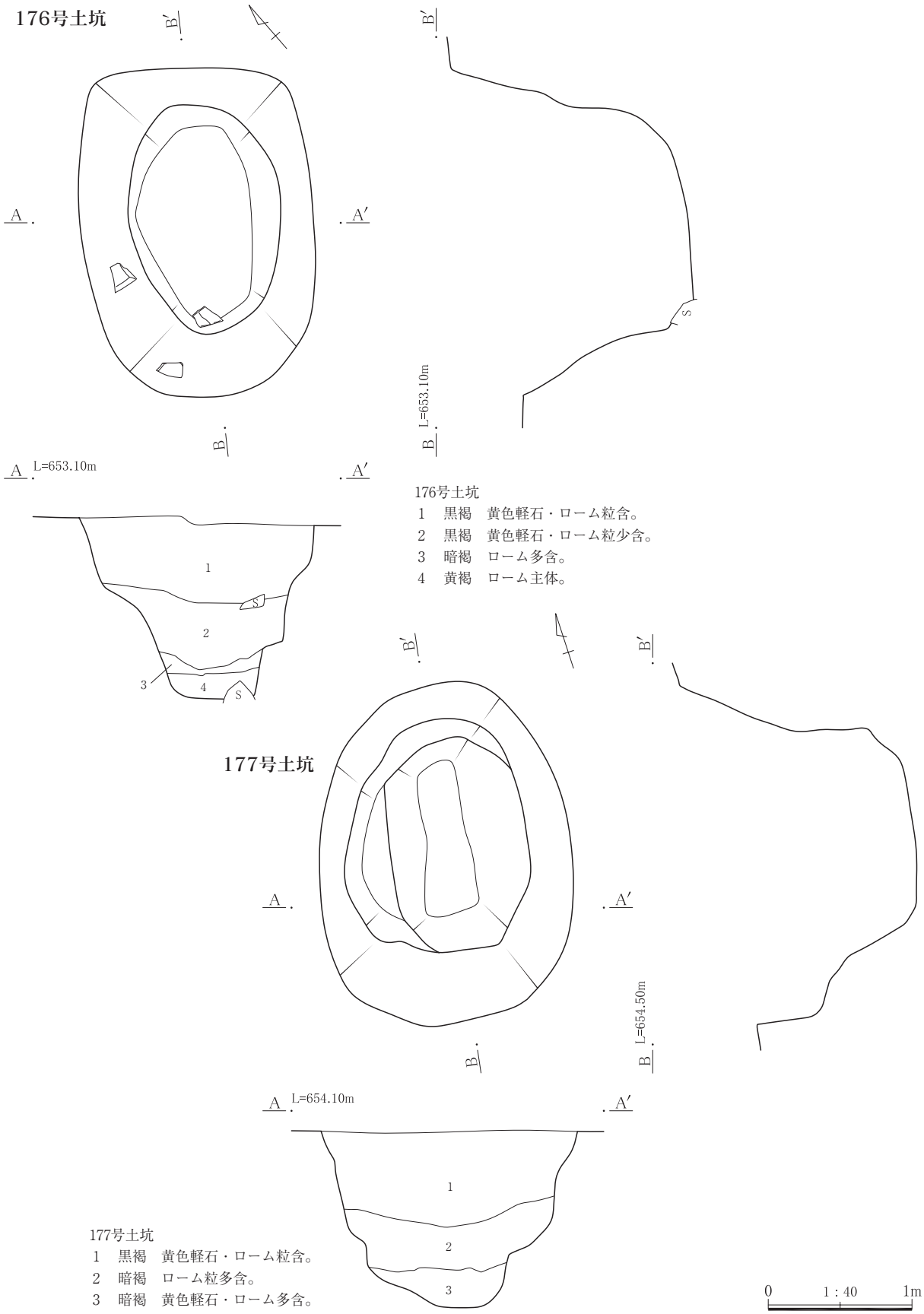
164号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒含。

165号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒含。

166号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒少含。

167号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒含。
2　暗褐　ローム多含。

第128図　164～167号土坑

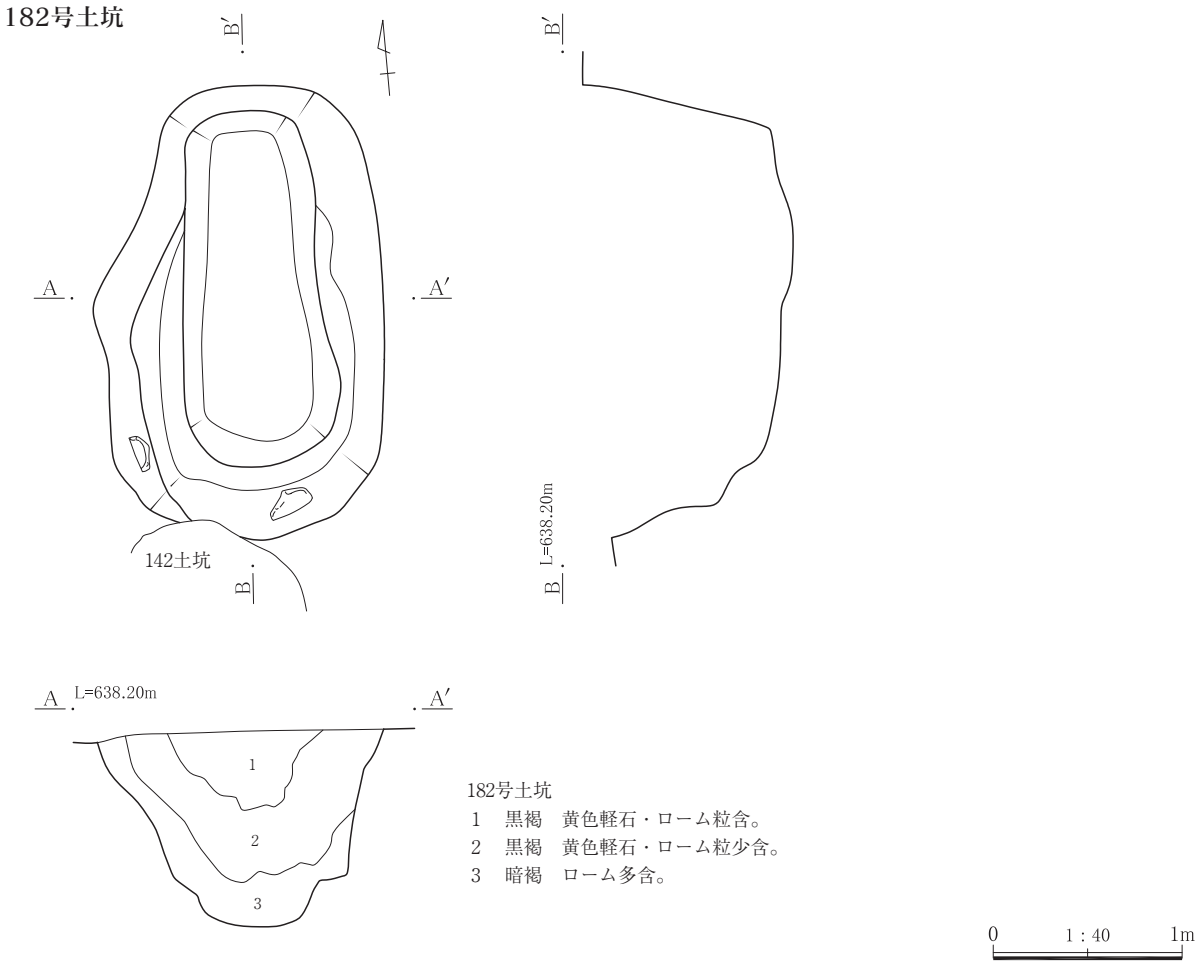


176号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒含。
2　黒褐　黄色軽石・ローム粒少含。
3　暗褐　ローム多含。
4　黄褐　ローム主体。

177号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　暗褐　黄色軽石・ローム多含。

0　1：40　1m

第129図　176・177号土坑



第130図　182号土坑

らっこ』様を、南東の今の場所に楽に転がして移動したものと考えられる。おそらくは雛段状の造成に伴って、このテラス面に建設された掘立柱建物に合わせて、その背後に収められる形での移動と考えられる。これは『つぶらっこ』様を御神体としてとらえ、その前面に並ぶ掘立柱建物建物を神社形式の遺構としてとらえることで、巨石崇拝である産泰神社のように、社殿の奥に御神体を配置していたと考えられるのではないだろうか。だとすると、２号テラスの西側に位置する８棟の掘立柱建物のうちの４号掘立柱建物が該当する。

だが、これらの掘立柱建物が通常の家屋であったとすると、前記した神社形式の配置は成立しなくなり、逆に掘立柱建物を建設する上で邪魔な石をテラスの端に動かしただけと言う事になる。もしそうだとすると、この時点での信仰としての『つぶらっこ』様の位置付けが無くなり、むしろその期限は掘立柱建物が設営された時期以降にずれ込む可能性も生じてくる事となる。その時期は近世以後と言う事になる訳である。

いずれにしても、現段階では推定に推論を重ねるような状態であり、これが考察の限界でもある。

最後に、テラスの番号についてであるが、平成13年度の発掘調査では『つぶらっこ』様周辺の範囲だけが対象であったので、「つぶらっこ周辺」との記載で済ませていた。次の平成14年度の発掘調査で複数の雛壇状である事が判明したため、北側の上段を１号テラス、南側の『つぶらっこ』のある面を２号テラスと呼称した。平成16年度の発掘調査において、１号テラスの東側の様子を確認しようとしたが、まったく検出されなかった。おそらくは既に迂回の農道として南北の帯状に仮舗装されていた部分が発掘

調査出来なかった事から、この部分にちょうど存在したものと考えられる。

ところが、平成17年度の発掘調査では、それまでの担当者が他の事業の整理作業に本部で従事したために、引継ぎも十分でなく、そのために２号テラスを１号テラスとして、新たに南側に検出した雛壇を２号テラスとして記述してしまった。そのために、中近世の遺構や遺物の表記に間違いが生じてしまったが、今回の整理作業で補正し、北から１号テラス、２号テラス、３号テラスと修正した。

また、本遺跡で検出された平安時代の竪穴住居の壁の高さが浅い事から、これらのテラスが造成された際に、竪穴住居等が壊されて消滅した可能性も、竪穴住居の分布図（第10図）から考えられる。

７　土坑（第113～148図、写真図版22～44）

総数187基検出されている。内訳は84区42基、85区91基、94区２基、95区52基である。種類としては、陥し穴と墓、それに性格が不明な土坑である。

土坑は形態によって大きく５つに分類される。

Ａ類　長さが約1.5～２ｍ前後で、幅が１ｍ前後の帯状の平面形。深さは遺構確認時で約0.2～1.0ｍある。115号土坑が該当するが、数は少ない。

Ｂ類　長さが約1.5～2.5ｍの長方形で、幅が0.9～1.5ｍ。深さは遺構確認時で約1.2～1.5㎝、中には2.0㎝と深い事例もある。特に基本土層のⅦ層・Ⅷ層のローム中まで掘り込まれた事例もあり、それらの大部分は陥し穴と考えられる。周辺の壁からの崩落土による堆積が多いのも特徴である。

Ｃ類　一辺が約１ｍのほぼ正方形。深さは遺構確認時で約20～50㎝である。規模が大きいものは中近世の竪穴状の遺構と想定される。

Ｄ類　径が約１ｍの円形。深さは遺構確認時で約20～80㎝である。

Ｅ類　平面形が不定形で、深さもまちまちである。最も数が多い。中には184号や189号のように多数の土坑の集合を１基の土坑に判断したような事例も含まれる。

このうちのＡ類がいわゆる「イモ穴」、Ｂ類の一部が「陥し穴」に該当する。

①陥し穴（第113～130図、写真図版22～44）

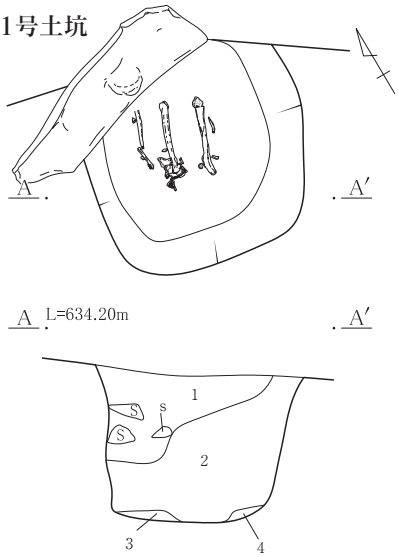
形状や長さ・幅・深さ、それに埋没土層の様子から、西吾妻地区で顕著な「陥し穴」と判断した。総数42基であり、７・10・11・28・35・36・47・58・63・64・65・78・81・82・83・84・86・89・98・99・106・125・129・130・131・146・154・155・156・157・158・162・163・164・165・166・167・176・177・178・179・182の各土坑である。このうちの11号土坑については、４号竪穴住居の掘り方調査で確認されたため、平安時代か、それよりも明らかに古いと考えられる。

また、八ッ場地区では、1108（天仁元）年に浅間山から噴出した浅間Ｂテフラ（As-B）や、1128（大治３）年の浅間粕川テフラ（As-Kk）が、いくつもの遺跡で埋没土の途中に確認されている事例があり、その事で設置時期が中世以前の平安時代と考えられる事例がいくつも存在する。三平Ⅰ遺跡や三平Ⅱ遺跡では、出土した土坑すべてを「古代」と断定しているが、本遺跡ではそこまでの確証を得られていないために、中近世にまとめておく事としたが、埋没土の様子や遺物等を見ても、中近世に属するかどうかははっきりしなかった。今後の検証の中で改めて論考したい。

さらに、三平Ⅰ遺跡や三平Ⅱ遺跡で報告されている「ローム質土レンズ状堆積物」について、基本土層との比較でははっきりしないものの、各遺跡の基本土層のⅡ層との関係が想定される。こうした様子は長野原一本松遺跡や立馬Ⅰ遺跡、立馬Ⅱ遺跡、花畑遺跡等でも多数確認されており、すべて吾妻川左岸である事も特徴である。

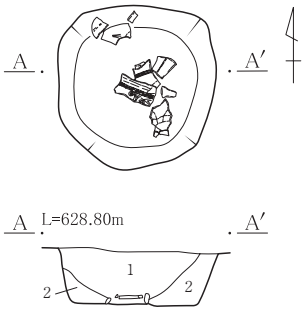
本遺跡でも、７、28、35、78、84、98、99、106、131、154、157、182の12基の各土坑が該当し、上記の「レンズ状堆積物」はそれぞれの遺構確認時に検

71号土坑



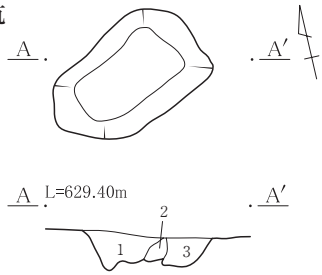
71号土坑
1　黒褐　ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　暗褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。
4　暗褐　Ⅴ層に近い。

1号土坑



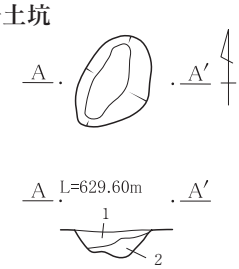
1号土坑
1　黒褐　黄色軽石僅含。
2　暗褐　黄色軽石少含、ローム少含。

2号土坑



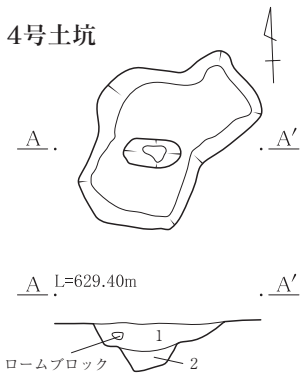
2号土坑
1　黒褐　砂礫僅含、黄色軽石僅含。
2　暗褐　ローム少含。
3　暗褐　黄色軽石少含、Ⅴ層僅含。

3号土坑



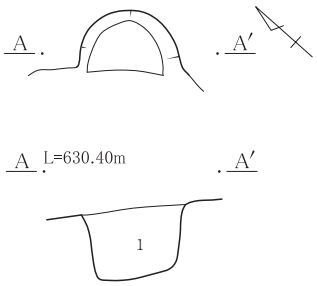
3号土坑
1　黒褐　砂礫僅含。
2　暗褐　Ⅴ層少含。

4号土坑



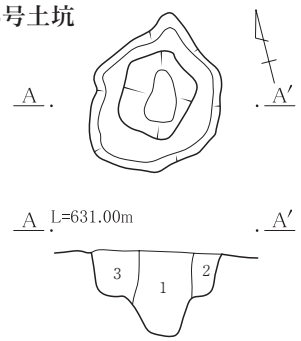
4号土坑
1　黒　　やや粘質。
2　黒褐　黄色軽石僅含、ローム少含。

6号土坑



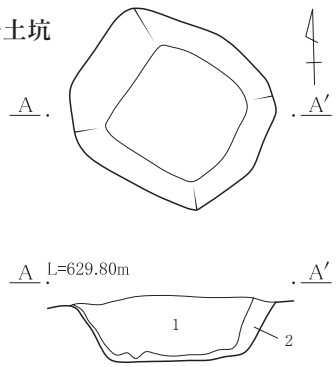
6号土坑
1　黒褐　砂礫少含、黄色軽石少含。

5号土坑



5号土坑
1　極暗褐　黄色軽石僅含。柱痕？
2　暗褐　　黄色軽石僅含、ローム少含。
3　暗褐　　黄色軽石僅含。

8号土坑

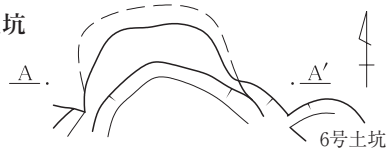


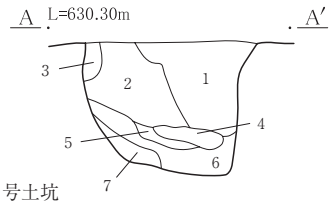
8号土坑
1　極暗褐　黄色軽石多含。
2　暗褐　黄色軽石少含。

0　1：40　1m

第131図　71・1～6・8号土坑

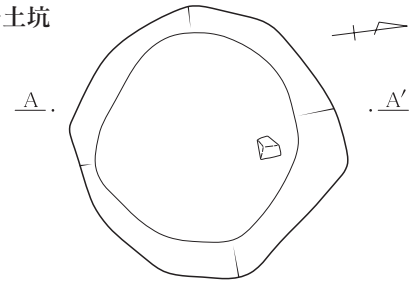
9号土坑

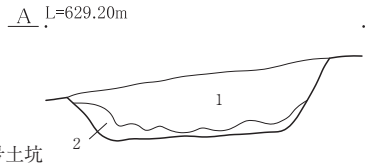




9号土坑
1　黒褐　ローム粒少含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　黄褐　ローム主体。壁の崩れ。
4　黒褐　白色軽石少含、ローム粒多含。
5　暗褐　Ⅴ層に近い。
6　暗褐　ローム粒多含。
7　明褐　ローム主体。

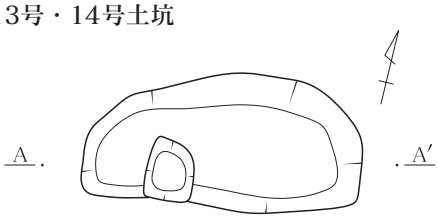
12号土坑

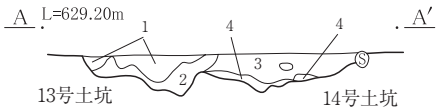




12号土坑
1　黒褐　ローム粒僅含。
2　暗褐　ローム粒多含。

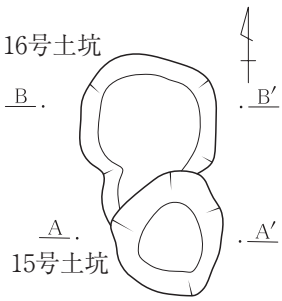
13号・14号土坑

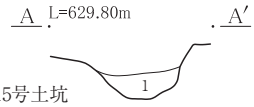




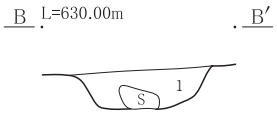
13号土坑・14号土坑
1　黒褐　ローム粒僅含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　黒褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。
4　暗褐　Ⅴ層に近い。

16号土坑



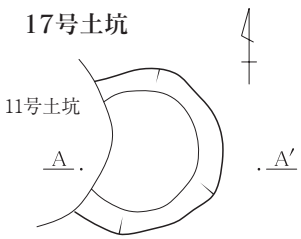


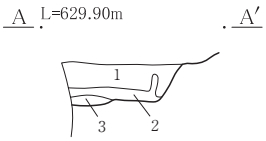
15号土坑
1　黒褐　ローム粒少含。



16号土坑
1　黒褐　ローム粒少含。

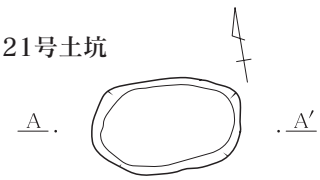
17号土坑

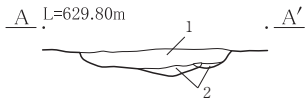




17号土坑
1　黒褐　ローム粒少含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　黒褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。

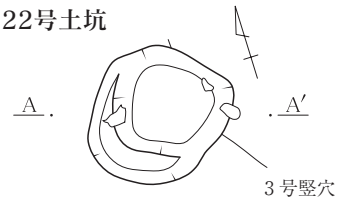
21号土坑

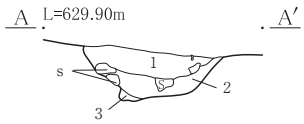




21号土坑
1　暗褐　黄色軽石・ローム僅含。
2　黒褐　黄色軽石僅含。

22号土坑



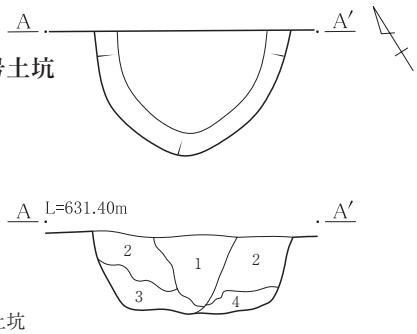


22号土坑
1　黒褐　黄色軽石僅含。
2　暗褐　黄色軽石少含、Ⅴ層僅含。
3　褐　　Ⅴ層少含。

0　1：40　1m

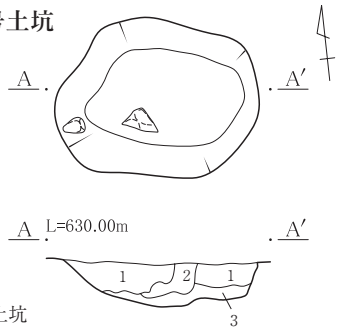
第132図　９・12～17・21・22号土坑

23号土坑



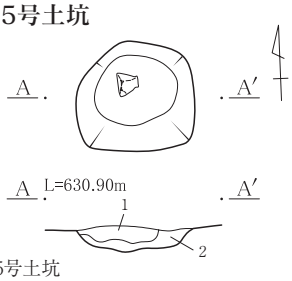
23号土坑
1　黒　　白色粒多含。
2　黒　　黄色軽石僅含。
3　暗褐　黄色軽石・Ⅴ層少含。
4　暗褐　黄色軽石・Ⅴ層僅含、ローム少含。

24号土坑



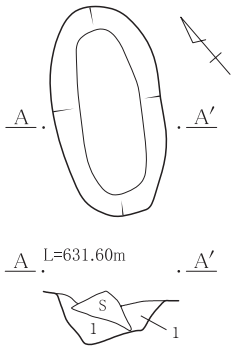
24号土坑
1　暗褐　黄色軽石僅含、Ⅴ層少含。
2　黒褐　黄色軽石・ローム粒少含。
3　褐　　黄色軽石・ローム粒少含、Ⅴ層僅含。

25号土坑



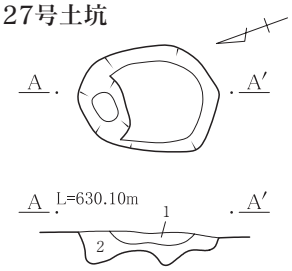
25号土坑
1　褐灰　Ⅲ層・黄色軽石少含。
2　暗褐　Ⅲ層ブロック・黄色軽石僅含、Ⅴ層少含。

26号土坑



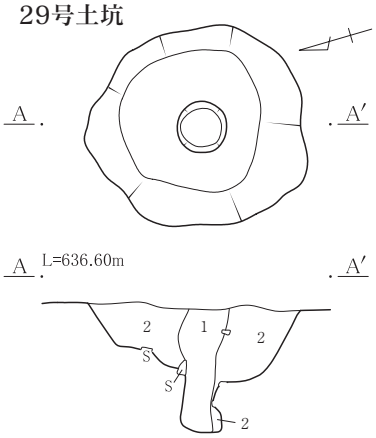
26号土坑
1　黒褐　ローム粒僅含。

27号土坑



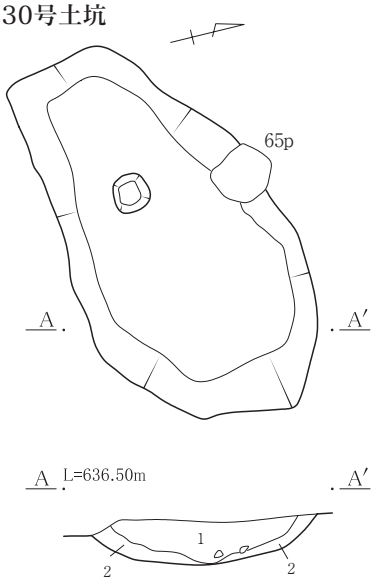
27号土坑
1　黒褐　黄色軽石僅含。
2　橙　　Ⅴ層・黄色軽石少含、ローム僅含。

29号土坑



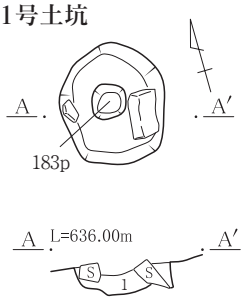
29号土坑
1　暗褐　Ⅱ層主体。
2　暗褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。

30号土坑



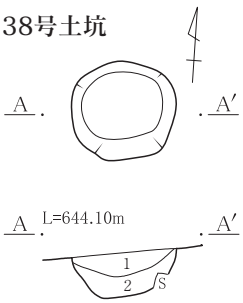
30号土坑
1　黒褐　ローム粒僅含。
2　黒褐　ローム粒少含。

31号土坑



31号土坑
1　黒褐　ローム粒僅含。

38号土坑

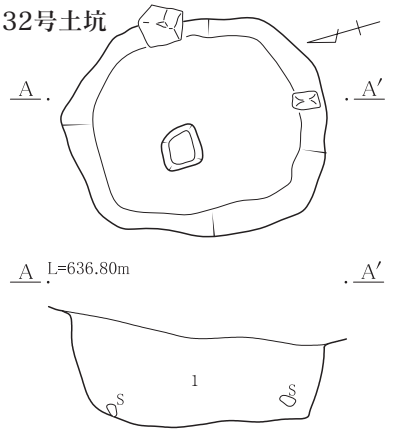


38号土坑
1　黒褐　ローム粒僅含。
2　暗褐　ローム粒多含。

0　1：40　1m

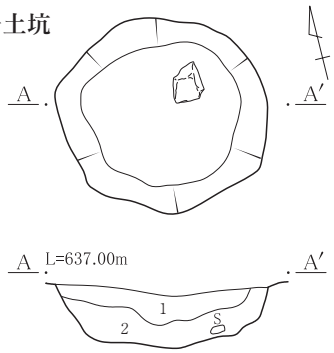
第133図　23～27・29～31・38号土坑

32号土坑



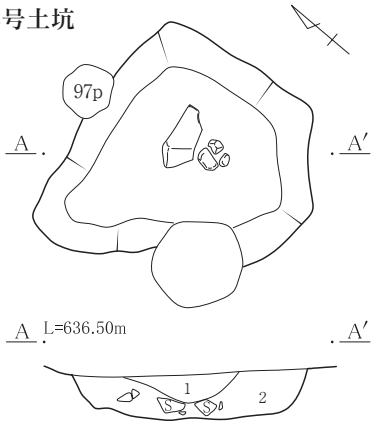
32号土坑
1　黒褐　ローム粒僅含。

33号土坑



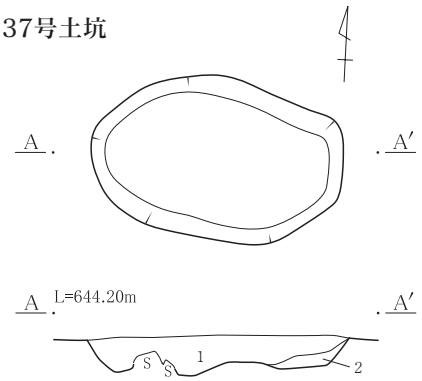
33号土坑
1　黒褐　ローム粒僅含。
2　暗褐　ローム粒多含。

34号土坑



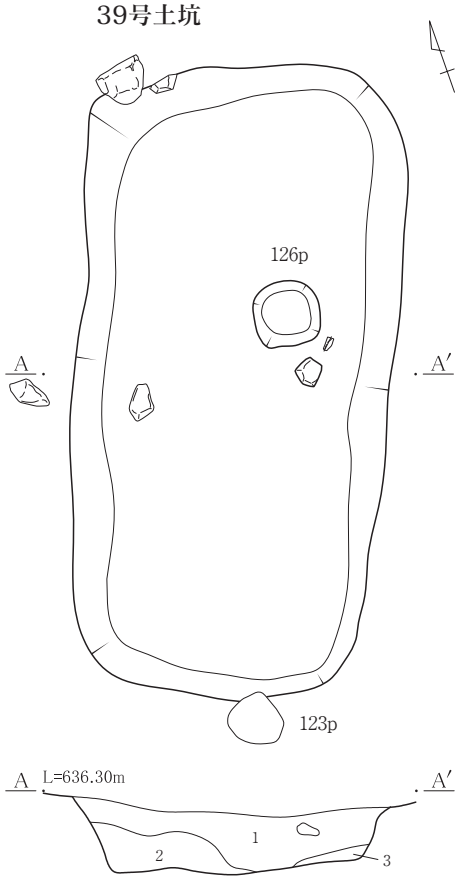
34号土坑
1　黒褐　ローム粒僅含。
2　暗褐　ローム粒多含。

37号土坑



37号土坑
1　黒褐　ローム粒僅含。
2　暗褐　ローム粒多含。

39号土坑

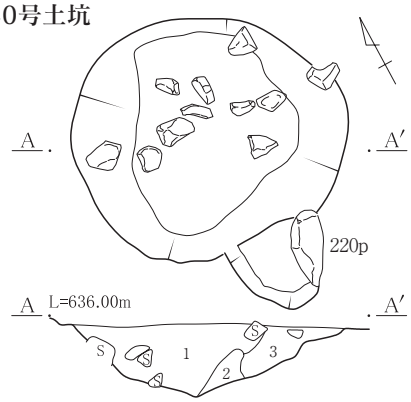


39号土坑
1　黒褐　ローム粒僅含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　暗褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。

0　1：40　1m

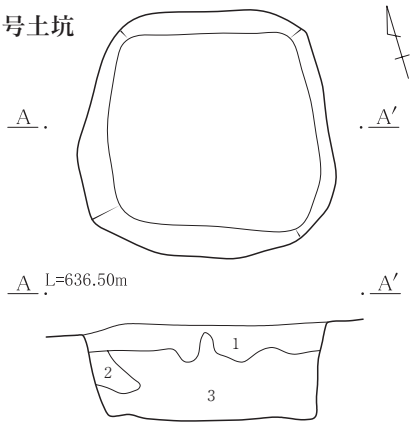
第134図　32～34・37・39号土坑

40号土坑



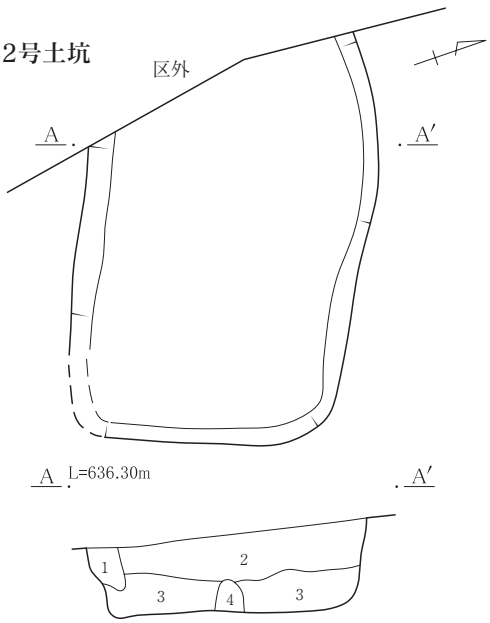
40号土坑
1　黒褐　ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　暗褐　黄色軽石・ローム粒多含。

41号土坑



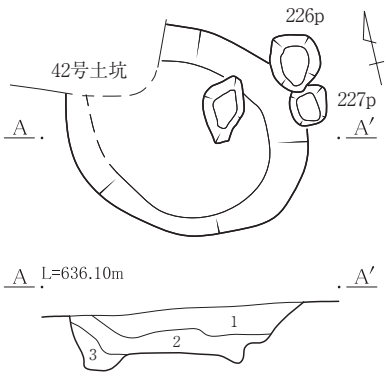
41号土坑
1　黒褐　ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　暗褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。

42号土坑



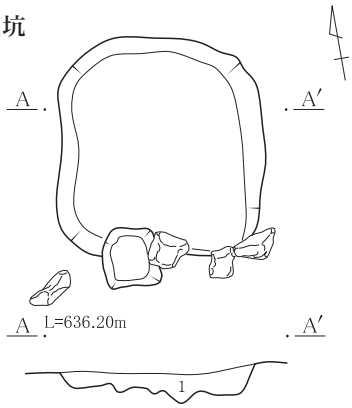
42号土坑
1　黒褐　ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　暗褐　黄色軽石・ローム粒多含。
4　暗褐　Ⅴ層に近い。

43号土坑



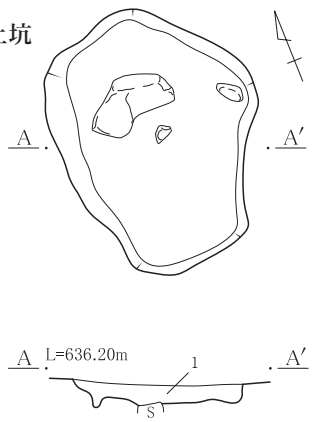
43号土坑
1　黒褐　ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　黒褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。

44号土坑



44号土坑
1　黒褐　ローム粒含。

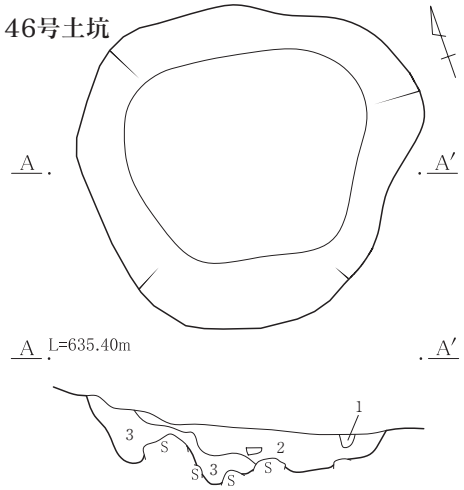
45号土坑



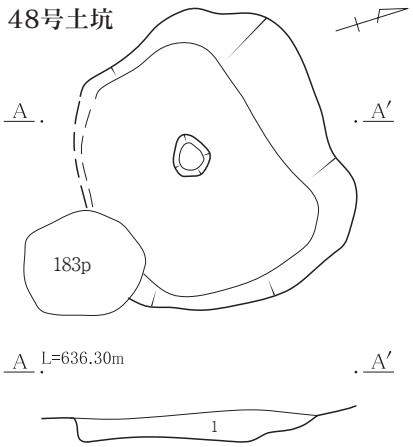
45号土坑
1　黒褐　ローム粒含。

0　1：40　1m

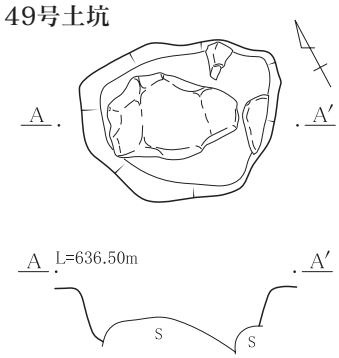
第135図　40～45号土坑

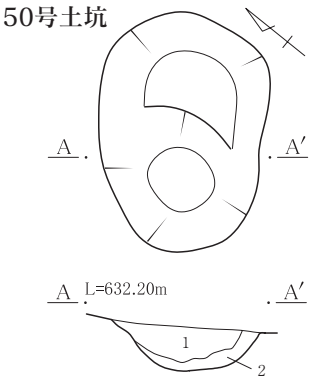


46号土坑
1　黒褐　ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　暗褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。

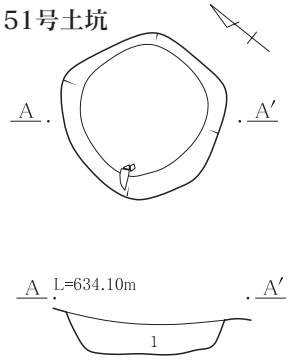


48号土坑
1　黒褐　ローム粒少含。

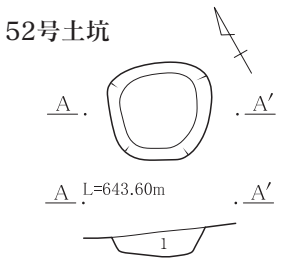




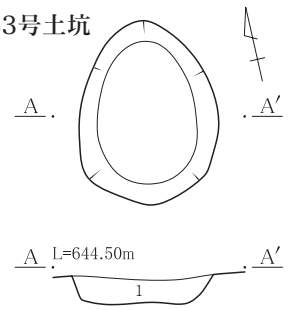
50号土坑
1　黒褐　ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。



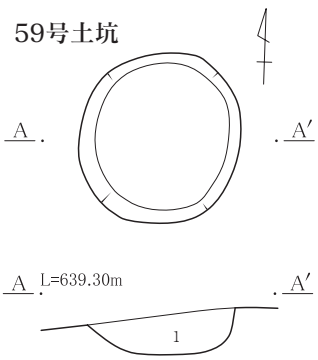
51号土坑
1　黒褐　ローム粒含。



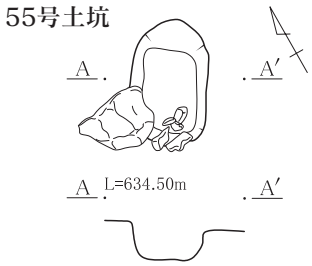
52号土坑
1　黒褐　ローム粒含。

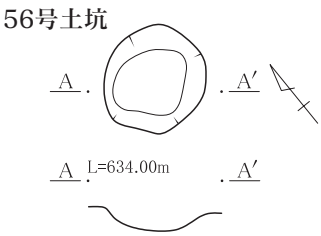


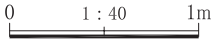
53号土坑
1　黒褐　ローム粒含。



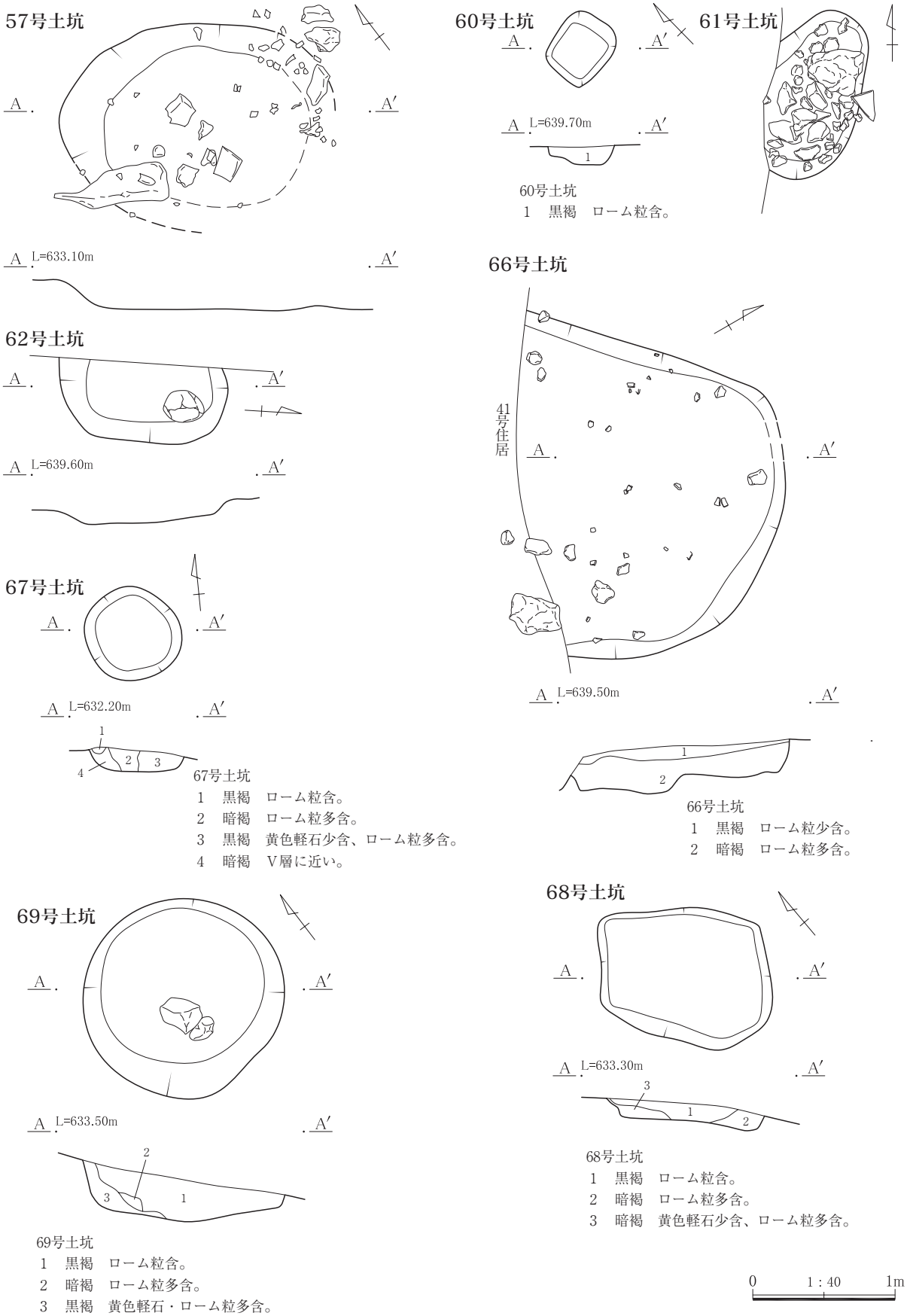
59号土坑
1　黒褐　ローム粒含。







第136図　46・48～53・55・56・59号土坑



60号土坑
1　黒褐　ローム粒含。

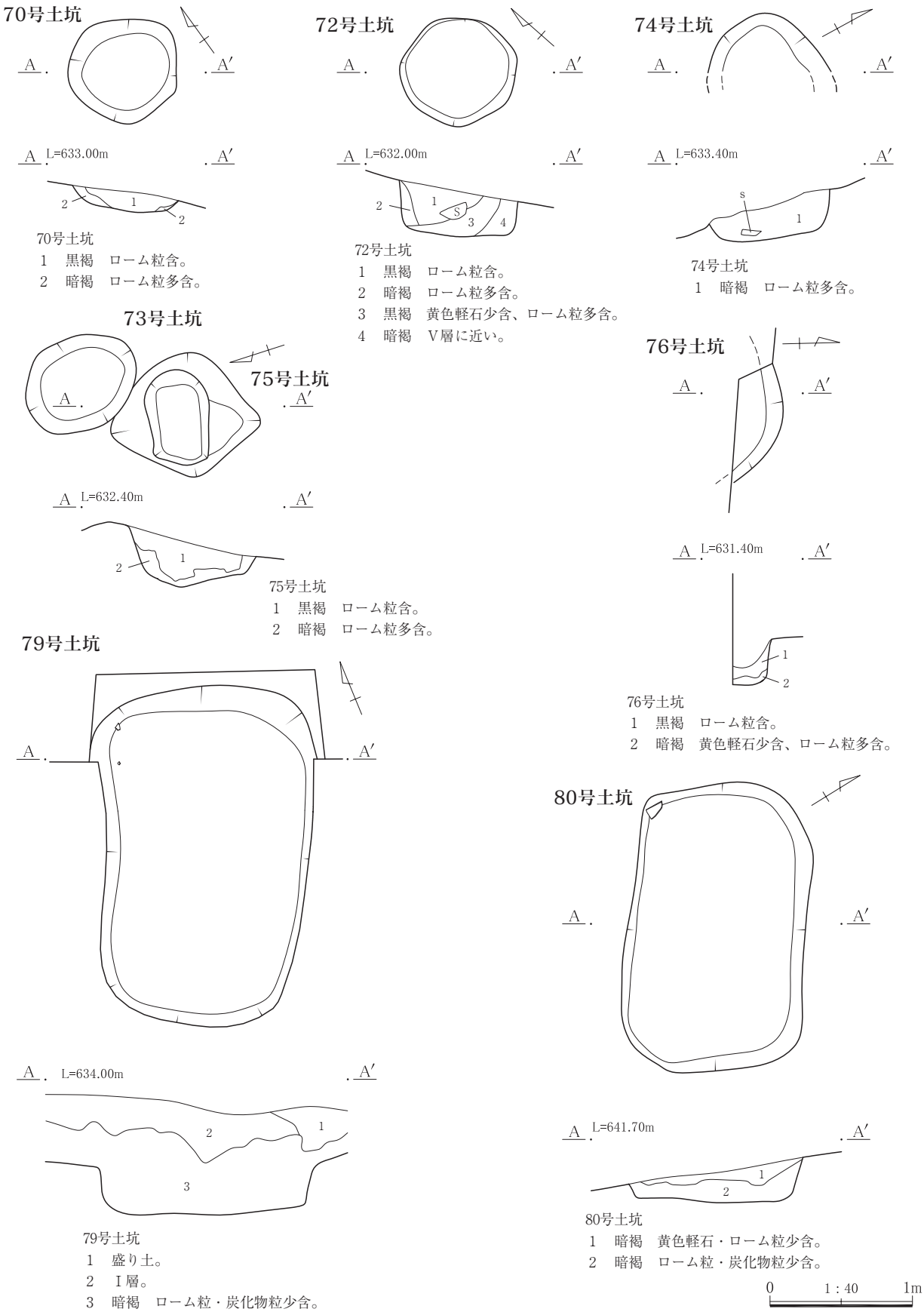
66号土坑
1　黒褐　ローム粒少含。
2　暗褐　ローム粒多含。

67号土坑
1　黒褐　ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　黒褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。
4　暗褐　Ⅴ層に近い。

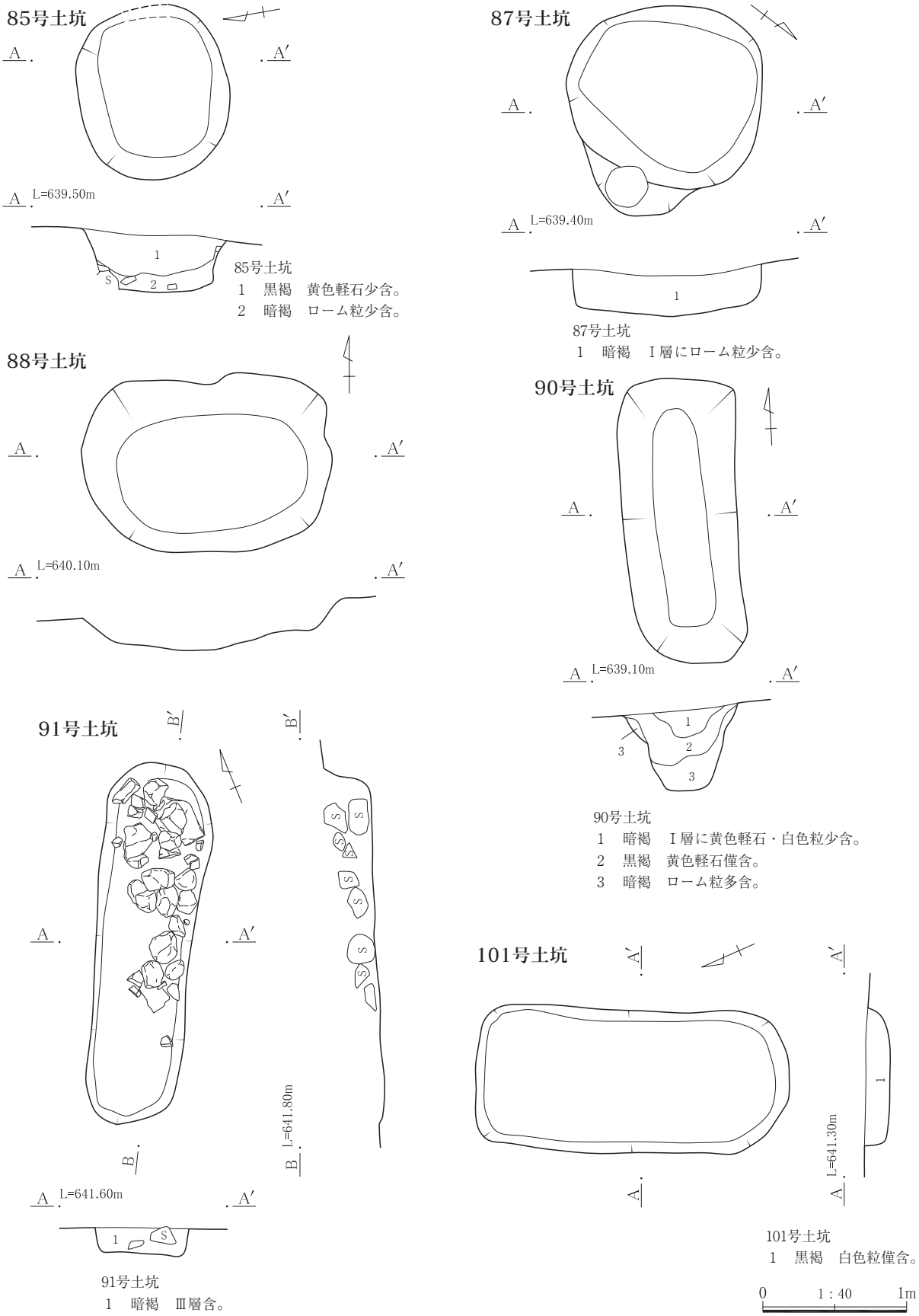
68号土坑
1　黒褐　ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　暗褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。

69号土坑
1　黒褐　ローム粒含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　黒褐　黄色軽石・ローム粒多含。

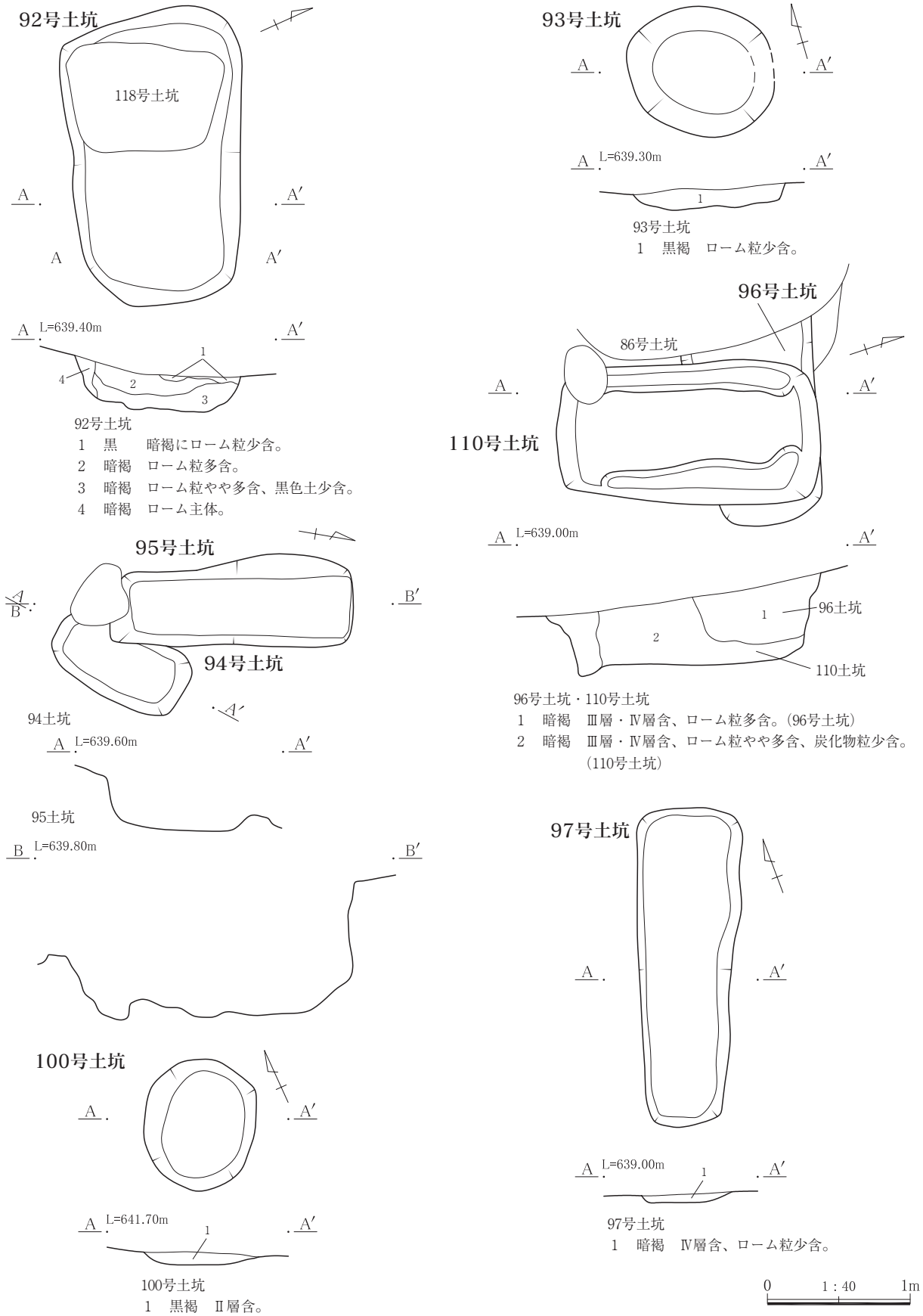
第137図　57・60～62・66～69号土坑



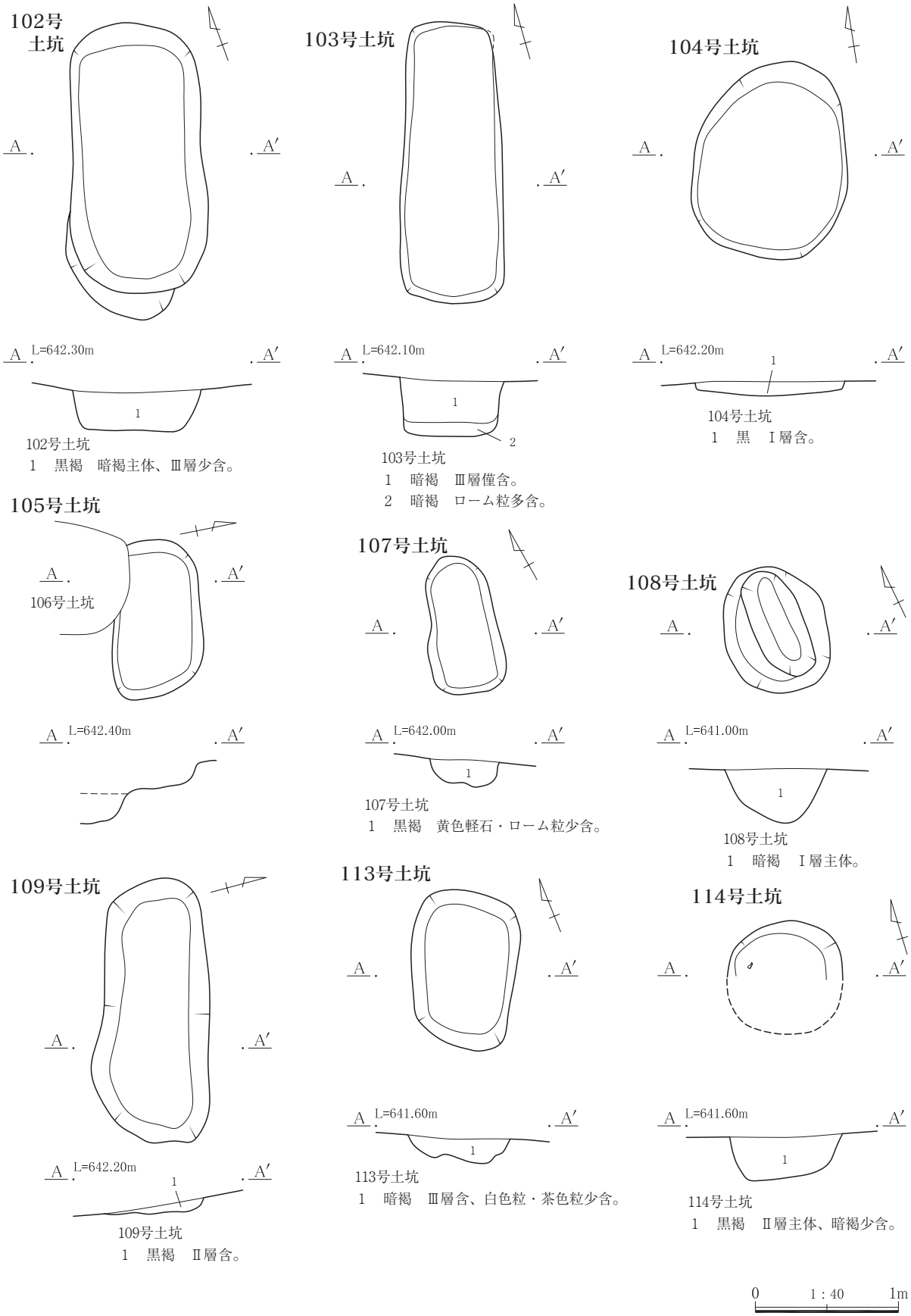
第138図　70・72～76・79・80号土坑



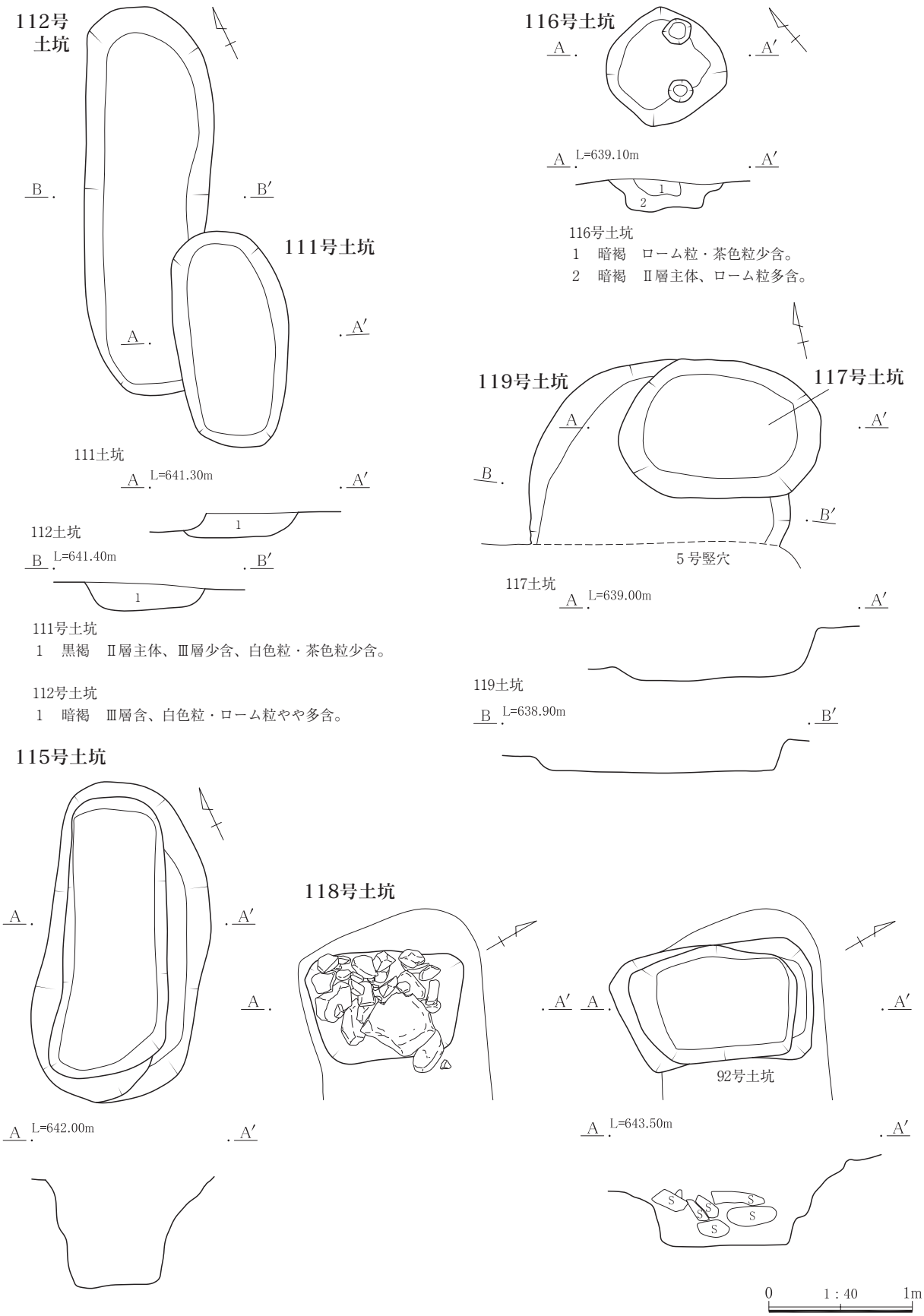
第139図　85・87・88・90・91・101号土坑



第140図　92～97・100・110号土坑



第141図　102～105・107～109・113・114号土坑

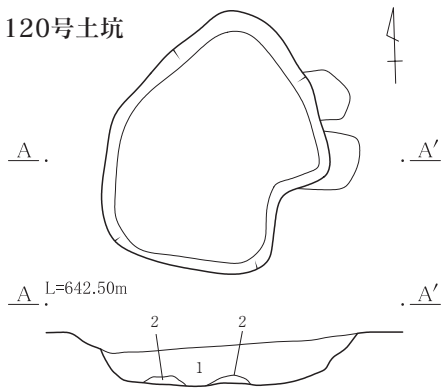


116号土坑
1　暗褐　ローム粒・茶色粒少含。
2　暗褐　Ⅱ層主体、ローム粒多含。

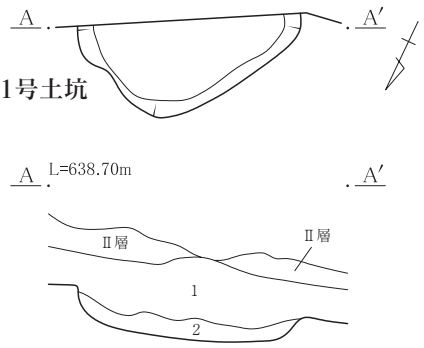
111号土坑
1　黒褐　Ⅱ層主体、Ⅲ層少含、白色粒・茶色粒少含。

112号土坑
1　暗褐　Ⅲ層含、白色粒・ローム粒やや多含。

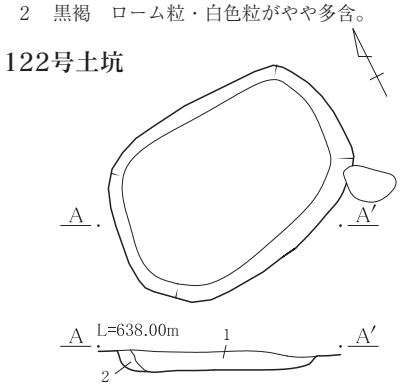
第142図　111・112・115～119号土坑



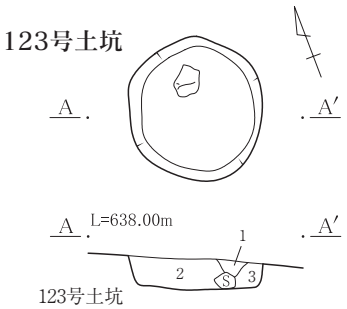
120号土坑
1　黒　　Ⅲ層主体。
2　黒褐　ローム粒・白色粒がやや多含。



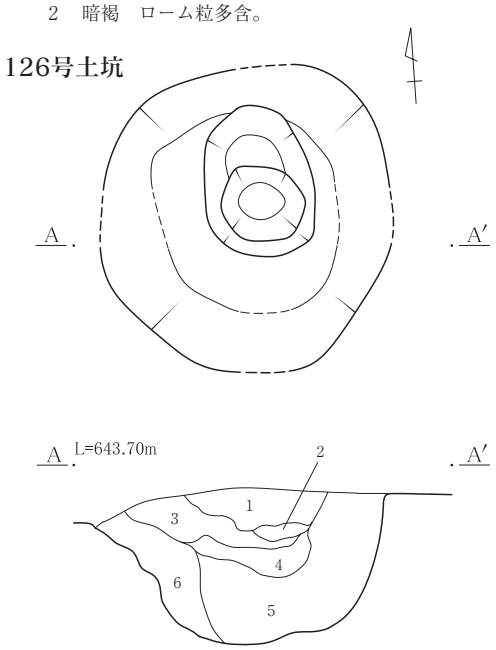
121号土坑
1　暗褐　Ⅲ層に黄色軽石少含。
2　黒褐　ローム粒僅含。



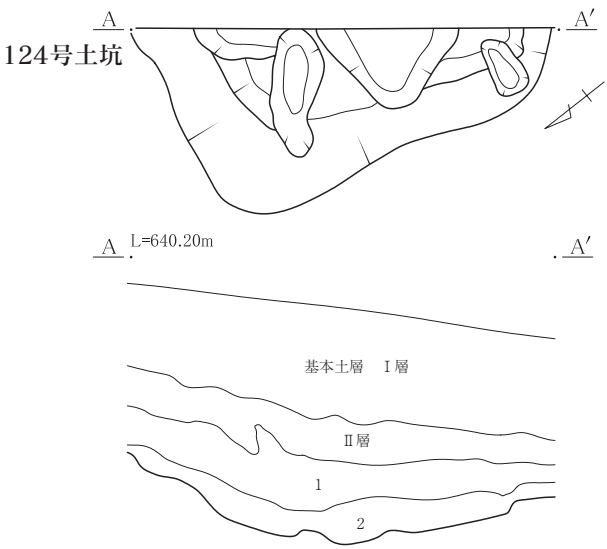
122号土坑
1　暗褐　黄色軽石少含・ローム粒僅含。
2　暗褐　ローム粒多含。



123号土坑
1　黒　　Ⅲ層主体。
2　黒　　Ⅲ層主体、ローム粒僅含。
3　黒褐　Ⅲ層主体、ローム粒少含。



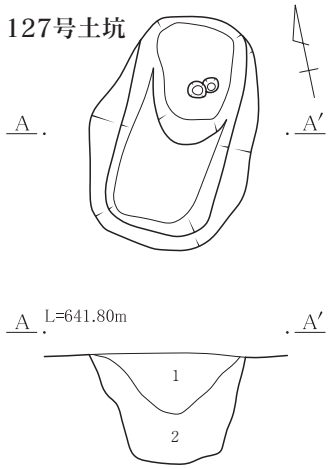
126号土坑
1　黒褐　Ⅲ層。
2　暗褐　Ⅲ層に黄色軽石多含。
3　黒褐　ローム粒やや多含。
4　黒褐　Ⅱ層主体、ローム粒やや多含。
5　暗褐　Ⅱ層主体、ローム粒少含。
6　Ⅴ層



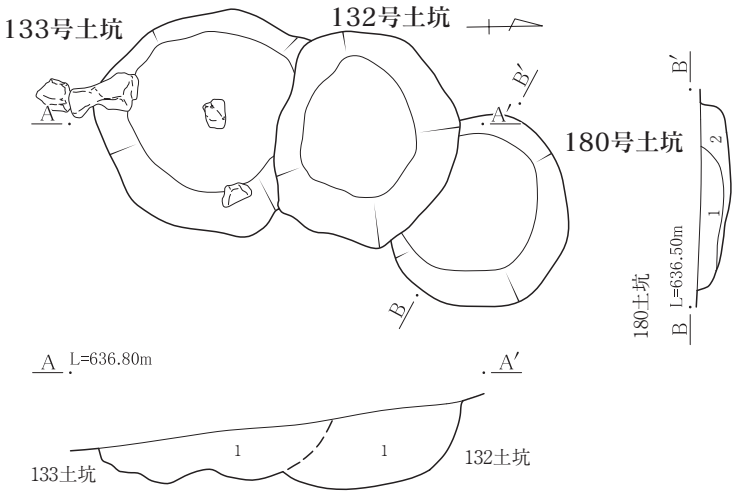
124号土坑
1　暗褐　Ⅱ層主体。
2　暗褐　Ⅱ層主体、ローム粒少含。

0　1：40　1m

第143図　120～124・126号土坑

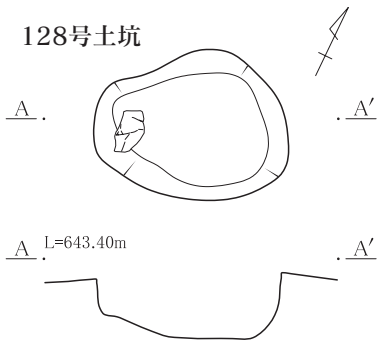


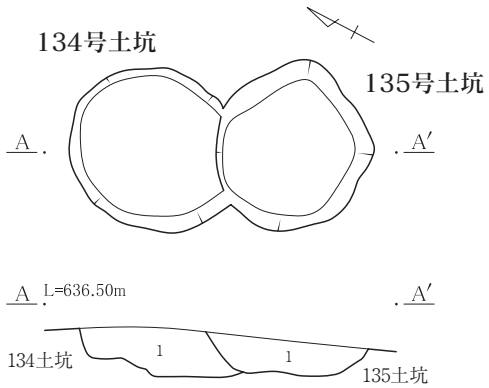
127号土坑
1　黒褐　黄色軽石少含。砂質。
2　黒褐　黄色軽石やや多含。砂質。



132号土坑・133号土坑
1　暗褐　小礫僅含。

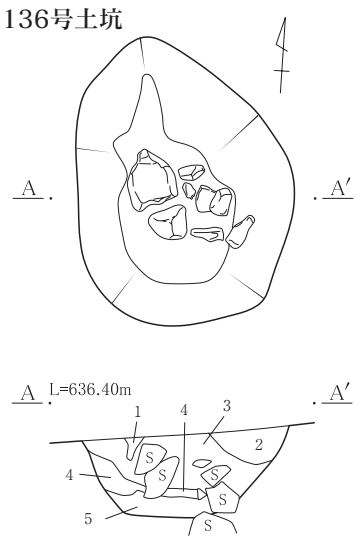
180号土坑
1　黒褐　黄色軽石僅含。
2　暗褐　１層にローム粒少含。



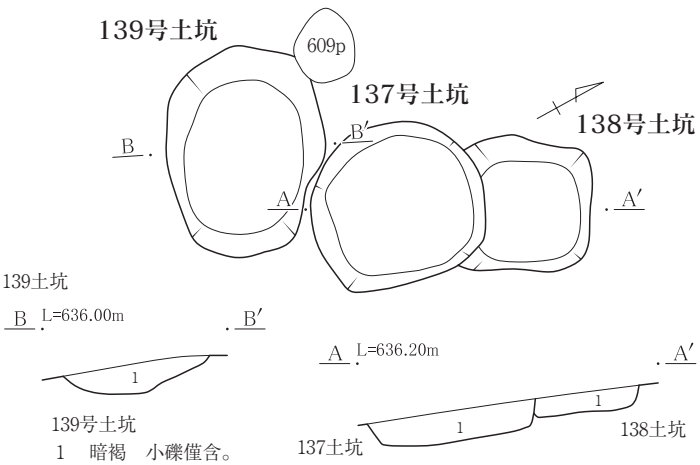


134号土坑
1　暗褐　小礫僅含。

135号土坑
1　暗褐　小礫僅含。



136号土坑
1　暗褐　表土の混入か。
2　暗褐　Ⅲ層とⅣ層含。
3　明褐　黄色軽石少含。
4　暗褐　黄色軽石・ローム粒少含。
5　暗褐　黄色軽石少含、ローム粒多含。



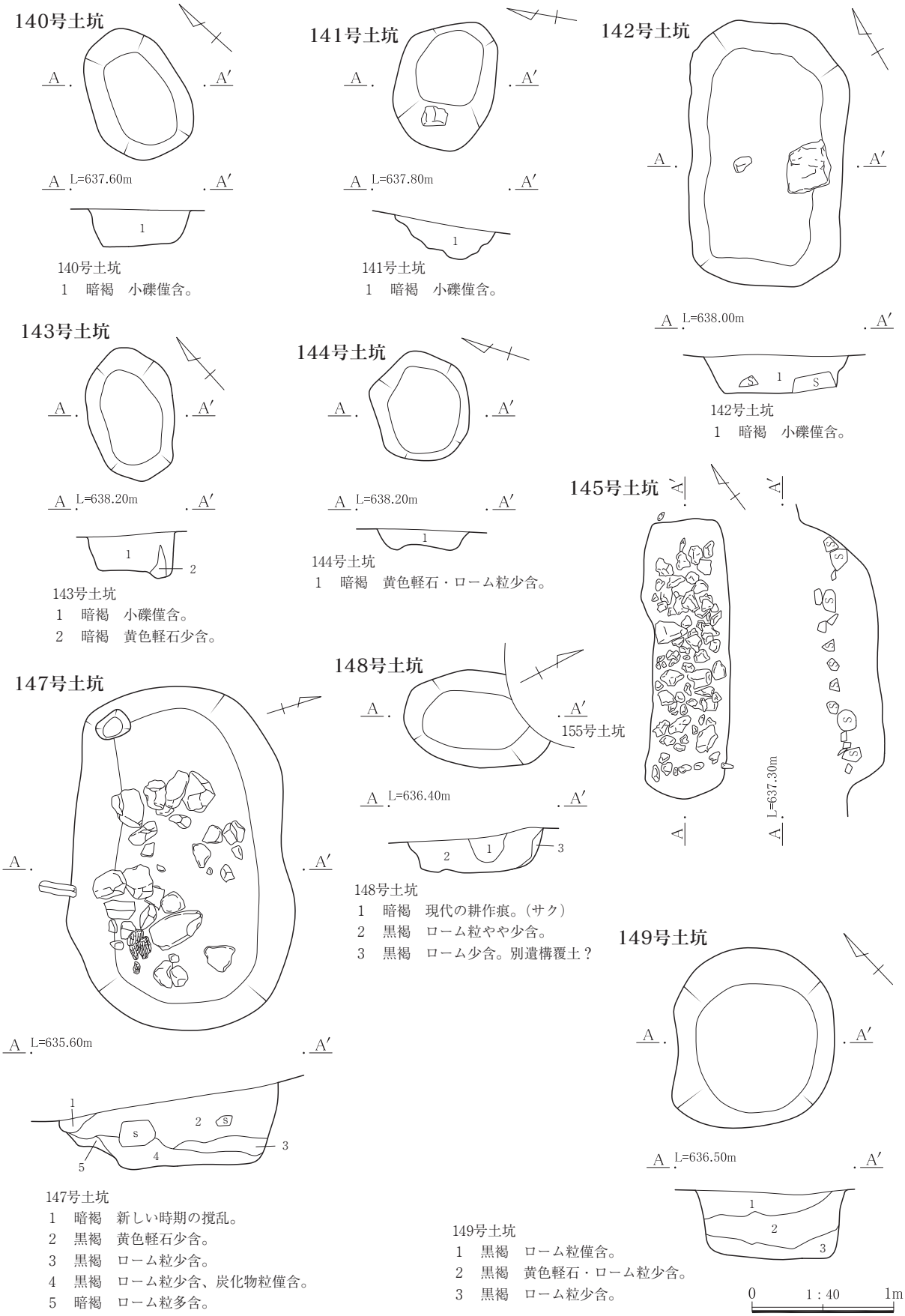
139号土坑
1　暗褐　小礫僅含。

137号土坑
1　暗褐　小礫僅含。

138号土坑
1　暗褐　小礫僅含。

0　1：40　1m

第144図　127・128・132～139・180号土坑



140号土坑
1　暗褐　小礫僅含。

141号土坑
1　暗褐　小礫僅含。

142号土坑
1　暗褐　小礫僅含。

143号土坑
1　暗褐　小礫僅含。
2　暗褐　黄色軽石少含。

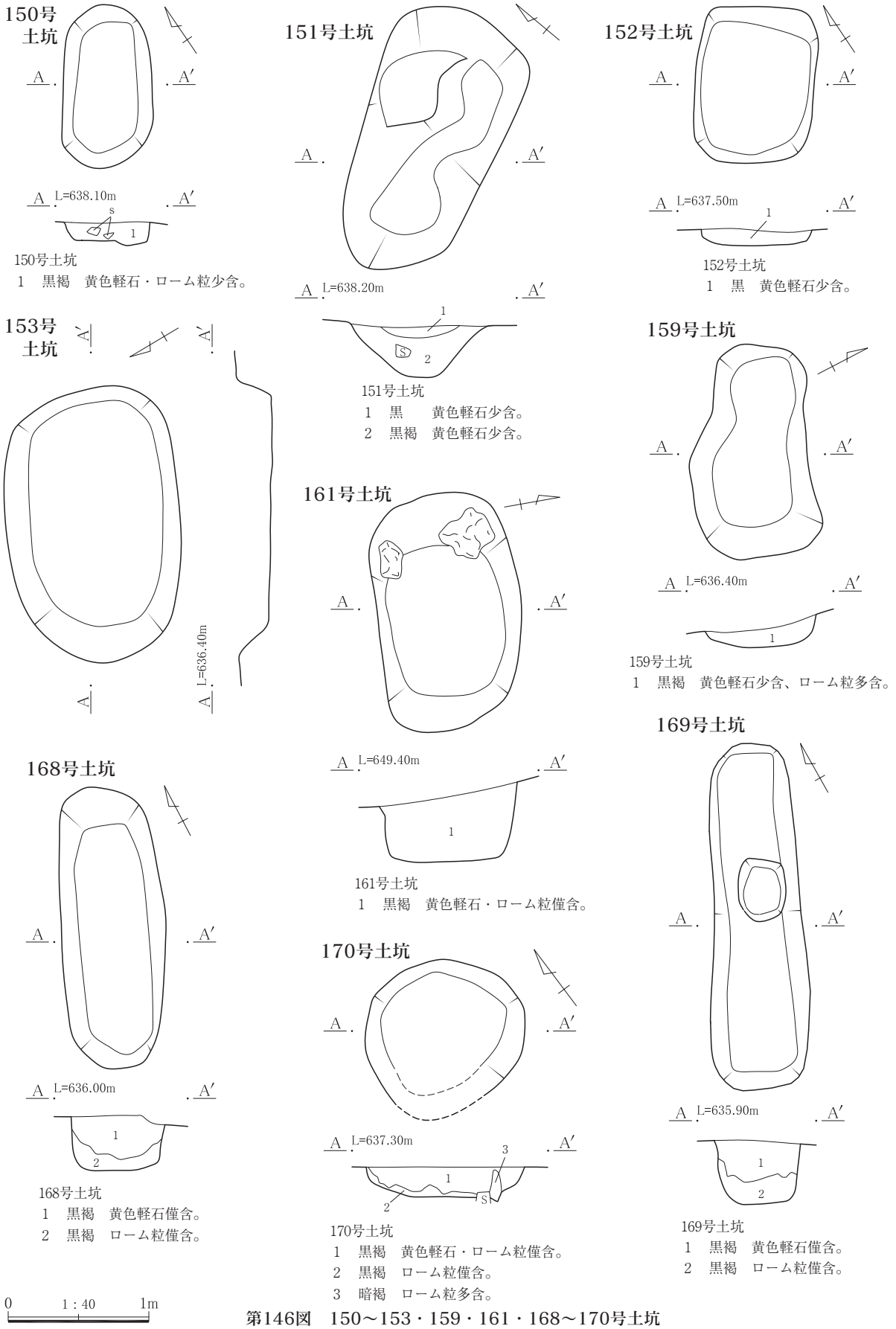
144号土坑
1　暗褐　黄色軽石・ローム粒少含。

148号土坑
1　暗褐　現代の耕作痕。（サク）
2　黒褐　ローム粒やや少含。
3　黒褐　ローム少含。別遺構覆土？

147号土坑
1　暗褐　新しい時期の撹乱。
2　黒褐　黄色軽石少含。
3　黒褐　ローム粒少含。
4　黒褐　ローム粒少含、炭化物粒僅含。
5　暗褐　ローム粒多含。

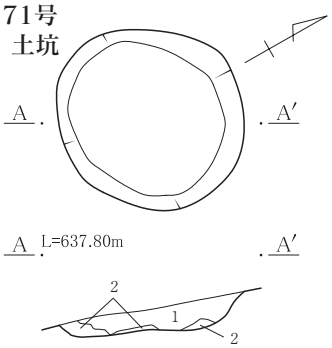
149号土坑
1　黒褐　ローム粒僅含。
2　黒褐　黄色軽石・ローム粒少含。
3　黒褐　ローム粒少含。

第145図　140～145・147～149号土坑



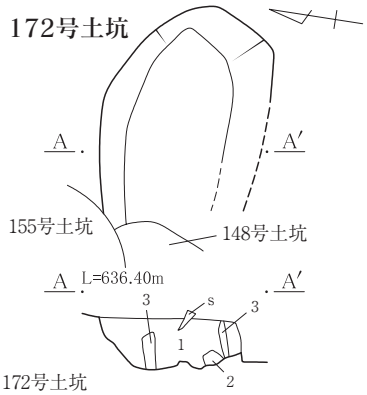
第146図　150～153・159・161・168～170号土坑

171号土坑



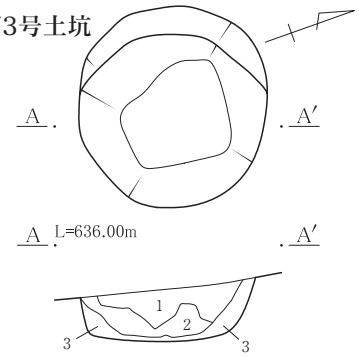
171号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒僅含。
2　黒褐　ローム粒僅含。

172号土坑



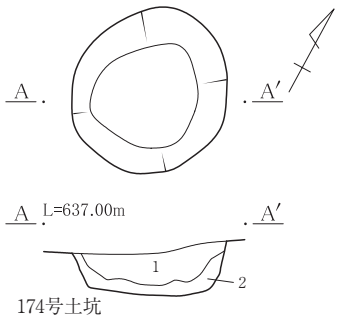
172号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒僅含。
2　黒褐　１層にローム粒僅含。
3　暗褐　ローム粒多含。

173号土坑



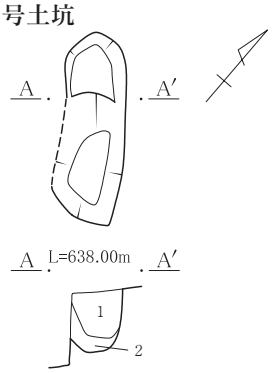
173号土坑
1　黒褐　黄色軽石僅含。
2　褐　　くすんだローム質土・黄色軽石僅含。
3　黒褐　１層より黄色軽石含。

174号土坑



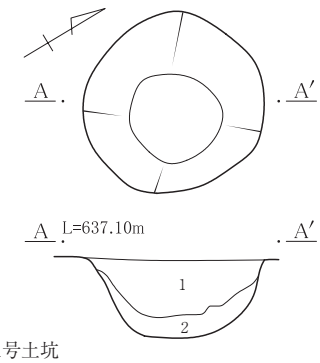
174号土坑
1　黒褐　黄色軽石僅含、縄文前期・早期層に相当する土層。
2　黒褐　１層にローム粒含。

175号土坑



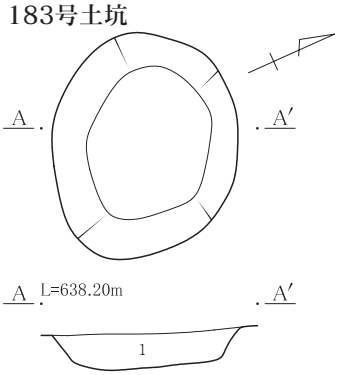
175号土坑
1　黒褐　Ⅱ層主体、黄色軽石少含。
2　黒褐　１層より黄色軽石僅含。

181号土坑



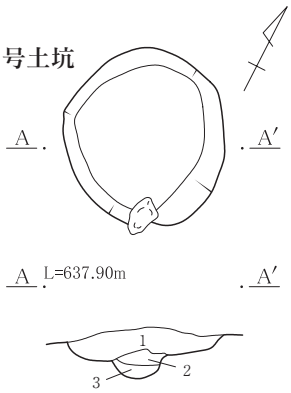
181号土坑
1　黒　粘性あり、大粒の黄色軽石僅含。
2　黒　１層にローム粒僅含。

183号土坑



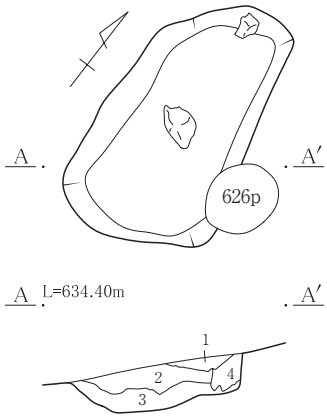
183号土坑
1　黒褐　黄色軽石僅含。

186号土坑



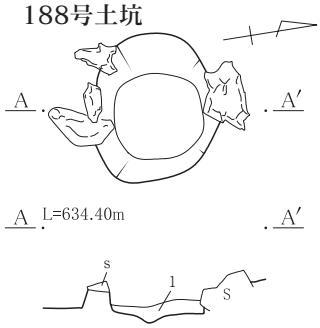
186号土坑
1　黒褐　黄色軽石僅含。
2　暗褐　黄色軽石少含。
3　黒褐　黄色軽石僅含、ローム粒やや少含。

185号土坑



185号土坑
1　黒褐　黄色軽石僅含。
2　黒褐　黄色軽石少含。
3　黒褐　ローム粒やや少含。
4　黒褐　くすんだロームブロック含。

188号土坑

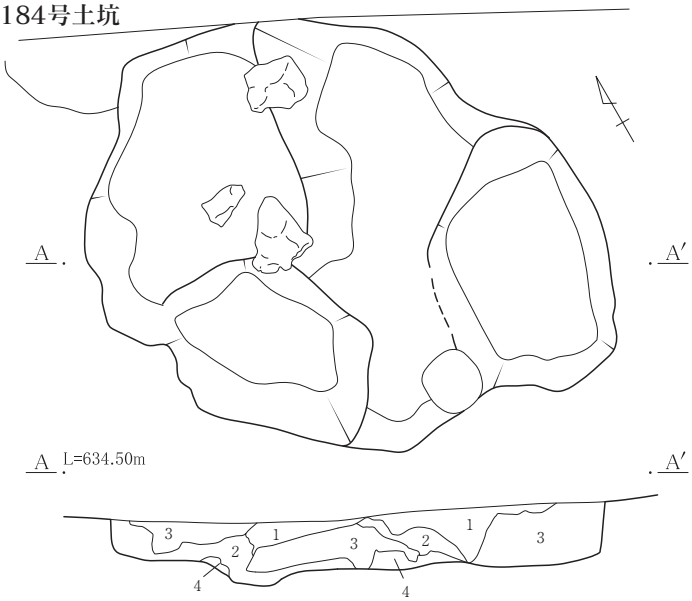


188号土坑
1　黒褐　ローム粒少含。

0　1：40　1m

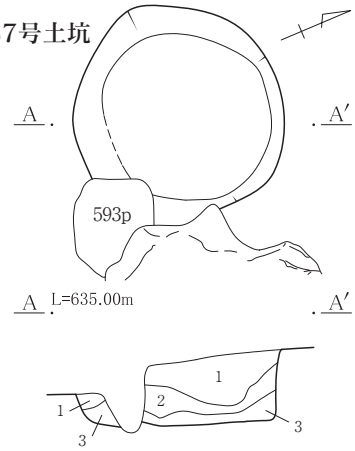
第147図　171～175・181・183・185・186・188号土坑

184号土坑



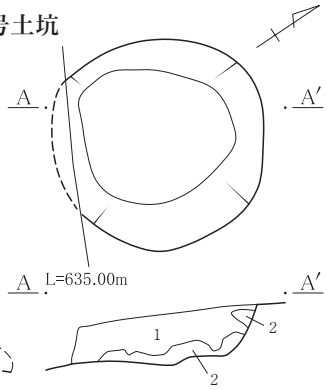
184号土坑
1　黒褐　黄色軽石僅含。
2　黒褐　くすんだローム粒やや少含。
3　黒褐　黄色軽石僅含。
4　にぶい黄褐　くすんだローム層。

187号土坑



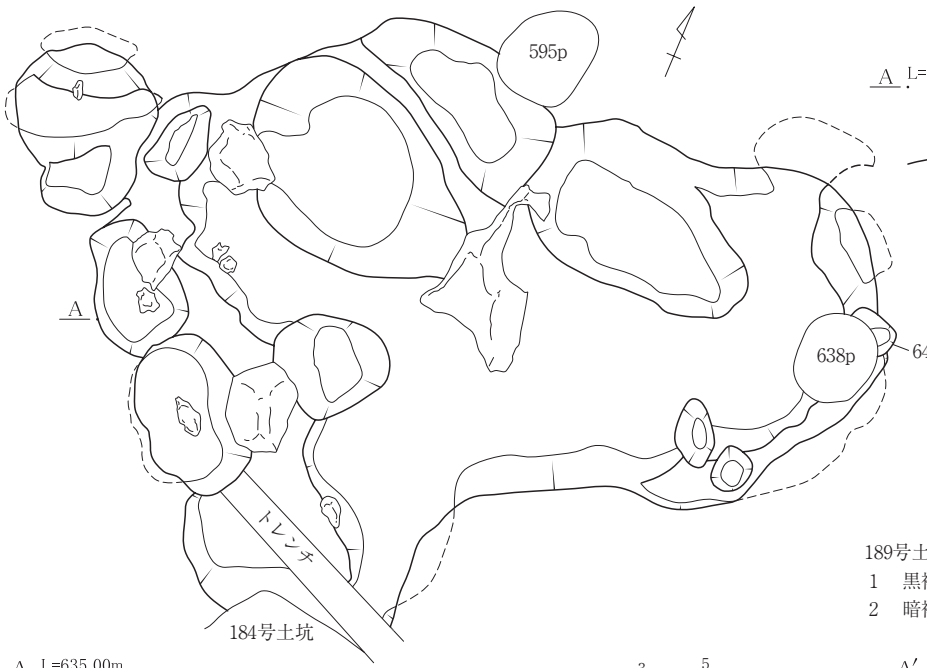
187号土坑
1　黒褐　ローム粒僅含。
2　暗褐　ローム粒多含。
3　褐　ローム主体。

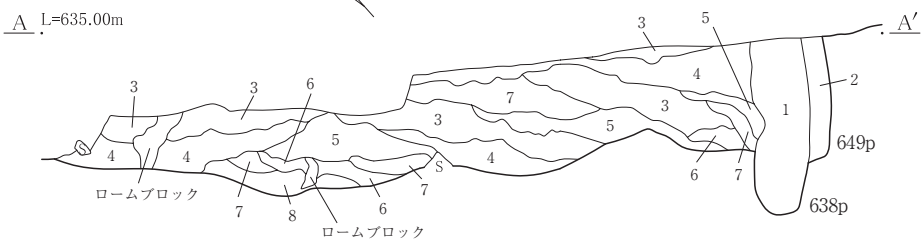
190号土坑



190号土坑
1　黒褐　ローム僅含。
2　にぶい黄褐　ローム質土。１層をブロック状に僅含。

189号土坑





189号土坑
1　黒褐　黄色軽石・ローム粒僅含。
2　暗褐　黄色軽石・ローム粒少含。
3　黒褐　ローム粒僅含。
4　暗褐　ローム粒少含。
5　褐　ローム粒多含。
6　暗褐　ローム少含。
7　褐　ローム多含。
8　黄褐　ローム主体。

0　1：40　1m

第148図　184・187・189・190号土坑

出した平面状況の様子で遺構図に掲示しているが、ほぼすべての土坑の中央部に楕円形を呈している。

それ以外にも発掘調査の進捗状況から埋没状況が確認出来なかったものの、それに相当すると考えられる土坑がいくつか存在する。

この埋没土については、篠原正洋氏が記述しているように、「古代の特定時期に、吾妻川流域に発生した火災・地震・地滑り等の自然災害に起因する」可能性が高く、今後の発掘調査を通じて明らかにしていきたいと考える。

なお、詳細については、第４章第２節での村上章義氏の原稿を参照されたい。

②墓（第131図、写真図版22）

土坑とした中に墓（土坑墓：土壙）と考えられる遺構が１基検出されている。71号土坑であり、84区Ｘ―13グリッドに位置する。規模は長さ1.14ｍ・幅1.02ｍ・深さ0.36ｍである。上位に大小の石が詰められており、それを取り外すと頭蓋骨が出土した。この事から、動物による掘り返しを回避する処置と考えられる。その他に土坑の円筒形の形状から桶による座葬かと考えたが、桶の痕跡は確認出来なかった。墓標等も確認されていない。内部からは人骨と副葬品である煙管が出土しており、形態から江戸時代後期と考えられる。

この人骨については、第５章第６節に楢崎修一郎氏による鑑定の結果を収録しているので、そちらを参照していただきたい。

③土坑（第131～148図、写真図版22～44）

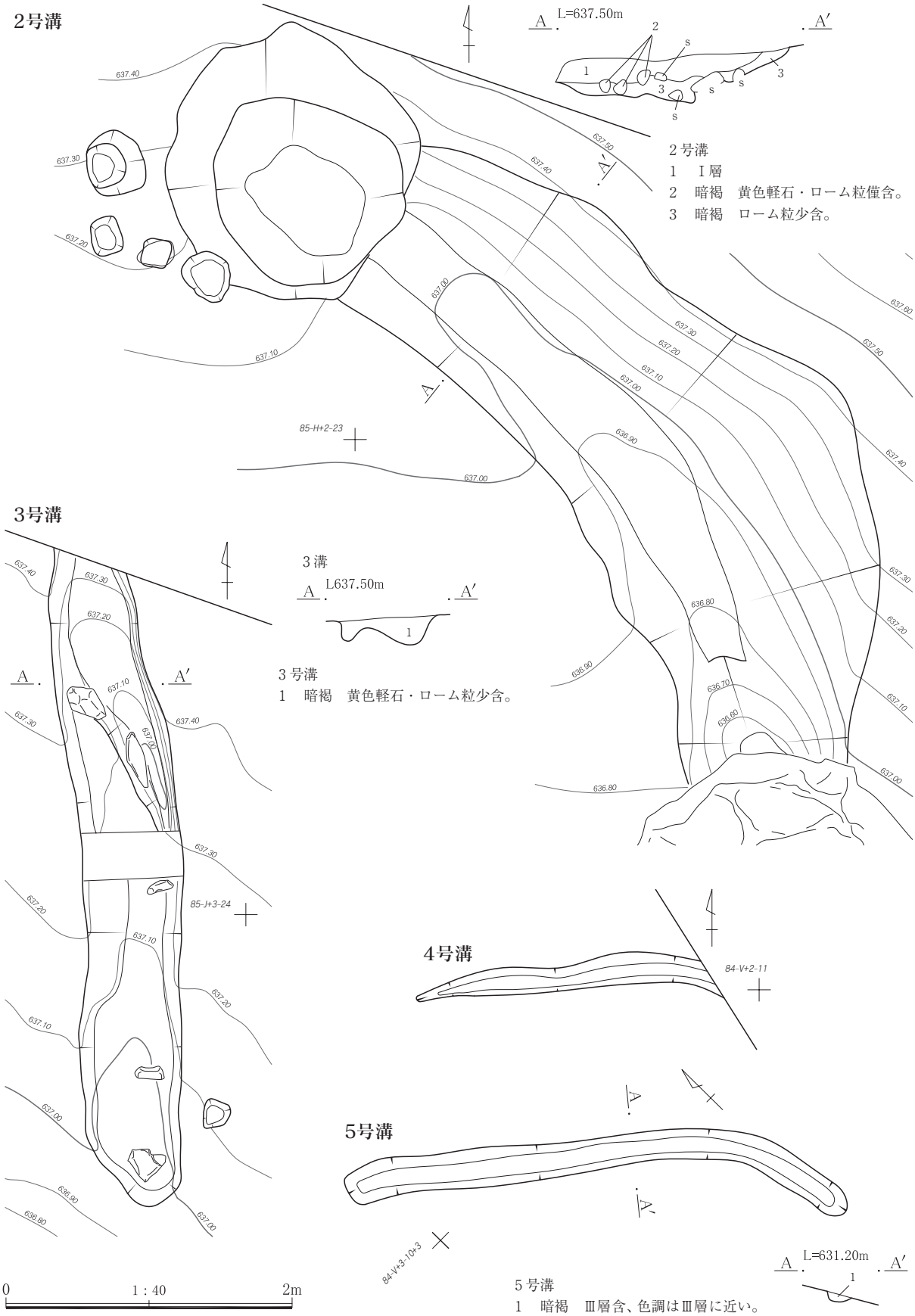
ここでは、陥し穴や墓と区分された以外の穴状の掘り込み遺構について土坑と判断する。形状や長さ・幅・深さ等もまちまちであり、企画性がほとんどないものである。また、形状では陥し穴と同等と考えられるものの、深さが相当しない事例については、あえて土坑と判断した。90号や100号などがそうである。さらに、規模の違いがあまり大型のピットと変わらないものも存在するが、各調査担当者の認定をここでは優先する事とする。

なお、19号・20号土坑の平面については、４号竪穴住居の掘り方平面図に記載されている。

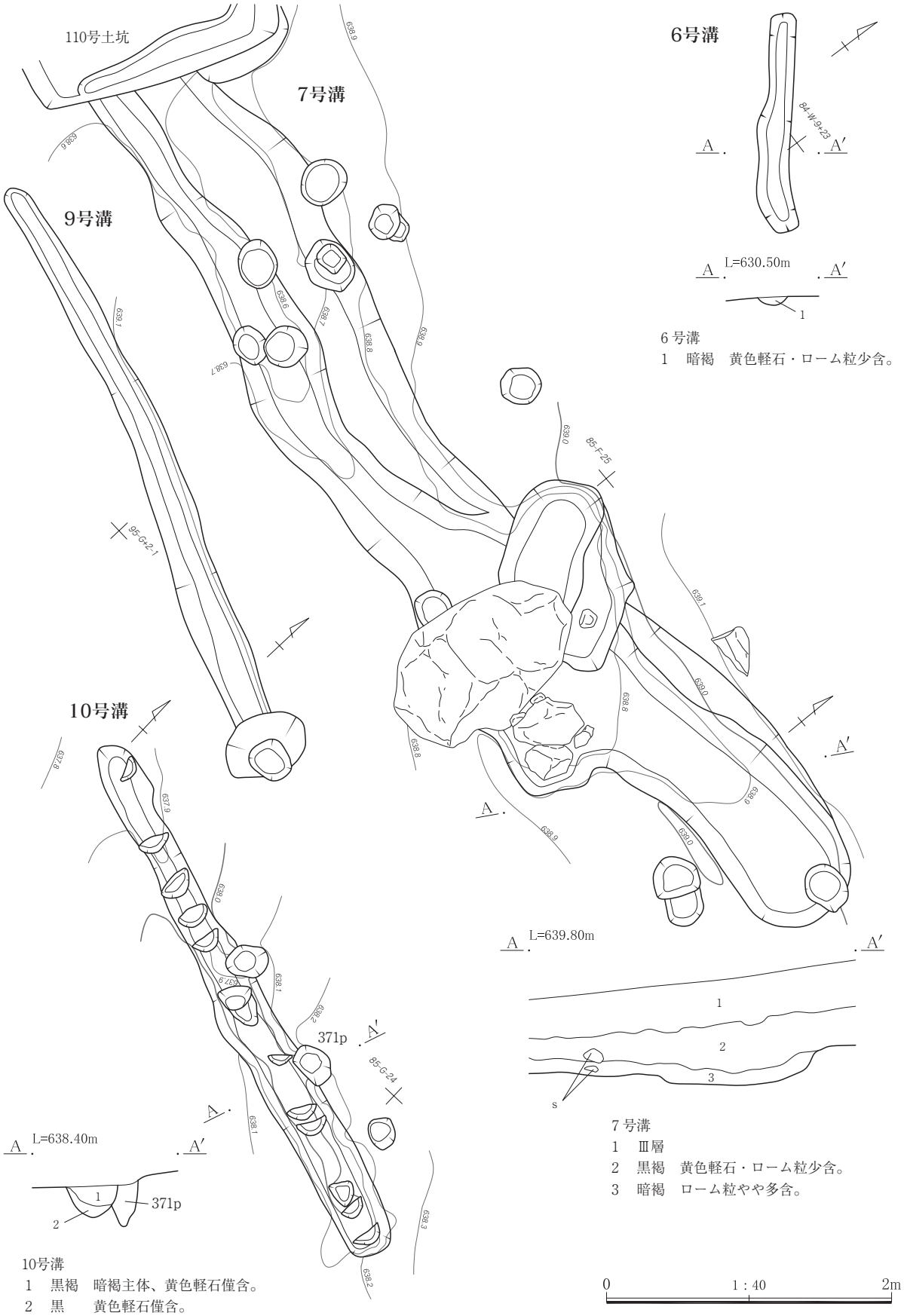
８　溝（第149～152図、写真図版44・45）

溝は84区で３本、85区で７本、85・95区で３本の計13本が検出されている。

２号溝は85区Ｇ－22、Ｈ－22・23グリッドの範囲に位置する。長さ約4.8ｍ、幅約2.1ｍ、深さ0.5ｍで、走向方向が北西－南東で、やや緩やかに北よりに湾曲している。現在の『つぶらっこ』様の位置まで続いている事から、おそらくは、北西の穴状の部分にあった『つぶらっこ』様を、南東の今の場所に溝を掘り込む事で、転がす等して移動したものと考えられる。３号溝は85区Ｊ－22・23グリッドで、長さ4.5ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.2ｍで、走向方向がほぼ南－北である。４号溝は84区Ｖ－10・11グリッドで、残存する長さが2.1ｍ、幅0.2ｍ、深さ0.08ｍで、東側が調査範囲外に延びており、走向方向は東－西である。５号溝は84区Ｖ－10グリッドで、残存する長さ3.5ｍ、幅0.3ｍ、深さ0.09ｍで、走向方向が北西－南東である。６号溝は84区Ｖ・Ｗ－９グリッドで、長さ1.5ｍ、幅0.2ｍ、深さ0.07ｍで、走向方向が北西－南東である。３つの溝共に、幅が狭くて浅くやや湾曲する事や、縄文時代の竪穴住居が密集する84区に位置する事から円形、もしくは楕円形の竪穴住居に伴う周溝の可能性も考えられる。７号溝は85区Ｅ～Ｇ－24グリッドで、長さ7.1ｍ、幅1.1ｍ、深さ0.2ｍで、走向方向が東－西である。８号溝は95区Ｆ・Ｇ－１グリッド長さが9.0ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.12ｍで、走向方向が東－西である。９号溝は95区Ｇ－１グリッドで、長さ4.1ｍ、幅0.3ｍ、深さ0.08ｍで、走向方向が東－西である。10号溝は85区Ｆ－23、Ｇ－23・24グリッド長さ4.0ｍ、幅約0.4ｍ、深さ0.29ｍで、走向方向が東－西である。11号溝は85区Ｈ－24・25グリッドで、長さ2.3ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.17ｍで、走向方向が東－西である。12号溝は85区Ｈ・Ｉ－24グリッドで、長さ1.6ｍ、幅0.3ｍ、深さ0.18ｍで、走向方向が東－西


2号溝
A L=637.50m A′
2号溝
1　Ⅰ層
2　暗褐　黄色軽石・ローム粒僅含。
3　暗褐　ローム粒少含。
85-H+2-23
3号溝
3溝
A L637.50m A′
3号溝
1　暗褐　黄色軽石・ローム粒少含。
85-J+3-24
4号溝
84-V+2-11
5号溝
84-V+3-10+3
A L=631.20m A′
5号溝
1　暗褐　Ⅲ層含、色調はⅢ層に近い。
0　1：40　2m

第149図　２～５号溝

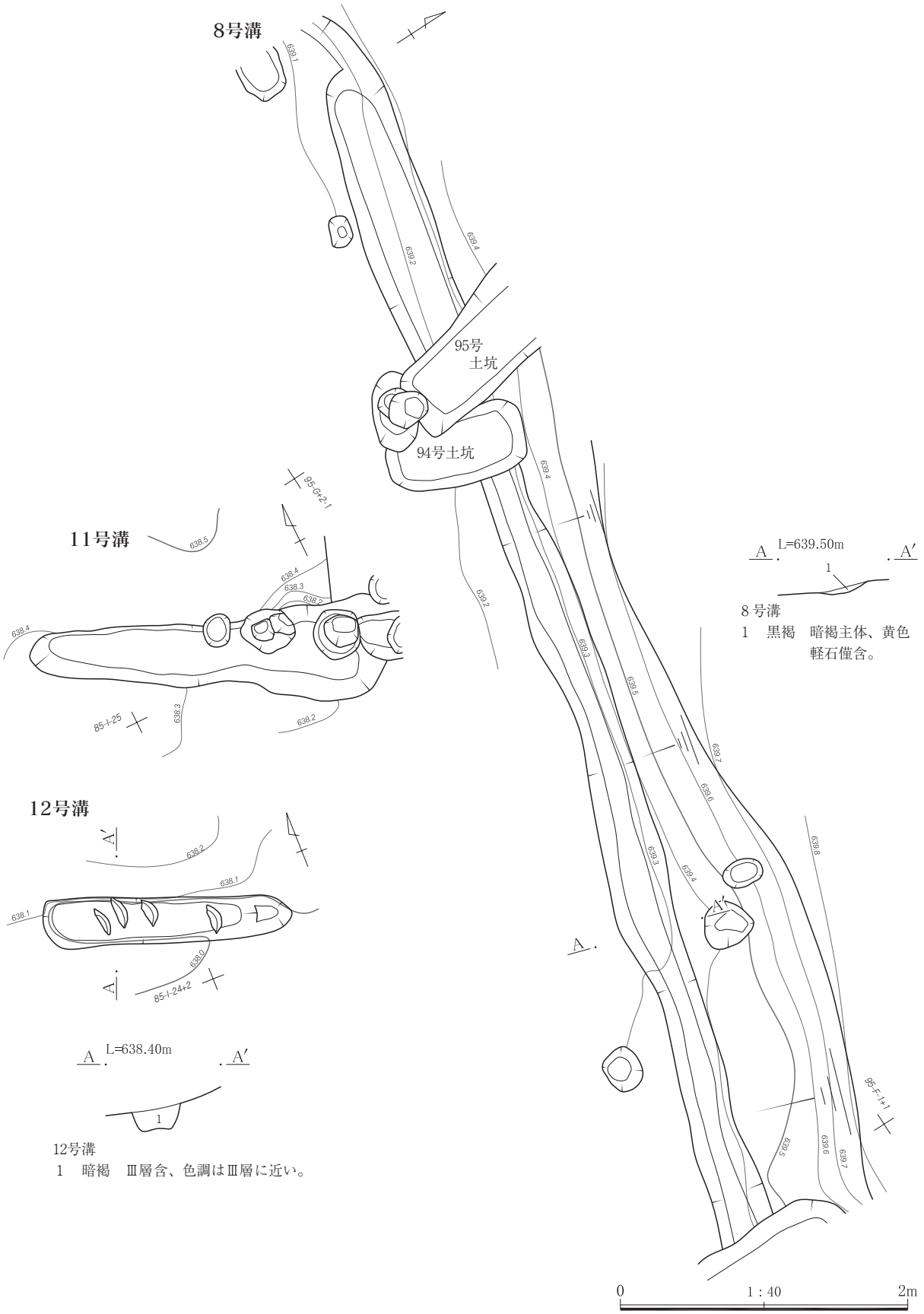


6号溝
1　暗褐　黄色軽石・ローム粒少含。

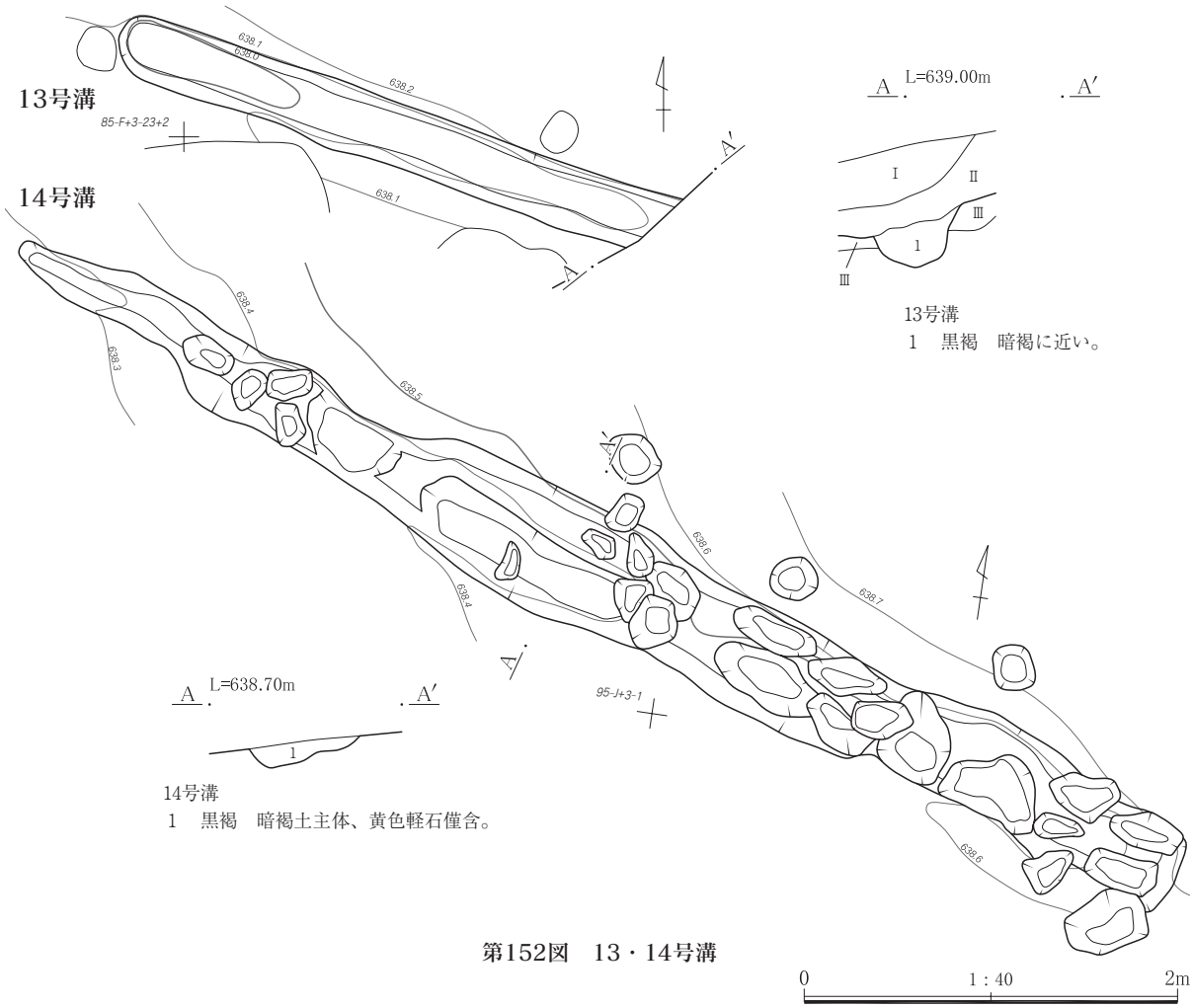
7号溝
1　Ⅲ層
2　黒褐　黄色軽石・ローム粒少含。
3　暗褐　ローム粒やや多含。

10号溝
1　黒褐　暗褐主体、黄色軽石僅含。
2　黒　　黄色軽石僅含。

第150図　６・７・９・10号溝



第151図　８・11・12号溝



第152図　13・14号溝

である。13号溝は85区Ｆ－23グリッドで、長さ3.0m、幅0.4m、深さ0.15mで、走向方向が東－西である。14号溝は85区Ｊ－25、95区Ｊ・Ｋ－１グリッドで、長さ7.1m、幅0.7m、深さ0.17mで、走向方向が東－西である。

この中で、８号溝・９号溝・10号溝・13号溝・14号溝はテラス内に位置し、造成面の縁の方向とほぼ並行の東西走行である事から、８号溝が11号掘立柱建物と15号掘立柱建物の、９号溝が13号掘立柱建物と16号掘立柱建物のそれぞれの雨垂れラインに相当するかもしれない。

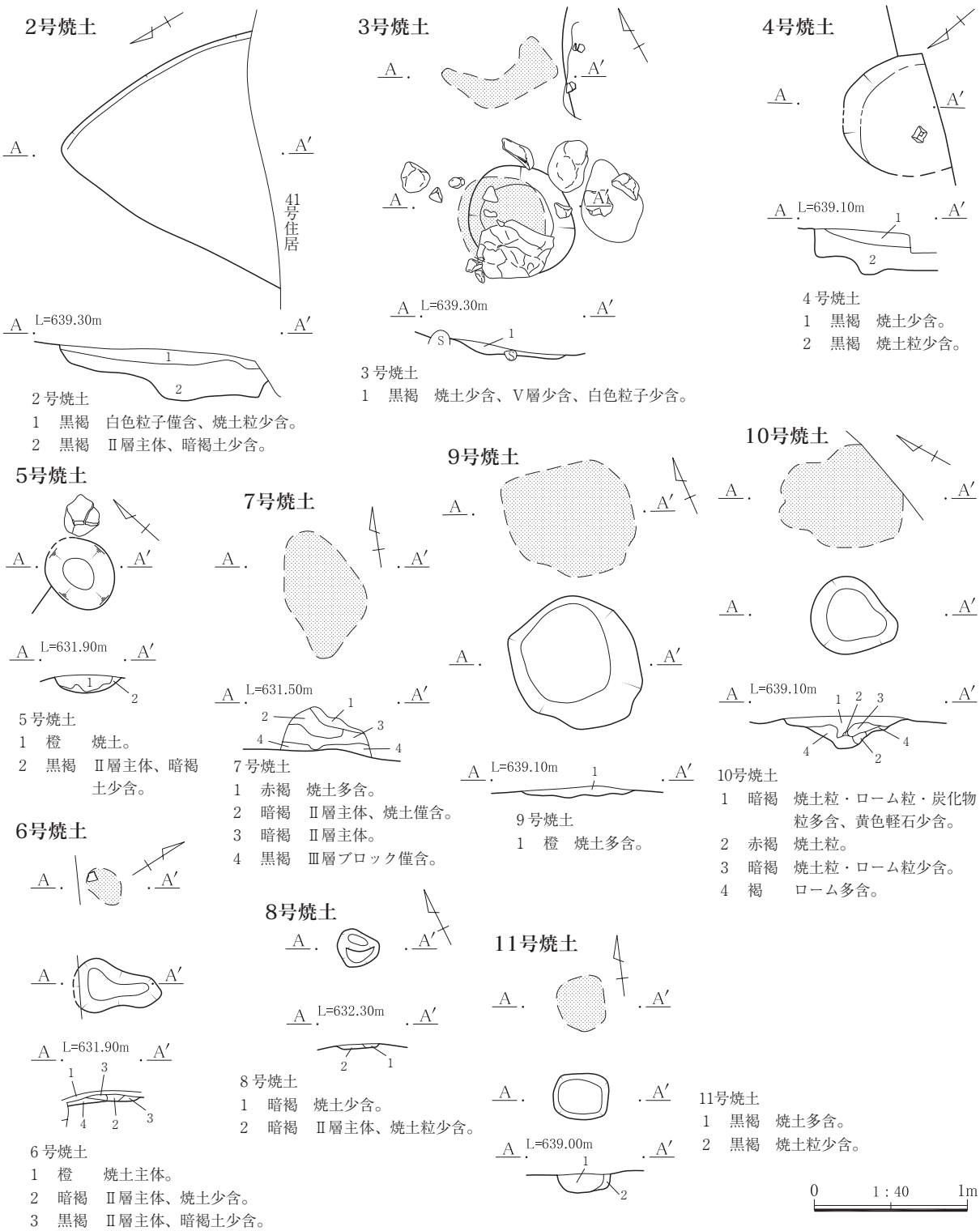
9　焼土（第153・154図、写真図版49～51）

焼土は21基検出された。84区で３基、85区で10基、95区で７基、欠番が１基である。大部分で焼土が薄く広がる形で検出されているが、その広がりの規模はまちまちで、灰や炭化物の分布も見られる事例も存在する。大部分の性格は不明である。16号については石垣を備えたテラスの上に残されており、昭和初期まで続けられた麻作りに係わる遺構と考えられる焼土である。

10　湧水（第155・156図、写真図版51）

遺跡の北西部分と南西部分の２箇所で確認された。共に、発掘調査時点での水の湧き出しが確認されていたが、95区Ｒ・Ｓ－６・７グリッドに位置する１号について、は県道工事により埋設された。85区Ｊ・Ｋ－６～12グリッドに位置する２号についても同じく埋設されたが、湧き出し対策の処置は共に施されている。また、その量も年間を通じてほぼ一定である事が、工事前の期間調査で把握されていた。１号は湧水部分が谷地形の奥の自然の窪みであるが、

谷間を南に流下して、遺跡の南西部分の棚田の水源となり、さらに下位段丘の水田耕作にも工事直前まで利用されていた。２号は扇状地形を利用して、現在の崖部分で浅間草津黄色軽石（As-YPk）を露出させる事で水が湧き出している。その地点に石を組んで湧水遺構に整備し、そのすぐ下に洗い場的な石敷きの場を設置し、その先には「犬走り」と呼ばれる段をいくつか設けて、急な斜面での水の流れを制御



2号焼土
1　黒褐　白色粒子僅含、焼土粒少含。
2　黒褐　Ⅱ層主体、暗褐土少含。

3号焼土
1　黒褐　焼土少含、Ⅴ層少含、白色粒子少含。

4号焼土
1　黒褐　焼土少含。
2　黒褐　焼土粒少含。

5号焼土
1　橙　焼土。
2　黒褐　Ⅱ層主体、暗褐土少含。

6号焼土
1　橙　焼土主体。
2　暗褐　Ⅱ層主体、焼土少含。
3　黒褐　Ⅱ層主体、暗褐土少含。
4　暗褐　Ⅲ層主体。

7号焼土
1　赤褐　焼土多含。
2　暗褐　Ⅱ層主体、焼土僅含。
3　暗褐　Ⅱ層主体。
4　黒褐　Ⅲ層ブロック僅含。

8号焼土
1　暗褐　焼土少含。
2　暗褐　Ⅱ層主体、焼土粒少含。

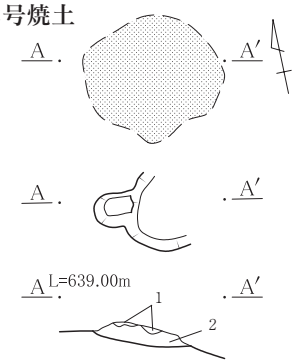
9号焼土
1　橙　焼土多含。

10号焼土
1　暗褐　焼土粒・ローム粒・炭化物粒多含、黄色軽石少含。
2　赤褐　焼土粒。
3　暗褐　焼土粒・ローム粒少含。
4　褐　ローム多含。

11号焼土
1　黒褐　焼土多含。
2　黒褐　焼土粒少含。

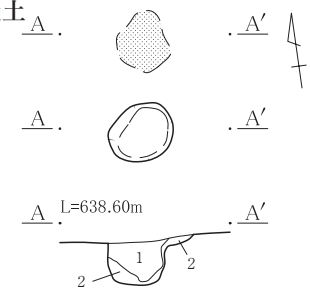
第153図　２～11号焼土

12号焼土



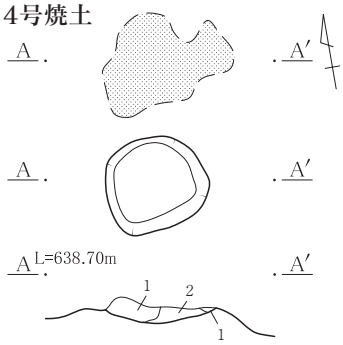
12号焼土
1　橙　　焼土主体。
2　黒褐　Ⅱ層主体、暗褐土少含。

13号焼土



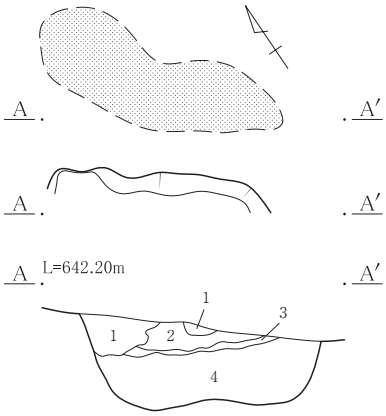
13号焼土
1　赤褐　焼土粒少含。
2　黒褐　Ⅱ層主体、暗褐土少含。

14号焼土



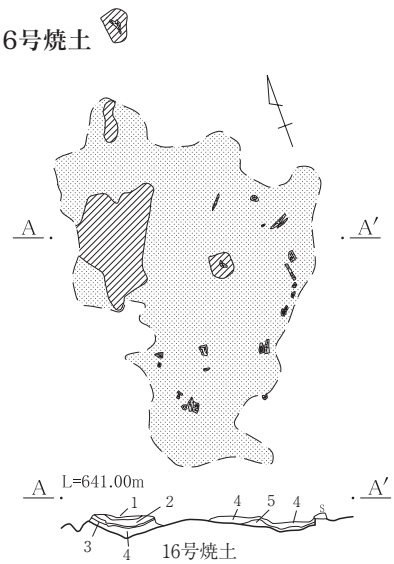
14号焼土
1　橙　　焼土主体。
2　黒褐　Ⅱ層主体、暗褐土少含。

15号焼土



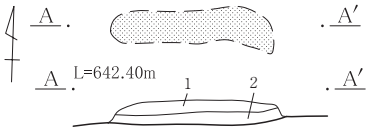
15号焼土
1　暗褐　焼土粒・炭化物粒多含。
2　暗褐　焼土粒少含。
3　赤褐　焼土粒多含。
4　褐　　焼土粒・ローム粒少含。

16号焼土



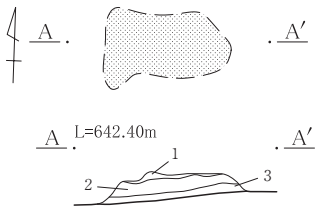
16号焼土
1　赤橙　焼土主体。
2　暗褐　焼土粒・炭化物粒少含。
3　上記２の層に灰少含。
4　褐　　焼土粒僅含。
5　暗　　焼土粒・ローム粒僅含。

17号焼土



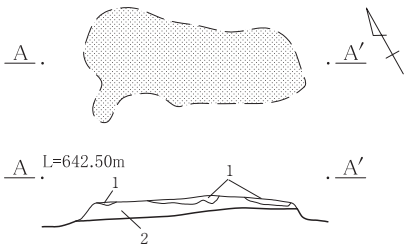
17号焼土
1　黒褐　砂質、焼土少含。
2　暗褐　焼土粒少含。

18号焼土



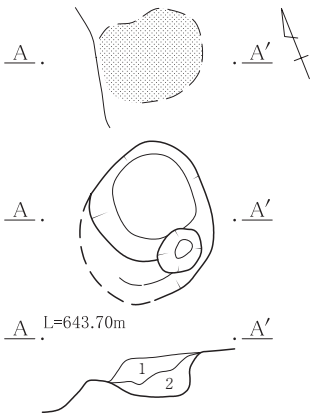
18号焼土
1　黒褐　砂質、焼土少含。
2　暗褐　焼土粒少含。
3　黒褐　Ⅱ層主体、暗褐土少含。

19号焼土



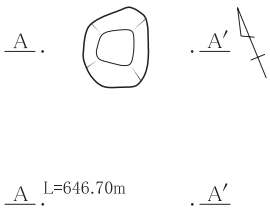
19号焼土
1　黒　　Ⅲ層僅含、焼土やや多含。
2　黒褐　Ⅱ層主体、暗褐土少含。

20号焼土



20号焼土
1　暗褐　焼土粒少含。
2　黒　　焼土粒・Ⅲ層ブロック僅含。

21号焼土

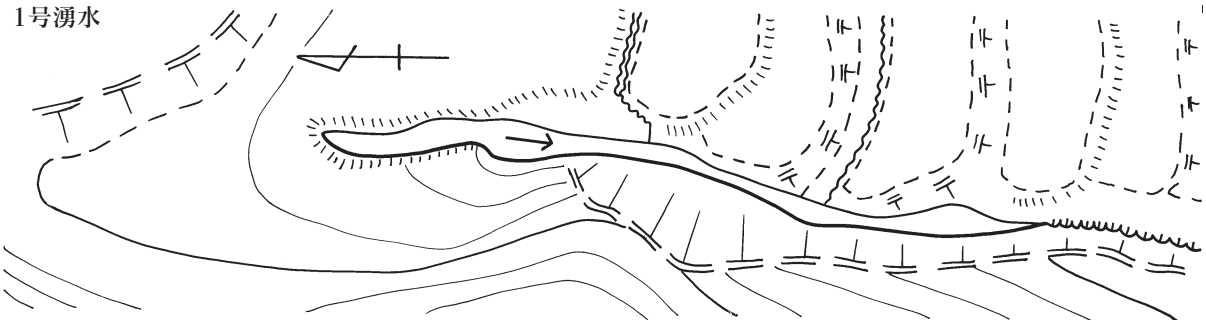


21号焼土
1　赤褐　焼土多含。

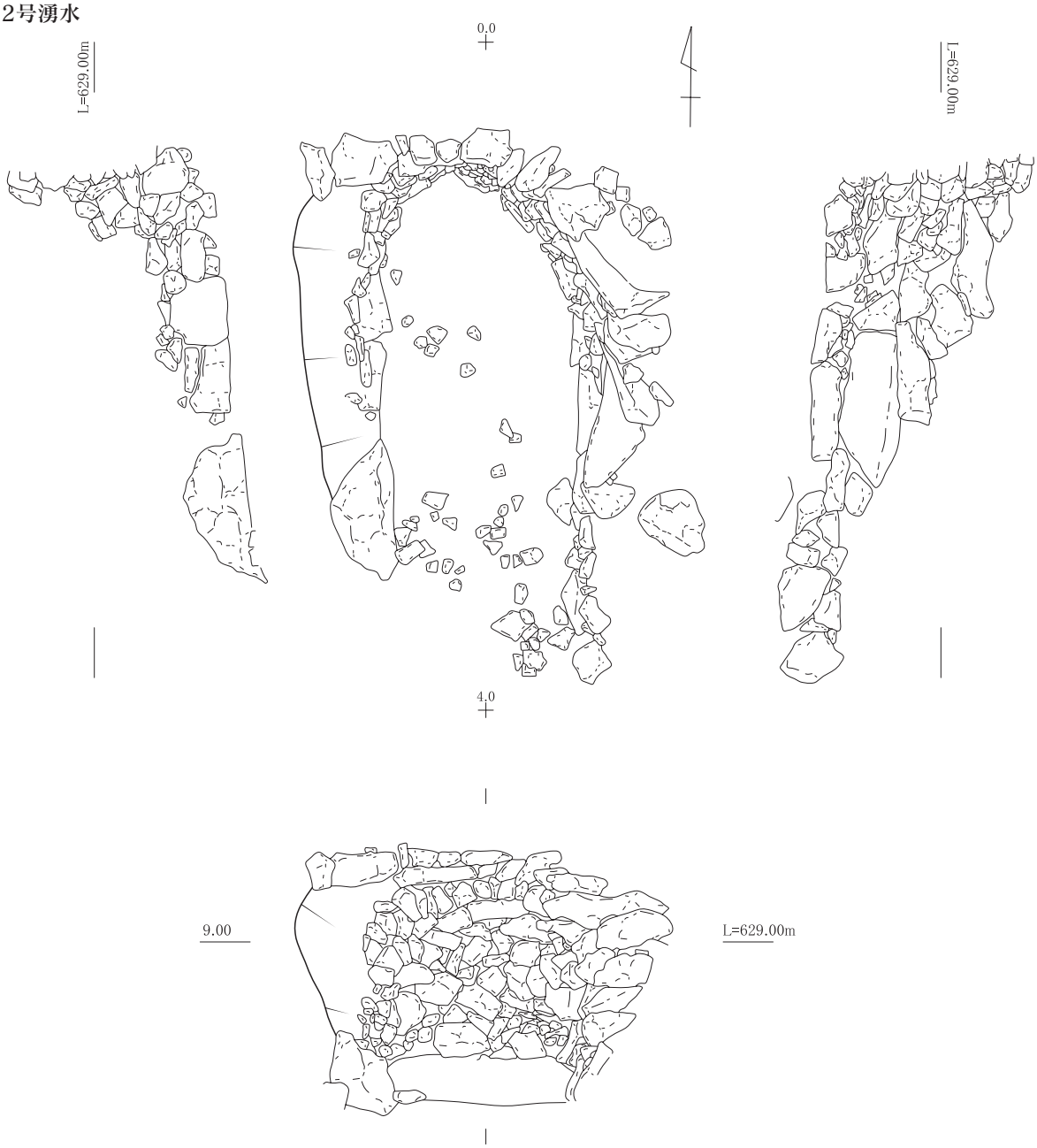
0　1：40　1m

第154図　12～21号焼土

1号湧水



2号湧水



第155図　１・２号湧水

0　1：40　2m

630.0
627.5
625.0
622.5
620.0
85-J-12
85-J-10
85-J-9
85-M-12
85-M-10
85-M-9
0
1 : 80
4m

第156図　２号湧水

している。沢を流れ下る水は、下流途中で水車小屋の流水として昭和の初期まで使用されており、現在でも下位段丘の水田耕作に利用されている。

11　ピット（第157～171図、写真図版46～48）

ピットは全体で651基検出されている。内訳は、84区30基、85区567基、85区・95区５基、95区45基、欠番４基である。ピットの形状や大きさ・深さ、それに埋没土の様子から柱の痕跡と考えられるものが多く、そのうちのいくつかは実際に掘立柱建物の一部と判断されている。だが、大部分のピットの性格は不明である。

このうち、掘立柱建物の軒下柱や庇柱等の柱穴と推定されるピットが250基（そのうち、番号無しが16基）存在し、その内訳は下記の通りである。

１号掘立柱建物は、23号、41号、121号、128号、129号、132号、168号、170号、175号、180号、190号、198号、222号、239号、それに番号無しの１基の各ピット15基が該当する。

２号掘立柱建物は、17号、21号、45号、57号、59号、67号、224号、それに48号土坑の中の各ピット８基が該当する。

３号掘立柱建物は、19号、20号、39号、47号、58号、60号、61号、66号、234号、241号の各ピット10基が該当する。

４号掘立柱建物は、16号、18号、22号、40号、46号、50号、51号、64号、73号、79号、80号、82号、97号、99号、104号、111号、228号、240号、513号、514号、515号、516号、517号、518号、532号、566号、568号、34号土坑の中の、それに番号無しの２基の各ピット30基が該当する。

５号掘立柱建物は、52号、76号、100号、105号、108号、525号、528号、530号、556号、561号、563号の各ピット11基が該当する。

６号掘立柱建物は、74号、88号、101号、535号、538号、571号、575号、それに番号無しの１基の各ピット８基が該当する。

７号掘立柱建物は、500号、503号、505号、509号、539号、547号、559号、567号、574号、578号、580号、585号、それに番号無しの１基の各ピット13基が該当する。

８号掘立柱建物は、502号、504号、508号、519号、522号、525号、545号、552号、556号、573号、581号、588号の各ピット12基が該当する。

９号掘立柱建物は、501号、511号、520号、524号、546号、549号、555号、557号、570号、586号、590号の各ピット11基が該当する。

10号掘立柱建物は、28号、37号、38号、127号、135号、138号、157号、174号、184号、238号、32号土坑の中の各ピット11基が該当する。

11号掘立柱建物は、284号、285号、287号、288号、291号、310号、314号、341号、342号、347号、350号、352号、358号、359号、374号、375号、381号、383号、392号、420号、424号、430号、442号の各ピット23基が該当する。

12号掘立柱建物は、303号、309号、310号、364号、373号、374号、それに番号無しの３基の各ピット９基が該当する。

13号掘立柱建物は、296号、300号、319号、332号、335号、344号、376号、380号、382号、416号、417号、423号、それに番号無しの１基の各ピット13基が該当する。

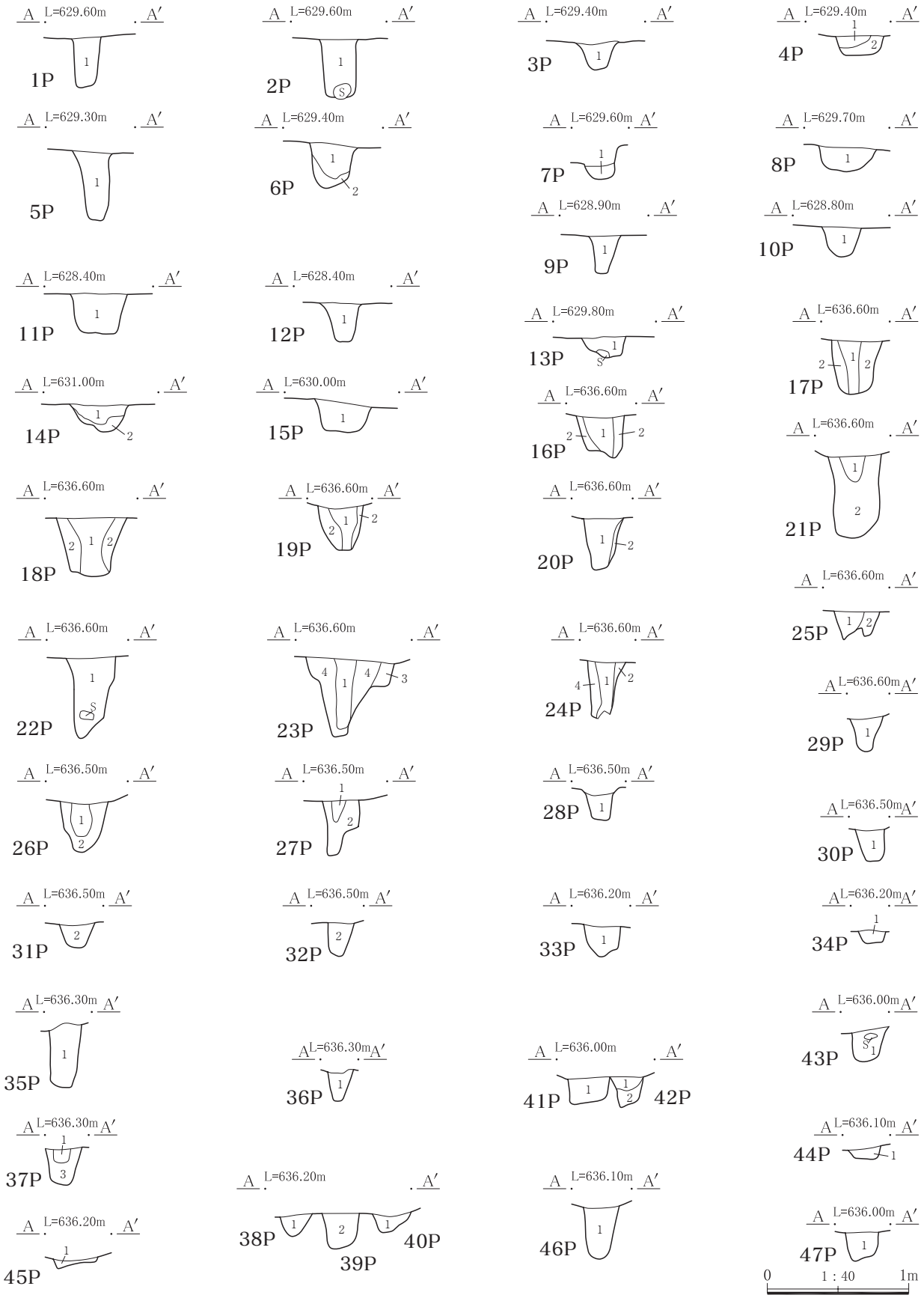
14号掘立柱建物は、283号、289号、301号、306号、363号、367号、377号、412号、それに番号無しの１基の各ピット９基が該当する。

15号掘立柱建物は、279号、282号、286号、290号、308号、331号、383号、403号、405号、414号の各ピット10基が該当する。

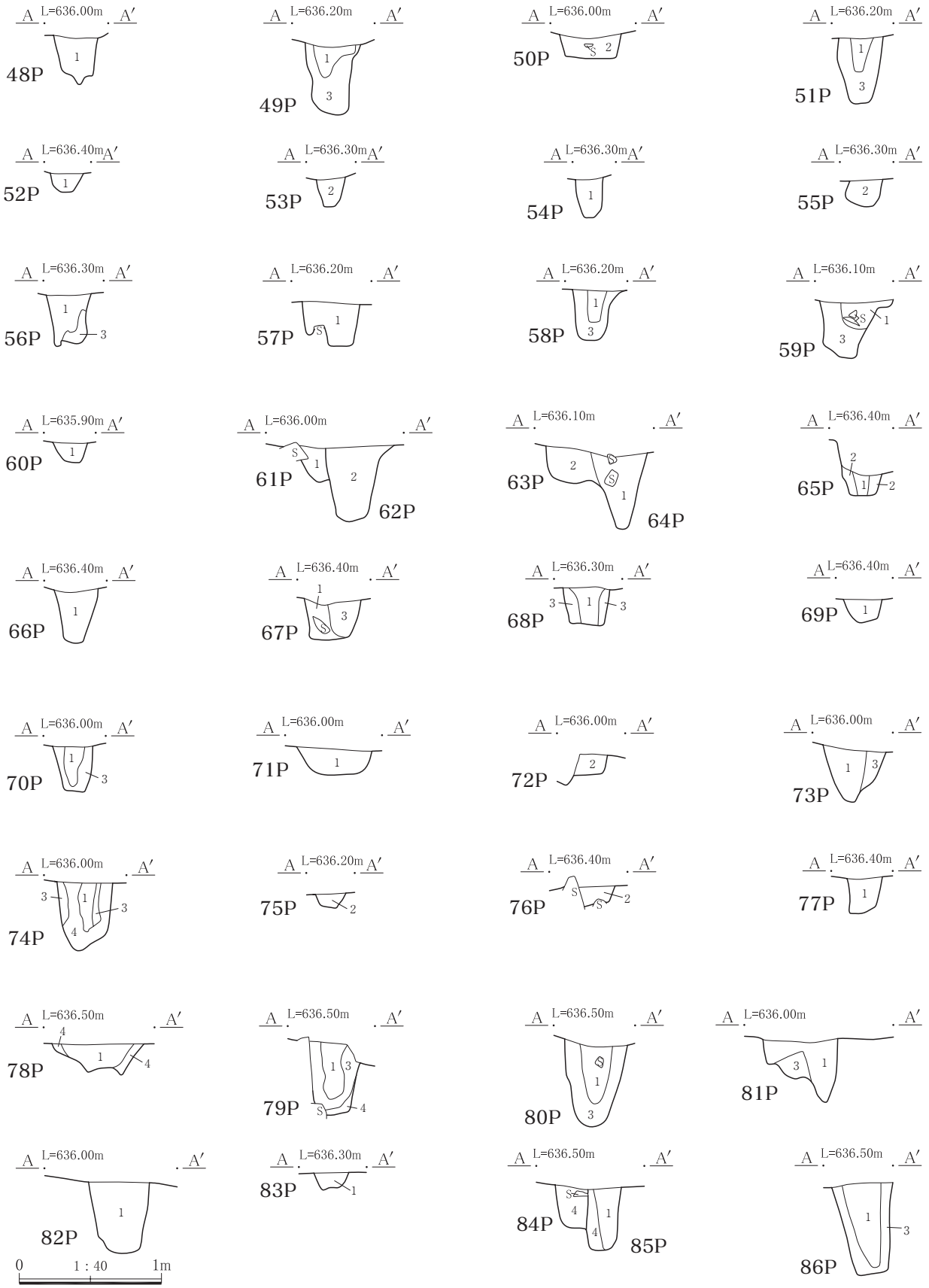
16号掘立柱建物は、294号、315号、316号、320号、321号、342号、351号、393号、404号、それに番号無しの３基の各ピット12基が該当する。

17号掘立柱建物は、317号、337号、368号、379号、384号、389号、407号、433号の各ピット８基が該当する。

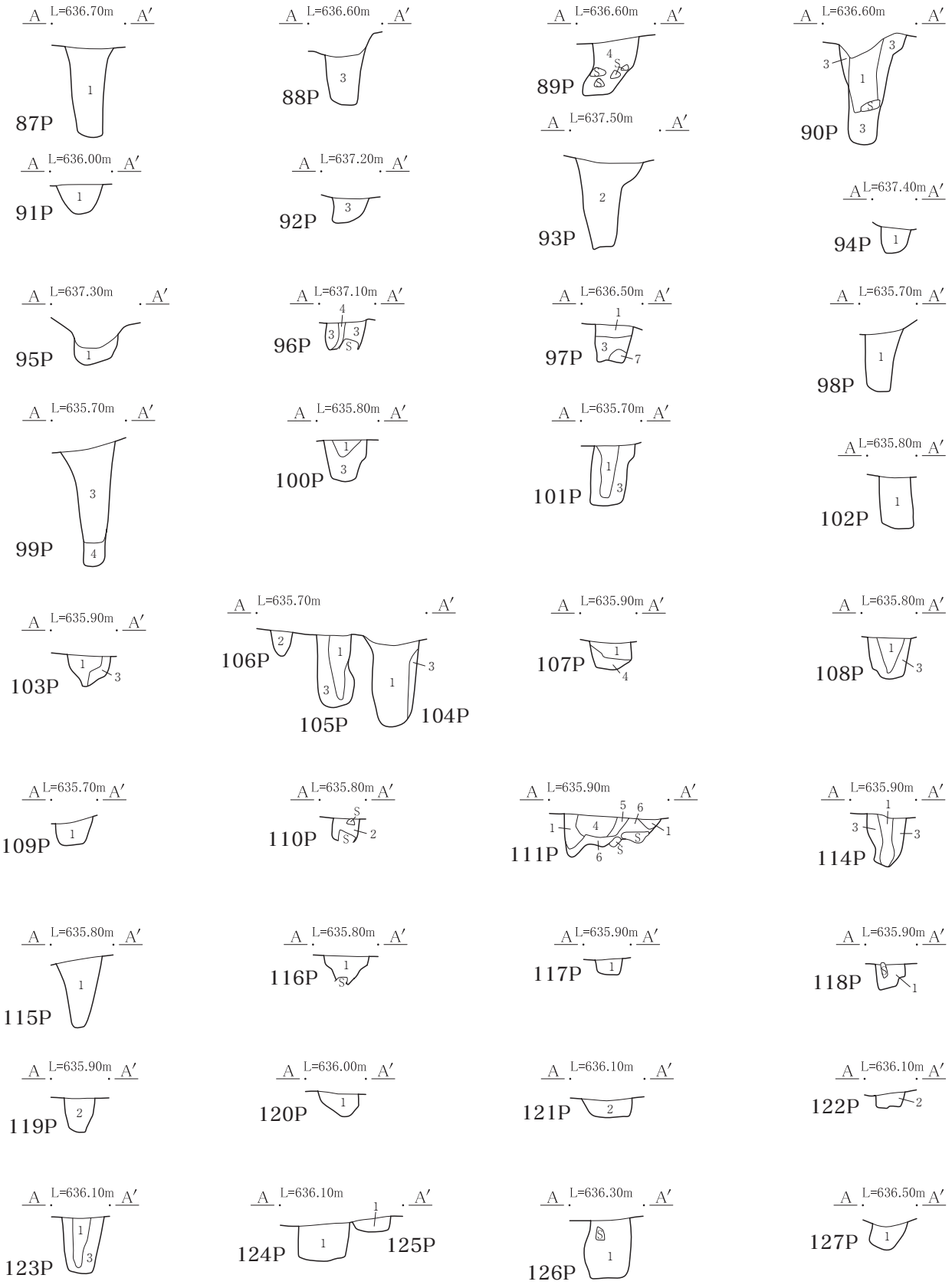
18号掘立柱建物は、277号、299号、313号、318号、



第157図　１～47号ピット

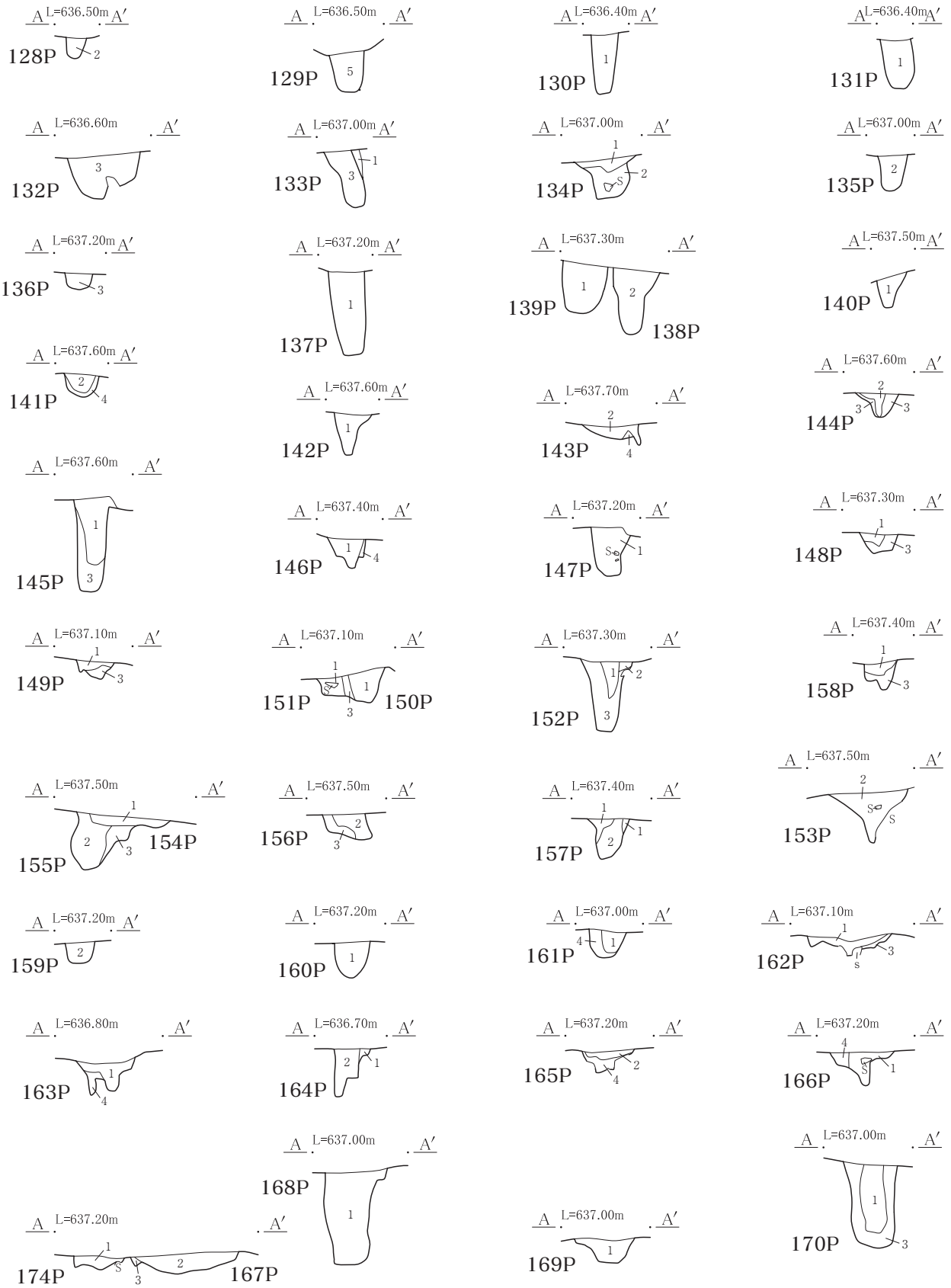


第158図　48～86号ピット

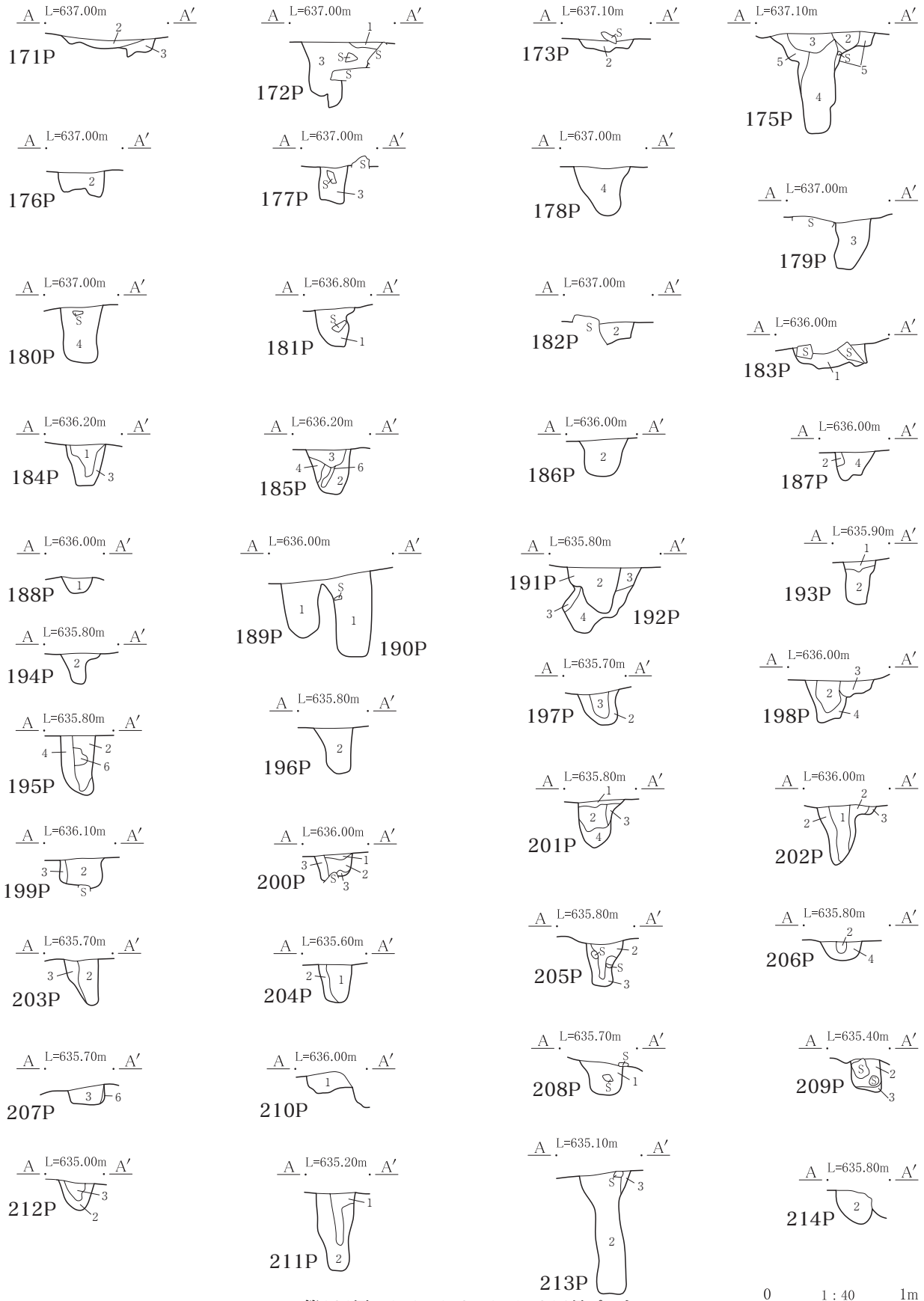


第159図　87～111・114～127号ピット

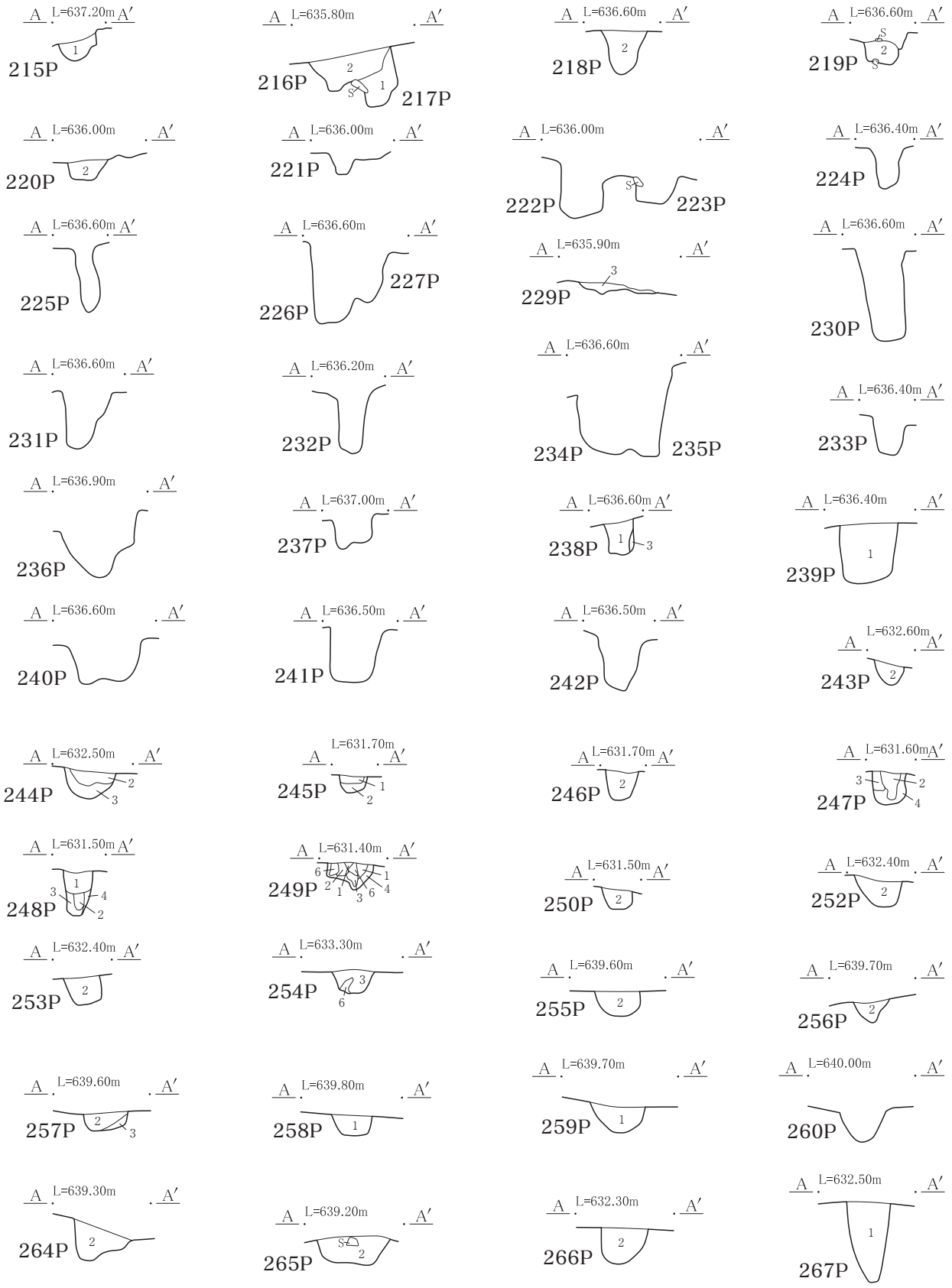
0　1：40　1m



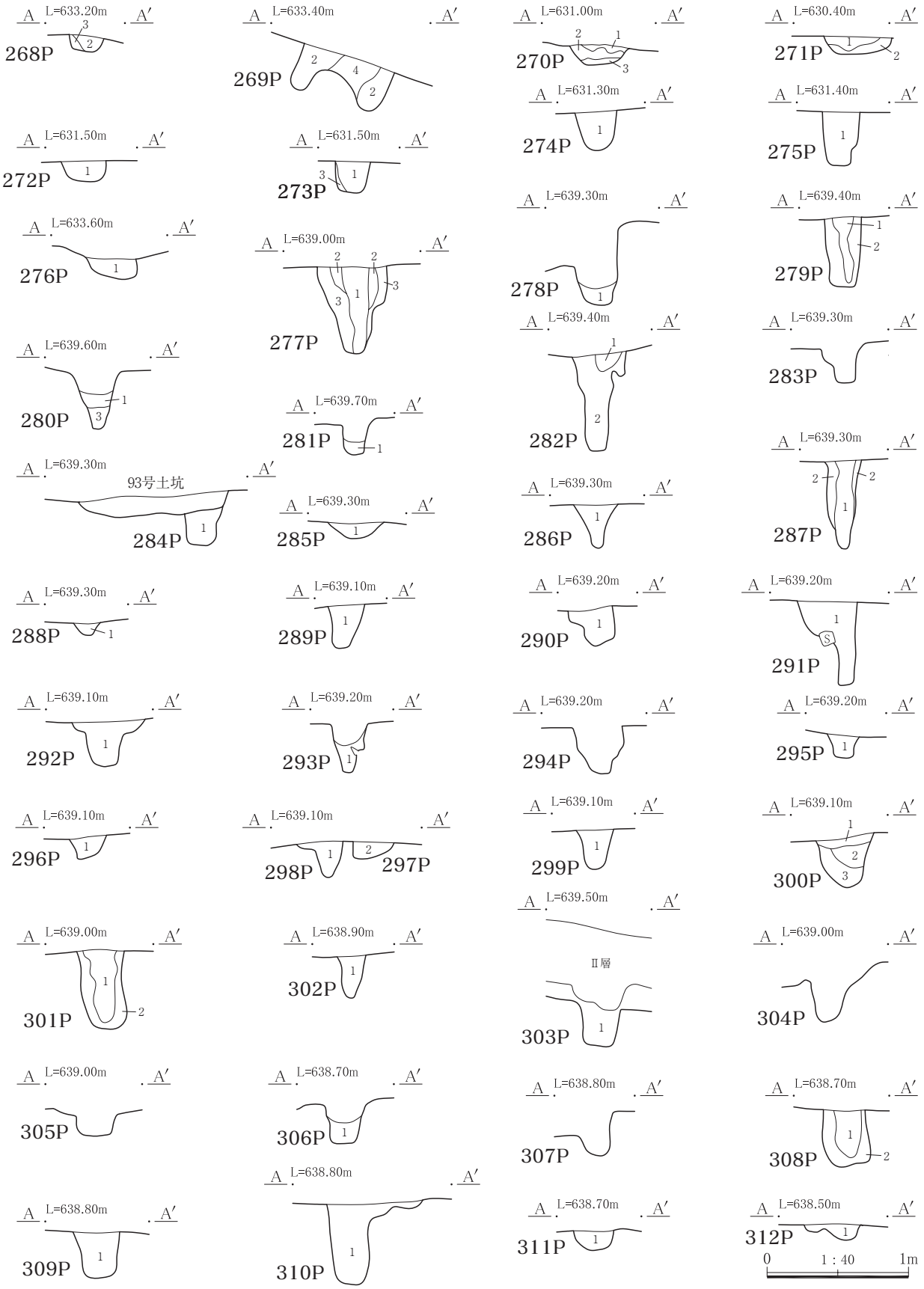
第160図　128～170・174号ピット



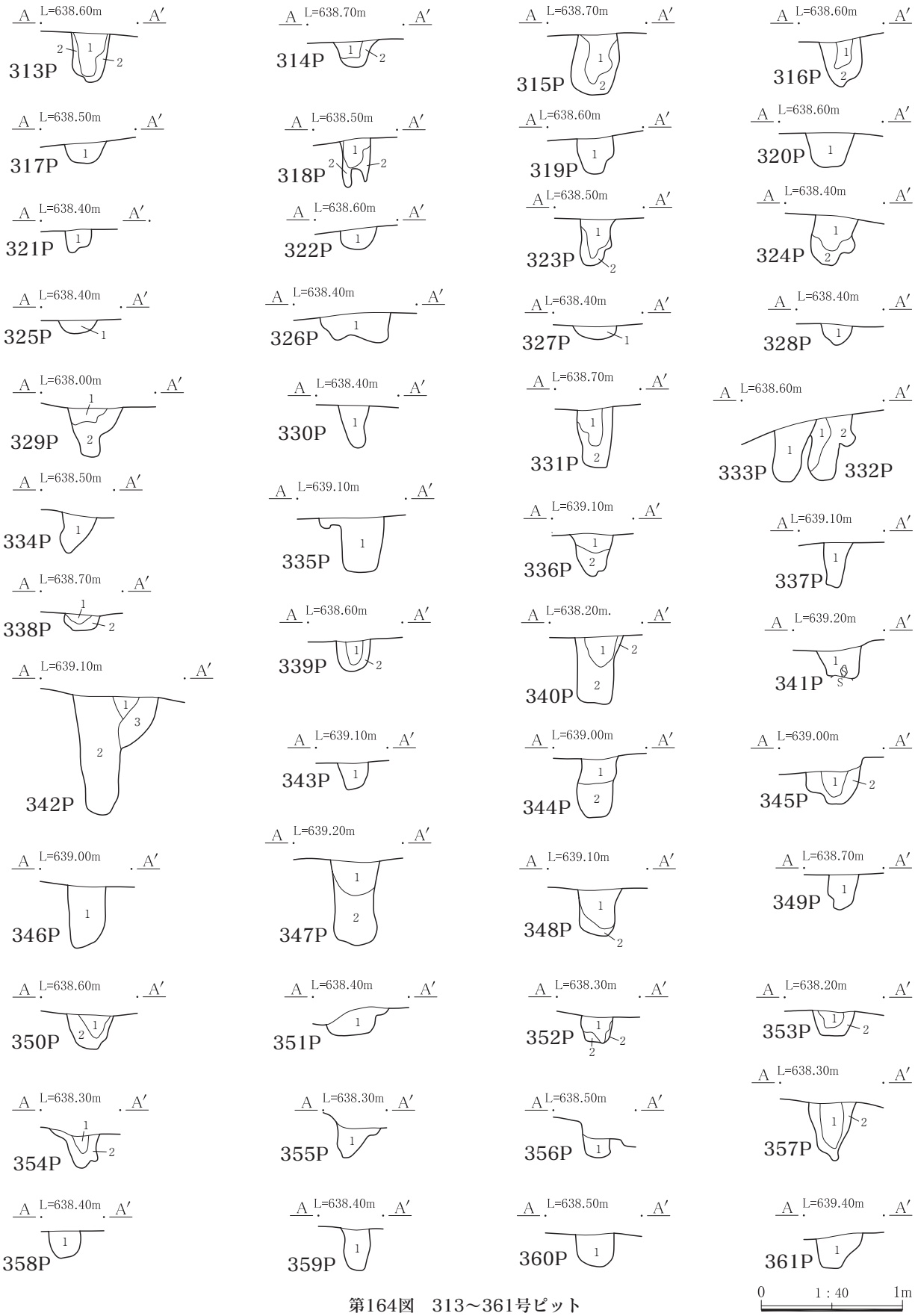
第161図　171～173・175～214号ピット



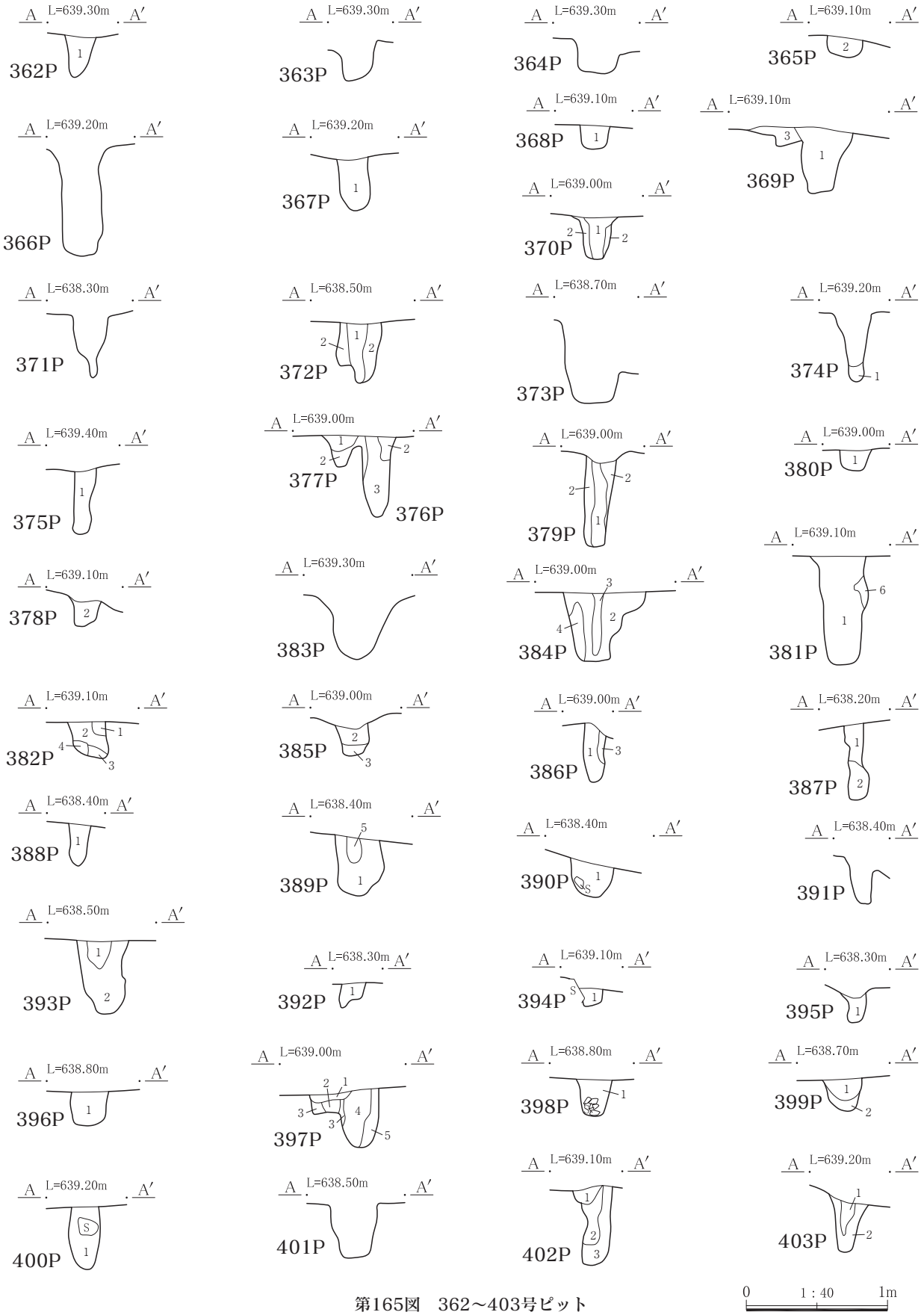
第162図　215～227・229～250・252～260・264～267号ピット



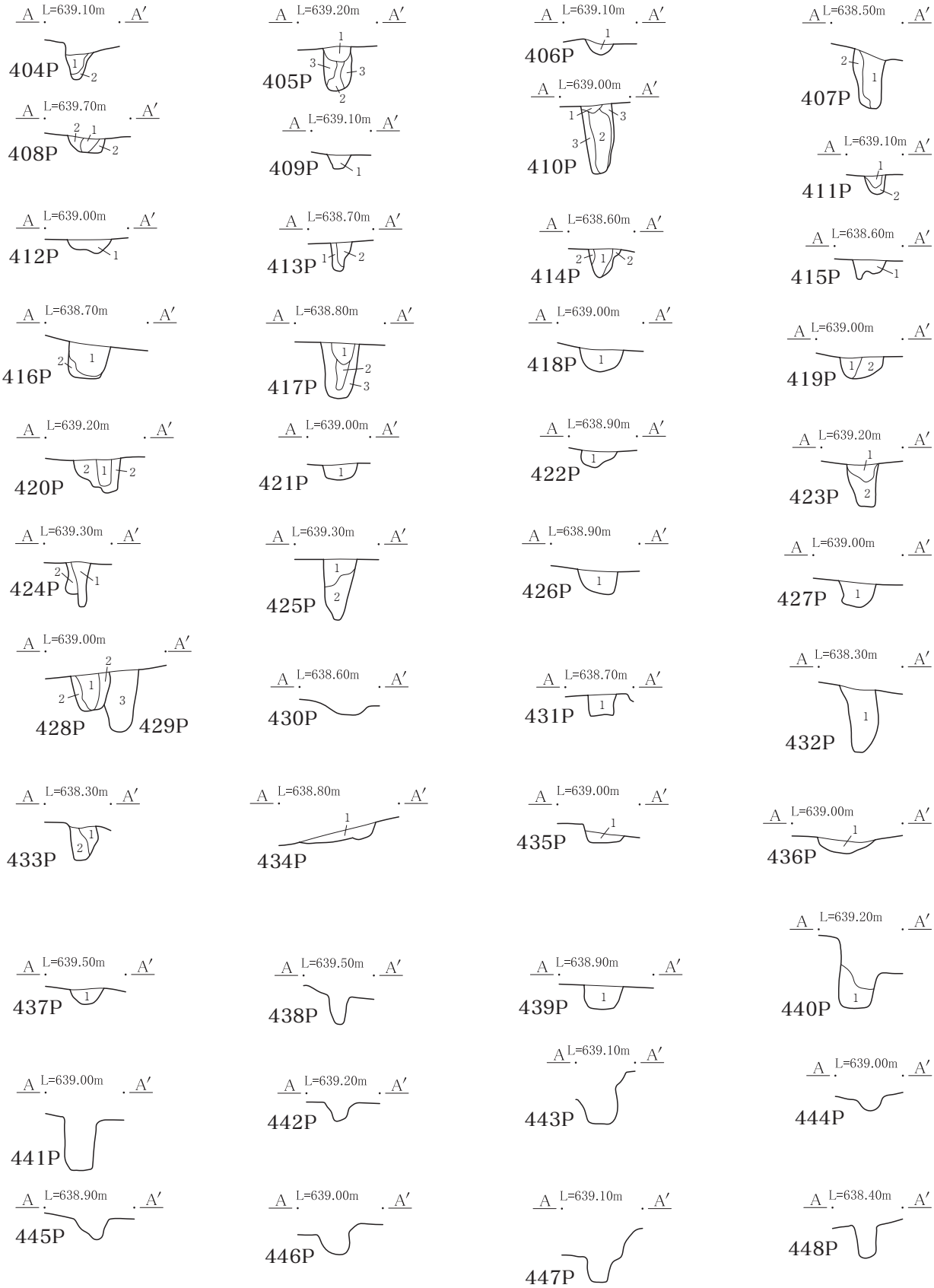
第163図　268～312号ピット



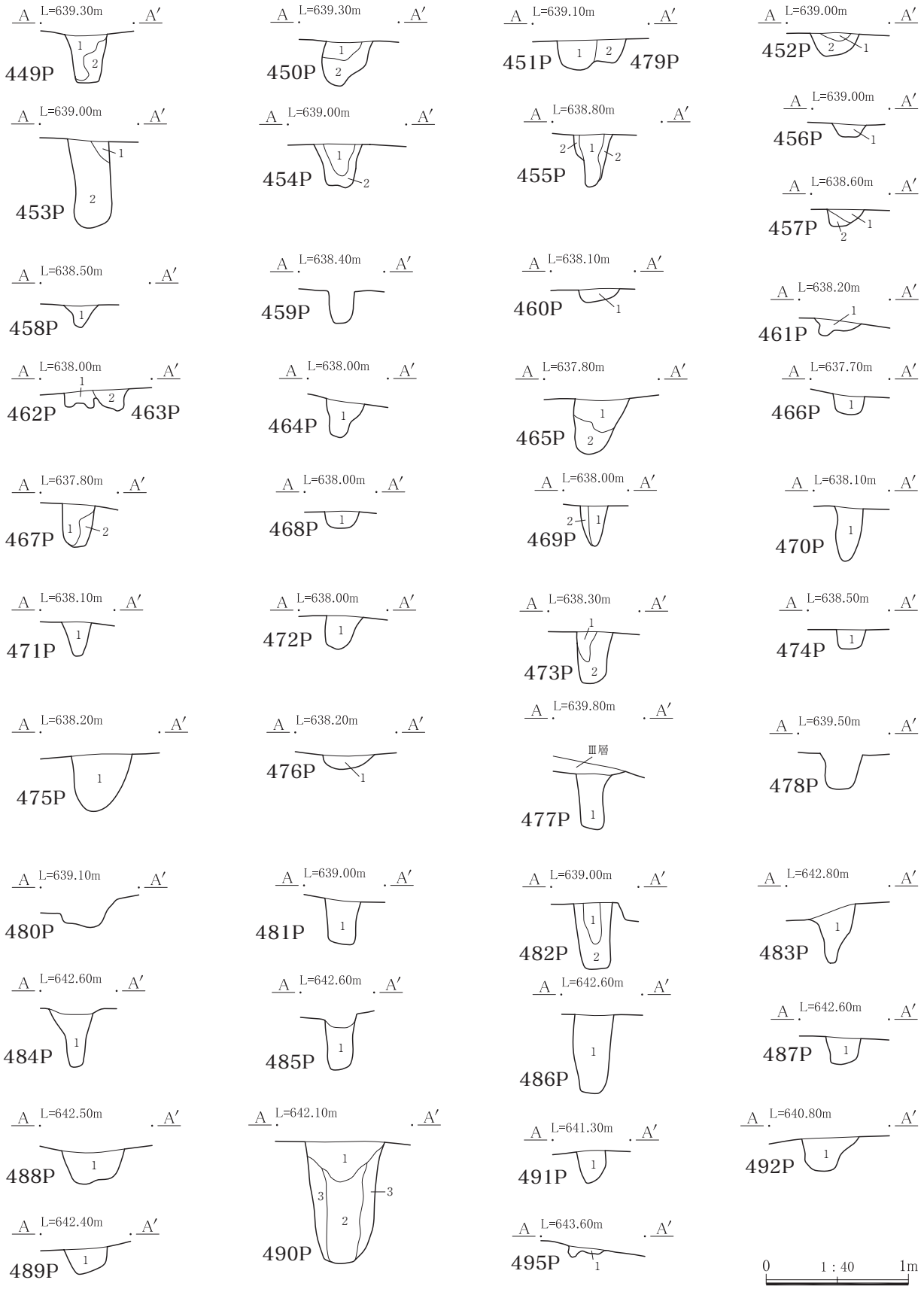
第164図　313～361号ピット



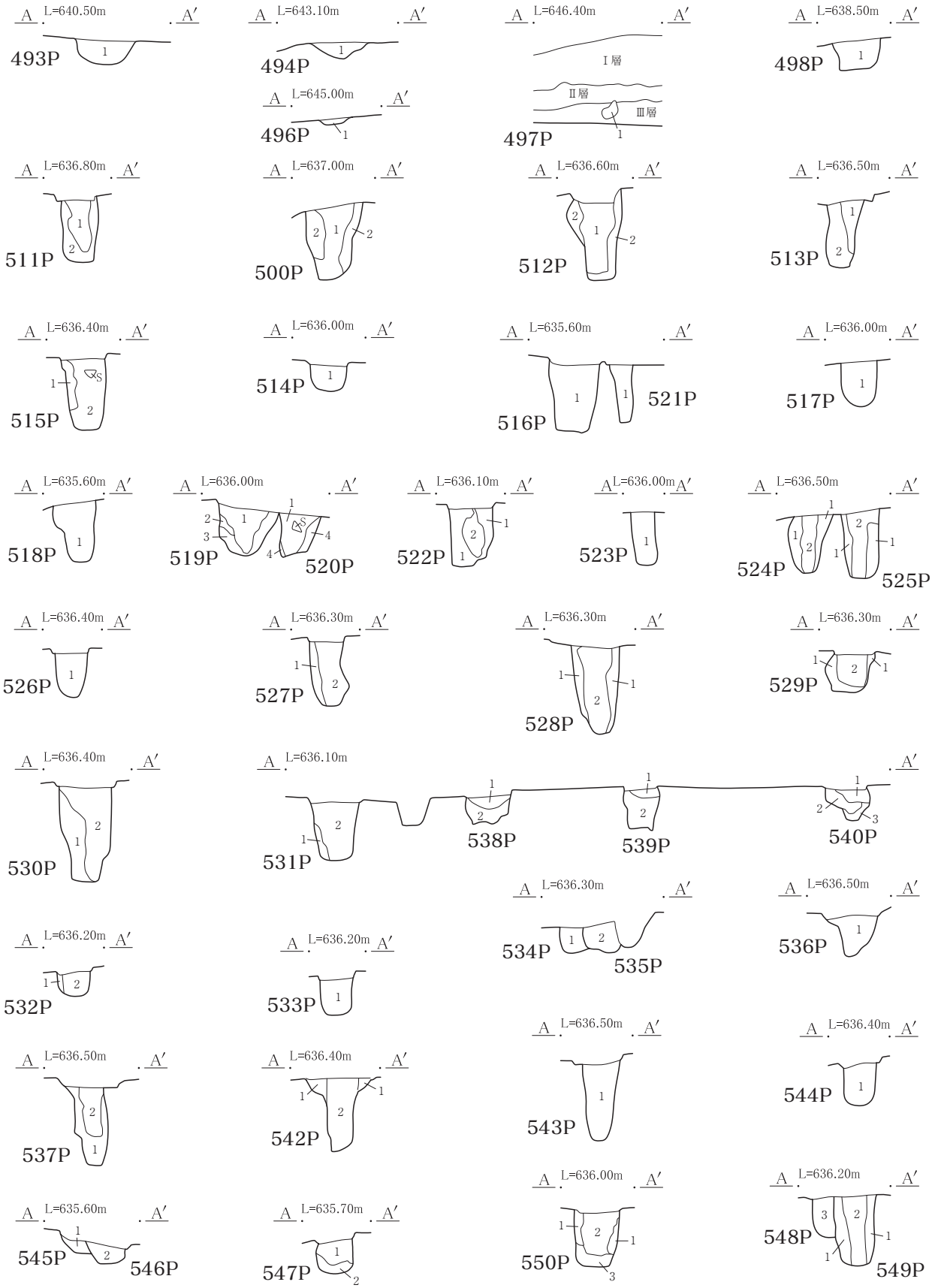
第165図　362～403号ピット



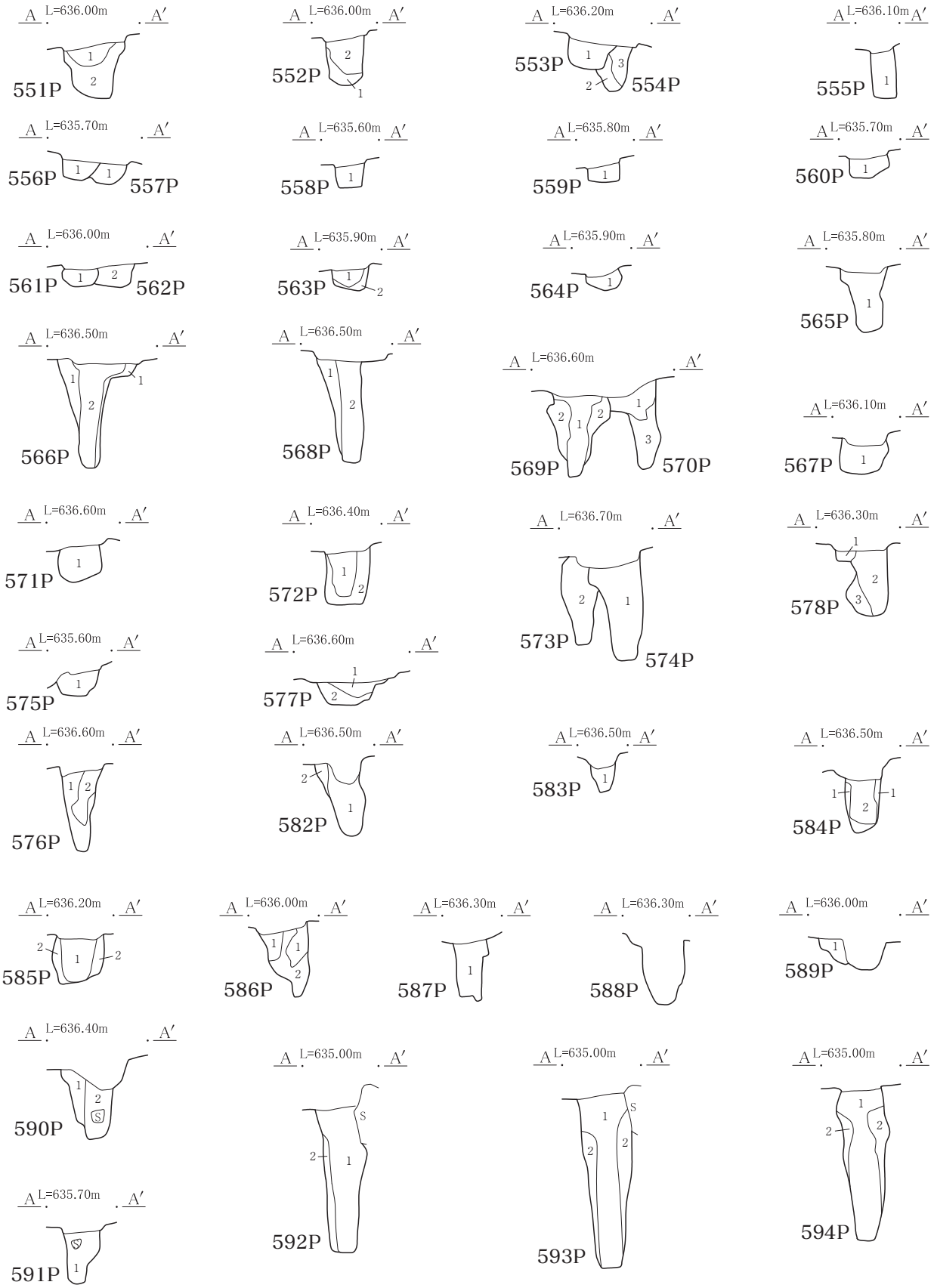
第166図　404～448号ピット



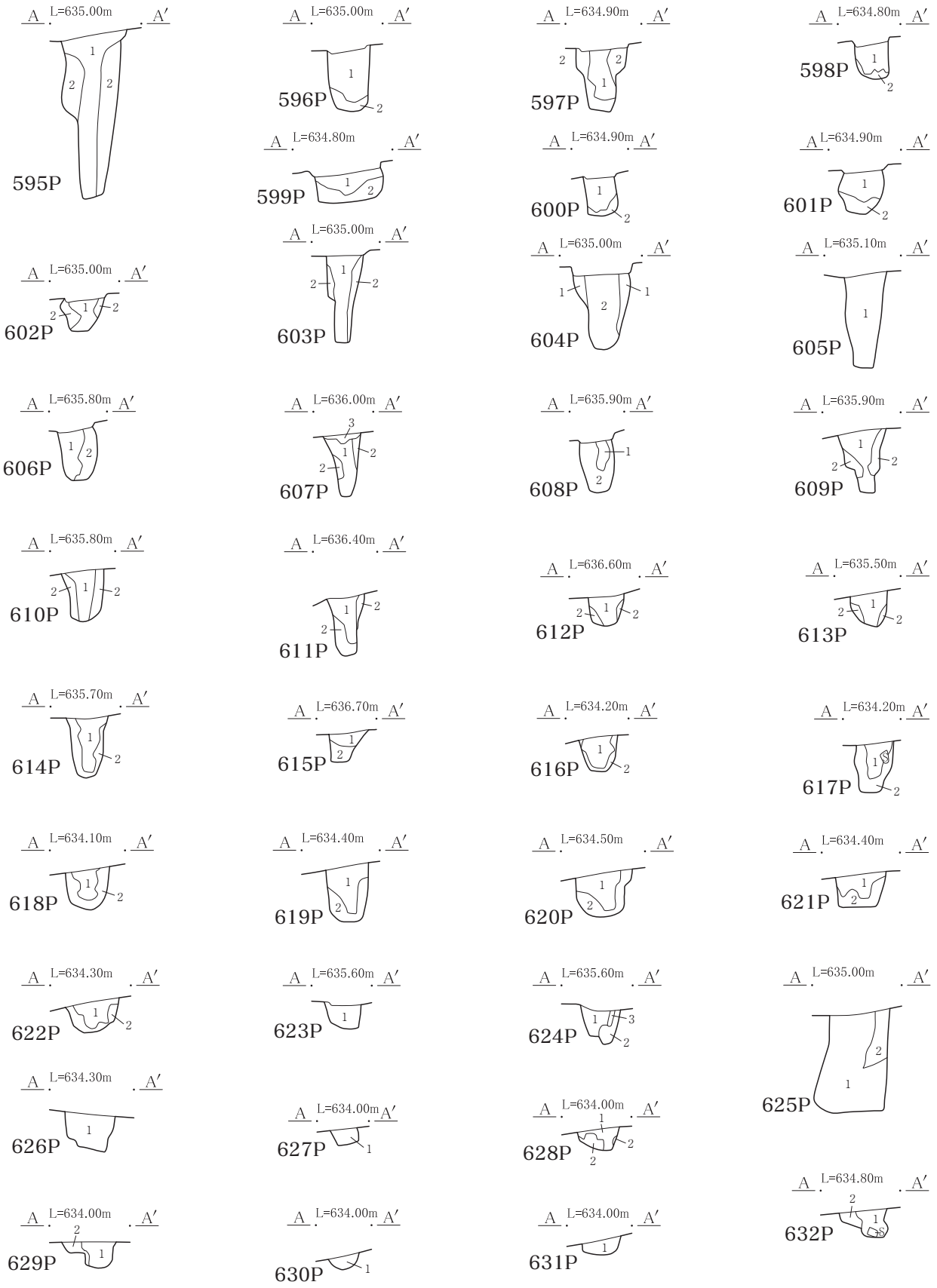
第167図　449～492・495号ピット



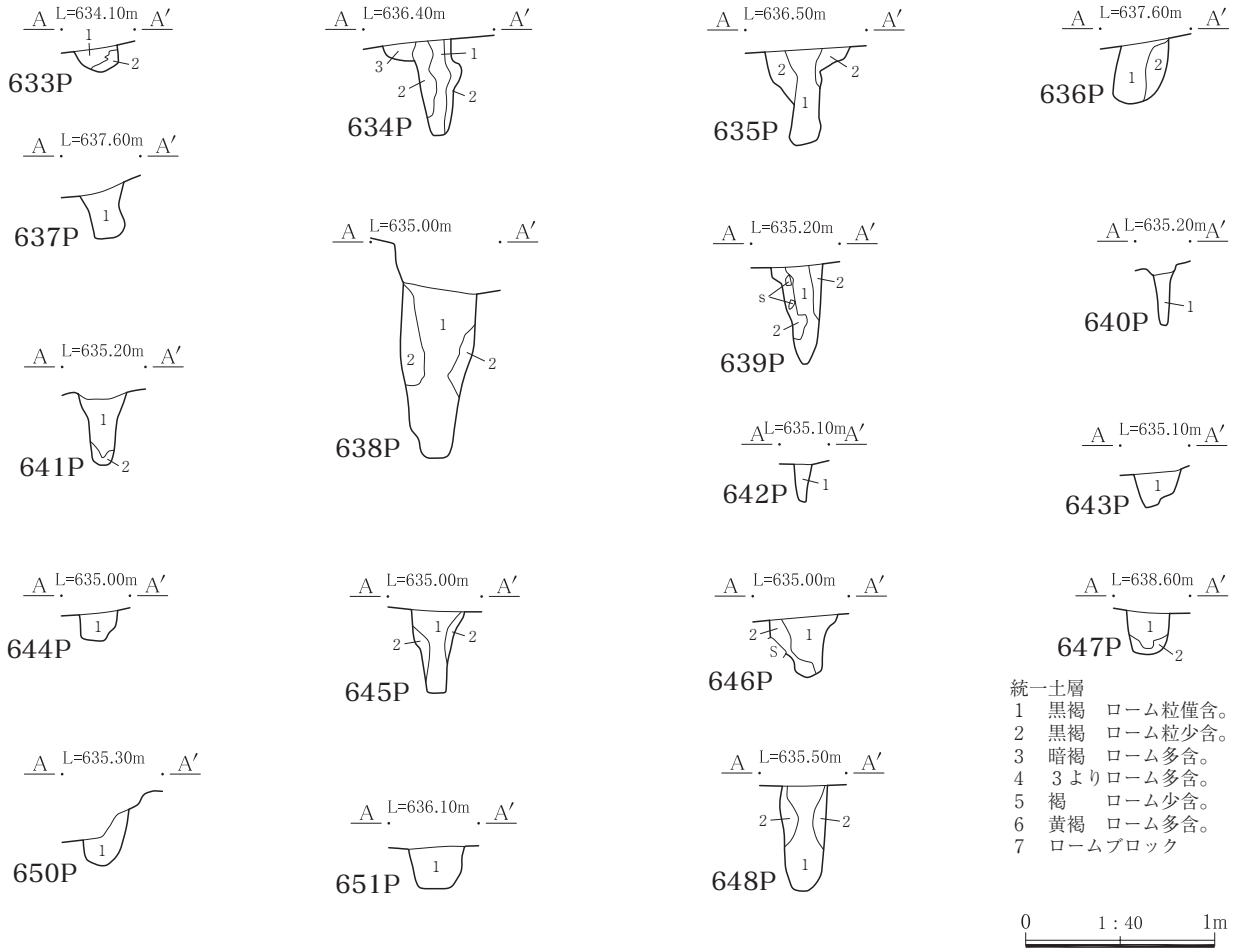
第168図　493・494・496～498・500・511～540・542～550号ピット



第169図　551～578・582～594号ピット



第170図　595～632号ピット



第171図　633～648・650・651号ピット

354号、388号、436号、それに番号無しの２基の各ピット９基が該当する。

19号掘立柱建物は、592号、593号、594号、595号、618号、626号、629号、630号、639号、640号、641号、642号、643号、644号、645号、646号、649号、650号、それに番号無しの１基の各ピット19基が該当する。

20号掘立柱建物は、211号、213号、603号、605号、619号、620号、621号、622号の各ピット９基が該当する。

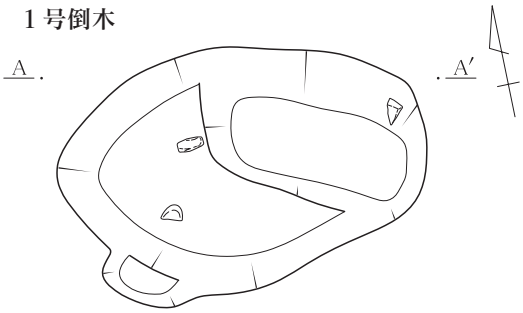
これらのピット以外にも、掘立柱建物に関係する可能性のあるものや、柵列等の可能性があるものも存在するが、明確ではないのでここでは除外する。

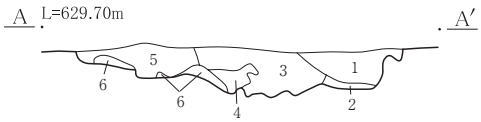
12　倒木（第172・173図）

確認出来ただけで、16基が遺跡内に点在している。規模は２～３ｍ前後と大きいものの、半削してセクションを記録出来たもの以外に、あくまでも確認時の表面での埋没土の観察も含めてみても、基本土層のⅡ層～Ⅴ層が含まれている。その含まれる基本土層から倒れた時期の推定も可能である。

また、確認出来た中では、基本土層の横転した状態から倒れた方向は南西方向が最も多い。これは関越自動車道関係の国分寺中間地域遺跡群（群埋文第56集　1986）や国道17号鯉沢バイパス関係の白井遺跡群（群埋文第232集　1998）で記述したように、主に台風に伴う強風により倒れたものと考えられる。

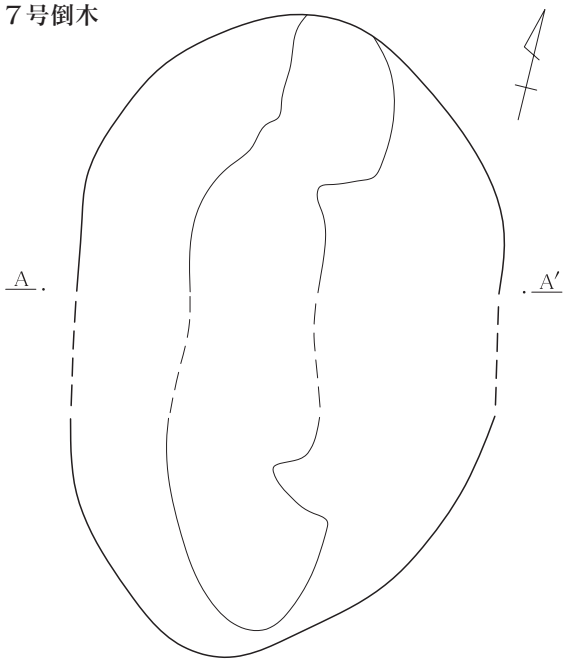
１号倒木

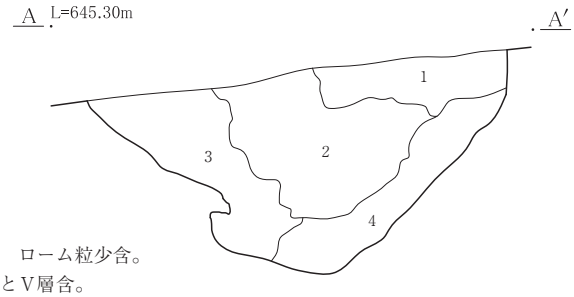




１号倒木
1　Ⅴ層とⅥ層含。　　4　Ⅲ層とⅣ層含。
2　Ⅴ層。　　5　Ⅲ層。
3　Ⅳ層。　　6　Ⅱ層とⅢ層含。

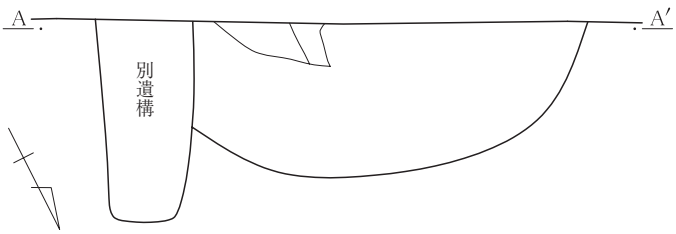
７号倒木

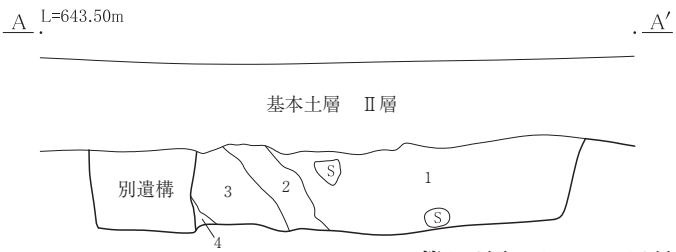




７号倒木
1　黒褐　ローム粒少含。
2　Ⅳ層とⅤ層含。
3　Ⅲ層とⅣ層含。
4　Ⅳ層含。

10号倒木



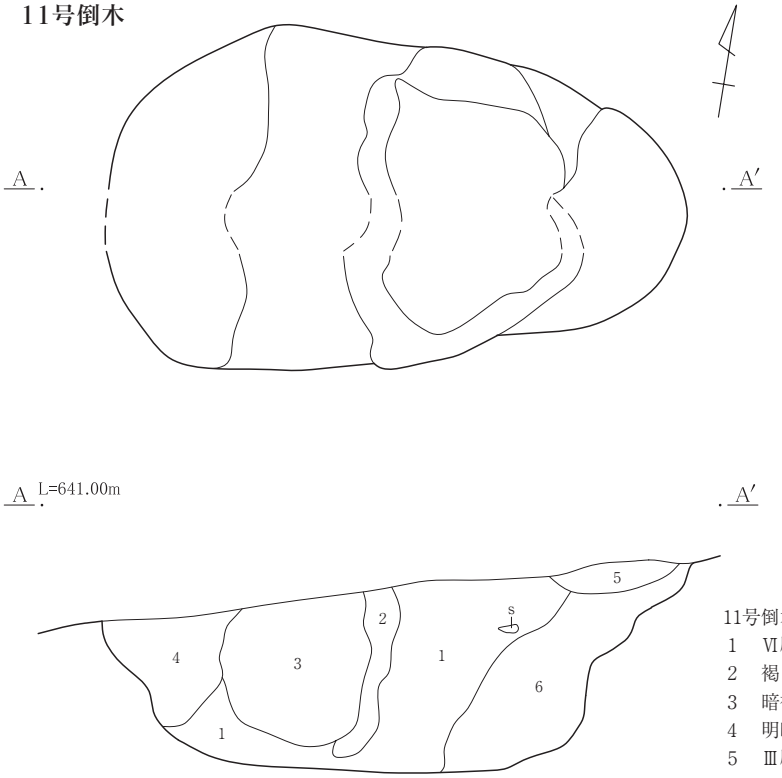


10号倒木
Ⅱ層
1　Ⅱ層とⅢ層含。
2　Ⅲ層。
3　Ⅲ層と黄色軽石・ローム粒少含。
4　Ⅳ層。

0　1：40　1m

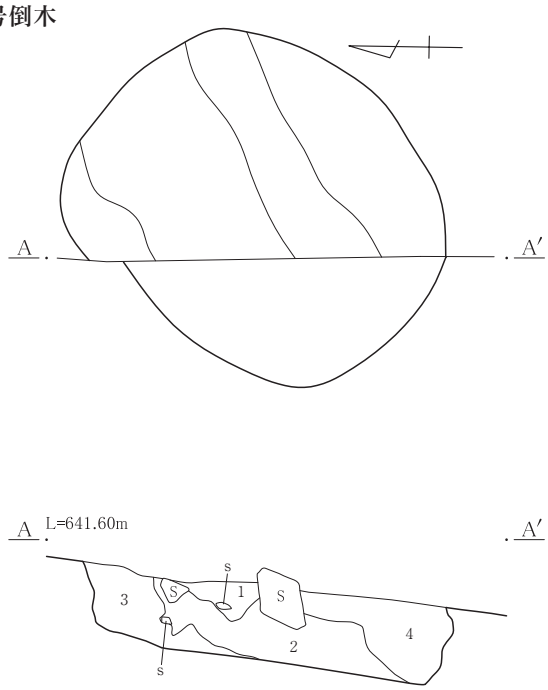
第172図　１・７・10号倒木

11号倒木



11号倒木
1　Ⅵ層に黒色土（暗褐？）少含、ローム粒やや多含。
2　褐　　Ⅴ層にローム粒多含。
3　暗褐　　ローム粒やや多含。Ⅳ層？
4　明暗褐　Ⅲ層にローム粒やや多含。
5　Ⅲ層
6　黒色～暗褐　暗褐にローム粒少含。

12号倒木



12号倒木
1　暗褐とⅢ層を含む。ローム粒少含。
2　Ⅴ層主体、Ⅲ層僅含。
3　Ⅱ層主体、ローム粒僅含。
4　Ⅱ層主体、ローム粒、小ローム粒少含。

0　1：40　1m

第173図　11・12号倒木

（２）遺物（第178～185図、写真65～68）

本遺跡から出土した遺物の中から、平安時代の土器類を選び出し、それらを器種毎に分類してそれぞれの点数と重量を遺構毎に計測すると、竪穴住居から出土分の総重量が遺跡全体の約65％しかない。また、竪穴住居だけでみても、24号竪穴住居が4590ｇと圧倒的に多く、最も少ないのは42号竪穴住居で、僅かに70.7ｇである。ただし、総軒数38軒の内、３・19・20・68・69号の各竪穴住居では出土が全く無いことから、残りの33軒での平均が1013ｇとそれほどでもない。

次に、本遺跡出土の平安時代の土器は、その胎土や整形の様子から大部分がここ吾妻地区で製作されたものではないと考えられる。別の地域、特に西毛地区で製作された可能性が高い。平安時代の須恵器の坏や高台付碗については、西毛地域の秋間産と考えられるものが主体を占めている。だが、一部には月夜野の窯の製品と考えられる資料も存在する。

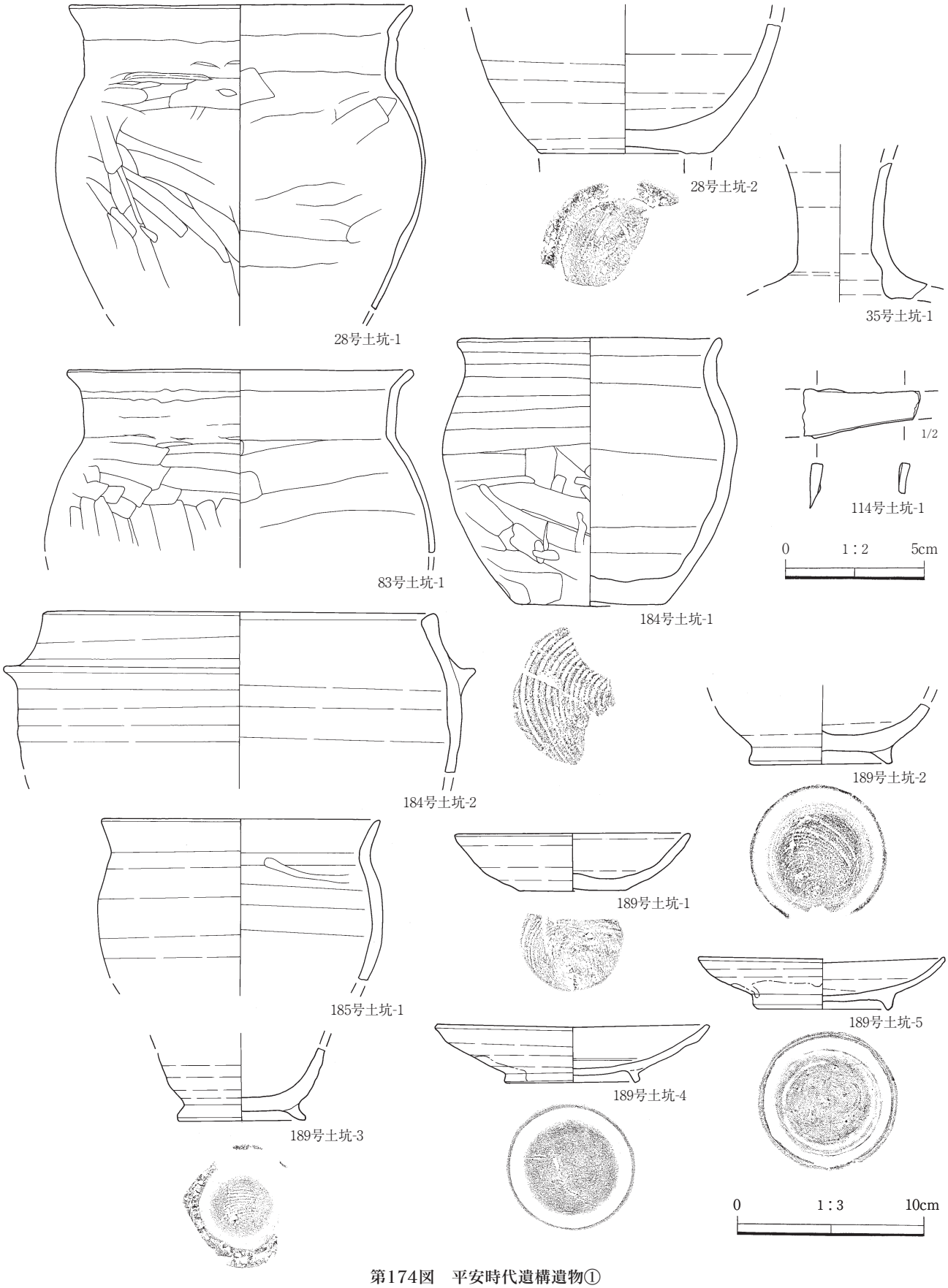
その顕著な例が羽釜である。この須恵器の羽釜については、桜岡正信氏らが県内での区分を「吉井型」と「月夜野型」、それに「東毛型（仮称）」の三つに大別しており、それぞれに窯を抱えた生産地とその流通地を抱えている。吾妻地区では南からの「吉井型」、北からの「月夜野型」の分布範囲が接する地域であり、本遺跡でも両方が出土している。それぞれの状況を見てみると、「吉井型」が主として存在するのは、21号と71号の２軒の竪穴住居である。「月夜野型」が主として存在するのは、４号と31号、69号の３軒の竪穴住居である。「吉井型」と「月夜野型」が共存していると考えられるのは、16号の竪穴住居1軒だけである。もちろん、検出した37軒のうちの６軒だけのデータでは、不十分である事から、吾妻郡内の多数の検出例を基にさらに検討を加えていく事とする。

前回報告した長野原町の下原遺跡では僅かに２軒だけの資料ながら、共に同一住居内で混在している事から、流通の住み分け？が把握出来ないと記述したが、本遺跡では住み分けの可能性が高いといえる。向原遺跡では、10軒の竪穴住居のうち、Ｄ区１号竪穴住居から「月夜野型」が１点出土している。同町の林宮原遺跡では、５軒の竪穴住居のうち、１軒から「月夜野型」が１点出土している。同町の立馬Ⅰ遺跡からは３軒の竪穴住居のうち、２号から「月夜野型」？、４号から「吉井型」が出土している。東吾妻町の小泉宮戸遺跡では、平安時代の26軒の竪穴住居のうち、「吉井型」が7a号と14号から、「月夜野型」が２号と６号、31号、33号からそれぞれ１点ずつ出土している。同町の諏訪前遺跡からも平安時代の竪穴住居が22軒も検出されているが、羽釜の出土は少なく、「吉井型」と思われるものが17号、「月夜野型」が33号からそれぞれ１点ずつ出土している。このように、竪穴住居毎に「吉井型」と「月夜野型」が見事に分かれて出土している。嬬恋村の東平遺跡の２軒の竪穴住居のうち、３区１号から羽釜の破片が１点だけ出土しているが、断面だけの実測図で観察文での記載もなく詳細は不明である。だが、長野原町の坪井遺跡の１軒、花畑遺跡の２軒、横壁勝沼遺跡の１軒、嬬恋村の干俣前田Ⅲ遺跡の１軒、同村の干俣前田Ⅳ遺跡の１軒、草津町の伊堀遺跡の１軒からは羽釜そのものが出土しておらず、比較検討が出来ない。六合村の熊倉遺跡では、25軒前後の竪穴住居の存在が確認されており、これまでに発掘調査がなされたのは９軒だが、その内容は残念ながらほとんど明らかにされていない。

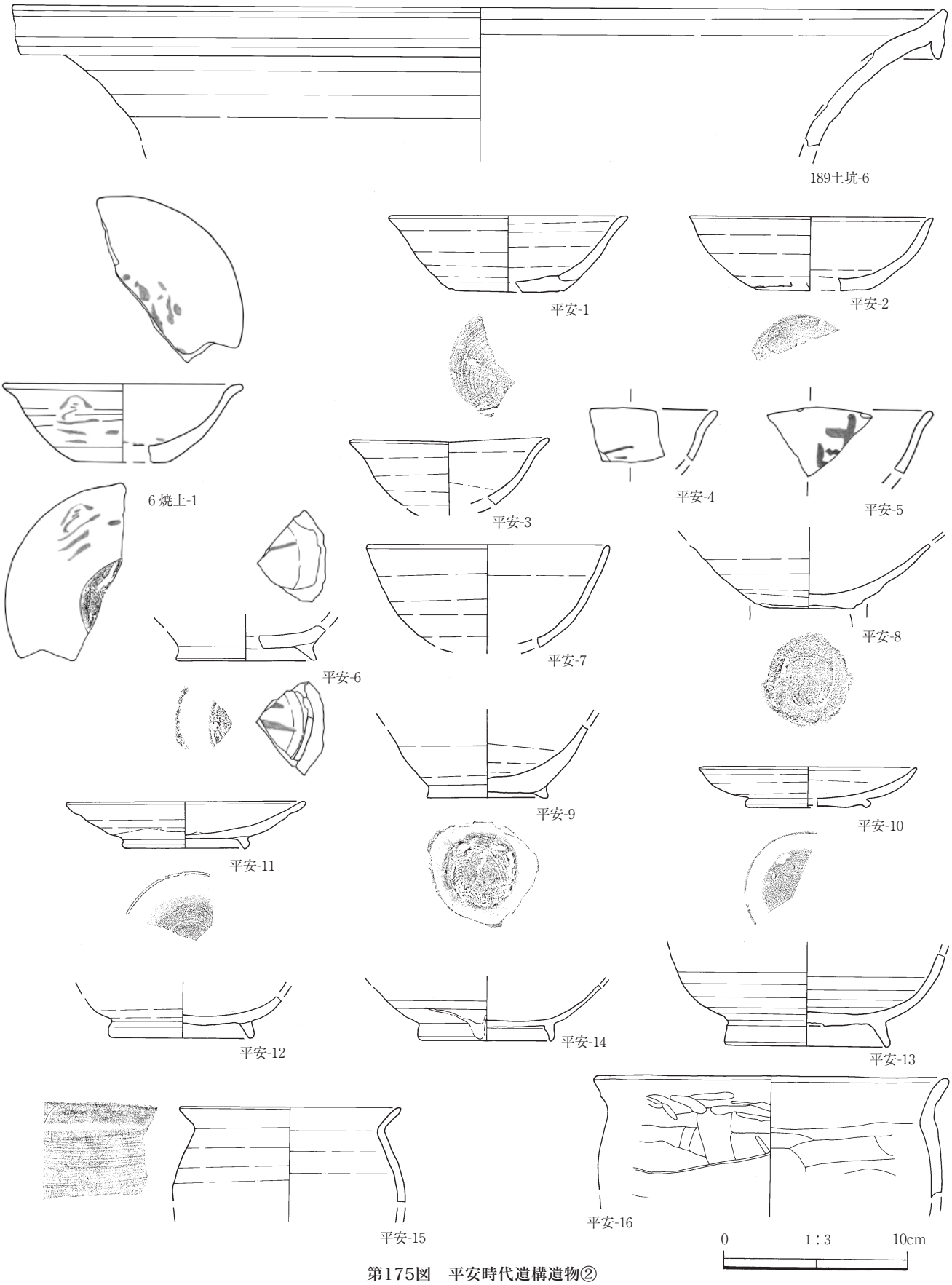
以上の事から、本遺跡以外でも「吉井型」と「月夜野型」の住み分け？がはっきりしている現象が見られる。この点は本遺跡の事例と結果であり、この地域での今後の発掘調査の成果を加えて、後日検討を加えていく事としたい。

参考文献

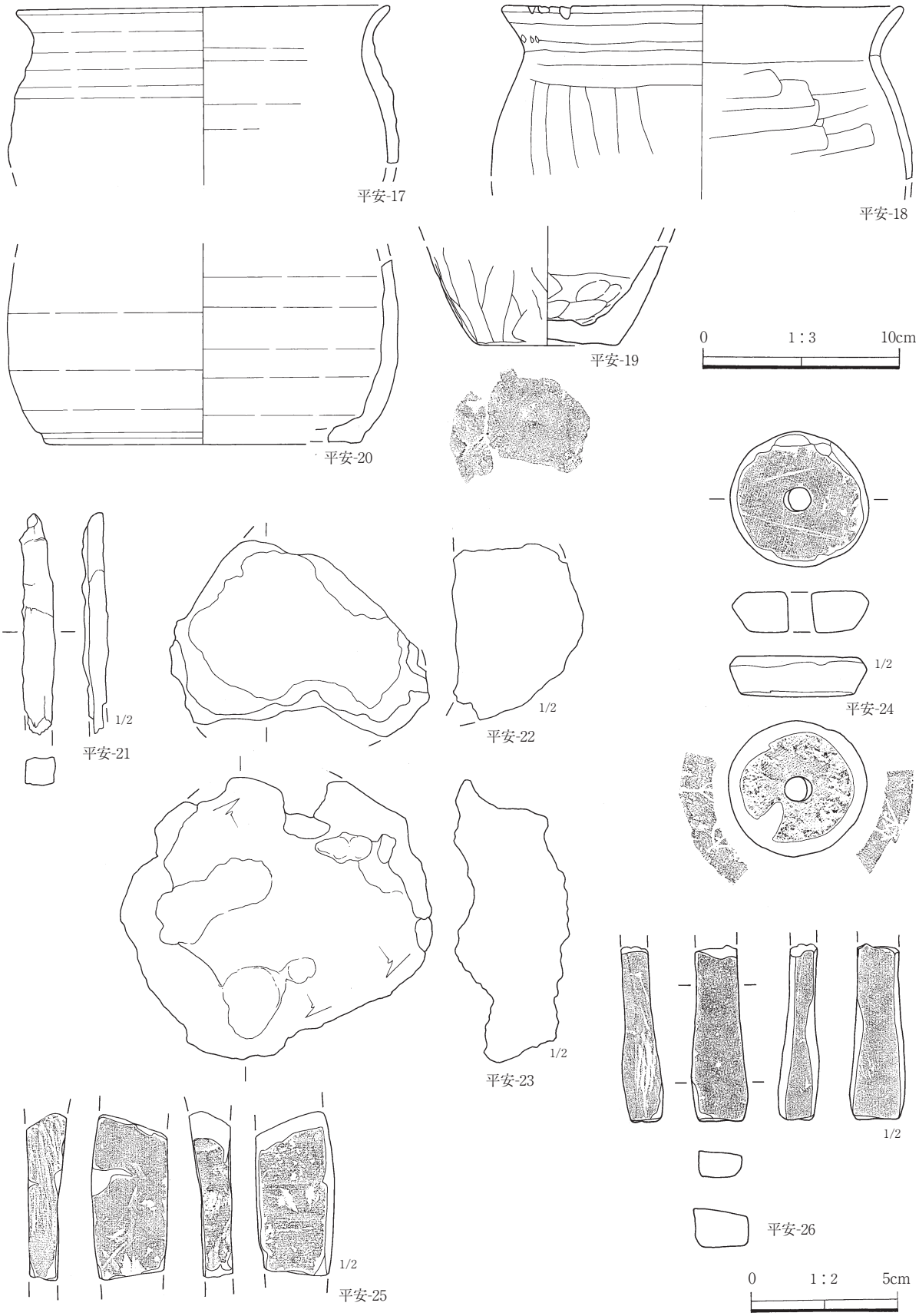
吾妻町教育委員会編　2003　小泉宮戸遺跡、2003　諏訪前遺跡Ⅰ
長野原町教育委員会　1996　向原遺跡、2000　坪井遺跡Ⅱ
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002　八ッ場ダム発掘調査集成（１）、2007　立馬Ⅰ遺跡、2007　下原遺跡Ⅱ
嬬恋村教育委員会　1999　東平遺跡、1999　干俣前田Ⅲ遺跡、2000　干俣前田Ⅳ遺跡、草津町教育委員会　1974　井堀遺跡、六合村教育委員会　1983　熊倉遺跡　昭和57年度調査の概要



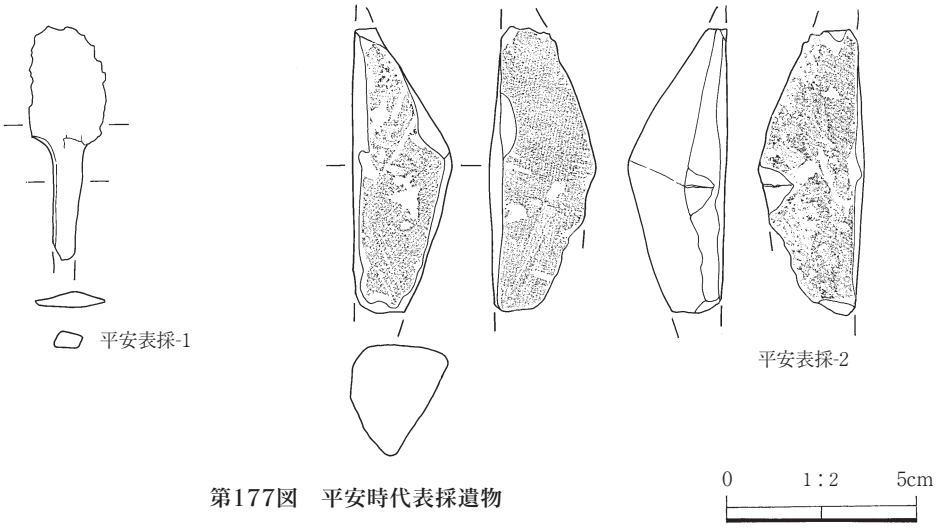
第174図　平安時代遺構遺物①



第175図　平安時代遺構遺物②



第176図　平安時代グリッド遺物



第177図　平安時代表採遺物

次に、中近世の遺物をまとめて紹介する。

陶磁器や軟質陶器も少量ながら出土している。分類鑑定は下原遺跡と同様に大西雅弘氏にお願いした。最も古いと考えられるのは、中世前半の遺物で、12世紀の中国・同安窯系青磁の碗である。次に13世紀中頃の中国・龍泉窯系の碗がある。日本の資料では、13～15世紀の古瀬戸のおろし皿がある。中世後半では、16世紀の瀬戸・美濃の大窯の内禿皿があり、次に17世紀の志野丸皿がある。意外にこの時期の遺物が少なく、陶器に比べて特に磁器類が少ない。それに対して、軟質陶器の数量が多く、大部分が信濃型の内耳鍋（内耳の付いた土鍋）の資料である。近世に入ると、九州北部の肥前系の磁器を中心に量が増加する。18世紀後半～19世紀前半の肥前磁器の磁器碗、19世紀の瀬戸・美濃磁器の小碗、19世紀中頃の瀬戸・美濃磁器の御神酒徳利がみられる。

金属製品では、煙管（キセル）が注目される。特に形態が江戸編年のⅢ期とⅣ期の間の時期に相当し、1783（天明三）年との関係が注目される。

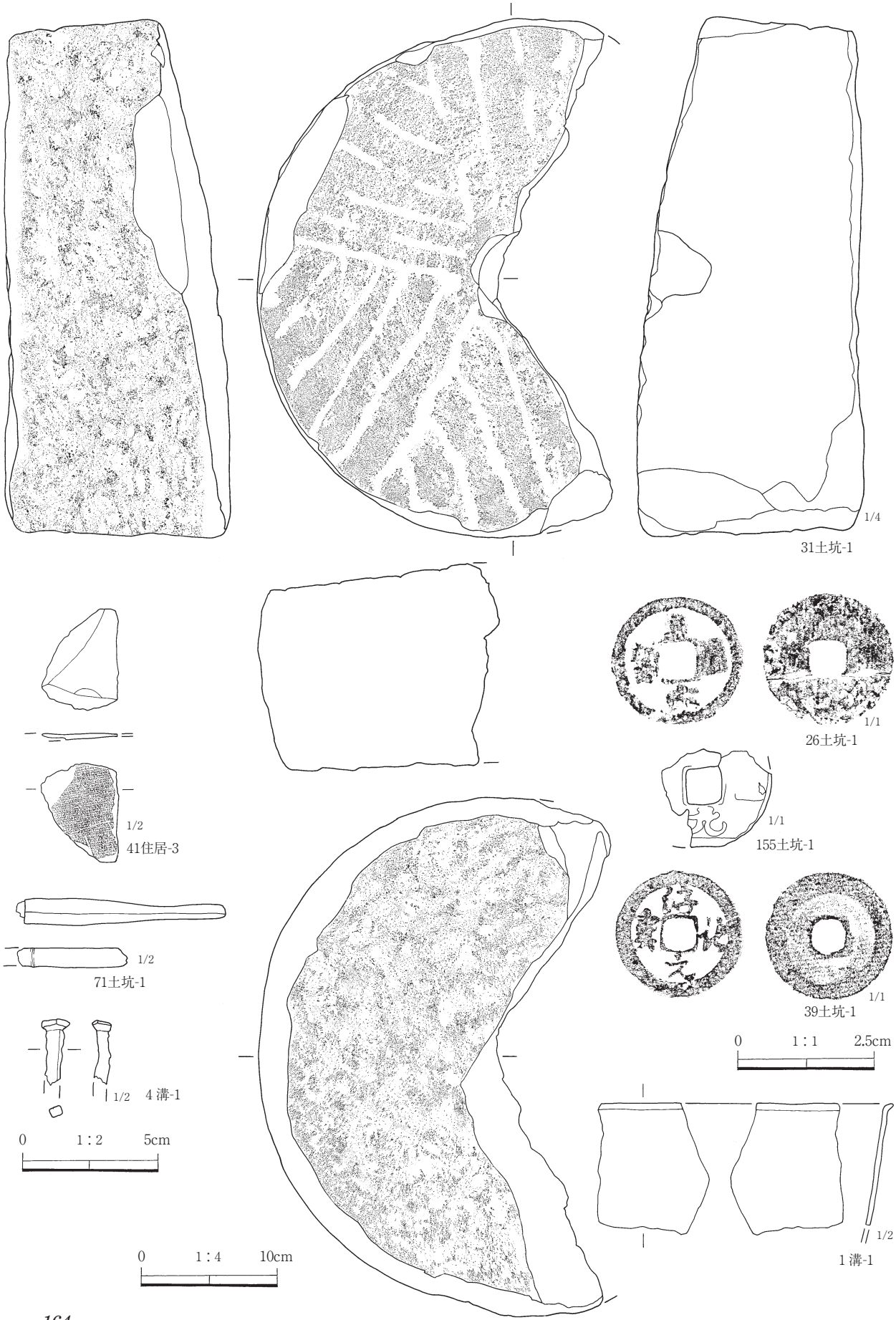
鉄鍋は破片だけであるが、胴部から底部にかけての「く」の字状に折れている部分であり、おおまかな形状が復元可能である。

鎌はその刃の部分の位置や形状等から、手持ちタイプではなく柄の先に取り付けるタイプ、あるいは牛等に引かせるタイプなのかも知れない。ただし、後者の場合は鋤が用いられる事が多い。

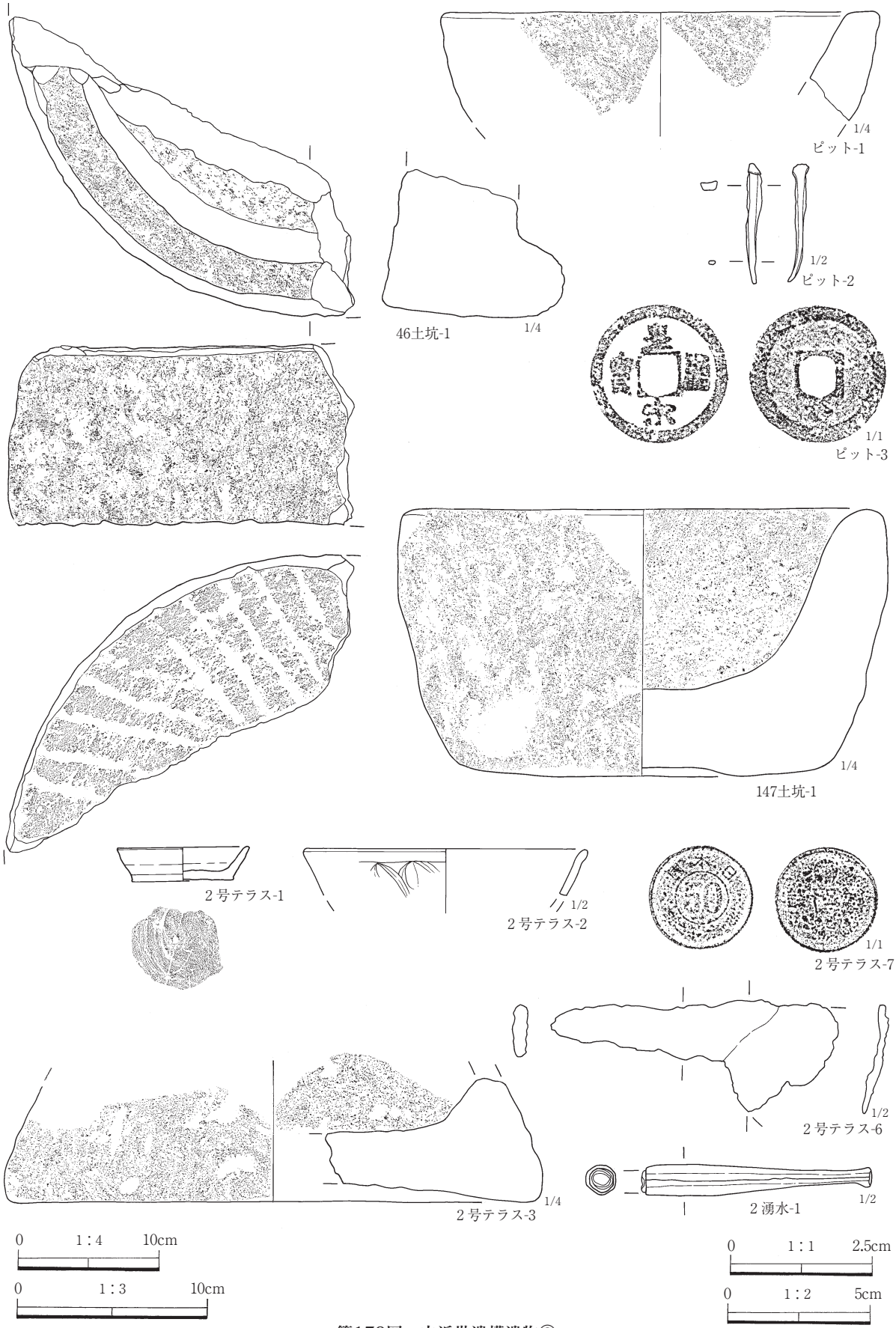
古銭は、墓の副葬品として使用される事が多い。特に、中世において中国の古銭が用いられるが、本遺跡では遺構からの出土は無く、単独出土ばかりである。江戸時代を代表する寛永通宝は、寛永13年（1636）に正式な官銭として製造が開始されたものであるが、裏面に11波のデザインが入ったものは、明和６年（1769）に４文銭として生産が開始されたものである。数が希少な十銭銅貨も出土している。

石製品では砥沢石の砥石が注目される。県内はもとより、大消費地である江戸方面をはじめ信州方面にも出荷されており、少し前に松本市の城下町の火災の被害に遭遇した問屋から多量に出土した事例については記憶に新しい。産出地は甘楽郡南牧村の砥沢であるが、当時は利根地域の砥石としてのブランドであった「沼田砥」の名称で広く流通していたとの事である。

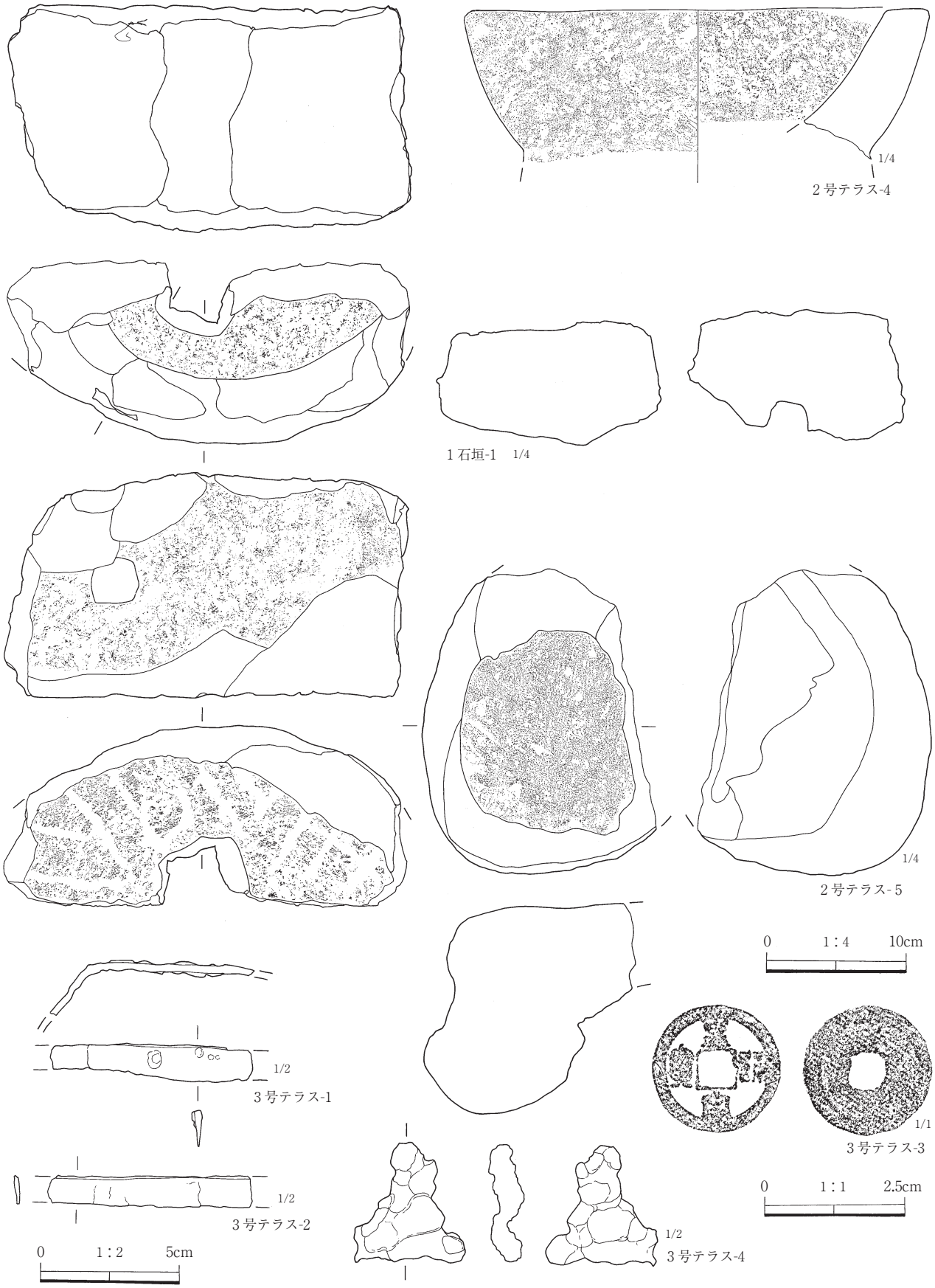
この他に擦り石、一部には敲打の痕跡も残っている事から敲き石として分類した。



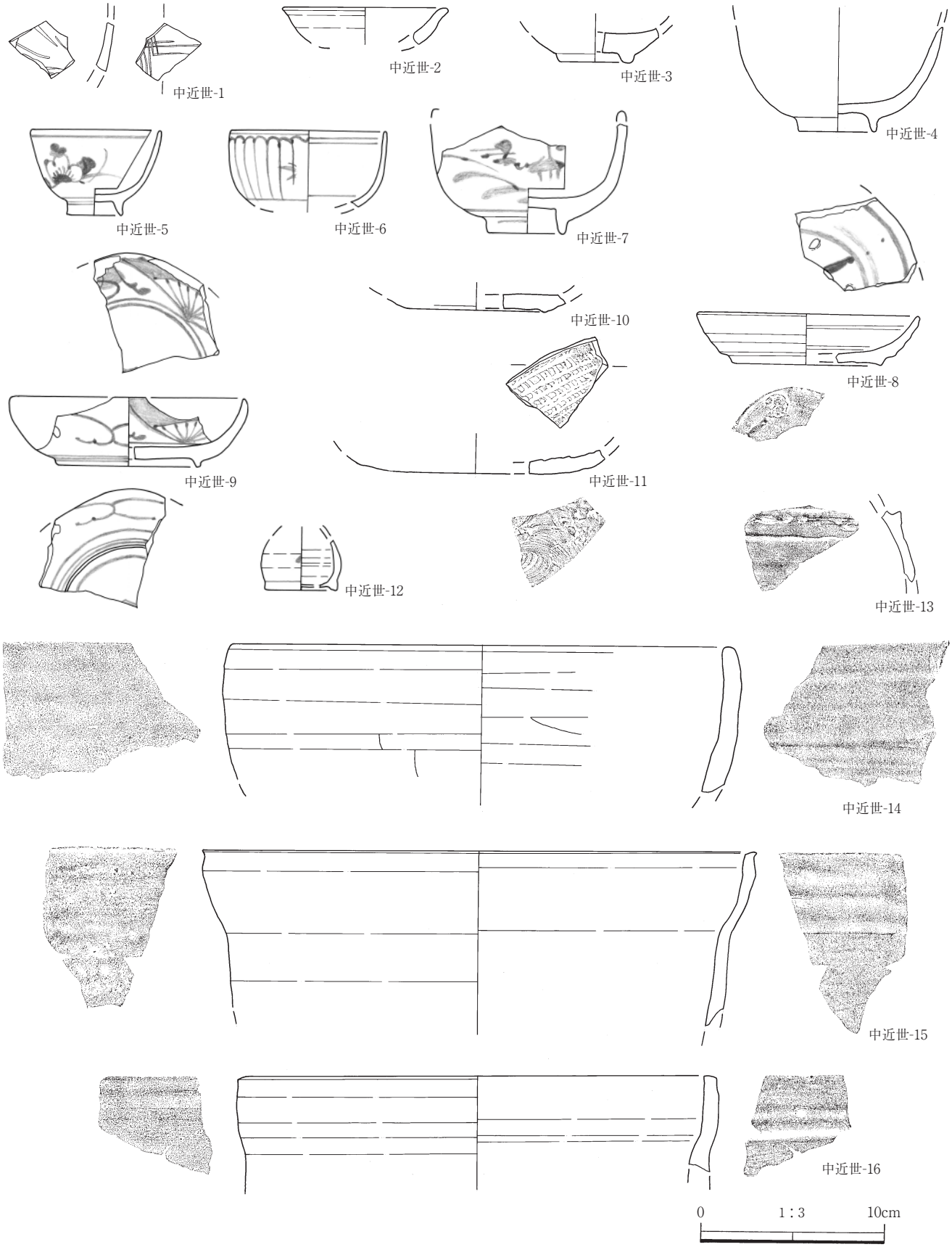
第178図　中近世遺構遺物①



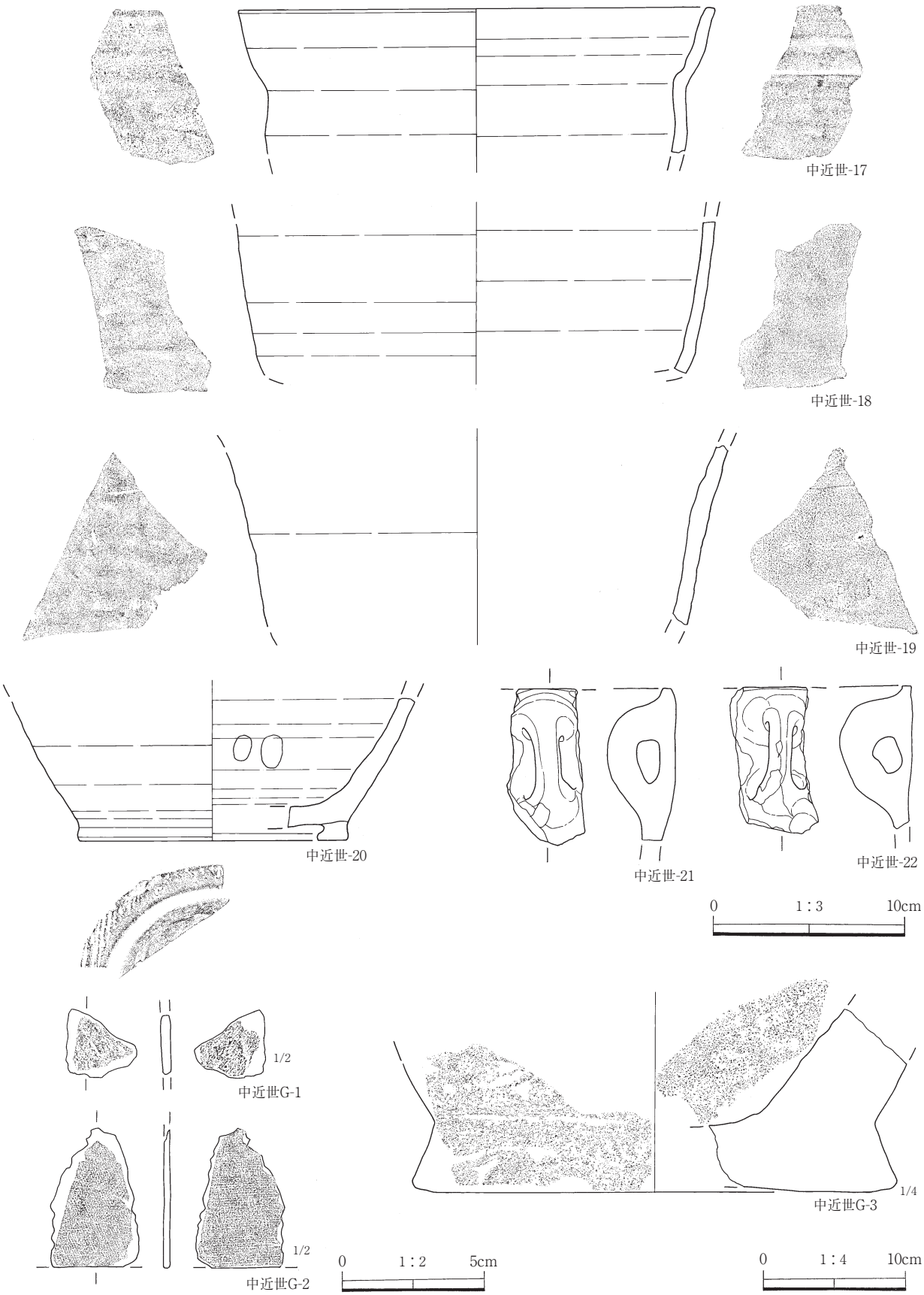
第179図　中近世遺構遺物②



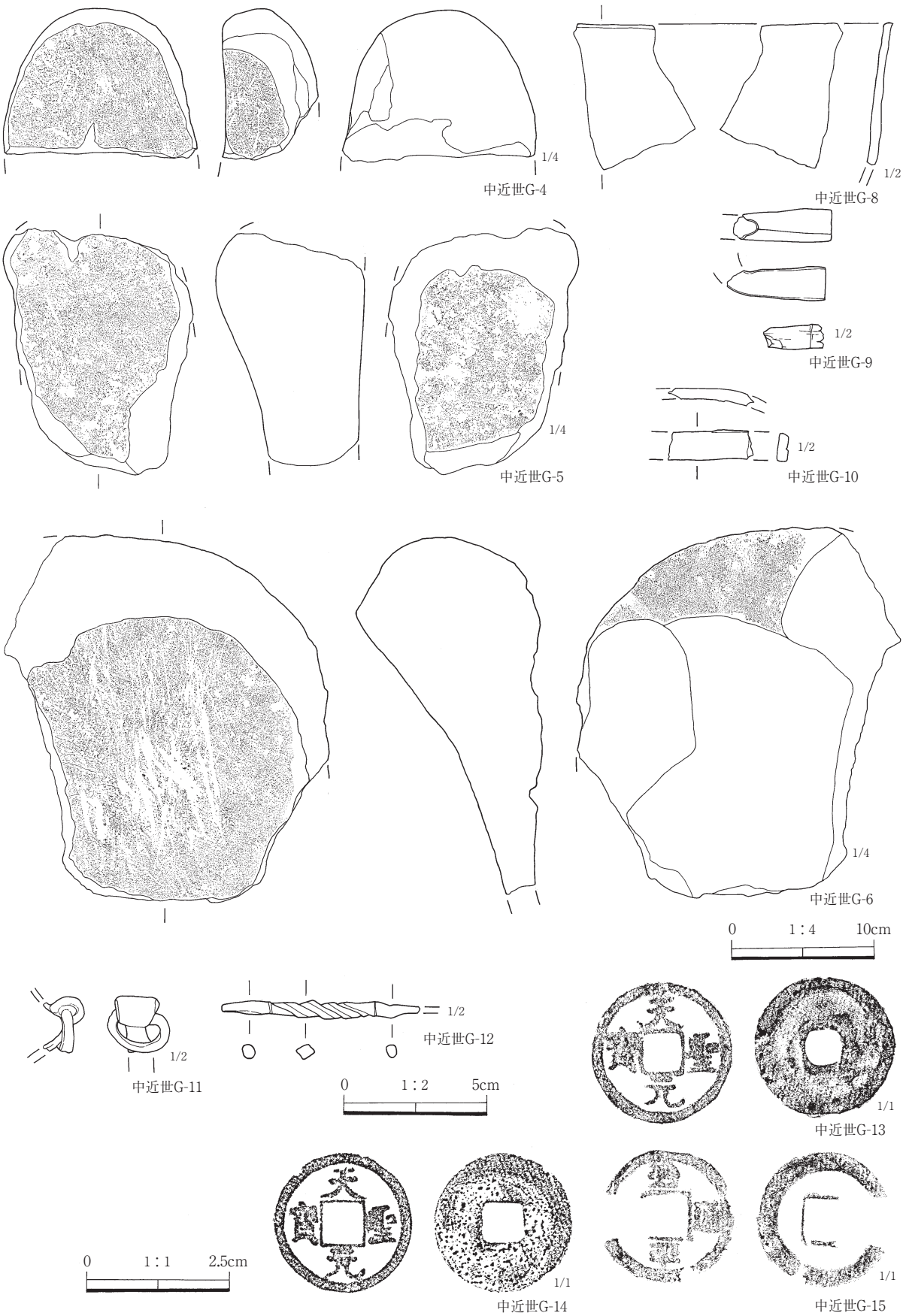
第180図　中近世遺構遺物③



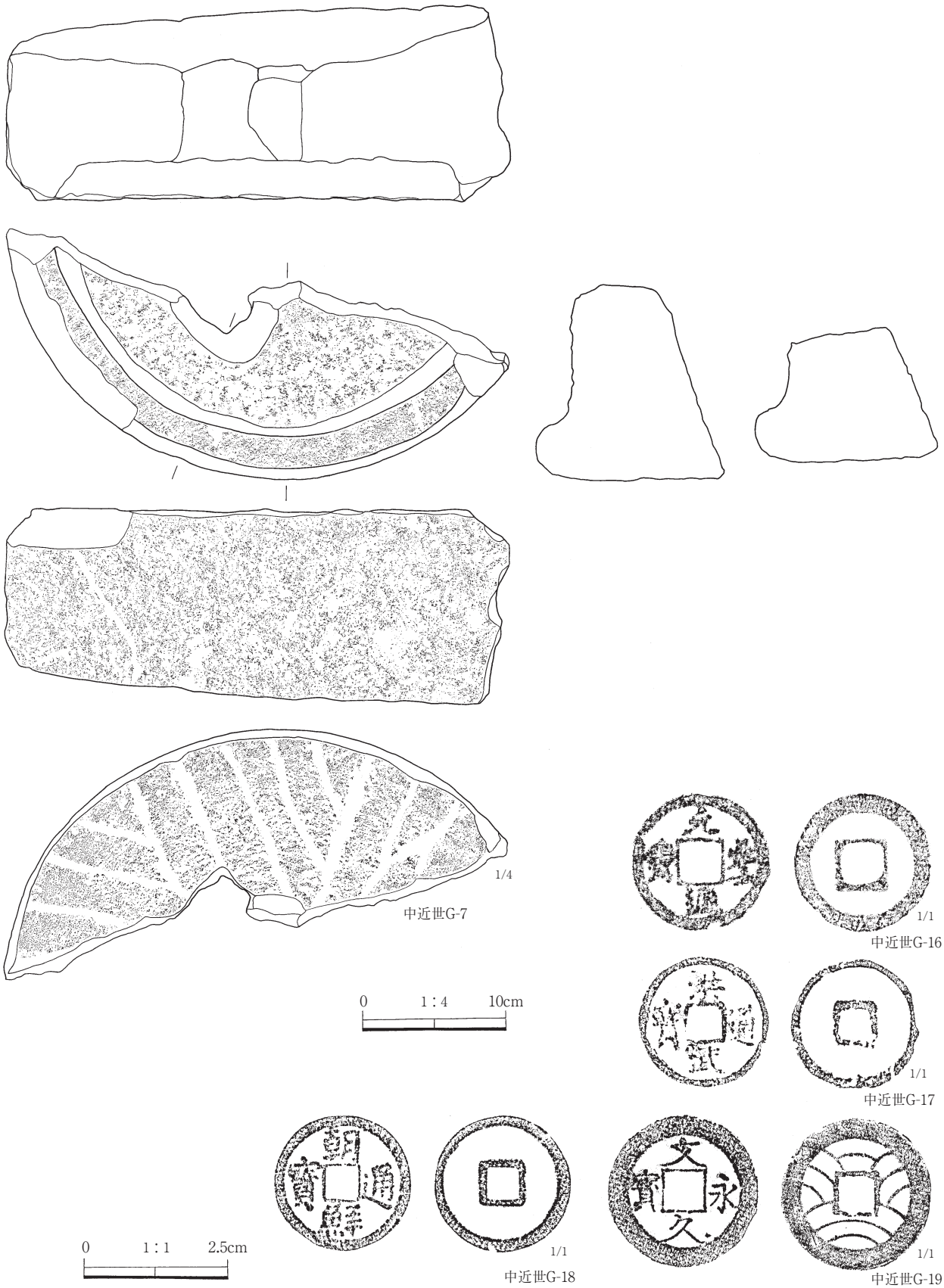
第181図　中近世グリッド遺物①



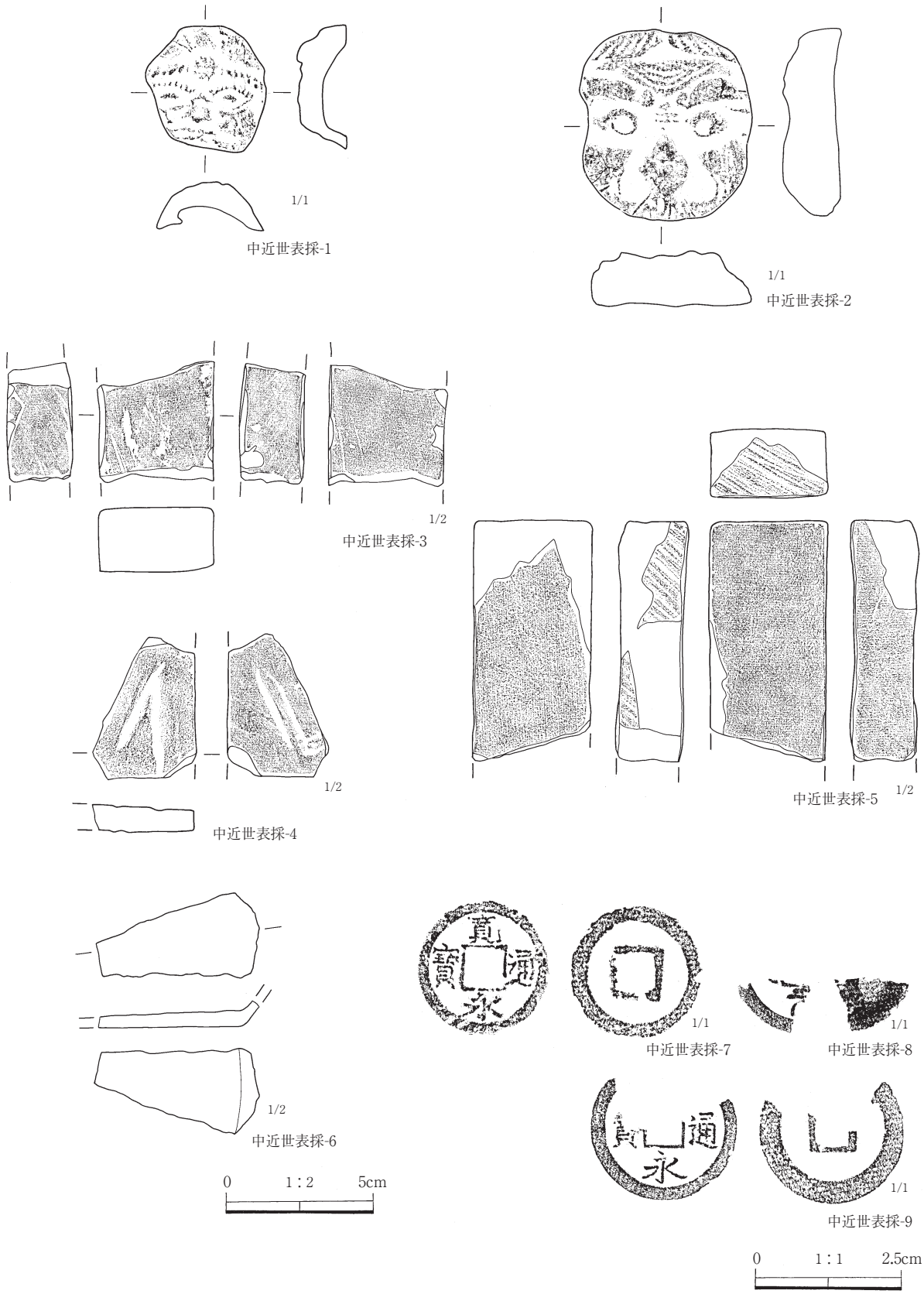
第182図　中近世グリッド遺物②



第183図　中近世グリッド遺物③



第184図　中近世グリッド遺物④



第185図　中近世表採遺物

第２表　遺構計測表　陥し穴・土坑（cm）

番号	区	グリッド	長さ	幅	深さ	備考
1	84	W－4・5	94	90	30	
2	84	X－6	86	53	22	
3	84	W・X－6	54	36	16	
4	84	X－6	111	66	26	
5	85	C－9	84	68	43	
6	84	X－7	56	－	40	
7	85	B－4	170	114	126	陥し穴
8	84	X－6・7	103	91	34	
9	84	Y－7	78	－	72	
10	85	B－4	208	66	60	陥し穴
11	84	Y－7	166	116	120	陥し穴
12	84	W－5・6	96	88	42	
13	84	X－6	72	55	20	
14	84	W・X－6	100	72	20	
15	84	Y－7	65	58	20	
16	84	Y－7	90	72	30	
17	84	Y－7	89	58	24	
18						欠番
19	84	X－9	76	48	24	
20	84	V－5	80	44	17	
21	84	U－5	78	50	14	
22	84	U－5.V－6	84	71	28	
23	85	A－10	68	104	42	
24	85	A－9	96	84	22	
25	84	X－8	64	58	14	
26	85	C－10	112	58	28	
27	84	U－6	73	56	18	
28	95	H－10・11	212	186	170	陥し穴
29	85	G－21	118	105	68	
30	85	H－21	218	114	24	
31	85	I－20・21	64	55	17	
32	85	H・I－22	140	115	64	
33	95	H・I－22	104	103	34	
34	85	F・G－21	135	110	25	
35	95	I－9・10	193	122	133	陥し穴
36	95	J－13	178	103	150	陥し穴
37	95	I－9・10	134	86	21	
38	95	I－9.	56	52	26	
39	85	I－21.J－21・22	338	168	41	
40	85	J－21	146	138	38	
41	85	K・L－22	138	132	52	
42	85	L－21・22	(206)	152	52	
43	85	K－21.L－21・22	98	106	28	
44	85	K－21	116	112	22	
45	85	J－21	142	111	10	
46	85	H・I－19	188	171	50	
47	85	C－12	132	82	86	
48	85	I・J－21	158	132	18	
49	85	G－21	107	84	30	
50	85	B－11	128	90	30	
51	85	G－16	88	86	21	
52	95	A－6	60	56	15	
53	95	B－9	98	74	14	
54						欠番
55	85	D－15	68	41	21	
56	95	C・D－15	58	54	13	
57	85	B・C－13	(196)	(147)	20	
58	85	A－24	170	98	108	陥し穴
59	85	A・B－23	98	86	26	
60	84	Y－23	48	39	14	
61	85	B・C－23	120	(64)	－	
62	85	B・C－24・25	119	(56)	18	
63	85	B・C－25	150	72	62	陥し穴
64	84	X－23	200	123	150	陥し穴
65	84	Y－23	174	140	170	陥し穴
66	84	X－21	(190)	223	37	
67	84	V－10	74	65	15	
68	84	X－12	133	95	18	
69	84	W－11・12	140	138	44	
70	84	W－11.	83	71	22	
71	84	X・Y－13	(110)	118	86	墓、人骨
72	84	V－10	80	75	44	
73	84	Y－12	82	65	11	
74	84	Y－12	38	70	40	
75	84	Y－12	82	80	45	
76	84	Y－9	38	50	36	
77						欠番
78	95	H－2	118	104	84	陥し穴
79	95	D・E－4・5	240	143	40	
80	95	I－5	200	120	32	
81	95	I－2	190	89	72	陥し穴
82	95	F－・2.G－1	250	184	144	陥し穴
83	95	G－2	208	98	88	陥し穴
84	95	G－3	164	88	110	陥し穴
85	85	E・F－25	(120)	104	46	
86	85	G－24・25	206	146	150	陥し穴
87	85	E・F－25	136	120	40	
88	85・95	E－25.E－1	176	118	36	
89	95	J－2・3	206	134	75	陥し穴
90	95	J・K－1・2	198	79	62	
91	95	C・D－3	252	66	17	
92	85	E－25	204	117	41	
93	85	F－25	98	90	20	
94	95	G－1	98	(45)	38	
95	95	G－1	(170)	60	98	
96	85	F－2・25.G－25	(128)	92	53	
97	85	J－1	222	66	5	
98	85	H－25	204	126	128	陥し穴
99	85・95	E－25.E－1	208	108	94	陥し穴
100	85	D－3	92	80	10	
101	85	D・E－2・3	218	98	17	
102	95	E－5・5	190	90	30	
103	95	H－5・6	198	72	39	
104	95	H・I－5・6	138	106	10	
105	95	I－6	108	60	20	
106	95	I－6	148	76	98	陥し穴
107	95	I－5・6	96	46	21	
108	95	I－4	90	74	36	
109	95	G－5	186	73	12	
110	85	F・G－24・25	184	98	67	
111	95	E－3	150	80	16	
112	95	E－3・4	270	86	20	
113	95	E－4	108	75	22	
114	95	G－4・5	(80)	80	29	
115	95	D－3・4	222	112	76	
116	85	F－25	76	76	21	
117	85	G－25	142	96	38	
118	85	E－25	112	80	38	
119	85	G・H－25	182	(128)	25	
120	95	J－6.J－7	140	118	30	

番号	区	グリッド	長さ	幅	深さ	備考
121	85	F－23	90	(50)	30	
122	85	F－23	132	95	12	
123	85	H－24	74	70	16	
124	85	D・E－24	(198)	(68)	46	
125	85	E－24	(95)	62	80	陥し穴
126	95	G－7・8	170	155	84	
127	95	J－6	126	86	57	
128	95	F・G－7	104	80	34	
129	95	H－7	200	152	155	陥し穴
130	84	W－18・19.X－18	236	160	148	陥し穴
131	85	D－22	190	134	128	陥し穴
132	85	A－18	114	94	46	
133	85	A－17・18	120	(98)	34	
134	85	B－19	(78)	84	26	
135	85	B－17・18	92	84	24	
136	85	C－18	150	118	50	
137	85	B－17	92	86	24	
138	85	B－17	(56)	70	18	
139	85	B・C－17	112	86	22	
140	85	B－20	96	70	26	
141	85	B－20	82	70	32	
142	85	C－21・22	184	106	28	
143	84	W・X－19	96	62	34	
144	84	W－19	78	70	14	
145	85	D－20・21	194	55	62	
146	85	D－28	200	156	118	陥し穴
147	85	C・D－16・17	244	150	62	
148	85	E－19・20	104	68	32	
149	84	Y－16	126	110	48	
150	85	B－21	118	64	18	
151	85	B－21・22.C－21	194	100	34	
152	85	C・D－21	112	84	12	
153	85	D－19	196	124	14	
154	95	D－17・18	250	158	146	陥し穴
155	85	E－20	158	122	80	陥し穴
156	95	C－17・18	178	128	148	陥し穴
157	95	E－16	230	168	150	陥し穴
158	95	F・G－19	204	144	134	陥し穴
159	95	D・E－12	154	82	24	
160						欠番
161	95	F－17	170	104	58	
162	95	D－17	188	120	134	陥し穴
163	95	I・J－21	144	98	78	陥し穴
164	95	K－21	146	92	65	陥し穴
165	95	L－21	138	78	84	陥し穴
166	95	I・J－21・22	(200)	84	90	陥し穴
167	95	J－21	180	100	105	陥し穴
168	85	A・B－16・17	203	76	38	
169	85	B－17	246	65	46	
170	85	D－21	(116)	112	12	
171	85	D－20	100	96	24	
172	85	E－19・20	(120)	85	28	
173	85	E－19	110	99	36	
174	84	W－16・17	86	83	29	
175	84	X－19	100	34	32	
176	95	G・H－23	203	162	128	陥し穴
177	85・95	I－25.I－1	236	175	122	陥し穴
178	95	L－24	212	148	132	陥し穴
179	95	K・L－23・24	234	96	105	陥し穴
180	85	A－18	106	(72)	18	
181	84	W－17	98	94	40	
182	85	C－22	203	152	123	陥し穴
183	85	D－22	122	102	18	
184	85	D・E－16	300	222	32	
185	85	E－16	130	76	32	
186	84	X－20	90	88	26	
187	85	F－17・18	127	112	38	
188	85	F－17・18	78	(65)	8	
189	85	D－16・17.E－16・17	420	356	76	
190	85	D－16	112	(110)	26	

溝計測一覧表（m）

番号	区	グリッド	長さ	幅	深さ	備考
1						縄文
2	85	G-22、H－22・23	4.8	2.1	0.50	
3	85	J－23・24	4.5	0.7	0.10	
4	84	V－10・11	2.1	0.2	0.08	
5	84	V－10	3.5	0.3	0.09	
6	84	V・W－9	1.5	0.2	0.07	
7	85	E～G－24	7.1	1.1	0.20	
8	95	F・G－1	9.0	0.5	0.12	
9	95	G－1	4.1	0.3	0.08	
10	85	F－23、G－23・24	4.0	0.4	0.29	
11	85	H－24・25	2.3	0.7	0.17	
12	85	H・I-24	1.6	0.3	0.18	
13	85	F－23	3.0	0.4	0.15	
14	85・95	J－25、J・K－1	7.1	0.7	0.17	

焼土計測一覧表（cm）

番号	区	グリッド	長さ	幅	深さ	備考
1						欠番
2	84	X－21	132	152	31	
3	85	C・D－24	68	74	9	
4	84	X－20	60	80	28	
5	84	X－10	50	42	12	
6	84	Y－10	58	36	8	
7	84	Y－10	84	50	20	
8	84	Y－12	30	24	4	
9	85	F－25	92	80	10	
10	85	F・G－25	56	50	15	
11	85	H－25	35	30	12	
12	85	H－25	70	68	4	
13	85	H－25	37	30	20	
14	85	H－25	58	56	10	
15	95	L－6	148	45	46	
16	95	J－4	172	134	12	
17	95	K－6	85	18	13	
18	95	K－6	66	43	13	
19	95	K－6・7	118	44	4	
20	95	E・F-7	88	62	22	
21	95	D－12	45	36	11	

ピット計測一覧表（cm）

番号	区	グリッド	長さ	幅	深さ	番号	区	グリッド	長さ	幅	深さ	番号	区	グリッド	長さ	幅	深さ
1	84	Y−6	24	22	36	61	85	H−20	32	35	24	121	85	J−20・21	40	38	12
2	84	Y−7	28	26	40	62	85	H−20	42	36	53	122	85	J−21	26	24	10
3	84	W−7	33	31	18	63	85	H−20	42	42	25	123	85	J−21	28	26	39
4	84	W−6	35	35	13	64	85	H−20	44	40	50	124	85	J−21	46	42	26
5	84	W−6	32	30	50	65	85	H−21	34	32	15	125	85	J−21	34	26	10
6	84	V・W−6	36	32	32	66	85	G−21	36	28	36	126	85	J−21	40	38	40
7	84		−	−	12	67	85	G・H−21	42	40	25	127	85	I−22	36	22	16
8	84		−	−	18	68	85	G−20	32	32	27	128	85	I−22	18	14	15
9	84	V−5	28	22	27	69	85	H−20	38	24	16	129	85	I−22	32	32	30
10	84	V−5	32	26	22	70	85	G・H−20	32	28	32	130	85	I・J−22	38	34	41
11	84	V−4	38	34	28	71	85	G−20	58	54	18	131	85	J−22	36	26	34
12	84	V−4	34	28	27	72	85	G−19・20	66	46	15	132	85	I−22	54	52	30
13	84	U−5	35	33	14	73	85	G−19	50	42	36	133	85	I−22	39	18	40
14	85	A−9	48	43	20	74	85	G−20	40	40	48	134	85	I−22	38	36	26
15	85	V−6	42	38	22	75	85	G−20	24	22	10	135	85	I−22	26	20	25
16	85	H−22	42	40	45	76	85	G−21	30	21	13	136	85	I−23	30	22	13
17	85	H−21	46	38	71	77	85	G−21	36	30	24	137	85	I−23	38	24	60
18	85	H−21	50	40	79	78	85	G−21	44	60	17	138	85	I−23	26	26	45
19	85	H−22	36	34	34	79	85	G−21	72	42	50	139	85	I−23	28	22	35
20	85	H・I−21	30	26	59	80	85	H−21	56	42	62	140	85	I−23	24	20	22
21	85	H−22	44	40	95	81	85	H−20	44	38	57	141	85	I−23	28	22	16
22	85	H−21	42	30	58	82	85	H−20	30	32	50	142	85	I−23	24	22	27
23	85	I−21・22	78	57	55	83	85	G−20	30	26	12	143	85	I−23	48	28	9
24	85	I−21	34	30	35	84	85	G・F−20・21	52	40	30	144	85	I−23	40	30	11
25	85	I−21	22	18	20	85	85	F・G−20	30	24	44	145	85	I−23	30	22	65
26	85	I−21	36	30	34	86	85	F−21	48	40	66	146	85	I−23	30	26	20
27	85	I−21	45	31	37	87	85	F−21	24	22	62	147	85	I−23	32	24	34
28	85	I−21	24	22	17	88	85	F・.G−21	30	28	50	148	85	I−23	32	26	10
29	85	I−21	24	18	23	89	85	G−21	42	38	41	149	85	I−23	40	30	11
30	85	I−21	24	22	22	90	85	I−22	48	42	76	150	85	I・J−23	26	24	21
31	85	H−21	29	23	16	91	85	I−20	50	34	21	151	85	J−23	20	22	19
32	85	H−21	26	24	24	92	85	H−22・23	38	38	17	152	85	J−23	38	36	48
33	85	I−21	28	28	21	93	85	H−23	46	40	60	153	85	I−23	79	36	8
34	85	I−21	22	20	9	94	85	H−23	20	20	18	154	85	I・J−23	54	43	40
35	85	I−21	38	20	45	95	85	H−23	36	30	11	155	85	J−23	34	24	12
36	85	H−21	20	20	20	96	85	H−22	36	30	18	156	85	J−23	50	40	17
37	85	I−21	36	22	25	97	85	F・.G−21	28	28	26	157	85	J−23	44	30	26
38	85	I−21	26	20	15	98	85	G−19	34	30	40	158	85	J−23	36	16	20
39	85	I−21	38	30	25	99	85	G−19	44	42	80	159	85	J−23	22	18	15
40	85	I−21	40	32	11	100	85	G−19	40	40	26	160	85	J−23	38	20	25
41	85	I−20	36	36	17	101	85	G−19	46	42	43	161	85	J−23	34	28	28
42	85	I−20	26	24	19	102	85	G−19	30	26	35	162	85	J−23	58	44	10
43	85	I−20	24	20	22	103	85	G−19・20	42	40	21	163	85	K−23	48	48	20
44	85	I−21	28	20	8	104	85	H−19	40	34	56	164	85	K−23	32	18	32
45	85	I−20・21	34	30	19	105	85	H−19	42	34	50	165	85	J・.K−23	38	38	13
46	85	I−20	40	30	36	106	85	H−19	20	14	17	166	85	J−22	42	30	36
47	85	I−20	32	32	19	107	85	H−20	34	28	18	167	85	J−22	84	74	14
48	85	I−20	34	32	33	108	85	H−20	36	38	30	168	85	K−22	44	34	64
49	85	H−21	44	40	46	109	85	I−20	24	24	15	169	85	K−22	50	40	16
50	85	H−21	62	42	15	110	85	I−20	24	22	15	170	85	J−22	34	32	58
51	85	H−21	34	34	46	111	85	I−20	74	58	32	171	85	K−22	72	58	6
52	85	H−21	22	22	13	112	欠番					172	85	J−22	58	52	46
53	85	H−21	22	20	20	113	欠番					173	85	J−22	54	38	8
54	85	H−20・21	22	20	26	114	85	I−20	30	30	34	174	85	J−22	38	32	10
55	85	H−20・21	36	24	18	115	85	I−20	28	26	43	175	85	J−22	78	78	70
56	85	H−21	30	30	33	116	85	H−20	36	30	15	176	85	K−22	72	58	16
57	85	H−20	40	34	30	117	85	J−20	20	16	11	177	85	J−22	38	36	26
58	85	G−20・21	30	26	35	118	85	J−20	36	20	15	178	85	J−22	44	40	34
59	85	H−20	44	34	40	119	85	J−20	24	22	23	179	85	J−22	46	32	35
60	85	H−20	26	24	14	120	85	J−20	36	36	15	180	85	J−22	38	30	40

番号	区	グリッド	長さ	幅	深さ
181	85	K−22	30	28	28
182	85	J−21・22	40	28	12
183	85	I−20・21	64	56	11
184	85	J−21	30	28	29
185	85	K−21・22	36	34	32
186	85	K−21	36	30	26
187	85	K−21	30	26	22
188	85	L−21	22	22	12
189	85	L−21	34	30	40
190	85	K・.L−21	34	32	61
191	85	L−21	36	28	48
192	85	L−21	17	20	38
193	85	K・L−21	24	22	31
194	85	K−21	32	32	22
195	85	K−21	34	32	40
196	85	K−21	32	28	32
197	85	K−20	32	28	23
198	85	K−21	62	50	25
199	85	K−21	40	40	19
200	85	K−21	36	30	18
201	85	K−20	32	26	36
202	85	K−20	30	24	40
203	85	K−20	28	26	32
204	85	K−20	30	26	28
205	85	J−20	38	30	30
206	85	J−20	32	28	13
207	85	J−20	26	17	14
208	85	I−20	34	32	22
209	85	I−19	28	22	23
210	85	J−21	40	26	15
211	85	H−19	30	26	55
212	85	H−19	32	28	20
213	85	G−19	52	46	19
214	85	H−20	32	30	22
215	85	I−23	26	21	13
216	85	H−20	18	16	32
217	85	H−20	78	56	42
218	85	I−22	30	20	30
219	85	G−21	32	24	18
220	85	J−20・21	44	52	14
221	85	J−20	30	28	14
222	85	K−21	38	38	37
223	85	K−21	32	32	22
224	85	I−22	18	16	27
225	85	H−22	18	14	45
226	85	K−21	30	26	53
227	85	K−21	24	22	35
228	85	H−20	80	44	54
229	85	I−20	45	34	8
230	85	H−21	38	30	64
231	85	I−21	34	30	40
232	85	I−21	24	22	47
233	85	I−21	14	12	28
234	85	H−22	40	33	60
235	85	H−22	36	29	60
236	85	H−22	50	48	47
237	85	H−22	40	36	24
238	85	H−23	26	22	26
239	85	L−22	40	36	44
240	85	H−21	42	34	26
241	85	G−21	48	32	37
242	85	H−21	38	30	36
243	85	C−12	34	19	16
244	85	B−12	41	38	22
245	85	A−10.・11	19	18	12
246	85	A−10・11	28	22	20
247	85	A−10	26	23	23
248	85	A−10	24	20	32
249	85	A−10	38	32	20
250	85	A−10	36	36	14
251	欠番				
252	85	B−12	35	29	22
253	85	B−12	30	28	22
254	85	A−12	30	26	15
255	85	A−23	40	34	27
256	85	A−23	32	22	18
257	84	Y−23	38	33	14
258	84	Y−23	30	28	14
259	84	Y−23	50	40	23
260	84	Y−23	36	35	26
261	85	A−23	31	24	−
262	85	A−23	30	18	−
263	欠番				
264	84	X−21・22	51	43	31
265	84	X−21	54	48	22
266	84	X−10・11	56	44	27
267	84	X−11	38	32	61
268	84	X−12	26	25	12
269	84	X−12	72	46	52
270	84	V−10	46	44	15
271	84	W−9	61	56	13
272	84	Y−10	33	31	16
273	84	Y−10	31	30	23
274	84	Y−9	30	28	30
275	85	A−10	36	28	42
276	84	Y−13	40	34	22
277	85・95	H−25・1	58	48	66
278	85	E−25	30	28	60
279	85	F−25	32	28	51
280	95	F−1	34	32	41
281	95	F−1	28	20	26
282	85	F−25	40	38	71
283	85	F−25	30	22	30
284	85	F−25	28	26	40
285	85・95	F−25・1	32	30	12
286	95	F−1	42	32	31
287	95	F・G−1	36	26	63
288	95	G−1	26	18	9
289	85	F−25	26	24	31
290	85	F−25	32	30	30
291	85	F・G−25	32	26	60
292	85	F−25	56	41	35
293	85	F−25	26	15	36
294	85	F−25	36	30	34
295	85	F−25	20	20	18
296	85	F−25	28	22	17
297	85	G−25	32	28	12
298	85	G−25	32	24	26
299	85	G−25	24	22	30
300	85	G−25	40	38	39
301	85	G−25	36	32	57
302	85	G−25	18	14	31
303	85	E−24	38	36	92
304	85	F−24	40	32	42
305	85	F−24	34	30	20
306	85	F−24	32	28	33
307	85	F−24	28	22	32
308	85	F−24	34	28	40
309	85	F−24	34	32	32
310	85	F−24	34	28	56
311	85	F−24	34	26	14
312	85	F−24	26	24	12
313	85	F−24	32	28	36
314	85	F−24	26	24	18
315	85	F・G−24	38	34	42
316	85	F・G−24	30	26	36
317	85	F・G−24	30	24	16
318	85	G−24	24	22	36
319	85	G−24	30	26	28
320	85	G−24	34	32	24
321	85	G−24	22	18	16
322	85	G−24	26	22	17
323	85	G−24	24	26	34
324	85	G−24	42	20	35
325	85	F−23	26	24	9
326	85	F−23	40	28	22
327	85	F−23・24	32	30	10
328	85	F−23	22	18	15
329	85	G−24	38	30	35
330	85	F−23	30	25	30
331	85	G−24・25	30	28	45
332	85	G−24	36	24	50
333	85	G−24	24	22	48
334	85	G−24	30	28	30
335	85	G−25	36	32	38
336	85	G−25	26	24	31
337	85	G−25	26	22	32
338	85	G−25	28	26	12
339	85	H−25	30	26	24
340	95	H−24	30	24	48
341	95	H−1	44	32	24
342	95	H−1	64	42	85
343	95	H−1	20	18	19
344	95	H−1	46	32	46
345	85	H−25	42	34	28
346	85.95	H−25・1	28	26	46
347	85	H−1	36	32	62
348	85	H−1	32	24	32
349	85	I−25	26	24	24
350	85	H・I−25	54	46	26
351	85	G・H−24	38	30	19
352	85	H−24	24	20	20
353	85	H−24	30	32	20
354	85	H−24・25	36	32	30
355	85	H−25	38	32	24
356	85	H−25	24	18	24
357	85	H−24	32	30	42
358	85	I−24・25	26	22	20
359	85	I−25	20	22	30
360	85	I−25	30	26	24
361	85	E−25	−	−	26
362	85	E−25	36	36	30
363	85	E−25	28	26	29
364	85	E・F−25	30	22	25
365	85	F−24・25	28	28	16
366	85	F−25	32	30	79

番号	区	グリッド	長さ	幅	深さ
367	85	F−25	24	22	39
368	85	F−25	22	20	17
369	85	F−25	36	28	48
370	85	F−24・25	24	20	30
371	85	G−23	30	20	44
372	85	G−24	24	20	43
373	85	G−24	42	30	56
374	85	F−25	22	20	49
375	85	F−25	16	14	48
376	85	F−25	38	24	58
377	85	F−25	26	26	22
378	85	G−25	20	16	23
379	85	G−25	36	32	68
380	85	G−25	22	18	14
381	85.95	G−25・1	34	30	78
382	85.95	G−25・1	18	16	28
383	95	G−1	26	30	47
384	85	G−25	56	38	48
385	85	G−25	24	20	30
386	85	G−25	22	16	41
387	85	G−23	30	24	54
388	85	G−24	18	14	31
389	85	G−24	32	24	44
390	85	G−24	34	22	28
391	85	G−24	22	22	33
392	85	G−24	34	30	18
393	85	H−25	28	24	51
394	95	H−1	22	18	20
395	85	H−24	22	20	26
396	95	J−1	26	22	24
397	95	J−1	46	24	44
398	85	J−1	26	22	28
399	95	J−1	30	24	24
400	95	I−1	22	18	46
401	85	H−25	32	24	40
402	85	F−25	34	28	56
403	85	G−25	22	28	42
404	85	G−25	20	18	24
405	95	G−1	26	22	31
406	85	F−25	14	18	10
407	85	H−24・25	24	22	42
408	95	E−1	24	22	12
409	95	H−1	28	22	9
410	85	G−25	24	22	48
411	85	G−25	16	14	15
412	85	G−25	38	32	10
413	85	H−25	18	16	21
414	85	H−25	20	18	20
415	85	G−24	28	15	14
416	85	H−25	30	28	28
417	85	I−25	24	22	40
418	85	H−25	26	24	18
419	85	H−25	30	28	16
420	95	H−1	38	30	23
421	85	H−25	24	18	12
422	85	H−25	38	28	13
423	95	H−1	24	22	30
424	95	H−1	20	18	32
425	95	H・I−1	24	22	44
426	85	I−25	28	24	18
427	95	I−1	38	20	19
428	95	I−1	32	28	30
429	95	I−1	24	22	44
430	85	I−25	34	26	11
431	85	H−25	20	18	16
432	85	G−24	26	26	48
433	85	H−24	28	26	28
434	85	H−25	72	70	15
435	85	G−25	32	28	14
436	85	G−25	42	36	13
437	85	E−25	22	18	11
438	85	E−25	18	14	22
439	95	I−1	48	26	17
440	85	E−25	28	26	30
441	95	I−1	22	22	38
442	95	G−1	22	16	14
443	95	G−1	30	24	38
444	85	F−25	22	18	12
445	85	F−25	30	30	14
446	85	F−25	20	18	22
447	85	F−25	18	14	38
448	85	G−24	18	16	22
449	85	E−25	30	24	36
450	85	E−25	36	28	34
451	85	E−24	21	24	17
452	85	E−24	40	36	18
453	85	E−24	36	30	62
454	85	E−24	38	28	32
455	85	E−23・24	32	26	38
456	85	E−23・24	34	32	12
457	85	E・F−23	38	22	13
458	85	F−23	30	22	16
459	85	F−23	22	18	24
460	85	F−23	32	38	10
461	85	F−23	40	28	12
462	85	G−23	22	20	16
463	85	G−23	24	22	10
464	85	G−23	28	24	28
465	85	G−23	52	36	32
466	85	H−23	24	22	16
467	85	H−23・24	26	24	32
468	85	H−24	26	24	13
469	85	H−24	26	18	30
470	85	H−24	28	24	40
471	85	I−24	18	18	25
472	85	I−24	24	18	24
473	85	I−24	24	18	38
474	85	I−25	24	22	14
475	85	K−25	86	52	42
476	85	K−25	46	30	11
477	85	D−25	28	24	69
478	85	D・E−25	30	26	26
479	85	E−24	32	30	23
480	85	E−24	34	28	21
481	85	E−24	26	28	31
482	85	E−24	38	36	48
483	95	J−7	34	27	42
484	95	J−7	25	21	41
485	95	J−7	24	22	41
486	95	K−7	31	28	56
487	95	K−7	27	22	20
488	95	J−6・7	51	43	24
489	95	J−6	37	26	18
490	95	J−6	56	49	85
491	95	E−3	21	20	24
492	95	E−3	36	32	24
493	95	F−2	44	42	18
494	95	E−6	40	13	11
495	95	E−7	26	17	9
496	95	E−9	21	17	6
497	95	E−11	13	10	12
498	84	V−18・19	40	36	22
499	85	D−19	35	29	31
500	85	D−20	44	41	56
501	85	D−20	29	25	13
502	85	C−19・20	34	30	28
503	85	C−20	39	24	50
504	85	C−19	30	30	25
505	85	C−19	28	28	49
506	85	C−19	34	30	50
507	85	C−19	33	23	34
508	85	C−19	30	28	49
509	85	C−19	36	22	52
510	85	C−19	28	23	13
511	85	D−19・20	36	30	48
512	85	D−20	40	37	64
513	85	E−20	66	48	48
514	85	F−19	32	25	20
515	85	F−20・21	32	28	54
516	85	G−19	49	41	50
517	85	F−19	38	30	27
518	85	F−19	32	28	46
519	85	E−19	48	40	38
520	85	D・E−19	34	28	39
521	85	F・G−19	21	18	44
522	85	D−18	35	32	47
523	85	D−19	18	18	38
524	85	E−20	37	30	46
525	85	E−20	38	30	49
526	85	E−20	34	28	35
527	85	F−20	32	28	50
528	85	F−20・21	48	46	63
529	85	F−20	38	32	30
530	85	F−20	48	47	73
531	85	F−19	42	38	44
532	85	F−19・20	30	28	22
533	85	F−19	28	28	31
534	85	F−20	28	24	22
535	85	F−20	32	34	24
536	85	E−20	29	28	31
537	85	E−20	54	38	52
538	85	F−19	29	25	24
539	85	F−19	28	22	31
540	85	E−19	33	30	25
541	85	E−20	34	26	41
542	85	E・F−20	51	48	52
543	85	F−20	40	30	61
544	85	F−20	27	26	35
545	85	F−18・19	44	30	16
546	85	F−18	38	30	24
547	85	F−19	32	28	30
548	85	E−20	32	21	31
549	85	E−20	33	26	52
550	85	G−19	36	30	41
551	85	F−19	42	36	45
552	85	F−19	30	29	39

番号	区	グリッド	長さ	幅	深さ	番号	区	グリッド	長さ	幅	深さ	番号	区	グリッド	長さ	幅	深さ
553	85	E－19	26	24	24	586	85	D－18	34	30	52	619	85	G－17	37	36	40
554	85	E－19	32	24	40	587	85	E・F－20	28	26	42	620	85	H－18	44	40	34
555	85	F－19	22	20	35	588	85	E－20	40	30	22	621	85	G－17	56	41	26
556	85	E－18	28	18	20	589	85	F－19	29	27	23	622	85	F－17	44	36	26
557	85	E－18	28	24	22	590	85	D－19	40	27	56	623	85	B－16	32	26	19
558	85	E－18	27	24	19	591	85	C－17	32	28	42	624	85	C－17	33	32	28
559	85	E－18	25	22	17	592	85	F－17・18	45	33	104	625	85	E－17	32	14	73
560	85	E－18	30	28	18	593	85	F－17	54	34	122	626	85	E－16	40	34	30
561	85	E・F－19	30	24	17	594	85	E－17	55	40	108	627	85	E－16	23	22	12
562	85	E－19	28	26	18	595	85	E－17	56	46	118	628	85	E－16	36	30	16
563	85	F－19	32	25	20	596	85	F－17	34	30	46	629	85	F－16	28	22	19
564	85	F－19	32	22	16	597	85	G－18	34	32	48	630	85	F－16	31	28	12
565	85	G－19	38	28	46	598	85	G－18	30	28	30	631	85	F－16	36	26	13
566	85	F－21	60	43	78	599	85	G－18	54	52	28	632	85	H－18	43	40	20
567	85	E－19	37	30	30	600	85	G－18	26	26	30	633	85	E－15・16	30	25	14
568	85	E－20	61	38	79	601	85	G－18	36	32	35	634	85	F－21	48	33	50
569	85	D－20	36	30	70	602	85	G－18	33	31	27	635	85	F－21	52	50	52
570	85	D－20	37	30	64	603	85	G－19	34	32	65	636	85	E－22	30	28	34
571	85	E－20	36	30	25	604	85	E－17	55	34	60	637	85	E・F－22	27	26	30
572	85	F－20	44	33	42	605	85	F－18	34	32	69	638	85	D－17	48	41	92
573	85	D－20	29	25	66	606	85	A－16	28	24	41	639	85	D－17	28	24	52
574	85	D－20	42	33	77	607	85	A－16	28	28	45	640	85	D－17	18	16	32
575	85	F－19	34	30	20	608	85	A・B－16	28	24	42	641	85	D－17	28	24	38
576	85	F－20・21	35	35	62	609	85	C－17	40	32	45	642	85	E－17	15	14	20
577	85	F－21	65	50	23	610	85	C－17	34	28	38	643	85	E－17	28	22	22
578	85	E－20	27	26	50	611	85	E－19	28	28	44	644	85	E－17・18	24	24	16
579	85	D－19	33	32	53	612	85	D－19・20	28	24	23	645	85	F－18	41	32	44
580	85	D－19	36	32	20	613	85	B－16	34	24	25	646	85	F－18	34	30	33
581	85	D－19	24	22	69	614	85	B－17	32	30	43	647	85	U－19	28	25	23
582	85	D－20	32	30	52	615	85	B－19	26	24	23	648	85	C－16・17	28	26	55
583	85	D－20	30	20	28	616	85	G－17	32	28	26	649	85	D－17	28	10	65
584	85	E－20	34	28	45	617	85	G－17	32	30	36	650	85	F－18	32	24	30
585	85	D－18	32	31	36	618	85	G－16	38	30	30	651	85	H－19	31	23	22

倒木計測一覧表（m）

番号	区	グリッド	長さ	幅	深さ	備考	番号	区	グリッド	長さ	幅	深さ	備考
1	84	X-6.Y-6	1.96	1.3	0.28		9						
2	84	Y-10	－	－	－		10	85	C-23	2.07	0.81	0.53	
3	84		－	－	－		11	95	E-2.F-2	3.05	1.82	1.13	
4	84	E-14・15.F-14・15	3.12	2.68	－		12	84	X-10・11	1.94	1.61	0.62	
5	84	F-15・16.G-15・16	2.58	3.63	－		13	84	X-11	－	－	－	
6	84	G-16.H-16	2.78	2.63	－		14	84	Y-12・13	－	－	－	
7	95	A-8・9	3.4	2.24	1.26		15		F-19・20.G-19	2.23	2.99	－	
8	84		－	－	－		16		E-19.F-19	2.72	1.97	－	

第４章　まとめ

第１節　「つぶらっこ」様関連

子宝・子育てに関係する民間信仰の場所が、長野原町の林と与喜屋の計３ヶ所に存在する。特に、林の神明宮は伊勢神宮に関係する。

同様の事例は、例えば子安（こやす）信仰などにもみられる。これは子授けや安産の願いをかなえて、子の安らかな成長を守る神であり、特に仏教との結びつきが強く、東日本では子安菩薩とも呼ばれるものである。また、月の十九日に宿を定めて女の人が集まる事から、十九夜講とも呼ばれる民俗事例で、灯明や線香をあげ、十九夜念仏を唱え、お産が軽く済む様に祈願した。このように、十九夜様は女性のための神様として、主に安産を祈願するなど、女性からの信仰を集めている。石像や石塔に子安地蔵の姿を刻んだものが多いが、幼児を抱く女神像や自然の石を御神体に用いる事もある。あるいは産泰様、子授け様ともいい、前橋市の産泰神社などが代表例である。物質的なものとして、子生み石が存在するが、「三州奥郡産育風俗図絵」によると、床の間または座敷の上席に「産土神様（ウブノカミサマ)」といって小石二個（直径一寸くらい）をお膳の上にのせて飾り、その前に帯を飾っておく。着帯が済むと、とりあげ婆さんと産土神様へお膳を出し饗応する。

さらに、子育て関係としては、太田市の子育て呑竜様、あるいは高崎市の山名神社の「疳の虫切り」、それに、鎌倉市の大巧（だいぎょう）寺に伝わる難産で亡くなった女性を祭る「おんめ様」などがある。「天文元年のある日、大巧寺の日棟上人が滑川の橋を渡ると、難産で死んだ女が、川を渡れない上、子供が乳房に吸い付いて泣くので苦しい、と言って助けを求めた。上人が経をあげると女は姿を消したが、数日後に現れて、塔を建ててお産に苦しむ人を救ってほしいと言ってお金を手渡した。上人は女を産女霊神（おんめさま、おんめ様）として寺に祭った」といういわれに基づいている。

さらに、石そのものを信仰の対象とするものとして、石神関係がある。これについては古くから石に霊力があると考えられており、『風土記』や『延喜式』にもその記載があるくらいである。こうした事例を全国で検索してみる事とする。よく知られている丸石信仰は山梨県に多く、縄文時代から続くものとの考え方もある。玉（たま）信仰としては、神奈川県三浦市の「子産石」が著名である。これは、海中の丸石を拾って床の間に飾ると魔よけになって子が授かるというものである。横須賀市の「子産石」も同様のもので、礫岩とも呼ばれる丸い石が含まれている。銚子市の菅原神社にも同様のものが存在する。この他に、道祖神があり、長野県や群馬県にも多い。中には陰陽石と呼ばれるものもあり、特に陽は男性のシンボルを形取ったものと言われており、「金精様」とも呼ばれる事もあり、横壁地区の丸岩が相当するのではないだろうか。同様に、丸石は円い形が胎児や幼児の寝姿に例え、石が子を産み出すにあやかって、子どもに恵まれない女性が「子産石」を撫でた手でお腹を触ったり、石でお腹を撫でると願いが叶う、などと言い伝えられている。代々、殖の神・安産の神が宿る石として崇拝されてきたようである。

次に、同様の全国での事例をみてみる事とする。

北海道木古内には、子宝に恵まれない女の人がいて、ある晩、女の人の枕元に白い着物を着た長いひげの老人が現われ、「裏の山の一番大きな木の下を掘って、そこからでできたものをまつりなさい」と言って消えてしまった。朝目が覚めると、老人の言っていたように掘り、長さ30㎝ほどの石が出できて、それを神社におさめ、数日して行ってみるとその石の上に小さな石がついていて、それから毎日女の人は神社にお参り行った。そうしているうちに子供が授かり、たいへん感謝し、この話はすぐ村中に知れわたり、「子持ち石」と名付けられ、安産の神社としてもまつられていて、現在でも８月20日におまつ

りをしているという話などが言い伝えられている。

栃木県日光市の日光東照宮に向かって左脇に日光二荒山神社があります。別宮の滝尾神社は女峯山の女神である田心姫命（たごりひめのみこと）をお祀りする神社です。白糸の滝の脇の階段が滝尾神社入り口で、神社の一番奥まった所に子種石があり、その子種石に触れて子宝や安産を願う。

埼玉県秩父市の秩父札所３番の常泉寺には、「子持ち石」があり、抱き上げて心の中で念じながら撫でると効き目があると言われている。

神奈川県横須賀市秋谷には、古い文献である『三浦古尋録』に「曲輪（くるわ）の浜に子産石云々有年此石より石を分出す、故に子産石と云ふ」とあり、この事から、「子産石」が生殖の神、安産の神が宿る石として崇拝されてきた事が分かる。子供に恵まれない女性が「子産石」をなでた手で腹をさすると懐妊するとか、妊婦が石で腹をなでると安産になるなどの伝承が、現在まで残っている。 現在では、バス停子海石付近にある直径約１ｍの「子産石」を、全体の象徴として神奈川県が指定している。長者ヶ崎をさらに南に向かっていくと久留和というところがある。ここには「子産石」と呼ばれているノジュール（団塊）があり、この「子産石」は砂粒が炭酸カルシウムによって固結したものであり、希塩酸をたらすと盛んに二酸化炭素の泡を出すという。不思議な事に、「子産石」はきれいな球形をしている。

静岡県掛川市の遠州孕石神社では、大きな石から小石をはがすように取り、お札を頂いて、その石を腹巻などの中に入れ、お腹に巻き、毎日お祈りをする。ご神体は礫岩（岩の中にさらに小さな石が幾つも埋まっている）で、その小石を子宝に見たててご利益を期待する。

愛知県南設楽郡鳳来町・子抱き観音には、お寺の七滝に「子抱き石」と「子抱き観音」があり、「子抱き石」の下で丸い石を拾い、寝室に置いておくと、子宝に恵まれると言われている。

大阪府阿倍野区の安部晴明神社にあるのは、「鎮み石・孕み石」といわれる石で、古代の船の錨として使用した石を鎮めるという意味から、安産を祈る石となり、「孕み石」と呼ばれ信仰の対象になっている。

岡山県備前市の三石明神社は、神功皇后が懐妊中に石に腰かけ休息されたという。祭神は神功皇后であろうか。三石神社は孕岩神社とも呼ばれているようで、子宝に恵まれる御利益があるという。

福岡県宇佐市の宇佐八幡宮には、子授け、安産の神様が祭ってあり、奉納してある石を持って帰り、無事生まれたら、もう一つ石を持ってお礼参りに行く「お石とり」という安産祈願で有名である。

熊本県阿蘇郡南阿蘇村（旧白水村）の明神池は歴史とご利益の宝庫であり、湧き出る名水に身を浄め境内の群塚神宮の誕生石に祈ると子宝に恵まれ、境内の乳イチョウの気根を撫でると乳の出が良くなると言われている。

沖縄県国頭郡伊江村の伊江島の南西にある自然洞窟であるニャティヤ洞（千人洞）には「力石(ビジル)」があり、この石を子宝に恵まれない女性が持ち上げると、願いがかなうと言われている。

この他にも、全国各地に様々な形での民間信仰が存在するものと思われる。これらを大きくタイプ分けすると、①本体の一部、あるいはまわりの小石を持ち帰るタイプ、②抱く・抱き上げるタイプ、③触るタイプ、④拝むタイプなどがある。これ以外にも対象物ではなく⑤温泉などに浸かるタイプも存在するが、これは温泉の効用の一部であり、玉石関連とは区別する事とする。こうしたタイプの違いが、信仰対象物の形状や大きさなどにも関係していると考えられる。

本遺跡での「つぶらっこ」様の場合は、現状では①のタイプであるが、「丸岩」との関係を考えた場合、本来は④のタイプであった可能性が高いと考えられないだろうか。

第２節　八ッ場ダム関連遺跡における陥し穴の調査の現状と課題

村　上　章　義

（１）はじめに

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査において、2006年度までに陥し穴として報告された遺構の数は476基にのぼり、遺跡の数も10[1]にのぼる。本遺跡の44基を含めれば、520基、11遺跡となる。八ッ場ダム関連遺跡の発掘調査は、現在も進行中であり、陥し穴として調査された遺構の数も増えつづけている。石田2004によれば、群馬県内における陥し穴の数量は、当時、1700基以上、130遺跡とされ、その後の、本遺跡を含めた八ッ場ダム関連遺跡の330基、７遺跡を加えれば、2030基以上、137遺跡となる。八ッ場ダム関連遺跡の陥し穴の数量は、県内の陥し穴の数量の４分の１近い数を占めていることになる。

数量もさることながら、八ッ場ダム関連遺跡における陥し穴の調査は、花畑遺跡、立馬遺跡における金属製工具痕の発見、立馬遺跡における埋没土最上位にAs-B、As-Kkを含み、平安時代住居を切る陥し穴の発見など、県内の陥し穴研究において、重要な成果を挙げている。

これらの成果を纏め上げて発表された石田2004は、従来、県内では漠然と縄文時代と比定されてきた陥し穴の構築／使用年代観に一石を投じ、八ッ場ダム関連遺跡においても、その後、平安時代を中心とする古代に比定される陥し穴の報告が増大し、逆に縄文時代に比定される陥し穴の数量が激減する（表１）など、大きな影響を与えている。

石田2004以降、前述したように陥し穴の数量も倍近くに増え、石田2004の肝の一つとなった立馬Ⅰ・Ⅱ遺跡も正式に報告され、三平Ⅰ・Ⅱ遺跡の報告（篠原2007）における、陥し穴の埋没土上層にみられる「ローム質土レンズ状堆積層」の指摘など、新たな知見が増えてきたため、ここで一度、八ッ場ダム関連遺跡における陥し穴の調査の現状と課題をまとめてみたい。

（２）陥し穴の認定基準

八ッ場ダム関連遺跡では、数多ある土坑のうち、陥し穴と推定される根拠は、上面の平面形、断面形、規模（長軸、短軸、深さ）、底部施設（「逆茂木痕」や杭痕と推定される「小ピット」）の存在などが挙げられている（諸田2002：149；石川2005：33；篠原2007：33、92）。

平面形については、代表的な形として楕円形・長楕円形・長方形・隅丸長方形が挙げられている（諸田2002：149）が、この四種類で実に８割以上を占める（表２）。

断面の形状については、具体的な言及はないが、とくに短軸の断面の形状が特徴的であり、壁が垂直に立ち上がる「箱形」、上方に向かって開く「逆台形」、途中まで垂直に立ち上がった後、上方に向かって開く「Ｙ字形」でほぼ100％を占める（表３）。

規模としては、長軸が130～220cm、短軸が60～170cm、深さが50～160cmのものが多い（表４・５）。

「小ピット」を有する陥し穴の数は55[2]基であり、わずか11％にすぎず、大多数の陥し穴は「小ピット」をもたない（表６）。

八ッ場ダム関連遺跡では、これらの特徴をあわせもつ土坑を主に陥し穴と認定している。

（３）分類基準

これまで、７遺跡、５報告において分類案が提示されている（表７）。

上郷A遺跡を除けば、上面形の分類と短軸断面形の分類との組み合わせによる分類が主となっているが、上面形と短軸断面形との間には、相関関係があり、全ての組み合わせが存在するわけではない。

上面の長軸をX軸に、短軸をY軸に分布グラフ化したところ（表４）、上面長軸／短軸＝１と上面長軸／短軸＝1.2の間に円形と方形がおさまるため、

円形と楕円形の違いや、方形と（隅丸）長方形の違いも、横壁勝沼遺跡・花畑遺跡の分類（松原2002：153）のように短軸×1.2を基準とするのが妥当であると判断される。

また、立馬Ⅰ・Ⅱ遺跡や三平Ⅰ・Ⅱ遺跡において「溝型」「溝状」と分類される陥し穴は、上面形では「（長）楕円形」や「（隅丸）長方形」と大差ないため（表４）、分類の基準は下面の長軸・短軸比が鍵と推定される。下面の長軸を短軸で割った値をX軸、短軸をY軸として分布グラフ化したところ、明瞭な違いが表れた（表８）。下面長軸≧下面短軸×5.5の大きさが、陥し穴を「溝形」と分類する基準とするのが妥当と考えられる。

（４）構築／使用時期

群馬県内では、従来は、縄文時代と考えられていたが、花畑遺跡の報告（松原2002）、石田2004、立馬Ⅰ・Ⅱ遺跡の報告（飯森2006）によって、八ッ場ダム関連遺跡の調査では、大半は、縄文時代よりも新しい時代と考えられるようになった（表１）。

その根拠として、金属製の工具による掘削痕、埋没土中に含まれるテフラ、とくにAs-Kk（粕川）、年代の分かる遺構との切り合い関係などが挙げられている（松原2002、石田2004、石川2005、飯森2006、篠原2007）。

その他に、陥し穴の埋没土に着目して、構築／使用時期を推定する試みが行われている。

上郷A遺跡では、テフラ分析の結果と切り合い関係、覆土の観察によって、縄文中期以前から平安以前の陥し穴の変遷が明らかにされている（石川2005：123-124）。

三平Ⅰ・Ⅱ遺跡の報告（篠原2007）において指摘された、平安時代と推定される陥し穴の埋没土上層にみられる「ローム質土レンズ状堆積層」は、同報告によれば、花畑遺跡・長野原一本松遺跡・立馬Ⅰ・Ⅱ遺跡の陥し穴においても確認される（篠原2007：259）とされ、その堆積年代が判明すれば、陥し穴の構築／使用年代を推定する鍵層として重要な役割もつものとして期待される。

現状では、陥し穴の構築／使用時期は平安時代から中世ごろまでを下限と考えられているようである。しかしながら、文献記録では古代（『日本書紀』巻二九　天武天皇四年四月庚寅《十七》；『続日本後紀』巻二　天長十年六月丙辰朔）から江戸時代（根崎2001：A7）まで、民俗記録では明治（萩原1938：23；田中1995：60-64）まで陥し穴が記録されている。

とくに、後者は、長野原町の隣村の六合村における民俗記録であり、今後、構築／使用時期が江戸時代や明治である可能性を見据えた調査を行う必要があろう。

（５）小ピット

陥し穴の底面には、しばしば小ピットの存在が報告される。小ピットの存在は、遺構が陥し穴と比定される根拠のひとつとしてあげられるものである。

八ッ場ダム関連遺跡においても、長野原一本松（１）・（２）遺跡、花畑遺跡、上郷Ａ遺跡、立馬Ⅰ・Ⅱ遺跡、三平Ⅱ遺跡において報告されている（松原2002、石川2005、飯森2006、篠原2007、小野2007）が、（２）で言及したように、その数は55 基、11％にすぎない。

小ピットのみとめられる陥し穴は、数量的には、楕円形・長方形と溝形・円形との差は、９～13基と大きな差はないが、割合においては、溝形が39％、円形が17％と突出している（表６）。

小ピットに対する断ち割り調査が行われているのは、立馬Ⅰ・Ⅱ遺跡と三平Ⅱ遺跡であり、いずれも溝形の陥し穴に対して行われた。断ち割りの結果、打ち込まれたものと推定される。

断ち割りによって、検出時には小ピットとされていたものが攪乱であったことが判明した（飯森2006：96）ことや、大多数の陥し穴に小ピットがみとめられないことから、断ち割らずに小ピットと認定することには慎重であるべきであろう。

（６）今後の課題

構築／使用時期の絞込み

陥し穴の埋没土に対する記録と分析は行われているが、陥し穴が切る自然の土層に対する記録が全く行われていない。陥し穴に切られる土層と基本土層との対比を行えば、直接切り合っていない陥し穴どうしの前後関係を明らかにすることは可能であろう。

また、半裁後のプランの大きさと検出時のプランの大きさが著しく異なる場合、遺構確認面が掘り込み面よりも上位にある可能性があるので、埋没土の上位の層と遺構周辺の土層とが同じなのか切り合っているのかよく観察する必要がある。

再利用と貼壁

立馬I遺跡の16区104号土坑において明らかにされた(飯森2006：47-49)ように、貼壁と推定される特徴的な土層堆積がみとめられることがある。

版築やたたき土塁に似た構造のロームと黒土の互層から成ること、崩落しやすい As-YPk 層を覆っていること、この土層堆積によって、断面形が箱形からＹ字形になることから、人為的な貼壁と推定されるが、全体ないし一部を埋め戻した後に掘りなおしても同様の結果が得られるため、貼壁ではなく、再利用である可能性がある。以上の点をふまえて、土層セクションや「貼壁」の表面の観察を行う必要がある。

狩猟対象

陥し穴の狩猟対象として、イノシシ、シカ、クマが挙げられる。本州に生息するニホンイノシシは、頭胴長が120～150cm、肩高が60～75cm（仲谷1996：118）とされ、大多数の陥し穴の下部はイノシシの体がおさまる大きさとなっている（表９）。イノシシは１m程度の高さならば飛びこえることができ（江口2001：184-187)、ある程度の斜面も登ってしまうため、それを防ぐために長軸方向の壁は、オーバーハングしている可能性が考えられる。陥し穴の土層セクションは短軸でとられるのがほとんどであるが、長軸方向の壁の残存状況を調べるためにも、長軸で土層セクションをとる必要があると考える。

《参考文献》

群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書

諸田康成、2002『長野原一本松遺跡(１)』

松原孝志、2002『八ツ場ダム発掘調査集成(１)』

石川正敏、2005「上郷Ａ遺跡」(『久々戸遺跡(２)・中棚II遺跡(２)・西ノ上遺跡・上郷Ａ遺跡』)

飯森康広、2006『立馬Ⅱ遺跡』

神谷佳明、2006『上郷B・廣石A・二反沢遺跡』

飯森康広、2006『立馬Ⅰ遺跡』

篠原正洋、2007『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』

小野和之、2007『長野原一本松遺跡(２)』

石田真、2004「群馬県北西部における陥し穴の構築時期をめぐって」(『研究紀要』22、群馬県埋蔵文化財調査事業団)

根崎光男、2001「近世農民の害鳥獣駆除と鳥獣観」『人間環境論集』1-2、法政大学人間環境学会

萩原進、1938「六合村斷片」(『毛野』4-4、毛野研究會)

田中隆志、1995「六合村入山地区における伝統的狩猟」(『群馬歴史民俗』16、群馬歴史民俗研究会)

仲谷淳、1996「イノシシ」(『日本動物大百科２』平凡社)

江口祐輔、2001「イノシシの行動と能力を知る」(『イノシシと人間』古今書院)

---

①八ッ場ダム関連遺跡の調査では、石田2004を境に陥し穴の構築／使用年代観が大きく変質しているため、本稿では石田2004の前後に報告されている長野原一本松遺跡を二つの遺跡として取り扱った。

②小ピットに関しては、報告者による認定を基準としているため、本稿執筆時点において未報告である楡木Ⅱ遺跡を除いた数値である。

表1. 陥し穴の構築／使用年代観の変遷

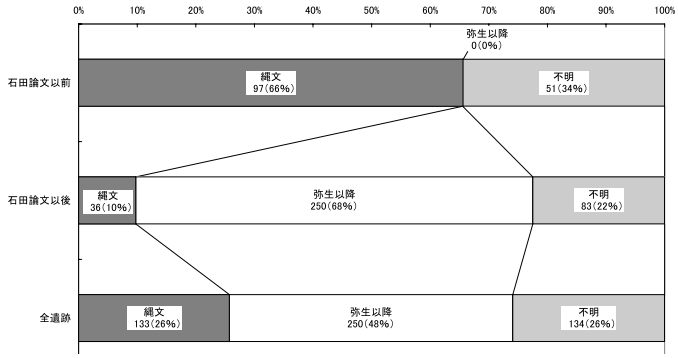


表2. 上面形

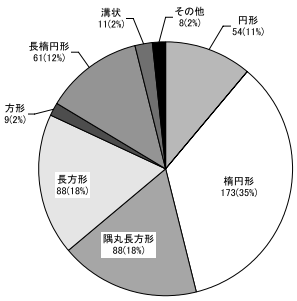


表3. 短軸断面形

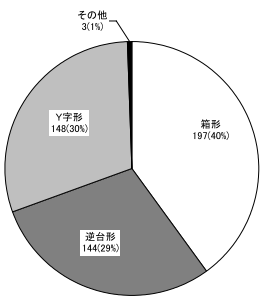


表4. 規模（上面長軸・短軸）

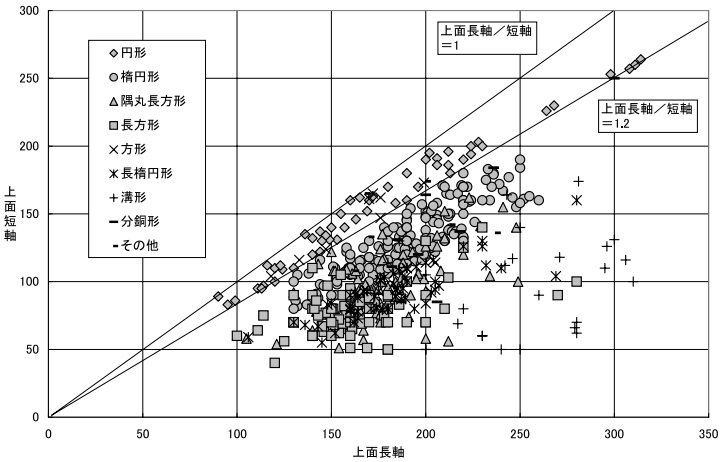


表5. 規模（下面長短軸比・深さ）

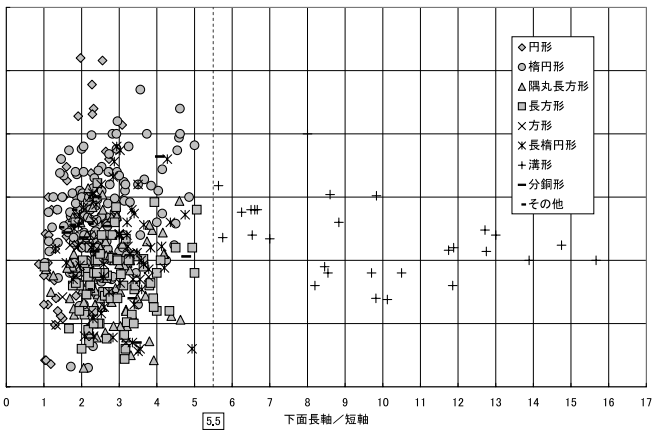


表6. 小ピットを有する陥し穴の割合

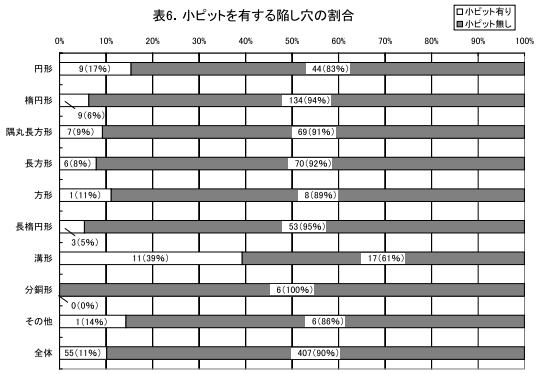


表7. 分類基準

		上面形							底面形							断面形				小ピット		深さ	
		円形	楕円形	隅丸方形	長方形	隅丸長方形	細長い楕円形	その他	円形	楕円形	長方形	隅丸長方形	溝状	細長方形	隅丸細長方形	箱形	逆台形	Y字形	その他	単独	複数	深い	非常に深い
横壁・勝沼・花畑	AⅡ	○															○						
	BⅠ		○													○							
	BⅡ		○														○						
	BⅢ		○															○					
	CⅣ			○															○				
	DⅠ					○										○							
	DⅡ					○											○						
	DⅢ					○												○					
	EⅡ							○									○						
	A2	○																					
	D2					○																	
上郷A	Ⅰ類									○										○			
	Ⅱ類								○												○		○
	Ⅲ類								△	△												○	○
	Ⅳ類									○												○	
	Ⅴ類											○											○
	Ⅵ類												○								○		
	Ⅶ類												○									○	
	Ⅷ類										○											○	
立馬Ⅰ・Ⅱ	筒形	○							○							○							
	スリ鉢形	○							○								○						
	箱形1類				△	△					△	△				○							
	箱形2類		○								△	△						○					
	逆台形		△			△						○					○						
	溝状						○						○			○							
Ⅰ・Ⅱ三平	楕円型1類				○						○					○							
	楕円型2類		○								○							○					
	溝型				△		△						△	△						△	△		
	筒型	○							○							○							

表8. 溝形の分布

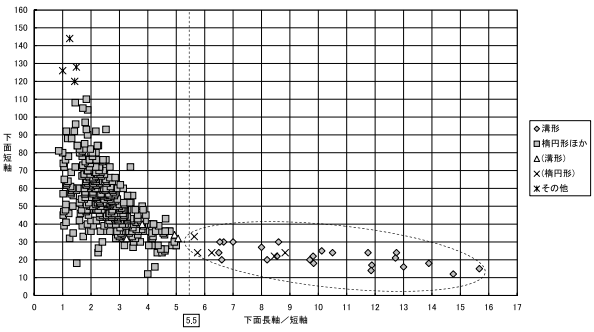
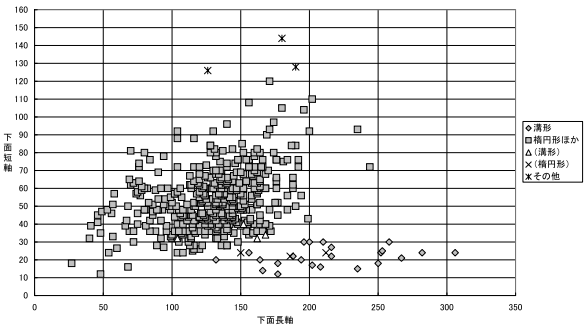


表9. 規模（下面長軸・短軸）



第３節　楡木Ⅱ遺跡の建物遺構について

飯　森　康　広

１．はじめに

建物群を検討する前提として、掘立柱建物跡の認定の問題がある。本遺跡は中世遺構に関わる調査が３か年度に分割されており、筆者は平成13年度調査を実見していない。しかし、他の２か年度は、幸い調査段階から検討に加わる機会を与えられ、図上復元を平行作業として行いながら、最終的な建物認定をすることができた。後述するとおり、八ッ場地域では中・近世の屋敷遺構に、建物敷地を切土造成する傾向がみられる。このため、柱穴の確認面がローム面となり、遺構確認が容易で見落としが少ない利点がある。

本稿の目的は、認定した建物を序列化し、組み合わせることで、単体の建物を屋敷遺構に組み替えることを目的としている。方法としては、建物の主軸方位と敷地造成面との関係を手がかりに、筆者が試行している桁行平均柱間の分析を加味するものである。

２．中世面の概要

本遺跡は、縄文時代、平安時代、中・近世に遺構の集中を持つ複合遺跡であるが、集落分布は時代ごとに分かれる。したがって、中近世の場合、陥し穴である土坑を除けば、異時期遺構の重複は少ない。分布の東西幅は、85区Ｃ～Ｌグリッドラインまでの36mで、更に西側の調査区域外にのびる。南北幅は、85区16～95区２グリッドラインまでの42mで、分布限界は露呈できている。しかし、調査が分割して行われた事情もあり、中世遺構分布範囲も３か年度に分割されている。建物遺構はすべて掘立柱建物で、敷地として雛壇状に削平された平坦面に建てられている。建物敷地として利用されたものは三段あるため、上から上段・中段・下段と呼称することとする。この平坦面背後の法面処理には、石垣を伴うもの（以下、石垣段階）と伴わないもの（以下、「石垣なし」段階）とがあり、石垣の方が古いという調査時の所見がある。掘立柱建物として認定できたものは20棟あり、上段に８棟、中段に10棟、下段に２棟が分布している。なお、上段の東面は、諸事情により未調査部分が生じてしまい残念な結果となった。

３．主軸方位による分類 (第１表)

建物群は主軸方位の違いにより５つに分類される。東西棟を基準にすれば、すべて東下がりである。傾斜の弱い順に付番すると、第１類はＮ－77～80°－Ｗのもの(東西棟基準で、以下同じ)で、上段で２棟、中段でも２棟が該当する。第２類はＮ－75°－Ｗで、上段の２棟のみである。第３類はＮ－68～73°－Ｗで、上段で２棟、中段で４棟、下段で１棟が該当する。第４類はＮ－66・67°－Ｗで、中段で４棟、下段で１棟が該当する。第５類はＮ－62～65°－Ｗで、上段の２棟のみである。やや細分しすぎの観もあるが、削平された平坦面との関係をみる意図もあって細分した。

４．桁行平均柱間の状況 (第１表)

桁行平均柱間は削平面ごとに特徴がみられる。なかでも中段は①2.310～2.387m、約7.6～7.9尺のものが、10棟中６棟である。残る４棟のうち２棟も、３号建物は②約7.4尺、③８号建物は約8.2尺と、数値は６棟の傾向に近い。また、10号建物は④約6.9尺と狭く、６号建物は⑤約8.8尺と際だって広いため、個別の事情が想定される。下段の２棟は、中段の大部分と同じく7.5尺前後である。これに対して、上段は様相が異なる。８棟のうち４棟は④2.040～2.123m、約6.7～7.0尺で、14号建物については⑥約6.2尺と狭い。残る３棟は①約7.8尺が１棟、②7.4尺前後が２棟である。桁行平均柱間は0.5尺単位でみれば、６種に分類できる。個別の検討は置くとして、全体では概ね、中・下段が広く、上段がやや狭い傾向がうかがえよう。

５．形態的な特徴 (第１表)

建物の規模に注目すると、４号建物の面積が94.12㎡と際だって大きい。構造をみると、梁間３間で下屋が２面に付く。中段では最も新しい「石垣なし」段階であり、近世民家建築の要素をみることもできよう。次いで大きい建物は、50～60㎡の一群となる。なかでも上段の11号建物は、同じ敷地では他に例がない。下屋は北・西２面につくが、北面については、柱間の中間

に小規模な柱を持つ。これは、三平Ⅱ遺跡でも確認されている(＊)。下段の19号建物も、同じく下屋に間柱を持つ。その他、同規模のものでは、中段の１号建物、５号建物、10号建物がある。これらは、それぞれの時期の主屋と考えられようが、10号建物だけは南北棟で５号建物と同時存在する可能性がある。大きいが付属建物かもしれない。また、７～９号建物も南北棟であり、東庇部の占める面積が大きいため、同じ見方はできない。敷地においても、庇部は敷地外にあり、建物内部ではなく吹きさらし部分かもしれない。これらは下段の19号建物と関連する可能性が高く、規模的にもその付属建物と考えて良いだろう。

第１表　敷地と建物の対応想定表

		分類	主軸方位	面積	桁行平均	桁行平均柱間	寸尺	梁間平均	規格・下屋（庇）	重複
	11	1	N－77°－W	60.45	9.425	2.356	7.8	5.45	１×４間・東西棟・北・西	12・13・14・15・16・17・18
上段	14		N－80°－W	21.66	5.67	1.89	6.2	2.53	１×３間・東西棟・(北)	11・12・13・15・16・17・18
	12	2	N－75°－W	－	8.16	2.04	6.7	4	１×４間以上・東西棟	11・13・14・15・16・17・18
	15		N－75°－W	29.49	6.265	2.088	6.9	4.05	１×３間・東西棟・北	11・12・13・14・16・17・18
	16	3	N－70°－W	30.89	6.37	2.123	7	4.25	１×３間・東西棟・南	11・12・13・14・15・17・18
	18		N－69°－W	34.6	8.48	2.12	7	4.08	１×４間・東西棟	11・12・13・14・15・16・17
	13	5	N－65°－W	33.8	8.945	2.236	7.4	3.43	１×４間・東西棟・北	11・12・14・15・16・17・18
	17		N－28°－E	28.8	6.605	2.202	7.3	4.36	１×３間・東西棟	11・12・13・14・15・1
中段	5	1	N－79°－W	60.68	12.04	2.408	7.9	5.04	１×５間・東西棟	２・３・４・６・７・８・９
	10		N－10°－E	53.57	8.37	2.093	6.9	4.21	１×４間・南北棟・(東)	１・２
	1	3	N－73°－W	47..83	9.46	2.365	7.8	4.65	１×４間・東西棟・北	２・10
	7		N－20°－E	49.09	7.16	2.387	7.9	4.72	１×３間・南北棟・(東)	５・８・９
	8		N－20°－E	50.96	7.42	2.473	8.2	4.77	１×３間・南北棟・(東)	５・７・９
	9		N－20°－E	46.62	7.11	2.347	7.7	4.67	１×３間・南北棟・(東)	５・７・８
	2	4	N－67°－W	34.65	6.93	2.31	7.6	5	２×３間・東西棟	１・３・４・５・10
	3		N－23°－E	30.94	6.77	2.256	7.4	4.57	２×３間・南北棟	２・４・５
	4		N－67°－W	94.12	11.66	2.332	7.7	6.69	３×５間・東西棟・北・西	２・３・５・６
	6		N－24°－E	42.56	7.97	2.657	8.8	5.34	１×３間・南北棟	４・５
下段	19	3	N－68°－W	54.64	9.23	2.308	7.6	4.86	１×４間・東西棟・北	
	20	4	N－66°－W	33.48	6.75	2.25	7.4	4.96	１×３間・東西棟	

６．敷地造成と建物群との関係 (第２表)

建物敷地として利用されたものは上・中・下、三段あり、背後の法面処理には、石垣段階と「石垣なし」段階があって、石垣の方が古いという調査時の所見がある。また、上段には石垣は見つかっていないが、削平面の西脇に集石があり、これが石垣の痕跡である可能性もあろう。削平面の方位を法面下端ラインで計測すると、上段は「く」の字状に曲がるため、東側でN－63°－W、西側でN－76°－Wを計る。ただし、東側はクランク部分の可能性もあり、数値は参考程度にとどめられよう。

中段は凸字状をなし、東側に石垣を伴っている。北側に張り出す中央部には石垣が無く、ここでの所見により石垣を伴うものが前出という所見を得たと聞く。したがって、西側も石垣段階に対応する可能性が高い(以下、古「石垣なし」段階)。方位は東側でN－62°－W、西側でN－66°－Wとなり、中央部が北に張り出してN－67°－Wを計る。

下段も中段同様、東側が石垣を伴い、西側が石垣を伴わない。方位は、東側でN－68°－W、西側でN－66°－Wを計る。特に、中段と下段で石垣が途切れる部分が、上下直線的に一致することは注目される。これは西側削平面が後出して石垣を壊したものと理解されるとともに、中段と下段が統一的な意図を持った一

連の作事であった証左となろう。同じく、「石垣なし」段階の西端が中段と上段でほぼ一致しているのも同様な位置づけと考える。

ところで、削平面と建物の対応関係は、削平範囲及び方位と、建物の平面形と主軸方位をみることで、第２表のとおり概ね想定できる。ただし、上段11号建物は「石垣なし」段階とした15号建物と重なっており、立て替えを想定させるが、規模も大きく、西辺は敷地からはみ出すため、「石垣なし」段階から除外した。

第２表　敷地と建物の対応想定表

敷地別	位置	敷地方位	建物NO	主軸方位
敷地無視	上段		13	第５類
			17	
	中段		5	第１類
			10	
石垣	中段	第４類	7	第３類
			8	
			9	
	下段	第３類	19	
古石垣なし	上段	第３類	16	不明確
			18	
	中段		1	第４類
石垣なし	上段	第５類	12	第２類
			14	第１類
			15	第２類
	中段	第４類	2	第４類
			3	
			4	
			6	
	下段		20	

７．建物の変遷案と建物配置 (第３表)

建物敷地は、造成の種類により、石垣段階と「石垣なし」段階・古「石垣なし」段階に分かれ、石垣段階の方が古いという調査時の所見がある。また、建物には敷地を無視している一群(敷地無視段階)があり、地形的に造成前の段階と考えた方が自然であろう。したがって、第２表の順がそのまま変遷に対応することとなる。問題は、建物同士の重複関係となる。

まず、造成の種類が時期変遷に置き換えられる中で、対応する主屋が問題となる。敷地別では４時期が想定され、敷地無視段階では中段の５号建物、石垣段階では下段の19号建物、古「石垣なし」段階では中段の１号建物、「石垣なし」段階では４号建物となる。ただし、敷地との関係は保留ながら、11号建物が主屋と判断できるため、大きく５時期の変遷があって、更に重複により細分されると考えられよう。

敷地無視段階上段の13・17号建物は重複し、後述する中段建物群と同じく廃材利用を根拠に13→17号建物が想定できる。しかし、同段階中段の２棟とは主軸方位が違いすぎており、安易に５号建物とは結びつけられない。

石垣段階中段の７～９号建物は、構造的にも位置的にも立て替えである。この場合、廃材を利用した立て替えを想定すれば、桁材の長さなどが自然減していくこととなるため、建物の新旧関係が決まってくる。そうすれば、８→７→９号建物の順が一応導かれる。主屋は下段の19号建物で共通するのではなかろうか。

古「石垣なし」段階の上段２棟は、規模に変化があるが、廃材利用を根拠に18→16号建物を想定することは可能であり、２時期に細分されよう。

「石垣なし」段階では、位置関係から中段４号建物を主屋とする時期に、上段15号建物、下段20号建物を当てることができる。また、同段階では４号建物に重複して、２・３・６号建物があり、前２者は立て替え判断で、２→３号建物とできるが、主屋を見いだせない。６号建物はやや大きいが南北棟で、構造も簡便である。よって、主屋不明ながら、別に２時期に細分される段階があることを示しておく。

最後に、上段の11号建物は規模も大きく、桁行平均柱間も上段では抽んでて広いため、独立した主屋級建物と見なすことができる。主軸方位は「石垣なし」段階と一致しており、この敷地を意識しながらも、規模を大きくしたために、敷地からはみ出す結果となったと考え、より最終時期に置くこともできよう。その場合、中段の２・３・６号建物との関係も視野に入ってくる。

あらためて削平面の重複関係に着目すると、下段は最も建物が少なく、使用期間は短い。時期は２時期で、19号建物は主屋となる石垣段階と、「石垣なし」段階の付属建物となる。一方、上段は８棟すべて重複関係にあり、８時期が想定される。ただし、主屋級の建物は11号建物だけで、残る７棟は中段建物群に付属する

ことが想像されよう。中段の主屋は３棟であり、上段建物群の立て替えが多いのは、構造などによる耐用年数の違いに起因するとも考えられる。

建物敷地では、主屋同士の重複は少なく、立て替えは敷地を変える傾向にある。中段では石垣段階→「古石垣なし」段階→「石垣なし」段階にわたる位置変遷が、東→西→中央へと顕著にうかがうことができる。内部構成をみると、主屋は東西棟で、付属建物１・２棟が伴って、場合により上下別の段に配置されたと考えられる。

第３表　時期別建物対応表

時期	敷地別	主屋	位置	付属建物	位置
1	敷地無視	5	中段	10	中段
2	石　　垣	19	下段	8→7→9	中段
3	古石垣なし	1	中段	18→16	上段
4	石垣なし	4	中段	15	上段
				20	下段
不明	不明	11	上段		

８．建物の変遷案と桁行平均柱間

桁行平均柱間は全体では６種類となるが、概ね①7.5～8.0尺の一群と、②6.5～7.0尺の一群に大別される。このうち、主屋としてきた建物は、例外なく①に属している。また、②についても付属建物としたものに多い傾向がある。それは上段が11号建物以外、付属建物という傾向に如実に表れる。個別の具体例では、敷地無視段階の５号建物：約7.9尺に対して、10号建物：約6.9尺と、1.0尺の違いを作っている。また、「石垣なし」段階では、４号建物：約7.7尺に対して、20号建物：約7.4尺でも僅差だがうかがえる。ただし、この7.4尺は他に３棟見られるが、立て替えによる数値変化を想定させる状況にある。

さて、以前検討した三平Ⅱ遺跡では、90-1建物の桁行平均柱間約8.3尺が建築基準尺という結論を見いだした。また、東吾妻町の奥田道下遺跡でも約8.2尺という数値を得ている（飯森2004）。一方、県央部を中心として検討を行った中では、約6.3尺と約7.4尺にピークを見いだし、同一遺跡内でも下植木壱町田遺跡のように時期変遷の中で使い分けられた可能性も確認できている（飯森2005）。

楡木Ⅱ遺跡で表れている傾向は、最も遺跡を代表する建物である主屋の傾向として、桁行平均柱間が県央部に比べて広く、これまでの吾妻地域の数値に矛盾しないが、やや小さいことが判明する。検討の中で付属建物としての性格を強調してきた上段の建物群ついては、付属建物という機能差の問題に加えて、場所の問題から所有者の違いもあろうし、時期の違いや廃材再利用による数値の変化なども否定できないだろう。

９．まとめ

本遺跡の建物群は、敷地造成を伴う点に特徴があり、これを手がかりに建物変遷をみることが可能な事例である。その結果、主屋を根拠にして、５時期程度の屋敷変遷があるものと結論できた。その際、上・中・下段に分かれる削平面にも、関連して同時存在する建物配置が想定できた。本遺跡の建物数が全20棟と比較的多いことも、居住期間の長さに起因していよう。同一時期では削平面２面程度に、主屋１棟と付属建物１・２棟を配するのは、傾斜地であることに要因があり、石垣の構築も同じであろう。本地域では、集落内や耕作地で、斜面や石捨て場処理のため、石垣を見かけることができる。日常的に石垣が用いられる地域であり、本事例も簡便な石積みであることから、中世においても特殊な用例ではないだろう。

建物では、最も後出の建物と位置づけた４号建物は梁間３間であり、建物の近世化を示す事例として注目しておきたい。また、本稿は遺構に重点を置き、出土遺物情報を考慮できなかった。今後の課題としたい。

末筆ながら、発掘調査段階で建物検討と今時報告の機会を与えてくださった飯田陽一氏、麻生敏隆氏、篠原正洋氏に感謝する次第である。

＊三平Ⅱ遺跡(飯森2007)では、縁の可能性を指摘したが、北側ばかりに用いられる傾向は、暴風や積雪対策の可能性をうかがわせる。

引用文献
飯森康広　2004「奥田道下遺跡(稲城)調査の建物を中心として」『奥田道下遺跡(稲城)』（財）群埋文
同　2005　「小規模な中世屋敷内部の建物変遷と傾向－掘立柱建物跡の桁行平均柱間を視点に－」（財）　群埋文研究紀要23
同　2007　「三平Ⅱ遺跡の建物群について」『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』（財）群埋文

第４節　楡木Ⅱ遺跡出土の灰釉陶器について

神　谷　佳　明

はじめに　楡木Ⅱ遺跡は長野原町林の吾妻川左岸、王城山南麓の谷間、標高627～654ｍに立地する縄文時代と平安時代を中心とした集落遺跡である。平安時代には31軒の竪穴住居が山麓の傾斜地に構築されているのが確認されている。竪穴住居からは土師器、須恵器、灰釉陶器などこの時期の竪穴住居としては一般的な出土遺物をみることができる。出土土器には北陸地方の影響を受けているロクロ土師器甕や須恵器椀の「三家」、「長」などと墨書されたもの、183点とこの地域では多い量の灰釉陶器が出土している点が注目されている。また、吾妻郡西部地域長野原町、草津町、六合村、嬬恋村で発掘された古代集落は２表のような状況であるので楡木遺跡の31軒はこの地域での古代集落としては比較的規模の大きな集落と言える。検出された竪穴住居の時期は出土土器から９世紀第２四半期から10世紀第３四半期に比定されるが、10世紀第１四半期に９軒となり最大規模になる。こうした様相は吾妻郡西部地域で発掘調査された集落遺跡と比較すると多くの遺跡が半世紀前後しか存続していないのに対して楡木Ⅱ遺跡では９世紀第２四半期から10世紀後半代と１世紀あまりの間存続している。この傾向は上ノ平Ⅰ遺跡でもみられることから吾妻川左岸での生業や居住環境によるものと考えられる。しかし、この地域では古代の遺跡は数少なく、ようやく資料の蓄積が始まったばかりであり楡木Ⅱ遺跡の検討はこの地域の古代史を復元する上では重要なことである。本項ではこうした点から出土した灰釉陶器を中心にこの地域における楡木遺跡について若干の考察を行うこととする。

出土した灰釉陶器　出土した灰釉陶器は総数183点である。このうち図化したのは17点で残りは小片のため未掲載となっている（１表参照）。出土した灰釉陶器は椀、皿類が圧倒的に多いが段皿、小皿、耳皿、長頸壺、小瓶、平瓶なども確認される。各器種ごとの数量は椀82点、皿26点、小皿３点、段皿３点、耳皿１点、椀または皿とみられる破片35点、長頸壺19点、小瓶２点、手付瓶、平瓶各１点、瓶類の小片10点である。これら183点のうち窯式期が判別可能なものは61点でその内訳は光ヶ丘１号窯式期７点、大原２号窯式期48点、虎渓山１号窯式期６点と大原２号窯式期のものがもっとも多い。この傾向は判別できないとした132点のうち椀や皿などでも大原２号窯式期ではとみられる破片が多くみられた。

灰釉陶器を出土した遺構は竪穴住居、土坑、溝と遺構外からである。各遺構から出土は竪穴住居が20軒から86点、土坑が５基６点、溝が１条２点、残り89点が遺構外からである。なお、竪穴住居20軒のうち、60号住居は縄文時代に比定される住居のため灰釉陶器を共伴する住居は19軒である。

灰釉陶器を出土した住居の年代と灰釉陶器の年代とは29号住居や33号住居、46号住居など10世紀前半代に比定される住居から光ヶ丘１号窯式期のものが出土しているがこれを前代のものを伝世したとみればほとんど齟齬がない出土状態である。ただし、９世紀第４四半期に比定される24号住居から大原２号窯式期の椀が出土している点に齟齬がみられるが、24号住居は10世紀第２四半期に比定される23号住居と重複していることから23号住居に共伴していたものが混入したとみれば問題はないことになる。

各住居からの出土量は１点から28点と大きな差が見られる。出土点数の内訳は1点のみの出土が５号住居など９軒、２点が46号住居など２軒、３点が16号住居など３軒、４点が24号住居と69号住居の２軒、５点が74号住居、そして18点を出土した33号住居と28点を出土した71号住居である。また、平安時代に比定される住居で灰釉陶器を共伴しなかったものは12軒である。これらの住居の年代は9世紀代が６軒（27号住居は重

複関係にある26号住居が10世紀第１四半期に比定されることから９世紀代と判断される。)、10世紀前半代が４軒、時期不明が２軒（３号住居、44号住居が該当する。この住居からは遺物の出土がみられない。ただし、44号住居は43号住居との重複関係から10世紀前半代以前と想定される。）である。この傾向は楡木Ⅱ遺跡から出土した灰釉陶器の窯式期の傾向と反比例する状況である。これの状態は９世紀代には灰釉陶器を導入できるような富豪層の存在が小さいためと思われる。そして10世紀代には住居間でその所有に差が生じている。灰釉陶器を多く出土した33号住居と71号住居は10世紀第１四半期と第２四半期に比定される住居であるが、灰釉陶器以外の土器出土量は他の住居と比較しても格段の差があるわけではない。灰釉陶器の出土量の差が楡木Ⅱ遺跡の集落内での貧富の差が生じたことによるものか、または沼田市十二遺跡16号住居や高崎市榛名町神戸宮山遺跡８号住居のような宗教祭祀者の存在が窺わせられることによるものかは判然としない。しかし、他の土器の出土状況などからみると前者の可能性が高いと想定される。

周辺遺跡との比較　吾妻郡西部地域における古代集落の様相は２表のとおりであり、灰釉陶器の出土は報告書に掲載されている量は僅かである。その中でも2007年３月に報告された下原遺跡や現在発掘調査及び整理作業が行われている上ノ平Ⅰ遺跡からは楡木Ⅱ遺跡と同様に多くの灰釉陶器が出土している。

下原遺跡は楡木Ⅱ遺跡の東南約１㎞に位置し、吾妻川左岸の下位河岸段丘に立地する。遺跡は縄文時代から中世にかけての遺構が検出され、平安時代の竪穴住居も2軒検出されている。灰釉陶器も光ヶ丘1号窯式期から虎渓山１号窯式期にかけての椀、皿を中心に144点が出土しているが、同時代の遺構に共伴するものはなくすべて遺構外からの出土である。また、隣接地には現在でも「下田観音様」として残る23,000～24,000年前の浅間山噴火によって押し流されてきた巨石が存在していることから、この巨石に係わる祭祀に伴うものと考えられた。

上ノ平遺跡は楡木Ⅱ遺跡の東約４㎞に位置し、高間山南麓に立地する。遺跡の詳細は明らかではないが立地条件や集落規模も楡木Ⅱ遺跡と同様で縄文時代と平安時代を主にする集落遺跡である。平安時代の竪穴住居からは皇朝十二銭「貞観永寶」が出土し注目された。平安時代の竪穴住居は20軒が検出され、現在調査中のものも併せると25軒前後になるようである。灰釉陶器は椀、皿、長頸壺など106点が出土している。出土した遺構は竪穴住居からでその他は遺構外である点など楡木Ⅱ遺跡と同様な傾向が窺える。

おわりに　今回、ある程度の灰釉陶器を出土した遺跡が下原遺跡と上ノ平Ⅰ遺跡の２遺跡だけであるため検討が不十分であるが、この地域における古代の様相を概観すると以下のようであったと想定される。

この地域では六合村熊倉遺跡のように山棲み集落と性格付けられるような性格を異にする集落も存在するが、多くの古代集落は律令崩壊期以降による新たな開発を目的とした集落と考えられる。律令制に基づく郷里制によって編成された集落の周辺荒廃地や未開耕地の開発は高崎市下芝五反田遺跡や沼田市戸神諏訪遺跡の例にみられるように多くが８世紀後半代に着手が認められ、９世紀から10世紀にかけて開発に携わる集落規模が大きくなり農地化が進むとみられる。この地域は古代吾妻郡で編成されたと推定される郷里制集落から距離的に離れ、地形的にも隔絶した地域のためか、楡木Ⅱ遺跡、向原遺跡などでみられるように９世紀前半より開発に着手されるようである。その開発の担い手としては地理的要因から吾妻郡域の郡司層や富豪層が想定され、開発に直接関わった人々は吾妻郡内の郷戸から裂かれたと想定される。これは各住居から出土した土器をみると一部に北陸系のものが存在しているが、大多数は上野国南部や古代利根郡の生産地の製品であることからも裏付けられる。９世紀後半代には住居軒数も増加するなど開発の手が進むが、この段階で

は各竪穴住居から出土した遺物は灰釉陶器も１点だけであったりその他の土器においても内容に大きな差をみることができないことから集落内の格差はほとんどない状態であったとみられる。その後、10世紀前半代に吾妻川右岸の集落が再編成され、楡木Ⅱ遺跡や上ノ平Ⅰ遺跡のようなまとまった規模の集落が形成される。10世紀代の竪穴住居では楡木Ⅱ遺跡33号住居や71号住居のように灰釉陶器の保有量に大きな差がみられる。こうした奢侈的な品の差は前述のように集落内に貧富の差が生じたことによるものとみられる。しかし、楡木Ⅱ遺跡や上ノ平Ⅰ遺跡のような比較的標高の高い地区には現在民家は点在するがまとまった集落が存在しないことからこの集落での生産や生業について単純な農耕生産だけでは語れないと考える。この点や地域全体の古代の様相の資料はまだ少なく十分な検討に至らなかったが、今後八ッ場ダムの建設に伴う発掘調査は数多く予定されていることから資料の増加が予想される。こうした資料の増加や新たなる発見によってさらなる解明が期待される。

引用・参考文献（文献のNO.は１表の文献NO.と一致する。）

１．飯森康広他「立馬Ⅰ遺跡　八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006
２．松原孝志『花畑遺跡』「八ッ場ダム発掘調査集成(１)　八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第２集」　2002
３．瀧川仲男「上ノ平遺跡　八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第440集」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2008
４．富田孝彦「林宮原遺跡Ⅱ　個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告書」長野原町教育委員会　2004
５．麻生敏隆他「下原遺跡Ⅱ　八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12集」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2007
６．諸田康広「長野原一本松遺跡(１)　八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002
７．小野和之「長野原一本松遺跡(２)　八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2007
８．関　俊明他「川原湯勝沼遺跡(２)　八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2005
９．白石光男「向原遺跡　長野原工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘報告書」長野原町教育委員会　1996
10. 富田孝彦「坪井遺跡Ⅱ　(仮称)長野原ショッピングセンター建設工事に伴う発掘調査報告書」長野原町教育委員会　2000
11.「横壁中村遺跡」『年報』25(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006
12. 井上唯雄「井堀遺跡　草津白根山麓における高地性集落の考古学的検討」草津町教育委員会　1974
13. 市村勝美・能登　健他「熊倉遺跡　山棲み集落の研究」六合村教育委員会　1984
14.. 松島栄治「東平遺跡調査報告書　農道6号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」嬬恋村教育委員会　1999
15. 野平伸一・宮崎誠治「干俣前田Ⅲ遺跡」干俣前田遺跡・嬬恋村教育委員会　1999
16. 大越直樹・宮崎誠治「干俣前田Ⅳ遺跡」干俣前田遺跡・嬬恋村教育委員会　2000
池田政志「高浜向原遺跡・神戸宮山遺跡・神戸岩下遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2000
小池雅典「沼田北部地区遺跡群(町田十二原遺跡)」沼田市教育委員会　1993
斉藤孝正「施釉陶器年代論」『論争・学説日本の考古学』６歴史時代　雄山閣出版　1987
斉藤孝正「東海地方の施釉陶器－猿投窯を中心に－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東３施釉陶器』古代の土器研究会　1994
高橋照彦「東国の施釉陶器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東３施釉陶器』古代の土器研究会　1994
能登健・小島敦子・洞口正史「山棲み集落の出現とその背景」『信濃』37-4　1985
三浦京子「群馬県における平安時代後期の土器様相－灰釉陶器を中心として－」『群馬の考古学』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998
綿貫邦男・神谷佳明・桜岡正信「群馬における灰釉陶器の様相について(１)－消費地からのアプローチ－」『研究紀要』９(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1992
拙稿　「第３節　下東西清水上遺跡出土の施釉陶器陶器について」『下東西清水上遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998
拙稿　「２．出土施釉陶器について」『下芝五反田遺跡－奈良平安時代以降編－』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999
拙稿　「緑釉陶器にみる古代上野国」『研究紀要』19(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2001
拙稿　「第4章まとめ　第4節下原遺跡出土の灰釉陶器」『下原遺跡Ⅱ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2007

１表　楡木Ⅱ遺跡　遺構別灰釉陶器出土量

	光ヶ丘１号窯式期			大原２号窯式期								虎渓山１号窯式期			不明								
器種／出土遺構	椀	皿	平瓶	椀	皿	小皿	段皿	耳皿	長頸壺	小瓶	手付瓶	椀	皿	小皿	椀	皿	小皿	段皿	耳皿	椀・皿	長頸壺	瓶類	
３号住居																							
４号住居																							
５号住居																					1		1
16 号住居				1											1	1							3
19 号住居																							
20 号住居					1																		1
21 号住居															1								1
22 号住居					1																		1
23 号住居																					1		1
24 号住居				2																	1	1	4
25 号住居																							
26 号住居																							
27 号住居																							
28 号住居												1											1
29 号住居		1																					1
30 号住居				1	1																1		3
33 号住居	1			1	1										11						1	3	18
34 号住居																							
41 号住居																							
42 号住居				1			1														1		3
43 号住居							1																1
45 号住居							1																1
46 号住居	1			1																			2
60 号住居												1			1						1		3
69 号住居				3				1															4
70 号住居																							
71 号住居				3	2	1									4	5				8	5		28
72 号住居																							
73 号住居																					2		2
74 号住居				1	1										4						1		7
75 号住居																							
76 号住居																							
85 区 139 号土坑				1																			1
85 区 420P				1																			1
95 区 32 号土坑				1																			1
95 区 79 号土坑				1																			1
189 号土坑					2																		2
85 区４号溝				1											1								2
２号テラス														1									1
84 区遺構外	1		1	1																	1		4
85 区遺構外				1	2							2			7	2				14		3	31
95 区遺構外	2			4	2	1						1			14	3				13	3	5	48
区不明遺構外				2	1						1				1								5
合　計	5	1	1	27	14	2	3	1			1	5		1	45	11				35	19	12	183

２表　長野原町・草津町・嬬恋村・六合村　古代集落遺跡

遺跡名		所在地	立地		標高
住居 NO.	時期	出土灰釉陶器	窯式期	摘要	文献 NO.
立馬Ⅰ遺跡		長野原町林	吾妻川左岸王城山南麓		639 ～ 649
17 区 1 号住居	10C. 前半				1
17 区 2 号住居	10C. Ⅰ	皿　2 点	大原 2 号窯式期		
17 区 4 号住居	10C. Ⅰ				
27 区 1 号住居	10C. 前半	皿　2 点	大原 2 号窯式期		
花畑遺跡		長野原町大字林字花畑・上原	吾妻川左岸最上位河岸段丘		650 ～ 680
91-1 号住居	9C. Ⅳ				2
91-2 号住居	9C. Ⅲ				
100-1 号住居	9C. Ⅳ				
林宮原遺跡Ⅱ		長野原町大字林字宮原	吾妻川左岸最上位河岸段丘		621
SI01 住居	9C. Ⅳ				4
SI02 住居	6C. 前半				
SI03 住居	10C. Ⅱ	椀	大原 2 号窯式期		
SI04 住居	不明				
SI05 住居	9C. Ⅳ				
SI06 住居	9C. Ⅲ				
下原遺跡		長野原町大字林字下原	吾妻川左岸下位河岸段丘		545 ～ 550
48 区 1 号住居	9C, Ⅲ				5
46 区 1 号住居	10C. Ⅱ				
47 区 1 号住居	5C. 後半				
楡木Ⅱ遺跡		長野原町大字林字楡木	吾妻川左岸上位河岸段丘		619 ～ 655
3 号住居					本報告書
4 号住居	10C. Ⅰ				
5 号住居	9C. Ⅲ	長頸壺			
16 号住居	10C. Ⅰ	椀２、皿	大原 2 号窯式期		
19 号住居	10C. Ⅱ				
20 号住居	10C. Ⅰ	皿　2 点	大原 2 号窯式期		
21 号住居	10C. Ⅰ	椀	大原 2 号窯式期		
22 号住居	10C. Ⅰ	皿　2 点	大原 2 号窯式期	25 号住と重複、旧	
23 号住居	10C. Ⅱ				
24 号住居	9C. Ⅳ	椀２，長頸壺２	大原 2 号窯式期		
25 号住居	10C. 代			22 号住と重複、新	
26 号住居	10C. Ⅰ			27 号住と重複、旧	
27 号住居	9C. 代か			26 号住と重複、新	
28 号住居	9C. 後半	椀	虎渓山 1 号窯式期		
29 号住居	10C. 前半	椀	光ヶ丘 1 号窯式期か		
30 号住居	10C. Ⅰ	椀、皿、長頸壺	大原 2 号窯式期		
33 号住居	10C. Ⅰ	椀 12、皿２、長頸壺、瓶類	光ヶ丘 1 号窯式期～大原 2 号窯式期		
41 号住居	9C. 代か				
42 号住居	10C. 代	椀、皿、長頸壺	大原 2 号窯式期		
43 号住居	10C. 前半	皿	大原 2 号窯式期		
44 号住居				43 号住居と重複	
45 号住居	10C. Ⅱ	皿	大原 2 号窯式期		
46 号住居	10C. Ⅱ	椀２	大原 2 号窯式期		
60 号住居	縄文時代	椀２、長頸壺	大原 2 号窯式期		
69 号住居	10C. Ⅰ	椀３，耳皿	大原 2 号窯式期		
70 号住居	9C. Ⅲ				
71 号住居	10C. Ⅱ	椀９，皿９、長頸壺５、椀・皿８	大原 2 号窯式期		
72 号住居	9C. Ⅳ				
73 号住居	10C. 代	長頸壺２			
74 号住居	10C. 代	椀５、皿、長頸壺	大原 2 号窯式期		
75 号住居	9C. Ⅱ				
76 号住居	9C. Ⅳ				

遺跡名		所在地		立地		標高
住居 NO.	時期	出土灰釉陶器	窯式期		摘要	文献 NO.
上ノ平Ⅰ遺跡		長野原町大字川原畑		高間山南麓		600m 前後
25 軒	9C. ～ 10C.	椀、皿、長頸壺など 106 点			現在、発掘調査中、整理作業も同時進行	4
長野原一本松遺跡		長野原町大字長野原字一本松		吾妻川右岸上位河岸段丘		620 ～ 640
5-4 号住居	10C. 後半				長野原一本松遺跡（１）	６・７
5-29 号住居	11C. 前葉				長野原一本松遺跡（２）	
5-32 号住居	遺物なし				長野原一本松遺跡（２）	
川原湯勝沼遺跡		長野原町大字川原湯字勝沼		吾妻川左岸中位河岸段丘		530 ～ 540
73-1 号住居	9C. Ⅳ					8
73-2 号住居	9C. Ⅲ					
73-3 号住居	9C. Ⅳ					
向原遺跡		長野原町大字長野原字向原		吾妻川右岸上位河岸段丘		637 ～ 647
A 区 1 号住居	9C. Ⅲ					9
B 区 1 号住居	9C. Ⅲ					
B 区 2 号住居	9C. 前半代				9C. Ⅱ以降か	
D 区 1 号住居	9C. Ⅲ				羽釜は混入？	
D 区 2 号住居	9C. Ⅲ					
D 区 5 号住居	9C. Ⅳ					
D 区 6 号住居	9C. Ⅲ					
D 区 7 号住居	9C. Ⅳ					
D 区 8 号住居	9C. Ⅳ					
D 区 9 号住居	9C. Ⅱ					
坪井遺跡		長野原町大字大津字坪井		吾妻川左岸上位河岸段丘		661 ～ 666
SI20 号住居	9C. Ⅲ					10
横壁中村		長野原町大字横壁字観音堂		吾妻川左岸中位河岸段丘		570 ～ 595
	9C. 代				板敷の住居が検出	11
井堀遺跡		草津町大字前口字家の前		白根山東南麓		960
住居	10C. 前半代	皿　２点				12
熊倉遺跡		六合村大字入山字松岩		白根山東麓		1200
25 軒を確認	9C. Ⅲ～Ⅳ				調査は９軒のみ	13
7 号住居	9C. Ⅲ					
8 号住居	9C. Ⅳ					
9 号住居	9C. Ⅲ	長頸壺	光ヶ丘１号窯式期			
東平遺跡		嬬恋村大字今井字峯		白根山南麓		780 ～ 790
1 号住居	10C. 前					14
2 号住居	9C. 後					
干俣前田遺跡		嬬恋村大字干俣字前田		茨木山東麓		1012 ～ 1020
Ⅲ－１号住居	9C. Ⅳ	皿	光ヶ丘１号窯式期			15・16
Ⅳ－１号住居	9C. Ⅳ					

第５節　楡木Ⅱ遺跡の墨書土器

高　島　英　之

遺物番号	出　土　遺　構	器　種	文字記入部位方向	釈　　文	備　　考
5 住－1	5号住居跡・埋土	須恵器・杯	底部内面	上	
			体部外面・正位	上	
5 住－3	5号住居跡・埋土	須恵器・杯	底部内面	上	
30住－1	30号住居跡・床直	須恵器・杯	底部内面	三	破片、「三家」か？
46住－1	46号住居跡・床直	須恵器・杯	体部内面・正位	長	
			体部外面・正位	長・奉	
46住－2	46号住居跡・埋土	須恵器・杯	底部内面	□家	破片、「御家」か？
46住－4	46号住居跡・埋土	須恵器・椀	底部内面	三家	
			体部外面・逆位	三	「三家」か？
72住－8	72号住居跡・埋土	須恵器・杯	体部外面・正位	佐	
72住－9	72号住居跡・埋土	須恵器・杯	体部外面・正位	佐ヵ	
72住－11	72号住居跡・床下	須恵器・椀	体部外面・正位	木	
			底部内面	□	
76住－2	76号住居跡・埋土	須恵器・杯	底部内面	県	
6 焼土－1	6号焼土・埋土	須恵器・杯	底部内面	三	
			体部外面・逆位	三	
平安－4	埋土	須恵器・椀	体部外面	□	破片、判読不能
平安－5	埋土	須恵器・杯	体部外面・正位	三ヵ	破片
平安－6	埋土	須恵器・椀	底部内面	□	破片、判読不能
			底部外面	□	破片、判読不能

表　楡木Ⅱ遺跡出土墨書土器一覧

出土状況　　楡木Ⅱ遺跡からは14点の墨書土器が出土している。いずれも墨書ばかりであり、刻書はない。出土状況の点からみると、46号住居跡から３点、72号住居跡から同じく３点の墨書土器が出土しているものの、同じ遺構から出土した土器に記された文字は、それぞれ異っている。全点でわずか14点にすぎないので、現状では、特定の遺構から墨書土器が集中して出土している状況ということまではいい切れない。

また、調査対象範囲が限られているとはいえ、墨書土器が出土した遺構についても、遺跡内の特定のエリアに集中しているというわけではなく、また各々の資料の、それぞれ出土した各遺構内における出土状況を検討しても、特に共通したり、あるいは際だった特色を指摘できるものはなかった。

集落遺跡から出土する墨書土器は、集落内における各種集団が、祭祀・儀礼等の行為に際して、集団の標識として特定の文字を記したものと考えられているが（平川南・天野努・黒田正典「古代集落と墨書土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』22 1989、のち同氏著『墨書土器の研究』 吉川弘文館 2000に収録、関和彦

「古代村落の再検討と村落首長」『歴史学研究』626 1991、のち、同氏著『日本古代社会生活史の研究』　校倉書房 1994に収録)、同じ文字が記された複数の土器が、ある程度特定のエリアに集中して出土するような傾向が無いことからみれば、本遺跡においては、墨書された文字から集落内の小集団の動向を窺い知ることは困難である。

文字記入の状況　５住－１と46住－４、72住－11、それに６焼土－１にはそれぞれの底部内面と体部外面に、46住－１には体部内外面の、平安－６には底部内外面のそれぞれ一箇所ずつ、計二箇所に文字が記入されているが、後はいずれも一箇所のみの記載である。46住－４の２箇所に記された文字は、同じ「三家」という文字であった可能性が高い。

文字が記入されている部位に関していえば、底部に記入されたものが多く、14点20例のうちの10例と全体の５割を占める。さらにその中の９例で底部の内面に文字が記されている。一般的に、関東地方における集落遺跡出土の墨書土器では、体部に記入される例が多いのに対し、官衙遺跡出土の墨書土器では底部外面に記されるものが多いという傾向がある。本遺跡出土の事例で言えば、出土した墨書・刻書土器の傾向としては、明らかに官衙遺跡出土の墨書土器の傾向に近いということになる。本遺跡における遺構の検出状況や遺構の配置から見れば、本遺跡に営まれた建物群を官衙ないしその関連遺跡とみることは到底考えにくい。

また、資料の全体数が少ないのに比して、２箇所に文字を記載した資料が６点と多く占めている点も、この遺跡における墨書土器の特色として特筆すべき特色である。

器種　器種の点で言えば、本遺跡出土の墨書土器は、すべてが須恵器である。この点も、墨書土器の全般的な傾向としてはやや異例であり、墨書土器の出土が特に顕著な関東地方の奈良・平安時代集落遺跡出土資料の全般的な傾向では、概して土師器の方が多いという特色がある。ただし、文字が記された土器の器種は、その遺跡出土土器全体の傾向と同様なのであり、特に、須恵器ないし土師器のどちらかが選ばれて、文字が記入されたというような事例は全く見受けられない。本遺跡においても、須恵器の流通・消費の頻度が一般に比べて格段に高かったために、文字が記入された土器のほとんどが須恵器で占められたというだけのことであろう。

実際、須恵器窯が多い遠江西部、尾張、美濃、出雲西部などの地域においては、奈良・平安時代集落遺跡出土土器の中での須恵器の占める割合の高さに比例して、墨書土器にも須恵器が多い傾向が指摘できる（藤田憲宏「墨書・刻書土器の出土傾向とその背景」吉村武彦編『古代文字資料のデーターベースの構築と地域社会の研究－平成11～13年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書』2002、高島英之「墨書・刻書土器からみた古代の出雲地域」『出雲古代史研究』15 2005、のち高島英之『古代東国地域史と出土文字資料』東京堂出版 2006に収録)。

記載内容　確実に一文字のみが記載されたと考えられるのは、５住－１の「上」という文字を一文字書いてその周りを四角く囲ったものと46住－１の体部内面に正位で「長」という文字を書いたものの２例である。ほかにも現状では一文字しか確認できない資料はあるが、欠損していたり、あるいは破片であったりして、文字数が確定できないものである。「上」も「長」も、ともに吉祥句的な文字であり、全国的な墨書・刻書土器の傾向の中で見ても平均的に多く見られる文字である。吉祥句的な文字は、氏族名・人名・地名いずれにも頻繁に使用されるため、一文字のみの記載であれば、解釈はいかようにも可能なわけであって、これらの資料に記された文字の意味や内容を確定することは難しい。

「三家」　記された文字内容からみて、最も注目されるものは46住－４の「三家」である。「三家」とはっきりと記されているのは、46住－４の底部内面のみであるが、同じ土器の体部外面に逆位で記された

「三」、30住－１の底部内面に記された「三」、72住－９の体部外面に正位で記された「三ヵ」、６焼土－１の「三」と「三」、平安－５の体部外面に正位で記された「三ヵ」などの文字は、いずれも破片であったり下方が欠損していたりして「三」と記された部分しか判明しえないが、いずれも「三家」の二文字が記されていた可能性がある。

また、46住－２は、破片ながらも底部内面に記された「家」の文字は明瞭であり、「家」と釈読して間違いはない。「家」の文字の上には縦画の墨痕がのこっており、いかに考えても「家」の上に記された文字は「三」とは読みがたい。字画からみれば「御」という文字の右側の偏付近の残画とも判断できなくはない。もし、その推測が正しいとするならば、この資料に記されているのは「御家」という語である可能性が高く、「三家」とは通音ともなり、同じ意味であった可能性が高い。

「三家」は「ミヤケ」を意味して記された可能性がある。46住－２が「御家」と釈読して良いとすれば、なおのこと、その可能性が高くなろう。古代においては、音が通用すればいかなる文字をも当てるという、現代の感覚からいえばルーズとも言える用字法が通常行われており、ミヤケについても、「三宅」・「御宅」・「三家」・「御家」・「屯倉」・「宮家」など、様々な漢字が当てられ表記されている。

「ミヤケ」と言うと、誰しもが大化前代におけるヤマト王権の直轄地としての「屯倉」を思い浮かべるところであろうが、『日本書紀』等の記事には、当地にヤマト王権の屯倉が設けられていたとする記載はない。もちろん、『日本書紀』等の文献に、現代まで記録が残っていないヤマト王権の直轄地が存在していた可能性も否定は出来ない。高崎市山名町に所在する「辛巳歳」＝681年の年紀を有する山ノ上碑文中にみえる「佐野三家」をヤマト王権の直轄地であるミヤケの一つとみる考え方は、尾崎喜左雄博士が提唱されて以来、学界からも強く支持されているが、仮に「佐野三家」が尾崎博士が言われるように推古十五年(607)の全国的なミヤケ設置時に、ヤマト王権によって設定されたものとしても、それ自体の名称は、「山ノ上碑」の碑文のみにあらわれるもので、『日本書紀』その他の史料には全く見えないものである。

そうであるから、この律令制下に吾妻郡として編成される地域に、大化前代にヤマト王権によってミヤケが設定されていたとしても、全く、おかしくはないのである。そればかりか、律令制下の吾妻郡内には、「大田郷」があるが、この「大田」という地名は、ミヤケの耕作地である「ミタ」に対応する言葉であり、古代においては、美称としての「ミ－」と「オオ－」は、しばしば通用されるから、吾妻郡に「大田」の名を冠する郷が存在していたことは、より、ミヤケ設置の可能性を示唆するとさえいえるのである。

ただ、これらの墨書土器も、いずれも９世紀代のものであり、ヤマト王権の屯倉の時代からみてもかなり新しいものである。しかしながら、かつて大化前代に設置されたミヤケの遺称が、地名として９世紀代まで受け継がれる可能性は決して少なくはない。

「ミヤケ」という語は、居宅を意味する「ヤケ」という語に、美称・尊称である「ミ＝御・美」が付されたものであり、元来が普通名詞である。

ヤマト王権の直轄地としての屯倉とは全く別に、地方官人や地方豪族の居宅が「ミヤケ」と称されたであろうし、官衙などの公的施設に対しても、尊称して「ミヤケ」と呼んだ可能性もある。また、奈良時代の貴族である「多治比真人三宅麻呂」のように、人名の一部に「三宅」の文字が使用されることもある。ゆえに、本遺跡から出土した「三家」の墨書土器についても、現段階では、大化前代におけるこの地への「ミヤケ」の設置との直接の関係については、如何とも言い難いところであると言わざるを得ないが、幅広い可能性を想定しておくべきであることには間違いない。

それにしても、律令制下の吾妻郡に存在した大田郷という地名に加え、本遺跡で「三家」と記された墨書

土器が、そのように想定できるものを含めて、複数点出土していることは、この地域の古代史像を考えていく上で、非常に示唆的である。

古代の吾妻郡に関しては、史料も少なく、また『和名抄』にみえる管轄下の郷も、「長田」・「伊参」・「大田」の三郷に過ぎないので、不明な点が少なくない。

また、当該地域においては天明三年（1783）の浅間山噴火時の泥流が厚く堆積しているなどの自然条件や、開発に伴う埋蔵文化財調査件数の問題もあって、奈良・平安時代の遺跡の調査件数や、同時代の文字資料の出土件数もまだ非常に少ないような状況である。そうした中にあって、本資料は地域における古代史像の一端に関わる重要な資料であると位置づけることが出来る。

第３表　遺物観察表

古代土器一覧表

区	遺構	番号	種類	器種				色調	残存	整形・	備考	図版	写真
84	４住	1	土師器	坏	3.9	12.2	－	7.5YR6/6 橙	口縁部～体部1/3	内面黒色研磨。外面横撫で。		13	53
84		2	土師器	甕	23.2	20.6	－	5YR5/6 暗赤褐	口縁部～胴部下部1/4	外面横撫で後縦削り、内面横撫で後斜め。		14	53
84		3	須恵器	羽釜	30.1	17.6	8.4	2.5Y7/2 灰黄	口縁部～底部2/3	外面縦削り、胴部上位が最大径。	月夜野型	12	53
84		4	須恵器	羽釜	10.2	17	－	10YR7/2　にぶい黄橙	口縁部～胴部上部1/4	外面縦削り、胴部上位が最大径。	月夜野型	14	53
84	５住	1	須恵器	坏	3.7	13.6	7	10Y8/1 灰白	口縁部～底部2/3	外面ロクロ成形。	内外面墨書	17	53
84		2	須恵器	坏	3.2	13.1	6.6	2.5Y7/2 灰黄	口縁部～底部1/2	外面ロクロ成形。		17	53
84		3	須恵器	坏	3.7	13	6.6	5Y8/2　灰白	口縁部～底部	外面ロクロ成形。	底部墨書	17	53
84		4	須恵器	高台付椀	2	－	7.2	2.5Y7/1　灰白	底部	外面ロクロ成形。高台貼り付け。		17	53
84		5	灰釉陶器	長頸壺	2.2	－	7.2	2.5Y7/2 灰黄	底部	胴部下位は回転ヘラ削り、施釉方法不明。		17	53
85	16住	1	須恵器	坏	4.5	11.6	5.6	2.5Y6/1 灰黄	口縁部～底部1/3	外面ロクロ成形。		19	53
85		2	須恵器	坏	4.7	13	5	5Y7/1　灰白	口縁部～底部1/4	外面ロクロ成形。		19	53
85		3	須恵器	坏	4.6	11.2	5.1	10YR7/1　にぶい黄橙	口縁部～底部1/4	外面ロクロ成形。		19	53
85		4	須恵器	高台付椀	3.9	－	6.6	2.5Y7/1 灰白	体部～底部1/3	外面ロクロ成形。		19	53
85		5	須恵器	羽釜	24	18.4	10.3	5Y8/2 灰白	口縁部～底部1/4	外面縦削り。	月夜野型	19	54
85		6	須恵器	羽釜	12	17.6	－	2.5Y6/3 にぶい黄	口縁部～胴部上部1/4	外面縦削り。	月夜野型	19	54
85		7	須恵器	羽釜	11.3	17	－	2.5Y7/3 浅黄	口縁部～胴部上部1/3	外面ロクロ成形。	吉井型	19	54
85		8	須恵器	羽釜	20.7	19	－	7.5YR5/4　にぶい褐	口縁部～胴部下部1/3	外面縦削り。	月夜野型	19	54
85		9	須恵器	羽釜	6.7	16.6	－	10YR6/4　にぶい黄橙	口縁部～体部			19	54
85		10	須恵器	羽釜	8.3	－	8.4	7.5YR6/4　にぶい橙	胴部下部～底部	外面縦削り。		20	54
85		11	須恵器	羽釜	13	－	8.8	10YR5/4　にぶい黄褐	胴部下部～底部1/3	外面縦削り。		20	54
85		12	須恵器	羽釜	12.7	－	7	10YR6/6　明黄褐	胴部中部～底部	外面縦削り。		20	54
85		13	須恵器	羽釜	5.1	－	8.6	10YR5/4　にぶい黄褐	胴部下部～底部1/2	外面縦削り。		20	54
85		14	須恵器	羽釜	9.4	－	10.2	10YR7/4　にぶい黄褐	胴部下部～底部	外面縦削り。		20	54
95	19住	1	須恵器	羽釜	9.2	20	－	7.5YR6/6　橙	口縁部～胴部上部	外面縦削り。	月夜野型	21	55
95		2	須恵器	羽釜	5.5	19.8	－	10YR6/4　にぶい黄橙	口縁部	外面ロクロ成形。		21	55
95	20住	1	灰釉陶器	皿	2	－	8.2	2.5Y7/1 灰白	底部1/4	施釉方法は漬掛け。	大原２号窯式期	23	55
95	21住	1	須恵器	高台付椀	8.7	－	13.5	7.5YR6/4　にぶい橙	胴部下部～底部	外面ヘラ削り。		24	55
95		2	須恵器	羽釜	13.1	19.4	－	7.5Y5/4 にぶい褐	口縁部～胴部上部1/2	外面ヘラ削り。		24	55
95		3	須恵器	羽釜	12.5	19.4	－	5Y8/2 灰白	口縁部～胴部上部1/3	外面ロクロ成形。	吉井型	24	55
95		4	須恵器	羽釜	11.6	16	－	2.5Y6/2 灰黄	口縁部～胴部上部1/3	外面ロクロ成形。	吉井型	24	55
95		5	須恵器	羽釜	8.5	19	－	2.5Y5/3 黄褐	口縁部～胴部上部1/3	外面ロクロ成形。	吉井型	24	55
95		6	須恵器	羽釜	9.2	22.4	－	2.5Y7/2　灰黄	口縁部～胴部上部	外面ロクロ成形。	吉井型	25	55
95		7	須恵器	羽釜	9.3	33.2	－	2.5Y6/2 黄褐	口縁部～胴部上部	外面ロクロ成形。	吉井型	25	55
95		8	須恵器	羽釜	7.5	－	6	2.5Y6/3 にぶい黄	胴部下部～底部	胴部下半部外面縦削り。		25	55
95	22住	1	須恵器	坏	4.2	14	6.9	2.5Y7/2 灰黄	口縁部～底部1/4	外面ロクロ成形。		26	56
95		2	須恵器	坏	5	11.8	－	2.5Y7/2 灰黄	口縁部～胴部1/4	外面ロクロ成形。		26	56
95		3	灰釉陶器	皿	3.4	14	5.9	2.5Y7/1 灰白	口縁部～底部1/2	施釉方法は漬掛け。	大原２号窯式期	26	56
95		4	須恵器	甕	8.3	20.6	－	5YR6/4　にぶい橙	口縁部～胴部上部1/4	外面横撫で後縦削り、内面横撫で。		26	56
95		5	土師器	甕	8.8	18.4	－	5YR6/4　にぶい橙	口縁部～胴部上部1/4	外面横撫で後縦削り、内面横撫で。		26	56
95	23住	1	須恵器	坏	3.5	13.7	6.3	10YR4/2　灰黄褐	完形	外面ロクロ成形。		28	56
95		2	須恵器	高台付椀	6.5	14.4	6.6	2.5Y7/1　灰白	口縁部～底部3/4	外面ロクロ成形。		28	56
95		3	須恵器	鉢	12.1	18.8	8	2.5Y8/2　灰白	口縁部～底部1/4	外面ロクロ成形。		28	56
95	24住	1	須恵器	坏	2.7	10.2	4.4	10YR6/4　にぶい黄橙	口縁部～底部1/2	外面ロクロ成形。口縁部付近に煤付着。	灯明皿か。	29	56
95		2	須恵器	坏	4.5	13.1	5	5Y8/1　灰白	完形	外面ロクロ成形。		29	56
95		3	須恵器	坏	4.4	13.2	5	5Y7/2　灰白	ほぼ完形	外面ロクロ成形。		29	56
95		4	須恵器	坏	4.1	12.9	6	5Y8/2　灰白	口縁部～底部1/2	外面ロクロ成形。		31	56
95		5	須恵器	坏	4.3	11.4	5.6	7.5Y7/2　灰白	口縁部～底部1/2	外面ロクロ成形。		31	56
95		6	須恵器	高台付椀	6.1	14.3	7.4	10Y6/1　灰	口縁部～底部2/3	外面ロクロ成形。		31	56
95		7	須恵器	高台付椀	6.1	15.2		10YR5/4　にぶい黄褐	口縁部～底部1/3　高台欠損	外面ロクロ成形。		31	56
95		8	須恵器	高台付椀	1.9	－	7.2	7.5Y8/1　灰白	底部	外面ロクロ成形。		31	56
95		9	灰釉陶器	高台付椀	2.5	－	8		底部	施釉方法は漬掛けか。	大原２号窯式期	31	56
95		10	土師器	甕	10.9	19.6	－	5YR6/8　明赤褐	口縁部～胴部上部	外面横撫で後横削り、内面横撫で。		32	56
95		11	土師器	甕	17.1	18.4	－	5YR6/8　明赤褐	口縁部～胴部	外面横撫で後横・斜め削り、内面横撫で。		32	56
95		12	土師器	甕	17.1	19	－	5YR5/6　明赤褐	口縁部～胴部	外面横撫で後横・斜め削り、内面横撫で。	ロクロ甕	32	57
95		13	土師器	甕	5.2	16.6	－	7.5YR5/4　にぶい褐	口縁部～胴部	外面横撫で後横削り、内面横撫で。		32	57
95		14	土師器	甕	14	－	－	5YR6/4　にぶい橙	胴部下半部～底部1/2	外面横撫で後斜め削り、内面横撫で。		32	57
95		15	土師器	小型台付甕	10.1	－	8.4	7.5YR6/4　にぶい橙	胴部下半部～台部1/3	外面横撫で後斜め削り、内面横撫で。		32	57
95		16	灰釉陶器	長頸壺		8.7	8	2.5Y6/2　灰黄	肩部1/2～底部	胴部下位回転ヘラ削り、施釉方法は漬掛け。		32	57
95	26住	1	須恵器	坏	12.8	3.7	5.6	2.5Y7/2　灰黄	口縁部～底部3/4	外面ロクロ成形。		34	57
95		2	須恵器	坏	14.6	4.3	7.1	2.5Y6/1　黄灰	口縁部～底部1/4	外面ロクロ成形。内外面黒色。		34	57
95		3	土師器	甕	21.3	20	－	2.5Y8/3　淡黄	口縁部～胴部2/3	外面横撫で後縦削り、内面横撫で。		34	57
95		4	須恵器	甕	6.6	14.8	－	10YR8/3　浅黄橙	口縁部～胴部上部1/6	外面ロクロ成形。		34	57
95	28住	1	須恵器	高台付椀	5	14.8	－	2.5Y7/1　灰白	口縁部～体部下位3			37	57
95		2	須恵器	高台付椀	2.4	－	7.2	7.5YR7/8　黄橙	底部1/4	内面らせん状暗文。		37	57
95		3	須恵器	羽釜	9.5	－	10	7.5Y6/6　橙	胴部下位～底部1/4	胴部下半部外面縦削り。		37	57
95	30住	1	須恵器	坏	3	－	6.4	7.5Y8/1　灰白	底部1/4	外面ロクロ成形。	墨書	40	58
95		2	須恵器	高台付椀	5.3	14.2	7	10YR7/2　にぶい黄橙	口縁部～底部1/5	外面ロクロ成形。		40	58
95		3	須恵器	高台付椀	5.9	13.6	6.2	10YR8/4　浅黄褐	口縁部～底部1/4	外面ロクロ成形。		40	58
95		4	灰釉陶器	皿	4.1	14.5	6.4	2.5Y7/1　灰白	口縁部～底部1/3　高台欠損	施釉方法は刷毛塗り。	光ヶ丘１号窯式期	40	58
95		5	土師器	甕	23.9	21.4	－	5YR6/8　橙	口縁部～胴部下部1/2	「く」の字口縁。外面ロクロ成形後斜め削り。	ロクロ甕	40	58
95		6	須恵器	羽釜	23	17.7	－	2.5Y7/1　灰白	口縁部～胴部1/3	外面縦削り。	月夜野型	40	58
95		7	須恵器	羽釜	5.8	16.8	－	2.5Y6/2　灰黄	口縁部～胴部1/3	外面縦削り。	月夜野型	40	58
95		8	須恵器	羽釜	9.9	－	8.8	7.5YR6/6　橙	胴部～底部	外面縦削り。	月夜野型	40	58
95	33住	1	灰釉陶器	皿	3.2	15	6.2	2.5Y7/1　灰白	口縁部～底部1/8	施釉方法は漬掛け	大原２号窯式期	41	58

区	遺構	番号	種類	器種				色調	残存	整形・	備考	図版	写真
95		2	須恵器	羽釜	7.7	16.8	－	2.5Y7/1　灰白	口縁部	外面縦削り。	月夜野型	41	58
84	41住	1	須恵器	高台付椀	3.2	－	8.4	2.5Y5/1　黄灰	胴部下部～底部1/3	外面ロクロ成形。		46	58
84	42住	1	灰釉陶器	段皿	2.6	14.2	7.2	2.5Y7/1　灰白	完形	施釉方法は漬掛け。	大原２号窯式期	48	58
84	45住	1	灰釉陶器	段皿	2.2	14.4	7.4	10Y7/1　灰白	口縁部～底部1/2	施釉方法は漬掛け。	大原２号窯式期	54	59
84		2	須恵器	羽釜	13.8	20	－	7.5YR6/3　にぶい褐	口縁部～胴部	外面ロクロ成形。胴部下半部縦削り。	吉井型	54	59
84		3	須恵器	羽釜	13	－	11.4	2.5Y5/2　暗灰黄	胴部下部～底部	外面ロクロ成形。胴部下半部縦削り。		54	59
84	46住	1	須恵器	坏	4.8	13.6	－	10YR8/1　灰白	底部欠損	外面ロクロ成形。	墨書	59	59
84		2	須恵器	坏	2.2	－	6.4	2.5Y7/2　灰黄	底部	外面ロクロ成形。	墨書	59	59
84		3	須恵器	坏	2	－	5.8	2.5Y8/2　灰白	底部	外面ロクロ成形。		59	59
84		4	須恵器	高台付椀	6.1	14.5	5.8	2.5YR6/3　にぶい橙	底部　高台欠損	外面ロクロ成形。		59	59
84		5	灰釉陶器	高台付椀	4.5	14.8	6.2		口縁部～底部1/2	施釉方法は漬掛け。	大原２号窯式期	59	59
84		6	土師器	甕	20.9	18.6	－	10YR7/3　にぶい橙	口縁部～胴部下部2/3	「く」の字口縁。外面横撫で後縦削り。		58	59
84		7	土師器	甕	12	21.4	－	7.5Y6/6　橙	口縁部～胴部	外面横撫で後斜め削り、内面横撫で。		58	59
95	69住	1	須恵器	坏	4.7	11.6	3.4	10YR6/3　にぶい黄橙	口縁部～底部1/3			61	59
95		2	須恵器	小型壺	10.5	10.4	6.8	5YR6/8　橙	完形			61	59
95		3	土師器	甕	10.9	19.8	－	7.5YR6/6　橙	口縁部～胴部1/4			61	59
95		4	土師器	甕	16	22.6	－	5YR5/6　暗赤褐	口縁部～胴部			61	60
95		5	須恵器	羽釜	8.7	21.8	－	7.5YR6/4　にぶい橙	口縁部～胴部上部	外面縦削り。	月夜野型	61	60
95		6	灰釉陶器	耳皿	2.9	－	－	5Y7/3　灰白				61	60
95	70住	1	須恵器	坏	3.7	13.3	7.2	5Y6/1　灰	完形	外面ロクロ成形。		62	60
95		2	須恵器	坏	3.5	13	7	10YR7/6　暗黄褐	完形	外面ロクロ成形。		62	60
95		3	須恵器	坏	3.4	12.7	7.8	2.5Y8/3　灰黄	完形	外面ロクロ成形。		62	60
95		4	須恵器	坏	3.8	13.9	6.7	2.5Y8/2　灰白	完形	外面ロクロ成形。		62	60
95		5	須恵器	高台付椀	5.7	15.6	8	2.5Y8/2　灰白	完形	外面ロクロ成形。		63	60
95		6	須恵器	高台付椀	5.4	15.3	9.1	10YR7/2　にぶい黄褐	ほぼ完形	外面ロクロ成形。		63	60
95		7	須恵器	高台付椀	6.1	16.8	7.8	2.5Y8/1　灰白	口縁部～底部1/3	外面ロクロ成形。		63	60
95		8	須恵器	高台付椀	6.2	15.2	9	10YR7/6　明黄褐	口縁部～底部2/3	外面ロクロ成形。		63	60
95		9	土師器	甕	7.2	17.8	－	5YR4/4　にぶい赤褐	口縁部～胴部上部	外面横撫で後斜め削り、内面横撫で。		62	60
95		10	土師器	甕	9.3	14	－	5YR6/6　橙	口縁部～胴部中部	外面横撫で後斜め削り、内面横撫で。		63	60
95		11	土師器	甕	10.5	－	4	7.5YR6/4　にぶい橙	胴部～底部1/4	外面横撫で後縦削り、内面斜め撫で。		63	60
95		12	土師器	台付甕	9	－	－	5YR4/6　赤褐	胴部下部～底部1/4	外面横撫で後斜め削り、内面横撫で。		63	60
95	71住	1	須恵器	高台付椀	5.4	13.5	6	2.5Y6/2　灰黄	口縁部～底部	外面ロクロ成形。		66	61
95		2	須恵器	羽釜	20.5	20	－	5YR6/6　橙	口縁部～胴部下部	外面ロクロ成形。胴部下半部縦削り。	吉井型	66	61
95		3	須恵器	羽釜	13.3	16.7	－	2.5Y7/3　浅黄	口縁部～胴部1/4	外面ロクロ成形。	吉井型	67	61
95		4	須恵器	羽釜	20.4	19	－	10YR6/3　にぶい黄橙	口縁部～胴部上部1/4	外面ロクロ成形。胴部下半部縦削り。	吉井型	67	61
95	72住	1	須恵器	高台付椀	4.2	14	6.2	10YR6/3　にぶい黄橙	坏部完形、高台欠損			71	61
95		2	須恵器	坏	4.3	13.9	7.1	10YR7/2　にぶい黄橙	完形	外面ロクロ成形。		71	61
95		3	須恵器	坏	4.2	12.8	6.8	10YR7/3　にぶい黄橙	口縁部～底部2/3	外面ロクロ成形。		71	61
95		4	須恵器	坏	5.2	15	7	7.5YR7/6　橙	口縁部～底部1/2	外面ロクロ成形。		72	61
95		5	土師器	坏	4.3	12.2	－	5YR6/8　橙	口縁部～底部1/4	底部丸底。内面黒色処理。		72	61
95		6	須恵器	坏	3.7	16	6.4	5Y7/1　灰白	口縁部～底部1/4	外面ロクロ成形。		72	61
95		7	須恵器	坏	5.4	14	－	2.5Y7/1　灰白	口縁部～体部1/3	外面ロクロ成形。		72	61
95		8	須恵器	坏	2.9	13	－	2.5Y6/1　黄灰	口縁部～体部1/3	外面ロクロ成形。	墨書	72	61
95		9	須恵器	坏	－	－	－	2.5Y7/3　浅黄	口縁部	外面ロクロ成形。	墨書	72	61
95		10	須恵器	高台付椀	4.7	14.6	6.6	2.5Y7/2　灰黄	口縁部～底部1/2	外面ロクロ成形。		72	61
95		11	須恵器	高台付椀	5.2	14.8	6.4	7.5Y5/1　灰	口縁部～底部1/2	外面ロクロ成形。	墨書	72	61
95		12	須恵器	高台付椀	4.9	14	－	2.5Y6/3　にぶい黄	口縁部～底部1/4、高台欠損	外面ロクロ成形。		72	61
95		13	須恵器	高台付椀	5.5	12.6	6	10YR6/2　灰黄褐	口縁部～底部	外面ロクロ成形。		72	61
95		14	土師器	甕	15.4	20.8	－	7.5YR7/4　にぶい橙	口縁部～胴部	外面横撫で後斜め削り、内面横撫で。		72	61
	75住	1	土師器	小型甕	4.9	12	－	7.5YR5/4　にぶい褐	口縁部1/2	外面横撫で後斜め削り、内面横撫で。		78	62
		2	土師器	甕	26	19.2	－	5YR6/8　橙	口縁部～胴部1/2	外面横撫で後斜め削り、内面横撫で。		78	62
95	76住	1	須恵器	坏	4.1	12.9	6.4	2.5Y7/3　浅黄	ほぼ完形	外面ロクロ成形。		80	62
95		2	須恵器	坏	4.9	13	5.7	2.5Y7/2　黄灰	口縁部～底部1/2	外面ロクロ成形。	墨書	80	62
95		3	須恵器	坏	4	12.8	5	2.5Y6/3　にぶい黄	口縁部～底部	外面ロクロ成形。		81	62
95		4	須恵器	坏	4	14	7.2	10YR7/8　黄橙	口縁部～底部1/5	外面ロクロ成形。		81	62
95		5	須恵器	高台付椀	6.9	19.2	－	2.5Y6/2　にぶい黄	口縁部～体部1/4、高台欠損	外面ロクロ成形。		81	62
95		6	須恵器	高台付椀	4	15.8	10	2.5Y6/2　灰黄	体部～底部	外面ロクロ成形。		81	62
95		7	土師器	小型甕	6.3	12	－	5YR5/6　明赤褐	口縁部～胴部	外面横撫で後斜め削り、内面横撫で。		81	62
95	28土	1	土師器	甕	16.6	18.3	－	7.5Y6/4　にぶい橙	口縁部～胴部	口縁横撫で。外面上位横・中位斜め削り。		174	62
95		2	須恵器	壺	6.9	－	9.4	2.5Y5/1　黄灰	胴部～底部	外面ロクロ成形。		174	62
95	35土	1	須恵器	長頸壺	7.3	－	－		頸部	外面ロクロ成形。		174	62
95	83土	1	土師器	甕	9.9	18.6	－	5YR6/6　橙	口縁部～胴部上位	口縁横撫で。外面上位横・中位斜め削り。		174	62
85	184土	1	土師器	小型甕	14.4	14	8	5YR4/1　褐灰	口縁部～底部1/2	口縁横撫で。外面上位横・中位斜め削り。		174	63
85		2	須恵器	羽釜	8.6	20.8	－	10YR6/4　にぶい黄橙	口縁部～胴部1/4	外面ロクロ成形。		174	63
85	185土	1	土師器	小型甕	8.6	15	－	7.5YR6/4　にぶい橙	口縁部～胴部	口縁横撫で。外面上位横・中位斜め削り。		174	63
85	189土	1	須恵器	坏	3.1	13.6	5.4	7.5Y5/4　にぶい褐	口縁部～底部2/3	外面ロクロ成形。		174	63
85		2	須恵器	高台付椀	3.2	11	7.5	2.5Y8/3　淡黄	体部～底部	外面ロクロ成形。		174	63
85		3	須恵器	高台付椀	3.7	－	6.8	2.5Y6/3　にぶい黄	体部～底部	外面ロクロ成形。		174	63
85		4	灰釉陶器	皿	3.3	14.4	7.3	2.5Y6/2　灰黄	口縁部～底部2/3	施釉方法は刷毛塗り。	光ヶ丘1号窯式期	174	63
85		5	灰釉陶器	皿	2.8	13.1	7.1	2.5Y6/3　にぶい黄	口縁部～底部	施釉方法は刷毛塗り。	光ヶ丘1号窯式期	174	63
85		6	須恵器	大甕	7.4	50.2	－	2.5Y6/1　黄灰	口縁部	外面ロクロ成形。		175	63
84	6焼土	1	須恵器	坏	4.3	12.6	5	2.5YR7/1　灰白	口縁部～底部1/3	外面ロクロ成形。	墨書	175	63
	一括	1	須恵器	坏	4.1	12.7	6.2	10YR7/1　灰白	口縁部～底部1/3	外面ロクロ成形。		175	63
		2	須恵器	坏	4	13.2	5.6	5Y8/1　灰白	口縁部～底部1/3	外面ロクロ成形。		175	63
		3	須恵器	坏	3.7	10.6	－	5Y6/1　灰	口縁部～体部1/4	外面ロクロ成形。		175	63
		4	須恵器	高台付椀	－	－	－	7.5Y8/2　灰白	口縁部	外面ロクロ成形。	墨書	175	63
		5	須恵器	高台付椀	－	－	－	7.5Y8/2　灰白	口縁部	外面ロクロ成形。	墨書	175	63

区	遺構	番号	種類	器種				色調	残存	整形・	備考	図版	写真
		6	須恵器	高台付椀	－	－	6.4	5Y7/2　灰白	底部	外面ロクロ成形。	墨書	175	63
		7	須恵器	高台付椀	5.5	13	－	2.5Y8/2　灰白	口縁部～体部	外面ロクロ成形。		175	63
		8	須恵器	高台付椀	3.4	－	－	7.5YR6/4　にぶい橙	体部～底部　高台欠損	外面ロクロ成形。	大原２号窯式期	175	63
		9	須恵器	高台付椀	3.7	－	6.6	5Y6/1　灰	体部～底部	外面ロクロ成形。	大原２号窯式期	175	63
		10	灰釉陶器	皿	2.2	11.6	6.6	5Y7/1　灰白	口縁部～底部	施釉方法は漬掛け。	大原２号窯式期	175	63
		11	灰釉陶器	皿	3	12.8	6.4	2.5Y7/1　灰白	口縁部～底部	施釉方法は漬掛けか。		175	63
		12	灰釉陶器	皿	2.2	10.4	7.7	2.5Y7/1　灰白	体部～底部	底部糸切り痕が残る。施釉方法は漬掛け。		175	63
		13	灰釉陶器	高台付椀	5	－	7.8	2.5Y6/1　黄灰	体部～底部			175	63
		14	緑釉陶器	高台付椀	3	－	7.2	10YR5/4　にぶい黄褐	体部～底部			175	63
		15	土師器	小型甕	5.1	11.8	－	10YR6/4　にぶい黄橙	口縁部～胴部			175	64
		16	土師器	甕	6.5	19	－	7.5YR5/4　にぶい褐	口縁部～胴部上位			175	64
		17	須恵器	甕	8.2	19	－	2.5Y8/2　灰白	口縁部～胴部			176	64
		18	土師器	甕	8.9	20.2	－	10YR7/2　にぶい黄橙	口縁部～胴部			176	64
		19	須恵器	羽釜	5.1	－	7.4	10YR5/2　灰黄褐	胴部～底部1/4			176	64
		20	灰釉陶器	手付瓶	7.4	－	16	2.5Y8/1　灰白	胴部下位～底部1/8	胴部下位は回転ヘラ削り、施釉方法不明。	大原２号窯式期か	176	64

中近世陶磁器一覧表

通番	区	出土	種　類	器　種	口径	器高	底径	重さ			備考	図版	写真
1	85	2テ	軟質陶器	かわらけ	6.8	1.8	5.2		10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部～底部		179	66
2	85	2テ	磁器	椀	15	2.5	－		N6/　灰	口縁部	龍泉窯系青磁　13世紀中	179	66
3	85	F-25	磁器	椀	－	3.1	－		N6/　灰	体部	同安窯系青磁　12世紀	181	67
4	95	表採	磁器	丸皿	9.0	2.0	－		2.5Y5/1　黄灰	口縁部～体部	志野　17世紀	181	67
5	95	E-7	磁器	椀	－	1.8	4.0		2.5Y6/1　黄灰	底部	龍泉窯系青磁　13世紀	181	67
6	95	１垣	陶器	椀	－	5.8	4.2		5YR6/2　灰褐	体部～底部1/4	肥前	181	67
7		表採	磁器	茶椀	7.2	4.7	3.1		N8/1　灰白	口縁部～底部1/3	肥前	181	67
8	84	T-6	磁器	茶椀	8.2	4.2	－		N8/1　灰白	体部1/4	肥前	181	67
9			陶器	椀	－	5.9	4.2		2.5Y5/2　黄灰	体部～底部	肥前	181	67
10	85	G-24	陶器	丸皿	11.8	2.7	8.0		2.5Y6/3　にぶい黄	口縁部～底部	志野、円錐ピン痕 17世紀	181	67
11	84	U-5	磁器	皿	12.6	3.8	7.6		N8/1　灰白	口縁部～底部	肥前・波佐見	181	67
12	85	E-24	陶器	内禿皿	－	0.9	7.5		2.5Y6/2　灰黄	底部	瀬戸・美濃　灰釉　大窯16世紀	181	67
13	85	G-24	陶器	おろし皿	－	1.4	10.0		2.5Y7/2　灰黄	底部	古瀬戸　13～14世紀	181	67
14	85	A-11	陶器	御神酒徳利	－	2.8	3.8		N8/1　灰白	体部～底部	瀬戸・美濃系　19世紀中	181	67
15		表採	須恵器	四耳壺	－	4.1	－		7.5Y4/1　灰	肩部	時期不明（古代～中世？）	181	67
16	85	H-25	軟質陶器	内耳鍋	26.7	7.8	－		7.5Y6/4　にぶい橙	口縁部～胴部	信濃型	181	67
17	85	F-21	軟質陶器	内耳鍋	30.0	9.5	－		10YR4/4　褐	口縁部～胴部	信濃型	181	67
18	85	F-21	軟質陶器	内耳鍋	25.0	7.5	－		7.5YR4/3　褐	口縁部～胴部	信濃型	182	67
19	85	G-18	軟質陶器	内耳鍋	26.0	5.1	－		7.5YR6/6　橙	口縁部～胴部	信濃型	181	67
20	85	F-21	軟質陶器	内耳鍋	－	8.0	－		7.5YR6/6　橙	胴部	信濃型	181	67
21	85	7竪	軟質陶器	内耳鍋	－	9.4	－		7.5Y6/3　にぶい褐	胴部	信濃型	182	67
22	85	F-25	軟質陶器	内耳鍋	－	8.2	－		7.5Y6/6　橙	胴部	信濃型	182	67
23	85	F-21	軟質陶器	内耳鍋	－	7.8	－		7.5Y5/4　にぶい橙	胴部	信濃型	182	67
24	95	80坑	陶器	甕	－	7.3	14.0		10Y5/3　にぶい黄橙	胴部～底部	高台底部に布目痕。	182	67
25	84	表採	土製品	泥面子	2.2	2.0	0.8	1.8	7.5Y6/3　にぶい褐	完形	山伏	185	68
26		表採	土製品	泥面子	3.2	2.9	1.0	8.0	7.5Y6/3　にぶい褐	完形	天狗	185	68

石製品一覧表

通番	区	出土	番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材		図版	写真
1	85	E-17	24	紡錘車	4.7	4.0	1.5	52.8	滑石	台形状。刻文字	176	64
2			25	砥石	4.3	4.0	2.2	61.0	砥沢石	主に２面。	176	64
3	85	H-25	26	砥石	9.0	2.9	2.0	66.6	砥沢石	主に２面。	176	64
4	95	表採	2	砥石	7.5	2.7	3.0	48.0	砥沢石	主に１面。	177	64
5	84	41住	3	石版	2.8	3.7	0.2	3.0	頁岩	破片。線状痕。	178	65
6	85	31土	1	石臼	38.0	－	12.4	7784.0	粗粒輝石安山岩	下。６分割６本。	178	65
7	85	46土	1	石臼	30.6	22.0	9.5	1961.0	粗粒輝石安山岩	上。６分割６本。	179	65
8	85	147土	1	石鉢	14.1	23.2	20.0	1614.0	粗粒輝石安山岩	口縁部破片	179	65
9	85	500ピ	1	石鉢	5.7	23.0	－	75.0	粗粒輝石安山岩	内外面削り	179	66
10	85	２テ	3	石鉢	6.6	－	27.0	490.0	粗粒輝石安山岩	台部分のみ。	179	66
11	95	１垣	1	石臼	31.0	22.6	12.1	2739.0	粗粒輝石安山岩	上。６分割６本。	180	66
12	85	２テ	4	石鉢	8.1	24.2	－	526.0	粗粒輝石安山岩	口縁部～胴部	180	66
13	85	２テ	5	磨り石	16.1	11.8	11.2	1931.0	粗粒輝石安山岩	磨り１面。	180	66
14	95	L-2		石版	2.4	2.5	0.4	2.4	頁岩	破片。線状痕。	182	67
15	84	U-6		石版	4.9	3.1	0.2	6.5	頁岩	１側面残存。	182	67
16	85	G-22		石鉢	9.7	－	25.4	371.0	粗粒輝石安山岩	胴部～台部分。	182	67
17	85	H-23		磨り石	8.0	10.2	5.0	285.0	粗粒輝石安山岩	磨り１面。	183	67
18	85	A-11		磨り石	19.0	15.2	9.6	1492.0	粗粒輝石安山岩	磨り１面。	183	68
19	85	G-21		磨り石	12.2	9.4	7.7	566.0	粗粒輝石安山岩	磨り１面。	183	67
20	85	H-22		石臼	30.0	22.0	10.2	2696.0	粗粒輝石安山岩	上。６分割５本。	184	68
21		表採	1	砥石	5.7	2.7	1.4	32.0	砥沢石	４面。被熱。	185	68
22		表採	2	砥石	4.9	3.5	0.9	18.4	泥岩	両面薬研溝状。	185	68
23		表採	3	砥石	8.3	4.1	2.4	135.0	砥沢石	３面。切出面。	185	68

金属製品一覧表

通番	区	出土	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ		図版	写真
1	84	4住	5	鉄滓	4.5	5.8	2.2	56.3	椀形。	13	53
2	84	5住	6	刀子	10.6	1.8	0.5	19.7	先端部及び茎部破損。	17	53
3	85	16住	15	火打金	2.6	5.6	0.4	11.2	完形。	20	54
4	95	21住	9	釘	4.7	1.0	0.6	4.3	先端部破損。	25	55
5	95	21住	10	鉄滓	4.0	5.7	1.9	45.0	椀形。	25	55
6	95	21住	11	鉄滓	7.4	7.6	1.6	109.4	椀形。	25	55
7	95	21住	12	鉄滓	9.3	8.8	2.2	303.0	椀形。	25	55
8	95	23住	4	紡錘車	6.3	4.5	0.6	21.8	軸の両端が欠損。	28	56
9	95	24住	17	鎌	16.0	4.2	2.5	81.6	やや幅広の刃部。	32	57
10	95	24住	18	小札？	10.2	2.2	0.2	20.9	板状。両端に穴、片方に通し針金状付着。	33	57
11	95	33住	3	刀子？	2.4	4.4	0.7	9.7	刃が無く、やや厚め。	41	58
12	84	41住	2	？	2.9	3.1	0.3	5.3	軸が欠落？	46	58
13	84	45住	4	刀子	18.0	1.3	0.5	23.1	茎部破損。	54	59
14	95	70住	13	刀子	8.8	1.7	0.6	18.8	先端部及び茎部破損。	63	60
15	95	70住	14	鉄斧	9.7	4.7	0.3	147.6	ほぼ完形。板状で柄の差込部分を折り曲げ。	63	60
16	95	70住	15	鉄滓	8.6	11.9	3.5	420.5	椀形。	63	60
17	84	75住	3	鉄鏃	10.5	2.4	0.9	10.0	ほぼ完形。	78	62
18	85	114土	1	刀子	4.3	1.8	4.5	5.9	先端部及び茎部破損。	174	63
19	95	I-5	21	釘？	7.6	1.2	1.0	24.8	両端欠損。	176	64
20	95	J-7	22	鉄滓	6.8	9.0	4.4	280.5	椀形。	176	64
21	84	X-8	23	鉄滓	9.7	10.7	3.9	489.2	椀形。	176	64
22	95	表採	1	鉄鏃	6.7	0.8	0.4	9.6	先端部及び茎部破損。	177	64
23	85	26土	1	古銭	2.4	－	0.1	2.2	中国・北宋・皇宋通寶（1039）	178	65
24	85	39土	1	古銭	2.3	－	0.1	2.6	中国・北宋・淳化元寶（990）	178	65
25	84	71土	1	吸い口	7.7	1.1	－	6.3	羅宇としての竹が残存。	178	65
26	85	155土	1	古銭	－	－	－	1.6	破損のため不明。「○○元○」	178	65
27	85	1溝	5	鉄鍋	5.8	－	0.2	11.9	口縁部～胴部上位の破片。	178	65
28	84	4溝		釘	2.4	0.5	0.4	1.9	頭部から半分のみ。	178	65
29	85	565ビ		釘	4.2	0.5	0.3	1.6	ほぼ完形。先端湾曲。	179	66
30	85	325ビ		古銭	2.4	－	0.1	2.3	中国・北宋・皇宋通寶（1039）	179	66
31	85	2テラ		古銭	1.8	－	0.1	2.4	日本・昭和・五十銭（1947）	179	66
32	85	2テラ		鎌？	3.9	10.2	0.6	25.7	茎部～刃部？やや反る。	179	66
33	85	2湧		吸い口	8.1	1.1	1.0	13.2	羅宇としての竹が残存。	179	66
34	85	3テ		刀子	7.3	1.3	0.4	8.0	先端部及び茎部破損。	180	66
35	85	3テ		刀子	7.3	1.1	0.4	7.8	先端部及び茎部破損。	180	66
36	85	3テ		古銭	－	－	－	2.3	中国・北宋・皇宋通寶（1039）	180	66
37	85	3テ		焼印？	4.3	4.0	1.3	23.6	何本かの鉄の集まり？	180	66
38	84	V-17		鉄鍋	5.1	4.3	0.3	12.2	胴部から底部にかけての一部。	183	67
39	85	C-8		雁首	3.4	－	1.2	2.8	羅宇としての竹が残存。	183	67
40	95	J-17		刀子？	3.0	1.0	0.4	3.2	茎部破片？	183	67
41	95	J-17		留め具	2.1	2.2	1.4	6.1	尾錠のツク棒部分？	183	68
42	85	H-25		錐？	7.0	0.7	0.7	4.7	ねじり部分とその両端。	183	68
43	85	A-16		古銭	2.4		0.1	3.6	中国・北宋・天聖通寶（1023）	183	68
44	85	A-16		古銭	2.4		0.1	2.1	中国・北宋・天聖通寶（1023）	183	68
45	85	G-25		古銭	2.3		0.1	2.0	中国・北宋・治平通寶（1064）	183	68
46	85	H-19		古銭	2.4		0.1	2.3	中国・北宋・元豊通寶（1078）	184	68
47	85	A-16		古銭	2.2		0.1	2.8	中国・明・洪武通寶（1368）	184	68
48	85	A-16		古銭	2.4		0.1	3.3	朝鮮・李朝・朝鮮通寶（1423）	184	68
49	95	J-7		古銭	2.6		0.1	2.9	日本・江戸時代・文久通寶（1863）	184	68
50		表採		鉄鍋	－	－	0.5	34.5	底部から胴部への立ち上がり部分破片。	184	68
51	84	表採	6	古銭	2.2		0.1	1.4	日本・江戸時代・寛永通宝（1636）	185	68
52	95	表採	8	古銭			0.1	0.5	破損のため不明。「○○元○」	185	68
53	84	表採	7	古銭	2.4		0.1	2.0	日本・江戸時代・寛永通宝（1636）	185	68

第５章　自然科学分析

第１節　楡木Ⅱ遺跡の土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

群馬県域とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求める事で、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知る事ができるようになっている。

そこで、年代が不明な土層が認められた楡木Ⅱ遺跡においても地質調査、テフラ検出分析、さらに屈折率測定を行って示標テフラの層位を求め、土層の年代に関する資料を収集する事になった。調査分析の対象となった地点は、調査区東の基本土層断面である。

２．土層の層序

基本土層断面では、下位より黄褐色土（層厚５cm以上，Ⅵ層）、黄色軽石を多く含む暗褐色土（層厚32cm，軽石の最大径13mm，Ⅴ層）、黄色軽石を多く含む色調が特に暗い暗褐色土（層厚11cm，軽石の最大径11mm）、黒褐色土（層厚28cm，以上Ⅳ層）、比較的粗粒の黄色軽石を多く含む黒褐色土（層厚23cm，軽石の最大径18mm，Ⅲ層）、細粒の黄色軽石を多く含む暗褐色土（層厚14cm，軽石の最大径５mm，Ⅱ層）が認められる（図１）。

これらのうち、発掘調査ではⅤ層から縄文時代早期、Ⅳ層から縄文時代前期、Ⅲ層から縄文時代中期前半、さらにⅡ層から縄文時代中期から平安時代にかけての遺物が検出されている。

３．テフラ検出分析

（１）分析試料と分析方法

テフラの特徴とその降灰層準を把握するために、基本的に５cmごとに採取された試料23点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は、次の通りである。

１）試料10gを秤量。

２）超音波洗浄により泥分を除去。

３）80°Cで恒温乾燥。

４）実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

（２）分析結果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。基本土層断面では、試料19と試料13をのぞくいずれの試料からも軽石を検出する事ができる。これらのうち、試料23～22、試料16～15、試料12～10には、無色透明の比較的細粒の軽石（最大径2.3mm）が少量ずつ含まれている。試料18～17や試料14には黄白色軽石（最大径12.1mm）が含まれており、とくに試料18に多く認められる。試料９や試料６には、灰色の軽石（最大径1.5mm）が少

量含まれている。試料８より上位では黄灰色軽石（最大径5.9mm）が含まれており、とくに試料７より上位に多い。試料３より上位では、黄灰色軽石のほかに、灰白色軽石（最大径2.4mm）が含まれている。

火山ガラスとしては、いずれの試料からもスポンジ状や繊維束状に発泡した軽石型ガラスが認められる。試料３より上位では、若干ながらその量が減少する。試料23や試料14～13には、ほかに無色透明のバブル型ガラスが認められる。

４．屈折率測定

（１）測定試料と測定方法

テフラとの同定精度を向上させるために、土層観察やテフラ検出分析の結果、テフラがより多く含まれていると考えられる試料18、試料７、試料２の３点を対象に屈折率測定を行う事にした。測定は、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による。

（２）測定結果

屈折率測定の結果を表２に示す。試料18に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は、1.502-1.505である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.707-1.711である。試料７に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は、1.503-1.508である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.706-1.708である。試料２に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は、1.515-1.5211である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.706-1.710である。

５．考察－示標テフラとの同定

試料18（Ⅴ層）に含まれるテフラについては、その層位や特徴などから約1.1万年前*1に浅間火山から噴出したと考えられている浅間総社軽石（As-Sj，早田，1990，1996）に由来する可能性が高い。また試料７（Ⅲ層）に含まれるテフラについては、とくに斜方輝石の屈折率から、約5,400年前*1に浅間火山から噴出した浅間六合軽石（As-Kn，早田，1996）に由来する可能性が考えられる。さらに、試料３に含まれるテフラについては、斜方輝石の屈折率から、約4,000～5,000年前*1に浅間火山から噴出した浅間Ｄ軽石（As-D：荒牧，1968，新井，1979，町田・新井，1992，早田，1996）に由来する可能性が考えられる。さらに火山ガラスの屈折率を合わせると、ほかに４世紀中葉*1に浅間火山から噴出した浅間Ｃ軽石（As-C，荒牧，1968，新井，1979）が含まれている可能性も指摘される。

実際には、野外での軽石の産状などから、Ⅴ層はAs-Sj、Ⅲ層はAs-Kn、Ⅱ層はAs-DおよびAs-Cの、それぞれのテフラの降灰後に形成された土層と考えられる。

６．まとめ

楡木Ⅱ遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、下位より浅間総社軽石（As-Sj，約1.1万年前*1）、浅間六合軽石（As-Kn，約5,400年前*1）、浅間Ｄ軽石（As-D，約4,000～5,000年前*1）、浅間Ｃ軽石（As-C，４世紀中葉*2）に由来する可能性が高いテフラ粒子が検出された。

註

*１　放射性炭素（^{14}C）年代．

*２　現在では４世紀を遡るとする説が有力になっているようである（たとえば，若狭，2000）。しかし、具体的な年代観が示された研究報告例はまだない。現段階においては「３世紀後半」あるいは「３世紀終末」と考えておくのが妥当なのかも知れないが、土器をもとにした考古学的な年代観の変更については、考古学研究者による明確な記載を待ちたい。

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，p.41-52.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法－研究対象別分析法」，p.138-148.

荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報，no.45，65p.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

早田　勉（1990）群馬の自然と風土．群馬県史通史編１，p.39-129.

早田　勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴－とくに御岳第１テフラより上位のテフラについて－．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，７，p.256-267.

若狭　徹（2000）群馬の弥生土器が終わるとき．かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く－古墳が成立する頃の土器の交流」，p.41-43.

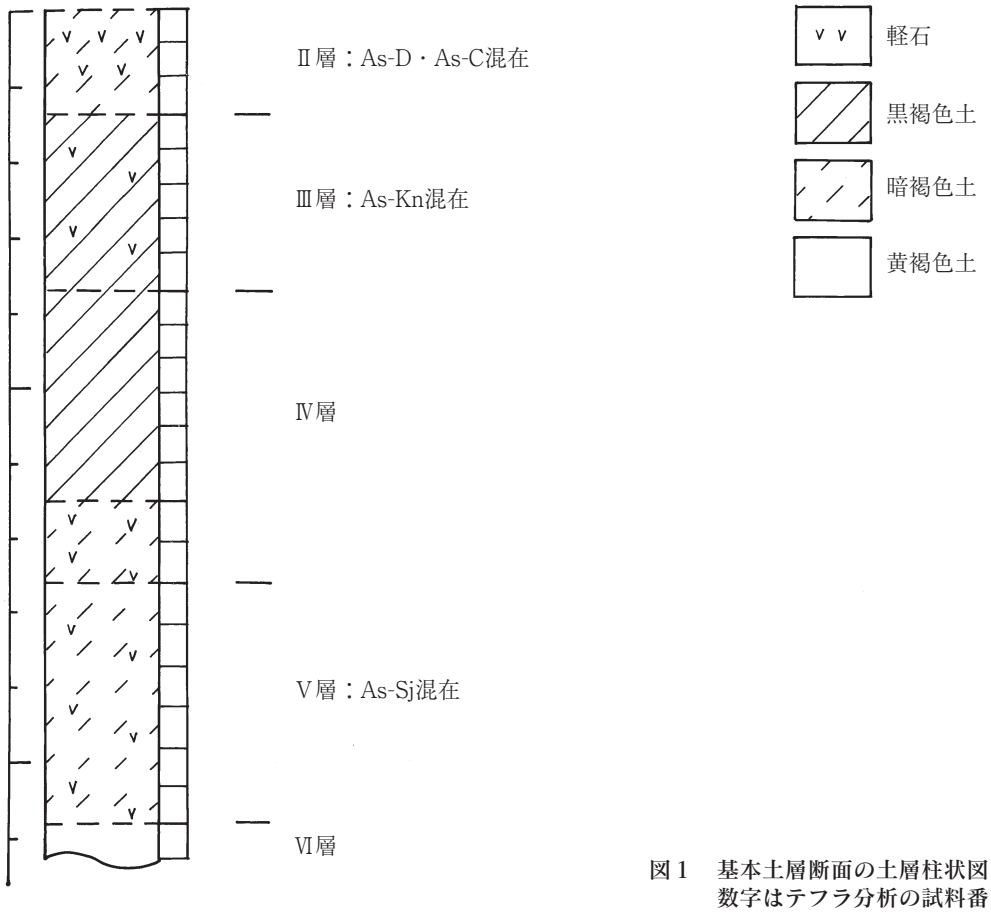


図１　基本土層断面の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番

表１　楡木Ⅱ遺跡におけるテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
調査区東	1	＋＋	黄灰＞灰白	4.1,1.9	＋	pm	透明
	2	＋＋	黄灰＞灰白	3.1,1.8	＋	pm	透明
	3	＋＋	黄灰＞灰白	5.9,2.4	＋	pm	透明
	4	＋＋	黄灰	5.0	＋＋	pm	透明
	5	＋＋	黄灰	5.0	＋＋	pm	透明
	6	＋＋	黄灰，灰	2.9,1.5	＋＋	pm	透明
	7	＋＋	黄灰	3.1	＋＋	pm	透明
	8	＋	黄灰	2.1	＋＋	pm	透明
	9	＋	灰	1.5	＋＋	pm	透明
	10	＋	透明	1.3	＋＋	pm	透明
	11	＋	透明	1.4	＋＋	pm	透明
	12	＋	透明	2.1	＋＋	pm	透明
	13	－	－	－	＋＋	pm＞bw	透明
	14	＋	黄白	12.1	＋＋	pm＞bw	透明
	15	＋	透明	1.1	＋＋	pm	透明
	16	＋	透明	2.2	＋＋	pm	透明
	17	＋	黄白	2.8	＋＋	pm	透明
	18	＋＋	黄白	3.1	＋＋	pm	透明
	19	－	－		＋＋	pm	透明
	20	＋	黄白	8.1	＋＋	pm	透明
	21	＋	黄白	2.7	＋＋	pm	透明
	22	＋	透明	2.1	＋＋	pm	透明
	23	＋	透明	2.3	＋＋	pm＞bw	透明

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，＋：少ない，-：認められない．最大径の単位は，mm．bw：バブル型，pm：軽石型．

表２　屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス（n）	重鉱物	斜方輝石（γ）
調査区東	2	1.515-1.521	opx＞cpx	1.706-1.710
調査区東	7	1.503-1.508	opx＞cpx	1.706-1.708
調査区東	18	1.502-1.505	opx＞cpx	1.707-1.711

屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による．opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石．

第２節　楡木Ⅱ遺跡における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

２．試料

分析試料は、調査区東の基本土層断面から採取された計６点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μm以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

４．分析結果

（１）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、キビ属型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）、ウシクサ族Ｂ（大型）

〔イネ科－タケ亜科〕

クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

（２）植物珪酸体の検出状況

Ⅵ層（試料６）では、クマザサ属型やミヤコザサ節型が比較的多く検出され、ウシクサ族Ａなども少量検出された。Ⅴ層（試料５）でもおおむね同様の結果であるが、同層ではキビ族型やヨシ属が出現している。Ⅳ層（試料３、４）では、ヨシ属が大幅に増加しており、クマザサ属型やミヤコザサ節は減少している。また、同層ではヒエ属型、ススキ属型、およびコナラ属などの樹木起源が出現している。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別する事は困難である（杉山ほか，1988）。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低い事から、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。Ⅲ層（試料２）からⅡ層（試料１）にかけても、おおむね同様の結果であるが、ヨシ属は減少傾向を示している。おもな分類群の推定生産量によると、Ⅵ層～Ⅴ層ではクマザサ属型が優勢、Ⅳ層～Ⅱ層ではヨシ属が優勢であり、とくにⅣ層ではヨシ属が圧倒的に卓越している事が分かる。

５．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

浅間総社軽石（As-Sj，約1.1万年前）混のⅤ層およびその下位のⅥ層の堆積当時は、クマザサ属（ミヤコザサ節を含む）などのササ類を主体としてウシクサ族なども見られる比較的乾燥した環境であったと推定される。Ⅳ層の堆積当時は、ヨシ属などが繁茂する湿地の環境であったと考えられ、遺跡周辺にはコナラ属などの落葉樹が分布していたと推定される。浅間六合軽石（As-Kn，約5,400年前）混のⅢ層から浅間Ｃ軽石（As-C，４世紀中葉）混のⅡ層にかけては、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはススキ属やチガヤ属、ヒエ属なども生育していたと推定される。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－．考古学と自然科学，20，p.81-92.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

表１　群馬県、林楡木Ⅱ遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	基本土層断面 1	2	3	4	5	6
イネ科	Gramineae (Grasses)							
ヒエ属型	*Echinochloa* type		7	15		7		
キビ族型	Paniceae type		21	22	14	28	20	
ヨシ属	*Phragmites* (reed)		56	82	142	176	7	
ススキ属型	*Miscanthus* type			22	27			
ウシクサ族Ａ	Andropogoneae A type		49	45	27	28	20	7
ウシクサ族Ｂ	Andropogoneae B type					7		
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)							
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)		14	7	14	21	95	116
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*			7			68	102
未分類等	Others		7	15	14	7	54	44
その他のイネ科	Others							
表皮毛起源	Husk hair origin			15	7			22
棒状珪酸体	Rod-shaped		133	268	277	91	74	80
茎部起源	Stem origin					21	20	15
未分類等	Others		370	410	446	373	344	363
樹木起源	Arboreal							
多角形板状(コナラ属など)	Polygonal plate shaped (*Quercus*)		14		7			
その他	Others				7			
植物珪酸体総数	Total		670	909	980	760	702	748

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

ヒエ属型	*Echinochloa* type	0.59	1.25		0.59		
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	3.52	5.17	8.96	11.10	0.43	
ススキ属型	*Miscanthus* type		0.28	0.34			
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)	0.10	0.06	0.10	0.16	0.71	0.87
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*		0.02			0.20	0.30

タケ亜科の比率（％）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*						
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*						
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)	100	71	100	100	78	74
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*		29			22	26

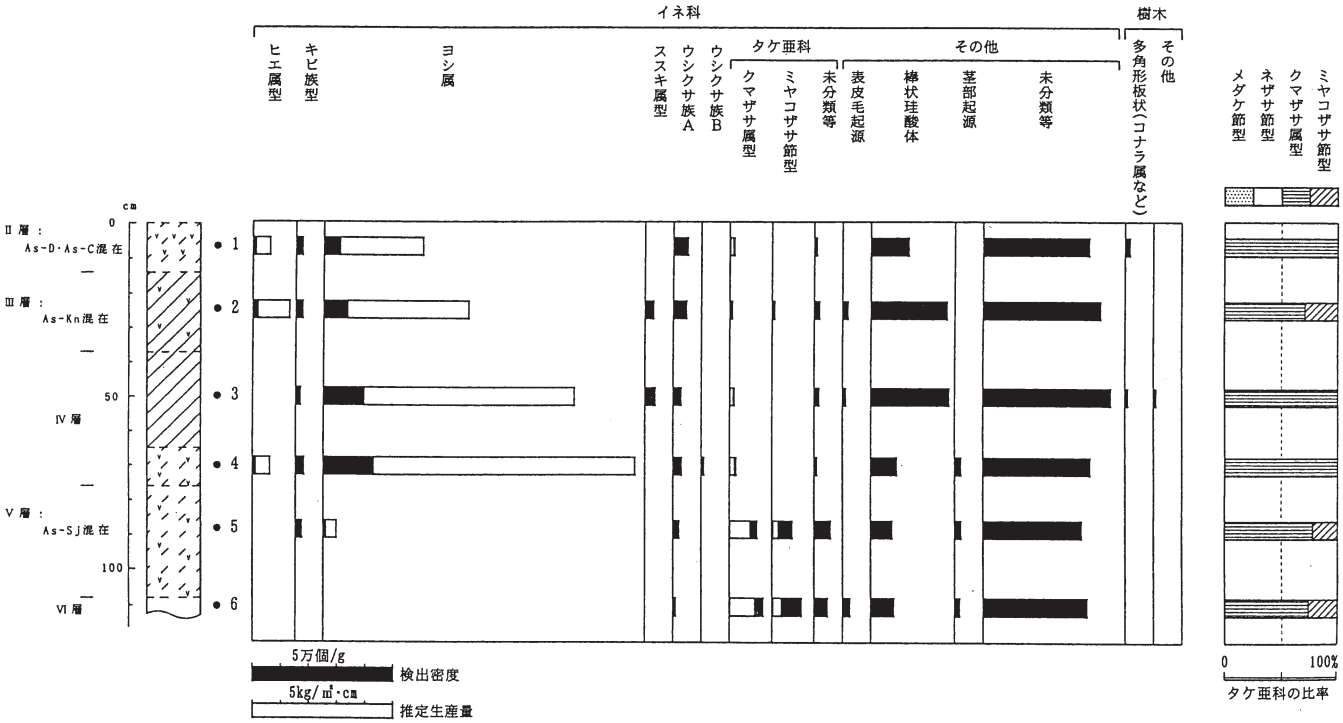
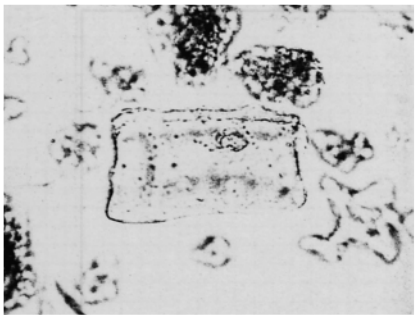


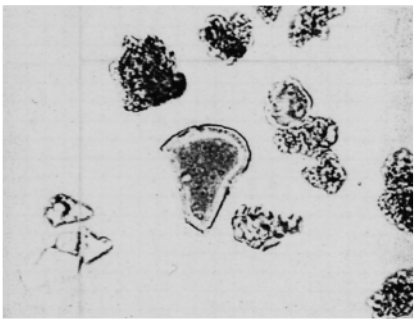
図１　林楡木Ⅱ遺跡、基本土層断面における植物珪酸体分析結果



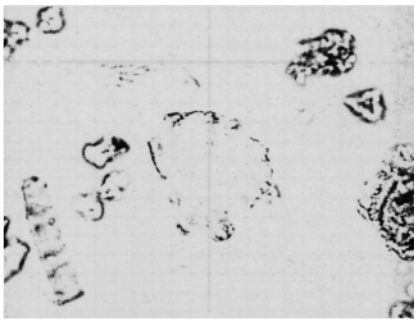
ヒエ属型
試料１

キビ族型
試料１

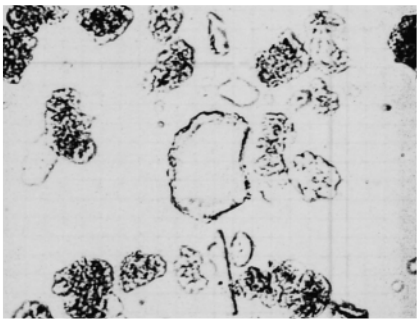
ヨシ属
試料１



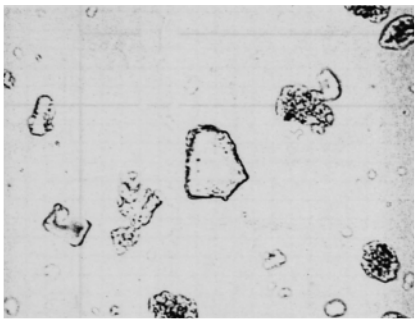
ウシクサ族Ａ
試料５



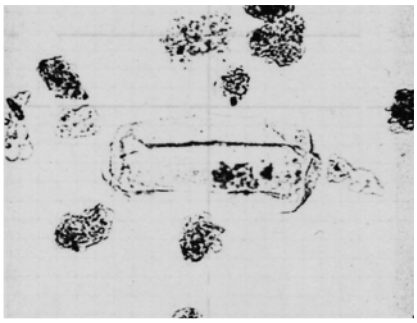
クマザサ属型
試料６



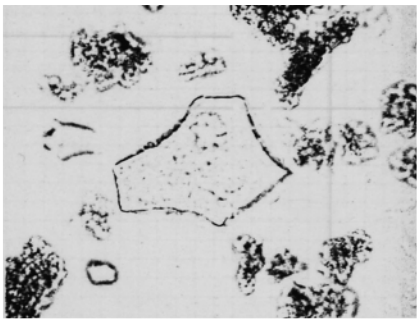
クマザサ属型
試料６



ミヤコザサ節型
試料６



イネ科の茎部起源
試料５



多角形板状（コナラ属など）
試料１

植物珪酸体の顕微鏡写真　―――― 50μm

第３節　楡木Ⅱ遺跡の号竪穴住居居跡（平安時代）出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

１．はじめに

当遺跡は長野原町に所在し、標高640m前後に位置する。ここでは、当遺跡の平安時代の号竪穴住居居跡（21号竪穴住居･23号竪穴住居･24号竪穴住居）から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。これらは産状から、主に竪穴住居建築材であったと考えられる試料である。24号竪穴住居は発掘から、壁板と推定される板材が多く残る竪穴住居である。24号竪穴住居は９世紀、24号竪穴住居の北側半分に重複する23号竪穴住居は10世紀と比定されている。３つの竪穴住居とも平安時代の竪穴住居である。

２．炭化材樹種同定の方法

先ず、炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で分類群のおおよその目安をつける。アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリなどは横断面の管孔配列が特徴的であるため実体顕微鏡下で同定可能であるが、それ以外の分類群については３方向の破断面（横断面・接線断面・放射断面）を走査電子顕微鏡で観察し同定を決定した。走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を５mm角以下の大きさに整え、直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

３．結果

各試料ごとの同定結果を、表１に示した。表２では、取り上げ後の状態からではあるが炭化材の横断面の観察をもとに、木取りや形状ごとに検出された樹種の試料数を比較した。これは、木取りや形状により使用樹種に違いがあったのかを探るためである。図１は21号竪穴住居、図２は24号竪穴住居の炭化材産状と同定樹種を示した。

各号竪穴住居居跡の検出樹種

21号竪穴住居の６試料からは、コナラ節４点･クリ２点･ニレ属１点が検出された。C8の試料からは、コナラ節とクリが検出された。C8の位置は、クリのC15と近い事からその破片が飛散して混じったか、クリとコナラ節の材が近い位置関係で使われていたと思われる。

23号竪穴住居の１試料は、クリであった。

24号竪穴住居の55試料（53点と補足試料２点）からは、ケンポナシ属21点･コナラ節16点･クリ９点･ニレ属７点･トネリコ属２点･イヌシデ節２点･クマシデ節１点･キハダ１点の合計8分類群（樹種）が検出された。試料数より合計数が多いのは、C11･C39･C46･C60の４試料から２種類が検出されたためである。

33号竪穴住居から検出された樹種はすべて落葉広葉樹であり、特にコナラ節･クリ･ニレ属は３つの竪穴住居の間で共通性の高い樹種であった。

炭化材残存形状と樹種の選択性

樹芯部から半分に割れたかまたは割って使用していたかは、取り上げられた炭化材の観察では判断できなかったが、取りあえず「半割り」とした炭化材と丸木の炭化材の樹種は、圧倒的にコナラ節が多かった。そ

の他には、クリ･ニレ属･トネリコ属が各１～２点ほど見られた。いずれも樹芯部に近い材であり、直径５cm前後の太さの材が多いようであった。

炭化材の横断面の形状や年輪線などを観察して、樹芯から外れた部位であり、分割して使われたと推測されるものや、板状や角形に近い炭化材は、24号竪穴住居では圧倒的にケンポナシ属が多く、次ぎにクリ･ニレ属が多く、イヌシデ節にも見られた。21号竪穴住居では板状がニレ属、23号竪穴住居では角形がクリ属であった。そしてこれらの炭化材は、ほとんどが柾目方向の面で奇麗に割れていた。コナラ節では、このような形状の材は観察されなかった。

同定された樹種の材組織記載

クマシデ属クマシデ節　*Carpinus sect. Distegocarpus* カバノキ科　図版１　1a-1c（№49）

小型の管孔が単独または２～数個が放射方向に複合して分布し、年輪界では管孔が小さくなり放射方向に多数が複合する散孔材。放射組織がやや多く集合している部分が見られた。道管の壁孔は小型で交互状に密在し、穿孔は横棒数が10本前後の階段穿孔である。放射組織はほぼ同性、１～２細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口は大きく開く。

クマシデ属イヌシデ節　*Carpinus sect. Eucarpinus*　カバノキ科　図版１　2a-2c（№53）

横断面は前述のクマシデ節と同様であるが、道管の穿孔は単一で内腔には膜状のチロースが発達し、明瞭ならせん肥厚がある。道管の穿孔が単一である事から、イヌシデ節と同定した。

コナラ属コナラ節　*Quercus.* sect. *Prinus* ブナ科　図版１　3a-3c（№40）

年輪の始めに大型の管孔が主に１層配列し、晩材部は薄壁で孔口は角形な小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースが発達している。放射組織は単列と細胞幅の広い複合放射組織状がある。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科　図版２　4a-4c（№56）

年輪の始めに大型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースが発達している。横断面はコナラ節と似るが、放射組織は単列のみで複合状や集合状の放射組織はない。

ニレ属　*Ulmus* ニレ科　図版２　5a-5c（№３）

年輪の始めに大型の管孔が１～３層配列し、その後は小型の管孔が多数集合して波状･接線状に配列している環孔材。道管の穿孔は単一、小道管の内腔にらせん肥厚がある。放射組織は同性、主に８～10細胞幅で細胞高も高い。ケヤキの材組織と似るが、軸方向に連結する大型の結晶細胞が多い事からニレ属と同定した。

キハダ　*Phellodendron amurense* Rupr.　ミカン科　図版２　6a-6c（№41）

年輪の始めに大型の管孔が数層配列し、年輪界付近では複合した多数の極めて小型の管孔が塊状･斜状･接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は小さく交互状、穿孔は単一、年輪界付近の道管や小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は同性、主に３～４細胞幅で整った紡錘形、細胞高もほぼ同じ高さである。

ケンポナシ属　*Hovenia* クロウメモドキ科　図版３　7a-7c（№55）

年輪の始めに中型の管孔が数層あり除々に径を減じてゆき、年輪界は単独または放射方向に２～３個が複合した小型で厚壁の管孔が分布し、周囲状･翼状の柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、１～４細胞幅、上下端に方形細胞・直立細胞がある。

トネリコ属　*Fraxinus* モクセイ科　図版３　8a-8c（№39）

中型～大型の管孔が２～３層配列し、晩材部は単独または２～３個が複合した小型で厚壁の管孔が散在する環孔材。周囲状柔組織が顕著である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、１～２細胞幅である。

４．まとめ

24号竪穴住居からは、ケンポナシ属･コナラ節･クリ･ニレ属･トネリコ属･イヌシデ節･クマシデ節･キハダの合計８分類群の落葉広葉樹が検出された。21号竪穴住居と23号竪穴住居から検出されたコナラ節･クリ･ニレ属は、24号竪穴住居でも多く検出された樹種である事から、平安時代の当遺跡では竪穴住居建築材として利用度の高かった樹種と思われる。

コナラ節の材は直径５cm前後で、樹芯部の材と判るものが多く、半割りや丸木で利用されたものが多かった。一方、板状･角状や分割材などには、ケンポナシ属･クリ･ニレ属･イヌシデ節が見られた。24号竪穴住居では特にケンポナシ属が多く検出され、壁板に利用されていたようである。ケンポナシ属･クリ･ニレ属･イヌジデ節の炭化材は、柾目方向（放射方向）に力を加えると木理に沿って非常に割れ安いので、恐らく伐採して来た丸太においても数箇所にクサビを打ち込み叩く事などの方法でも、板状の材を作り安いと思われる。コナラ節の材も、放射方向に割り安く板材として利用される樹種であるが、今回の調査では板状での利用は見られなかった。

表２　林楡木Ⅱ遺跡の住居跡出土炭化材の木取り･形状別の利用樹種比較
（２種類が検出された試料があるため、合計数は試料数より多い。）

樹種	21住			23住	24住			合計
	半割り 丸木	柾目板状	破片など	分割材	半割り みかん割り 丸木	柾目板状 角形 分割材	破片など	
コナラ節	4				12		4	20
クリ	1		1	1		5	4	12
ケンポナシ属						16	5	21
ニレ属		1			1	3	3	8
トネリコ属					2			2
イヌシデ節						1	1	2
クマシデ節							1	1
キハダ							1	1
合計	5	1	1	1	15	25	19	67

表１　林楡木Ⅱ遺跡（YD4-09）の住居跡出土炭化材樹種同定結果

	遺構名	遺物	樹種	木取り	断面形状など	（φ：直径　r: 半径） （放射方向×接線方向）	時期
1	21 住	C5	コナラ節	半割り	芯部あり	φ :4.0cm 11 年輪	平安時代
2	21 住	C6	コナラ節	半割り？	芯部に近い	φ :4.5cm	平安時代
3	21 住	C11	ニレ属	柾目	板状破片	厚み 2.0cm	平安時代
4	21 住	C8	コナラ節	丸木	芯持ち	φ :4.5cm	平安時代
			クリ		破片	1 年輪幅 7mm 前後	平安時代
5	21 住	C13	コナラ節	半割り	芯部あり	φ :3.5cm	平安時代
6	21 住	C15	クリ	半割り	芯部あり	φ :4.5cm 8 年輪	平安時代
7	23 住	C4	クリ		分割材破片 角形に近い	2.0 × 1.5cm	平安時代
8	24 住	C1	クリ		分割材破片 角形に近い	3.0 × 4.0cm	平安時代
9	24 住	C2	ケンポナシ属		分割材破片 角形に近い	4.5 × 2.0cm	平安時代
10	24 住	C3	トネリコ属	半割り？	半分に刳れた跡あり？	3.0 × 2.5cm	平安時代
11	24 住	C5	ケンポナシ属		分割材破片		平安時代
12	24 住	C6	ケンポナシ属		分割材破片		平安時代
13	24 住	C7	コナラ節	みかん割り	芯部	r:2.0cm	平安時代
14	24 住	C8	ニレ属		破片	4.5 × 2.5cm	平安時代
15	24 住	C9	ケンポナシ属	柾目	板状破片	5.5 × 3.0cm 46 年輪	平安時代
16	24 住	C10	ニレ属		分割材破片		平安時代
17	24 住	C11	クリ		分割材破片 角形に近い		平安時代
			ケンポナシ属		分割材破片 角形に近い		平安時代
18	24 住	C12	クリ	柾目	板状破片	2.0 × 1.0cm	平安時代
19	24 住	C14	ケンポナシ属	柾目	板状破片		平安時代
20	24 住	C15	ケンポナシ属	柾目	破片　刳れた跡あり？	8.0 × 5.0cm 54 年輪	平安時代
21	24 住	C17	ニレ属		分割材破片	4.0 × 2.5cm	平安時代
22	24 住	C19	ケンポナシ属	柾目	板状破片	2.0 × 1.0cm	平安時代
23	24 住	C20	ケンポナシ属	柾目	板状破片		平安時代
24	24 住	C21	コナラ節	半割り	芯あり	φ :3.5cm 18 年輪	平安時代
25	24 住	C22	コナラ節	みかん割り	芯部	r:2.0cm 11 年輪	平安時代
26	24 住	C23	コナラ節	みかん割り？	破片		平安時代
27	24 住	C24	コナラ節	みかん割り？	芯部		平安時代
28	24 住	C25	コナラ節	みかん割り	芯あり	r:3.5cm	平安時代
29	24 住	C28	ケンポナシ属		薄片		平安時代
30	24 住	C30	コナラ節	みかん割り	芯あり	r:2.5cm 20 年輪	平安時代
31	24 住	C36	ケンポナシ属	柾目	分割材破片	4.0cm で 31 年輪	平安時代
32	24 住	C38	クリ		破片	年輪幅広い	平安時代
33	24 住	C39	クリ		分割材破片 角形に近い	2.5 × 2.5cm	平安時代
			イヌシデ節		分割材破片 角形に近い	3.0 × 3.5cm	平安時代
34	24 住	C40	ニレ属		分割材破片	5.5 × 2.5cm	平安時代
35	24 住	C41	ケンポナシ属	柾目	分割材破片		平安時代
36	24 住	C42	コナラ節	みかん割り		r:3cm 29 年輪	平安時代
37	24 住	C43	コナラ節	みかん割り	芯部	r:3cm 30 年輪	平安時代
38	24 住	C44	コナラ節		分枝部分	φ :3.5cm	平安時代
39	24 住	C45	トネリコ属	半割り？	芯部	r:2.5cm 26 年輪	平安時代
40	24 住	C46	コナラ節		芯部破片		平安時代
			ケンポナシ属		破片		平安時代
41	24 住	C47	キハダ		破片		平安時代
42	24 住	C48	ケンポナシ属	柾目	板状破片	2.5 × 1.5cm 9 年輪	平安時代
43	24 住	C49	コナラ節		破片		平安時代
44	24 住	C50	コナラ節	半割り	芯あり	φ :3.5cm 11 年輪	平安時代
45	24 住	C51	コナラ節	みかん割り	芯あり	r:3.5cm 18 年輪	平安時代
46	24 住	C52	コナラ節		芯部破片	φ :4.5cm 22 年輪	平安時代
47	24 住	C53	コナラ節	みかん割り	芯部	r:2.0cm 13 年輪	平安時代
48	24 住	C54	クリ		角形破片	2.5 × 3.5cm	平安時代
49	24 住	C56	クマシデ節		破片		平安時代
50	24 住	C57	ニレ属	みかん割り		r:5.0cm 23 年輪	平安時代
51	24 住	C58	ケンポナシ属		破片	r:3.5cm 30 年輪	平安時代
52	24 住	C59	ニレ属		破片 ぬか目材		平安時代
53	24 住	C60	クリ		破片		平安時代
			イヌシデ節		破片		平安時代
54	24 住	C66	ニレ属		破片 ぬか目材	r:4.0cm	平安時代
55	24 住	C67	ケンポナシ属	柾目～斜め	分割材	r:3.5cm 19 年輪	平安時代
56	24 住	C68	クリ		破片	4.0 × 7.0cm 25 年輪	平安時代
57	24 住	C69	ケンポナシ属		破片		平安時代
58	24 住	C71	ケンポナシ属	柾目～斜め	破片	1.5 × 3.5cm	平安時代
59	24 住	C73	クリ		破片		平安時代
60	24 住	C74	ケンポナシ属	柾目	破片	4.5 × 2.0cm 38 年輪	平安時代
補足	24 住	C18	ケンポナシ属		破片		平安時代
補足	24 住	C4	ケンポナシ属		分割材破片 角形に近い	3.5 × 3.0cm	平安時代

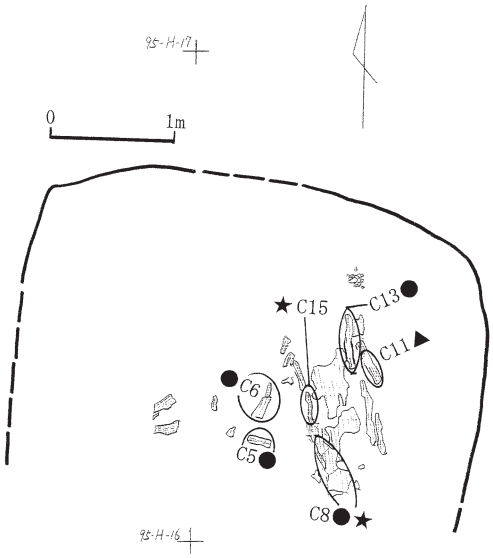


図１　林楡木Ⅱ遺跡21号住竪穴住居（平安時代）出土炭化材の産状と同定樹種
●:コナラ節　★:クリ　▲:ニレ属

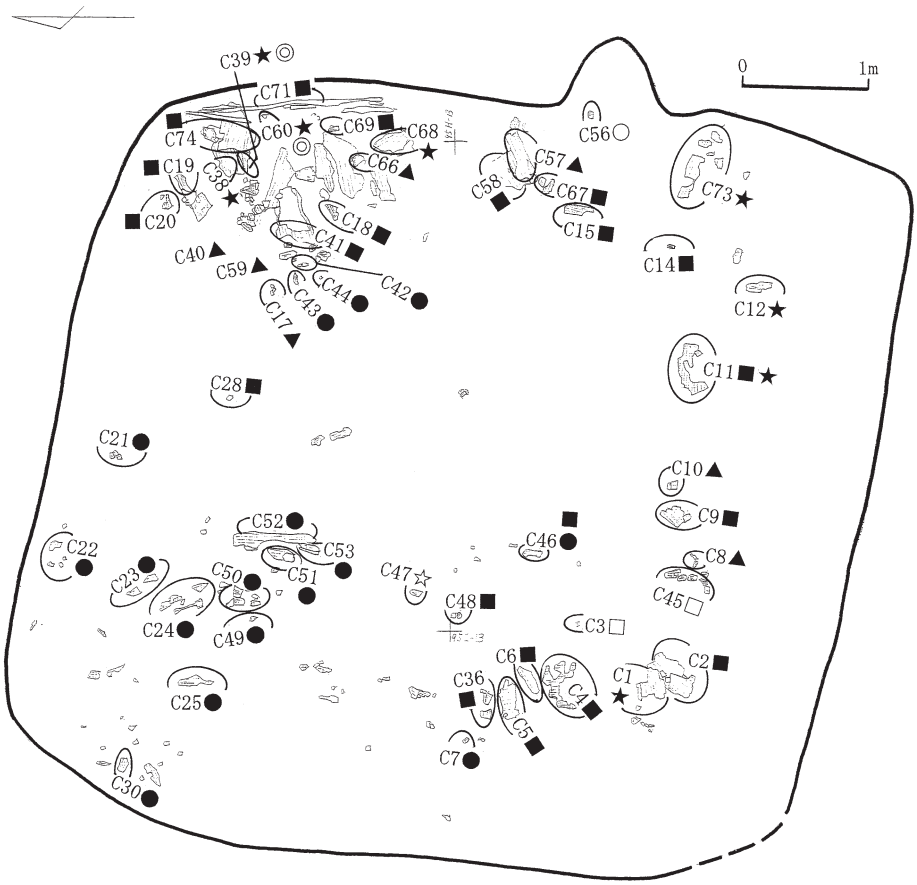
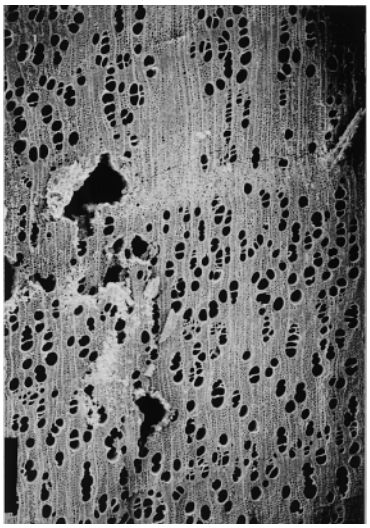


図２　林楡木Ⅱ遺跡24号住竪穴住居（平安時代）出土炭化材の産状と同定樹種
●:コナラ節　★:クリ　▲:ニレ属　■:ケンポナシ属
◎:イヌシデ節　○:クマシデ節　□:トネリコ属　☆:キハダ

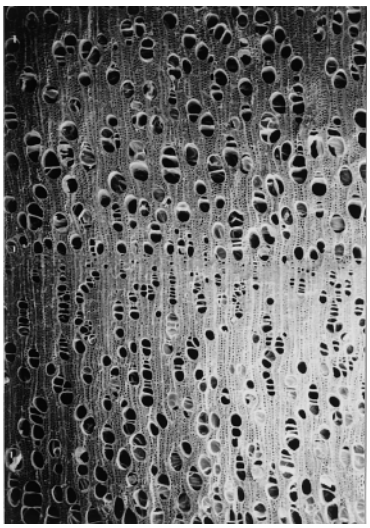
図版１　林楡木Ⅱ遺跡住居跡出土炭化材樹種



1a クマシデ属クマシデ節（横断面）
No.49　bar：1.0mm

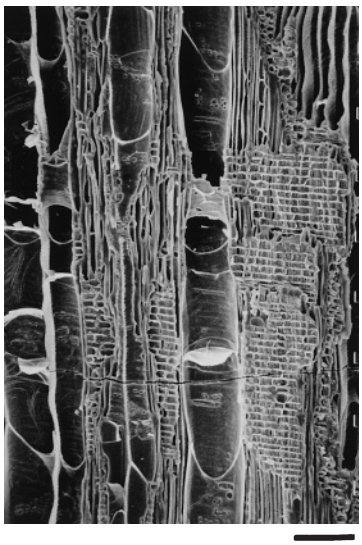
1b クマシデ属クマシデ節（接線断面）
No.49　bar：0.1mm

1c クマシデ属クマシデ節（放射断面）
No.49　bar：0.1mm

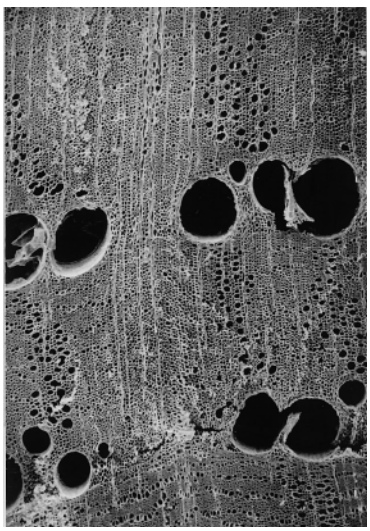


2a クマシデ属イヌシデ節（横断面）
No.53　bar：1.0mm

2b クマシデ属イヌシデ節（接線断面）
No.53　bar：0.1mm



2c クマシデ属イヌシデ節（放射断面）
No.53　bar：0.5mm

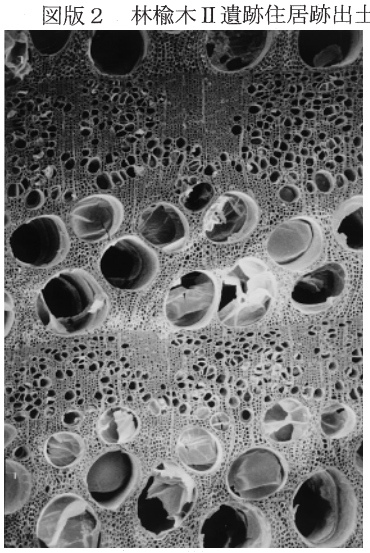


3a コナラ属コナラ節（横断面）
No.40　bar：0.5mm

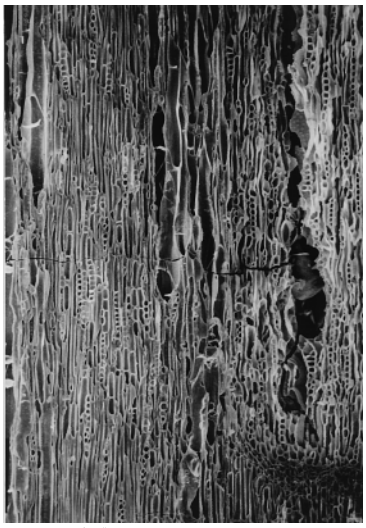
3b コナラ属コナラ節（接線断面）
No.40　bar：0.5mm

3c コナラ属コナラ節（放射断面）
No.40　bar：0.5mm

図版２　林檎木Ⅱ遺跡住居跡出土炭化材樹種

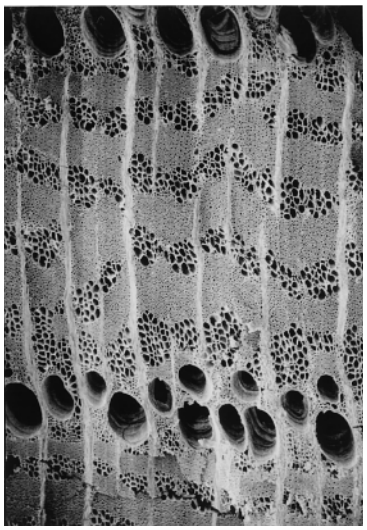


4a クリ（横断面）
No.56　bar：1.0mm



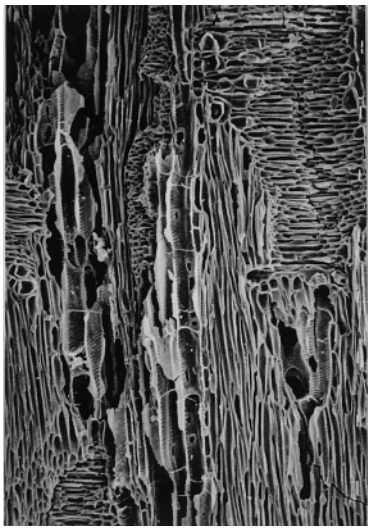
4b クリ（接線断面）
No.56　bar：0.5mm

4c クリ（放射断面）
No.56　bar：0.5mm

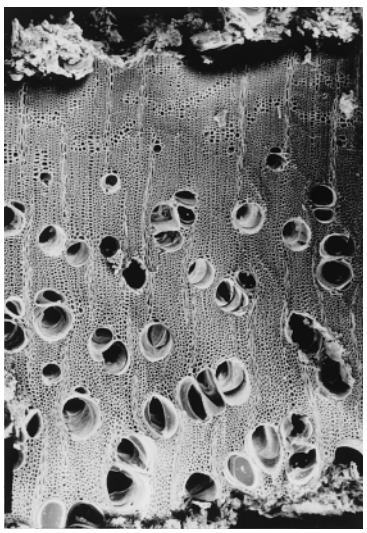


5a ニレ属（横断面）
No.3　bar：1.0mm

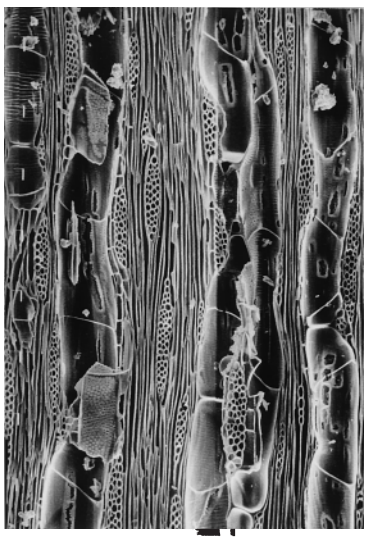
5b ニレ属（接線断面）
No.3　bar：0.5mm



5c ニレ属（放射断面）
No.3　bar：0.5mm



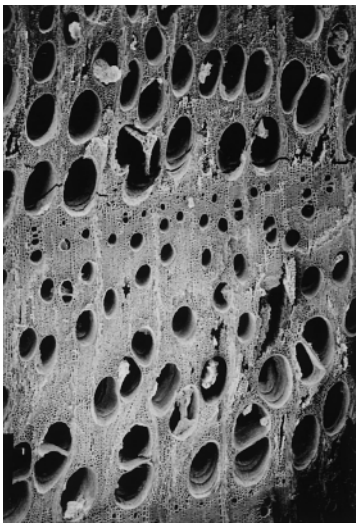
6a キハダ（横断面）
No.41　bar：0.5mm



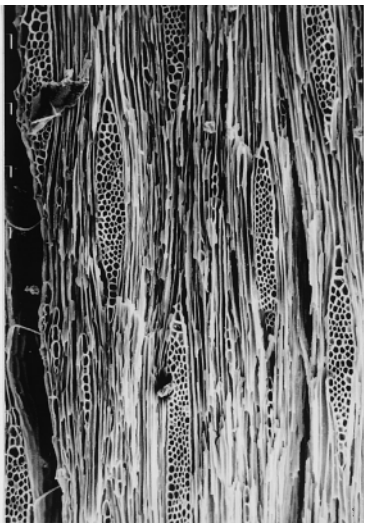
6b キハダ（接線断面）
No.41　bar：0.5mm

6c キハダ（放射断面）
No.41　bar：0.1mm

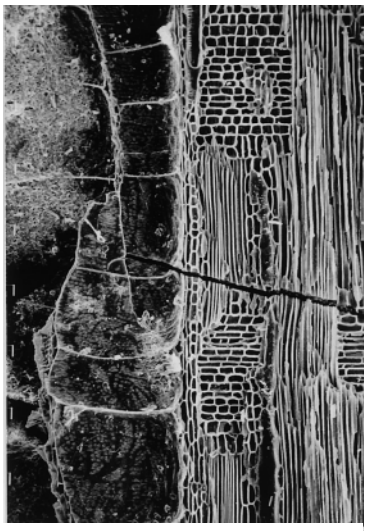
図版３　林楡木Ⅱ遺跡住居跡出土炭化材樹種



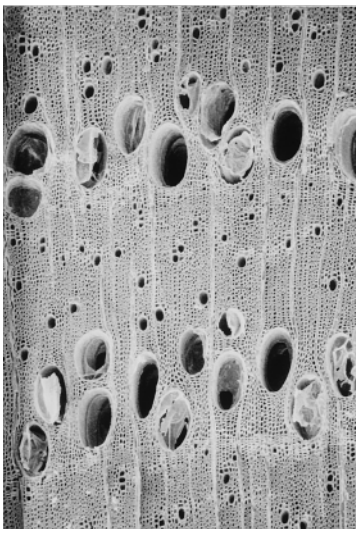
7a ケンポナシ属(横断面)
No.55　bar:0.1mm



7b ケンポナシ属(接線断面)
No.55　bar:0.5mm

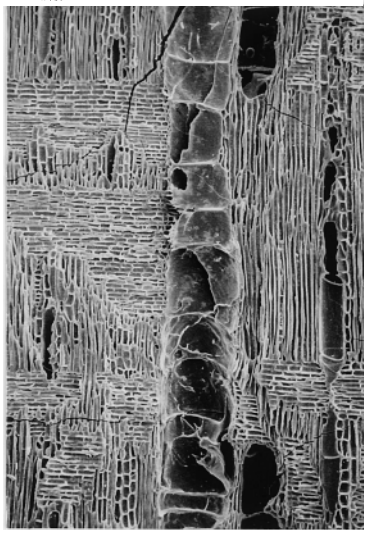


7c ケンポナシ属(放射断面)
No.55　bar:0.5mm



8a トネリコ属(横断面)
No.39　bar:0.5mm

8b トネリコ属(接線断面)
No.39　bar:0.1mm



8c トネリコ属(放射断面)
No.39　bar:0.5mm

第４節　楡木Ⅱ遺跡から出土した大型植物化石

新山雅広（パレオ・ラボ）

１．出土した大型植物化石

出土した大型植物化石の一覧を表１に示した。出土したのは、木本がキイチゴ属、ニワトコの２分類群であり、草本がイネ、コムギ、オオムギ、ムギ類、ヒエ、キビ、アワ、キビ族、ホタルイ属、タデ属Ａ、タデ属Ｂ、タデ属Ｃ、シロザ近似種、タケニグサ、マメ科、エノキグサ、メナモミである。また、その他に、虫えい、菌核が出土した。このうち、ニワトコ、タケニグサは未炭化であり、タデ属Ｃ、シロザ近似種、エノキグサも一部未炭化と思われた。これらは、現代のものの混入と思われる。

２．考察

出土したもののうち、イネ、コムギ、オオムギ、ムギ類、ヒエ、キビ、アワ、キビ族は栽培植物であり、タデ属Ａ、タデ属Ｂ、マメ科もその可能性が高い。コムギとオオムギを出土した遺構は、およそコムギの方が多産する傾向にあるが、24号竪穴住居については、オオムギのみが出土した。ヒエ、キビ、アワは区別が困難なものも多数あったが、アワが圧倒的に多産する傾向にあり、ヒエ、キビは少なく、特にヒエは少ない。これは、ヒエ、キビよりもアワの利用(栽培)の方がより一般的であった事を示している可能性が考えられる。タデ属Ａ、タデ属Ｂは、炭化した果実がイネ、コムギ、オオムギ、ヒエ、キビ、アワといった穀類と共に遺跡からしばしば出土し、穀類と共に栽培されていた可能性が考えられる分類群である。その他では、キイチゴ属は生食が可能な漿果類であるが、炭化しているので利用法と何か関連があるのかもしれない。ホタルイ属は低湿地の雑草であり、シロザ近似種、エノキグサ、メナモミは畑地や路傍など乾き気味の場所に生育する雑草である。

３．主な大型植物化石の形態記載

コムギ　*Triticum aestivum* Linn. 炭化胚乳

丸こく、側面観、上面観とも楕円形から円形。

オオムギ　*Hordeum vulgare* Linn. 炭化胚乳

縦長のやや菱形に近い楕円形で、下端が尖り気味となる。なお、ムギ類としたものは、破片であったり、状態が悪いなどでコムギともオオムギとも区別し得なかったものである。

ヒエ　*Echinochloa crus-galli* P.Beauv. var. *fumentacea* Trin. 炭化胚乳

胚乳は、長さ約1.0～1.1mm、幅約0.9～1.0mm。上端の幅に比べ、下端の幅が明らかに広く、更に下端が若干尖り気味に突出する場合もある。胚は非常に幅が広く、長さは果長の約2/3ないしそれ以上を占める。へそは、胚乳の大きさの割に大きく、うちわ形である。

キビ　*Panicum miliaceum* Linn. 炭化胚乳

長さ約1.6～2.1mm、幅約1.1～1.4mmとヒエ、アワに比べて大きい傾向がある。胚部分の長さは、果長の約1/2程度、へそはうちわ形。

アワ　*Setaria italica* Beauv. 炭化胚乳

長さ、幅とも約1.2～1.3mm。卵形で片凸レンズ形。先端部はやや窪むか平坦である。腹面基部には、細長い幅の狭い臍がある。背面の胚部分の長さは、果実長の2/3程度と長い。出土したものは、穎が残ってい

るものもしばしばみられた。穎の表面には、アワ特有の突起があり、横方向の波状の隆起があるようにみえる。なお、キビ族としたものは、状態が悪く、ヒエ、アワ、キビの区別がし得なかったものである。

タデ属　*Polygonum* 果実

タデ属Ａはかなり丸みを帯びた二面の倒卵形で長さ約1.2～1.5mm、幅約1.1～1.3mm。タデ属Ｂは、かなり丸みを帯びた三稜形で長さ約1.6mm、幅約1.1mm。タデ属Ｃは、三稜形で長さ約3.7mm、幅約1.9mmと大きなものと、長さ約1.8mm、幅約1.2mmとイヌタデやハナタデに類似した小さなものとが含まれる。

マメ科　Leguminosae 炭化種子

No.６出土のものは、外形からみて２種類あると思われ、１つは長さ約2.2～3.3mm、幅約1.8～2.3mmのもの。もう１つは、長さ約3.8mm、幅約2.9mmと大きい。No.13出土のものは、長さ約4.5～5.0mm、幅約3.0～3.1mm、厚さ約2.9mm(完形のもの)。半割れ２個体の子葉内面の形態からみて、これらはおそらくササゲ属，Vigna と思われる。No.14出土のものは、長さ約7.1mm、幅約5.8mm、厚さ約5.0mmと大きくて丸っこい。このように外形、大きさからみて複数種含まれている可能性があるが、一括した。

虫えい(虫こぶ)

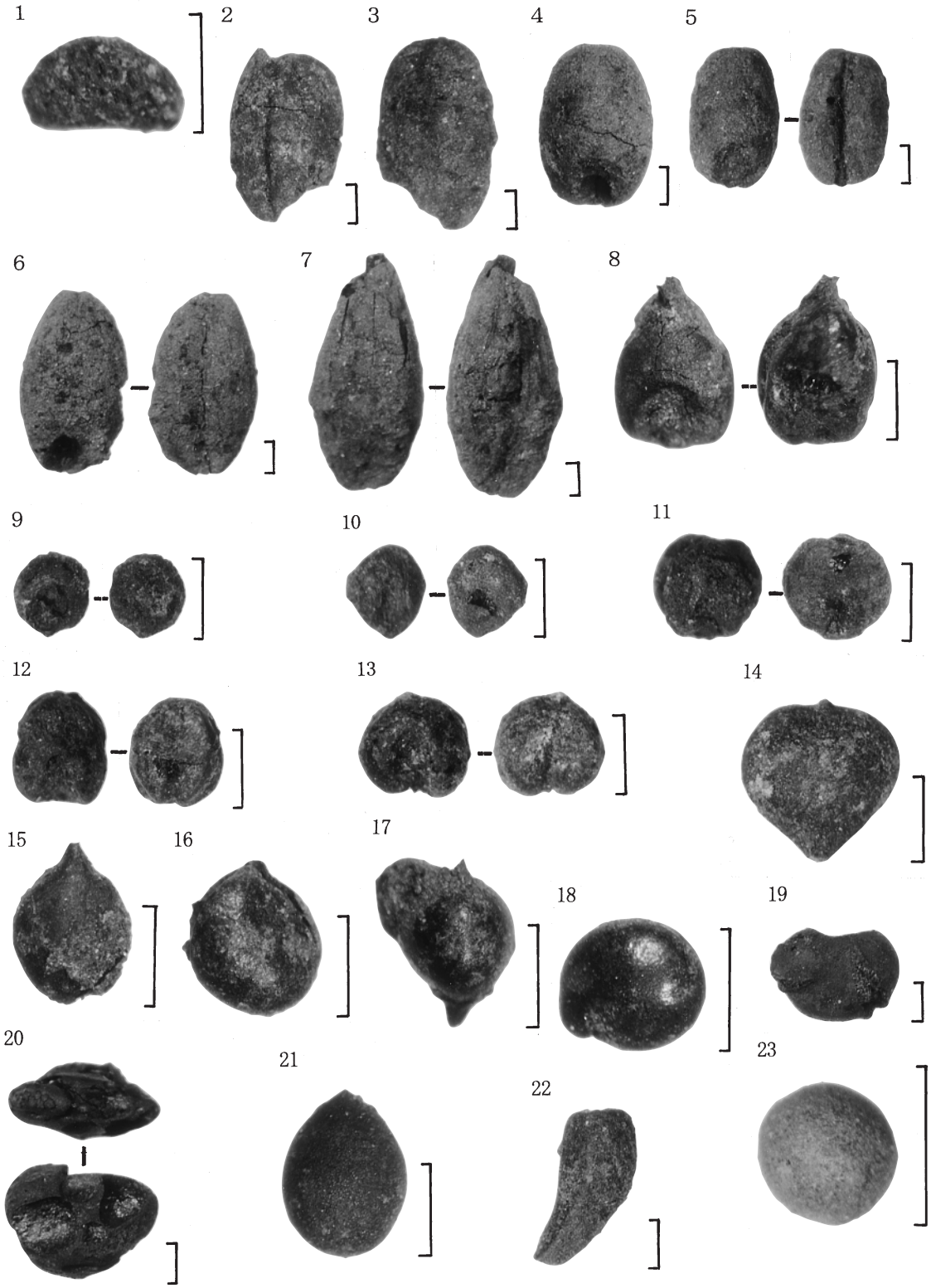
黒色で形、大きさは、様々である。横からみると卵形のものが多く、上・下からみると円形である。上・下端の中央部は、くぼんでいる事が多い。切断すると内部は中空となっており、断面には果実や種子のような構造はみられない。

菌核

腐った樹木の表面などにつく菌の集合である。大きさ、形などは様々であるが、出土したものは、黒色で球形の仁丹状である。

表１　炭化種実一覧表　数字は個数（　）内は半分ないし破片の数

遺構		６号住居	８号住居	14号住	16号住居	19号住居		21号住		22～25住	23-24号住居	23号住	24号住居		25号住	30号住居	33号住
出土地点		掘り方	炉の土	ベルト	カマド	貯蔵穴	土坑	焼土下	焼土土坑	フク土		かまど	カマド	床下土坑	フク土	フク土	カマド
試料番号		No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15	No.16
キイチゴ属	炭化核												1				
ニワトコ	種子									1							
イネ	炭化胚乳				1			4	1		2						
コムギ	炭化胚乳					8	2			7	18				7	1	1
オオムギ	炭化胚乳						2			1	7		7（1）	1	1		1（1）
ムギ類	炭化胚乳						1（1）				(3)						
ヒエ	炭化胚乳					2	1					1					1
キビ	炭化胚乳						3			5		10	4		1		
アワ	炭化胚乳					15	18	71	4	27	16	54	24	30	9	6	23
キビ族	炭化胚乳					7	1	8（1）			1	31	19	19		1	6
ホタルイ属	炭化果実																2
タデ属Ａ	炭化果実					(1)	3			2	7	11（1）	12（1）	11			
タデ属Ｂ	炭化果実						1				5						
タデ属Ｃ	果実	1			1		36	1			4				2	1	
シロザ近似種	炭化種子			2		1	5		(2)	13（1）	1	13	5（1）	3（2）		1	
タケニグサ	種子								1	1	3		2				1
マメ科	炭化種子						3						(1)	1（2）	1		
エノキグサ	炭化種子	1	2			2	6			1（1）	2	1	1			1	
メナモミ	炭化果実						1										
虫えい							2										
菌核			3	1			1	1		4		3	2		1		



図版１　出土した炭化種実（スケールは1mm）
1. キイチゴ属、炭化核、No. 12　2、3. イネ、炭化胚乳、No. 7　4. コムギ、炭化胚乳、No. 10　5. コムギ、炭化胚乳、No. 5　6、7. オオムギ、炭化胚乳、No. 10　8. キビ、炭化胚乳、No. 9　9. ヒエ、炭化胚乳、No. 5　10. ヒエ、炭化胚乳、No. 6　11～13. アワ、炭化胚乳、No. 5　14. ホタルイ属、炭化果実、No. 16　15、16. タデ属A、炭化果実、No. 6　17. タデ属B、炭化果実、No. 6　18. シロザ近似種、炭化種子、No. 11　19、20. マメ科、炭化種子、No. 6　21. エノキグサ、炭化種子、No. 6　22. メナモミ、炭化果実、No. 6　23. 菌核、No. 9

第５節　楡木Ⅱ遺跡出土人骨

楢　崎　修一郎

はじめに

楡木Ⅱ遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字林字楡木に所在する。（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、2000（平成12）年11月に行われた。本遺跡の、84区71号土坑より、近世の人骨が出土したので以下に報告する。人骨は、清掃後できる限りの接着復元を試みた後に、計測・写真撮影・観察を行った。

なお、人骨の計測方法はMARTIN［マルティン］（馬場、1991）に従った。人骨の計測値の比較は、頭蓋骨では中世人は鈴木他（1956）を、近世人は鈴木（1967）を引用した。また、歯の計測方法は藤田（1949）に従った。歯の計測値の比較は、中近世人はMATSUMURA[松村]（1995）を引用し、現代人は権田（1959）を引用した。

１．人骨の出土状況

人骨は、横径約120cmの方形土坑から出土している。なお、本土坑の北側は一部調査区外にかかっており、全容は不明である。本土坑の上部には人頭大の多数の石が認められたという。

２．人骨の出土部位

人骨の出土部位はほぼ全身に及び、残存状態はやや良好である。

３副葬品

副葬品は、煙管１点が検出されている。この煙管は、形態から江戸時代後期に比定されている。

４．被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土位置より、被葬者の頭位は北側で、仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。

５．被葬者の個体数

出土人骨及び出土歯には、重複部位がみとめられないため、被葬者の個体数は１個体であると推定される。

６．被葬者の性別

出土上腕骨の骨頭及び大腿骨の骨頭は大きく、頑丈である。また、左右寛骨の大座骨切痕の角度が鋭角であるため、被葬者の性別は男性である。しかしながら、大変興味深い事に、本被葬者の頭蓋骨の骨壁の厚さは薄く女性的である。

７．被葬者の死亡年齢

（１）頭蓋縫合

頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ（人字）縫合を観察すると、どれも内板及び外板共に癒合しておらず開放の状態である。従って、被葬者の死亡年齢は、約30歳代以下であると推定される。

（２）切歯縫合

頭蓋骨の口蓋部の縫合の内、切歯縫合を観察すると、外側部は癒合して消失しているが、内側部はまだ癒合していない状態である。従って、被葬者の死亡年齢は、約20歳代後半であると推定される。

（３）歯の咬耗度

歯の咬耗度を観察すると、エナメル質のみのマルティンの１度及び象牙質が点状に露出する程度のマルティンの２度の状態である。しかしながら、象牙質の露出はほんのわずかであり、ほとんどの歯はエナメル質のみである。従って、被葬者の死亡年齢は、約20歳代後半～30歳代前半であると推定される。

総合的に、被葬者の死亡年齢は、特に切歯縫合の癒合度を重要視し、約20歳代後半であると推定される。

写真１．楡木Ⅱ遺跡84区71号土坑出土人骨頭蓋骨［左：前面観、右：左側面観］

M2 M1 P2 P1 C I2 I1	I1 I2 C P1 P2 M1 M2
M3 M2 M1 P2 P1 C I2 I1	I1 I2 C P1 P2 M1 M2 M3

写真２．楡木Ⅱ遺跡84区71号土坑出土人骨出土永久歯［上：上顎歯咬合面観、下：下顎歯咬合面観］

８．被葬者の古病理

（１）歯の古病理

歯石の付着は、全般的に非常に軽度の付着が認められた。また、齲蝕（虫歯）は認められなかった。

（２）顎関節症

下顎骨の左右下顎頭には、突起が認められた。この突起の大きさは、右が前後約８mm・左右約12mm であり、左が前後約６mm・左右約９mmである。これらは、恐らく何らかの理由で顎関節症に罹っていたためであると推定される。医学的には、顎関節症に罹る原因としては、偏咀嚼・噛み合わせの不適合・歯ぎしり・硬い食物の摂取・うつ伏せ寝・頬杖・ストレス等が知られている。

写真３．楡木Ⅱ遺跡84区71号土坑出土人骨古病理（顎関節症）［左：右下顎頭、右：左下顎頭］

まとめ

楡木Ⅱ遺跡の84区71号土坑より、近世の人骨が１体出土した。被葬者は、約20歳代後半の男性１体が頭位を北にして仰臥屈葬で埋葬されたと推定された。本被葬者の古病理として、上下顎歯に軽度の歯石の付着が、また左右下顎骨の下顎頭に突起が形成された顎関節症が認められた。

謝辞

本遺跡出土人骨を報告する機会を与えていただき、本遺跡に関する考古学的情報をいただいた、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の麻生敏隆氏に感謝いたします。

引用文献　（著者名のABC順）

藤田恒太郎　1949　歯の計測規準について、「人類学雑誌」、61: 1-6.

MATSUMURA, Hirofumi 1995 *A microevolutional history of the Japanese as viewed from dental morphology,* National Science Museum Monographs No.9, National Science Museum

権田和良　1959　歯の大きさの性差について、「人類学雑誌」、67: 151-163

鈴木　尚・林　都志夫・田邊義一・佐倉　朔　1956　「XI．頭骨の形質」、『鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨』、岩波書店、p.75-148.

鈴木　尚　1967　「Ⅳ．頭骨」、『増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体』、東京大学出版会、p.121-274.

表１　楡木Ⅱ遺跡出土人骨頭蓋骨計測値及び比較表

Martin's No.	計測項目	楡木Ⅱ遺跡	江戸時代人*		中世人**		現代人***	
			♂	♀	♂	♀	♂	♀
頭蓋骨								
9	最小前頭幅	101mm	94.5mm	91.8mm	93.5mm	91.8mm	93.2mm	91.0mm
43	上顔幅	111mm	104.8mm	101.2mm	105.5mm	100.1mm	102.9mm	100.1mm
9:43	前頭上顔示数	91.0	—	—	88.9	90.7	—	—
44	両眼窩幅	99mm	98.8mm	95.9mm	100.0mm	94.7mm	96.1mm	94.1mm
46	中顔幅	106mm	99.6mm	94.8mm	101.8mm	95.4mm	98.6mm	93.5mm
47	顔高	122mm	118.0mm	—	115.8mm	105.1mm	123.8mm	115.0mm
48	上顔高	71mm	66.2mm	66.6mm	64.7mm	61.6mm	70.7mm	67.1mm
47:46	ウィルヒョウ顔示数	115.1(低顔)	116.2	—	113.9	109.4	125.4	123.3
48:46	ウィルヒョウ上顔示数	67.0(低顔)	69.7	70.6	65.6	64.1	71.8	72.0
51	眼窩幅(左)	40mm	43.2mm	42.0mm	43.1mm	40.7mm	42.7mm	41.1mm
52	眼窩高(左)	35mm	34.4mm	34.9mm	33.8mm	33.1mm	34.4mm	33.8mm
52:51	眼窩示数	87.5(高眼窩)	79.5	83.3	78.2	79.9	80.4	82.4
54	鼻幅	24mm	26.2mm	25.1mm	26.6mm	24.6mm	25.0mm	24.5mm
55	鼻高	53mm	52.5mm	49.5mm	51.1mm	46.9mm	52.0mm	49.0mm
54:55	鼻示数	45.3(狭鼻)	49.9	50.9	52.1	52.7	48.4	50.2
61	上顎歯槽幅	66mm	66.5mm	64.8mm	65.2mm	60.7mm	65.8mm	61.7mm
61(1)	後上顎歯槽突起幅	64mm	—	—	—	—	—	—
下顎骨								
65	下顎関節突起幅	132mm	127.5mm	119.8mm	123.0mm	118.3mm	122.0mm	115.7mm
65(1)	下顎筋突起幅	(115mm)	102.5mm	95.8mm	96.6mm	90.5mm	97.2mm	92.6mm
66	下顎角幅	105mm	102.2mm	94.8mm	98.6mm	89.8mm	96.9mm	90.3mm
66:65	下顎幅示数	79.5	80.2	79.1	80.2	75.9	79.4	78.0
67	前下顎幅	43mm	47.8mm	44.7mm	48.4mm	45.9mm	—	—
69	頤高	32mm	34.5mm	32.5mm	32.7mm	28.7mm	36.1mm	33.2mm
69(1)	下顎体高	33mm	33.0mm	30.2mm	30.9mm	27.0mm	—	—
69(2)	下顎体高	26mm	28.5mm	24.9mm	27.1mm	23.9mm	—	—
69(3)	下顎体厚	11.5mm	13.2mm	11.8mm	13.9mm	12.9mm	—	—
70	下顎枝高	58mm	68.2mm	58.3mm	59.7mm	52.1mm	62.6mm	57.6mm
71	下顎枝幅	35.5mm	35.4mm	31.1mm	36.6mm	35.7mm	33.1mm	31.1mm
71:70	下顎枝示数	61.2	52.0	51.3	61.3	69.3	53.1	54.1

註１.「*」鈴木（1967）から引用
註２.「**」鈴木他（1956）から引用
註３.「***」森田から引用

表２　楡木Ⅱ遺跡出土人骨頭蓋骨非計測的形質

観察項目	右	真ん中	左
前頭縫合		無し	
ラムダ小骨		破損	
眼窩上孔	無し		無し
副眼窩下孔	無し		無し
横頬骨縫合痕跡	破損		破損
外耳道骨腫	無し		無し
頭頂切痕骨	破損		破損
アステリオン骨	破損		破損
後頭乳突縫合骨	無し		破損
横後頭縫合痕跡	破損		破損
内側口蓋管骨橋	無し		無し
第３後頭顆		破損	
前顆結節	破損		破損
卵円孔棘孔連続	破損		破損
頸静脈孔二分	破損		破損
鼓室骨裂孔	無し		無し
顆管開存	有り		破損
舌下神経管二分	破損		破損
副頤孔	無し		無し
顎舌骨筋神経溝骨橋	無し		無し

表３　楡木Ⅱ遺跡出土人骨出土永久歯歯冠計測値及び比較表

	歯種	計測項目	楡木Ⅱ遺跡		江戸時代人*		中世時代人*		現代人**	
			右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀
上顎	I1	MD	8.5	8.5	8.78	8.38	8.48	8.29	8.67	8.55
		BL	7.4	7.1	7.52	7.06	7.29	7.00	7.35	7.28
	I2	MD	6.4	6.5	7.16	6.97	6.98	6.85	7.13	7.05
		BL	6.6	(6.9)	6.74	6.33	6.55	6.26	6.62	6.51
	C	MD	8.0	7.9	8.01	7.60	7.96	7.43	7.94	7.71
		BL	8.7	8.6	8.66	8.03	8.50	7.94	8.52	8.13
	P1	MD	7.3	6.9	7.41	7.23	7.25	7.02	7.38	7.37
		BL	9.5	9.2	9.67	9.33	9.46	9.03	9.59	9.43
	P2	MD	7.5	7.3	7.00	6.82	6.87	6.69	7.02	6.94
		BL	9.5	9.6	9.55	9.29	9.39	8.88	9.41	9.23
	M1	MD	10.7	10.5	10.61	10.18	10.45	10.09	10.68	10.47
		BL	11.4	11.3	11.87	11.39	11.81	11.30	11.75	11.40
	M2	MD	10.0	9.3	9.88	9.48	9.65	9.42	9.91	9.74
		BL	12.1	12.4	12.00	11.52	11.72	11.19	11.85	11.31
	M3	MD	—	—	—	—	—	—	8.94	8.86
		BL	—	—	—	—	—	—	10.79	10.50
下顎	I1	MD	5.7	5.8	5.45	5.32	5.42	5.22	5.48	5.47
		BL	(6.5)	(6.7)	5.78	5.65	5.78	5.61	5.88	5.77
	I2	MD	5.8	6.0	6.09	5.97	6.04	5.78	6.20	6.11
		BL	6.3	6.5	6.29	6.11	6.22	5.98	6.43	6.30
	C	MD	7.0	7.0	7.06	6.69	6.88	6.55	7.07	6.68
		BL	8.1	8.1	8.04	7.39	7.82	7.33	8.14	7.50
	P1	MD	7.2	7.3	7.32	7.05	7.07	6.96	7.31	7.19
		BL	8.3	8.2	8.34	7.89	8.10	7.72	8.06	7.77
	P2	MD	7.5	7.6	7.45	7.12	7.12	7.00	7.42	7.29
		BL	8.4	8.5	8.68	8.30	8.49	8.06	8.53	8.26
	M1	MD	11.5	11.6	11.72	11.14	11.56	11.06	11.72	11.32
		BL	10.6	10.4	11.15	10.62	11.00	10.49	10.89	10.55
	M2	MD	11.6	11.6	11.39	10.78	11.06	10.65	11.30	10.89
		BL	10.8	10.7	10.75	10.21	10.55	9.97	10.53	10.20
	M3	MD	9.9	9.6	—	—	—	—	10.96	10.65
		BL	9.4	9.3	—	—	—	—	10.28	10.02

註1. 計測値の単位は、すべて、「mm」である。
註2. 歯種は、I1（第1切歯）･I2（第2切歯）･C（犬歯）･P1（第1小臼歯）･P2（第２小臼歯）･M1（第１大臼歯）･M2（第２大臼歯）･M3（第３大臼歯）を意味する。
註3. 計測項目は、MD（歯冠近遠心径）･BL（歯冠唇頬舌径）を意味する。
註4. （　）内は、歯石の付着により計測値が影響を受けている。
註5. 「＊」は、MATSUMURA（1995）より引用。なお、MATSUMURA（1995）にはM3（第３大臼歯）のデータは無い。
註6. 「＊＊」は、権田（1959）より引用。